

北海道・函館のロシア人

—大地での記録—

アミル・ヒサムトデイノフ

ウラジオストク・2008年

前文

日本中を何度も巡って、著者は結論に達した。函館は日出ずる国で最もロシア人に関係した町であると。函館とウラジオストクの間には多くの共通点があり、訳があって2つの町は友好都市となっている。日本の町の方が少しウラジオストクより古い、これらの町の形成はほぼ同じ時間を経ている。函館では、多くの人たちがロシアとの関係話を話している。ここでは昔からロシア語の旅行案内書が出版されていた。正教会の絵が旅行の名勝のシンボルの一つとなっていた。ロシア人の存在に関係した博物館の展示品と記念碑は、他の場所より沢山ある。ロシア人墓地は、この町に永遠に残ることになったロシア人について思い出させている。

ロシアの歴史において、函館は単純ではなかった。ロシアからの最初の人物はアダム・ラックスマン、215年前（1793年6月）に、北海道のこの函館の港へやって来た。この間に、露日関係は多くのことを経験した：ロシアの存在に対する日本側からのあからさまな敵意から、遭難した我が国の船乗り（大黒屋光太夫他）に対する友情の支援まで。船長ゴローブニンの長期にわたる牢獄生活は日本人民に対する彼の畏敬の念を貶めはしなかった。彼の回想記の中には、彼が日本人を非難するような文章はない。逆に、ゴローブニンは彼らの行動をとにかく理解し、認めようと努力した。彼の戦友であるリコルドは期待していた、我が国が、「日本政府側からの根強い偏見の消滅を持って、刻々とより親密になることを始め、ついには大事な目的を達成することを、神の手が人類に指し示している：友好関係へ、相互利益へ、安定した利益へ」。

ロシアのお金が函館の繁栄の基礎を置いた。これについて、函館の最初のロシア人の住民がしばしば書いていた。ゴシケビッチの最初の領事館、ロシア船の停泊、函館住民の生活についてのロシア人の目での観察、これら全てを日本の出版物と同じようにロシアの出版物で見つけることが出来る。今日、ウラジオストクと函館の間には密接な付き合いがある。函館に、ロシアの大学（ДВГУ 極東国立大学）の分校が日本に初めて開校された。日本の学生にロシア語を教えている所は、今ではここだけではない。が、ロシアについて日本人の知識の基本的な源の一つとなっている。2000年6月30日、函館市長井上浩に極東大学の名誉博士授与式が行われた、彼は大学のOBであった。市長になる前から、彼は大学教育の最初の日から分校を支えていた。

本州の北の北海道の税関は、自分の同僚にロシア語を教育することを考え始めた、ロシアから海路でやって来る旅行者の増大に伴って。1989年には、ロシア船の訪問者数はほぼ10倍に増大した。2003年には、日本にやって来る船の73.5%がロシア船であった。税関の手続きの加速のために、1992年に職員にロシア語の基本教育を行った。

1997年からは、極東大学に毎年6名を派遣することになった。濃厚な2ヶ月間のコースは日本の税関職員に可能性を与えている、勤務中において訪問してくるロシアの市民と交流する。

函館では、日露関係研究協会が活発に活動している。協会は素晴らしい冊子を発行している。定期冊子は協会の活動を詳しく知らせている。協会はシンポジウム「大正・昭和期における函館へのロシア移民」を行った。協会員の内の一人、函館市役所の歴史出版局長である清水恵は論文集を公表した、ロシアの領事ゴシケビッチ、デンビ、函館のロシア人お気に入りの場所、島田（日本人？ *）、函館に於ける彼らロシア人移民の生活を詳しく知らせた。2004年10月15日の有能な郷土研究家の45歳での早すぎる夭折の後、友人達が彼女の論考集を出版した。

日本の読者が函館の最初のロシア人の生活を知っていたとしても、このテーマはロシア人には馴染みのないものである。一方、極東のロシア人の歴史に興味を持っている人たちは立証している：我々の地方について話をすると、日出づる国に言及しないで通り抜けることは出来ない。歴史の女神の言うとおりに我々は隣人であり、「隣人と親類は選べない」。ついでながら、日本にもそのような決まり文句がある。地方の調査に夢中になっていると、しばしばこの文句に出くわす、様々な出来事に関して、沿海州の開発の歴史に関している。函館は、ムラビエフ・アムールスキイの歴史的航海、ナホトカの発見、ウラジオストクへの初めての訪問、スクーター艦アレウト号の海難事故、ロシア船の越冬に関係している。後になって、地方誌「テラ・インソグニタ」（未開発地方？ *）でこれらやその他の発見を見ることができた。ここで調査は終わらず、日本と密接な商業関係を持っていた輝かしいデンビ家についての論文が現れた。一度ならず、著名な旅行家アルセニエフが函館を言及していた。この町について、多くのことを語っていた、ハワイ大学の教授ルリ・ビズベルが、函館に自分の会社の支所を持っていた水産業者の娘が。

日本へ旅行するずっと前に、著者はレンセンの作品を知っていた。彼が函館にいるロシア人について初めて記述した。この人物ジョージ・アレクサンドル或いはゲオルギイ・アレクサンドロビッチ・レンセンはベルリンで生まれた、ロシア人移民の家族の中に。彼の父は新聞「最近のニュース」の特派員として働いていた、ミリュコフがパリに設立した。1939年、家族はアメリカに移った。レンセンはコロンビア大学に入学した。第2次世界戦争が学業を中断させた。語学の知識、彼はロシア語、ドイツ語、英語、フランス語が良く出来た。中国語、日本語も勉強した。それが、レンセンをアメリカ軍の諜報部での勤務とさせた。戦争から帰還し、直ぐに失った物を取り戻した、日本の歴史に関する博士号を得た。彼はタラハシーにあるフロリダ国立大学で教えた、1949年から亡くなるまで。

1953年から1954年に、レンセンにフルブライト基金が北海道大学での仕事をさせてくれた。彼は多くの時間を函館で過ごした。素晴らしい論文がこの充実した旅行の結果となった、レンセンの生活の興味の基礎を図解入りで説明している。国際研究交流機関の御陰で、彼は同じようにレニングラードで研究に従事した。旅行の前に、レンセンはソビエトの外交官達と知り合いになった。彼らの内の一人が書いていた：「彼はロシア移民家族であり、ロシア語を上手に話した。彼と私は初めから、素晴らしい関係を作り上げた。彼に向かっては、私は簡単にユーリイ（ゲオルギイの愛称 *）・アレクサンドロビッチと呼んだ。レンセンはしばしばソ連邦を訪れた、古文書館で働き、本のための資料を集め

ていた。初めて、彼は大使館を訪れた、我が国への差し迫っている定期旅行に関して。当時、彼は準備をしていた、参考書「東アジアに於けるロシアの外交と領事の代表者達」の印刷の。この参考書は特に、1925年から1968年までに於ける期間での日本で働いていたソビエトの外交官達一覧が内容として含まれていた。

1961年にソ連邦を訪れ、レンセンは各古文書館の資料のマイクロフィルムを撮ることが出来た。当時これは極めて異常なことであった。彼の最後の本「陰謀のバランス」は傑作である、国家間競争力について語っている、朝鮮、満州、山東を巡っての、20世紀の20年代に。彼と彼の仕事についてアメリカの専門家達は賞賛して答えた。歴史教授ジョン・ステファンとロシアの書誌学者パトリチア・ポランスキが。ステファンは素晴らしい序文を書き、公刊の前に原稿を校正した。

1966年、レンセンは「外交出版」を設立した、外交史を書いた未公開の書類をそこで印刷するために、同じくオリジナルの論文も。全てで20冊を世に出した。その内の2冊は、「東アジアに於けるロシア外勤務」と「ロシアにおける日本の外交官と大使館」。特に重要なものであり、価値のある便覧の質を持っている。ロシア史とアジア史の研究におけるパイオニア、特に極東（ソビエト及びロシアの極東、中国、日本と朝鮮）。レンセン教授はこのテーマに関するすぐれた資料を集めた。1974年のレンセンの訪問後にその目録を作った、ステファンは学者の死後に彼の図書をハワイへ移したがったが、後家のジョージヤ・ルミヤ（シェイビ）は1981年春にそれを札幌の北海道大学スラブ研究センターに売却した。砥川次男教授によって作成された目録によると：「1）本：2772点、3841巻（ロシア語は808点、1030巻）；2）マイクロフィルム：130巻き、500点；3）コピー：157点（ロシア語は27点）」。

レンセン教授は55歳で自動車事故で亡くなった。彼が20年以上にわたって行った生産研究の結果を後に残した。この人物の活動に感銘を受け、著者は彼の追想として地味な作品を献げている。

この本を作るに当たって、北海道と函館へのロシア人の訪問の全歴史を解明し、露日関係に関係した全問題を分析するという目的を立てなかった。我々の国民を結びつけているものについて話すことが基本的な願望であった。これについて完全な解析は可能なのだろうか、ということを理解して。著者は決めた、最も特徴的なことで我慢することを、著者の視点では出来事で、伝記的で事実的情報の語りに盛り込むこと、函館の外人墓地のロシア人区画での墓の一覧表を入れながら。著者は一般的な刊行物の構成を避け、本の末尾に自分の旅行日記を配置した。函館を訪問した時の。客観的な視点が若干の問題に対する解答を見つけることを期待して。もちろん、本中に間違いが紛れ込むことがあった、特に、異なった暦故に。当時、ロシアはユリー暦で過ごしていた、日本では既に新暦を採用していた、グリゴリー暦を。が、船乗り達はしばしば両方を利用していた。著者は日付の指摘に対して感謝するであろう。

現代の研究者達は科学的仕事の遂行においてグラント（競争的資金 *）に大いに依存している。アメリカのフルブライト基金がレンセンを助けた一方、著者はこの期間において日本の基金の支援を受ける幸運に出会った。2006年に、著者は1年間の日本訪問のためのグラントを申請した。露日関係についての仕事の準備のために。これは希なチャンスとなった、全日本を巡る、沢山の古文書館や図書館で一働きをする、満ち足りた野外研

究をする、長い間考えていたことを遂行する。課題は容易ではなかった、日本の仲間からの具体的な援助が期待できなかった。他面において、研究者には行動の自由があることが大事であった、自分の裁量で時間を指示することができることも。結果として、このために資料を集めることが出来ただけではなく、次の本のためのものも：「ロシア人の長崎或いは稲瀬での最後の係留」、「ロシア人の神戸と神戸の全景」と「横浜－東京：ロシア人の頁」。これらの本を出版し、著者は後でこれらの情報を一つの本にまとめるつもりである。最初の調査から何が得られたのか、読者の判断に任せよう。

このように、著者は露日関係の研究に従事した、20年以上も。この困難な仕事にだれが手伝ってくれたか、全てを網羅することは困難である。何人かの名前を特記する。原輝之教授とは、著者は1980年代半ばにウラジオストクで出会った。地理学会沿海州支部の研究管掌者として働いていた。この日本人の歴史家は露日関係についての多くの本を公刊した。2006年3月に、北海道大学スラブセンターの学会合に参加への彼の招聘が好機となった、その時は彼の退職と一致していた。その時に、センターを一通り見学することが出来た。沢田和彦教授とは学会議で何度か会うことが出来た。彼は長い間、私の研究を真剣に評価してくれなかった。2005年になってようやく好意的に答えてくれた。同じように、国士舘大学の助教授であるヤコフ・ロマノビッチ・ジンベルグに私は感謝している。数多くの事象を私はハワイ大学のユニークな図書館で汲み出した。私は価値を付けられないものと見なしている、文献目録の素晴らしい通人の助言指導を、A T P（アジア太平洋地域 *）とロシアの関係の、パトリッチャ・ポランスカと素晴らしい歴史学教授ジョン・ステファンによる。彼を正に南クリール問題の研究の父とも呼ぶことが出来る。ハワイでは著者はエミコ・レビナおばさんを通して、崎原仁教授と知り合いとなった。彼女は日本文化のニュアンスを理解できただけでなく、北海道旅行の同伴者ともなってくれた。日本では、他の先生方が、大いなる援助を示してくれた、ビクトル・ニコラエビッチ・ネザムトデノフ、函館の極東大学分校の元学長。函館図書館の職員の助力は価値が付けられないものであった。そこの宝物をレンセンが利用していた。資料の収集において次の人たちが助けてくれた、当時北海道に住んでいた：リュボビ・セメノブナ・シベツ（旧姓はヤシコバ）、イリナ・ドルゴバ、ゲオルギイ・ペロゴノフ、ムサ・カガワ、オリガ・ズベレバ、宮越友子、その他。ウラジオストクの郷土史家達にも感謝する：アレクセイ・ミハイロビッチ・ブヤコフ、図書館員マイヤ・ミハイロブイナ・シェルバコバ、他。手書き原稿の編集をナタリヤ・ウラジミロブナ・ソロビエバが行った。彼女の仕事の援助がなければ、仕事は終了しなかった。特別な感謝を出版者タチヤナ・ウラジミロブナ・ブルドコグリャドに、この本の出版に当たって心血を注いでくれた。

著者は、以下の住所宛に読者が送ってくれる正確さと補足に対して感謝をする：ロシア、690041，ウラジオストク市、ポレタエバ通り、49番地、E-mail：
amir.khisamutdinov@vvsu.ru, khisamut@hawaii.edu

隣国へ客として

昔は、少数民族が住んでいる広大な領域が国境となっていた。ロシアと日本には、この領域は千島列島と樺太が一つの国境となっており、未調査の日本海が、もう一つの国境となっていた。さて困ることになった、ロシアはひと飛びで太平洋岸に到達し、日の出の国と隣人となったので。

日本の鎖国政策にもかかわらず、ロシア人は北海道の住民達と交易をすることを非常に希望した。ロシア人は千島列島の住民から聞いた、南千島列島でアイヌ人と日本人の間で交換交易が行われているとの。この事を詳しく知るために、国はロシア商人にそこへ遠征隊を派遣することを提案した。その隊長に、イワン・ミハイロビッチ・アンチピンを任命した、日本語会話の知識のある。彼は詳細な指示書を得た。それには記述されていた、隣人の生活について知りたいという要望が：

「1）偉大さと日本帝国の町の数について、その防衛施設について、千島列島における人の数について。

2）彼らはどんな宗教と法を信じているのか？ 船でどのような外国人がやって来ているのか？ 陸路でどのようにしてやって来るのか？ どのような商品を持って？ 風俗、風習はどのようなものであるか？

3）自分らの間での交際にはどのような傾向があり、どのように楽しくやっているのか？ 古い約束を守るのか？

4）どのような食べ物なのか？ どのような土地柄か？ 食物はどのような労働によっての収穫か？ それは十分なのか？ どのような気候で育つのか？ 何処で或いどこから手に入れるのか？ いかほど離れた所か？ どのような服を着ているのか？ 自作なのか？ それともどこからか得ているのか？

5）誰と取引をしているのか？ それをしたがっているのか？

6）どのような大砲や武器を持っているのか？ それをどこから手に入れているのか？ それとも自作しているのか？ 鉄やその他はどうか？ 何処で、どのような工場で作っているのか？ どのような人が？ それともどこからか連れてくるのか？

7）正規と非正規の兵士達はどのような防衛武器を持っているのか？ 訓練はどのようなものなのか？ 誰かと戦争をしているのか？ 千島列島近傍に、彼らが知っている他のどのような人たちがいるのか？

8）他のクリール人と無名の島に住んでいる住民達の国籍は長い間どうなっているのか？ 支配が出来ているのか？ そこでは何時どれだけの租税を支払うのか？

9）彼らの血統はどうなっているのか？ 増加しているのか？

10）ロシア人はどれほど彼らに気に入られると思うか？

11）彼らと日本人に海洋船があるならば、どのような方法で、何処へ航行しているのか？ そのための地図があるのか？ 船の建造のために、どのような木が利用されているのか？ 自分の島からか、それとも他からか？ 支払いが有るのかないのか？

12）日本人は馬や牛を持っているのか？ もし、日本人の所では繁殖しないのならば？ どこから幾らで調達しているのか？ どこからどれだけの価格で日本人の所に運んでい

るのか？ より詳細に書くことはできない、ただ一つ、その状況について」。

「聖ニコライ号」は海難に遭った。それで、調査隊は十分な成功を得ることがなかった。部分的に、調査隊の一人であるシャバリンが計画を完遂した。彼は南千島列島で日本人と出会った。最初の出会いについて彼は次のように語っていた：「1778年6月19日の夕方に、アトキシと呼称されている22番目の島に到着すると、そこには日本船が係留されていた、「タネンマル」と呼称される。岸に沿って150サージェ（1サージェントは約2m *）だけ航行して停船した。安全な到着と休息のために、3隻の小舟を3丁の銃を持って出すよう私、シャバリンが命令した。対面のために銃を撃つ、接岸する時に。小舟から下船した。我々が何処の国の者なのか日本人は知らない。我々は同行してきた通訳であるクリール人のグリゴイイ・チキンを介して通じ合った。我々はロシア国の者であり、こちらへやって来た。会うために、友好のために、知り合いとなるために。これに関して彼らは我々に6月19日に同じ通訳を使わしてきた、貴方が我々に友好と理解のためにやって来たこと、これには我々は喜んでいる。食料の在庫に不足はないのか、もしあるならば、我々は満足させるであろう。」

ロシア人は食料を必要としていなかった、日本人の提案に感謝しながら。彼らに味付けロールパン、大麦粉、タバコを送った。今度は替わって、日本人がロシア人に米とタバコの葉をプレゼントした。直に、初めての会合が行われた。そこでロシア人と日本人はお互いの国について質問し合った。前もって、千島列島で一時的な交易を実現することに話がまとまった。もちろん、両方の国の政府の承認の条件の下で。お終いには、ロシア人と日本人は高価な土産物を交換し合った。ロシア政府は調査隊の結果を高く評価した、船の所有者を有名な金メダルで叙勲した。

日本人とロシア人の会合はウルップ島（択捉島の北東の島 *）で行われた、アンチピンが到着した所の。彼は交易をすることに成功した：「この時、私は小舟で運んでいた、日本人の所で交換する商品を。ウオッカ入りの缶と軍服：漆の塗られた鉄製の甲冑で頭に先端のある、花模様のある漆塗りの小さい2つのヤジャム（? *）、その他。

もちろん、これが本当の交易交流であるとは呼ぶことは出来ない。が、彼らにとっては全く初めてのことであった。

ラクスマンの探検隊

より大きな規模の、日本への他の探検隊の派遣の指導者となったのは、自然科学者で収集家のキリル（エリック）・グスタノビッチ・ラクスマンであった。彼は既にシベリア旅行を何回かしていた、そこで価値のある採集を行った。多分、新しい大地を知りたいという欲望が、彼の視線を日本に向けた。それ以上に、日本人との最初の出会いが既に旅行者によって行われていた。ラクスマンが書いていた「イルクーツクに滞在していた時、日本船の元船長光太夫—日本の一級の商人の内の一人—と知り合いになることを私は努力した。彼から日本の交易について、彼の祖国について、十分な情報を得ることが出来る。彼の祖国への帰還において、彼は大事な援助者となる。長崎にやって来ているオランダの船

員の助けを借りるために。そこへ彼らは毎年やって来ている。イルクーツクからサンクトペテルブルグへの私による派遣の際、彼はロシア政府について知りたい願望を示した。私は彼を伴った、我が国の首都と他の著名な町を見せるために。サンクトペテルブルグへ伴った。敢えて閣下に申し上げた、この出来事を我が国の利益に利用することが出来ないかと。利益のある我らの交易に日本人をなじませることが。これを最初で期待される手がかりと私は見なしている。もし上手く進むならば、この日本人を祖国へ送り返すこと、我々の輸送船か商船で、松前へ。そこでは住民達は林業に何時も従事している」。

実際において、災難は都合よく利用されなかった：日本人達を祖国へ帰還させること、ロシアの海岸で遭難した、同時にロシアと日本の間に交易関係を打ち立てることに。日本は17世紀から外界から国の孤立の政策を実行していた。商務省大臣であるボロンツォフ卿が書いていた、学者の提案に同意して：「日本人の祖国への護送のためにラクスマン教授の息子の一人を使うことが出来る」。

アダム・キリロビッチ・ラックスマンは、研究者の息子である。陸軍貴族幼年学校を修了し、1783年頃、将校となった。1786年から1795年、彼はギジギンスクの群警察署長を務めた。研究への志向を父から受け継いだアダム・ラックスマンは気候観察に従事し、カムチャッカにおける火山活動に関する情報を集めた。1789年、彼は一ヶ月余り、コリャク人と小舟に乗り岸に沿って航行した。その後、タイゴノス半島を2週間にわたって歩き通した。

1791年6月28日、エカテリーナ二世はラックスマン（・アダムで息子の方 ＊）と大黒屋光太夫を謁見した。大黒屋はロシアと日本の間の友好関係を打ち立てるための重要な役割を担っていた。女帝は注意深く日本人の体験したことの話を耳を傾けた。彼に日本について多くの質問をした。直に女帝は命令を出した：「この日本人の祖国への帰還の件は期待をもたらすものである。交易関係をもたらす。それ以上に、ヨーロッパの他の国々は、ロシアほど都合は良くはない、海路が近距離で、正に隣人であることを判断すると。」

探検隊の隊長に26歳のアダム・ラックスマンが任命された。1792年5月20日、彼と3人の日本人（光太夫、磯吉、小市）はイルクーツクからオホーツクへ出発した。ここには既に、船「聖エカテリーナ号」が準備されていた。帆船の船長は35歳のワシリイ・ミハイロビッチ・ロフツォフであった。彼は熟練した船乗りであった。イルクーツク航海学校を修了し、彼は1760年にオホーツク港で航海士見習いとして勤務を始めた。ロフツォフは直接有名な何回もの調査に参加した。1767年、探検隊の隊長を委ねられ、ロフツォフは重要な報告をした、東ベリア総督チチェリンに。軍務における成功の実証により、1782年に彼をオホーツクの海軍部隊の隊長に任命した。2年後、航海士の准尉に彼を任官させた。ビリングスの有名な探検が始まった時、オホーツク警備司令官コズロフ・ウグレニンはロフツォフを水先案内人として推薦した。その後、しばらく海軍での出世を延ばすことになった：オホーツク地方の形成に伴い、ロフツォフをオホーツク警察の長と地方の群警察署長に任命した。機会があって、ロフツォフは海に戻った、1791年にペテロパブロフスク・カムチャッカにビリングス探検隊のために食料を運んだ。

1792年9月、ラックスマンは出航した。帆船「聖エカテリーナ号」には、約40名が乗り込んでいた。1792年10月9日、船は根室湾に入った。そこで越冬した。時間を無駄にしないために、ロシア人は松前奉行に手紙を送った、彼らが日本の沿岸を航行するこ

とを許可してくれるように。日本の政府から返答として次のような手紙を得た：「貴方は、未だ何の友好を持っていない、この地へ直接に我が国民を送り届けるために、武装した船でやって来た。そのために、長い間逆に遣わさないでいた、許可無しでの到来人のように、特に我が法に反して。なんとなれば、そのようなこと、違法な件は行われるであろう、全く逆には遣わさない、我が平民の送り届けのために政府が派遣した、苦勞してなされた、政府は我が法を未だ知らない、最近、逆に戻すことは許しうる、ただ、この地に近寄ることを禁止する、今後やって来ないために」。

約8ヶ月間、ラクスマンと同行者達は根室に留まった。ここで、一人の水夫が壊血病で亡くなった；彼を木の下に葬った、ロフツォフはそれに墓碑銘を刻むよう命令した。このようにして、北海道に初めてのロシア人の墓が出現した。1793年3月30日、同じ壊血病で日本人の小市が亡くなった、ロシアから帰還することなく、祖国の地を踏むことになった。残りの二人の日本人は函館奉行に引き渡した、そこへ帆船は根室から1793年7月初めに到着した、日本の官士との長い交渉の後に。

函館から、ロシアの代表団を島の首都である松前（当時のこと、函館の南西方向 *）へ盛大に送り届けた。1793年7月17日、ロシア人と日本人の最初の公式会談が行われた。交渉の結果、ラクスマンは日本政府から許可を得た、交易の交渉のために、長崎港へ1隻の船で訪れることの：「1隻だけに、長崎港へ入ることを大ロシア国家に許す、既に説明した通り、そこ以外の他の所には、外国船には接岸することを禁止している」。

1793年9月8日、ラクスマンと同行者達はオホーツクに帰還した。航海中、ラクスマンは北日本の植物と動物の標本を採集した。農業の種子も、同じくアイヌ人と日本人の手芸品も。ラクスマンの報告書と雑誌には、江戸と千島列島の情報が含まれていた。ラクスマンによって得られた承認書は日本への派遣のための根拠となった、1803年のロシア大使レザノフと1855年のプチャーチンの。

1794年、ラクスマンと彼の父をサンクトペテルブルグに招聘した。そこで、息子のラクスマンは大尉の官位を受けた。1796年、彼はギジギンスクへ戻った。

ロフツォフの出世は素晴らしいものであった。東シベリア総督のピリは日本への航海に関する書類を持たせて首都に派遣した。1794年6月13日、エカテリーナ女帝はツァルスコエ・セローでこの船乗りを迎え入れた。報告は極めて好意的に受け入れられた。1795年8月10日、ロフツォフは中尉階級の航海士となり、年齢で退役した。ロフツォフについての最後の情報は1797年のものである、イルクーツクで彼はそこに派遣されたラディシェフと会見をしたとのこと。

北海道周辺

最初の公式のロシア大使の試みー日本と交易の条約を締結することーは不成功に終わった。レザノフ（1804年に長崎へ来港 *）は江戸から次のような回答を得た：「日本の君主はロシア大使の訪問に大変驚いた；天皇は大使および書簡を受け入れることは出来ない、ロシアとの交易は希望していない、日本から大使が退去するようお願いする」。以

前にラックスマンに渡した許可に注意を振り向けないと日本は決めた。

レザノフは日本政府に覚え書きを作成した、交易関係構築の拒否に関して：「私、偉大なる国のアレクサンドル一世皇帝の本当の侍従で勲章所持者であるニコライ・レザノフが日本政府に言明する：

1. 長崎における私の滞在において、私は皇帝陛下の名の下で交易についてお願いをした。日本政府が1792年にそれについて許可を与えるとラックスマンに出した。その後外交官の陰謀で・・・自分の言葉を変更し、拒否した。
2. このような行いが私に強いた、日本政府に示すことを。ロシア皇帝がこの帝国に近隣友好に尊敬を要求する、*****。
3. 2つの帝国間の不仲はテンジン・クボスク陛下（？ *）の意志に反して生じたことを私は知っている。私は不幸な結果を阻止することを要求する、民衆の安寧を破るような、土地を奪い、罰したり。日本の宮殿はオランダ支社の仲介によって、サンクトペテルブルグへ遅れることなく皇帝へ詫びを届けた。同時に、松前港で定めた、そこへ両国民の交易のためにやってくることができ、禁じられない。ロシアの商館の施設のために2カ所、日本帝国は約束した、両国民の満足の元で交易を確りすることを。キリスト教は派遣される何の外的な兆候はない。日本帝国の全ての指示は厳しく守られよう、日本への6ヶ月にわたる私の到来が示しているとおおり。
4. 日本帝国は松前島（現在の北海道のこと *）の北端より先に自分の領有を伸ばしていない。だから北で土地と水は我が皇帝に属した。
5. 日本政府は穏健さを受けいる必要がある、テンジン・クボスキイ陛下に対する私の唯一の尊敬を持って。
6. 反対する場合には、サンクトペテルブルグへ何の応答もされないならば、怠け者*****罰せられない。日本政府は他の何も待つことはできない。2度の不敬が私に手段を執ることを強いているので。それは国民に悲惨であり、取り返しの付かない損失を招く」。

長崎の日本人達と別れを告げて、使者達は船で出発した。日本人とロシア人の間の友好的な接触の構築は一步も進まなかった。ある者はレザノフの外交使節団の不成功を、ロシア使節の短気と思い上がりで説明する；他の者は、オランダ商館長デフの陰謀に原因を見ている。彼はロシア人との競争の恐怖心から秘密裏に全力を尽くした、日本と外交的および商業的関係を結ぶことを邪魔するために。後になって、オランダ商館からの手紙で、ゴローブニンは偶然に知ることとなった。手紙では知らせていた、オランダの通訳は、「この件を上手い具合に終わらせることが出来た、日本人をロシアについて次のような意見に傾かせたことを。日本人はレザノフを追い出した、彼に回答を与えて。多分、ロシア人に日本にやって来ることを止めさせるといふ」。

交渉の否定的な結果にもかかわらず、レザノフには印象が残った、全てがダメにはなっていない。「その上、明瞭でない用語で彼らはレザノフに曖昧な言い方で助言した、*****日本付近にある島—松前島とサハリンを挙げて、何度もこれを確認し、ついに、より明らかに彼を納得させた、サハリンから日本人を遅れることなく追い出さなければならないと、強制的にこの地の温和しい住民から巻き上げている、彼らによって生産されている獣の皮や魚を。それらは日本北部の全住民にとって唯一で必須の食料である。これがなされた時には、この行為の結果は皆の目を開かせる、ロシアとの交易の撃

退において、久保は初めは宗教勢力の抵抗に反駁している。そこの住民の多数の食料はそれに依存させている」。

1805年4月18日朝早く、長崎での約7ヶ月間の滞在の後、レザノフの乗ったナデジダ号は碇を上げ、出航した。湾から出て行くまで、多数の日本の小舟が同行した。大海ではなく日本海からカムチャッカへ戻ろうとするクルゼンシテルンの意向は、日本人には非常に気に入らなかった。日本政府の名の下で通訳達はとにかくロシア人の船長に思い止ませることに努力した、この意向を。通訳達は納得させた、未知の日本海の航行は困難で非常に危険であると：日本島（本州）と蝦夷島（北海道）の間の狭い津軽海峡は暗礁があり、流れが速く、不断において霧があり、日本海の北部を覆っている。長崎湾からのナデジダ号の出航の前に、奉行は使節に手紙を使わした。その中で通知していた、今後日本の沿岸に近づくことをロシアの船に禁止することを。これにもかかわらず、クルゼンシテルンはとにかく、3ヶ月間をこの場所の調査に献げることを決めた、彼らは十分に宗谷海峡の調査が出来ていなかった。

彼は知った、ヨーロッパの航海士達の誰一人として日本列島の正確な地理状況を決めかねていたことを。朝鮮の大部分の海岸も、北海道の西岸全部も、サハリンの南東と東と北西の海岸も。これ以外に、新しい調査を要求した、より正確で詳細なアニバ湾とテルペニア湾岸の記述の：それらの湾の発見から160年経て、多くのことが変わった。これらのことを考慮した結果、クルゼンシテルンは調べるつもりになった、日本の沿岸の南西と北西部分を、津軽海峡を、その幅を。優秀なヨーロッパの地図による約90マイルが、日本人の言葉によれば、9マイルより大きくはない。これ以外に、クルゼンシテルンは蝦夷島（北海道）の西岸、サハリンの東岸と北西岸の調査を決めた。同じくランチを出すことを予定した、サハリンと大陸を分離している海域に。確証するために、それらが通行できるのかを。アムール川河口の状態の確認のために。最後に、彼は千島列島を調査するつもりであった。この膨大な計画の大半の部分は遂行された、完全ではなかったが。

ナデジダ号は長崎を出航して、朝鮮海峡へ向かった、岸近くを航行しながら、目立つ点の地理的位置を確認しながら。船乗り達は日本と中間に位置している対馬の間の朝鮮海峡の部分を調査した。この部分をクルゼンシテルン海峡と名付けた。「その後、松前島の西岸はヨーロッパ人の一人も探検していないことを知っていたので、この機会を利用することにした。この部分の正確な情報を地理学者に提供することとして。時間と天候は我々には上々であった、我々は北海道（旧名が松前 *）—この島に我々の船名を命名した—の南端から北端まで岸を離れることなく進んだ、何の見落としをしないようにしながら。進んでいくと、ペルザ（? *）によって松前で指摘された山—彼が「ピク・デ・ラングル」と名を付けた—は松前から10マイルの所の特に小さい島にある。それを住民達はリセリ或いはリシエリ（利尻 *）と呼んでいる。私は思っている、この若干の矛盾を判断をすることが出来ると、或いは、北へ海岸線に沿って進みながら、松前とこの山頂の間を我々は進んだ。松前の北側に沿って進み。無駄であった、そこと樺太島の間を我々は探し出し、新しい地図を得ようとする我々の意向は。なんとなれば、樺太島は全く存在していない」。

さらに、長崎でクルゼンシテルンは日本列島の北部の地図の探査をすることにした、この地域の何らかの情報を。特に彼は樺太島に興味があった。日本人はサハリンの南部をそのように呼んでいたらしい。何らかの地理的対象物の名称について、正確なデータを手に

しないままに、船乗り達はそれらにロシア名を授けた。

今回の航海時、クルゼンシテルンは函館に立ち寄らなかった。当時は、多分、函館は小さな村であった。船乗りが書いていた、「蝦夷の南岸は日本の大きな対岸となっている。松前町付近には、我々は畑に気づかなかった、日本の至る所にある。栽培物も。岩山の頂上はそれらで覆われている」。

初の非公式の戦争

長崎での交易関係の樹立について拒否されて、レザノフはこの目的の達成のために他の方法をとることにした、南サハリンと南千島にある日本人集落の襲撃を行うという。侍従（レザノフ？ *）はロシアとの協定の調印へ日本政府を突き動かすことを期待していた。レザノフが書いていた：「私は君に隠さない、私の知る限り、民衆はこの交易を欲している、なぜなら必要と見なしている、****、交易においてロシアになした拒否に対する不満において。私は期待している、内部の不満がこの高慢な大国に我々との交易関係を結ぶことを強いることを。」今日では話をする事が出来る、そのような方法で日本を開国させるというレザノフの計画の単純さについて。が、50年を経て、アメリカ人が同じ方法を実行している。

1805年夏、レザノフはペテロパブロフスクでニコライ・アレクサンドロビッチ・フボストフとガブ ril・イワノビッチ・ダビドフと出会った。彼らと一緒にアラスカ岸を聖マリヤ・マグダリナ号に乗って航海した。日露関係において否定的な役割を、彼らは演ずることになった。

1786年12月6日、20歳のフボストフは海軍貴族学校へ入学した。1790年5月2日、学校を修了後、彼を士官候補生に採用した。フリゲート艦アルハンゲル・ガブリエル号で、若いフボストフはスウェーデン海軍とのクラスノゴルスクとビボルグスクの戦闘に参加した。1792年5月10日、彼は海軍少尉となり、バルチック海への航海に出た。1797年1月10日、彼は中尉の肩章を帯びた。翌年に、セベルニイ・オリョール号の乗組員となり、イギリスとオランダの海岸を航行した。さらに1年後、ウシャコフ将軍の艦隊の一員として、セバストポリへ到着した。1801年フボストフ中尉はサンクトペテルブルグに帰還した。翌年には露米会社に勤務した。シベリヤ経由の長い旅行を敢行して、1802年8月12日にフボストフはオホーツクに到着した。そこで、聖エリザベータ号の指揮をとった。その船で、フボストフはカデヤク島へ向かった。次の年に、彼はオホーツクに戻ってきた。そこからペテルブルグへ、彼を会社の株主として迎え入れた。再びシベリアへ、その後、オホーツクへ。聖マリヤ・マグダリナ号を指揮して、フボストフはロシア領アメリカへの航行を完遂した。

ガブ ril・イワノビッチ・ダビドフは同じような出世をした。ダビドフはフボストフより8歳若かった。同じ貴族学校を修了して、1796年5月1日、彼は士官候補生となった。2年後、少尉に。1796年から1800年に、ダビドフはバルチック海と北海を航行した。同時に、1802年に、フボストフと一緒に露米会社に勤務した。サンクトペテ

ルブルグから若い船乗りはオホーツクに移った。そこから、聖エリザベータ号で、カデヤク島のバブロフスク湾へ到着した。2年間、ダビドフはロシア領アメリカとカムチャッカの港間を航行した、自然と島の原住民達の生活の観察をしながら。1804年、彼はシベリア経由でペテルブルグに戻った。露米会社の株主となった。1805年、聖マリア・マグダリナ号で、ダビドフはレザノフと一緒にペテロバブロフスクからノボアリハンゲリスクへ移動した。

レザノフは交渉のためのチャンスを日本人に残さなかった。直ちに軍事行動をとると決めた。フポストフとダビドフに与えた命令書中の最初の条項で彼は書いていた：「アニワ湾に入り、日本船を見つけ出し、それらを銃撃すること；仕事に役立つ、健康な者は捕縛せよ、役に立たない者を選び出し、松前の北端に移送すること。そこは、ロシア領土であるサハリンではないと言い渡して、訪れることはあえてやらなかった、他ならない、交易のためにやって来る、それに何時でもロシア人は準備が出来ている。」

侍従（レザノフのこと *）の依頼は遂行された。ダビドフが1807年4月29日に書いていた：「そうこうしているうちに、フポストフ中尉は、閣下をオホーツクに送り届け、アニバに立ち寄った。命令通り、そこにある日本人の施設を破壊し、幾ばくかのキビと日本人4人をカムチャッカに運んだ。船の損傷のために、ここで越冬した。」翌年に日本人達を開放した、彼らに松前奉行宛の手紙を持たせて。サハリンの住民達にレザノフ元大使は然るべき文書を提示した：「サハリン島とその住民の受け入れの印として、ロシア皇帝の慈愛深き保護のもとでアレクサンドル一世は、アニバ湾の西岸に住んでいる村の上層部に、リボン付きのウラジミル銀メダルを賞として与えた。」

日本人に対するロシアの軍事行動はこれで終わらなかった。レザノフの命令に従って、1807年4月15日、ダビドフ指揮下の帆船アボス号とフポストフ指揮下のユノナ号がアバチンスク湾から出港し、南に向かった。日本人との最初の出会いはイツルupp島であった。ロシア人の船乗り達は、レザノフによってかき立てられていた、南千島列島に行き、この地での主人が誰であることを示そうとして。しかし、原住民との最初の出会いは彼らの激情を幾分冷やした。ダビドフが書いていた：「9時に、海岸に降りた。そこで2人の日本人が我々を迎えた。彼らは自分らの習慣に従ってひれ伏した。その後、自分たちの家に来るように求めた。そこで、私にごちそうをした、***キビ、煮たスープ、綺麗に燻製した魚、豆、キビと一緒に香りを消した、麦芽と塩で（この料理は極めて塩辛い。が、日本人は主張している、これは上手いと。生の魚と一緒に煮た時には）。その後、喫煙用のタバコを。このような受け入れにより、私は全ての敵意ある行為から私を思いとどませたことを白状する」（誰でもわかる、恐怖が彼らの主要な原因であったことが）。

日本人達がロシア人の船乗り達に示した素晴らしい応接は恐怖ではなく、客をもてなす日本人の習慣を呼び起こした、招かざる客でも。日本人の住居の綺麗さはロシア人を酷く驚かせた：「彼らの家は極めて単純である、が、綺麗さは異常である。ガラスの所には紙がある、油を表に塗ったような、床は極めて綺麗な筵で***、真ん中に台所」。

ダビドフは住民の内のアイヌ人達を集めて説明した：

「イツルupp（択捉のこと？ *）島は日本のものではない、原住民のものであり、日本人をここから追い出す。もしロシア人が住むようになれば、君たちから何も要求することはなくなる、現在日本人達が行っているような。」

ダビドフはアイヌ語についての情報を集めた。

フボストフがやって来るやいなや、彼らは決めた、「この村落を根絶して、1時間でおイド（湾、彼らの船が係留されている所 *）へ行く。そのために朝食をとり、岸に向かって出発した。多人数を見て、日本人達はビックリ仰天し、逃げようとして集まった。しかし、彼らを捕まえた。その場所には、私が語ったように、大量の塩漬けされた魚と塩があった。が、キビはごく少量であった。我々はクリール人達に多くの物を渡した。取引所を焼いた。貧しい日本人達は本当に驚いていた。そして問いかけてきた、自分たちを切るのかと。が、船に乗ると全く平静となった、自分たちの同胞達を見て。同胞達は彼らを説得した、何の危険もないと。私は彼らをお茶や持っているその他を振るまった。半時間後、彼らは全く平静になった。」

軍事行動は本当に展開された。日本人の射撃と大砲の一斉射撃もとで。上陸部隊を上陸させ、捕虜を捕まえ、敵の倉庫を燃やし、他の作戦で（? *）。この時には、イツルupp（択捉 *）島には、著名な日本の探検家間宮林蔵がおり、他の者達と山へ遁走した。幸運にも、ロシア人の弾丸は彼の背中の中の柔らかい部分に命中した；しかし、彼は倒れることなく幸運にも逃げ出せた。それに対して階級が授与され、今は年金を受けている。

武器の幼稚さにもかかわらず、日本人達はそれなりの抵抗を示した。ロシア人は南の隣人の特性を理解していなかった。これ故、若干の軽蔑を持って、ダビドフが書いていた：「・・・人民の記述に際して、この恐ろしい勇氣、命に対する冷淡さについて考えてみよう、彼らの主要な特徴となっている。しかし、日本人は語っている、村長はロシア人に抵抗できなかった—もちろん自分の腹を切る。私はわからない、どのような方法で人々は命を簡単に扱うようになるのか、守ろうとしないのか。が、似たような例は野蛮な人民の間でより多く見られる。それ故、自殺は決して精神の偉大さを示してはいない、或いは極めて希である」。

択捉島の襲撃時に、フボストフの乗組員の内の2人が脱走した。が、彼らを日本人は殺した。ついでながら、日本人は注意を向けていた、若干のロシア人はアルコールに平静でないことに。後になって、日本人達にはアイデアが生まれた、ロシア人に毒の入ったウオッカを残すこという。

オホーツクでは、武力衝突の検討が直ぐに始まった。オホーツクで、フボストフとダビドフを逮捕した。が、彼らは警備隊のもとでヤクーツクへ逃亡した。が、その後、彼らをとにかくペテルブルグへ送り届けた。そこで、彼らを後になって解放した。二人はネバ川で溺死した。この出来事の真相を、本「海軍将校フボストフとダビドフのアメリカへの2回の旅行、後者によって書かれた」で、ゴローブニンの注記が明らかにしている、1812年シシコフ海軍中將によって出版された。フボストフとダビドフの非業の死後に（今日、著名な作家ウラジミール・リデンの蔵書の中に保管されている）。「二人は泥酔していた」、この出来事をゴローブニンは短く注釈している。

後になって、ゴローブニンが書いていた：「ロシア船は2度、日本人集落を襲撃した。そこで見つけた全てを持ち去るか、或いは焼き尽くした。容赦なく寺を、家屋を、食料を。彼らの主食で唯一の食べ物のアワも。日本から島に持ち込んできていた。村落の襲撃は晩秋に行われた。彼らの船は海に出られず、冬用の新しい食料を運び込むことが出来なかった。早春にも行った、船がやって来るより前に、その時には彼らの住居は焼き尽くされて

いた。日本人達は飢えと寒さに耐えなければならなかった。それまでに、多くの住民達が命を失っていた・・・」。

秘密の探検隊の否定的な結果にもかかわらず、フポストフとダビドフの資料にロシア政府は興味を持った。ソビエト時代にはフポストフとダビドフはロシアの国民的英雄と見なされた。研究者の大半は日本人住民の襲撃で彼らを非難している。レザノフはとにかく日本人達にサハリンの開拓に従事しないように警告をした、ということは状況を少し緩和している。レザノフは当時サハリンはロシア領であると見なしていたので。

捕虜としてのゴローブニン、或いは、 北海道との不本意な付き合い

最も複雑で相反することの一つは、デアナ号のゴローブニンと若干の乗組員の北海道での強制的滞在であった。ゴローブニンと彼の友人リコルドの運命は、フポストフとダビドフの行動の正反対の例となっている。

ワシリイ・ミハイロビッチ・ゴローブニンは1776年4月4日に、リャザン県プロンスキイ郡プリンカ村で、プレオブラジェンスキイ連隊の親衛隊長の家で生まれた。彼の友人であるピョートル・イワノビッチ・リコルドはロシアに帰化したイタリア人の息子であった、少佐として勤務していた。ゴローブニンより生まれること2ヶ月遅かった、プスコフスク県トロペツ市で。

10歳の時、ゴローブニンは全くの孤児となった。1788年、ゴローブニンが13歳になった時、親類は彼をモスクワ陸軍貴族学校へ入学させた。1790年5月、彼は士官候補生となり、主力戦艦ニエ・トロニ・メニャ（我に触れるな）号に割り当てられた。最初の戦闘の洗礼を、ゴローブニンはその年に受けた、ロシアとスエーデンの戦争で、クラスノゴルスクとピボルグスクの会戦で。リコルドは友人より1年早くモスクワ学校に入った。遅れて1792年に幹部候補生となった。この年にゴローブニンはモスクワ学校を修了しなければならなかった。が、彼は未だ17歳にはなっていなかった。これ故、もう1年学校に残ることになった。これが未来の船乗りの人生において重要な役割を果たした：彼は完全に歴史、文学、地理学、外国語の研究に自分を献げることになった。学校を修了し、海軍少尉への任官後、軍用輸送船アンナ・マルガリタ号に配属された、ロシアの大使ルミャンツェフを乗せてストックホルムに向かう。1798年、マカロフ将軍の大艦隊の将校に彼を任命した。そこで彼は副官と通訳の仕事遂行した。機転と判断力を現しながら。

リコルドはゴローブニンに1年遅れて海軍学校を修了した。1794年5月、彼は海軍少尉に任官し、1799年4月、中尉に。3年後、12人の優秀な将校の一員としてゴローブニンとリコルドは海軍実習のためにイギリス海軍へ派遣された。彼らはもう26歳になっていた。1805年、イギリスでの彼らの勤務期間が終了した。が、ゴローブニンは居残り、西インド諸島への航海に向かった。

1807年、2人の船乗りはロシアで建造され、世界一周航海へ向かうデアナ号に配属

された。ゴローブニンは船長に任命され、リコルドは上級将校に。探検隊の主目的は「地理学的発見と主にロシア領土における太平洋北部の地図作成。それと共にオホーツク湾への各種海軍用弾丸の搬送」。デアナ号は1807年7月25日に出港した、約2年と2ヶ月でカムチャッカ沿岸にたどり着くために。

1809年9月末、船はペトロパブロフスク・カムチャトスキイ湾に入港した。ここでゴローブニンは2つの勲章の授与についての報せを受け取った：聖ゲオルギイ軍事勲章「18年間の海軍戦役に対して」と聖ウラジミール勲章「困難な旅の恙ない完遂に対して」。1809年から1810年における冬を、彼はカムチャッカで過ごした。ここで半島を巡り歩き、沢山の興味を引く情報を集めた、この遠隔地についての。1810年春、ゴローブニンはアメリカ沿岸に向かった、露米会社の村の住民達に食料を届けるために。翌年に、彼は委ねられた、アリューシャン列島と千島列島の目録を作成するようにとの。指令書では語られていた：「クルゼンシュタイン氏の著作から分かる、地理学にとってこの地区の記述が重要であることが。なんとなれば、この地区にクナシリ（国後 *）島があるはず。その存在は日本の情報だけによっている、若干のロシア人の船乗り達には知られている。我々は納得している、それを地図上で定めることが出来ていないことを、その位置を見つけた目録によって確定できない間は。もしこの島が本当に存在するならば、それを全ての側面を回ってみること、何の疑念も残すことがないようにするために」。

4月25日、デアナ号の船乗り達はペテロパブロフスク湾の氷を破碎して、アバチンスキイ海峡へ出た。5月4日、船は千島列島への航路をとった。5月13日、マツア島に達すると、ゴローブニンは南に方向を変え、千島列島の記述を始めた。6月17日、デアナ号は択捉島の南部に到達し、そこで、アイヌ人だけではなく日本人と出会った。日本人の長である石坂タケヘイム（? *）にゴローブニンは説明した、薪と食料のためにここへ立ち寄ったと。ゴローブニンは全千島列島を記述する計画を持っていた、これについて日本人に知らせたくはなかった。日本人達が探検の平和目的に疑いをもつので。ゴローブニンに対する供応は良好の内に終了した。石坂タケヘイムは択捉の西岸にあるフルベツ村の日本人の村長に手紙を出した。それで知らせていた、ロシア人は友好目的でやって来ると。実際には、北海道で最も大きい村は既に適当な手段でロシア人船乗り達を捕縛するよう命令を受けていた。彼らが日本沿岸に近づいてきたならば。何の疑いを持つことなく、船乗り達は夕方には船に戻った。

7月5日、デアナ号は国後海峡（今の根室海峡? *）の南岸のケムライ（泊 *）湾に移動した。7月11日朝、ゴローブニン、海軍少尉フェドル・ムル、航海士アンドレイ・フレブニコフ、クリール人のアレクセイ、水兵スピリドン・マカロフ、イワン・シモノフ、ミハイロ・シカエフ、グリゴリイ・ワシリエフが小舟で岸に向かった。そこで、要塞指揮官のナサセ・サエモノム（奈佐瀬 左衛門? *）と会合した。彼はロシア人にロシアについて、その政府について質問を浴びせた。日本人はデアナ号の乗組員の人数を解明する試みをした。その希望を、どれだけの食料が船に必要なのかという質問でカモフラージュして。船乗り達は自分たちの力を2倍と大きくすることが有効であると見なした、それで乗組員は102人であると伝えた。会談は礼儀正しく進んだ。実際において、ムルが適当な時を見計らって、ゴローブニンに伝えた、広場にいる日本兵達に、抜き身の刀を配布していると。が、指揮官はこれを意に介しなかった。直にゴローブニンは決めた、もう船

に戻る時であると、これについて日本人に話した。この通知は極めて否定的に受け入れられた、彼らは宣言した、松前奉行の指示無しでは、彼らは船への供給を始めることは出来ない、奉行の回答が得られるまでは15日はかかると、ロシア人の一人を捕虜として城塞に残すこと。この事件についてゴローブニンが書いている通り、上司が話した、「城塞から一人でも逃したならば、彼は切腹しなければならない」。「我々は直ぐに砦から逃げだそうとした。日本人達は嬌声を上げて立ち上がった、が我々に襲いかからなかった、我々に糧や薪を投げつけてきた」。ロシア人の船乗り達が砦から振り切って逃げた時、日本人は銃口を開いた。が、誰も撃たれなかった。航海士ムル、水兵マカロフ、アイヌの通訳アレクセイは引き留めた。他の者達はボートまでたどり着いた。干潮でボートは浅瀬に乗り上げていた、ボートを水に押しやることは出来なかった。日本人達は船乗り達を包囲した、抵抗することは無駄であった。ゴローブニン、フレブニコフ、シモノフ、シカエフ、ワシリエフを再び天幕に引き戻した。そこには、既に捕まっている者達がいた。

船から望遠鏡でリコルドは見た、ゴローブニンと彼に同伴した船乗り達が砦の門内に入っていくのを。その後、銃声と叫声を聴いた。浅瀬のため船は岸に近づき、町に向かって大砲からの砲撃をすることが出来なかった。乗組員が少数のため、強制上陸もすることが出来なかった。彼は岸に少し接近し、同僚達の開放についての交渉を開始することを決めた。が、デアナ号が大砲の射程の距離まで近づいた時、日本人は岸の砲台から船に向かって射撃を開始した。リコルドが書いていた、「日本側からのそのような明らかな我々に対する敵対的な配置の後に、私は突き止める何の可能な手段も予見しなかった、囚われ人の差し迫っている運命について、力に訴える****」。

デアナ号には勇敢な船乗り達がいた、日本人に襲いかかる準備をしていた。自分の命も省みずに、好きで敬っている船長の救出のためには。船長は大洋の航海で、様々な天候下で船員のために辛苦を惜しまなかった。しかし、船員は余りにも数が少なかった、日本の砦を襲撃するためには。そこに日本は軍勢を集めていた。襲撃の不成功の結末は、デアナ号の乗組員に必然的に招く、日本人による船の鹵獲を。その時には、船乗り達が集めた南千島列島についての情報は無くなってしまう。リコルドが書いていた、「この地域の地理上の状況を記述するために費やした多くの時間と努力が全く報われないことになってしまう」。

状況を考慮し、リコルドはくじけないように努め、決めた。時間を失うことなく、オホーツクに向かうことを。岸から離れ、デアナ号は安全な距離の所で碇を下ろした、砦からの弾丸が船に達しないために。将校達はゴローブニンに手紙を書いた、それに国後の指揮官の行動に憤りを表し、自分たちの指揮官をオホーツクに戻すことを知らせていた。そして、彼らを解放する他の方法がなければ、自分らの命を捧げることを同僚達に約束していた。7月14日、デアナ号は国後湾を放棄し、この湾を「裏切りの湾」と将校達は命名した。船の乗組員達は自分の同僚と船長の運命を心配することになった。

7月末、船はオホーツクに到着した。ゴローブニンとリコルドの同僚である船長ミハイル・イワノビッチ・ミニチイはイルクーツクに直ぐに報告を出すように助言した。ここから、リコルドはペテルブルグに向かいかけた、船長の捕虜について個人的に報告したかったので。しかし、イルクーツク知事トレスキンはリコルドに告げた、ここで、政府の決定を待つべきであると。1812年は過ぎ去った、ペテルブルグがゴローブニンを救助す

ることが出来ないままに。当時、リコルドと知事は捕虜の開放のための探検隊計画を作成していた。政府の回答を持ちきれないので、イルクーツク知事はリコルドに提案した、オホーツクに戻り、デアナ号で千島列島の作図を継続することを。国後島に接近するために、日本人によって捕縛された我が同国人の運命について知るために。

イルクーツク知事トレスキンは蝦夷（北海道）知事宛の手紙を持たせた。手紙の中で日本に対するロシアの友好関係について語っていた、フポストフとダビドフの勝手な行動を非難していた。そして伝えていた、捕虜の開放を獲得する目的で、ロシア人が日本の港へ行くことを。リコルドと一緒にオホーツクへ、フポストフが択捉で掴まえた中川五郎次（ゴローブニンとリコルドは彼をレオンザイモと呼んでいた）が出発した、同じく他の6人の日本人達も。彼らは1810年にカムチャッカ沿岸で海難に遭っていた。日本人達を祖国に送り返すことを決め、日本の幕府との交渉時に通訳として利用することも。

この時、ゴローブニンと他の捕虜達を確りと確保した日本は、強力な護送隊のもとで、彼らを小舟で函館へ送った。函館の人がどのようにロシア人の船乗り達を出迎えたかについて、ゴローブニンが書いていた：「その内に、函館から多数の老若男女が出てきた。男性の中には乗馬で、絹の着物を着て；広場での彼らの着衣と馬具は、彼らは準備万端であることを示していた。ついには、昼過ぎに、大きな行列として我々を急いで連れていった、多数の人で混雑する中を。人々は街道の両側にあふれていた。見物者達は極めて控えめであった：私はわざと観察した、彼らがどのような表情で我々を見ているのか；しかし彼らの顔に何も気づくことはなかった、我々に対する何か厳しい或いは軽蔑或いは憎しみを。何らかの侮辱やあざけりをする素振りにはなかった。遂に、我々を町に引き入れた。そこはさらに人が多かった、我々の護送隊は道を空けるのに一苦労していた。長い一本道を少し進むと、極めて狭い通りとなった。角で左に曲がると、綺麗な原っぱがあった」。

ここで、ロシア人を大きくて暗い納屋に入れた、太い木の角材で出来た檻に。直に、長時間にわたる尋問が始まった。ゴローブニンは直ぐに注意を向けた、日本人達は我々に結構気を遣っていることに、全ての返答を詳細に書き留めていることに。彼らは全てに興味を持っていた：地理について、ロシア国家の機構について、捕虜の家族関係についてまで。捕虜をばらばらにし、しばしば我々を対決させた。ロシア人は完全に矛盾する依頼に面食らった。全ての日本人、上役から番兵まで、彼ら（ロシア人 *）をウチワで埋め尽くし、それに何かを書いてくれるよう要求した！ ゴローブニンは気がついた、日本人はロシアの記念品を極めて好んでいることに。彼らの所には、ラックスマンが残した沢山の記念品があった。

函館での捕虜の生活は大変で不安でもあった。フレブニコフが追想していた：「函館に入ると、町の奉行から我々の手をほどくよう命令が届いた・・・ 建物に連れて行った、全ての人が悲しみ憤激するような、我々のうれしい気持ちは突然怖く絶望へと変わった。これは日本の牢獄であった、全ての住居から少し離れた所に建っている。そのぼろぼろの柵は上部に鋭い鉄の尖塔と爪が沢山刺されていた。門の前には門番が立っており、広場には兵士が整列していた。我々を二つに別けた：船長とムルと水兵一人は一方側の仕切られた檻に入れられた。私とその他は他の半分に連れていき、暗くて悪臭のする檻に閉じ込めた・・・」

次々と尋問を行った；日本人達は何も信用していないようであった。ロシア人達は偵察

目的で千島列島にやって来たスパイと見なしていた。8月末に、日本人はリコルドからの前述した手紙をゴローブニンに示した。ワシリイ・ミハイロビッチ・ゴローブニンを尋問した時、もし彼を許したならば、彼がどのような回答を船に伝えるかとの。ゴローブニンが答えた：何もしないで船をロシア海岸に直ぐに進め、起きたことを政府に報告すると。

函館での50日間の滞在の後、9月末にロシア人達を松前へ移した、函館から東（西？*）へ数日間の旅程の距離にある。ここで、彼らを函館と同じような牢獄に閉じ込めた。この町で、捕虜と松前奉行荒尾田島守との初めての会合が行われた。彼はゴローブニンに質問した、彼らは日本のどこに住みたいのかと、この地に残る或いは首都に移動する或いはその他に。ゴローブニンは確りと答えた：「我々には2つの要望がある：一つは祖国に戻ることであり、もしこれが不可能ならば、死にたい・・・。」ロシア人将校の決定的な言葉は奉行に大きな感銘を与えた。奉行は船乗り達を開放することを約束した、もしフボストフの蛮行が裏付けられるならば。その後、デアナ号の目的と航路の詳細な記述した書面の証拠を捕虜達に示した。奉行は首都に証拠を送った。捕虜から縄を外すことを命令した。捕虜達を少しましな建物に移動させた、食事もしましくなった。

有名な日本の探検家間宮林蔵はロシア人捕虜を見たがった。ゴローブニンが追想していた、「学者とは言え、我々に大きな敵意を持っていた。しかし、我々が口論したのは何時でもではなかった。時折、いろいろな件について友好的に話し合った、注目を引いている政治テーマを含めて。彼は主張した、日本人はロシア人を疑う根本的な理由を持っている、彼らに対する悪い印象で。ヨーロッパの様々な宮廷の考えについて彼らに伝えた、オランダ人は間違っていない」。

1812年2月、ロシア人と良好な関係にあった通訳の貞助（村上*）と熊次郎（上原*）は彼ら（?*）に伝えた、首都では松前奉行の意見を受け入れなかった、ロシアとの戦争の準備をしたがっていると。ゴローブニンは良くわかっていた、オホーツク港の貧弱な武力では日本に対する勝利はおぼつかないことを。イギリスとの戦争のために、日本に対抗する大規模な探検隊の組織化は難しかった。ただ一つだけが残されていた、逃亡すること：岸までたどり着き、船を手に入れ、カムチャッカかオホーツクへ行くこと。逃亡することとし、捕虜達は計画を練った。食料を備蓄し、ロープを編んだ。ヤカン、火打ち石、2本の包丁を手に入れた。

1812年4月23日夜、彼らは牢獄の壁の下に狭い穴を空け、やっと自由になった。この時、ゴローブニンは杭で足を痛めた。逃亡者達は既に知っていた、北海道は山だらけであり、村落は海岸沿いにだけあるのを。これ故、船乗り達は海岸ではなく山を越えて北へ向かうことにした。場所も分からず、ロシアの船乗り達は当てずっぽうに進んだ、足を引きずり、暗闇の中を。山登りの時、船長は足に酷い痛みを感じた、痛みを鎮めるために、しばしば休憩した。

放浪の末、逃亡者達は山の野原にたどり着いた、雪で覆われていた。跡をくらし、雪のない所を選んで、彼らは北へ移動した。9日間、彼らは低地、窪地、木々に覆われた台地に隠れた。本当に飢え、疲れ果てた。ゴローブニンは追想していた「・・・恐怖無しには思い浮かべられない。あのような恐ろしい絶壁を我々は何度か登り上がった、そのような絶壁をしばしば降りなければならなかった」。残念ながら、逃亡者達は結局見つけ出され、捕縛され、松前に戻された。

町では沢山の人々が彼らを待っていた、彼らは哀れみを持ってロシア人達を見ていた。彼らに何の敵意も持つことなく、船乗り達を奉行の牢屋に入れた。そこには裁判の広場があった。逃亡の理由についての奉行田島守の尋問に答えて、ゴローブニンが答えた、状況の絶望さが捕虜達を逃亡に突き動かした、これに関しては彼一人に罪がある、他の者達は彼の命令を遂行しただけであると。

逃亡者達は、牢獄に再び送られた、警備を強化された。将校達は特別に小さい檻に入れられ、残りは一つの大きな檻に入れられた。尋問は継続された、ゴローブニンと彼の同伴者達は堂々と振る舞った、ムル以外は。

1812年6月29日、松前に新しい奉行小笠原伊勢守がやって来た。両方の奉行はロシア人にじっと待つように助言した、首都から彼らの運命が決まる手紙が届くまで、これ以上逃亡を試みないように、捕虜の生活条件の改善に努めることを約束して。ロシア人との別れに際して、旧奉行は請け負った、良くなっていくことを。7月14日、彼は貞助と一緒に首都に向かって出発した、彼はロシア人の友人に書くことを約束した。しかし、早い返答は無理であった、なんとすれば、23日から25日より早くは首都にたどり着けないので。

時はゆっくりと進んでいった。船乗り達は古い本を何度も読み返した、日本語の単語を少しは勉強した。ゴローブニンは彼に起きた出来事の詳細な復元に没頭した：彼は追想した、「その上さらに、我々に起こった全てのことと私の印象を、紙の切れ端に私は書くことを思いついた」。将校達は水兵に読み書きを教えた。船乗り達には散歩が許可された。小笠原の指示の元に、彼の前任者と同じように、船乗り達と良好な関係を保った。船乗り達に果物を与えたり、あるこどもの日には、奉行はロシア人を日本料理の食事でもてなした。

1812年9月6日、ゴローブニンにリコルドからの手紙が届いた。その手紙で伝えていた、1812年7月22日、リコルドの指揮下のデアナ号とフィラトフ指揮下の輸送船「ゾンチク号」はオホーツクを出港し、国後島への航路をとった。一月ほどの間千島列島の記載に従事し、8月28日裏切りの湾に入港した。リコルドは日本人の捕虜の内の一人であるレオンザイモを岸に遣わした、砦の指揮官に状況を説明するために。国後島に再びロシア船が現れざるを得なかった。トレスキン知事の手紙を幕府に渡すことを日本人に強いた：「あのような予想もしない敵意のある犯罪にもかかわらず、我が大帝国の皇帝の行動を正確に遂行する。我々はカムチャッカ沿岸で海難に遭った全ての日本人を彼らの祖国へ帰還させる：我々の方には何の敵意もないことを示すものである；我々は確信している、国後島に捕虜となっているゴローブニン船長とその他が戻されると、彼らには何の罪もなく、何の害の原因ともなっていないので」。

戻ってきて、レオンザイモが伝えた、ゴローブニン船長と他の者達は殺されたと。日本人達の見込みによると、この嘘の情報はロシア船を去らせるためであった。しかし、デアナ号の乗組員達は、ニュースに嘆いたにもかかわらず、自分たちの同僚の運命に関する正確なデータを得ることなくオホーツクに行くつもりは、全くなかった。特記しなければならぬ、リコルドは「悪意ある」レオンザイモに恵まれなかった。彼は非常に否定的な側に立っていた。彼の言葉の真実性に疑いを持ち、リコルドは海峡を去らないという断固とした意向を固めた、海岸や日本船から日本人を捕縛するという都合の良い出来事が現れない間、全くの真実を探り出すために、我々の捕虜が生きているのかどうかの」。

計画を実行し、1812年9月7日、ロシアの船乗り達は日本船「観世丸」を捕縛し、その船長高田屋嘉平をデアナ号に送った。ゴローブニンが書いていた、「彼は指揮官だけではなく船の持ち主でもあった、大商人でもあった、並々ならぬ知性と公正さを持っていた。その上、同国人から大いなる尊敬を受けていた；高位の役人さえ彼に尊敬を示していた；一般的に、彼は皆から好かれていた、彼を知っている。リコルド達は彼を役人として扱った。これは難しいことではない。なんとなれば、このように尊敬されている人物は、この人物と同じく、遠方の地では武士と対等に刀と短剣を帯びている」。

高田屋嘉平（1769年－1827年）－6人兄弟の長男－は淡路島の貧しい家に生まれた。広大な空間が嘉平を引きつけた：彼は子供の時から海にとりつかれた。小さい時に、彼は兄弟に船を作ってあげていた。7歳の時に、河口で干満を調べ、大人達を驚かせた。22歳の時、彼は故郷を離れて兵庫に出た、船乗りとして雇われた。27歳の時、当時としては大きな貨物船である自前の辰悦丸を建造した。日本の北部の蝦夷に出港した、余りよく知られていなかった北海道へ、ようやく日本人達が留まるようになって来ていた。30歳の時に、彼は北海道で商売を始めた。そこから兵庫へニシン、サケ、昆布を運んだ。逆に、北海道へは米、酒、塩、綿、着物、日用品を。彼は江戸と函館の間の海上通信を確立した、択捉島への海路を開いた、近傍の島々の間の海峡の水路を調べた。同時代人の記すところによれば、彼は背は低く、虚弱であった。体力は彼においては強い意志、天分の知性と閃きに置き換わった。漁業に最適な場所を選び出し、彼は函館を北日本における漁業の中心地とした。彼は漁具を最新化した、食用貝のハマグリとシジミを湾で育成した。彼は船の建造にも寄与した：彼が作った造船所からは、約500隻以上の大型船が進水した、小さい船を除いて。船の船長達は特別の服を着ていた：高田屋の商社の白い紋章付きの青い法被。この紋章は彼の船の帆にも掲載された、北から南に日本の海を縦横に航行している。これは正に帝国であった、北海道開発に従事している。訳があつて、1801年に、功績に対して嘉平は帯刀し、名字を名乗る権利を与えられた。それは高位の階層の人間だけに許されていた。彼は幕府から交易と漁業の特権を得た、こつこつと大財産を作った。函館の大部分をすっかりと焼き尽くした1806年の大火災後、被災者達に、金銭、米、着物を分け与えた。兵庫と大阪から最初の必要物資を運んだ、安価で売った。水の無い、町のその地区に、耐火目的で彼は井戸を掘った、手動ポンプを設置し、道路を整備した。

高田屋嘉平が、国後島へのロシア船の来港の目的を理解するために、リコルドは彼に船乗り達の捕虜の経過について説明をした。通訳に耳を傾けて、嘉平はビックリした：

－ロシア人が松前にいる！

彼は詳細に話をした、捕虜を国後から連れ出した時、幾つかの町を経由し、捕虜達は生きていた。この際、彼は正確に書き留めていた、ムルの容貌を。しかし、ゴローブニンの名前には言及していなかった。そのことがリコルドと将校達を不安にさせた。日本人達の矛盾する証言を少し考慮する必要があつた：レオンザイモはロシア人の死亡について伝えた。が、高田屋嘉平は全く違うことを主張した、彼は考えつくことができなかった詳細を。リコルドは結論に達した、彼の同国人達は生きています。彼が高田屋嘉平に説明した、ロシアに行くと、日本人は冷静に答えた：「よろしい、私は準備できている！」リコルドは付け加えた、来年に帰国することが出来ると。

ロシアから日本人の船乗り達を運んできた。彼らはロシア語を知らない、岸に上陸させた、全ての必需品を与えて。リコルドが書いていた、「私が素朴に考えていた通り、彼らは我々が与えた援助に感謝を示し、彼らの間にロシア人は善人であるという意見が広まる。彼らが以前に持っていた思いよりは」。解放される日本人の替わりに、リコルドは日本船から4人を引き取ることを決めた、「指揮官への奉仕に必要であるという口実で」、その船乗りの選択を彼に任せるように願い出た。十分に役に立ちそうな。高田屋嘉平は説得を試みた、全部の船乗り達は無学であり、ロシア人を極めて恐れており、酷く嘆くであろう。が、リコルドは要求し続けた。日本人の商人が彼の船に乗って一緒に出ようと彼を誘った時、そこへ乗組員を集め、4人の同行者を選んだ。その後、リコルドは高田屋嘉平に紙に書くように願い出た、レオンザイモが伝えたこと全てを、ロシア人乗組員の捕虜の状態と彼らの運命で彼が知っていることを。その後、高田屋嘉平は船乗り達と帆船に乗り移った。リコルドはとにかく強調することに努めた、ロシア人は日本人を敵とは見ていないことを、平和を愛する国民であることを、それとの友好関係が若干の不愉快な状況によって中断したと。

当日、リコルドは若い日本人女性を船に招待した、函館から択捉までの彼の航海に常にしがっている高田屋嘉平の同伴者を。デアナ号では、彼女を若い医者妻が迎えた、おびえている客を励ますために。彼女に自分の衣服を見せていた。日本人女性は楽しそうであった、多くのものに興味を持って見ていた、試着さえしてみた。その後、彼女に糖蜜入りの茶を振る舞った、その後プレゼントを与えた。リコルドは彼女に幾つかのヨーロッパ製品をプレゼントした、全額で30金貨相当の。その後、彼は高田屋嘉平に同国人達へ手紙を書くことを要請した、彼らに保証することを、来年彼が祖国へ戻ってくることを。その間、リコルドと一緒に部屋に住み、帰還するまで彼と一緒に住むことを。

高田屋は言葉を知らないことに不平をこぼした、「何の言葉も分からない、私に語っていることを、何も話すことが出来ない」。最初、彼らはリコルドと手のひらに若干の日本文字を書くことで話し合っていた、リコルドが航海中に学んだ。しかし、日本人達はロシアで良い通訳と出会うことを期待していた、ロシア語で交渉をすることを、そうすれば交渉は上手く行くであろうと。彼は書いていた、「私は何もしていない、日本人に害を与えるようなことは。我々の政府の利益についてだけ気を配り。不適當なことは何もしないように努力し。もし我々が相互の利益の精神で合意に至るならば、状況は多分はつきりする」。この手紙で、高田屋は幕府の官僚に挨拶するように頼んだ。彼は結語していた、「私は期待している、来年には恙なく日本に戻るであろうと」。

ロシア船の日本人達の訪問時、リコルドは努めた、彼らのロシア人に対する信用を吹き込むことに、高田屋嘉平とより親密になることに。日本人の船乗り達は船に非常に興味を持った、リコルドは彼らが必要と評価するもの全てを見ることを許可した。高田屋嘉平は注意深く見学した。飲料用の空の樽に気がつき、彼は自分の船からの水でそれを満たすことを提案した。船乗り達は直ぐにそれをした。リコルドが書いてある、「少し前までは、我々の敵であると思っていた人々を見るのは気持ちいい、我々と友好を交わすのを。これらの人の良い日本人達は、我々と別れを告げて、歌を歌いながら自分の船に向かった」。

リコルドは高田屋と長く話し合いをした、ロシアと日本の間に生じている問題について情報を彼と分かち合った。日本人は自分の運命を嘆いてはいなかった：「不運の中に、神

の意志を私は認める、自分の手段として私を選んだ。国後海峡へ行く何の重要な理由もなく、偶々私はそこへ立ち寄った、5年以上そこへ行っていない。そして、私は張本人となった、貴方の村の襲撃の決定的意向の抹消の；その結果、数十人のロシア人と数百人の日本人の命の救世主となった。この考えが私を生き返らせている、そして、私は期待している、私の健康がすぐれない。カムチャッカの気候の厳しさに耐えることを」。

日本船を捕縛した時、若干の日本人が犠牲となった、泳いで岸にたどり着こうとして。リコルドを驚かせた、日本の幕府がこの件をロシアの罪にしなかったことに。後になって、高田屋が説明をした：「我々の法に従えば、貴方に軍事行動をする権利があった、貴方の捕虜の死について貴方が知った時には；もし貴方が船に乗っている私と我が者達を殺したならば、その時は我が幕府は、友人に好意を感じている、今のように、説明によって、表だきにしなかった」。

1812年9月11日、デアナ号とゾチク号はカムチャッカへのコースをとった。10月3日、アバチンスク湾に入港した。ロシア船での高田屋の滞在は、捕虜の生活では全くなかった。直ぐに、彼は客となった：リコルドと同じ船室で生活した（後になって、半年間滞在したペトロパブロフスクでは、彼は彼と住居を分け合った。）リコルドの節度を正當に評価しなければならない。自分の行動で年配の高田屋に引き起こした、そのように尋常ではない状況で示した。名誉と尊敬、大きな信頼と同情に慣れている。お互いに親愛の情を持ったことを言わなければならない：リコルドと高田屋はお互いに愛着を感じずようになった。ロシアの将校は日本語会話を勉強し、高田屋はロシア語を。リコルドが書いていた、「我々は冬の間中、自分の言葉を作った。それを基礎にして、困難無く話し合いをした、時折、抽象的なものについてさえ」。ロシアと日本の間の関係は、話し合いの重要な題の一つとなった。リコルドは高田屋に話した、日本人達にロシア人に対して否定的な関係を引き起こしたフボストフとダビドフの行動は勝手に行われたものであり、そのために彼らは罰せられた。今度は高田屋が隣人に日本の法や風習について説明をした、日本人は無知のため外国人に不快なことや無礼なことをしていると。

高田屋は納得させた、日本は全くロシアと戦争をしようと欲していないと。レザノフとの交渉を拒否することで、幕府は考えた、隣人が何らかの関係を持つようとする試みを止めるであろうと。日本の村落へのロシア船員の襲撃は幕府にとって予想外の出来事であった。ゴローニンンの逮捕によって、幕府は説明を得るつもりであった。高田屋は納得させた、過去の出来事に対するイルクーツク知事の説明に日本人は納得したことを。これら全てをリコルドはオホーツクで書き上げ、そして、回答を待たずに、日本人達を祖国に帰すことを決めた。

1813年3月18日、ペトロパブロフスク・カムチャッカを出航し、国後への航路をとった。20日後に、船は島に接近し、裏切りの湾（現在の泊湾？*）に投錨した、大砲の届かない距離に。しかし、岸には誰も見えなかった。リコルドは2人の日本人の船乗りを岸に送ることを決めた。ロシア人捕虜の運命について国後の長からの回答を得るために。この際、リコルドは高田屋に問い質した、高田屋が自分の船乗り達の帰還を保証するのかと。「彼は答えた：

—しない！

—しないと？—私は問い質した—自分の国の法を君は知らないのか？

—知っている、それで全てダメだ！

—それでは—私は彼の船乗りに向かって話した—国後の長に私について説明しなさい。もし彼が君たちを岸に拘束し、我々の捕虜の運命について何の情報も私に出来ないならば、私はこれを不当な犯罪と認める、そして君たちの長をオホーツクへ連行する。そこからこの夏に、ここへ何隻かの軍艦でやって来る、武力でもって、我々の捕虜の開放を要求するために。3日間の期限を指定する、ここでの回答を得るため待機の。

この言葉で、高田屋は顔色を変えた、しかし、冷静に話し始めた：

—帝国の船の司令官！（彼は私をそのように呼んだ、大事な話の時には）君は本当に激烈に語っている、私の船乗りを経由して国後の長への君の書簡は多くのことを含んでいる、が我らの法に従えば少ない。私をオホーツクへ連れ去るという脅しは無駄である。2人の船乗り達を長が岸で拘束したとしても、2人、いや2千人の船乗りでも私の替わりとはならない。この際君に警告をする、君には私をオホーツクへ連行する権利はないことを；しかし、これについては後で説明しよう、が、今は私に言ってくれ、実際において、岸に2人の船乗りを行かせる条件で、君は解決したいのかどうか？

—その通り！—私は語った、—さもないと、軍艦の船長のように、私に委ねられたこのような困難で考える勇気が無い、潜在的な状況の恐怖で。

—よろしい！—彼は答えた—私にさせてくれ、多分最後で最も必要な私の船乗り達への指示、言葉で通告すること、私について国後の長へ、なんとなれば、約束した手紙、何のメモも私は送っていない。

彼は少し姿勢を正した、真剣な顔になり、その後、続けた：

—君は十分に日本語が分かる、私が簡単な言葉で船乗り達に話していること全てを理解している。私は欲しない、君が私を疑う権利を有することを、何らかの悪意を持って」。

その後、高田屋は船乗り達に幾つかの指示を与えた、長との出会いにおいてどのように振る舞わなければならないか、そして何を話すかに関して。刀を与えた、それを息子に与えるよう命じた。彼はリコルドにウオッカをお願いした、船乗り達に別れの杯とし、自ら彼らを甲板に案内した。ボートで彼らを岸に送り届けた。彼らは村へ障害なくたどり着いた。リコルドは彼らの帰還を不安視していた、新しい何らかの行動計画を考えていた。若干の熟考の後、リコルドは高田屋を下船させることに決めた。この事を知って、リコルドに自分の考えを素直に語った。彼をオホーツクに強制的に連行したがつていることを知った誇り高い日本人は、決闘でデアナ号の船長を殺すことを決めたことが明らかとなった。その後、切腹をする、そのようにして自分の名誉を守る。なぜロシア人に復讐しなかったという質問に、船の火薬庫を爆発させて、日本人が答えた：「全てを爆破によって？

ダメである、友よ、私はこれを知っている、が、これにどんな勇気が？ 私の見解では、そのような秘密の方法で復讐することは小心者の知恵である」。

リコルドの決定は信頼できるものであった。自分の権威とロシア人との密接な信頼関係を利用して、高田屋は同国人達を納得させることが出来た、ロシアは日本と戦争をしたくはないと。この時期に、国後では捕虜からロシア語でのメモを得た、デアナ号宛ての：「我々全員、将校も船乗りもクリール人のアレクセイも、生きており、松前にいる。1813年5月13日」。幕府によって承認されたこのメモは、5つの港に送られた、デアナ号が寄港できる。国後海峡へのデアナ号の到来についての公的通報は6月20日に松前に届い

た。翌日に、自分の指揮官の名の下で通訳がゴローブニンについて問い合わせた。船乗りの内の誰を、やって来た船で、彼が派遣したがつているかとの。誰かを最良にしたり、他の者をつかりさせたくはなかったの、彼はクジで決めることにした。幸運は船乗りのシモノフに当たった、デアナ号で彼と一緒にクーリー人のアレクセイが向かった。三平はゴローブニンに保証した、リコルドとの交渉のために自身が国後に出発することを、彼らに事の成功の助けをするために。日本側はゴローブニンと彼の同行者達の開放の条件として提起した：フポストフとダビドフが政府の指示無しに行動したという公的な証拠、同じく、奪った財産の返還。

6月22日、ゴローブニンとムルを砦の指揮官の所へ連れ出した、そこで、彼らにリコルドの2通の手紙を見せた：一つは国後の長に宛てたもの、もう一つはゴローブニン宛てのもの。前者の手紙では、リコルドが伝えていた、彼は和平の提案を持って日本にやって来た、高田屋嘉平と2人の日本人の乗組員は船にいる、が、他の2人の船乗りとクーリー人はカムチャッカで病死したことを。2つ目の手紙で、リコルドはゴローブニンにお願いしている、自分と他の捕虜達の健康について知らせてくれるようにと。2通の手紙の複写をとり、日本語に翻訳し、日本の首都に送った。6月24日、三平と熊次郎は国後に送られた、シモノフとアレクセイを連れて。ゴローブニンは秘密でシモノフにリコルド宛の手紙を渡した、それで指示がなされていた、日本人が戦争行動を始めた場合における。これについて、船乗りが指摘していた：「わきまなさい、皇帝の名誉と祖国の利益、そのような場合には君は私を惜しむ必要は無い：死ぬことなどどうでも良い、今であろうと、或いは10年後、20年後であろうと」。

7月19日、奉行と多数の役人の在席の元で、ゴローブニンとムルに、リコルドの手紙が示された。リコルドは交渉開始の要望に対して日本人に感謝した、直ぐにオホーツクに出発することを約束した、9月に戻ってきてロシア政府の要求された説明を渡すために。函館湾への入港が分からないので、彼は伝えた、隣の湾に着いて、そこにパイロットを派遣するようお願いした。ゴローブニンにリコルドは伝えた、彼のメモを手にしたことを、遅くはない開放で彼を励ました。

ゴローブニンと他の捕虜達はシモノフとアレクセイの松前への帰還を首を長くして待った。彼らは彼らから知ることを渴望していた、デアナ号はどうなっているのか、ロシアや世界はどうなっているのかを。これらの日々について自分の気分を将校が書いていた：「今、読者が自分の心で判断するとしても、我々が何を感じているか、言うならば、生きている帝国出身者と出会って。2年余り、我々はロシアのことを耳にしていない、世界の文明国についてはより聞いていない」。ゴローブニンの要請にしたがつて、リコルドは彼に新聞と軍事雑誌を送った。それはナポレオンの襲来の開始からクツーフの終焉までを取り上げていた。日本人達は同じようにそれに本当の興味を示した、ロシアで起こったことに。状況が特に彼らの興味をかき立てた、モスクワを占領したフランス軍が打ち負かされたことに。彼らは重要な軍事行動を翻訳してくれるように頼んできた。

1813年7月9日、デアナ号はオホーツクへの航路をとった。港での18日間の停泊の後、船は再び国後に投錨した。その頃、捕虜達を函館に移送することを決めた、そこへ彼らは1813年9月2日に到着した。「そこで、一軒の国有の建物に我々を入れた、砦から余り遠くないところにある。我々の部屋は開放的な廊下を持ち、小さな庭に面してい

た。廊下の格子の前には、板製の楯が立てられていた、楯の下端部は廊下の床に打ち付けられていた、上端は3フィートほどそれから離れていた、その空き部分からは我々には弱い明かりしか届かなかった；その上からは、我々は外部のものを何も見ることはできなかった」。書類の仕上げの準備が始まった。日本人達はもう一度ゴローブニンに頼んだ、彼らの回答の翻訳をしてくれる翻訳者としての助力を、彼らが当時ラックスマンとレザノフに渡した。同じく添付の手紙もゴローブニンに宛てた。

日本の沿岸へのデアナ号の接近は非常に困難であった。南風は十分な速度を与えてくれなかった、が、船乗り達の努力が勝った。9月13日襟裳岬に接近した。が、ようやく、9月24日に、リコルドはパイロットを船に乗せた。

1813年9月28日、デアナ号は函館に入港した。市民達はロシア船に大いに興味を持った。しかし、警備隊は船に接近することを許さなかった。リコルドは注目した、「しかし、見物人達の好奇心は大きかった、警備兵の指示は住民に極めて敬意を払われていたが、騒音でかき消され、上手く統制が出来なかった」。

長い儀式の後に、リコルドは幕府に書類を渡した、彼らは得た手紙に十分に満足した。幕府によってそれを審議した後、奉行は船乗り達を解放することにした。10月3日、捕虜達は初めて高田屋嘉平と会った、通訳と一緒にやって来た。10月5日、ゴローブニンはリコルドを見ることができた。日本人の要請にしたがって、ゴローブニンは明るい色の高価な絹製のジャケット、乗馬ズボンを身につけていた、函館で縫われた。彼の頭には、海軍将校のパレード用の三角帽子が乗っていた。尋常ではない服装に全く釣り合っていなかった。ゴローブニンとリコルドの再会が厳かに行われるように、日本人達は気を遣った。出会いは、税関の部屋の一つで、昼間に行われた。その回りに沢山の兵士達が集まっていた、高価な式典用の絹とビロードの着物を着た、金銀が縫い込まれた。

出会いの時、日本人達はかれらの習慣に従って、床に座った。が、ゴローブニンには椅子が提供された。リコルド、将校のサベリエフ、通訳のキセレフ、何人かの船乗りを奉行の船に案内した。ゴローブニンは感情を表現できなかった、彼に押し寄せてきた、彼が友人を見た時に。友人とは長い間引き離されていた、気づいて：「我々が最初の出会いにどう感じたか、読者の判断に任せよう」。幾ばくかの楽しい時を過ごした後、生き延びた友人どおしの、ゴローブニンはその出会いの目的について伝えた。今度はリコルドが話した、彼はイルクーツク知事の命令書を持っていると「決定に関して、2国間の相互の同意を持った、国境と相互の友好関係」。意見を交わし合い、ゴローブニンとリコルドは当分この問題を取り上げないこととした。それらは日本の首都でだけ決めることが出来る、そのためには、冬を函館で待機することが要求された。船での越冬は出来ない、日本人次第でロシア人が岸に上がることは、もちろん、極めて好ましくはなかった。

その後、ロシアの将校達をお茶と菓子でもてなした、ゴローブニンは友人達を船に招いた。他の日に、日本人はフレブニコフとミルに帽子と刀を厳かに授けた、ロシア人将校全員は上品な服を着て、サーベルを付け、奉行に紹介された。別れの儀式では、20人以上の日本人が在席した。奉行は懐から紙を取り出し、それを持ち上げ、威厳を持って語った：「これは幕府の命令である！」その後、書面を読み始めた：「日本帝国はロシア帝国と昔から反目し合っていない、愚痴もない。貴国の船によるモフナチイ島（？ *）における強奪行為に対して、我が方から視察隊を遣わし、国後で貴方の人物達を捕まえた。

前の尋問で彼らが語った、以前の強奪行為は貴方の政府に無断で行われた、が、海賊としての犯罪である。しかし、未だ不案内な点があった、が、今、貴方の長から説明を受けた。他の証拠がこれを裏付けている。我々をだましていないことを知るに至った。これ故、疑いは去った。今、貴方の者達を帰還させる、今後、双方からの不満は何も残らないことになる。」

書類は次のことを伝えていた、翌日に捕虜全員を例外なく解放すると。在籍者達はうれしい知らせでロシア人達を祝福した、彼らの帰還後、彼らに割り当てられていた彼らの住居の所に、武士や平民達が行こうとした。奉行の3人の補助者が書面の祝辞を持ってきた。ゴローブニンに渡した、記念として。それには特に語られていた：「東の我々の首都から松前島までは大分距離がある、この付近の国境線は今のところ全て不十分である、貴方たちは暑さ、寒さ、他の環境の変化を乗り越えた。幸運な帰還が目前である；これについての個人的な貴方の喜びについて触れないで欲しい。我々は貴方と同じ感情を持ってこの幸せな出来事が嬉しい。道中を安全に。これを私たちは神に祈っている。今、貴方からの希望にしたがって、我々はこの文を書いた」。夕方には、元捕虜達のために奉行の名の下で盛大な晩餐会が行われた。様々な魚料理が沢山提供された、鶏肉も。日本酒も大量に。晩餐会后に、ロシア人に漆塗りの容器に乗せられた幾つかの卵がプレゼントされた。

10月7日は旅支度に費やされた。番兵と労働者が荷物―食料、幕府から贅沢に提供された―の荷造りをした：米50俵、酒数樽、沢山の塩漬けの魚と生魚、大根と他の野菜。ロシア人は借りを残さない、日本人に様々なプレゼントをした。特に、ゴローブニンはクルゼンシュタインの世界地図、宗谷海峡の地図、仏露辞典をプレゼントした。リコルドはロシアの軍司令官の肖像画を贈呈した：カメンスキイ、バグラチオン、クツゾフの。

ロシア人の船乗り達は、日本の捕虜として2年と2ヶ月と26日間生活をした。1813年10月10日、デアナ号は帰還の航路に出た。沢山の日本人達が岸に集まっていた、ロシア船に幸運な航海を期待して。長助、熊次郎、高田屋嘉平は小舟でデアナ号を送った、大洋への出口まで。11月3日、アバチンスク湾で拘束という苦境から救い出された者達を同国人、友人、知人達が出迎えた。デアナ号でゴローブニンに仕えていたヤクシキン中尉、ボルコフ陸軍中尉、「私を見て歓喜していた・・・死んだと思われた兄弟が復活してきたかのように」、この出会いについてゴローブニンが書いている。1814年12月2日、ゴローブニンとリコルドはペテロパブロフスクからペテルブルグに向かった。犬、トナカイ、馬と乗り継ぎ、7月22日に首都に到着した。その日は、7年前にデアナ号が遠洋航海に出発した日でもあった・・・。

ゴローブニンの開放に大きな助力をしたのがクリュゼンシテルンである。彼は平和的手段で解決することを提案した、軍事手段によらずに。ゴローブニンは彼に感謝した、旅メモに対する注意に対して：クルゼンシテルンは彼の下書きを詳細に検討した。「私は自分の珍事の詳細について君に伝えたかった、この珍事は君の興味を引くものであろう。というのは、状況は我が国民には僅かにしか知られていないので。このために、10枚以上の紙に書き出す必要がある。が、今は言うだけにしておく、日本人についての君の判断には間違いがあった、ここで断言する、彼らは我々を殺さなかった、これを企む事が出来るような国民ではないと。フポストフは我々が知っている異常の事をやった。皇帝の名の下で彼らに戦争を宣言した。ロシアの国籍に書類でサハリン人を組み入れた。彼らに勲章を授

与した。それ以上に、略奪をし、日本人の財産を破壊し、焼いた、20万ピヤストロの」。

捕虜時における勇気と十分な行動に対して、1813年にゴローブニンを海軍中佐に任官させた。同時に、彼に終身年金1500ルーブルを賞として与えた。3年後、彼の回想記「日本人の捕虜としての珍事について」の初版が出た。この本は殆どのヨーロッパ言語に翻訳された。その後、日本でも出版された。ゴローブニンは海軍省の名誉顧問に任命された。が、名誉の上に胡座をかく事を欲しなかった。1817年から1819年に、帆船「カムチャッカ号」を指揮し、彼は再び世界一周の航海をした。カムチャッカ、コマンドルスキイ、アレウトスキイ、ロシア領アメリカに立ち寄った。この後（1819年10月13日）、海軍大佐への昇任が後に続いた、サンクトペテルブルグの第2艦隊司令官への任命も。当時、ゴローブニンは本「クロンシュタットからカムチャッカへのデアナ号の航海」と「千島列島の地図作成のための航海についての短縮メモ」を出版した。1818年、ゴローブニンは科学アカデミー正会員に選出された。2年後に、指揮官に昇任させ、海軍貴族学校の副学長に任命した。海軍中將の輝かしい出世は、コレラの病気で止まってしまった。彼は1831年6月30日に亡くなり、サンクトペテルブルグのミトロファノスク墓地に葬られた。1864年、船乗りの5巻の選集が出版された。彼の名前が沢山の地理名として呼称された：アラスカ湾における村落、湾、潟；国後島の湾、火山、川、村落；太平洋の暗礁；マツヤ島とライコケ島間の海峡；ノーバヤ・ゼムリヤ島の山。

ピョートル・イワノビッチ・リコルドは友人より少し長生きした。1814年7月4日、彼を海軍中佐に昇任させた、1817年1月2日には海軍大佐に、カムチャッカ地区の司令官に任命した。彼はゴローブニンと同じく年金を受け取った。同時に、ゴローブニンと、日本人との交際についての回想記を出版した。「カムチャッカ半島の住民の幸福についての博愛に飛んだ世話」に対して、リコルドは勲章をもらった。1818年5月、彼を科学アカデミー正会員に選んだ。リコルドは1855年2月16日亡くなった。サンクトペテルブルグのチフピンスク墓地に葬られた。

ロシア領アメリカから日本へ、どのようにロシア人が日本人を救出し、祖国へ帰還させたか

日本の隣国となり、ロシアは日本人を祖国へ帰還させる事に少なくない援助をした、ロシアの領域内に偶然に入り込んできた。そのような出来事は少なくはなかった。

1834年7月、商人ウイリアム・フレンチが所有するブリグ型帆船ドザウレ号がハワイのサンドピチェフ島からノボ・アルハンゲリスク（現在はアラスカ州）にやって来た。176樽の塩の他に、ロシア領アメリカへ意外な乗客、船の遭難に遭った4人の日本人を運んでいた。彼らは全てをロシア人に話した、彼らに何が起こったのかを。3本マストの帆船「クチャ丸」がイチンガ・ハヤコボ（？ ＊）村（佐渡島に直面している日本の北西にあるヌマカリ（？ ＊）辺り）を出港した。北海道の松前の村を目指した。大阪で魚とイクラを販売するために。航海中、日本人達を嵐が襲った、船は大海中に押し出された。2ヶ月間彼らは波にもまれ、1832年12月になって、壊れた船の残骸はオアフ島の北

東海岸に座礁した。この間に、乗組員の多数が欠けてしまった：船長と3人の船乗りは飢えと渇きで亡くなった。日本人船乗り達の深い悲しみに対して、ホノルルにいた捕鯨船はどれも彼らを日本に運ぶ事を決めなかった。日本が鎖国をしていたからであった。フレンチは日本人達を最初は自分の家に置いてやっただけではなく、彼らの不幸に同情するようになった。ロシア人の思いやりと同情心を知っていた、彼は彼らをノボ・アルハンゲリスクへ運ぶ事を決めた。ロシア人ならばこの困難な状況からの出口を見つけられるものと期待して。

何日間にも渡って、日本人達は露米会社の社長であるブランゲリをしつこくつけ回し、彼らを生まれ故郷に戻すように説得した。彼らは納得させた、ロシアの船を日本でよく見かけていることを。しかし、ロシア人には日本の捕虜としてゴローブニンがいるという生々しい記憶が未だあった。それで、露日関係は、この時期には非常に緊張していた。第一に、問題はフボストフとダビドフに関係していた。彼らは1807年～1808年に、国後とサハリンの日本人の村落を襲撃していた、露米会社の旗の下で。これに関して露米会社の幹部はロシア船に日本沿岸に接近する事を禁じていた。

とにかく、社長は日本人の船乗り達の運命に無関心でいる事は出来なかった。少し熟慮して、彼は帆船「シトカ号」に日本人達を乗せて、オホーツク港へ運ぶ事を決めた。そこから、彼の意見によれば、彼らは祖国へ帰れる大いなる機会に恵まれると。ロシア領アメリカよりは。

彼らの運命が決まってからは、日本人達はノボ・アルハンゲリスクでロシア人の中で生活した、全く自由に。彼らの内の若い者はロシア語の習得に大いなる才能を発揮した。露米会社のオホーツク支社にいるブランゲリが書いていた、サンクトペテルブルグにいる社長に、「彼ら全員は大凡謙虚であり、節制し、よく働き、静かである。彼らは肉は食さない。が、魚と米（1年分は彼らのために「シトカ号」で運んだ）と野菜を要求する。お茶を飲み、軽いタバコを吸う。アメリカにいるロシア人は彼らを非常に気に入っていた」。

1835年4月16日、海軍大尉ミチコフの指揮下の「シトカ号」は日本人を乗せ、オホーツクへ出航した。オホーツク支社では、不意の日本人をどうするか、長い間議論をした。祖国への日本人の帰還は、日本沿岸に接近したにもかかわらず、そこからは容易ではない。ロシア領アメリカよりは、支社の所長は彼らをロシアに送る事を提案した。しかし、露米会社のアジア委員会は他の方法を決めた：委員会は日本人を帆かけボートに乗せて択捉島の日本人部落ウルビトに移送する事を命令した。とにかく、ロシアは自分の隣人に示威しがっていた、友好的関係を。

日本人の帰還に関する差し迫った作戦のために、1835年11月19日付けで、規則が作成され、皇帝によって裁可された。それで指示していた：「1. 日本人を送り届ける船の船長は機敏で、分別があり、全く信頼できる人の中から選ぶ事；2. 移送時には、日本人を出来るだけ優しく待遇する事、必要な全てのものを与える事、着物、靴、その他を。；3. 希望する場所に彼らを上陸させる事。もし何らかの原因で、これをする事が出来ないならば、適当な一番近い島へ。；4. 船の船長は日本の幕府と間の公的な関係を持たない事。が、日本人の帰還に関する話し合いは特別で、彼らが上陸するであろう、村落の長と会う機会があるならば、彼らに感じさせる事が出来る、我々がこの人達の帰還を義務づけている事を。彼らに我々の友好的な好意を示す、もし日本人が我々のキャンペーンを受

け入れ、常に友人として良き隣人として見てくれるならば。全てのそのような話し合いと質問の際には、最大限の注意を払い、我々に対して日本人の疑いを招くような事を全て排除する事」。

択捉島への日本人の移送はボート「ウナラシカ号」で行う事が決められた。陸軍少尉ドミトリー・イワノビッチ・オルロフがそのボートの指揮をとった。この人物は熟練した船長であった、当時、帆船「シヒャビン号」で世界一周を成し遂げていた。露米会社（PAK）で勤務をし、太平洋の様々な場所を訪れていた。オルロフは日本人の上陸を塾考し、詳細にわたって計画を立てた。択捉島は船乗り達を極めて敵意ある態度で出迎えた：ロシアのボートが岸に近づくやいなや、岸から最初の一撃を放ってきた。ウナラシカ号の乗組員は弾丸下で日本人達を祖国の地に上陸させる事に成功した。日本人達にはなんとも冷たい対応の中で。

1842年の日本人の祖国への帰還の例が注目に値する。その後直ぐに、露米会社の社長にエトリンが指名された。9月半ばに、オホーツクから帰っていた帆船「大公コンスタンチン号」がノボ・アルハンゲルスクへ、カムチャッカ地域で難破した船から日本人達を乗せていた。彼らはロシア人に自分たちの名を名乗った：ホチ、チョー、イジロ、チジロ、シェマン、ルクサブロ。1835年にロシア領アメリカにいた日本人と同じように、このグループに手当を支給する事を命令した、1842年9月19日から。その後、彼らの扶養―着物、靴、食事、その他―に会社は2063ルーブルかかった。

日本人達は18ヶ月間、ノボ・アルハンゲルスク（現在、アラスカ南東部でカナダにくい込んでいる箇所 *）で生活した、彼らを帆船「プロミセル号」に乗せて祖国へ送るという決定がなされない間、准尉アレクサンドル・ミハイロビッチ・ガブリロフの指揮下で。最初は、船は運がついていなかった。風は船が函館に向かう事をさせてくれなかった、ロシアにとって最も適している場所である。他の日本の村落に接近すると、岸に群がる住民達の群れに、船乗り達は本当に驚かされた：外国船を見て、彼らは恐怖で四散した。船に乗っていた日本人達は決めた、来客に対してあのようなパニックは彼らには良い兆候ではない、この付近の村に上陸するのを拒否されている。運良く、直ぐに帆船の脇を大きなジャンク（中国の帆船 *）が通り過ぎた、旗で日本人に気がついた。彼らは手を振り、彼らに係留するように頼んできた、この船の持ち主の所では働いていると話ながら。プロミセル号が帆を上げている間に、濃い霧となり、船乗り達はジャンクを見失った。

1843年6月18日、プロミセル号が択捉島のクバイモマイ村（北緯45度4分）に接近した。乗組員は水に欠乏していた。岸にボートを遣わした。が、その時、小さい日本の船が出現した。そのポールには白い毛皮が広げられていた。帆船では、その時、白旗を揚げた。小舟の舳先に座っている日本人、クバイオス・朝太郎という名の村長が現れ、自国民を見て嬉しそうにしていた。彼はアイヌ語の通訳シパンゲルグー島の呼称に関する名字を得た―と一緒にロシア船に乗船した。村長は2回ほど提案を繰り返した、湾に立ち寄るようと、そこでロシア人に水と食料を提供する事を約束して。彼はまたロシア人に提案をした自分の所に常時やって来るようと。しかし、ガブリロフは命令書を持っていた、上陸する事を厳格に禁止するとの。エトリン（上述済み、露米会社社長 *）の1842年5月14日付けの命令書で示されていた「必要も無いのに船でリスクを冒さないように君に忠告する。特に、岸に接近する場合には最大限の注意をする事、搬送での時間をいた

ずらに消費しない事・・・」。日本人と別れて、プロミセル号はノボ・アルハンゲリスクへの航路をとった。

1843年9月26日に、そこへ帰還した。翌年の春（1844年3月24日）に、ガブリロフは3等聖スタニスラフ勲章を受章した、功績により少尉に昇任した。

この出来事について露米会社の本社に通報した時、そこで酷い驚きをおこした。サンクトペテルブルグは1844年4月8日付けの手紙で、日本人との関係について確りとした報告書を出す事、そして日本へ新しい探検隊を準備する事を指示した。若干の重要な問題を解決する事を要求した：帝は誰で、将軍は誰か。彼らは長く権力についているのか、国は平穏なのか。同じく、日本人の着物をよく観察する事を要求した、どのような服装でロシアの代表団は会合しなければならないか。主管庁の主張によれば、4等クラスの武士は2本の刀を帯び、パレード用ズボン（袴？ *）をはき、5等クラスでは1本の刀とズボン、6等クラスでは刀とズボンは許されない。

1844年4月18日、ガブリロフは航行パスポートを得た。プロミスル号で、クリル諸島、ペテロパブロフスク・カムチャッカ、オホーツクへ行き、占守島を経てノボ・アルハンゲリスクへ戻る事になった。1844年4月25日、帆船は航海に出た。船は本部の委託を完遂する事が出来ず、日本の島に立ち寄る事になった。船はクリル諸島で通訳を見つける事が出来なかったのだ。

日出づる国のロシア人による最終的な発見まで、約10年が残された。

デアナ号－函館での5日間

エブゲニイ・ワシリエビッチ・プチャーチンは外交上の職務を輝かしくやりこなした多くはない例の船乗りのうちの一人であった。この人物の全人生は目覚ましい出世の例である。1819年7月30日、海軍貴族学校に士官候補生として入学し、名簿で一番で終了し、1822年3月の少尉への昇進をもって13年間の勤務を始めた。1827年10月、「アゾフ号」で、若いプチャーチンはナバリンでの海戦に参加した。1828年2月22日、中尉に昇進した。1838年6月8日、ツアプセ・エブフィリア地区の占領におけるカフカス人との戦闘においての功績により、プチャーチンは中佐に昇進した。2年も経ずに、彼は中佐に昇進した。ある戦闘で、プチャーチンは足に負傷した。その後、彼は帝国の海軍参謀本部で特別な任務に関する将校として勤めた。1842年8月5日、ペルシャ湾岸におけるトルクメン人の略奪の阻止に関する作戦の成功により、プチャーチンは海軍省の少将に昇進した。1849年4月3日、プチャーチンは皇帝の侍従武官長に任命された。2年後、「勤務における功績に対して」、中将の位を受けた。

一見すると、将校の海軍での昇進は外交と直接的な関係を有していなかった、それにもかかわらず、プチャーチンの性格はこの活動に最適であった。彼は厳格で、原則的であった。仕事がそれを必要とした時、出来た。必要とされた時、人の言いなりにもなり、説得しやすくなった。1853年、フリゲート艦「パラダ号」で、プチャーチンは中国と日本に向かう事になった、外務省からの外交使節団長として。

かつてはロシア海軍の美と誇りであったパラダ号は年を追う毎に極めて損傷の多い船となっていた。東海への遠洋航海を前にして、パラダ号はイギリスのポーツマスで修理に立ち寄った。そこで既にプチャーチンは船を待っていた。親切で古いイギリスを、プチャーチンは殆ど自分の故郷と見なしていた。彼は娘と結婚した、イギリス海軍局の局長の、マリイ・カウリスと。日本と中国への外交使節の開始までに、夫婦には2人の息子が生まれた：ワシリイ、1846年4月1日生まれ、とエブゲニイ、(1852年1月28日)、同じく、娘オリガ(1848年3月8日)とマリヤ(1850年2月19日)。末妹のエリザベータは1853年6月9日生まれ、その時には父は既に航海中であった、古里の海岸から遠く離れ。

ポーツマスのドックでは、パラダ号を船体検査のために陸揚げした。プチャーチンは古くなったフリゲート艦の回りを長い間歩き回った、時と共に黒ずんでしまった船体を観察しながら、貝で覆われた船底を、外板の剥がれとれた銅板を。近海航海以外は、この船はもう役に立たない事がはっきりした。が、自分の見解を元にして、海軍省は船を大使の指揮下に置いた。プチャーチンは期待した、修理は部分的であったにもかかわらず、パラダ号の元の航海性能が戻る事を。1853年初めに、修理が完了した。フリゲート艦には、蒸気淡水装置が設置された。その装置は航海中の船乗りには本当に便利なものであった。1月6日、パラダ号は遠洋航海に向けて碇を上げた。

この殆ど世界一周の航海では、プチャーチンには多くの素晴らしい同伴者達がいた。有名なロシア作家をまず思い出す、彼の秘書であった。日本人との交渉での大きな役割をヨシフ・アントノビッチ・ゴシケビッチが果たした、通訳の資格としてプチャーチンの使節団に参加していた。当時ロシアには日本学者は一人もいなかった。ゴシケビッチの興味は初めから中国との関係にあった。1839年、ペテルブルグ宗教アカデミーを修了した後、宗務院の決定にしたがって、北京におけるロシア宗教使節団に彼を参加させた。1839年12月28日、ゴシケビッチは中国に派遣された、11年後にサンクトペテルブルグに戻った、外務省のアジア局で通訳の仕事に就くために。ゴシケビッチはパラダ号に1852年10月7日に乗り組んだ、その3ヶ月後に、中將としてプチャーチンは外務省に出向いた、彼の外交探検隊に2人の通訳を付けてくれるようお願いを持って。

日本への困難な航海はプチャーチンの心配通りになった、パラダ号の航行性能についての。自分の復命書中に彼は書いていた：「ここでは、長い航海に対する我らの古いフリゲート艦の弱さと頼りなさは、否定できない例で証明された：その跡は甲板全面にわたっていた。その上に、吃水線上部分に結合の緩みが見られた。暑い地域での長い滞在の事を考慮すると、一つの天候から他の天候への移動と荒れた中国と日本の海での航行、船の決定的な脆弱さを助けなければならなかった。ロシアへ帰還しなければならない。私はこの状況について海軍の上層部に報告をしなければならないと予想した。パラダ号に変わってアルハンゲリスクで再び建造中のデアナ号の派遣を陳情する、状況に対しては少数の船員と大砲を持っている、この船は出費の削減を見込んで、それと共に、カムチャッカへ十分な物資と武器—毎年軍の輸送船で送られている—を運ぶ事が出来るように。当時、私は提案をした、可能な場合には、パラダ号を用いる。それから全てのの大砲を取り払って、デアナ号の警護下でクロンシュタットへ戻る」。

パラダ号の水漏れは段々と大きくなっていった。水は至る所から漏れていた。2台の

ポンプがどうにかやりこなしていた。その上、酷い揺れの時、船乗り達は危うくメインマストを失いかけた。しかし、命知らず達は、暴風雨にもかかわらず、滑車を上手い具合に操った。嵐が静まり始めた時、シュラウドを手早く締め直した。これは幸運をもたらし、日本沿岸までたどり着くのに最小の損害で済ます事が出来た。

日本に、プチャーチン指揮下の外交使節団は7ヶ月ほどで到着した。1853年8月9日の夕方、パラダ号は長崎の停泊場に近づいた。既に薄暗かった。停泊場に不案内だったために、朝まで浮遊して待つ事に決めた。朝になり明るくなった。プチャーチンは皇帝の全権委任の旗をマストに掲げるよう命令した。船はゆっくりと停泊場の中に進み始めた。進んでいった。風で船は速くは進まなかった。午後4時に、パラダ号は岸に近づいた。6時に、国歌「神よ、皇帝を守り給え」を演奏し、投錨した。ロシア艦隊の到来の目的に詳しい日本人達が、直ぐに船に乗船してきた。

プチャーチンは自分の報告書に書いていた、「30日間と、その後の2ヶ月間、中国へ出港するまで、長崎の停泊場に留まった。私は奉行や役人と友好関係を維持する事に努めた。役人達を船に招待した。彼らに我らが皇帝の意向に対して信頼をおこさせるようにした。それを十分になす事が出来た。ハニオス（? *）、或いは奉行の後ろの年配の役人は喜びと興味を持って我々の生活風習を観察した、ヨーロッパの国々の仕組み、生活様式、彼らが我々と異なる全てについて通訳を通して聴いていた。通訳達は一度ならずヨーロッパ人と少しでも懇意になりたいという願望を表した。そして、我々の目的の達成の成功を期待していた。自分の期待の裏付けとして、ついでに彼らは一つの素晴らしい事情を持ち出してきた。即ち、レザノフ使節団（1804年に長崎に来航 *）の時、6人の幕閣の内、ただ2人だけが外国人との関係を支持する事を表明し、残りは反対であった。現在では、彼らの言葉によれば、事は全く逆である。即ち、2人だけが外国船に対して日本の門を開けるとする意見に同意しない」。

国境線の設定に関する相談が重要なものとなり始めていた。プチャーチンが書いていた：「1854年1月末、長崎での送別の宴の、船で相互の友情の表明の後に、私は全権代表と別れた、アニバ湾での更なる交渉のために春の再会を彼らに指定して、サハリン島の南端にある」。

この時期、世界には火薬の匂いが漂っていた：クリミア戦争（1853年～56年）が始まった。黒海が主要戦場であったにもかかわらず、プチャーチンは極東も戦争を免れないと予想した。これ故、彼は決断した、交渉の中断を利用して、朝鮮と沿海州の沿岸を調べる事を。それらの辺りにロシアの船が敵から隠れる必要がある場合に役に立つであろう。パラダ号を皇帝湾に残し、プチャーチンはデアナ号に乗り移った。その時点で、船はクロンシュタットからニコラエフスクナムールに移動していた。この船で、ロシア人が、1855年10月9（23）日、アムール河口から函館に初めて到着することが出来ていた。ついでながら、1855年12月6日、皇帝の命令により、プチャーチンに伯爵の称号が与えられた。しかし、これについては彼は後になって知った。

函館港は殆ど全ての風を遮っている湾の中にあつた、山の多い函館半島の斜面に、北海道島と連結した、低い砂地の地峡に。函館の湾岸は砂浜で囲まれていた。天気の良い時には、高さ11441mの駒ヶ岳火山が方向の指標となった、湾は頂上から南に15マイルのところにある。船乗り達は既に知っていた、湾への接近は水深が深く安全な事を。

プチャーチンには元デアナ号の船長であったグローブニン（事件は1811年＊）の概説で湾の事を知っていた。もちろん、その船は昔のものであり、その名前は新しいフリゲート船に再命名されたものであった。それから状況は大いに変わっていた。グローブニンは日本沿岸で狼藉者として監獄に繋がれる事になったが。今は、プチャーチンは大事な来客として自分を感じていた、押しかけではあるが。彼まで情報が届いていた、ロシア人がここへやって来る少し前に、船長がペリー（浦賀来航 1853年7月＊）であるアメリカ船が立ち寄ったとの：地域の住民達の助けを取り付けたがっていた、もし、日本沿岸で遭難したアメリカ人船乗り達に助けが必要ならば。

函館に立ち寄った時、プチャーチンは直ぐにこの地域の奉行に自分の意向を説明した、交渉の継続のために大阪へ行くという。そして要求した、この件について遅れる事無く幕府へ報告するようと。地方奉行に決定権が無い事を知っていたので、彼は最初の日に岸に下船する自分の意向を説明した。役人達は反対し始めた。が、その後、一定の場所に係留するように要請してきた。

町が外国との交易のために開放するつもりである事を知って、プチャーチンは決めた、彼らと親交を深めると共に、回りを注意深く観察する事を。当直を外れている全ての将校達を連れて、プチャーチンは散歩に出かけた。船乗り達は幾つかの寺院、庭園を訪れた。多分、プチャーチンは見つけたがっていた、グローブニンと彼の同伴者達が監禁されていた場所を。何という変わり様か！ 函館を外国人が散歩するなどごく最近まであり得なかったのに。ロシア人の船乗り達は夕方遅くに船に戻った。

次の日、船乗り達は湾の目録作成、山の測量、近郊の観察に従事した。後になり、正確な図面は、港にやって来たロシア船の乗組員に大いに役に立った。号令の元で、大砲の訓練と帆の訓練が行われた。職務から解放された船乗り達は岸に向かった。違反はなかった。

乗組員の中に若い画家であるレマンがいた、函館を沢山スケッチした。彼がスケッチしている時、何度か日本の若者である択捉出身の横山松三郎と出会った。この知己が日本人の人生を変えた。彼はヨーロッパの画法を身につけたがった。後になり、彼は有名な画家となった。よく知られている、大地から高く上昇した気球からさえ絵を描いたことが。

プチャーチンが書いていた、「函館に入る時、私はそこに2、3日以上滞在するとは予想していなかった。しかし、日本の幕府のちんたらした風習が私を予想以上に滞在させた。新しい困難が立ちはだかった、船に受け入れる食料代金の条件である；自国の法に従っている奉行－長崎の奉行はその法に従って我々の船に一度もやって来なかった－は到来する事を許可しなかった。幕府に手紙を出すために、自覚していたにもかかわらず、私、全権代表は彼の所に行くことができなかった、最初は。そのようにして手紙の受け入れを避けた。ようやく決まった、中将ポシエトが奉行に手紙を出す事が」。

1854年10月16（30）日、デアナ号は碇を揚げる予定であった、が強風はこれを阻んだ。將軍は天気待ちをすることにした、手にしている地図が正確であるということに不安があったので。

日本からの逃亡者

夕方遅く、岸の様子が空と一体となり、僅かの弱い火が函館のありかを示していた時、デアナ号に、こっそりとボートが近づいてきた。ボートから日本人が急いで船に登ってきた。彼を直ぐにプチャーチンの所へ連れて行った、彼は船長室にレソフスクとゴシケビッチを呼んだ。身振り手振り混じりの早口で、日本人は話した、自分は正教徒であり、逃亡したいと。自分の報告書に、プチャーチンは書き記していた、日本人を闇に隠れて乗船させたかった、が少し考えた：天候が荒れており、命の危険が大きかった。船に知らない人を残すことは全く他の理由であった可能性がある。第一に、船に日本人がいること、具体的な相談の相手になり得る、幕府と交渉をするにおいて。第二に、日本語の勉強を始める具体的な可能性となる。日本語を少しでも知ろうとしたゴシケビッチの全ての試みは空しいものであった：国はこの件に関して聞く耳を持たなかった。これ故、船の将校とゴシケビッチの短い話し合いの後、プチャーチンは決めた、突然の来客を船に残すことを、彼の従卒に入れて。デアナ号の船長は対応する手段を講じた。ロシア船に3ヶ月の滞在時、日本人は幕府に気がつかれなかった。そして彼はアムールに来てた。

デアナ号は既に帆を揚げていた、奉行の代表達がボートに乗って船にやって来た時には、船に手紙を持参してきていた。それには書かれていた、この地の権力は船の移動を邪魔はしないと。が、ロシア人には許可はしない、日本の他の地で岸に上陸することを。

函館からデアナ号に逃げてきた日本人は、全く謎の人物であった。歴史家には彼を解明する必要がある。デアナ号の乗組員と一緒にロシアへ去った日本人一人だけが今のところ知られている。この人物は橋耕斎（1820年～1885年 後年 増田甲斎と名乗る）、遠江（トウトウミ 現在の静岡県の西部）国の掛川藩の武士。1850年代中頃、彼は仏教徒（日蓮宗の）であり、伊豆半島に住んでいた。中村教授（? *）は断言している、ロシア人達はこの人物と下田か戸田で知り合いになったと。正確に語れない。人並み外れた勇気を持っており、戸田からデアナ号の船員達の退去時、彼は227人のロシア人達と一緒にドイツの商船「グレタ号」に乗り、日本を去った。函館からの日本人がこれであったのか、それとも別々であったのか、なんとも言えない。

しかしながら、1858年1月21日の教会の戸籍簿中に、記述があった：「・・・サントペテルブルグ宗務局の指示に従って、個人の請願の結果、外務省アジア局に勤めている十四等文官増田久米才門を異教の仏教から洗礼をした。彼をウラジーミルと命名した。彼の希望に添って苗字はヤマトフ、38才、司祭ニコライ・サダリスクによって。この秘祭において洗礼親となった：六等文官ヨシフ・アントノビッチ・ゴシケビッチと皇帝の宮廷女官プラスコビア・イワノブナ・メトリャエバ、旧姓はサルテコバ伯爵夫人」。

19世紀半ばにおけるロシアでの出来事は例外的であった。首都の新聞が書いていた：「1月21日、ワシリエフスク島の聖母受胎告知教会で、日本人の洗礼を行った、日本語辞書の出版におけるゴシケビッチの著名な同僚である・・・。この生まれながらの日本人はおそらく唯一の存在であった、ある意味において、全ロシアにおいて。祖国で彼は僧侶であった、大使であるプチャーチン伯爵に日本語の教師として合流した、ロシアへ行くことに同意した、ロシア人と一緒にイギリスの捕虜にもなった。後になって、彼らは世界を一周してペテルブルグに帰還した。日本人は我が国籍を取り、ロシア語が話せるようにまじめに勉強した。彼は自国語を良く知っている、中国語をてきばきと書く、母国の文学を

知っており、好奇心も高い。今、日本と我々の関係が出来上がってきている時、大学に日本語学部を設立することは有効であった。

露日辞典の作成においてゴシケビッチの援助の他に、ウラジミル・ヤマトフは通訳の仕事に従事し、1866年のペテルブルグにおける小出大和守を首班とする、日本の代表団との交渉に参加した、「サハリンの共同所有」について。日本人の実習生の授業はヤマトフを引きつけた。1870年、彼はペテルブルグ大学で日本語に関して講義をし、授業を行った、が、1874年に授業は中止された：日本人は退職し、祖国への帰還の要請書を書いた。勤勉な勤務に対して、彼に大金を報いてやった、日本への路賃を支払った。七等文官の地位を持って、ヤマトフはロシアを去った。翌年、橘は東京で一人暮らしをした。彼は再び仏教徒となり、増田甲斎の名で、芝の増上寺に購入した小さな家に住んだ。彼は1885年5月に亡くなった、65歳であった。ヤマトフが日本の戸田から逃げ出したと予想すれば、函館でデアナ号に乗り込んだという、日本人の運命はどのようなものであったろうか？

1857年、プチャーチンを中国に出張させた、臨時大使と全権大臣の肩書きを持って、1857年12月24日から、東洋艦隊司令官の指名のオペラトル（？ ＊）委員の肩書きを得た。

ムラビエフ・アムールスキイ伯爵

「諸君、今日わ！ 我々は無駄に苦勞はしていなかった：アムールはロシアの所有物となった。アレクサンドル皇帝万歳、手に入れた国土は再び皇帝の庇護の元で繁栄する！万歳！」、東シベリア総督ニコライ・ニコラエビッチ・ムラビエフの声は興奮で少し震えていた。1858年4月18日、彼がウスチ・ゼイスク哨所で軍に命令を読み上げている時に。2日前に、愛琿条約が締結された、広大な極東の地をロシアへ帰属させて平和を築く。

ムラビエフは1809年8月11日に生まれた、サンクトペテルブルグで。彼の出世は輝かしい。下級侍従として、ニコライ・パブロビッチ皇帝のモスクワでの戴冠式に参列した。1827年7月25日、若いムラビエフは勤務に就いた、親衛隊の准尉として、フィンランドスキ連隊の。トルコ戦争への参加に対して、それなりの中尉の位を手にした、聖アンナ3等勲章を授与された、1831年のポーランド蜂起の鎮圧に参加したことで、ムラビエフはポーランドの4等勲章「軍務に対して」を受賞した。その後、リボン付きの聖ウラジミル4等勲章を受章、おまけに記銘「勇気に対して」のついた金剣。将校の軍務ではほぼ毎年勲章を授与された。1841年6月4日、カフカスでの貢献により、ムラビエフは少将に昇任した。1844年、彼は聖スタニスラフ4等勲章を受けた、皇帝の証書付きで「功績、勇気、賢明な管理能力に対して、カフカス人に対抗して示した」。1846年7月16日、若い将軍はツーラ軍知事とツーラ市民軍知事に任命された。

そして、ようやく、ムラビエフにとって輝かしい時が到来した、1847年9月5日。彼は東シベリア総督に任命された。この職務を彼は1848年3月14日に始めた。言う

ならば、この任命は偶然であった。ドミトリイ・ザバリシンが事実を明らかにした、ニコライ・ニコライビッチ・ムラビエフをムラビエフ・カルスキイと混同したことを。それにもかかわらず、東シベリア総督の職務でのムラビエフの活動は示した、この選抜はまれに見る成功であったことを。将来のアムールスキイ伯爵の冒険心あふれた性格は、極東におけるロシア帝国の状況を確認とすることに非常に有意義であった。ムラビエフは執務室に座り続けている指導者ではなかった。1849年、総督となって初めてカムチャッカへ旅行をした。

クリミア戦争と1854年～55年におけるペトロパブロフスクーカムチャッカの防衛は彼の意見を確かなものとした、ロシアの極東境界は結構脆く、アムールとその近傍地域を確りと整備する必要があるとの。幸運にも、この時期に、ロシア人はアムール河口を確保することに成功していた、そこには新しい哨所ニコラエフスクが出現していた。ムラビエフはアムールを4回にわたって探検した：1854年、1855年、1857年、1858年、ロシアにとってこの川の大きな価値を確信した。東シベリア総督は成功を確定することに務めた、中国と新しい協定を締結するために努力もすることにも。これと同時に、ムラビエフは日本ともサハリンの境界について協定を結ぶことを希望した。

まだ、ロシアの注意は愛琿条約の締結に関して向いていなかった。これについての情報を、1858年の第175号「サンクトペテルブルグ広報」が掲載した。新聞の特派員が書いていた、「そちらに情報を早く知らせようとしている、嬉しい出来事が我々の町を興奮させた、それは東シベリアの至る所で喜ばれている。アムールからの急使が、我々のウスチーゼムスク哨所からの、ペテルブルグへの通行中に、ここに情報を持ってきた、東シベリア総督ムラビエフが中国の全権代表と、ロシアと中国の国境確定に関する契約を締結することが出来たと。イルクーツクでは、この最初の情報で、ここの地の商人の一人が銀貨500ルーブルを提供した、総督の指揮下に。翌日には他の商人が自腹で、ここの守備隊をごちそうで接待した；寄付金でもって現されたそのような喜びの表現は、多分、全ての方面から浴びせられた、批准の後での協定についての公式の声明の時に。というのは、ただ私は気づくことが出来た、この出来事についての情報はここでは本当の喜びとして受け入れられたので、特に商業階層には。他の方法ではできなかった：争う余地のない、アムールを確固として所有する協定によって、東シベリアにとって唯一の商業の道、事実はこの国にとって非常に大事である。アムールを所有するという考えは、その利用において、東シベリアにおけるだいぶ昔からの希望と意向であった。ムラビエフ総督はこの仕事を始め、そして最後まで成し遂げることが出来た；彼の名前は切り離すことが出来ないであろう、アムール獲得についての記憶の歴史に関して。産業や商業のための有益な結果の記憶についても。東シベリアのように、思うことが出来る、全ロシアさえ、必ず、ほんの僅かの時間、この歴史的出来事から生まれている」。

その年の8月26日、全ロシア皇帝アレクサンドル・ニコラエビッチは命令を出した、ムラビエフの個人的功績を総括する：「ニコライ・ニコラエビッチ伯爵！ 熱意あり有益な君の勤務は立派である、一度ならずの記念すべき軍事面での貢献、住民管理の場における素晴らしい功績、私の死んだ両親の****に注意を向けた：。君の功績を正當に評価して、帝国の遠方の広大な地域の管理を、神は君に委任した。君は完全に信頼に応えた、11年にも渡る疲れを知らない仕事で、君の東シベリアの管理を委任することによって利

用と整備における。そのような君の貢献に報いること、私は法令で君を昇任させた、***。君の名前のアムールスキーに結びついた、その地方での記憶で、特に、この年はそれに関係していた、君の真の仕事と不断における心遣いは。」

伯爵の位へのムラビエフの昇任と同時に、同じ指令で、彼は歩兵大將の位を授与された。1858年の歴史的出来事として、もう一つの指令に署名した。その後、地図にプリモリエ（沿海州 *）が現れた。

ニコライビッチ・ニコラエビッチ・ムラビエフアムールスキイ伯爵は日本との密接な外交関係の設立の主要な熱狂者の内の一人であった、函館にロシア外交代表機関の開設。幾つかの原因が存在していた、この典型的な僻地の町がなぜ選ばれたかの、むしろ村を思わせる。まず第一に、函館はアムールやサハリンに近接していた。ロシアにとって極めて重要な地域。同じく、言わずもがなである、不凍港である函館はロシアの船にとって素晴らしい基地となった。1857年12月21日、市民諸官庁に関する皇帝の指示により、顧問官ゴシケビッチを日本におけるロシア帝国領事に指名した、函館を訪問することと共に。領事館の開設についてのロシアの行動を、イギリス人は注目していた。

ロシア領事館の開設

日本の最初のロシア領事ヨシフ・アントノビッチ・ゴシケビッチに、ロシア帝国の名で日本における全ての仕事を委ねた：日本についての情報を集めること、ロシア国民の利益を保護すること、2国間の相互関係に関するその他の職務を遂行すること。ゴシケビッチに委ねられた重要な案件の一つが、日本とロシアの間の国境線の確定の仕事であった。この際、強調されていた、ロシアは内政不干渉の原則を厳しく守るつもりであることを。

この時までには、既にゴシケビッチは自分の「日露辞典」を出版していた。前文に彼が書いていた、「ここで提供する辞典の作成は私によって始まった、ヨーロッパの東洋学者達の最近の全ての労作について私が何も知っていなかった時に。日本を訪れる機会を得て、私はそれを利用することに決めた、現在まで殆ど知られていない言語に馴染むために。しかし、最初の成功は極めてゆっくりとやって来た：長崎の日本人の通訳は情報を伝えることに明らかな反感を示した」。函館での日本人との出会いだけが、その後のデアナ号の難破と地域住民との親しい交流がゴシケビッチに日本語をより親密とさせてくれた。日本人が彼にくれた、5つの辞書は非常に有効であった。東洋学者は、それらの内の一つを自分の労作のための基礎とした。

15人からなる領事グループは、1858年7月にアムールに到着した。ゴシケビッチ以外に、グループには領事の秘書で十等官のオバンデル、七等文官の医師アリブレフト、修道司祭フィラレト、海洋部における領事の補佐ナジモフ、その他。ゴシケビッチは遠路に妻と子供を伴っていた。エリザベータ・ステファノブナ・ゴシケビッチは非常に教養のある女性であった。彼女は喜んで日本へ夫と一緒に出かけることに同意した。この不思議な国について情報を集めるつもりであった。

領事の仕事で本当に役に立った者はナジモフであった。彼は1829年6月27日、海

軍将校の家に生まれた。7歳の時には既にアレクサンドロフスク貴族学校の中隊に登録されていた。1840年1月30日、海軍貴族学校へ移った。5年後、彼は海軍士官候補生となった。1847年、海軍少尉の肩章を帯びた。海軍の実習を、ナジモフはバルチック艦隊の船で行った。1852年3月30日、彼を海軍大尉に任官させた。最初の極東へは輸送船ドビナ号で行くことになった、クロンシュタットからペテロパブロフスクーカムチャトスキイへ世界一周の航海をして。バルチックへシベリアを經由して帰還し、ナジモフは船レフォルト号の当直将校を勤めた、それに乗ってクリミア戦争に参加した。クロンシュタットを防衛しながら。その後、バルチック海と地中海を航行した。

1858年2月17日、ナジモフは函館領事館における将校に任命された。5日後、海軍省の監督局は彼に指示を与えた：「函館のロシア領事館付けである海軍大尉ナジモフへ。貴君を我々の函館領事館付けに任命する場合に、皇帝の意志により、貴君を海軍大将に書類で任命する：1. 領事の指示下にいること、彼の命令を遂行すること。2. 日本語の勉強に精を出すこと。一つにおいて、天文学、航海術、造船学と船の機構について友好的な情報を日本人に伝えること、2つ目には、日本についての情報を収集し海軍省に送ること。それは海洋官庁に特に有効である、日本に向かった我々の商船によって収集し通報してくれるものと同じように。情報は彼らにとって本当に有効である、海洋関係において。3. 貴君の仕事について、海軍省へ毎年報告をすること。

大事な役割が領事館の熟練した医者であるミハイル・ペトロビッチ・アリブレフトに割り当てられた、エストランダ出身の36歳に。デルプトスク大学医学部を1848年に終了した後、ロシア船での船医の職務について、上手い具合に船に乗ることに成功した。水兵の中で、彼は有能な植物学者で収集家でもあった。といっても、ゴシケビッチ自身がすぐれた収集家であった。アリブレフトは日本に妻を同行した、彼女は日常の観察が趣味であった。

領事館の秘書であるオバンデルは何の取り柄もなかった、が、彼は長く函館には留まらなかった。ロシア帝国の領事館の書記で九等文官であるイワン・ワシリエビッチ・マホフは大きな痕跡を残した。我々はこれについて確認する必要がある。彼は既に函館で書いていた：「日記を付けて、全てを書き留めること。1858年にペテルブルグを去る時に私に語った。日本の税関での出来事は新規であり、興味を引いた・・・書き留める、毎日書き留める、私の日記にたわいもないことを。1頁を、半ページを、4頁を占める、沢山の興味を引くこと、沢山の暴露的なこと、面白いこと、ドラマチックなこと、言葉を変えればありとあらゆる事を日記でおおっぴらに語ること、起こったことを印刷した形で、或いは、この天候について、我々を苦しめている、或いは日本人、この哀れな人民、極寒にいる、について」。残念ながら、マホフについては余り知られていない、が、日本の生活についての彼の観察メモがある。それについては彼は最初は懐疑的であった、極めて文才があった。

函館に最初に教会を建設した司祭フィラレトについて、同じように多くの情報は無い。ただ知られている、アムール地区の管長は無欲で目的意識を持った人間であったことが。領事館の館員に同じように、クロンシュタットの海軍実習乗組員の見習い船員が採用されていた、アレクサンドル・マレンダ、フェドル・カルリオニン、アレクサンドル・ユガノフ、ジノニイ・ドラチェフとフェドル・レシエトニコフが。彼らには出来るだけ早く日本語を

習得することが委ねられた、通訳となるために。

ロシアの極東の沿岸から、日本までは近いにもかかわらず、函館までたどり着くのはそう簡単なことではなかった。ロシア船にはよくあったにもかかわらず、個人的な心配事が全ての船長を悩ませていた：秋が近づくと、良い場所を見つける必要があった、冬をやり過ごすための。蒸気船アメリカ号一船には領事館の職員が乗っていた一船長が述べた、船には燃料がなく、ニコラエフスク・ナ・アムール（アムール川河口、サハリンの北端の西側に対面 *）に戻らなければならないと。その時、露米会社の船ナヒモフ号が偶々居合わせた。この船はロシア領アメリカに出発しなければならなかった。船の船長ベンゼマンと露米会社の代表エリフスベルグは航海の途中で函館に立ち寄り、最初のロシア外交団を上陸させることに同意した。ちょうどその時、クリッパー艦ジギト号がやって来た。この船はロシア領事の指揮下におかれた。結局、移動の準備は終了し、2隻の船は聖ウラジミール湾を出航し、北海道への航路をとった。

1858年10月24日（旧暦の）の正午、或いは安政5年9月30日（日本の旧暦の）、ナヒモフ号は日本の港の停留場に碇を下ろした。最初の常任のロシア外交使節団が函館に到着した。基本的な町の建物は湾の山の多い海岸に沿って延びていた、3段の段丘上に。が、函館には大きな家は全くなかった。町と湾は石造りの八角形の砦（五角形の五稜郭は1866年に築城 *）で守られていた、半島の北西の岬に造られている。それ以外に、町の側面には深い堀が施されていた、水で満たされた、堀は両側で湾に繋がっていた。日本人が思っていた、そのような方法で、彼らは港への侵入を防ぐことが出来ると。

函館には約6000人の住民が住んでいた。家族の多くは交易に従事していた。殆どの家には、店と倉庫があった。輸出の基本の品物は昆布、乾し魚、他の海産物（イクラやアワビ）であった。量は少ないが、同じようにタバコ、現地茶の半製品、朝鮮人参、松ヤニと鹿の角袋、他に建築用木材も輸出していた。ごく最近では、この商売は松前を経由して行っていた。外国との交易のために函館の開港以来、全ての魚と海産物はここへ運ばれ、その後、イギリスの船に乗せて中国に運ばれた、日本の基本的な貿易相手である。

搬入はそれほど多くはない：絹織物、日本の手工芸品、食料。函館に、3軒だけの商店があった、外国人との交易の権利を与えられている。協定にもかかわらず、地域の奉行は外国人には反抗的であった。「平民は、外国人との関係と彼らの応接から得られる利益の存在の結果、我々に抱かない、日本の役人達の持っている大きな偏見を；反対に、何時も我々を気持ちよく、笑顔で迎えてくれた。町の散歩や、日本の宿では、何時も我々を歓待してくれた。しかし、日本の政治の影響下にある役人階層は我々に良い感情を示さなかった、我々を招かざる客として白い目で見ていた。その存在によって聖なる日本の地を冒瀆するものとして。」

厳しい気候と、農業に従事するのに適した土地の不足が、函館を人口が比較的少ない場所とした。自然の我が儘にもかかわらず、ここで皆は米、小麦、蕎麦、キビ、トウモロコシ、豆、野菜を育てた。が、それらはそれほど量は多くはない。多くは日本の他の地から搬送してきている。海峡は冬に凍結しないにもかかわらず、11月から3月末まで、本州と北海道の間の船の航行は停止された：航海を強く冷たい風が妨げた。

最初の出会い・・・

ロシア船に最初に日本人が乗ってきた。彼は英語の証明書を提示した、案内の権利を持っているという。少し遅れてゴシケビッチは日本人の水先案内人に同じ内容のロシア語の書類を渡した。案内に対して5メキシコドルを支払う必要があった。

甲板に、水先案内人と一緒に奉行の代理、役人、税関使、通訳達が上がってきた。彼らは直ぐにヨシフ・アントノビッチ（・ゴシケビッチ ＊）に気づき、好意ある交渉を始めた、英語で。日本の隣人達はちかじかにロシア語を身につけることを約束した。

ゴシケビッチはその日に、奉行の所で彼に公式会見をすることを願い出た。日本人は避けた、が、ロシアの領事は、彼の依頼が日本の長に遅れることなく伝えられるよう要求した。返答は直ぐに来た：奉行はロシア人に彼の所に来るように願い出た。全員がパレード用の制服を着て、急いで集合した。ボートが船を離れた時、ジギト号で7発の祝砲が放たれた。

ロシア人達が岸に降り立つと、函館の住民達が彼らを取り巻いた。ロシア人が奉行所に行けるようにするために、2人の将校が野次馬をどける事ともなった。奉行所の入り口で、ロシア人に警告があった、日本では、部屋に入る時には、靴を脱がなければならないと。これについては彼らは既に知っていた、準備は出来ていた。早めに付けていたオーバーシューズを脱いでいた、靴を履いたまま将校達は内部に進んだ。もちろん日本人は予想することが出来なかった、将校の靴が礼服の不可分の部分であることを。

広いホールは少し暗かった。ナジモフが書いていた：「ホールの壁に沿って、左右に洋式の椅子が置かれていた、オランダから運ばれた。椅子の前には長くて低い机があった、ラシャ布で覆われた。右の方へ進むように指示された：一番の場所は領事が占めた、彼の後ろに、この儀礼に参加した者達が」。

客達はそのように座った、脇のドアから日本人達が見ていた。前方に、役人と一緒に副奉行がやって来た、彼らの後ろに他の者達。奉行の前に、サーベルを持った将校が座った、その先端を下に向けて。他の側には、日本人達が占めた、長い棒を持った、球を頂に抱いた。奉行の少し後ろを書記が占めた、彼の手元には紙、筆、墨が。彼は両方の言葉を書き留めた。ロシア人は直ぐに彼を「スパイ」と命名した。残りの全ての奉行所の役人達はロシアの代表団に対抗して左側に座った。彼らの間に、通訳が座っていた。少しして、ゴシケビッチが話し始めた、奉行の健康を伺った。通訳は時間をかけて話した、書記が書留が出来ると。

奉行の質問は、ロシア人が思った通り、目新しいものではなかった。例えば、彼は質問した、ペトロパブロフスク・ナ・カムチャッカにいかほどの家があるのかと。ゴシケビッチは正確な数を知らなかった。質問に答えないでいたかった、が、日本人は固執した、具体的な情報を得たがっていた。でまかせに答えることとなった。

会食となった、ロシア人に個別の盆が出された、それには、砂糖の入っていないお茶、2つの料理—梨と煮たボタンのような蟹、日本のパイプ、タバコ、小さい火鉢、灰皿と酒の入った杯。その後、奉行がタバコを吸った、日本人はタバコを吸うようにロシア人に勧めた、同じように日本の料理を食するように勧めた。彼らには蟹は特に不興であった、彼

らにはまずい味であった。梨とブドウだけがイヤでは無い感覚から救ってくれた。

日本人は大砲の発射の目的について質問してきた、ロシア代表团の上陸に伴った。彼に答えた、ロシア領事は重要な政府の顔であり、それなりの場合に祝うことになっているだけでなく、答えとして相応の射撃数を得ることにも。日本の領事がロシアを訪れた時、同じような手順となるであろう。日本人はこれに少し驚いた、今後そのような射撃を自制するように願い出た。

奉行は客人に町と係留場の規則について話した、ロシア人に上陸しないよう願い出た。彼は引き合いに出した、この習慣は外国人に日本が開かれるまで厳しく守られると。これにロシア人は確りと返答した、彼らは、長崎でなされているように、岸に上がるであろう事を。

・・・そして居住

ロシア領事館への場所の提供が大問題となった。奉行は2人の将校に、実行寺（当時、函館にあった寺）に前もって準備した家屋を見せるように指示した。残念ながら、それは人数でも、生活条件でも全く適していなかった。とにかく一部屋であったので。ゴシケビッチの異議申し立てに、日本人は考え直すことを約束した。が、既にロシア人には分かっていたことであるが、彼らは事を急がないという事を。それまで、ロシア外交団が生活していたナヒモフ号は、もう待機していることは出来なかった、領事館員達には何もすることはなかった。移動する以外。箱館奉行の業務誌に従って、「実業寺に一時的に留まらせる：領事、彼の妻、母（本当？ *）、書記、海軍将校、医者、司祭、医者の妻、4人の下男と2人の女中」。この不足は直ぐに明らかとなった。お寺は非常に喧しかった：刈り入れの最終では、仕事に多くの人が参加し、太鼓の大きな音も伴った。領事館の職員達をイライラさせた、信者達が祈りを捧げるだけではなく、ロシア人を珍しそうに眺めていることが。

領事と医者は妻を伴って2つの個室を占めた。書記とナジモフはジギト号に残った、非常に不便であったが。ゴシケビッチはナジモフに再び奉行に会談を要請するように提案した、直ぐにそれは実現した。ナジモフが驚いた、手順、食事、在席人員は全く同じであったことに。最初の公式訪問時と同じであった。

通常の挨拶の後、日本人はロシア人将校に問いかけてきた、彼らは興味を持っていた、サンクトペテルブルグと函館の間の距離に、陸と海での。このために、彼らは大きな地図を床に広げた。同じように、日本人はアムールに沿っての船の航海の条件について質問した。

これらの質問の後、奉行はナジモフのために部屋を割り当てることを命じた。部屋は広隆寺にあり、最初は外国人との交易のための商店として予定されていた。ナジモフが書いていた：「とにかく、各寺院には数十人の僧侶達がいる。彼らの部屋のために、特別な構造が寺に隣接している、寺と結びつける回廊或いは廊下、それらがヨーロッパ人のための住居となっている。これが、寺に住むということである。そのような表現は極めて公正で

ある、というのは、両側から僧侶に囲まれ、3つ目の寺院からは、我々は一日中彼らの読経を聞く羽目になる、鐘や太鼓の音も。岸に住みつき、再び連れて行かれた部屋で、或いは納屋と言った方が良くも、そこは壁は透けており、ネズミが我が物顔で振る舞っている。家のように、隙間風が音を出している、やむなく不快な部屋の改造に取りかかる。石炭を手に入れることが出来る、オーバーをかぶって座った。日本人の大工が現れ、かけずり回り、とんとん音を出し始めた。何をしなければならないか、指摘して。暖まりに、日本人の生活風習を見よ。通りに出てみよ」。

ついでながら、函館だけではない、長崎でも最初のロシア人は寺院で生活することになった。部分的にこれは悪くはなかった：彼らは日本人の生活に馴染むことが出来ただけではなく、内側から未知の国の宗教生活を理解することも出来た。そこには、多くのとにかくエキゾチックで理解できないものが沢山あった。ナジモフは回想していた：

「寺院は外見では建築様式において独特のものを持っている。その建物の周りは極めて広大である。外見の特徴は屋根にある。高くて曲がっている屋根、極めて見事に瓦で覆われた、竜の像で角を飾り立てて、コニカ（？ ＊）に沿って彫り物のある角材が配置されている。真ん中に球を、端に竜を持った。竜は寺院の飾りには重要な役割を担っている。

この巨大な屋根は幾つかの列になった柱で支えられている。夏には寺院の正面は完全に開放される。その内部は特別な素晴らしさを得る：透かし彫りの飾りを持った柱の列を最初に見ることになる；徹底して綺麗に保たれている床、稲藁で出来たゴザで敷き詰められた、無意識に注意が向く；遠く後ろの方に、王座と供物台、完全に似ている、ふんだんに飾られたカトリックの王座に、花と燭台で飾られた；王座の後ろには、頭の周りに光を持った仏像画。各寺院は自分なりの仏像画を持っている；私が記録に残そうとした寺院は女性の像を持っていた、立ち上がり、等身大で、頭の周りに後光を持った。

伝説によると、自分の偉業で神格化を勝ち取った聖人や人物、伝説によると奇跡をなす神は、そのように光背を持って描写される。

宗教書の保管のための箱が、同じように寺院の内部の装飾によってなされる。この箱は、黒色、漆塗り、銀か金で仕上げられ、常時、自分の場所に鎮座している。主扉から、柱の後ろに、右と左に、王座に向かった線上に、箱の間に空間が残されている。そこには、真ん中に高価な机と椅子がある、寺院の主管のためのそのような箱が置かれている。

勤行の時には、僧侶は高価で色彩豊かな法衣を着て、季節に合わせ、冬には錦の、夏にはクレープの、中央に陣取る、先に述べたように；彼に短い棒にくくりつけられた白い馬のしっぽを差し出す。それにより彼は不断に自分から悪霊を追い出す；悪魔の頭部と釜の辺りに一人の僧侶が座っている、手に何かの指導書を持って；他の僧侶達は床に置かれた自分の箱の所で中央に向かって座っている。

そのような勤行は毎日朝と夕方に行われている、他の沢山の勤め、行事、儀式に依存することなく。民衆はこの時祈りを捧げる、跪き、手に数珠を持って。勤行時は女性が寺院をほぼ占める、男性は希である、武士は全く。

全ての金銭手段は、寺の長の采配下にある；寺の長は寺の美観に、僧侶達の衣食住に気を配っている。そして、残りの金銭は自分で遣う」。ナジモフはついていなかった：彼と出会った寺の司祭の振る舞いはそれほどのことはなかった、と彼はメモに書き留めていた。

プラスツン号の越冬、1858年と1859年

函館での越冬にやって来た最初のロシア船は、スクリュー船「プラスツン号」であった。それを指揮していたのは38歳のウラジミール・イリッチ・マツケビッチ海軍大尉であった、非常に熟練した将校であった。露米会社で10年間勤務した。船アトハ号とシェリホフ号で航海していた。一度ならず、世界一周航海を成し遂げた。1857年6月28日、マツケビッチをプラスツン号の船長に任命した。第一アムール艦隊のメンバーであるその船に乗って、彼はニコラエフスク・ナ・アムールにやって来た。

14ヶ月間の航海で、船員の健康状態は最悪となっていた：毎日、壊血病の兆候が新規乗組員の中に見つけられ続けた。船長が書いていた、「聖ウラジミール湾に1週間停船して、私は考え始めた、船員の健康保持のために函館湾へ向けて出港することを。冬期における暖かい服や確りした部屋のない船員が病気にかかり始めている」。

船乗り達は函館での休息を当てにした。実際において、この港について矛盾する情報が彼らの所まで伝わってきていた。ある話では、ここでは開放されている停留場は停泊には適していないと。他の話では愚痴をこぼしていた、生食品は殆ど輸入物であり、特に肉を入手するのは困難であると。日本人との交際において問題が生じている。プラスツン号の乗組員は悲観的な話には耳を貸さないように努めた。彼らは知っていた、函館にはロシア領事館が開設されたことを。その援助を見込んだ。よく知られていた、領事館には病室があり、病人の船員が少なくはないことを。が、長い冬の晩を、将校集会室で過ごすことが出来る、と船員達は考えた。

1858年11月16日の夜、プラスツン号は函館の停留場に到着した。静かな順風の元で、海峡の入り口にあるイシマ島とコシマ島に接近した。それらの島の後ろに、船乗り達は明るい火を見た。灯台と彼らは認識した。実のところは、彼らは火山の噴火を見たのであった、松前の町から余り離れていないところにある。強い海の流れはエンジンを始動させることを強いた、船は海峡に入ってしまった。そこで船は小舟に取り囲まれた。軍旗を付け12人のこぎ手の乗った小舟の内の一艘が船に近づいてきた。船に乗船し、ロシア人の船乗り都合図を示した、彼らが港への接岸を手伝うとの。船長マツケビッチと将校達は嫌みを持って日本人の水先案内の助言を受け入れることにした。というのは、デアナ号(1854年に下田で遭難*)の将校が作成した既に函館の地図を持っていたので。彼らは湾への入港のための指導書を書いてきた：北に向かい、深さ7サージェンまで進み、この深さを維持し、東と北東へ進む。暗礁を通り過ぎ、5サージェントにある樽を通り過ぎる。函館湾にある入り口の幅は4マイル、が、深さでは湾は5マイル突き出ている。

船乗り達は興味津々に岸を眺めた、ふかふかした白い毛布で覆われている。杉の小さな森だけが緑がかっていた、町より高い山の上にある。山の頂上に近いほど植物は希となっていた。函館での最初の週はただ過ぎた。領事ゴシケビッチの助けを持って、マツケビッチは岸に18人用の家屋を見つけた。暖かい気候、生の食事、新しい印象は、船員達の士気を高めた。医療検査で29人の病人が見つかった、壊血病が基本的に彼らを悩ませていた。

ロシアの船乗り達は砲撃演習を皮肉を持って受け入れた、箱館奉行が演習に彼らを招待したのである。彼らが見下している日本兵がロシア兵を撃滅するのに50年は経たないのだが。船乗り達は自信を持って自分たちの軍事的優勢を感じた一方、日本人達は全く友好的にロシア船を見ていた。停留場に止まっている、マストを下ろして。

1858年から1859年の冬、プラスツン号は停留場に静かに浮かんでいた。この時期に、3度の小さい地震があった、船では殆ど気づかなかったが。岸との連絡において少し問題が生じた。岸には幾つかの石の埠頭があった、しかし、干潮のためにそこへボートで行くことは難しかった。結構なことに、日本人が食料の配送の世話をかって出してくれた。船員のための一時的な小病院と風呂を岸に造った、カミダ河口（？ *）に。町から2ベルストの所を流れている。そこへはボートで行くことが出来た、満潮の時でも、ボートが浅瀬に乗り上げそうであった。最初はこの川から淡水を取り込んだ。しかし、その後、日本の税関を通して注文するようになった。税関は大きな木の樽で水を運んでくれた。

野菜、青物、魚は非常に安い価格で提供された。が、乗組員用の肉は全く見かけなかった。時折、鹿肉を提供した、それに船員達は慣れた、ケーキのように。安いタバコはなくはなかった。が、バターは全くなかった。将校達は注目した、日本人の商人達が、外国人との交流の経験が無い、安売りすることを不安になっていることに。そこから、でまかせに高い値段をふっかけている。将校会議室のキッチンのために、鶏、野鳥、熊肉、蟹、上級の魚を購入した。それらは申し分なかった。特に船員達は2つを気に入った：一つはマスに似ている、もう一つは、1サージェントの長さで、茶色で、味は肉に似ていた。糧食の大半は非常に高値で上海から注文することになった：お茶、砂糖、葡萄酒、バター、布地と皮。日本人はただ絹だけを提供した、素晴らしい品質であったが。

日本人との関係は非常に友好的であった、文化の違いを感じながらも。海軍中将コルニロフの又甥である海軍大尉アレクセイ・コルニロフが書いていた、「本当のことを日本人は外国人に決して話さない、一人は確信を持って嘘を言う、もう一人は嘘をつく癖から、もう一人は何かを漏らすことの恐れから」。ロシア人の船乗り達は観察眼に優れている。我々は既に納得することが出来た、函館についてのナジモフの観察は非常に内容に富んでいると。コルニロフの情報は多くの興味をもたらした。海軍貴族学校を1851年に終了し、彼は黒海で勤務した。1853年に蒸気船「オデッサ号」に乗り、シノプスク海戦に参加した。1854年-1855年、若い将校はセバストポリ防衛戦で殊勲を揚げた。4カ所に負傷をしたにもかかわらず、病院に行くこともなく、町の防衛隊に残留した。1857年8月12日、27歳の海軍大尉はジギト号に移乗した。第一アムール艦隊のメンバーとして極東に去った。そこで、約2年間、函館のロシア領事を務めた。

若い将校は自分のスケッチを、ナジモフと同じように、定期的に「モスクワ選集」に送った。ある論文で、特に、彼は日本の管理システムと日本の平民の生活への官僚の影響について記述した。「彼らは全てお互いに手を拘束し合って、一人では何も指示することができない。奉行の行動は彼の部下をしぼしば麻痺させる。逆に、彼らは一緒になって何もすることが出来ない、江戸からの許可無しには。それ以外に、些細な全ての役人までスパイの役目を負っており、彼ら無しでは、大事でないことさえどんなこともなすことが出来ない、外国人との個人的な交流さえ。我々は気に入った、例えば、通訳の内の一人を。我々は彼を客として一度ならず自分の所に招待した。彼はやって来なかった、ようやく、3

人でやって来た、秘書であると紹介して。奉行の役人無しでは、彼を行かせなかった。もちろん、役人とスパイを連れてきた。彼らは立派な食事にはありつけた。上司は何も知ることはなかった、何について我々が通訳としゃべっていたかを。彼は役人に通訳するにもかかわらず。が、明らかであった、彼は役人と我々をだました。彼の返答や注釈を通訳しながら。何をするのか？ 親しくすること、随員と一緒に客として受け入れることを拒否しなければならなかった。最初はこれら全ての混乱は、我々との関係において、異常に我々を困難にした。しかし、その後、我々は、言ってみれば、手がかりを見つけた。というのは、ここでは、どことも同じように、奉行に大きな権限があり、役人は小さい。が、直ぐにひっくり返る自分の裁量で、自分のパトロンの頭を持った。もちろん我々は彼らと仲良くなり後悔しなかった。大橋は頭の良い人物であった、偏見のある日本人では全くなかった；彼を経由してこっそりと多くのことを得ることが出来た」。

1860年4月3日、コルニロフを太平洋艦隊の成員に任命した。その年の10月17日、彼は海軍大尉となった。1861年1月15日、コルニロフは上海からクロンシュタットへ去った。が、直に極東へ再び戻ってきた。1862年3月12日、彼をサハリン号の船長に任命した。それに乗って彼は長崎に去った。その後、彼はバガチリ号に乗り、日本と中国の港を回航した。1882年8月30日、コルニロフは海軍少将になった。1885年10月22日から、彼は太平洋艦隊を指揮した。航海中、何度か彼は函館に立ち寄った。

1859年の新年を迎える

ゴシケビッチは見なした、彼は領事として社会活動を避けるわけには行かないと。函館では、理由があつたり無かつたりで、しばしば行われた、舞踏会やパーティーが。ロシア領事館は町において社交生活の中心であった。即ち、ここで、日本人達はヨーロッパの習慣やロシアの文化に親しんだ。

日本の地で、新年の元旦の祝賀に、領事館は積極的に参加した。日本人をロシアの伝統に親しませるために、ゴシケビッチは日本人の子供達のために、クリスマスツリーを造った。それに、地区の役人達を招待した。箱館奉行は祝日には現れなかったが、プレゼントをくれた。

部屋はロシアの武器、ロシアと日本の旗で飾られた。これらは本当に綺麗で効果的であった。日本の役人達は雰囲気を入ってくれた。彼らは画家を連れてきて、部屋の様子を確りと描かせた。

ゴシケビッチはこのように、新年の祝賀に日本人を招待した。これを理由に、仮装舞踏会を催した、それにはプラスツン号の将校達も参加した。盛大であった、カップル達がダンスで旋回していた。実際は、女性はほんの僅かであり、女性に列を作った。ロシア婦人は日本の役人をダンスに引き込んだ。日本人は非常にダンスを入ってくれた、彼らはその名前を書き留めていた。

1859年1月1日、昼の3時に、ロシア領事館に、箱館奉行が多数の随員を伴って訪

問してきた。前もって領事館へやって来た役人がゴシケビッチに伝えた、アメリカ人の商業のエージェントは今までそのような榮譽を受けたことがないと。日本では、商人の階層は極めて身分が低いと見なされていた、役人には領事との関係を決めるのは難しかった。特に、企業家から任命された、アメリカの領事がそのような者であった。別問題ーゴシケビッチは役人である。政府グループへの所属が彼を、他の国の代表者より高い地位にあるものとした。

ロシア人は客のために食事の用意をした。日本人には未だ馴染みのない料理を出した。奉行と彼の随員達は約4時間ほど領事館に滞在した。特別な注意を持って、客達は東シベリアの地図を見た。日本人は既にウスリースク地方について事情に通じていた。論争は地図上のハンカ湖の存在についてだけ起こった、湖の存在について日本人達は疑っていた。

函館にいる日本人も新年の到来を祝した。ゴシケビッチが書いていた：「役所は新年までの3日間閉鎖した、8日より早くは開所されない；が、人々の所では16日まで祝日が続く。監獄の囚人達にさえ、1日、14日、15日は彼らに付けられている縄から開放され、髭を剃り、少し着飾ることが出来る。全ての家では、玄関を灯火、いろいろな色の紙の花、植物、様々な記章で飾る：ザリガニ、レモン、矢、その他。それらは悪霊、病気、様々な不幸から家を守る。祝日の初日には、通常では日本人は親類、知り合いを祝う、各自の家で接待をする、訪れた者の多くは上品にほろ酔い加減となった。しかし、通りでは秩序があり、驚くほどの静かさである；この日々には人々は早めに床へつく、良い夢を期待して。それは去年を良く生きた人への褒美である」。

1859年1月6日、ロシア領事館の全員、同じく、ジギト号とプラストン号の将校全員が、奉行の所に答礼訪問をした。前もって、彼らは奉行へ、日本の旗で飾られたタワー状のケーキを贈呈していた。将校達は冗談を言った、ケーキを東京にも送れたならと、新年の祝日の描写を持って造られているので。

祝日には、しばしば日本人が領事館を訪れた。雑談の時間を作って、特に、質問してきた、どのような品がロシアとの交易で最も儲かるのかと。ある時、ゴシケビッチが客に風車を見せた、日本人達は直ぐにそれに興味を持った。彼らは技術的な質問を領事に浴びせた。

さらに、1月1日に、ロシア領事館を日本の学生が訪問した、彼らは英語を勉強していた。新年になり、直ぐに彼らはロシア語の勉強に取りかかった。今度は、ゴシケビッチに領事館の職員に日本語の勉強をすることを奨励することを勧めた、彼らに「職務の遂行」を容易にしてくれるだけではなく、「原住民と親しくなれる」として。直に、領事館の職員達は通訳無しで、生活の水準について日本人と話し合うことが出来るようになった。

領事館の場所

時と共に、函館のロシア人には少なくは無い知人が出来てきた、ちょっと立ち寄る。まず第一に、日本人は「甘いもの」を願い出た、これでシャンパンをほのめかした。シャンパンは日本人には大いに気に入ったようである。会話が始まった、時には大いに賑やかに。

特にロシア人が日本語に打ち勝つにつれて。領事館の職員達が日本の生活の詳細について興味を持ち始めるにつれて、具体的な質問をするにつれて、日本人達は直ぐに話をはしより、去って行った。例えば、町の図面を手に入れるために、少なくはない日本人に贈り物をロシア人はする羽目になった。

4年を経過し、領事館の基本問題の一つになったのは、領事館の建築であった。ゴシケビッチの指示書に記されていた：「函館に到着したなら、皇帝によって認可された指示に従って、この町に学校と病院の設備の計画を立てること、その実行に必要な予備手段を行うこと、所定の手続きを踏んで、その承認まで。領事館の建物の場所として割り当てられる、契約を基礎（1855年に下田で締結されたソ日条約のことを言っている—著者注）とした場所は町の境界としている。これは口頭での約束であった、ポシエト号の船長に日本の全権が与えた。必要な便利さと十分な広さを結びつける、仕事のできる建物の建設、領事館のための、商品と石炭の倉庫としての店のための。同じく来訪者のための部屋」。とにかく、首都では既に噂に聞いていた日本人の性格の特徴について、指示書ではゴシケビッチに助言をしていた幕府に急いで伝えることを、予想される建物の数と種類を。

ゴシケビッチが函館に来た、その時から3ヶ月が過ぎた。領事館の場所の問題は全く解決しなかった。ゴシケビッチは処理を急いでくれるように、函館奉行に依頼の手紙を出した。1858年11月11日、ナジモフは医者のアリブレフトと一緒に再び奉行の所に向かった、建設地の割当について知るために。儀式が繰り返されたにもかかわらず、今回は、主要問題の審議に直ぐに取りかかった。床に再び手書きの函館の地図が開かれた。ロシア人は直ぐに町の中心を指し示した、奉行所と隣り合っている。しかし、ここで新しい場面がわき上がった。日本人達はふりをした、客のことが分からない、客に町の境界線の向こう側に陣取ることを提案した。町から3kmも離れた場所を。ここは山麓であり、強風が吹く。明らかに、外国人達を一カ所に集めたがっていた、外国人の移動の監視がしやすいようにするために。

ゴシケビッチは日本の代表に反論した：「貴方の努力は一カ所に外国人を住まわせようとしている、無駄である。長崎のオランダ人の関係で適用したこの方法はもう不可能である」。これに関して、ロシアの領事は町の地図で4カ所を示した、建物の無い。そして、それらの場所を見せてくれるように提案した。奉行は非常に渋々と納得し、ロシア人に同行するために、将校を選別した。視察の後、奉行所に全員が戻った、が、事は未だ済まなかった。奉行は引き合いに出した、自分自身でこれらの場所をみたいと。この意向を実現することは悪天候が邪魔をした。結局、奉行は声明した、首都の江戸に問い合わせると、それには1年かかると。

長い交渉と塾考の後、幕府は外国人のために大町（現在の中浜町）の一区画を割り当てることを決めた。そこは当時は町と隣り合わせであった。マクシモフが次のような証言を残していた、ゴシケビッチの言葉を基礎にした：「ロシア領事には家のための土地が必要であった。將軍の命令が公布された、外来者には町の中心に住まわせないように、良好な場所を彼らに割り当てないようにとの。函館奉行はためらわなかった。郊外の山には素晴らしい糸杉林があった、この場所は江戸からの指示の内容、幕府の見込みと良く一致していた。しかし、非常に不便であった、非常になだらかだが、ロシアの建物に使用するとするには余りにも急であった、広い面積での我々の生活習慣を考えると。どうする？ 函館

奉行は大人数の労働者を集めた、短期間で、数ヶ月の間に、疲れの知らないこれらの働き蟻たちは山を切り崩した（幅と長さが数十サージェント（1サージェント＝約2.1m*）の）、広大な練兵場としても十分なような。全職員の入れる領事館、教会も、秘書と医者の家も」。イギリス領事館のために土地が必要となった時、手順が繰り返された。新しいテラスを建築するために、切り取った土地を利用した。

ナジモフは領事館の建物に分割を行った、領事のために2階建ての建物を設計した、医者のために1階建て、同じく病院と浴場を。建設のために、何人かの日本人の大工を雇うことができた。日本風建築に熟練している。これ故、内部は日本流に、外見はヨーロッパ流にすることに決めた。設計の段階で、領事館は2階建て、ロシア人家族の生活のために4つの平屋建てとすることになった。建築は速いテンポで進んだ。函館奉行は個人的に建築の進行状況を見守り、ロシア人の希望を叶えてくれた。実際には、ナジモフは気がついた、建設において、日本人は高く付けて、柔に造る、漆喰がはげ落ちた」。

日本人の治療

領事館の医者で7等文官であるミハイル・ペトロビッチ・アリブレフトは日本人の医者によってヨーロッパの医学を教えることで大きな貢献をした。1859年4月に、彼は東京から日本人の病人を治療する許可を得た。しかし、初めは函館の人はロシア人医者の活動に対して不信を持っていた。浮腫に病んだ2つの重症例が状況を改善した。日本人の医者は病人を治療することが出来なかった。その時、病人はアリブレフトに相談した。

函館奉行はロシア人医師の活躍に興味を持った。彼はアリブレフトの所へ日本人の医者を送り出した。日本人の医者はロシア人医者の動作を注意深く見守った。その後、さらに2人の医者、福瀬ヨーシンとエルヅルゲが彼の仲間となった。彼らは毎日アリブレフトの所を訪れ、ヨーロッパ式治療方法を観察した。アリブレフトに対する住民の信頼は領事館の医者に対する日本人医者の注目を大いに引いた。直に、病人の数は段々と多くなり、アリブレフトは大変となり、日本人の医者には病人の面倒を見て欲しいと頼んだ。この際、彼は余り口を出さないように努めた。もし適当な薬がない場合には、彼は自分の薬箱から分け与えた。

函館の住民へのロシア人医者による医療援助の施しは困難となって行った。彼には準医（助手としての医者*）がいなかった。医療場所としての恒常的な部屋は無かった。アリブレフトは病人を実業寺で受け入れた、そこで彼は領事と共に生活した。後になり、函館に小さな病院が、領事館と同時に造られた。が、そこには、医者の居室のための場所は無かった。

日本語の不十分な知識がアリブレフトに大きな困難をもたらした。ゴシケビッチが1859年に通報していた、東シベリア総督ムラビエフに：「とにかく、アリブレフト医師は日本語で自由に説明することが十分に出来ない、特に、平民に。私は毎朝、病人の診察に彼と一緒に出かけている」。日本人の医者の中の一人はオランダ語を少しは理解しているし、医学用語も結構知っていた。彼と一緒にアリブレフトは、彼にロシア語を教えながら、

仕事をした。彼から日本語の意味を学んだ。

アリブレフトが突き当たった他の問題は、日本の医薬品への無知であった。現地の医者
は基本的に多数の薬草を利用して、日本の薬店は長崎から運んできたオランダの薬品
を一杯持っていた。

アリブレフトが書いていた、「私の所にやって来る患者は、残念ながら、大部分は慢性
で放置された病気であった、日本の医者の処方には役に立たない。酷い病気は役人の身分の
者に特に現れている。屢々現れているのは眼病と梅毒。この2つの病気は、私が見たこと
が無いほど、ここでは驚くほど伝染していた；女性のふしだらな生活が広まっており、医
療警察（？ *）については誰も口にはしない。

日本人が眼病になった時、神がそれを救ってくれない。ここでは屢々不治の病の時に神
に頼っているが。その時、彼は多分片目を失う、両眼では無いにしても。私は屢々形成さ
れたブドウ腫と濁った角膜を見た。人工瞳の形成の若干の手術をなすことにする。眼病の
主たる原因：生活様式と梅毒。家では、通常日本人は火鉢（炭の入った容器）の回りに座
る、手を温め、タバコを吸う、或いはお茶を飲む。そのようにして、彼は火照ったまま外
に出る、半分そり上げた頭をして、どんな温度の元でも。女性は眉を剃っている」。

人間の解剖について解説し、内部組織の構造を示す目的を持って、アリブレフトは日本
人の同僚に死体の解剖をすることを提案した。日本人の医者は奉行に願い出た、刑死した
罪人の遺体を渡してくれるようにと。ロシア人医師の評判は完全であった・・・

1861年、病院を襲った火事のために、病院が再建されることになった。新しい建物は
ロシア領事館に並んで建てられた。アリブレフトは後になって記録していた、「我々の
領事は大きな努力をすることになった、病院の場所を獲得するに当たって。最初は、土地
を明け渡すことで合意した。今後ロシア人のために何の土地も要求しないと文書で約束す
るという条件で・・・」。

ロシア人の目を見た函館

函館の最初のロシア人住人は、この町について、北海道全部について、より十分な情報
を出来るだけ沢山集めることに努力した。ゴシケビッチは報告書にその情報を書き入れた。
報告書は外務省に送られた。ナジモフとコルニロフは雑誌「海軍通報」に記事を送った。

ロシア人は直ぐに解明した、岬に築城されている要塞の壁は現地で集めたものであり、
非常に堅い花崗岩では無いと。大きくて不規則な形状の塊が、外壁を形成している、厚さ
8サージェントの土塁の上にのしかかっていた。そこには、火薬と弾丸の保管庫があった。
壁には、高いところに、52台の大砲が設置されていた。他の要塞—土塁の形でオランダ
様式で造られた—は地峡にあった。そこには60台の大砲以外に、西側に砲兵陣地が2つ
隠されていた。コルニロフが記していた：「岬に、そこから暗礁が始まっている、高さ2
サージェントに、細い石の壁が造られていた、殆ど閉じた8角形をしている。日本人はそ
こに大砲を設置している、それを海の砲台と見なしている。これら以外に、砲台の北西方
向に、岸の所に灯台がある、高さ3サージェントの木製で四角形の回廊付きの塔」。日本

人はこれを町の防御には十分な期待のある施設と見なしていた。

ナジモフが自分の文通相手の一人に伝えていた：「外国商品は函館では極めて高価であった。香港から持ってきた商品を、あるアメリカ人が販売しようと試みた。が、殆ど全部を戻さざるを得なかった。もちろん、日本人はこれらの商品をほしがった、が、値段が彼らをぞっとさせた。冬には時折日本人はラシヤの服をじっと見る、が落胆して去る。1ヤード当たりのラシヤは、部屋代1年分もの値段となる。北海道には、日本では人参と呼んでいるジェンシェン（朝鮮人参 *）の根がある。この朝鮮人参1フントは日本では5メキシコドルする、が、中国では75メキシコドル。1860年に、交易が停止した、長崎が値切ったので。

天候は極めて温暖である。どうやら、冬には天候は変わらない。が、そうでも無いらしい。時々ある、大寒波の後に、雪解けが始まり、その時蒸発が始まること。北西の風が殆ど4ヶ月間吹く。1859年から1860年まで、一月半にわたり毎日雪が降った。このため、春は遅かった。古老は語っていた、このような天候は記憶に無いと。

2人の奉行の手に、基本的権力がある。一人は5月から次の5月まで函館に在所する。もう一人は北海道全体に出張する、サハリン、国後、択捉の日本人住民を視察するために。11月に、戻ってきて、奉行に見てきたことを報告する。その後、東京に行く、そこで町の代表として政府委員会に参加する。5月に、交替のために彼は函館に戻る。奉行の家族は東京に住んでいる」。

ロシア人が奉行補佐と呼んだ2人の役人は、常時、函館に家族と一緒に生活していた。外国人との会合は基本的に一人の奉行補佐に委ねられた。もう一人は会合に在席するが、殆ど何も話さなかった。問題が起こる度に、前者の奉行補佐にロシア人は伺いを立てた。もし、彼が具体的な回答を与えることが出来ない時には、奉行に伺いを立てる。この際、東京における決済無しには、何事も決められない。

階級上、奉行補佐に続いて、8人の役人がいた。階級で彼らを識別することはロシア人には難しかった。ロシア人はただ気がついた、役人の内の一人が常に会議の速記録をとっていた。

ロシア人の意見によれば、日本の警察（番所 *）は実に良く自分の職責を遂行していた。ナジモフが書いていた、「諜報活動を基礎とした警察は、非の打ち所無く自分の使命を遂行している、幕府のために、外国人に対して；今まで例が無かった、幕府が日本人を引き渡した、窃盗や強盗や殺人で罪のある；もし外国人が何らかの罪で日本人を訴えるならば、奉行や役人は無駄な言い訳をすることに努めた、訴えられた日本人には罪が無いと。警察は特に識別できる様相をしていない。ヨーロッパ人には警察官を全く識別できない、彼が脇にいたとしても。我々が店に立ち寄ると、何時も監視人が現れる。が、それが誰か、話すのは難しい、が、うすうす気づく、この人物が警察であると。というのは店主が彼の前で地面にひれ伏し、絶えず彼に視線を注ぐので。我々は買い物を終了する、この人物は我々の後を付けてくる」。

警察の助けに、兵士が指名された、特に、外国人船員が通りにあふれる時には。日本人の警備は3人組で行われた、その際、各自は2本の刀を帯びていた。兵士達は遠慮無く力行使した、酔っ払いの船乗り達に対して、日本人と喧嘩をするような。函館には百人ほどの警備隊があった、藩主の指揮下にある。帝国の兵士の数は多くはない。彼らは日本人

には敬われている、藩の者達より。ロシアの船乗り達は気づいた、帝国の兵士の前に全ての市民は平伏することに、将校や役人の前と同じように。彼らの勤務は特別であった：税関や奉行の所で。兵士達は奉行に同行した、外国船を訪れる時には。同じように、労働者を監視した、ロシア領事館建築に携わっている。

兵士達は屢々フェンシング、銃と大砲の射撃の稽古をした。ナジモフが書いていた、「実験者の言葉からすると、日本人はオランダの本の一つからそれを研究した；火薬と破裂弾の成分を造っている。実験者の言葉を確りと確認したかったので、私は彼に私の所に立ち寄るように提案した、火薬のより良い成分と他の物を見せることを約束して、そのために有効な材料を；彼は立ち寄ることを約束したが、来なかった。次に会った時、私はそのことで彼を咎めた、が、彼は病気であったと言い訳をした。これ故、私は考える、日本人は実際において、自尊心から生徒になりたくは無い、が、全てを自分自身で達する、初歩の知識から」。多分、日本人はロシア人将校の所へやって来ない、全く他の理由では無く；このためには彼には特別の許可が必要とされる。

函館の海軍力は、蒸気式コルベット艦3隻－10台の小さい大砲を持った一と蒸気式ヨット1隻。ナジモフは見ていた、日本人が驚く早さでヨーロッパ人から兵法を学んでいることを。その成功の担保となっているのは生まれながらの根気強さと勇気であった。彼は日本人の船乗りに驚嘆した、自分の意見をメモで書き残していた：「民衆のこの階級から素晴らしい船乗りを育成することは困難では無い、嵐や全ての海難に熟達した。この民族の愛国心に付け加えて、祖国を守ろうとする必要性から呼び起こされる、或いは単に国家の要求から、我々は間違いなく決めることが出来る、国は1万人の船乗りを配下に持っている。しかし、私は言いたくは無い、海軍の設立の手段を配下に持っている日本は既に十分に供給されていると、一否、私は手段を示したいだけである、将来の発展に際して日本に提示される。

航海時における日本人の勇気は疑うまでも無い；このためには、航海における彼らの乏しい手段を見るだけで十分である。この際、軍艦だけではなく小舟を理解しながら。どんな天候でも海で、岸から遠距離でそれらの船に出会える。大きな一つ帆の大船に少人数の乗組員であることに驚く必要は無い、*****大部分は広い停泊地の、結局、悪天候における特別な迷信の彼らの知識によって、その時には、海難を避けるために、船は岸から離れる」。

軍事訓練は祝日と見なされていた。パベル・ニコラエビッチが書いていた、「ヨーロッパ民族との知己の結果、最近の日本では軍事祝日が出現した。甲板には武器が並べられ、大群衆が押し寄せた。甲板は朝8時に開放され、5時に閉められた、寒さにもかかわらずに。全将校と役人は甲板に集まった。2人の奉行さえ、射撃場近くの家で食事をとる；将校達はお茶、米、火鉢用の炭を得る。砲兵は自分の意味を示したが、いろいろな的を狙う、ガチョウのように、武器に近づいて、奇妙で下品なポーズをする。鼓手長が曲芸師のようにステックで芸当を行う、その他。

同じようなデモを3回行った、日本人の群衆から笑いが起こることは珍しくなかった。一斉射撃はいつも終わった、盾が無傷で残るようにして。砲兵の特別な勇気は目立たない；大砲の砲口の所に立ち、全身を震わせる。奉行達は馬に乗ってやって来て去って行く。彼らの馬は豪華な鞍を付け、足にはわら靴を掃いている、日本人が穿いているような。高

官は徒歩で進む、小旗を持った徒歩の役人を前にして。馬の回りには4人の役人、片側に2人ずつ；後ろには3人の日本人がびよんびよんと従う、紙、食べ物、果物の入った漆塗りの大きな箱を背負った。奉行が小走りで進む時、脇にいる役人は馬止めを外す。行列は上司の後を追いかける、全力で」。

「停泊地での最も大きな行動は、もちろん、夏の時期、5月から9月の間に行われる。この時期には、町はいつも縁日の様相を示す。昼には、狭い通りは殆ど通り抜けられなくなる；通りの半分は干し物の魚で埋まり、片側は町の外れの産物からの荷駄用の馬と牛の引き縄が張られている：石炭、薪、穀物、野菜、小家畜、その他。これに日本人と外国人の歩行者達、店で仕事をする者達が通りを密に満たしている。午後2時から、馬の行列が町を後にする、自分の家に急ぐ。通行人は段々と少なくなっていく、新しい様相をもたらす：家主は家の前の通りを清掃する、汚れが酷い場合は水で通りを洗う。4時には散歩者を見ることができるようになる。この時刻から通りを歩くと、家のドアや窓が開いているのを見かけることができる、よく言えば、整理された前面の部屋（表の壁が楯でできている）に、主人が、一日の利益の計算をしているところを；主人の回りで、小僧が商品を片付け、真剣に火鉢に木炭を積み上げている、主人がその回りに立っている。その上で、彼は絶えず悴んでいる手を温める。

次の部屋を覗いてみよう、君はこの権利を持っている、もちろん商店で、個人の家で客あしらいが悪い、或いは棒で或いはきつい言葉で。しかし、君が立ち寄り、そこへ入る：屋根に煙のための大きな穴のある小さな部屋、床には綺麗なゴザが敷き詰められている、家具は全くない、全てを床でやる、煙用の穴の下にはかまどがある；そこでは大きな火が燃えている、火の上には水の入ったヤカンが吊されている、何時も沸騰している。

女性達のかまどの周りにあつまり、お婆さんはやせて骨の出た手を温める。家族の主婦は仕事をし、大人数の家族の古着を補修したり、新しい着物を縫ったりしている；成人女性はギター（三味線？ *）を持って座り、もの悲しい、調子外れの曲を弾いている。が、彼らの意見によれば、楽しい歌であるとか；時々ダンスをする、長さ6フィート、幅3フィートの広さ（ゴザの大きさ）で。

客としていくと、皆が頭を垂れて出迎える。かまどの所へ招く。キセルとタバコを提供し（日本人女性は喫煙する）、直ぐに小さい茶碗にお茶を注いでご馳走してくれる、砂糖無しで。客が音楽をする人であったならば、演奏を一時止め、許しを願い出してから、音楽と歌を再開する。日常の生活の雑事後の家族の生活の様相は以下の通りである。他の家に入ると、見ることができる。仕事だけでは無く部屋の配置も。茶屋での他の出来事、日本人が稼いだ金を遊びに使うところ；そこは、騒音と快活さが満ちている；享楽を過ごそうと決めた日本人は金を惜しまず、一級品のタバコを要求する、即ち夕食を；実に、素晴らしいー私は試してみた；ワインと音楽はこの場合には常に大きな役割を演ずる。ギターに更に太鼓の音が付け加わる、日本人はそれが大好きである；とにかく、日本の家は隙間だらけである、多くの茶屋はお互いに隣り合わせにあり密接している、各部屋では常に大騒音が一家屋内の音楽から、茶屋の回りをぶらついている群衆から；これに更に付け加えなければならぬ、盲目の呼び笛を、案内人無しで通りをぶらついている」。

日本の生活の更にもう一つの描写がある、「海軍選集」で公刊された、ナジモフが書いた、「暗くなった。通りは動く火で覆われる。日本人は暗いところで灯火を持って常に歩

く；灯火を持たないで歩いている人は怪しい行動をする者である。彼らを追跡する；しかし、たまには灯火を持たない人に出会うことがある、交番の傍を。

行商人の叫び声が響き渡っている、彼は温かい料理を極めて安い価格で売っている；彼の天秤棒の下の動く台所には、お湯、ご飯、うどん、他の食べ物を見ることができる；行商人達は時折夜11時まで歩き回っている。

深夜には、通りに深夜番と火回り番が現れる。深夜番は静寂の破壊者である。とにかく太鼓を持ち、叩き続けて歩き回る、ペテン師はいつも隠れる時間と機会を持っている、深夜番がどこにいるかを知って；この深夜番は大人が行う、が、火回り番は主に子供達である、12歳の；希に大人もいる。

火回り番にもうるさい道具がある。肩から吊された板、板には15本の竹棒が紐で吊されている、各々；火回り番が進むと、勝手に板が振れる、そしてその竹棒も。ガチャガチャとうるさい音が出る。火事の場合には、火回りは大声を出す、鐘があるならば、例えば、寺のように、それを打ち鳴らす。

江戸では、大火の後、各地区に火の見櫓が建てられた、高さが3サージェントの；地区は極めて小さいので、櫓から地区全体を観察することが出来た。日本では、火災の消火手段は極めて乏しく、余り役に立たなかった。

函館の可能性

ナジモフの部屋から近いところに、外国人のための市場があった。実際には、ロシア人の観察によると、この市場はむしろ税関の支所に似ていた。そこには常時、通訳がいた、片言に英語を話す。役人がいて、論争を解決することが彼の職務であった。実際において、全ての問題について彼は一つの答えしか準備しなかった：「奉行に伺いを立てる」。論争問題の解決には何時も数日間かかった、再度の呼び出し後。税関には、必ず、役人のスパイがいた、彼は常に沈黙し、聴いたこと、目にした事全てをメモにとった。

市場では何でも見つける事が出来た、船に必要な：食料、燃料、子猫さえ。購入が完了するには、揉め事が無いではすまなかった。大量のネズミが、ナジモフに猫を買う事を強いた。数日過ぎても、猫を持ってこなかった。繰り返しの要請に、船乗りに答えた、「そちらを満足できるような猫が見つからない」。

市場は不足していた。それで、商品は、他の市場より2倍ほど高かった。が、外国人は選択する事は出来なかった：外国人はこの市場でだけで買い物をする事が出来た。領事の要求により、1カ所での交易の専売は1859年11月に撤廃された。直ぐに、アメリカの仲買人が出現した、彼らは函館に来た船に供給し始めた。しかしロシア人の船員達は必要な物は自由に購入する事を好んだ。

函館では、船の修理をする事が出来た、結構な破損まで。日本人は良好な材木を提供した。極めて熟練した大工や香具師もいた、彼らは十分要求に応えた。プラスツン号とジギト号は主帆のための木を手に入れた、長さ22フィート、厚さ6インチ、幅8インチの甲板用の。同じく、櫓の止索栓と滑車用のブナも。船乗りの使用人に同じく鍛冶工と鑄造工

がいた。彼らは夏に注文をこなすように教えられた、船の修理に関連した。そして、出来るだけ良く仕上げようと努力した。1859年7月9日の砲火により燃えてしまった港の小さい船台の代わりに、幕府は直ぐに新しい企業を設立した。それは岸の土手に沿って北西方向に延びていた、このために特別に造成された。

その年、函館の生活は静かなものであった。町全体は30分で回れた。異国風にはロシア人は早く慣れた、基本的に、仕事に楽しみを求めた、ここではそれほど簡単ではなかったが。日本人は挨拶を交わした、が、具体的な事になると、答えをはぐらかした。これにもかかわらず、ロシア人は彼らに最新技術と科学の成果についての知識を分け与える事に努めた。隣人と良好な関係を結ぶ良い方法であると思いつつながら。

最も大変な問題は言語であった。ペテルブルグでナジモフが書いていた、「日本語の学習に関しては、文法などを教えてくれる教師がいないので成功は乏しかった。言語の学習においては必ずいなければならないのに。私の日本語の知識は、実践で獲得した。不十分である、日本人は私を理解し、私は彼らを理解するが。重要な事に関しては話をする事は出来ない。領事館のための家を建築する際には、私は通訳無しで説明をした……。ロシア語の習得のために私を訪れた日本人は、早く読めるようになる能力を見せつけたが、断固としてロシア語で話す事を拒否した、滑らかに素晴らしく読み、間違いは少なかった。授業の終わりには、日本人は何時も地理に興味を示した。地理は日本人を明らかに非常に夢中にさせた；彼は直ぐに町や川の名前を覚えた、大事なのは、大河の流れの方向を記憶に留めた。地図はこの好奇心あふれる日本人を満足させた、が、彼はこれで留まらなかった、数値でも教えてくれるように頼んできた；この場合には、アルマナフィ・デ・ゴサ（？

＊）が助けてくれた；単に言葉を信じないで、印刷した本を提示する事を不断において要求する、真に確信するために。この日本人を日本人の随員としてアメリカに派遣した。

ロシア語の学習の開始時には、日本人を引きつけるために、私はロシア語の本を土産として提供する事を試みた。例えば、船大工にはスカロフスクの「軍用蒸気船の指導書」を、図面付きの完全版をあげた、そして、多数の造船に関する本を。が、これは全て無駄であった、実りは小さかった」。

函館は日本の北部で、厄介な所にあつたにもかかわらず、厳しい気候条件を別にすれば、ここでは既に当時は産業が発展していた。例えば、幕府管轄の窯業では、容器を製作していた。それは北海道、サハリン、国後で販売されていた。容器はそれほど雅では無かった、九州で造られているような。日本の北の住民達は丈夫で品質の良いものを好んだ、値段の安い。これ故、工場では、基本的に、単で白い容器を造った、単純な青い色絵の付きの。赤色の装飾のある容器は極めて高価であった。

幕府の絹織物工場は同じようにうるさくない消費者向けであり、安くて粗雑な製品を作っていた。ここでは、基本的に、青色のものが圧倒的であった。外国人の存在と商売の函館での拡大につれて、工場では、絹織物の生産の試みが始まった。函館には鋳物工場があった、この工場は急速に近代化された、西の技術を基本に取り入れて。

日本人は商売をすることを大いに望んだ、函館の住民達は基本的に商業の階層に属していた。ナジモフが書いていた：「通りに出ると、殆ど同じ商品で場所が塞がれた店が連続しているのを見る。一見すると、そのような売り方は奇妙に思われる、無意識に疑問が生ずる：彼らは誰に売っているのか？ 殆ど同じ商品を持って商売しているとしたならば。

答えは難しくは無い：函館は沿岸の商業の町である、これ故、沢山の同じ商品が、やって来る日本の船、住民、自分の産物の販売にやって来た者に提供される。商人として、日本の各地からの沢山の来訪者がいる。例えば、江戸、長崎、松前、その他から。大部分を占める、これら他からの来訪者は現地の住民達よりも裕福である。従って、精力的であり、取引では優位に立っている。

外国人との商売に秀でている商人は、町の一般住民達より明らかに良い生活をしている；彼らの家は内部も外部も素晴らしく綺麗な仕上げで際立っている。日本人は一般的に家の綺麗な内装をひらけかす、建物は古くは無く、その住人は貧乏では無いとして；この基本には、極めて正しい考えがある、住民の貧しさに従って、住居にゴミが紛れ込むに違いないという。そのような規範の下で、各家屋で異常なほどの綺麗さに出会うこととなる。商人の所では、煌びやかである。それは贅沢に飾られた移動できる礼拝堂や神棚のところにあり；商人の家屋内の全ては素晴らしい漆塗りのものであふれている；最も簡単な家屋用衣服さえ、紙製であるが。少し気まぐれのように見えるが。

忙しい昼の生活の後、夕方には、商人は小さい家族同士で集まる。そこには年寄りが壁や火鉢のところに座って、団らんしている。お茶を飲み、お菓子を食べながら。若い娘はギターを弾き、歌を歌い踊っている。全ての階層の若者達は、昼の仕事を終わり、良い服装に着替え、御茶屋での饗宴で時間を過ごす。

交易の発展を幕府が邪魔をした、外国商品に巨額の税金をかけて。特にアルコールに。ナジモフが特記していた、「これによって幕府は達成した、日本人はアメリカ、太平洋のアルコールの消費者になることは出来ないことを。いろいろな奇妙な名称の売り物の、大事なものは、そのラベルで日本人にとって魅惑的な、それには何時でも張られている、このアルコールは生気のエキスである、全ての病気の予防や防止に役に立つと」。

函館では、全ての日本人は階層に分かれている。第1階層—最高の—には役人や帝国軍の将校達が入る、引き続いて、藩の将校、帝国の兵、藩の兵、地主、香具師と職人。最後の階層に商人、彼らの仕事は最も軽いと見なされているので。幕府の勤め人以外は、税金を支払わなければならない。更に2つの住民のクラス分けがある、彼らは税金を払わない、が、半住民と見なされている。毛皮業者と墓守。実際において、最後の者達は生活が制限されている、特に彼らは町に入ることが禁止されている、夜密かにを除いて。

ロシア人のゴシップと娯楽

最初の冬が終わった、ロシア領事館の職員は家から遠い日本の函館でそれを過ごした。雪が溶けた。郊外と地峡に雪解け跡が現れた、春の最初の前触れ。全てが生き返り始めた。春になった、日本人が語っているように。ゴシケビッチの指導の下で、ロシア人達は自分なりの生活と娯楽を造ることに努めた。彼らはスペクタクル「レビゾル」を準備した。小病院で仮装舞踏会と婦人のピクニックを行った。函館に最初のロシアの出版物が現れた、隔週の雑誌「ゴシップ」が。ロシア人達は長くてうんざりする冬を出来るだけ早く去りたかった。

春に、函館へ、ジギット号がやって来た。船乗り達の目の前に大きな山が現れた。その山麓には沢山の家屋が一塊となっていた。彼方此方の菜園に緑が見えていた。町の上方、支脈に沿って、アラベスク風の小さな森が広がっていた、遠くからは大きくは無いピロードの絨毯のように見える。同じように、町の上方には5つ、6つの洋式の家が見えていた、その内の一軒の上にはロシアの旗がはためいていた。ゼリョンヌイが書いていた、「函館の通りは広くは無い、とにかく町は山と山麓の所に位置しているので、現地の通りは階段以外の何物でも無い。乗用馬車は日本人には無い。殆どが歩行者、時折騎乗者が」。船乗りが特記していた、幾つかの家屋の庭園には人工的に小さくした樹木（盆栽？ ＊）が育っている。

ジギット号は先にここへやって来ていたノビック号と並んで碇を降ろした。船乗り達は最近のニュースを話し合った。特に、フランスのコルベット艦で起こったスキャンダルについて。フランスの将校が馬を購入した、彼はそれが気に入ったので。彼はその馬を連れて行きたかった。幕府は断固としてこれに許可を与えることを拒否した。日本の馬を国境を越えて運び出すことが禁止されていることを理由に。長い論争の跡、フランス人は馬を運んだ、全くの許可も無しに。

春には、プラスツン号の乗組員達は、生の食料、岸の家屋と風呂の御陰で、完全に健康を回復した。船には壊血病患者は一人もいなくなった。コルニロフが書いていた、「我々は出港の準備に取りかかった。最後に、我々の馴染んだ山を歩き回り、別荘を訪れた。ここでは、度々ジギット号乗組員と時間をつぶした。知り合いの日本人達は出港の前に我々の所を訪れた。別れに当たって我々は名刺を渡した。これらの名刺は江戸に送られ、将軍に示されるということを知ったのは慰めになった。ロシアとの交易についての交渉はそこで行われた。我々は彼らに説明する努力をした、どのような種類の商品が儲かるか、アムールにある、そこから何を期待することが出来るのかを。

1859年4月19日、プラスツン号は碇を揚げ、オリガ（沿海州東岸の港 ＊）に向かった。船は生鮮食料を急いで配送しなければならなかった、コルベット艦ボエボダ号と輸送船バイカル号の乗組員のために。その後、日本沿岸での航行条件の調査のために、日本の沿岸に戻ることにした。その間に、函館の停留地はあつという間に他の船で一杯になった。この港はアメリカの捕鯨船のお気に入りの停留地の一つであった。最初の大型の日本船が出現した。1隻はヘダ号の設計図に従って建造された、もう1隻は少し大きくて、アメリカの計画に従った船。それらの船を訪れて、船乗り達は気がついた、日本人はそれらの船をきちんと管理することをまだ学んでいないと。函館の造船所にはそのような船が1隻入っていた。

1859年に、大きな出来事があった。日本人の船が、それにロシア人将校達を乗せて、函館からニコラエフスク・ナ・アムールへの初めての航海に成功した。

函館にはロシア領事館の他に、イギリス、フランス、ポルトガル、オランダの領事館があった。同じく、アメリカの商業代理人バイスがいた。実際において、ロシア人は信用しなかった、このアメリカ人が公的な代表者であると。が、単なる商人では無かった：函館にはそのような者は若干おり、彼らはあつという間に裕福となっていた。とはいえ、日本での生活は何時も心地よく安心と限らなかった。とにかく、日本の役人達はヨーロッパ人達の非友好的なことを常に監視していたので。

1859年5月に、函館はロシア人が未だ知らない新しい様相を示した。山々は緑の絨毯で覆われた。将校集会室は地味な花束で船乗り達の視線を楽しませた。停留地は殆ど空になった。アメリカの捕鯨船はオホーツク海へ出航した。プラスツン号は沿岸の水路測量作業に従事した。ジギト号はニコラエフスクへ行く命令を待っていた。が、全く違う命令を得た：外国人に開港されたという新潟の視察に向かうこと。石炭のために函館に立ち寄ったオランダ船バリ号の船乗りから、ゴシケービッチは知った、バリ号がヨーロッパとの交易のために開港された新潟の視察に向かうことを。それで、直ちにそこへ向かうようにジギト号に命令した。ナジモフは前もって船を訪れた、航海への船の適正の文書を作成するために。乗組員の一人が書いた：「我々は良い兆候を待つことが出来なかった、ちょうど水と石炭を追加した、畜舎から亀田（カミダ）へ鶏と牛を運んだ、2日後に準備が出来た」。

1859年5月26日に新潟を訪れたジギト号の乗組員が初めてのロシア人となった。この町に初めて現れたヨーロッパ人がロシア人であった。ジギト号の船長が後になって書いていた、「新潟の町は広く、可航運河が縦横に走っている。川と大きな運河には、多数の船がある。この町の活発な交易を予想させるものである」。船長には湾が気に入らなかった、この湾では悪天候から船を守ってくれない。

函館郊外へのロシア人の散策はズッと継続された。5月には、鉛鉱山を見学することが出来た。そこは町から余り遠くは無かった。函館の回りの幾つかの場所はロシア人の馴染みとなった。例えば、馬を雇い、「ペテルゴフ」へ向かった、女郎屋のある結構な場所。この地で休息を取ったムラビエフ・アムールスキーがこのあだ名を考え出した。女郎屋では夏にはブドウ酒や焼き栗で接待した。日本のお茶は、卵と米粉から焼き上げたパンを付けて出した。日本人の調理師はポルトガル人から処方箋を借用した。彼らはそのようなパンをカスティラ（c a s t i l l a）と呼んでいた。日本人は音「エル」を発音できない、この単語はカステラに変わった。

家屋に直面して、池のある小さい庭があった、池には橋が架かっていた。水中に、蓮が綺麗に咲いていた。家屋に行くために、小さい並木道を通る必要があった、両側を小さい運河が縁取っている。

もう一つの女郎屋は亀田（カミダ）にあった、同名の川の岸にある小さい村に。マダム・ウトキナ（日本名は内子らしい）がそれを経営していた。この名前をロシア人将校達が与えた。彼女がロシア船にカモを持ってきたことの記念として。（ロシア語で鳥のカモは「ウトカ」と発音するので *） 女郎屋の主人を他の外国人達もそのように呼ぶほど、この名前は広く馴染まれた。彼女はロシア人の好みを良く知っていた、彼女はロシア人をそのような食事でもてなした、女郎屋「ペテルゴフ」で。

この女性の所に、プラスツン号の越冬の時から、小病院とロシア式風呂が設備された。土地の一区画を借用して。ジギト号の船長は兵舎を設置した。並んで、船の財産のための2軒の納屋と家畜小屋が出現した。療養でここにいるロシア人の船乗り達が藁を準備した。

ロシア人は温泉を非常に気に入った。カズナコフが書いていた、「硫黄の温泉は町から10ベルストのところにあった；道は平野を進み、その後、サンガルスキー（津軽 *）海峡の海岸に沿って。温泉に入っている女性は窪地に入っており、見れなかった、山から下り始めない間は。村は緑で囲まれ、川の傍にあった；そこから10歩の所で地面から硫

黄温泉が湧き出している。その上に家が建てられ、無料で入浴者は入れる；温泉の出口に桶の形の浴槽が造られていた；その脇に腰掛けがある、反フィートだけ水で覆われている。腰掛けに座れる、足は温泉に。冬の水の温度は約31度（25レオミュール度）。残念なのは温泉回りの部屋は暗いことである；といっても不満を言うてはならない、というのは入浴は無料なので。

アリブレフト医師はこの温泉について次のように記していた：「函館の近傍には同じような水晶水（？ ＊）の硫黄温泉がある。大人数用に風呂が造られていた。優秀な医師のいない日本人は、鉱泉に大きな信頼を置いている、両方の温泉を多くの人が何時も訪れている」。

民俗学的スケッチ

日本の最初のロシア人達は、日本人の生活と彼らの文化について、民俗学的な特徴を持つ興味あるメモを残した。ナジモフと他の船乗り達が書き残した沢山の詳細なスケッチは、雑誌「海洋選集」に掲載された。

ある時、奉行所を後にしたとき、ロシア人達は尋常ではない光景を見た。日本人を埋葬していた。ナジモフが書いていた、「高さ3フィートの樽の中に遺体は納められた。竹輪で確りと閉鎖された、丸く縛られて。樽は主堂に対面した中国式建築の小さい堂におかれた。その前に机、色紙を立てて、茶碗にはかゆ、燃え上がる蠟燭を持って；様々な色を出しながら香木が燻っている。錦の法衣を着た僧侶が死者に対峙する。3角に黒い法衣を着た3人の僧侶、数珠を持ち、楽器らしいのも持ち、太鼓と鐘らしい、金属板と小笛；時折、一度に打ちたたく。葬式は祈りの読経で終わった。樽を他の小屋に移した。犬小屋に似たような。2人の日本人が肩に天秤棒を持ち、死者に帽子をかぶせ、木製の小椅子、そこへ日本人達やってる、白いものを着た、郊外へ死者を運んでいった、そこで僧侶が再び死者を出迎え、最後の読経をした。焚き火の準備が出来ていた、樽を側面で壊した；在席者達が粥をカラスに投げ与え始めた、何かの言葉を発しながら、その際手を擦り合わせ、手を自分の前で組み合わせながら。直ぐにたがが焼き切れた、樽が壊れた。炎に包まれた死者を担当者が薪で注意深く覆った、遺体が見られないようにするために。火葬の後、遺骨は集められ、納骨堂か生まれ先に運ばれる。遺骨を49日間保管し、その期間は最親族は精進をし、魚を食しない、毎日お寺を訪れる。遺骨は7日後に埋められる」。

ナジモフの同僚であるゼリョンヌイの観察がある。彼はこの当時、シャミザ（？ ＊）寺の付近に住んでいた。度々葬式を観察する機会を持った：「私は日本人の葬式を見た。四角い箱の中に、死者をしゃがませた；棺の前を子供達が進む、紙の切り裂いた物を持ちながら、壺の中に棒に付けられた；自由な切り込み、これ故、日本人はそれを極端に変形させている、それで、紙で造られた杯と私は見た；日本人は少し進み、止まり、竿で地面を打つ、その際、紙を少しばらまく、喜んで回りの者達を見回す、そして先へ進む；子供達は進む、飛び跳ねながらふざけながら、葬式に対する敬いは全く見られなかった。

死者の後ろに、僧侶達が続く、彼らは何時も絹製の黒い上衣かクレーブを着ている。片

側の肩には色つきのマントを、手には扇子を持ち（冬でさえ）。彼らの後ろには死者の親族が、男は灰色の上衣を着て、女は白い覆いをかぶって。最親族は真っ白に。

寺の中庭に進むと、葬列は止まる；寺から皿を持った2人の僧侶が出てくる、この時鐘が鳴り響く；鐘が鳴り止むと、死者は2回中庭を回る、前もって設置しておいた棒の間を、その後、寺の中に運び入れ、入り口に置く。

寺の真ん中の椅子に、年配の僧侶が座っている、銀色の表生地でライラック色のガウンを着た、手に白い尾っぽを持つ円錐の銀色の帽子をかぶって；彼の両側に黄色いガウンを着た3人の僧侶、多色の上っ張りを羽織って。僧侶が読経する、年配の僧侶が時折立ち上がり白い尾を振る。これにより、自分から悪霊を退散させる；その後、右側の僧侶が出て、棺に向かい合い、何やら語っている；左側の僧侶も同じ事をする、彼らに引き続いて年配の僧侶も；これで葬儀が終了する。

死人を墓場に運び、焼く；骨を壺に集める、米、水の皿、蠟燭、縦長の小板の入った小箱を置く、小板には経文が書かれている。

ある程度の期間後、墓碑を建てる。死後においてさえ、日本人は避けられない法に従っている：平民が亡くなったときには、綺麗で金色の銘を持った平らな墓碑。僧侶の場合には、瘤状の頂上を持った墓碑、その他。墓碑の前に、花を置く；富者は家族の場所を持っている、そこに木や花を植えている；貧者は墓碑の回りの両側に竹のパイプを打ち込む、そこで大方は野の花或いは椿の単なる細枝に出会える。

ロシア人の観察者は注意を向けないわけには行けない、日本の祝日に。ナジモフが特に記していた：「函館には宗教的祝日が結構ある。古い月の見送り、新しい月の出迎え、月の真ん中、全てを祝っている；これらの祝日以外に、他のもある、その由来は私は知らない；しかし、その遂行のために、人々は寺に参集する、2、3日ぶっ通しで。寺で会食を催す、歌を歌い、叫声を上げ、タバコを吸う。これら全ては太鼓の音が伴う；7、8台の太鼓を不快な老人達が一日中打ち鳴らす、何か3つの言葉を飽くことなく語りながら。会食の後、女性達は子供を連れて、僧侶の住居へ行く。その際、僧侶は大量の酒を飲み干すことを自分の義務と見なしている；その時、騒がしくなり、子供達ははしゃぎ、大鐘が鳴り響く。この後、2日間この寺で食器を洗った。これで来客の数を推し量ることが出来る。

他の祝日には、僧侶達は冷水を人前で浴びる。ブッタの祈りの日に、8人の裸の日本人が熱心に寺に土と石を投げた、ガラスの替わりの紙を引き裂いた、鐘を鳴らし、扉を開けようと努力した。この奇妙な儀式は寺の入り口の所での彼らの祈祷で終了した。跪き、手を擦り、彼らは夕方まで鐘をついた。その後、人波の中に隠れた。

祝日には、寺の周りに、上書き付きの広く白い幕が吊される。夕方には灯火で寺を明るくする。毎月の1と15の日に、町長、老商人、全ての役人達は奉行への挨拶に出向く。これも又祝日である」。

ロシア人は日本人の地域の生活の特徴に興味を引かれた。特にナジモフは、結婚がどのように結ばれるのか、詳細に尋ねた。自分の論文の内の一つにこの儀式を記述した。「自分の知人のグループから自分で嫁を選び出した若者は、自分の親類と知人に相談をする、誰々と結婚することで、自分が間違いをしていないかどうかを尋ねながら。彼の選んだ人物が自分と自分の親類達の評判を落とさないかと。了解の返事を得ると、若者は選んだ人物の両親に結婚を願い出る。若者を婿として扱うことになる。即ち、自分の親類や知人に

婿の品行について問い合わせる。彼を親族に迎えることに何か反対が無いかどうかと。

両方がお互いに納得がいったならば、婚約の日に、嫁は歯を黒く染める。夫のいる女性であることの証として。この日から若者達の生活の準備が始まる、家の準備、次のように婚礼が進行する：婿と嫁の親類、同じく仲の良い知人が、若夫婦の新しい家に着飾って集合する。綺麗に飾られた一つの部屋に着座する。

客の中から、付添人として、若い女性と独身の青年を選び出す；付添人は婿と嫁に3個の杯のある盆を渡す、ワインが満たされている；婿が杯をとり、飲む、そして嫁に杯を渡す：同じ事をする。その後、杯を再び婿に渡す、婿は2個目の杯を飲む、それを嫁に渡す、繰り返す。婿と嫁は3個の杯をやり遂げなければならない、各々3回飲むことで。参列者はこの儀式をただ見ているだけ、タバコを吸いながら。

杯での最初の儀式が終了し、出席者全員は男性と女性部ループに別れる。嫁は男性を特別な部屋に招き、婿は別の特別な部屋に女性を招く。グループに分かれて、嫁と婿は自分の客をご馳走する。少ししてから、グループは一つの部屋に再び合流し、一緒に宴会をやる：ここに大量の酒、様々な料理が振る舞われる。この儀式は思い出させる、最後に若夫婦は別々の部屋に引き離された、が、今後は彼らは末永く平和に過ごさなければならないことを、決して別れてはならないことを。

酒と料理を出来るだけ平らげ、残り物を客達はポケットに入れ、散開する、新婚者達を二人だけにして。

後日、若夫婦は結婚式への来客達を表敬訪問し、彼らの家で行われた宴に感謝を示す。訪問には手土産を持って。この訪問の後直ぐに、親類と知人達は若夫婦を訪れる、同じく手土産でお返しをする」。

幾つかの出来事にナジモフが気がついた。結婚の儀式は非常に宗教性が強く、特別な儀式の形で行われることに。

ゼレニーが書いていた、「日本人の着物は短いガウンで、幅広い袖がついている。平民の大半は最も質素な材料の青色の着物を着ている。幾つかのガウンを重ね着している。男性は腰を余り幅の無い帯で堅く縛っている。足にはストッキングを穿いている；親指のために特別な場所、我々のミトンに似たような。ガウンと同じように、ストッキングも殆ど青色。ストッキングの上に、藁の短靴を穿く、乾燥した天候下では。濡れたベンチの所では、木製の差し板を入れた短靴を、泥で足が汚れないために。短靴は何時も入り口に置かれている、床にはストッキングで進む。この方法で清潔を維持している、それが日本人の素晴らしい性質となっている。日本の女性は男性と同じような服装をしているが、ただ違うのは、太股を堅く締めている、速く歩くことができないようにするために。又かぶり物もある。日本人（僧侶と医者以外）は頭の真ん中の髪を剃っている；残っている両側の髪から尻尾を創っている。ポマードを厚く塗り、そり上げた場所の真ん中に寝かせている。女性は頭頂部を四角形にそり上げている。とはいえ、髪が濃いので気づくのは非常に難しい。彼女らの飾りは一般的に大きな髪型を思わせる、ヨーロッパには無い、多分、流行。僧侶は頭全部を剃っている、医者は頭を全く剃らない、へらで髪をなでつけ尻尾を作っている。日本人は眉以外顔を剃っている、既婚女性は眉を剃り、歯を黒くしている。

ナジモフの海洋旅行

パベル・ニコラエビッチ・ナジモフは活動的な人物であった、ジッとしていなかった、何時も新しい仕事を探していた。チャンスが到来したとき、彼は函館に隣接している岸の部分調べた。そして、1859年に、ジギト号で、ナジモフは日本の沿岸を調査した、ロシア船の停泊に適した場所を見つけようとして。奉行への何度かの要請の後、ようやく彼は長く待っていた許可を得た、北海道に沿って沿岸を航行する。そして9月に、小さい帆船で航海に向かった。彼の基本的な目的は石炭の産地を訪れることであった、北海道の南東（？ ＊）で。同じく、内浦湾（室蘭のある大きな湾 ＊）を観察すること。帆船の大きさは船乗り達に食料の在庫を少なく制限した。そのため、岸に立ち寄ることを強いられた。自分の部下から彼は知ることとなった、奉行がロシア人将校達の全ての移動について報告するように命令したことを。特にこれは触れていた、島の内部への侵入の試みに。制限にもかかわらず、ナジモフは相変わらず旅行を続けた。日本の習慣に馴染むこと、日本人の伝統に対する敬意と日本語での会話の知識は彼の助けとなった。

砂原村（内浦湾の南端海岸にある ＊）の宿泊所で彼は起床した。「従者の代わりに、日本人の内の一人を連れて、私は海岸に行った。群衆の中で家に入った；家では主人が私を出迎えた、火の回りの一等席に座りながら：彼のお辞儀に対して、私は帽子を脱いだ。日本語で彼にコンニチワと挨拶をした。部屋は他と同じように綺麗であった、無意識に日本人によってなされているとおりに：私は従者に私の靴を脱ぐように命令した。主人の後について入っていった、私に割り当てられた部屋へ。そこには、赤々と燃えている火鉢、喫煙具、お菓子、お茶が床に置かれていた。私は床に座を占めた、日本人のするように、自分を安く見られないように。直に一人で残され、タバコを吸った、誰かの突然の訪問を待機して、私が既に出会っている。次のようなことがあった：玄関に2人の人物が現れた、各々2本差しの。が、武士では無く、村落の年長者；敷居に大刀を置き、彼らは跪きながら私の部屋に入ってきた、頭を下げながら。床に座っていた私は、礼儀正しい処方で応じた。お辞儀の後に沈黙があった；彼らは私の顔をじろじろ見た、が、ようやく私は問い質した、何者なのかと？

—村の年長者です。君は誰か？ —彼らが問いかけた。

—私は函館にいるロシア人である。駒ヶ岳火山（函館の真北、約30km近くの内浦湾沿いに砂原の地名あり ＊）を見に来た。そちらの長はいかがか？。

—おかげさまで、元気です。必要なことは無いのか？ —私に日本人が問いただした。

—そういえば、私は大きな錨を必要としている、私の帆船が持って行かれないために。

—よろしい、錨2個と細いロープ2本を差したそう。というのは、風が強くなり、波が立っているので。更に何か？

—私は明日、火山の頂上に行く。朝の6時に、4匹の馬と通訳を準備して欲しい。

—よろしい、錨とロープは今すぐ2マイル離れている村から持って来る。帆船は適当なところに移す。が、馬については役人に問い合わせよう。

この後、私の返答を待たずに、彼らはお辞儀をし、這って部屋から出て行った。

2時間後、錨は帆船に届いた。朝には、馬と通訳がナジモフを待っていた。出発を前に

して、主人は興味があった、彼にお風呂を準備する必要があるかどうか。

ナジモフは火山の登頂に成功した、実際において、硫黄ガスで頭が痛かった。夕方には、旅行者は風呂をとった、主人の好意で提供された。

次の日、天候は航海にふさわしかった、ナジモフは湾を横断し、イトモ入り江（？ ＊）に達した。小さな入り江の内の一つに、彼は土塁を見つけた、隠された3つの大砲の陣地を。

この地域には、沢山のアイヌ人が生活していた。猿紋別村でナジモフは停船させた。地区長は直ぐに彼に警告した、彼らは将校達を島の内部に行かせる権限を持っていないと。これに関して藩主の書面による命令書を示した。悪天候がナジモフにこの村で2日間の待機を強いた。彼にとって、観察には都合が良かった。「住民として、アイヌの男性が300人、日本人が3家族。日本人の長。村は藩に属している。アイヌ人は漁労と海藻の生産に従事している。鹿と熊の狩猟にも。全ての生産器具は藩に属している；産物の保管のために大きな納屋が作られている。魚油を煮出すための施設がある。アイヌ人は生産に従事しなければならない、報酬として、非常に汚い住居、着物、自分の仕事でえた物から食料、米を得ている。金はもらうことが出来ていない。

この旅行の時、ナジモフは極めて価値のある証拠を集めた、天然鉱物と現地住民についての。1年経たずに、彼は探査することになる、それだけでは無く、南沿海州の湾にいるロシア船のために石炭を採掘を組織する。

・・・そこには、小さい火山がポシェート湾（北朝鮮との国境付近にある ＊）の入り江の一つの岸に緩やかに下っている、今は100年以上にわたって事件について思い出させない。かろうじて目立つ巨大な穴、生い茂った密な草木故に、誰も気がつかなかった、ここに著名なポシェート石炭鉱山があるとは。かつては、それと並んでロシアの哨所があった。が、古地図でだけこの場所を確定できる、ピョートル湾（ウラジオストクの南方に広がっている ＊）に船乗り達が自分で最初の哨所として選んだ場所が。1859年、ムラビエフ・アムールスキーが船でここに立ち寄った。ウスリースク探検の参加者ウソリチェフの追想記によれば、ムラビエフは「・・・海岸と湾の回りを注意深く観察した。そこに完全な町を築くことを提案するかのように。疑いはない、彼は魅了された、湾とその回りに、多数の移住者を受け入れる見込みに。湾は多数の艦船のためのたまり場に」。

大凡その頃、クリッパー艦ボエボド号の船長マトベーフによって、ここで石炭が発見された。船乗り達は石炭に欠乏していた、新しい湾以上に。これまでは、極東におけるロシア船の火室には、火夫達は石炭を投げ入れていた、デュエで或いはサハリン島の北で或いは函館で手に入れた。船乗り達は燃料補給のための新しい場所に切実に興味を持っていた。地質学者を待つこと無く、不断において石炭の探査を行っていた。マトベーフはというと、彼は全くの偶然に石炭を見つけた：住民の一人の家で黒い塊を見かけた、興味を引かれた、遠くないところに沢山あると知った。

ポシェートにおける発見物についての情報は艦隊司令官リハチェフ海軍大佐まで届いた。彼はムシン・プシキン海軍大尉と一緒に1860年4月3日に函館に到達した、アメリカの輸送船リマ号で。リハチェフは直ぐに南沿海州にナジモフ海軍大尉を派遣した、日本で石炭を探査に従事するようにと。ナジモフに渡された命令書の最初の行に単純明快に

彼の仕事の目的が書かれていた：「出来るだけ早く自分の住居、司令部のために必要なものを設置すること、中国海（現在の黄海、東シナ海のこと？ ＊）艦隊のための石炭の開発に直ちに打ち掛かること」。

函館を出航した、ナジモフは石炭を砕くための道具と兵舎設置のための必要な材料を積み込んで。今までロシア人の村が無かった場所に。これら全ては輸送船ヤポーネツ号に積載した、1860年3月23日から函館に停船していた。1860年4月8日、輸送船は函館を出航し、4月11日夕方にはポシェート湾のノブゴロド入り江に錨を下ろした。次の日、リハチェフは入り江を注意深く観察した、軍用哨所のために最適な場所を選び出した、ナジモフを長とした21人を岸に上陸させた、2ヶ月半の糧食を持たせて。特別な命令書には外国船が出現した場合に、ロシア国旗を掲げ、外国船の司令官に説明すること、ノブゴロド入り江とポシェート湾はロシアのものであると。

5日後に、ナジモフの乗組員達は石炭の採取に取りかかった。ナジモフ自身は、1859年7月11日に、新しい命令を受け取り、輸送船マンチュール号に乗ってウラジオストクに向かった、そこでは新しい哨所の建設がようやく始まっていた。1860年7月20日、ナジモフは函館に戻った。そこにほぼ1年間、1861年3月13日まで滞在した。

サハリン（樺太 ＊）についての交渉

中国と有利な協定を結んで、ムラビエフ・アムールスキーは日本との国境線を確立したかった。総領事書に書いていた、「この仕事に私は自らかつて出た。なぜなら、特に、仕事が遅延なく終了したために、今のところ、イギリス人達は日本に住みついでなく、サハリンで石炭を手に入れたがっていないために。この依頼を上手く進めるために、同じく、中国との国境線の確定を急ぐために、私はニコラエフスクから艦隊を派遣するつもりであった、出来るだけ多人数の、日本へ、ペチェリースキー海峡（？ ＊）へ」。

1859年6月7日、蒸気コルベット艦アメリカ号はシベリア総督府の旗を掲げて函館に向けて出航した。6月15日、ここに全艦隊が集結した。特に、グリデン号とリンダ号は海軍大佐パポフの隊列に入っていた。ムラビエフ・アムールスキーが編成した艦隊に、フリゲート艦アスコリド号が入っていた。この時この船は函館に立ち寄った、日本の贈り物をロシアへ運ぶために。アスコリド号の船長イワン・セメノビッチ・ウンコフスキイを艦隊の参謀長に任命した。「1859年の7月25日から8月25日まで、東シベリア総督と軍統帥部の命令に従って、アスコリド号の指揮時、同じ命令で真の職務以外に、日本沿岸における合同艦隊の参謀長となった。1860年5月16日、世界一周航海におけるアスコリド号の指揮における優秀な勤務に鑑みて、皇帝陛下は勲章を授与した。聖ウラジミル3等と海軍少将への昇任（1861年6月28日）」。

ムラビエフ・アムールスキーはアメリカ号からアスコリド号に乗り移り、サハリンの分界設定の交渉に向けて東京へ出港した。それはロシアにとって戦略的価値を持っていた。

1859年8月1日、リンダ号とグリデン号が東京湾に入港した。神奈川の停留地に。既にノビック号とアメリカ号が停留していた。神奈川は外国人のために開かれていた、下

田沿岸でのデアナ号の遭難後に。当時、外国人は要求していた、航海のためにより安全な港を、彼らに他を提供していたので。日本人からよそ者を引き離すために、町から2ベルスト離れた場所をよそ者達に割り得てていた、ヨコハマ（横浜 ＊）という名称の。そこには良好で深い入り江があった。そこには直ぐに棧橋、大きな倉庫が作られ、店が出来た。外国の領事のための家さえ作られた。が、領事達は横浜に住むことを好んだ。

コルニロフが書いていた、「横浜の半分は大きな木造家屋で占められていた、例によって、非常に丁寧に仕上げられた建物、商品の倉庫、商店、外国人の住居としての目的を持った。これらの2、3軒の商店で、我々は少しの買い物をするだけであった、我々に必要な物を；それらは大量の小間物、武器、銃、手回しオルガン、粗菓の小間物で満たされていた、日本人の所には無い・・・岸に、長くて石の棧橋の所に1階建ての税関の家屋が建てられた。建物の内部には大きな庭園、大きな碎石が敷き詰められた；何の目的なのか良くわからない、多分、外国人が偶にそこを散歩するので。建物の側面の凹みは多分倉庫のために、後ろと正面部分に事務所が位置している。そこで、我々は銀貨を日本通貨に変えている。そこには必要な場合には通訳がいる、役人も、神奈川奉行さえ。奉行はあれこれ理由を付けて出てこない。屢々病気を理由にして、自分の代わりに奉行代理か役人を派遣する、やって来た人物の重要性を見て。

横浜に外国人の滞在故に、沢山の日本人の商店がここへ移ってきた。その商店では、基本的に、綺麗な品物、漆塗り、贅沢な飾り、象眼細工を売っていた。それらは極めて安かった。絹物はあった、が余り多くは無く、余り品質は良くなかった。長崎と違って、陶器は殆ど無かった。その代わり、ロシア人は非常に気に入った、以前には彼らが見たことが無い名称が知らない手のこんだ飾り物を。コルニロフが書いていた、「しかし、その代わり、もう一つの商品がある。それに主に我々船乗りや珍品の愛好家の注目引いた物が。これが根付け、大きく彫りのある下げ飾りである。日本人はこの根付けでタバコ袋を帯びに吊している。根付けは骨や堅い木から作る、個々の人物、動物、建物、木々、笑い合う人物達、大部分は意味を持っていた。芸術的な明瞭さからすると、それらは極めて良く仕上げられている」。

1859年8月4日、横浜にアスコリド号がやって来た。その船には、東シベリア総督ムラビエフ・アムールスキーが乗っていた。停留地には8隻のロシアの蒸気船が止まっていた、軍力を誇示していた。

アスコリド号の将校であるリトケが思い出していた、「横浜で、我々は大きな変化に気がついた：閑散とした谷間から、結構大きな町に変わっていた、外国人の住居となっていた。去年の沼であったところを見つけられなかった。場所は高くて平らであった、岸には2つの素晴らしい石の埠頭が築かれていた、商品の積み込みと積み卸しのために。外国人は長所を利用することが出来なかった。ある意見によれば、この場所は余りありがたくは無かった。商人達は夜には店を閉め、神奈川に戻っていった。外国人の業者は日本人には愛想が悪かった、何に関係に影響を及ぼすかと」。

次の日、艦隊は東京湾に移動した。コルニロフが書いていた、「停留地から見た江戸の様相は非常に綺麗であった、丘の上に広がっており、一つの高くて秀でた建物も自慢することが出来ていない、が、その代わり、贅沢に広範囲に散らばっている緑が独創性に報いている、200万人もいる首都にとって、不足・・・。町全体は曲がりくねった狭い通り

からできていた、小さく作られた、お互いに密に隣り合った、時折、下に店を持った2階建て、高い木製の壁、藩邸を囲っている。時には通りは裸の人々でひしめき合い、時には空っぽで静寂。時折、寺がある、その中で気づいたことは彫刻された巨大な屋根と高い鐘楼があること。

大きな正方形の部分をお占めている大名の家屋に支障なく出会える。が、そこには高い塀、大きな門の付いた彫り物入りの大きな門以外に、何も見られない。将軍の宮殿さえ、数日間、かつて我々の散歩の目的であった、我々の期待を満足させるには遠かった。十分に大きくて高い場所、広い堀で囲み、壁を回らし、それから木々や東屋が見える、これが全て、我々が将軍の宮殿について言えることは。その秘密めいた不可侵さ、丘、宮殿はその上に作られている、そして木々、時折空想を揺さぶる；しかし、思い出させる、これは日本の支配者の宮殿であることを、幻想が君を残しておくように、ヨーロッパ人の同情を引き起こすには弱い一つの日本の生活だけが君に残る。この宮殿の内部を想像してみよ、絵が描かれた屏風以外に、壁と床の上の綺麗なゴザの代わりに、何も考えないで。唯一の面、それで私は町を気に入った、数多い公園や庭園、個人のものど公共のもの公的なもの、それらの中に我々は植物園さえ見た。

通りの人々は、函館や長崎の住民達と何らの違いも無かった。平民達は殆ど裸同然で歩いていた、売り子の服装はみすぼらしかった。群衆の中で目立つものは役人であった、役人は他の町より少し上品に見えた、ロシア人が訪問した。高貴な人物の従者の数は多かった。店は神奈川より少し贅沢であった、が、外国人に商品を何処でも売っていなかった。君が首都で気づく全てである。

多くのロシア人は日本人女性の綺麗さと上品さにうっとりした。日本の風習に関して理解できないにもかかわらず。「女性はというと、我々はもちろん、通りや店やホテルで彼女らを見るような他の場所は無かった；これらの場所で、追加でお寺で、底辺の階層の女性だけが見かけられた、男性に比較して多くは無い。彼らの中にはしばしば結構すてきな人に出会える、しかし残念ながら、悪習が、函館では、白や他の色で顔と首を塗りたくるといふ、やむなく色あせる、が、とにかく、最初の役割を演ずる地方の劇場の俳優に」。

東京でのムラビエフ・アムールスキー伯爵の警備にゴシケビッチは従事した。1859年8月8日、日本の全権代表である遠藤田島守と酒井右京助が船にいる伯爵を訪れた、8月10日、下船が指示された。下船は非常に荘厳にお膳立てされた。アスコリド号からアメリカ号へ岸へ接近して、祝砲を放った一へのムラビエフ・アムールスキーの移乗において、船乗り全員が帆船に移った。少し後に、港を小舟達が行ったり来たりした。礼服の将校達を一杯に乗せて。棧橋の所で、伯爵を日本の役人達が出迎えた、同じく、艦隊の乗組員から構成された選抜大隊も。威勢の良い300人の船乗り達の様相、煌びやかな軍服と旗は日本人達に印象を与えるに違いない。残念ながら、岸には人々はいなかった。市民が式典時にそこへ出ることを官憲が禁止していたので。色鮮やかな上演は、参加者達だけが楽しんだ。寺院では、客達を豪華な宴が待っていた、日本料理満載の。

ロシア人の船乗り達は未知の町を見学できることの可能性に喜んだ、外国人が足を踏み入れていなかった町を。今度はこちらから、日本人の住民達は異人達をジッと見つめた。当時、日本には開国に反対する者達は少なくは無かった、特に武士階級に。そのために、散歩は命の危険が伴うことであった、やはり何か不都合があった場合には。野次馬の笑い

や叫びが何時もともなった、ロシア人の散歩時には。時折、客を石で出迎えた：誰かが小石で、誰かが大きな石で。残念ながら、日本の狭い通りはイヤな出会いを避けさせてはくれなかった。時折、散歩の終了時にはロシア人達は犬に追われているウサギを思わせた。

「我々はあちらこちらの通りを歩き回った。人ばかりと叫声は我々の後を追いつけた。
－これは全て君に罪がある、ドクトルー 我々は落ち着き払っている道連れを非難した。

－君が我々をこんな僻地を見るために連れてきた、あきれた、波止場から全くの遠方に連れてきた－

－皆さん、－彼は答えた－本当の旅行者のように、自分で考えて慰めなさい、このような状況にあることは希では無いと。好きな貴族は大金を支払ったこの場所にいる権利のために、貴方は無料でこの楽しみ毎を持ち、愚痴をこぼしている」。

ロシア人に新しい珍事を逃れるように、官憲はしてくれた、端に輪の付いた鉄棒で武装した。その後には、ロシア人達は大人数で岸に降り立ち、町中を散歩するようになった、役人や官憲を伴って。

特にロシア人は日本の公園を気に入った。「庭、特に、テラス、非常に素晴らしい。それらの内の一つで、我々はお茶を飲んだ；庭は木々で囲われ、軽い屋根、我々流では日傘で覆われ、幾つかの部署に区分され、細い竿でお互いに仕切られた；これらの各々の部署にお茶の商人の特別の家族。ロシア人の気性に特徴的な広々としたことに対する好みに従って、我々は場所に寝そべって、役人達を非常に驚かした、我々に幕府が提供した全てのもてなしを試してみた。大きな町のテラスからの眺めは、我々の足下に広がっている、非常に綺麗：少なくとも、単調さで目を休ませてくれる：屋根と木々、木々と屋根が見られる、遠方には青い海、その海には、太陽の明るい光でもって、霧の中で小舟や我が艦隊が満たされている」。

その間に、ムラビエフ・アムールスキーはロシアと日本の国境線についての緊張する交渉を行った。彼は日本に伝えた、ロシア国家は1854年に撤去したアニバ湾（訳注 亜庭湾（あにわわん）、アニワ湾（ロシア語: З а л и в А н и в а）は、樺太南端に位置し、宗谷海峡に面している湾）に哨所を復活したい旨を。ムラビエフ・アムールスキーはラペルザ海峡（宗谷海峡 *）に国境線を引くことを提案した、が、日本は漁業権を有することを。日本は北緯50度に国境線を設けることを提案した。8月23日、最後の交渉が行われ、何の成果も無し。その原因の一つとなったのは、ロシアの極東の国境線の近接にあったこと、日本政府がこのムラビエフの発意に警戒の態度をとったから。

最初の犠牲者

露日交渉時、悲劇的な事件が起こった。この事件は2国間の関係を困難なものとする原因となった。今では、それを詳細に明かすことは困難となっている、1859年8月14日の夕方遅くに横浜で起こったことを。知られていることは、コルベット艦グリデニ号の何人かの乗組員が、補助艇に乗って神奈川へ食料の買い出しに派遣された。仕事を上手く終了して、彼らはその日の夕方に母船に戻りたかった。

パポフが書いていた、「モフェットがイワン・ソコロフ水兵を伴って店から出た、彼は金の入った箱を運んでいた。平民アレクサンドル・コロリコフは彼らの少し前を歩いていた。突然、交差点の一つから、彼らに向かって数人の日本人達が襲いかかってきた、刀で武装して。暗くて、襲撃が突然であったので、逆らうことは出来なかった、それ以上に、我々の内の誰も武器を持っていなかった；数分後、水兵は死亡して倒れ、モフェットは深くて致死の傷を被り、血の海に浮かんだ。コロリコフはモフェットにより警告された、モフェットは彼（コロリコフ *）に叫んだ：「アレクサンドル、我々を殺そうとしている！」。店の一つに飛び込んだ、その時には既に夜なので主人によって鍵がかけられていた。死を免れたが、左手に骨の切断を伴った重傷を負った；他の一撃で、彼はもみあげの所で帽子を切り裂かれた。

襲撃者達は直ぐに逃亡した、金の入った箱を奪って。叫び声で直ぐに群衆が集まった。2人のアメリカ人水兵の傍を通りかかった人が自分の管理責任者に出来事を連絡した、近くに住んでいる。日本人の医者の治療にもかかわらず、モフェットは2時間後に亡くなった。

「同僚の冥福を祈り、不幸な運命に哀悼の意を表することを希望して、艦隊の全乗組員は誓約書を書き、モフェットとソコロフの墓所に墓碑を建てることを領事の一人に委ねた、我々2隻の船の将校と船員の在席の元で葬られた、江戸から直ぐに派遣された」。

幕府は直ぐに深い哀悼の意を示し、流血の惨事に対して詫びを願い出た。その犠牲者の葬儀は極めて荘重に行われた、日本の僧侶も参加して。

ムラビエフ・アムールスキーは自然の冒険者であり、自分の艦隊の援助を利用することが出来た。が、彼は常にゴシケビッチや口出しをしない自分の同僚の忠告に従った。ムラビエフ・アムールスキーは総督を解任することを要求した。ムラビエフ・アムールスキーは日本極東に戻る事が迫っていた。彼はロシア艦隊の司令官ポポフ海軍大佐に調査をすることを委ねた。シベリア総督は条件を付けた、犯人―彼らがもし見つけたならば―を犯行現場で刑に処することを。1859年8月24日、彼はアメリカ号に移乗し、函館に去って行った。

アスコリド号に残っていた海軍大佐ウンコフスキーは、9月15日まで東京の停泊地に留まることになった、遂行（犯人捜査の*）を監視すること。アスコリド号を直ぐに高官が訪れた。乗組員全員の前で、惨事に関して謝罪をした。横浜奉行のミチオ・トシコクゴノ・守（? *）と加藤壱岐守が職を失ったと伝えた。

犯人発見の短い期間をウンコフスキーは9月12日に指定した。探査が開始され、ポポフはノビク号に移乗し、東京から派遣されてきた日本の役人を伴って、神奈川に向かった。そこで彼は奉行に会った。彼から知ることとなった、犯人探査のためにいろいろの方法を行っていることを、そして、その後、犯行現場の視察に向かった。

ポポフは全ての店を閉鎖するように奉行に提案した。が、返答は、東京からの命令が無くしてそれをする権利を持っていない、そして生活の手段を人々から奪いたくは無いとのと。日本人から武器を取り上げて欲しいとの要望に彼は同意しなかった。刀を持つことは武士の義務であり、武士の特権でもあるので。奉行の出来ることはというと、ロシア人が岸に降りたときには武器を携帯することに同意することだけ。

精力的な探索にもかかわらず、犯人を特定することは出来なかった。幕府は警察役人を

処罰することを提案した、当時横浜で勤務していた。ウンコフスキーはもちろんこの考えを拒否した。

ロシア船には、日本に留まっている時間はもう無かった。1859年17日（19日）にアスコリド号がクロンシュタットへ向けて出港する前に、日本政府に犯人を見つけて、処罰することを強制した。

ロシア水兵のこの惨事は多くの矛盾した応答を引き起こした。外国人達は話した、彼らは大金を持って町を散歩するようになったと。英国の領事は奉行を多くの点で非難した、奉行が確りとした捜査をしていないと、が、アメリカの領事は他の意見を持っていた。逆に彼は見なした、奉行は確りとやっていると、犯人を見つけるために。このように、日本での状況は極めて緊張したものであった。外国の出版物は、この件に関して、日本の過激派を非難した、政治的状況の緊張に関心のある。

1859年11月17日、新聞タイムスが書いた：「昨日、一人の酔った日本の武士が剣（太い握りのあるカミソリに似た刃のある）を振りかざし、ロシア人の頭を切りつけようとした。どうなったか？ 彼は明らかに危険であった、彼を脇に引きずり離し、鍵の付いた長いフックでもって十分な距離に、そして武装解除した。が、それだけ、彼は家に送られた」。

函館から沿海州へ

ムラビエフ・アムールスキーが日本で交渉をしていたとき、プリモリエ（沿海州）で、土地の区分と地図の作成に関する仕事が始まった。これに従事したのが探検隊である、新しい土地の調査のためにロシア地理協会のシベリア支部によってすかさず組織された。コンスタンチン・ファデービッチ・ブドゴフスキイ中佐がそれを率いた。彼はムラビエフと一緒に愛琿条約の締結に参加した：交渉時、補給係主任ブドゴフスキイはロシアに所属する全ての土地を地図に示した。彼らと一緒に、1859年初めに、ウスリーへ2人の天文学者（陸軍中尉ウソリチェフと陸軍大尉ガモフ）、地形学者の陸軍大尉エレッツ、画家のアカデミー会員メイエル、通訳シシマレフが出発した、同じく、測量技師の3つの班。探検隊の目的と課題は極めて明らかであった：境界線の撮影、同じく日本海の沿岸、そして、沿海州の詳細な地図。

1859年5月5日、探検隊の主班がハンカ湖に達した、そこにトリイ・ログの名称の軍事哨所を沿海州で初めて基礎をおいた。探検隊の更なる道は南であった、無人の平原を通り抜けての。ウソリツエフが後になって書いている：「ステップの広がりを見ると、数千の住民を育て上げ、これら広大なステップは、それらはアムールに穀物と干し草を教え導く。しかし、これが実現するとき、今のところレイヨウ（牛、羊の系統の動物 *）がこの荒野の例外的な住人となっている；彼らの安全を虎やオオカミが脅かす・・・ 確信を持って思う、この沈黙は近いうちに脅かされる、人間の広範な活動の劇場となろう」。

ステップでの道は旅行者には若干骨が折れるものであった。が、スイフン河（今日のラズドリナヤ）へ出ることをさせてくれた。全員が元気づいた。育ちの良い南の植物は、熱

帯の森を思い浮かばせ、探検隊員を酷く驚かせた。直径が7フントにもなる檜の木、巨大なシダ、堅い蔓、一つの木から他の木へ這い伝っている、が通行不能の密林を形成していた。大変な苦勞をして、密林をやっと通り抜けた。狭い抜け道を切り開き、自分らの小さい荷駄用のキャラバンのために、一日に2ベルストから3ベルスト（1ベルストは約1 km*）進んだ。

ブドゴフスキイ探検隊の、旅行の最終目的地はノブゴロドスク湾と日本の沿岸である。東シベリア総督ムラビエフ・アムールスキーにとって、函館は沿海州沿岸への歴史的航行のための出発点となった。1859年6月15日、総督の乗ったアメリカ号は函館港を出港した。

ロマノフが書いていた、「6月15日、ようやく我々はアメリカ号で函館に別れを告げた。最終的な別れでは無い。というのは、中国からの帰り道に、ここへ再び立ち寄るので。この日は、朝から、風があった。それは段々と強くなっていった。気圧計は低下し、あつという間に29.08（? *）まで下がった・・・」。船乗り達は波立つ天候の急変に気を配った。が、迫り来る嵐を待つ時間は無かった：ブドゴフスキイ探検隊との出会いに急ぐ必要があった。2日後、荒れ狂う海での濃霧の中を突き抜けた。6月17日夕方になる前に、船乗りの叫び声が鳴り渡った：「陸地が見える！」。少しして、波の穏やかな、名の知れない湾に船が入った。このようにしてナホトカ入り江とアメリカ湾が発見された、船の名前に因んで名付けた。

次の日を、船乗り達はピョートル大帝湾の詳細な調査に献げた、その後、東（? 西ではないのか *）への航路を進んだ、ポシェット湾（北朝鮮の東端付近 *）へ。そこでブドゴフスキイ探検隊と出会い、アメリカ号は中国に向けて碇を揚げた。1859年7月1日に、バイハイベイ港に碇を下ろした。直に、「サントペテルブルグ広報」に、次のような内容の小さい記事が掲載された：「・・・我々の境界委員会の長であるブドゴフスキイ中佐は北京に向かった、最終的国境線の確定のために、満州におけるロシア領の。この線に沿って、日本海に接している満州の沿海州海岸がある。調査で分かった、誰にも属しておらず、ロシアの所有の国境線で囲われた。この海岸の中国に近い南部一即ち、ザカフカス地方の緯度にある一は良好な入り江や湾が多数入り組んでいる。世界で他の海岸で見つけられないような。狭い領域で、次々と素晴らしい湾が、ほんとに数多く、どの湾が良いのか選択に困る。有名なセバストポリスク湾とボスフォールのザラトイ・ローク（金角湾）はこれらと比較すると優先権を譲らなければならない。これらの湾の近傍の地域は、処女の熱帯林、絡み合う蔓で覆われている、それらの中で、檜の木は直径が1サージェンにも達している。この広大な植物相は驚嘆すべきものであり、我々は未だ決して見たことのないものである；似たようなものはアメリカの森だけで会える。なんとも大きな将来性がこれら先史時代の森に隠されている、世界の最も素晴らしい湾と関係して。迷宮のようなこの湾達がピョートル大帝湾の名を持つのは無駄では無い。湾のうちの良好なものをウラジオストク（東方の支配する、という意味がある *）と呼称したのも無駄ではない。というのは、ここは太平洋にいる我が艦船達の揺り籠であるから、その広い胸に抱かれたロシア語の意味の、鍵のかかかっていない大砲によって、ズンダ海峡（インドネシアのジャワ島とスマトラ島との間 *）、ジブラルタル海峡、ダルダネス海峡、そして、我々の東方の領有。ここには自然の恵みが一つのグループに集中され、強力な植民地化と強力な商

業活動を発展させる能力がある」。

我々の辺地の輝かしい記述と100年にも渡る将来のその正しい予見！ 1859年の半ばに関係したこの記述に、既にウラジオストクの名が現れている。実際には、そこはまだ町でも無く、哨所でも無かった、当時記憶にも残らない。が、素晴らしい入り江であり、港の建設にふさわしいところであった。

誰がウラジオストクに響きが良く綺麗な名前を与えたのであろうか？ 知られている、名前が新聞に出たことが、その後、直ぐに地図にも。函館からノブゴロドスク湾へ、ブドゴフスキイの後に付いていったアメリカ号が短時間金角湾に立ち寄った時の。サンクトペテルブルグ広報のための記事が直ぐに書かれた。アメリカ号について、ブドゴフスキイがそれを北京に運び、そこからサンクトペテルブルグへ急使と共に運ばれた。

記事の著者名は無いが、新聞の綴じ込みファイルをめくると、もう一つの似た記事に出会うことが出来る、南沿海州についての、特に、ピョートル大帝湾についての。記事は1858年12月15日に書かれた。この新聞と常時協力し合っていた船長ロマノフによって。2つの記事の方式の相似性、同じ文体は著者がロマノフであることを予想させる、大分後になっての新聞での公刊。すなわち、多分、これに属している、太平洋のこの新しい港を、ウラジカフカスとの類似からウラジオストクと呼称するアイデアは。

ムラビエフ・アムールスキー自身は、この歴史的航海について次のように書いていた：「我々はポシエト入り江に境界を設定して別け、トメニ・ウラ河口まで境界を進む。それは朝鮮と中国の国境線をなしている。余計な物を手に入れたくは無かったが、必要にせよばまれた：ポシエト入り江には素晴らしい港がある、中国との最初の決裂の時にイギリス人がまず手に入れた。私は信じている、この確信が北京で作用することを。スイフン河の河口に、ポシエト入り江の若干北東方向に、多数の素晴らしい入り江が」。

ポシエトがピョートル大帝湾における最初のロシアの哨所となった。1860年2月22日、スクリュウ輸送船ヤポーネツ丸の船長は、軍隊をここへ上陸させる命令を受けた。

ムラビエフ・アムールスキーのこの航海が、東シベリア総督の出世を輝かしいものとした。著名な小説家マクシモフが書いていた、「覚えていなければならない、中国は、アムールとウスリーを譲り、ロシアの要求を満たした。ムラビエフ・アムールスキー伯爵のエネルギーの御陰だけで。中国人は彼のそのような頑固さを目にして、何の予想もしなかった、彼の背後には数百の兵士がいることを；公爵の断固とした行動は大きな軍事力にのみ支えられていた。彼らは譲歩した。が、失ったものを戻す意図と期待で譲歩した、秘められた敵意と憎しみを持って譲歩した、ロシア人のよそ者に」。当時、ムラビエフ・アムールスキーが南沿海州を目録に記するように命令を出した。

1860年1月15日、公爵が沿海州地方軍事知事の海軍少将カザケビッチに書いた：「・・・ウスリー川右岸の占領とウスリーでの砲艦の建造に関する私の全ての命令は以前のものである。海への我々の艦隊の早期の出航に関しての命令も同じである、ピョートル大帝湾に沿っての長期にわたる警戒任務、岸の記述、ピョートル大帝湾の岸にある2カ所の勤務。外務省は—私に関係した、1859年10月13日付けの—許可しているノブゴロドスク湾（ポシエトの）の占領を、ただ非常時の時にだけ。このように、私は将来の政治状況を考慮して、本当の危機に気がついている、朝鮮の国境まで全ての沿岸に断固と

した歩みをするためには、私は貴方に確認することが義務と見なしている、軍事哨所を近いうちに再び占領することについて、ノブゴロドスクとウラジオストク湾の。

朝鮮との論争問題の最終的な許可の後、公爵ムラビエフ・アムールスキーは焦らずに可能性を待った、コルサコフに自分の職務を渡す。彼はイルクーツクから最後の手紙を友人に書いた、「・・・全ては私をシベリアに葬る原因では無い。もちろん、私はシベリアに何の招待も提案も貰っていない、何にも無い；今、イグナチエフ（北京条約を結んだ一著者注）の御陰で、中国の件で良心は私を悩ませない；大事なものは、彼らは見ないし感じない、私が全ての件で役に立つことをどのようにして止めたかを；理解しながらない、私には良心がある、長く勤務すること、私流には犯罪」。

ペテルブルグに、ムラビエフ・アムールスキーは1861年2月12日に到着した。その日、皇帝と長い時間会談をした。その後、東シベリア総督の職務の解職を願い出た、療養のために外国での長い休暇を持って。彼は何度も皇帝に請願をしていた。しかし、請願は相変わらず退けられていた。今回は、ムラビエフは退職の皇帝の許可を待ち続けた。長く待ち続けた書類が次である：「・・・公爵ニコライ・ニコラエビッチ！ 貴君の30年に渡る不断の仕事によって、民間の整備の確立と東シベリアにおける産業の繁栄の発展に対して確りとした基礎がおかれた。移住の成功に対する必要な手段は多岐にわたっており、貴君によって獲得された辺地の、特に、その南東の国境線の変更を伴い、陸軍施設の設置により引き起こされた、絶え間なく貴君による疲れを知らない心配事となっている。我々の交易の成功のため大事で良好な関係―隣接している中国と日本との―は維持されており、再び確固としたものとなっている、貴君の直接の参加の下で」。

ロシアにとって歴史的な日である1861年2月19日―帝国における農奴制の廃止の日―に、皇帝の署名入りの詔書と共に、ムラビエフ・アムールスキーは勲章をもらった、剣の付属した聖ウラジミール一等勲章を。

公的権力は同じように公爵の偉業を称えるのに後れをとらなかった。1860年10月3日、皇帝はサンクトペテルブルグ大学の東洋語学部（中国・満州学科）に2つの奨学金に関する規定を承認した。1863年2月9日、トロイツコサフスコエ女子学校は公爵ムラビエフ・アムールスキーの名を冠した学校となった。ウラジオストクでは、同じように、彼の名の学校と奨学金があった。

1881年、ムラビエフ・アムールスキーが亡くなった。パリのロシア皇帝の大使館に設置されている、聖トロイツコイ・アレクサンドロ・ネフスコイ協会の戸籍簿に記された：「1881年、11月18日に、壊疽で亡くなった、政府会議の委員、侍従武官長、歩兵大將の公爵ニコライ・ニコラエビッチ・ムラビエフ・アムールスキーが。生まれてこの方72歳。死を前に、司祭ワシリイ・プリレジャエフによって懺悔し聖体をさづけられた。遺体はパリのモントマルテフスク墓地に葬られた」。

25年記念「アムールの会食」に、極東での活動に関係した人々がサンクトペテルブルグに参集し、ムラビエフ・アムールスキーの功績を永遠に残すことが決められた。この時に、予約で5万4千ルーブルが集まった、元総督の記念碑への、最初それをウラジオストクに設置しようとした、「最終航海」として。しかし、その後、大半の意見により、確りした十字架を立てることになった、シルカとアルグナの合流点にそれなりの銘を持った。そこからムラビエフは最初の探検に出発していた。その記念碑のためにハバロフスクに場

所が選ばれた、壮大な崖の所。その足下の所で、ウスリーがアムールに流れ込んでいる。記念碑設立の最初の委員会に、カザケビッチ提督、三等文官ボルコンスキーとガルキン・ブラスキイ、同じく退役四等文官アンネンコフが入っていた。1886年11月27日、皇帝はこの決定を承認した。1888年2月14日、記念碑の形が確定した。オペクシンが提案した、人工の崖を作り、経歴とシンボルを持った。しかし、そのような案をペテルブルグにおける高価な石の故に拒否した。これ故、土台は地元の石で準備することが決まった。

1900年2月に、第37回の「アムールの会食」が行われ。この会でムラビエフの遺骨をパリからハバロフスクに移すことが提案された。これについての電報を、プリアムールスキー地方の総領事に送った。フランスにいる軍事代理人バレリアン・バレリアノビッチ・ムラビエフ・アムールスキー陸軍大佐にアムール人達は遺骨の移送に同意することを請願した。1900年5月2日付けの返信で、彼は伝えた：「・・・私の叔父である公爵ムラビエフ・アムールスキーの遺体のアムール河岸への移送の問題に関して、親族の立場から、近親者として、その提案を実行することに妨害とはならないであろう、と伝えます。全く心から同意するものです」。

第一次世界戦争、その後の革命は予定していた実行を長年にわたって延期させた。ソビエト時代には、シルクの十字架とハバロフスクの祈念碑は改鋳に回された。ペレストロイカ時に、ハバロフスク市民は公爵の祈念碑を再び鋳造し、元の場所に設置した。ウラジオストク市民は報復しなかった：1991年、ムラビエフの遺骨をウラジオストクに移し替えた、元東シベリア総督の名を持った半島にある町に。

日本の植物学の父

北海道の植物相の最初の研究者はカール・イワノビッチ・マクシモビッチである、サンクトペテルブルグ植物園の植物学者。極東の南部においての2回の旅行で、彼は大量の植物標本を採集した。マクシモビッチは満州の植物相の分野の特徴を初めて打ち立てた。1200種以上の植物を採集し、研究した。満州の植物相の森と草原を記述した。

極東へ、26歳のマクシモビッチはデアナ号で降り立った。この時には、彼はユリエフスク大学で素晴らしい教育を受けることが出来ていた。そこで彼は最初は医学を勉強していた。その後、植物学を。帝立植物園で1年働いた。デアナ号が世界一周航海をし、その目的は極東に行くことであったということを彼は知ったとき、探検隊に参加するために多くの努力をした。若い学者は見なしていた、科学活動は旅行と実践的な仕事から始めるのが一番であると。植物学者として、生きた植物の採集の、この旅行は植物園のためには非常に役に立った。全人生において素晴らしい印象を残した。

1853年9月18日、デアナ号はペテルブルグを出航し、ブラジルのリオデジャネイロ、チリのバリパライソ、サンドイッチ諸島のホノルルを訪れた。ほぼ一年かかって、1854年7月11日、デカストリ（ハバロフスク近く、サハリン中部の対岸 *）に立ち寄った。そこに、カール・マクシモビッチが上陸した。

若い学者は沿海州で3年間を過ごした。アムール川とその支流を調査した、彼の興味がある植物の探査に10人ほどの小さい探検隊を組織して。マクシモビッチはウスリー川に沿って遡上する試みに着手した。が、これを行うことが出来なかった、この地方の複雑な政治状況のために。越冬時に、彼は採集した植物の試料を選別し、標本に整理し、最終的な仕上げを行った。

1857年3月17日、国を横断して、彼はサンクトペテルブルグに戻った、素晴らしい標本を携えていただけではなく、将来の科学的仕事の計画も持って、極東の植物相をまとめるという、多数の凶入りの。2年後に、「アムールの植物相の初本」が世に出た、学会の中に期待を持たせる興味を喚起した。この本は作者にデミドワ賞と植物文学における名誉の名前をもたらした。しかし、これらのニュースはカール・マクシモビッチを旅に出させることを強いた：彼は再びアムール地方に出発した、今回は海路ではなく、陸を、シベリア経由で。

1859年5月、マクシモビッチはイルクーツクに着き、その後、シルカ川とアムール川を下っていった、ブラガベシェンスクとニコラフスク・ナ・アムールを訪れた。これらで夏と秋の月の殆どを費やした。冬に、学者は日本に行きたかった、が、ニコラエフスクまで来たとき、アムール川の渦が既に氷で覆われて、航行が出来ないことに気がついた。植物学者は方針を変更することにした、冬の時期を無駄にしないために、彼は沿海州の探検をすることに決めた。

犬ぞりが旅行家をニコラエフスクからウスリー河口へと素早く送り届けた、そこから、調査の行程を始めた。コサック村カザケビチェボで、マクシモビッチはコサックから8匹の馬を調達することが出来た。移動には全く十分であった、が、それらは消耗しきっていた。しかし、時と共に、いい馬を見つけることが出来なくなった。持ち合わせの馬だけで、マクシモビッチは旅に出ることに決めた。

この年の冬は偶々早くやって来て、非常に雪が多かった。短い一日の移動を繰り返し、一つのコサック村から他のコサック村へかき分けかき分けゆっくりと進みながら、マクシモビッチと雇ったコサック人の同行者達はウスリー川を遡上していった。これらの地は学者に覚えがあった：ここへ彼は4年前に立ち寄っていた。が、今は植物学者は喜んで変化を感知した。彼が初めて極東地方を訪れたときは、ここは未開で人の住まない場所であった、今では開拓の跡がちょっと見ただけでも分かる。

1860年3月6日、旅人達は苦勞してウスリー川の最後の村の一つであるブッセ村にたどり着いた。本物の密林が先に延びていた、援助を期待することは全く出来ないような。マクシモビッチはこの村に3週間滞在するつもりであった、食料を備蓄するために。しかし、馬は長くて困難な冬の移動には全く無力であった。これ故、5月まで停留を継続することにした、馬のための足下の餌である草が生長する間待機するために。

4月29日、ウスリー川の流氷の終了後数日して、ブッセ村の住民達が聞き覚えのない汽笛で仕事を中断した、それは川から聞こえてきた。全員が岸に群がり出た、遠方を見つめると見つけた、村に大きくはない蒸気船が接近してくるのを。この場所では、これは異常な光景であった。アムール川に沿って既に蒸気船が航行していた。その支流では水深が浅いので見ることはできていなかった。蒸気船「メハニク号」が初めてであった。誰かがウスリー川での航路を思い切って開いた。全く吃水が浅い—2.5フィート—ながら、彼

は敢えてスガチ川に沿ってウスリーからハンカ湖まで航行した。

村に接近し、蒸気船は岸に殆ど密着した。船体から砂地に投げ下ろした、普通の板のようなものを。それを伝って、小舟に現地の子供達がよじ登った。蒸気船が村に留まっていた2日間、マクシモビッチは将校達と長い交渉をした、印象を分かち合い、メハニク号に乗って立ち寄る場所についてあれやこれと質問しながら、その基本的な仕事は設備と食料を送り届けることであった、沿海州の最初の住民達の村へ。

メハニク号が出発してから直ぐに、マクシモビッチは村を出立した。1860年5月6日であった。沿海州に沿っての旅程は出来るだけ急いで完了する必要がある、食料の在庫が急速に減ったために：それは1月分だけが残されていた。

当時、旅行家達は既に少なくない植物標本を採集できていた、馬が重荷を背負った。全ての荷をたづさえて進んだ：当時、ロシアの中央部には何の連絡手段もなかった。沿海州の密林を、道なき道の困難な経路を、マクシモフと同行者達は徒歩で進んだ。とはいえ、植物学者にはこれは必須のことであった、コレクションを充足するためには。

オリガ湾へは2つの経路があった：一つはフジ支流の内の一つに沿ってシホテアリニンを通り抜けアバムホフカ川へ、そこから直接オリガへ。他の経路は、ベニユコフが2年前に通過した経路。その経路は少し長かったが、マクシモビッチは迷わずそれを選択した、というのは、手元にベニユコフの地図を持っていたのである。前者の経路は未だ誰も歩いていなかった。更にもう一つの理由があった、学者に後者の経路を選ばせることを強いた：ウラジミルからオリガまでの海岸部の経路に彼は興味があったからである。

1860年6月1日、25日間に400ベルスト進んだ。その内の約5日は、豪雨によって引き起こされた標本の乾燥の必要性のために、滞留することになった。マクシモビッチは海に出た。ようやく海岸に立ち、濃霧の中で周りを見渡し、旅行者は理解した、困難の道は終わりを迎えるのだと。後ろには、無数の谷川の徒歩での徒渉、火山への骨の折れる登り、藪漕ぎ・・・。何回も方向を見失い、旅行者は同じ場所で彷徨した。時折、何でも無い小川や小さい火山の形状が確かな経路に彼らを導かなかった。しかし、これらの困難さは無駄ではなかった：旅行中に、沢山の標本を収集した。後になり、自分の日記に植物学者が書いている、「新発見の質は素晴らしい」。

南沿海州に向かう蒸気船をオリガで待機しながら、マクシモビッチは馬に乗り、付近の探査旅行をした。彼のこの探検を哨所に住んでいる船乗り達はとにかく思いとどまらせた。彼らは悲劇を忘れていなかった、マクシモビッチが哨所にやって来る少しまでに船乗りの内の一人に起こった：船乗り達が何時も飲料水のため、服の洗濯に行くアバムホフカ川で、虎が突然に船乗りに襲いかかった、助けることが出来なかった。しかし、学者は物怖じしなかった、悲劇のニュースは彼を驚かせなかった。アバムホフカ川に沿って、彼はシホテアリニン山脈に登った、檜の木が生い茂っている。それは彼に、海へ峠を通過する近道を探し出すことを助けてくれただけでなく、シホテアリニン山脈の全要図を書くことも助けてくれた。

6月27日、ポシェットへの航路中、オリガに蒸気船アメリカ号が立ち寄った、沿海州地区の軍事知事であるカザケビッチを船に乗せて。彼はマクシモビッチを同行させた。学者は残念がった、船に馬を乗せられなかったことを。馬無しでは、彼が考えていた新しい計画を実現できないので：スイフン河を遡ること。その地区の育ちの良い植物についてウ

スリースク探検隊の参加者の心を引きつける話を耳にしていた。

この航路のアメリカ号に、植物学者と極めて似た名前の人物がいた。当時有名であった作家のC・B・マクシモフであった。彼は、ロシア地理学会の依頼に従って、この地域の民俗学的工作に従事していた。そこにアメリカ号が来た。後になって、この航路でなした観察に従って、彼は本「アムールへの旅行」を出版した。確りと日記を付けており、それには航海における珍しい物事の印象を記していた、函館の観察についても。

オリガからポシエットへのアメリカ号の航行は2昼夜弱を要した。海は濃霧であったが、フナへ確りと進んだ、それはマクシモビッチを非常にながかりさせた：船の速度は彼の可能性を奪った、船体に網を、或いは似たような装置を固定することを、海の植物を採集するための・・・」。

濃霧は学者が岸を見ることの邪魔となった、蒸気船がその傍を遊行しているのだが。マクシモビッチは遠方にジッと目をこらした。が、彼の視力の良い目は白っぽい幕を通して見ることはできなかった。

—君はどのような夏がお気に入りか？—植物学者はマクシモフに質問した。そのようなたわいもない話で、良く時間の暇つぶしをした。

—話すまでもない、驚くべき事だ、このような見通しのもとで、我々は今まで岸の石に座らなかった（座礁のこと *）のは。—作家は喜んで応答してくれた。

—話してくれ、兄弟、この地方ではこのような霧が普段でも発生するのか？—マクシモフは帆の操作をしていた船乗りに話しかけた。

—そうではありません、上官。夏は普通は霧はない—船乗りが答えた。

—夏？ 今はもう7月の初めだ！—

—正に7月、これが夏か？—船乗りは驚いた。—もう8月が来る、霧が出ない—

—9月は？

—9月と早春には、海のしきたりに従うと、霧が出るものである。我慢してください、直に止む。

この会話を、マクシモフが自分の日記に記していた：「しかし、我々は首を長くして待った。助言にもかかわらず、8月は霧であった、9月は言うまでも無い。もし、東海に全く正しくはないテーヒー（静かな）という形容辞を与えるならば、我々は思うのだが、トマンニー（霧の）の形容辞の方がよりふさわしい、多分、例外なく・・・」

ポシエットへのアメリカ号の航行の目的は一つであった：石炭鉱山に近い、エクスペデア（探検隊 *）湾の右岸にあるノブゴロドスク入り江に哨所を移すこと。その鉱山をナジモフ隊が開発した、函館から到着した。マクシモフが日記に書いていた、「2つの湾は耐えがたいほど陰鬱だ。我々の回りには、小さい碎石のある石の多い構造のだらけの荒々しい山。11昼夜しつこく我々を見つめていた、近くの山の頂上から、長い竿に付けた旗、傍のがっしりした水兵と一緒に。（? *）水兵達によって、近くに兵舎が建てられた。その直ぐ近くに2棟のバラックが、水兵用と将校用の。それらは石炭の採掘のために、この仕事に必要なもののために残される。3つの穴と、3つの凹み、石炭のために少し掘られた、それらの近くには、生の石炭が積み上げられていた」。

マクシモフにはポシエットはつまらなかった一方、マクシモビッチはそこで時間を有効に過ごした。多分、この地域では植物相は乏しかったにもかかわらず、ポシエット湾は学

者の期待に応えた。マクシモビッチは近くの全ての火山を這い回った。希な植物の豊作であった。これは当然であった：イワノビッチは、彼の友人が指摘していた通り、最も近いところでさえ、注目に値する何かしらを見つけることが出来た。

南沿海州では、植物学者を特に驚かせた、南方の木々の種と北方の木々の種の素晴らしい混合が。満州のクルミの大きな幹と並んで、アメリカの楓の枝が豪華に広がっていた。中部ロシアの白樺と樺に朝鮮ゴミン、ブドウ、サルナシの蔓が巻き付いていた。ここでは菩提樹とトネリコが唐松と樅と隣り合っていた。カール・マクシモビッチは植物の種と外見の多様性に歓喜せざるを得なかった。

植物学者は時々考えた、相変わらずの発見に喜びながら；

「きっと、神が地球に種をまいたとき、遠方の南ウスーリスク地方で手持ちの種がなくなった。それで、ポケットにある残りを掻き出して、ここへ播いた」。

アメリカ号は直にボシエットを後にし、ウラジオストクへの航路をとった。そこは、陸軍准尉コマロフを隊長として哨所を設置したところであった。マクシモビッチはボシエットに留まることにした、湾に停泊しているグリデン号に避難場所を見つけて。忙しい日々を過ごした、短い見学なども含めて：回りの火山へ、小川に沿って、湾岸に沿って。常時の湿気が旅行者につきまとった、が、今回はそれほど酷くはなかった。その時には既にボシエットの石炭採掘が行われていた。特別な苦勞をすることもなく、部屋の温度を適当に維持し、標本の乾燥もすることが出来た。

1860年9月16日、33歳の学者は沿海州から日本へ向かった。彼は植物界の比較をしたかった、沿海州と北海道の。北海道は当時全く調べられていなかった、植物分野で。この時から1861年末まで、マクシモビッチは北海道の海の港の回りの40kmの地帯を研究した。当時ヨーロッパ人に許されていた。日本の山岳地帯から種と植物の採集のために、彼は数人の若い日本人を引き入れた。彼らの中で特に際立っていたのは、須川長之助、田中、その他。後になって、1927年に、植物学者田中千代三郎が書いていた：「・・・我々は彼らの使命を友好的に迎え入れた、我々の豊かな植物相の巨大な在庫に目を向かせてくれるので。言っても過言ではない、日本は初めて文化世界を知るようになったと、この大量な標本の御陰で、全世界に配分された。1862年から1863年に、マクシモビッチは日本の多くの港や町を訪れた、地域の住民と知己となり、彼らの助けにより、科学のための貴重で新しい植物を大量に収集した。

マクシモビッチは、極めて困難な条件で仕事をするようになった。幕府は外国人に国内奥に入ることを禁じていた。国内戦は研究者に何時も退去する準備を強いた。なぜか生の植物は暑さで屢々ダメになった、それらの在庫を補充せざるを得なかった。ついに、1864年2月に、マクシモビッチは日本を去った、喜望峰を回り、ペテルブルグに到達した。沿海州と日本の植物相に関する貴重な資料と共に。彼は日本から、2500種の乾燥させた植物、400以上の生の植物を運んできた、大量の種の標本、数百の木の標本も。日本の旅行の結果として、彼は何冊かの本を出版した。

帰還してから直ぐに、1864年1月8日、マクシモビッチはロシア科学アカデミーの助手に選抜された。6年後にアカデミー会員に。

マクシモビッチは1891年2月4日に亡くなった、科学アカデミーの植物園の毎日の散歩時に風邪を引いて。彼は長年にわたってどんな天気の時でも、そこで散歩をしていた。

セメノフ・チャン・シャンスキイが彼について書いていた、「部屋に閉じこもりの学者ではなかった、並外れた博学の学者であった、自然の強大な殿堂で多くの仕事をし、長く働いた、多方面の教養を持ち、素晴らしい旅人であった、幅広く明瞭な見解を持った、疲れを知らない働き者、正確で注意深い、マクシモビッチ、活発な植物学者の内の一人、必要な資料をまとめた、彼によって鼓舞された偉業の完遂のために・・・」。

何よりもまず、マクシモビッチという旅人の記憶は植物の名前に残っている、彼が人生をかけて研究した。沿海州の豊かなタイガで、北海道の森で出会える、彼の名が付けられた、桜、スグリ、スイカズラ、ポプラ、同じように、植物相の一連の代表のものに。

領事館の新築祝い

1860年4月、ロシア領事館の職員達は新しい建物に引っ越した。建物は非常に小さかった、が、日本人の住居とは多くの面で異なっていた。特にロシア人は大事なことと見なした、パンを焼き、乾パンを干すことを：若干の人たちは日本食に全くなじめなかった。マホフが書いていた、「函館は、少しずつ、新しい建物で飾られるようになってきている、外国人の所有する、日本人のも；我々が領事の建物は既に完成していた、敢えて言うことが出来よう、それと我々が教会は町の中で素晴らしいものであったと」。

フィラレット司祭がロシア領事館に最初の教区を開いた。彼は1860年11月13日に教区のお祓いをした、その日に最初の儀礼をして。しかし領事のゴシケビッチは大きな事を夢見ていた。直ぐに、函館で、いや日本でも初めてのロシア正教の教会の建設に従事した。最初、その建物は別の敷地に建てられた。その後、移動し、新たに領事館に並んで建てた。教会は天主復活教会と名付けた。大斎期からその整備が始まった：女性達が整理整頓をし、綺麗にした、出来るだけ。画家を見つけ出し、幾つかのイコン画を描かせた。目撃者の内の一人であるカズナコフが書いていた：「我々は、ごく最近にパーペンベルグ島（ロシアのウラジオストクのルースキー島のノビック湾内にある小島の名前 *）を見ていた、そこからカトリックの司祭を海に送り出した。復活の名前で作られたキリスト教会の清めの儀式に参列することが出来た。他の日、我々の間で祈っているポルトガル人達（捕鯨船の船員）を教会で見た。奇妙な出来事」。

領事館の教会の司祭フィラレットは長くは函館に滞在しなかった。彼の退去は教会の職員であるイワン・ワシリエビッチ（マホフ）に強いた、ロシアの宗教教師の責任を引き受けることを。そこから、長い間に渡って、若干の混乱が生じた：ロシアと日本の歴史家はマホフを司祭の地位に昇らせた、明らかに、彼をワシリイ・マホフと混同して、遭難したデアナ号の司祭の。イワン・ワシリエビッチ・マホフは胸に付ける金の十字架を持っていた、かつて外務省のアジア局によって獲得した、それをイワン・ワシリエビッチは教会の新しい司祭ニコライに渡していた（俗界でイワン・ドミトリエビッチ・カサトキンに、その後の、日本におけるロシア宗教使節団の長に）。

マホフ自身は、建設の終了と共に、領事館の中庭の小さい家に彼のために予定されていた住宅に引っ越しをした。それは二つに分割されていた。一つには、4つの部屋からなる

書記の部屋、もう一つは日本の子供達のために学校が予定されていた。将来の生徒は既に奉行によって指名されていた。しかし、家屋には暖房がなかった。それで学校の仕事の開始は当分延期された。領事館の書記にペチカの設置の手を打つように命令がなされた。日本人の大工がいる間に、領事館のために家具、温室、他の小間物を作っている。

1860年3月、日本で、ヨーロッパの国々に関する本が出版された。それにはロシアについての頁があり、ピョートル一世の肖像画もあった：「彼は玉座に座っている、右手には、王笏を。とはいえそれは大きな棒に良く似ている。頭には王冠に似たものを、肩からは暗紅色の長マントを垂らしている」。本では他の図もありロシアの歴史に馴染める。

日本の司法制度

1860年6月初め、函館で日本人の処刑が行われた、幕府の倉庫に放火した。結果として、函館港が焼け出された。彼は厳しい拷問の末に、全てを白状した。東京の裁判所は犯人を火刑にすることを決定した。が伝統に従い、犯人に処刑前に食事をするのを勧めた。この食事がどのように進んだのかを、我々はマホフのメモから知り得る。彼が書いている：「残念ながら、この独特な場面に間に合わなかった。しかし、目撃者から聞いた。立派な漆塗りの容器と盆にそれなりの所作の元で遣わされた食事は非常に豪華であり、犯人の食欲を刺激しないわけはなかった；言うならば、この死の前の食欲と全くの冷酷な別れによって、犯人は、4つの方位（東、西、南、北 *）に普通の礼拝をしない、人々に大いなる憤激と軽蔑を引き起こした。

犯人を町での引き回しのために牢獄から引き出したときに、私は出会わせた。彼が門から出てきたとき、群衆の中から彼に向かってあつという間に顔を隠した女性が駆け寄った。犯人の妻ということであった。彼女はいくらかの別れの言葉を口にした。冷たいさげすむような笑いを返答に引き起こした；私は犯人の顔にいくらかの恐怖、絶望、敵意の表情を捕らえようと努力した。が、虚ろな平静さしか認められなかった。

門の所に、よぼよぼの老人が待ち構えていた。背中に鞍のある馬がやっと歩を進めていた。刑使が犯人を鞍に座らせた、彼を縄で縛り上げ、手を後ろ手に縛り。これらの操作が終わると、大通りに沿って行列が進んだ。触れ役が民衆に刑の執行について大声を上げ続け、行進を開始した；彼らの後に、手に長い棒を持った4人の兵士が従った；その後ろに、紙の印を持った一人の刑使。その紙には犯人の肩書き、名前、年齢が書かれていた。更に竿に板を取り付けたものを持つ役人、板には犯罪の種類と江戸で彼に下された判決が記されていた。これらの後に罪人が進んだ、その後4人の役人が拷問具と処刑具を持っていた：鉄製の熊手、歯の付いた槍、8本の長いトゲの付いた熊手、外に尖った釘を打ち込んだ竿；最後に、殿を勤める役人、乗馬で、行進用の着物を着て、処刑の責任者が。

私は群衆を追い越して前に進んだ、刑を見に行くことを喜んでいる。が、大騒ぎに驚いた、行列の接近が通りに引き起こしている；商人達は店を閉めるのに忙しかった、通りの商人は売り台から商品を取り込んだ、それらを隣の中庭に持って行った。女性と子供は家に逃げ込んだ、扉と窓を確りと閉じた。多分風習が禁じている、女性と子供が、罪人のよ

うな汚れた人物を見ることは、刑死を運命づけられた。それを一見することは商品を汚すということ。全てのものを家の中に。

処刑に指定された場所は、町から3ベルスト（1ベルスト＝約1km*）の所にある；草原に高い柱が埋め込まれていた。その左側に天幕が。右側に薪の焚き火と藁束。刑使が準備をした：綱で大きな木製のたがを巻いた、それに粘土を塗りつけた、土台の上に確りと固定した、柱がその中心になるように；その後、柱に桶を取り付けた、底を上にして。藁束でたがを囲い、下に薪を置いた；これらの準備は、しかし、未だ終わりではなかった。行列がやって来たとき、罪人は少しの時間見ることができた、彼のための焚き火がどのように準備できているかを。ついでながら、民衆は数千人に達していた；ざわめきと笑い声は保証していた、死刑、これはごくありふれた見世物であることを・・・

準備が終わると、刑使が罪人を呼んだ。彼を裸にし、顔を町の方に向けて桶の上に置いた。柱に縛り始めた、綱に粘土を塗りつけた。縛り付けるのに半時間以上かかった、結局、罪人は耐えきれなかった。早くやってくれるように刑使に頼んだ、遅いことで役人を罵った、判決の執行者を。

ようやく全ての準備が終わった。罪人の足下から桶を取り外し、彼を藁で囲った、全ての方面に着火した。民衆は沈黙した；炎は燃え上がり、薪と藁の弾ける音がした。が、不幸な人は短時間苦しみ、焼かれることなく、直ぐに煙と炎で絞め殺された。

3分後、刑使が手かぎで藁を取り除いた、薪に水をかけた。我々の目には残酷な様子が見えた、焦げて膨らんでひび割れた遺体が・・・役人の命令に従って、処刑者の死を確りと確認するために、刑使は顔に燃えている藁束を当てる、しかし、無駄であった。彼には生の存在は見られなかった。遺体はそのような状態のまま2昼夜残された。刑使が首を切り、彼を埋葬した。」

東京では、罪人の公開処刑がない日は無かった。処刑の方法は様々であった：十字架での磔、胸を刺す、鉄製の爪で体を削る、その他。ある藩士の殺害者は判決を受けた、「公開釜ゆでの刑の、熱い蒸気に、罪人に甘い液体を一面に塗られ、開けた広場で柱に3日間縛った。

マホフの意見によれば、ひっきりなしの処刑はそれほどの恐怖を引き起こさなかった。日本人は、それなりの教育の元で死に対して平静であり、自分の命を大事にしなかった。

マホフは書いていた、「この年（1860年）の始めに。町のある通りを乗馬で進んでいたヨーロッパ人が鞭で、彼に道を譲らなかった日本人の役人を打った。悔しくなった役人はヨーロッパ人を馬から引きずり下ろした、刀を引き抜き、彼に斬りかかった。もちろん、死の一撃を、近くの家から、これはイギリスの領事であるとの大声が無かったならば。役人は何も語らず、怖じ気づき、どぎまぎしイギリス人を手から逃がした、家に逃げ込んだ。鞘に刀を入れないで、この人物は役所に出頭し、自分の犯行を自白した。彼に下した、”まあ良かろう、殺さなかったのは無駄であった、お前は法を知っている、誰かに対して刀を抜き、それを実行していない、そのために刀を引き抜いた、自分の意向を成し遂げる。そのようなわけで、自分の血で汚名をそそぐ・・・” 役人は切腹した」。

1860年の夏

1860年初めは、函館は悪天候続きであった。しばしば、風が吹いた、が、雨雲を吹き払ってくれなかった。しばしば、冷たい雨が市民の頭に落ちた。7月初めになってようやく、天候は慈悲をかけてくれた、好天の日が訪れた。ニコラエフ経由して受け取った手紙は時折1年も経っていた。船の寄港は無かった、船はニュースを伝えてくれるのだが。

ロシア船の来航が、領事館の職員達に大きな喜びをもたらした。1860年7月4日、函館に輸送船ヤポーネッツ号がやって来た、第10オプリチニク号、この船のエンジンは修理を要していた。1860年7月19日、停留地に、アメリカ号がやって来た、この船には海軍少将カザケビッチが乗っていた。投錨には勇壮な音楽が伴った。この後直ぐに、領事の所で盛大な宴会が行われた、再び音楽を伴って。これは領事館に多数の住民達を引きつけた。夕方には、日本人の役者達が三部作の「幻灯」を演じた。

単調な町的生活は時折、祝日では生き生きとした。その日には、通りには賑やかな行列が現れ、夕方には、灯籠が備えられた。2年連続して、8月11日に、マホフは函館の祝日を見た。それは「タナバタマツリ」(=七夕祭り *)と呼んでいた。即ち、こと座の生け贄の祝日 (? *)。日本人の話と祝日の歌の内容を基礎にして、彼は理解した。祝日の行列はこの星座に対する感謝の気持ちの表れであり、恵まれた大量の豊作に対して、米、豆、他の野菜の、素晴らしい春の魚の豊漁に対して、全体として、国の真の平穩無事に対して。

祝日の準備は数日前に始まった、町のいろいろな箇所で行われた、寺院の近くが優先的に、屋台を作り、近所に住んでいる2歳から6歳の子供達がその上に集まった。子供達は容赦なく朝から晩まで、屋台に吊されている大きな太鼓をたたく。この音に恋歌が伴っていた。ロシア人が理解できた、この恋歌の最初の意味は次の通りであった：「今年は、全ての食物が豊作であった、そのことで、こと座に生け贄を私たちは献げる」。恋歌を子供達に大人の役者達が教えた。夜毎、太鼓の音で楽しむことを見逃さないようにして。

マホフが書いていた、「子供達の恋歌の中途と終わりを、私は引用しない、言葉が本当に下品で、印刷にふさわしくない。しかし、日本人が祝日に歌っている他の歌の意味を伝える：私は喜んで波打つ沿岸の植物を見る、畑の産物に実った穂を見る、楓の葉の黄金色の移ろいを見る、人生は流れゆく、川のように、水は元には戻らない。私は疑っている、この祝日を私はもう一度見るのであろうかと。」

屋台以外に、さらに大きな手のこんだ彫刻を持った馬車が作られた。このために、一つ或いは幾つかの通りが仲間として団結した、独創的なアイデアで他の通りを動かそうとして。祝日の前には、全ての馬車は大通りに運び出された。そこへ父親達は自分の子供達を連れだし、長い丈の竿に着けた紙の灯火を持たせた、花と多色のテープで飾られた。子供達には新しい明るい祝日の着物を着せていた。子供達の頭、通常何か所かで丸く剃っている、頭頂部にポマードを着けた櫛を持った。この日、黄色のスカーフを巻き、その端を耳の後ろに吊していた。少女達は輝いた黒髪をしていた、上になでつけられた、沢山の長いヘアピンで固められて、銀色、金色、ガラスの。それらの端には金色や銀色の下げ飾り、葉や果実や実を現している。子供達の顔は米ぬかがたっぷり塗られていた。これ以外に、

女子には、剃られた眉の代わりに、額に2つの丸い跡のように墨を塗り、唇は真っ赤に塗られていた。広い袖のある長い絹のガウンは少女の上半身を滑らかに包んでいた。幅のある黒い帯、結構大きなリボンを後ろで結びあげている、少女の着物の仕上げとなっていた。

祝日前日の夕方7時に、全ての準備が出来たとき、行列の順序を決める幹事が拍子木を打った。叫声と歌を伴った行列は、太鼓の轟音、横笛の音、馬車のきしみ音のもとで、大通りを奉行所に向かって動いた。そこには奉行と上席の役人達の特別席が設えられていた。

「行列は創意工夫をこらした多数の馬車から出来ていた。私はそれらの内の幾つかだけを記憶しているだけであった。最初の部には、2人の7歳の子供の行列が先頭にいた、小さい馬車を引いて、それを紙製の魚で飾った；彼らの後に、年配の日本人達がこと座の象徴を手引きしていた、足から頭まで白装束の7歳の娘を、頭には王冠をもした金属製の帽子を持った。80人以上の人々が大きな馬車を引いていた。その下の段には、元気な楽団と太鼓打ちが座っていた。上の段には子供達からなる合唱団；その上には、高さ3サージエントに、紙製の岸壁、その頂上には鳥が止まっていた。足下では音楽に合わせて狐が後ろ足で立って踊っていた、前足に葡萄を持って。この馬車の後に2台目が続いていた、高い塔を持った。それには琴座のために普通の女性用の木製の枕が置かれていた。そして、ようやく3台目が、山と川を持った、そこから日本人は魚を獲っていた、琴座によって恵まれた。

次の部では、馬車に目を向けないわけにはいかなかった、特別な尊敬と音楽を持った。顔を隠した70人の日本人達が曳いていた；この馬車には、紙製で、内側から効果的に照らされた男女の像、豪華な祝日用の着物を着た、天皇の妾と高貴な日本人を現している。

更に田んぼを持った馬車を引き回した、巨大な地球儀、回転し、内部で照らされた老婆の魔法使いを、全部が赤色で爛々と輝く目をした。そして、大きな2階建ての馬車を、その下の横列は楽団が占めていた、上では、踊り子が住民の注文に従って踊っていた・・・

これら全てに、無数の灯火、太鼓、子供の歌い手のグループと群衆が付け加わる。

最初の行進は1時間で、砦の所で泊まった。朝5時に道を動き出した、祝日当日の。馬車はかけ声、歌、太鼓の音を同じように伴って、大通りを行ったり来たりした、夕方遅くまで。行列に参加している観客は楽しむのに疲れていない。家に帰らないで、深夜まで宴会をやるために。琴座が好む恵みで饗応して」。

1860年10月10日、日本人には5番目の年祭があった、キクノエッカ（花の年祭）（？ ＊）という。マホフの視察によると、「それは大地の産物全ての夏における豊作のために神への感謝に献げられた。祝祭の特徴は次のようであった。朝早くに、幾つかの秋の花を採集し、主人がそれらを横たえるか、器に収める。そこに酒を注ぐ、神棚の前に数分間置き、その後戻し、少し飲む。彼の家族全員もお祝いとして。この飲み物を聖なる祝福すべき神によるものとして、それ故病気に効き目のあるものとして。家の老人以外のものの誰かが容器に触れる。特に女性は禁止されている。

役人階層は正装で初めは奉行の所に挨拶に行った。その後、お互いに訪問を交換し合った。

函館ではこの祝日は、余り目立たない。が、日本島（本州のこと ＊）では、この祝日を盛大に祝う。我々のみすぼらしい小さい町の函館で、何か確りしたものを見ることを待つことが出来るのか？ それにより、日本についての理解を打ち立てる可能性がやって来

るような。住民の貧困、常に厳しく寒い気候、地域は慣れることからほど遠い、これが函館である。ここには日本のあのような堅苦しい上流階級は無い、以前の作家達はそれでもって我々を驚かす：珍しい植物は無い、天恵の場所、先の旅行家達が気に入った。日本について記述した紳士達は本州にいた、そこは日本人自身の評価によれば、全てが素晴らしい；松前島（蝦夷）に住んでいる日本人について彼らは何を語ったのか？ 或いは、どうでも良い、あるいはそれを無鉄砲にこき下ろした」。

こっそりと、函館の若干の住民達は賭け事「バクチ」をしていた、幕府が禁止している。「バクチで摘発された日本人は、次のような刑罰に処せられる：50回から150回の鞭打ち、尖った鉄釘を密に打ち込んだ金属板にぴったりと付ける；或いは、入れ墨と遠方の鉱山での重労働への永久追放；或いは、牢獄での飢え死に。ロシア人の誰かが興味を持った、ある日本人における、そのような厳しい刑罰についての理由について。彼は答えた、「博打で負けて、直ぐに泥棒をした。泥棒は自分に罪がある？ 他でしょう」 いつだか、アメリカ人の商人の一人であるビルケが夕方遅くに、コミタ（？ *）村を通過していたとき、タバコを吸うことにした。が、彼にマッチの持ち合わせが無かった。彼が家に近づいたとき、そこから大きなざわめきが聞こえた。そこで彼は約30人の博打の参加者を見つけた。彼は冗談に参加者に話しかけた、主催者に取り次いでくれるようにと。この冗談は彼には高くついた：彼は外へ出ることが出来なかった、攻撃され、半死になるまで打ちのめされた。苦勞して、アリブレフトが彼を蘇生させた。傷は商人を数ヶ月間にわたって心配をかけたが。

幕府は素早く犯人を見つけ、彼らを監獄に送りつけた。どのような厳しい刑罰が待っているのかを理解し、博徒の内の一人は全ての罪を認めた。幕府は先に進めなかった。拷問の御陰で、彼らは白状した。その後、首謀者を斬首し、他の者は体罰を下して、北海道の遠方へと追放した。

冬の準備をしながら

1860年10月20日、函館で厳寒が始まった。何度か雪が降った。温度の低下と共に、町ではアメリカドルの為替の低下について頻繁に話題となった。円（日本の通貨単位、1871年（明治4年）に開始、従って1860年にはこの単位はない。日本の通貨単位として著者が混同使用 *）との交換にドルを支払うために、上手い商売の後に交換所にやって来た日本の商人達を細かい尋問にさらした：何を売ったのか、どれだけの円で、誰に。支払いで、結構な部分が町のために差し引かれた。継続する円の高さのために、外国人には大変であった。最初、領事館に立ち寄り、彼から為替の交換の許可を得る必要があった。その後、交換所次第であった、そこでは待機のために多くの時間を必要とした：若い役人は最初から年配の役人を頼った、彼から何も無かった、即答を待つ。再び、町のために幾ばくかを支払う必要があった。。

ロシア領事館は見なしていた、現地の市場はロシアの商売にとって極めて好都合であると、その安値故に。大きな興味を引き起こした、「今のところ安い絹、豪華な漆塗りの品」

が。

1860年10月31日、イギリスの企業家ポルテルの家が燃えた。これは放火であったという噂が広まった。11月11日、新しい火災が。その結果、20家屋以上が燃えた。日本人の消防士（火消し *）達が投げやりな仕事をするに、ロシア人達は驚いた。マホフ（前述の人物？ *）が書いていた：「火事を消火するにおいて、大きな紙製の団扇以外に日本は持っていない、ヨーロッパで要求されているようなそれなりの道具を；隊員と役人達は火災に行進して向かう、ゆっくりと、多数の下僕達と、灯火を持って、上等の着物を着て、日常では見かけることが無いような：肩に、前掛けに、幅広い帯びに、奇妙な帽子に、金や銀の大きな記号を縫い付けている；白い紙製の肘までの手袋；着物は全て模様のある絹製；言うならば、頭から足先まで仮装衣装、素晴らしい！ これらのしゃれ男達は火災現場で何をするのか？ 離れたところに立って見ている；風下の位置から隊員達は声を上げて、火災に向かって団扇を仰ぐ！

火災が収まると、奉行は同じように派手な色彩の着物を着て、多数の従者や下僕を従え、火災現場を見にやって来る；火事は酷かったのか問いかける、そして、元へ戻る。彼が通るところでは、全員がひれ伏す」。

ごく最近に、函館は外国人に開かれた。普通の日本人の家屋の中に、最初のヨーロッパ人の建物が現れるようになった。町の景観を活発にしている。そして、しばしば西洋人を見かけることが出来る、函館の中心を妻を連れて散歩をする、或いは乗馬で郊外のピクニックへ急ぐ。日本人を特に驚かせたのは、女性達—女医アリブレフトとアメリカの商業支所の妻ミス・フレットチェルーの乗馬の姿であった。

日本人はヨーロッパの贅沢を急速に受け入れた。「そこでは、新築の小屋を見かけた。が、大きくなった、正に突然に。小屋では無かった。中二階、渡り廊下を持つ完全の家屋。日本人の大きな店舗であった。部分的に西洋の商品も扱う。新しい構造の家には密に並んだ障子は無かった。正方形や三角形の大きさの最小のガラスを通して、通りで日本人の特徴が見られる。他の家には、椅子や腰掛け、西洋のワイングラス、コップ、皿・・・を見つめることが出来る。更に、ヨーロッパ人の教養に不満を持った日本人がぶつきらぼうに懐から鎖付きの時計を引き出し、それを引き合わせることを願い出る；他の者は鼻に緑色の眼鏡をかけている」。

日本人の教化は大躍進をした。何世紀にもわたる夢から目を覚ました国は逃していた物を急いで取り込むことに努力した。英語の通訳が沢山出現した。日本人はロシア語を勉強するようになった。以前は日本人に先生として無理に迫っていた、が、現在は日本人自身が領事館にやってきて会話をしていた：私たちはロシアの隣人である、我々の所にはロシア語の通訳がない、我々に先生を紹介してください、生徒と教室は既に準備できています！

日本で起こった変化は、芸術部門に顕著に影響した。以前は、日本の絵画芸術とは江戸から運ばれた安っぽい浮世絵だけを知っていた。しかし、函館で、1861年に、2冊の本が売りに出された。それには、アメリカへの最近の旅行が記されていた。それには海外の絵とアメリカ人の肖像画があった。日本人は知ることができた、同国人の世界を回った旅行の結果を。

1860年11月7日、函館にコルベット艦（帆船の1種 *）ボエボダ号がやって来

た。それには領事館の新しい書記チビリコフが乗船していた。サンクトペテルブルグ大学の中国学部を修了した。郵便を運んできた。ナジモフはロシアへ帰還する許可を得た。函館の小さいロシア人団体は将校の差し迫った出立についての知らせを寂しい気分で受け取った。「残念、ナジモフのことで領事館は多くの物を失うことになる」。実際において、ナジモフは多くのことをやっていた、函館湾の建設のためだけではなく、日本船の建造にも参加していた、湾に最初の灯台も建てた、それはコルベット艦ジギット号に備わっていたものであった、彼はここの小さい団体の中心人物でもあった。

ロシア人は最近のニュースを議論した、長崎では外国人のための建物の建設の場所を分与するという。パサドニク号の船長に日本人のための学校を開校することを許可した、ロシア語を教えてくれる。函館ではこのようなことは全くなかった、夢であった。

1860年11月20日、函館へボエボダ号に乗って、海軍大佐リハチェフがやって来た、海軍大将コンスタンチン・ニコラエビッチの副官である。最近建築された大使館の視察の時に、ゴシケビッチは喜んで大使館を紹介した。リハチェフは大使に、ボエボド号に乗って長崎を訪れることを提案した。ヨシフ・アントノビッチ（・ゴシケビッチ）は喜んで同意した。11月26日、妻と一緒に航海に出た。大使には仕事が詰まっていた、が、彼の妻は日本についての文化や風習について記録を残したがった。マホフが書いていた、「この文学作品における彼女の手伝いに、アメリカ人商人フレトチェルの妻も一緒に出航する。私は前もってフランスの新聞に挨拶をする、日本についての興味ある情報を持って；ロシア人を惜しむだけ、ゴシケビッチ夫人の興味を引く記録は、長崎への彼女の最近の訪問と同じように、去年の冬における江戸への旅行記は既にフランスの新聞から転載されている」。

対馬での衝突

クリミア戦争（1853年から1856年 *）における最近の敗北を回想して、ロシアは極東におけるイギリスの立場の強化を憂えた。とにかくこれに抵抗した。抵抗手段の内の一つは、ロシアによって日本海沿岸を占領することであると見なした。特に、ピョートル大帝湾で。コンスタンチン・ニコラエビッチ大公は、そこに設置された新しい哨所のことを知って、リハチェフに書き送った：「君は全く若い、想像で私は君を心から抱擁する！・・・君の手紙を全て、私は皇帝に読んで差し上げた、彼は非常に満足した、君の管理能力と機知に・・・」。

これに関して、ムラビエフ・アムールスキーがリハチェフに手紙を送った：「30年間変わらぬ私の欲求—その種の達成への、ロシアが東海において持たなければならない—は私に若干の権利を与え、私を職務に就けている。心から貴君、イワン・フェドロビッチ様に感謝する、ノブゴロドスク湾の開設において」。

多分、イギリス人による対馬島の占領についての噂は全く根拠が無い。しかし、ロシアはそれについては深刻な態度をとった。考えられていた：この島に陣取ることができる者は、完全に管理するであろう、日本海だけではなく、極東全域を。リハチェフ（艦隊司令

官 *) の日記に書き込みが現れた：「ナホトカは素晴らしい投錨地である。日本海において1年を通じて凍らない港としての対馬の優位性は秀でていた」。

1861年2月20日、太平洋艦隊指揮官リハチェフはコルベット艦パサドニク号に対馬に向けて出向するよう命令を出した。そこへの到着に関して、コルベット艦の艦長海軍大尉ビリレフは日本に説明した、イギリス人による島の準備された襲撃について日本人に警告するためにやって来た。対馬の兵舎を破壊し、ビリレフはそこに信号所を設置した。

幕府は島でのロシア人水兵の存在に強く反対した。5月に、対馬へ幕府の全権代表小栗忠順がやって来た。彼が要求した、ロシア人は島を出るようと。ビリレフはこれを拒否した、そして宣言した、「上司の命令無しで対馬からは、去らない」。

対馬島は函館から遠距離にあるにもかかわらず、この問題は領事のゴシケビッチが扱うことになった、江戸からの指示に従い、函館奉行村上淡路がこれに対応した。ゴシケビッチはロシアの水兵の行動には完全には賛同しなかった。これは日本との揉め事を起こすことになるので。彼はリハチェフに助言した、ビリレフを呼び戻すようと。ロシアの外務省の指示に従い、幕府に説明をした。対馬の海軍基地はロシア政府の裁可無しにリハチェフとビリレフによって造られたものであると。幕府はその説明に満足を示した、これで対馬での事件は消滅した。後になってリハチェフが書いていた：「多分、我々はただ一つだけをなした：イギリスにこの島を占領させなかった」。

日本の将来の洗礼者

日本におけるロシア人の生活において重要な役割を正教会が果たした。日出づる国（ロシア人による日本の別称 *) において、正教はロシア人の生活の要であった、文化団体の基礎であった。困難なときには、ロシア人は信仰に助けを求めた。正教の祝日はロシア人にとって、皆が一緒に集まる理由となった。

日本における正教使節団はニコライ司祭（俗名カサトキン）によって1861年に開設された。まさにその日に始まった、彼が完全に無意識にある紙に視線を止め、次のような文章を読んだとき、「日本に函館大使館の教会司祭の職務で派遣されることを希望しないであろうか、指定された国での正教の布教に参加する者は？」 未来の使徒ニコライ・ヤポンスキーが日記に書いていた「この日、夕べの祈りのために私は日本に属している」。彼は1836年8月1日に生まれた、スモレンスク県ベリョズ・ベリスキイ地区の村で、村の輔祭の家族に。聖なる予言者、予告者、洗礼者に因んで、子供はイワンと名付けられた。家族は極貧であったが、子供はベリスキイ神学校で学ぶように送り出され、その後、スモレンスク・セミナールに。1856年、彼は優秀な成績でセミナールを終了し、国費で、サンクトペテルブルグ神学大学に入学した。

1860年6月、24歳のイワン・ドミトリエビッチ・カサトキンは剃髪式を受けた、ニコライの名前の命名を持って、主教、奇跡者、海洋旅行の保護者に因んで。そして司祭に叙聖された。既に8月1日、彼はシベリア経由で日本に出発していた、函館の領事館の教会の司祭の仕事に就くために。しかし、1860年の最後の航行の蒸気船が遅れた、ニ

コラエフスク・ナ・アムールで越冬した。

そこで、1860年ー1861年の冬に、ニコライ司祭はインノケンチエ主教と出会った、シベリアとアラスカの啓蒙家である。主教は司祭を祝福し、日本語の勉強に本腰を入れるように助言した。司祭用の聖衣が大分着古していることに気づき、主教は質の良いビロードを購入し、自身でニコライ神父に聖衣を裁断した。そして、それに自分の付与された胸に付ける十字架を供えた。

1861年7月2日、ニコライ司祭はアムール号に乗って、日本の函館港に到着した。彼をゴシケビッチ領事が出迎えた。若い司祭に日本での生活について詳しく知らせた。彼は話した、日本ではキリスト教禁止の法律が効力を持っているだけでは無く、全般的に外国人を嫌っていると。領事は若い伝道者に日本語、日本の歴史と文化の勉強を始めるように提案した。

ニコライ神父は鈴木陸平の所で日本語を学んだ。同じく彼の先生となったのはセムシの木村良吉であった、大館出身の。彼らのどちらかが、子供の時、ゴローブニンを見ていた。これについてニコライ神父に話をした。ニコライは函館におけるゴローブニンの痕跡（1811年から1813年）に興味を持って探した。大分後になって、1897年に、軍艦リュリック号に乗って、横浜にゴローブニンの孫である海軍大尉ゴローブニンがやって来た。彼はニコライ神父に出会い、彼に大いに質問した、彼の祖父の日本訪問の証拠を函館で神父が見つかること出来たことについて。

ニコライ神父は宗教の研究に特に惹かれた、日本人に広がっている、仏教、神道、儒教に。7年の疲れを知らない努力を経て、ニコライは広い博学を得た、日本の尺度に関してさえ。彼は英語を習得した。日本では英語は外国人との交流のために一般に通用するものと見なされていた。漢字に馴れるにつれて、彼は文学や芸術に関する本、仏教や儒教の宗教的傾向のある作品を読むようになった、領事館の図書館にあった。ニコライ神父はフバンジョウ寺（？ ＊）に立ち寄り、マクト宗（？ ＊）の教義に親しんだ。若い司祭は儒教の研究に取り組んだ。日本の宗教家と儒教の思想について議論をし、彼はそれに独自の解釈を与えた、それは特に日本人の興味を引いた。

その後、1865年に祖国へ帰還した後、ゴシケビッチが書いていた：「ニコライ司祭は、我々の領事館の中で活動的な人物の内の一人であった。短期間で、彼は日本語を研究した、自由に説明できるほどまで、あたかも友人のように、通訳の助けを必要としないほど。この状況は、彼の適応性の性格とも関係し、彼を日本人に密接とさせることとなり、彼は多くの友人を作った」。

領事館の教会の主任司祭は、日本人に関する多くのことに興味を持った：出来事、天候、経済、歴史、人口動態学に。彼は日本人の生活を観察した。彼らと交際しようと努力した。町を歩き回り、異教の寺を訪れ、仏教の布教者に耳を傾けた、僧侶と話し合いをした。ニコライ司祭は注意を向けた、平民の教育がロシアより高いことに。特に、「歩く図書館」が彼をビックリさせた：日本人は函館や郊外の村の住民達に安い値段で本を配った。彼は新聞「東沿海地方」に記事を書いた、ニコラエフスク・ナ・アムールで出されている。

権威あるキリスト教の布教者の内の一人であるニコライ神父は大いなる尊敬を利用した。彼を教会葬を行うように招聘した。プロテスタントもカトリックも。カトリックのポルトガルの領事の妻は死にそうな夫に引導を渡すことを願い出た。

ある時、ビリレフはパサドニク号の将校達と火山である松ガ岳へのピクニックを計画した。それにニコライ神父とアメリカ人のワルシュを招待した。水兵達は夜会の特徴についてロシアの司祭に警告をしなかった。それは厄介なものであった。夕方遅くに旅館で、彼らの前に芸者が現れた、夜会はみだらな出会いと変わった。それを見てニコライ神父は、深夜にもかかわらず、夜会を抜け出した。多分、函館は闇の中であった、司祭は崖で馬から落ちた、左足をけがした。彼はそのけがを完治させることは出来なかった。足の病は彼を長年にわたって苦しめた。

日本での生活の初年度においては、ニコライ神父の状況は極めて複雑であった。最初は、彼をヨーロッパのスパイと見なして、彼に犬を放った。出会った侍は刀で司祭を脅かした。これは対馬事件の時のことであった。司祭自身が日記に書いていた、大分後年になって、歴史家の飯島半重郎が東京の彼の所にやって来た、「1861年の対馬事件についての証拠を私の所から横取りしに。奇妙な挨拶で始まった：

—当時、貴方は仕事を片付けた、それについて詳細な証拠を持って、等々。

一度ならず、このばかげたことを私は聴いた。その出所は地方ではなかった：即ち、私は宗教の先生ではなく、政治エージェントである、帝国の「教会の長」の使節である、対馬へのロシア軍艦の襲撃のような遂行する権力を持っている、しかし、その代わりに、良民による尊敬への全ての権利を奪われた、—日本の政治的誘惑者、ロシア人による征服に対してそれを準備している」。

ロシア文字

日本語での会話をまあまあ習得して、イワン・ワシリエビッチ・マホフ（？ ＊）は暇な時に「ロシア文字」の本を作ることに決めた、1861年のクリスマスに会わせて。祝日に日本の子供達にプレゼントするために。表紙に彼は書いた：「日本の子供達へのロシアの役人のプレゼント。ロシア文字。マホフ出版。函館、1861年」。2ページ目にメッセージが：「可愛い子供達へ！ この教本をとりなさい：読みなさい、書きなさい、そしてロシア語で話みなさい。マホフ」。

マホフが書いていた、「暇つぶしに、ここで何かまともなことをしようと、長い間私は考えていた。植物を採集すること、私の周りには植物学者は沢山いた；昆虫、この分野には愛好者がいる；貝殻、これにはうんちくの者達がいる；剥製を造ることは出来ない、吐き気がする：何をするか私は考えた、例えば、露日入門書を作ること、これをどのように出す？ 印刷と手書きの文字を4つの型で描くことにした；難しく、地味。が、中々良く進んだ。全ての文字を描き、それらを日本語での発声を記し、私の知人の日本人に紙を見せる；殆ど間違いなく小言を言う、日本人は俺に書かせろと頼んできた。

私が語る、

—これは大変な仕事だ、ロシア語の勉強のためには、一つの教本だけでは不十分だ；何か良い方法を教えてくれ、函館に印刷所はあるのか？

—ない、全ての本は江戸と京都で印刷されている。

—そこではどのようにやっているのか？

—まず最初に、言うならば、彫刻師が板に文字を切り出す、それから紙に写し取る。

—函館には、彫刻師や印刷士はいないのか？

—力量が無く怠け者であるが印刷士（＝摺師 *）はいる。本の彫り師はいない。ただ彼らは寺の彫刻を時折彫っている。

—彼らがロシア文字を彫ってくれないか、彼らと話そう。

私は思った、函館はまんざらではないと。仕事を進めることにした。何もすることがないのは退屈である。ロシアで私の意向を既に実現している期待を持って、私は完全な露日教本を作った。印刷用文字でタイトル頁を書いた。それに前の2頁分を追加した。突然に私の知人が彫り師を連れて現れた。手でページをめくり、彼はやってみることにした。私は最初のタイトル頁を彼に渡した。私の彫り師は、3日経っても、5日経っても現れなかった。8日目によく現れた。彫り師が語った、

—難しい、小さい文字を彫ることが出来ない。

—君はタイトル頁を彫り上げた。そこでは、文字は小さく、複雑だ。

—難しい、出来ない、一日夜12時まで座っている；女房が罵っている、安く仕事をとったと。

—ええと、君は、私は思うが、仕事代なの？ で、君はどれくらいを希望するのか？

—1枚で5分（日本の江戸時代の貨幣単位の一つ *）！

—承知した、では仕事を続けてくれ。

板を掴み、次重吉は女房を喜ばせにかけていった、42コペイカの追加分について。6, 7, 8枚目の板を彫り上げ、そこには既に幾つもの例がある、多音節の文字の読み方の演習、**ъ**、**ы**、**ь**、前置詞での例、次重吉は再び愚痴った：「難しい、出来ない、女房が罵る、安いと」。遅すぎる、お前さん、私は思う、君はし始めるのが遅かった！ 教本の終了まで2枚だけが残っている、語群、熟語と短い会話についての。

—どれだけ必要か？

—1枚で7分！

—やってくれ、進もう！

次重吉は跪き、地面にドシンとお辞儀。

—君の妻はどうなの？ 私は彼に聞いた。私に聞いた。

跪き、床に頭を付けて、弱々しく、そこからシーンという音が聞こえそう：

—本当に感謝していた、平身低頭を送り、平穩無事を希望している。

最後の板の角に、彼の名前を刻むように彼に頼んだ、彼がこの文字を刻んだということの証として。私の彫り師はこれに喜んだ、最後の板に、修正することなく刻んだ、将軍の花（桜）までも刻んだ。正しく言うと、彼の文字は不格好であった：6枚目の板から、彼は鼻眼鏡をかけた；終了に当たって、私は彼に話し合い以上の8分を贈呈した。それから、日本人のやる気なさ、鈍さ、無気力の見本の例を貴方に提示できる、摺師である泰吉の；本当に、この怠け者の親玉は時間もインクも惜しまない、絶え間のない休憩、煙管での喫煙、お茶飲み、何かにつけて悪人。彼の仕事は、地獄の拷問であった、全ての忍耐への。

新しい日本の年に向けて、100冊以上の教本が準備できた。特に、ロシアの郵便用紙の2冊は絹の表紙を持ち、1冊は多色の郵便用紙で、より上等な絹の表紙を持っていた。

これら3冊は図入りであった。最初の2冊は私から、新年の日（1月29日）に、函館奉行と副奉行に贈呈された。最後の1冊は将軍への進物として奉行に渡された。これら以外に奉行に提出された、私から子供達へのプレゼントとして：100冊が函館の人に、100冊が江戸、京都、長崎に。奉行と副奉行はプレゼントに非常に満足していた。将軍のための教本の豪華な装飾に驚いていた。その後に、私が語った：“さようなら（プロシヤイチェ）”、初めて、私に手を差しだし、教本を読んだ：“プロスチャイチェ”、最後に、教本を見ないで、直ぐに握手をし、はっきりと答えた：“ダスビダーニア”。昨日と今日で、私の所にやって来た日本人の子供と大人に50冊の教本を配った。

マホフの愚痴にもかかわらず、教本は非常に良く作られていた。ロシア語の次の教本は函館で、5年後に作られた。日本人がその教本を作った。

イワン・マホフが見た日本人の生活

マホフは、日本人の生活の興味ある観察を、紙に記しておくという、価値ある特技を持っていた。彼は注目すべき出会いを一つも見逃さなかった。記憶すべき出来事も。彼は自分の記事を定期的に雑誌「海洋選集」に送り続けた、そこでは喜んでそれを印刷した。

「君は何を売っているのですか？」 私は町からの帰り道で日本人に質問をした。2つの桶を肩に天秤棒で担いで、熱心に大声で二言を怒鳴っている。

—サケ！（ウオッカ）— 彼は答えた。店での販売以外に、仲買人は通り沿ってウオッカを運ぶ。ありそうも無いほど安い、ロシアの単位の1シトフで8コペイカ。（シトフロシアでの酒の量の単位＝1.23リットル *）ウオッカは米から作り、強い、嫌な味、塩辛いキュウリの香りがする：ロシア式では、酒とつまみが一緒と言うことになる。

酒は一般に異なる名称で細分化されている、多かれ少なかれ強い、いろいろな値段で売られている、日本人にとってとるに足らない。君が問いかける、

—それで、日本人は喜んでそれを買って、大酒を飲むのか？

—そうだ、買う2コペイカと、5コペイカで、しかし、通りに酔っ払いを見かけることはない：喧嘩の騒音、話し声をロシアでのように、聴くことはない。

知り合いの役人が私に語った、

—日本人は酔っ払うことを恥じる、追従者だけではなく、自分の家においてさえ；日本人は十分飲む、日本人はおとなしく。ロシア人の水兵、アメリカ人、イギリス人は酔っ払い、喧嘩をする；ハナハダワルイ！（日本語 *）

役人は幾らか正しい：1859年夏に、埠頭の所に住んでいて、私はよく見かけた。酔ったヨーロッパの水兵達の間を血を流す場面を：正にどう猛な獣；つかみ合い無し、大げんか無し、出血無しでは、ヨーロッパの船乗り達には楽しい酒宴は無し。上陸する必要がない。

「12月と1月に、ここに本格的な寒冷がやって来る。5度から9度のマローズとなる；強い突風が吹いた、海はざわめいた、雪が降った、ヨーロッパの櫓の滑り木がきしみ始めた、日本人の下駄が音を出し始めた。彼らは筋があり草製のマントにくるまった。哀れ、

本当に哀れだ、冬の極寒に日本人を見るのは：一人の頭はぼろ切れで巻き付けられている、他の者の足は靴に沿って葦で作った袋；正にぼろ服、これは継ぎを当てた麻布のマント；手が見えない、手は体の中で温める、顔は青ざめ赤紫色；かわいそうな人は震えている、頭からぼろ切れをひつつかみ、手を膝まで伸ばす、二本差しの役人の前方、遠くから見つける。

私は知人に問いかけた；

－なぜ、函館の住民達は暖かく着こなさないのか？ ここには、沢山の熊や獣たちの毛皮がある、ぼろ切れよりは綿の着物はより暖かいだろうに。

－幕府を信じていない。日本の島ではそのようなものである。

－そう、そこは暖かく、ここは寒い？

－日本では変える必要は無い、それが古来からの風習：人々は高慢になり、その後それを抑えることが難しい。

さて、このこのニュースに戻ろう：江戸で、新しい物が出された、以前は大きかったものに代わり金の小さい貨幣が：小判。その小判2枚の重さはロシアの半インペリアル金貨1枚と等しい。小判1枚の価値は約2ルーブル。日本における金は安い、この金の純度は私は知らない。約2ルーブルの価値を持っている小判、重さでは半インペリアル金貨と同じの、実質的に純金製であった；相場師は利益を理解し、大富豪として既にヨーロッパに出発していた。

語られている、3隻の船で江戸に到着したプロシアの領事が、幕府に要求していると、日本とプロシアの通商条約の締結を。日本は以下の口実でこれを拒否した。既に、5つの国と通商関係を持っているのでそれ以上は必要が無いことで。日本は理解していた、多くの国がやって来ることを。この件の結末を知ることは興味を湧く、もしプロシアの全権だけが、指示のそのような根拠のない返答を持つならば、それは良い兆しではない。

日本で、住民の騒動は良くあること。著名な武士が、自分の所有者にそそのかされて、幕府に対して蜂起する、高官、役人、遂には摂政、将軍の後見人を殺す：彼らを捕縛し、釜ゆでにし、斬首し、切腹させる。人民達はそれら全てを見物し、嘲笑し、忘れた。現在では、江戸では屢々強盗がある。武士や多数の平民達が、狂人のように、夜に通りを疾走し、任意の人を切る。強盗を捕まえ、他の日には、首を切る、他の人にとってはこの脅かしは何でもない」。

マホフは1862年7月に函館を出た、彼の出航は肺病と関係していた、函館の気候は良い療養には向かなかった。マホフの記事の御陰で、領事館の日常の生活と函館の住民について多くのことを知ることができた。

東京から函館への旅行

1861年冬に、東京に到着したゴシケビッチは幕府に、陸路で函館に戻りたいと申告した。一つの理由は、彼の妻とアリブレフト女史が、彼にこれを希望した。彼女らは船酔いを避けたがったし、日本をじっくり観察したかった。ゴシケビッチも新しい場所を見た

かった、町だけではなく日本についての理解を得るために、外国人が住むことを禁止されている。日本は既に理解していた、総領事がそのような方法で国内を旅行していたことを。ゴシケビッチは総領事ではなかったが、ロシアの唯一の領事であった。これ故、彼の要請を拒否する公的な理由を見いだせなかった。

何時もは、幕府からの返答には長い時間がかかった。1週間後、ゴシケビッチは旅行の許可を得た。が、条件として、ロシア人は8日より早くはなく出発することという。日本人の保証によれば、馬や駕籠の準備をする必要があるとのこと、同じく宿場に予告すること。役人が道中にそろい、ロシア人に同行しなければならない。この旅行の詳細を我々はアリブレフト夫人の書き付けから知ることができる。

遂に、2月24日に全ての準備が出来た。この日は偶々寒く、雨模様であった。しかし、悪天候はせっかちな旅行者達を留め置くことは出来なかった。指定された時刻に、外国人のために特別に建てられた家屋—約100部屋—の中庭は、馬であふれた、物資、食料品を背負わせる。又、多数の従者達や駕籠かきで、同じく上に鎖のついた鳴り物付きの槍を持った役人達で。

全員が日本の駕籠に座った、それには座布団があった。アリブレフト婦人が書いていた、「問題なくはなかった。私たちの各自は自分の乗り物に座った：腰を酷くかがまざるを得なかった、その低い扉の中に入るために。私たちの頭—習慣で足に優先権を譲らない—は最初から駕籠の中で前方に飛び出した。このため、足を外に出さざるを得なかった。そして、そのたび毎に、足を自分で小さくて低くて狭い惨めな住居に引き入れざるを得なかった。何も出来ない、初めのうちは、駕籠に片方の足を座らせ、その後、頭を、そうすると調子よくことは進んだ」。

駕籠は全部で12台であった。それにゴシケビッチ、彼の妻、息子、アリブレフト婦人、小間使い、同じく、函館まで同伴する義務のある役人達が乗った。年配の役人が駕籠の行列を先導した。彼の後ろに、彼の官位を示している長い竿に付けた槍が従った。その後ロシア人達の駕籠。その後、再び日本人の行進が殿を勤めた。駕籠を担いでいる4人以外に、4人の交代要員が並んで駆けていた。基本的には、儀式張った歩みで進んだ、しかし、希に、平坦な道では駕籠かきは小走りで進んだ。

江戸を出て、田んぼと小麦畑の間の広くて平坦な道に沿ってロシア人達を運んだ。回りには平野が広がっていた、眼前には目につくようなものはなかった。ただ、道の両側に沿って、高い木が日陰の多い並木道を形成していた、並木道は町と村で中断していた。雪はなかったが、冬を感じた。屢々道は通っていた、藩領地や寺領地を、道には沢山の人々がいた、町それぞれは自分自身の産物や製品で人気があった：蠟、漆、お菓子、絹物で。

行列に伴っていた警備は、町毎に交替した、が、彼らの服装は同じであった。背中に織り上げられた赤色の円（家紋 *）のある短い上着、と同じ円のある黒の漆塗りの帽子。彼らの武具は長い棍棒から出来ていた。警備は、駕籠の脇と行列の前方を厳かに進んだ。村に接近すると、警備は叫び声を上げ始めた：「ズバルー、ズバルー」（座れ）（下に一、下に一 *）。この叫び声に服従して、町や村の住民達は跪いた。天領の町には、決まっている特権があり、警備は黙って進んだ。

ロシア人達は村の名称に驚いた。本当にみすばらしい村さえ大きな名称を持っていた。至福の島、幸福の村、栗の並木道、貝殻の原。どうゆうことか、村に栗の木が成長してい

るとか、貝殻があるとかを全く意味していない。小さい川をボートで渡った。急流の所で、援助を申し出た、自分の豪華なボートを提供した、その地の藩主が。

外国人の行列は、地域の住民達に大いなる興味を引き起こした。時折、警備は群衆を整理するのが難しかった、ロシア人達を見ようともがく。特に、子供達は元気であり、駕籠の間をせかせかと動き回った。屢々、駕籠を無償でも運びたい者達が、従者達に接近した。これが外国人を傍でじっくりと見る唯一の可能性であった。これは許可された。が、警備は極めて厳しく秩序を維持した。駕籠かきは宿場毎に交替した。時折、駕籠は10人まで運んだ。

各村では、長老が跪いて歓迎してくれた。藩領を通過する時には、多数の従者を持って役人が行列に伴った。町では、外国人を出迎えるために、役人達が出てきた。彼らは道に沿っておかれた小さな椅子に各自座っていた。彼らの後ろに、肩に槍と刀を持った従者達整列していた、同じく、棍棒を持った警備達も。時折、旅行者達は弓を持った兵士の横列を見た。役人達の着飾った妻達一人形に似た一が障子から見ていた。

1時間当たりおよそ1里進んだ、このようにして、1日に、6里から11.5里進むことが出来た。規則正しく、朝6時に出発し、状況によってねぐらに到着した、屢々5時に、が、8時より遅くはなかった。

停留所で自分の「駕籠」から出られことがどれだけ嬉しかったか、推し量ることが出来る。寒さで震え、彼らは悴む足をもみほぐし、体を動かして暖めるように努力した。夜に、行列は特別の宿に泊まった。ロシア人は期待していた、彼らを普通の宿に配置してくれることを、回りから風が吹き抜けるような、殆ど洋式の部屋に入ったことに驚いた。部屋は大きく、綺麗な壁紙が貼られ、家具が設えられていた。中央にテーブルがあり、大急ぎで設えた腰掛けが回りに。準備中にしてかした欠陥はフェルトで隠されていた。各宿場では何処もそのようであった。もう、ロシア人は驚かない、旅行者の受け入れの準備のために、日本人に多くの時間を要求したことに。

「全ての国道は、奉行や役人の旅行のためを考えたものである、国の用件のために行き来する。全てが一つの計画、一つの流儀の元で作られた。内部は、壁紙から棚に始まり、象眼細工のある刀のための漆器、香りの良い植物の粉末のある喫煙具、壁に吊された絵画、至る所同じもの。これらの絵の構図となっているのはファンタスティックな服装をした中国人が大部分であった；そのような絵に出会ったのは希ではなかった、長い髭を蓄えた老人を描写している、大きな魚の上に座っている。魚は強大な波を泳いでいる。図の構図は日本の伝説からのものであると私は思う」。

「各宿場では、江戸から連れてきた日本人の料理人が、我々の好みに常に馴れようと努力し、日本式の食事を準備してくれた。我々が非常に甘いものを好んでいるものと推定しながら。というのは、お茶に砂糖を入れて飲んでいる（日本人は砂糖無しで飲む）ので。料理人はスープや炒め物に何時も砂糖を加えて混ぜた。菓子入りのボウル、小さい、が、非常に美味しいオレンジ、水分一杯の梨—ジャガイモに良く似た—を各宿場で何時も早めに我々に追加してくれた；その後、貝や軽く刻まれた塩漬けの大根のいろいろなスープ。

（日本人は大根を乾燥させたり塩漬けにしている；秋には、農家の軒先に大根を吊し、乾燥させる）；時折、魚入りスープや細かく刻んだウサギ肉入りスープ；良く、ヌードル入りのスープもどきを提供した、軽く刻んで煮たイノシシの肉（日本人はイノシシの肉を生

で食べる)、干したイカやボタンのような蟹を；軽い料理はキセーリからできていた、デンプンと砂糖以外半熟の卵がまるまると入っている、その後、塩味があり、泡立てられた卵、外見がふわふわしたピロークに似た。これらは全てそれほど旨くは無かった。自分らの食料品を持っていたので、幸運にも、私たちは日本の塩辛くて苦くて甘い料理を無理に食べることもなかった。私たちのこれらの料理を提供して、屢々語っていた、私達の健康のために努力していると、薬用の料理を準備していると；実際において、彼らは正しい：彼らの料理は薬膳であった。最後の2週間、私達のパンの在庫がなくなった時、パンの代わりに米を要求することになった（よく知られている、日本人はパンを米飯で代用することが）；お茶さえしばしば米入りで飲んだ」。

旅行者の誰かが不健康を訴えたならば、彼らに同行している役人は、助けることに努力し、自分の旅行用薬箱から熊の胆汁製の金色の丸薬を取り出した。日本人の意見によれば、この丸薬は摩訶不思議なものであり、瀕死の人を復活させる力を持っているとのこと。アリブレフト夫人の観察によれば、日本人は非常に薬を信用し、薬箱を持たずに決して旅行に出ることはない。或いは少なくとも、丸薬の小箱を。

旅の後半は前半より大変であった。段々寒くなり、雪が降ってきた。北海道に近づくにつれて段々山がちになって行った。時折行列は峡谷の上の狭い道に沿って長く延びた。女性の呼吸が時折止まった。後ろを振り返ると、駕籠はオモチャのようであった、駕籠かきは小人のようであった。その時は、周りの景色から目を離すことが出来なかった。冬景色は素晴らしかった。谷川の流れる音、滝の音が時折静寂を破った、冬の自然を支配している。行列自体が綺麗な見世物であった、特に黄昏れ時に、その時には道を灯火で照らした。時折、数千人の人々が灯火を持っていた。行列に幻想的な魔法のような様相をもたらした。

サイ岬（下北半島）の所で、旅行者達をロシア船が待っていた。海峡をこの船が彼らを運んだ。全旅程は24日間であった。

アリブレフト医師の記録

日本についての印象を記録し、公刊した領事館の職員の中で、アリブレフト医師の物は悲観的な内容を帯びている。これは驚くに値しない。彼は医師として何よりも先に周りを見ていた、生活のための衛生と安全の視点を持って。函館、同じく多くの日本の村のこの関係において、良くない点を見ていた。

アリブレフトは気づいた、「日本の町の清潔さについて良く書いている、函館は疑いなく汚れた町の一つに属する。思わなければならない、信頼できる話から判断して、日本のありふれた町は清潔さをそれほど自慢することは出来ない。年に4ヶ月、二ヶ月の秋と二ヶ月の春、通りはゴミであふれかえっている、ヨーロッパのオーバーシューズでは通り抜け出来ないほどの。日本人は独特の木製のベンチの御陰で、それにはまり込むことはない、足の底部に結びつけている。（下駄のことか *）

通りは舗装されておらず、土壌は粘土質である。年の泥濘の季節には、日本人は道に砂や石の代わりに粘土を播く習慣がある、もちろん、これでは道が良くなることはない。夏

には、特に夕方には、町には溝からの匂いが立ちこめる、各家の周りに回らされている。その溝に、あらゆるゴミが投げられる、溝は何時も腐った物であふれかえっている。海への排水溝があるにもかかわらず、（町は海に沿って延びている）それは絶えずゴミで汚れている。日本人は家の内部を確りと綺麗に保っている。が、ゴミや住居回りの不潔さに気を配るの者は少ない。

去年の夏に、町を歩いていて、私達は息苦しくなる危険を体験した：島では狂犬病が猛威を振るっていた。かじかんだ犬に頻繁に出会った。同じ犬の死体に出会った、同じ場所に2週間もそのままに。

ここの奉行ー私達が町の清潔さに、この結果の有毒ガスに注意を向けて欲しいーは分かっていた。この何らかの手段に反対していることは驚くに値しない。というのは、彼は家で楽しんでいる、町の不潔さの主たる出所が自分の家の背面に隣接しているにもかかわらず。

ここで私達にあやかりたくない状況を補足するために、次のことを話しておく。4月と5月には、ここでは大量のニシンの捕獲が行われている。このニシンから煮沸して油をとる、ランプ用に使用する；煮出し後に、この魚の骨と残物は乾燥のために並べられる、或いは、よく言えば、町中の空気への腐敗臭のために。腐った匂いは町の空気を満たす、その郊外も。この乾したり腐ったニシンはその後、綿の肥料として日本の南部に送られる。ロシア領事館の建物は町の低い部分から150フィート（1フィート=30cm *）高いところに建築された。が、この匂いからは免れてはいない。

無数のカラスー唯一の日本の医療警察ーと空気の淀みを妨げる優勢的な定常風の御陰で、町は伝染病にさらされることはない。

往年には、日本の犬は函館での生活における多くはない悩みの内の一つであった。この我々に敵意を持つ幕府に同情するような：外国人の外歩きは犬の吠え声と凶暴な付きまといを伴った；去年、疫病が犬の95%を根絶した、それらの新しい世代の犬は今では我々を少なくとも避ける。

・・・かような少人数の社会、その会員の多様性において、ここでは社会の生活は存在しない、真剣に仕事に取り組むことで嫌な状況、回りのことを忘れさせてくれることに幸せを感じて；日本をさっさと出立することができる者はより幸せであった」。アリブレフトは1863年に函館を後にした。ヨーロッパに去る前に、聖オリガ湾とニジニ・アムールで科学標本を採集した（1863年）。マクシモビッチはアリブレフトに敬意を表して、日本の種にロドデンドロンの名を付けた。

アリブレフトの後に、ザレスキイ医師が病院を管理した。病院の建物は2度火事に遭った、が再建された。

新しい海軍武官とデアナ号の大砲

ナジモフの出立の後、海軍大尉コステレフが海軍武官となった。彼は1862年に函館に到着した。ニコライ・ゴシケビッチが書いていた、「コステレフは私以外、ブツォフ、

その他、函館にいる全ての人と喧嘩をした。酷い口論であった！ 誰かが彼についての噂を広めた、彼がここにいる全ての商人達を強盗でペテン師である、領事は馬鹿であると罵っていると。皆は彼に挨拶することを止めた。彼は誰が噂を広めたのか探した。裁きがあった、彼は知った、誰か、しかし、仕事の間中に、更には社会と仲違いをした。チムロトとゼレスキーの名を挙げ、コステレフは公式にここでの「勇士」(? *)を要求した；ついでながらバガテリ号(バガテリ 日本語にすると勇士 *)はやって来た……ロシアへの帰還をじりじりとして待っている。」

前述の手紙(? *)からは次のことは出てこない、この将校は肯定的な性格に欠けており、スキャンダル以外に、自分の地位にいて何も発揮しなかった。コステレフは函館に痕跡を残した。彼によって函館弁天堡壘にデアナ号の大砲からなる砲台が設置された。それは1868年までそこにあった。日本における国内戦争時、榎本武揚がそれを他の場所に移した。後になって、ロシアの武器は函館市民公園に置かれた。幕府はコステレフに函館にある海軍学校で講義をするように要請した。ロシア人将校は日本人に天文学の基礎、航海術、造船術、砲術、要塞術を教えた。

これ以外に、コステレフは日本人の石切り工を探し出した。ロシア人墓地の墓の盛り土に石碑を建てた。当時は地面と殆ど変わることもなかった。多分、その後で、ニコライ神父はコステレフに対する評価を変えた：「コステレフとの出会いは私には大きな意味があった。彼は私と同じ年に函館に来た。しかし、彼は良く家を空けて出かけることがあった。艦隊の船に乗って航海に出かけた…… 奇妙な仕事、何年間は並んで一緒に、打ち解けて話し合い、彼を見慣れ、何か気になっていた。多分、彼はどんな男なのか、私は理解していなかった。領事館の職員から、噂を耳にしていた、コステレフは勇士中の勇士である。彼はシノプスク海戦で負傷した、マリア女王号に乗っていて、海軍少尉の位で、有名な將軍ナヒモフの艦隊副官であった。勲章所持者。リボン付き聖アンナ3等勲章を授与された。彼は亡くなった水兵の記念碑に気を配った、出世のためではなく、自分の心からの意志で。これが水兵に対する彼の最後の敬意であった。彼と同じように、砲兵隊でセバストポリを防衛した水兵達への……。コステレフ自身は第2稜堡で砲兵隊を指揮していた。しかし、ついていた(? *)、昨日は黒海の水兵はバルチック海の水兵となり、今では太平洋の水兵…… 函館に最後の安らぎの場所を見つけた。誰が彼について心配をしようか、もし水兵の相棒がいなければ?……」

パベル・ミハイロビッチ・コステレフは1865年に函館を出航した。2年後、彼は亡くなった。ペテルブルグへの旅行時、ニコライ神父はコステレフの息子に会った。息子は第1軍中学校を終了し、パブロフスク学校で軍務の勉強を継続していた。1880年2月22日、司祭は日記に記していた：「……私の所に、パベル・パブロビッチ・コステレフがやって来た、パベル・ミハイロビッチ・コステレフとライサ・ニックの息子である。今ではもうパブロフスク軍学校の士官学校生である。私は彼を見て嬉しかった、かつて私があやした、今では極めて礼儀正しく教養のある若い人物；彼をお茶と料理でもてなした、大祭で5ルーブルをあげた；孤児には小遣いを得ることはそんなには無いであろう、彼の叔父さんは非常に好人物に見えるが」。

1863年：函館におけるマクシモフ

1863年に、函館へ、著名な文学者で旅行家のセルゲイ・マクシモフがやって来た。学校を修了後、マクシモフはロシア地理学協会の探検隊に参加した。ウラジミルスキイ、ニジェゴロドスキイ、コストロムスキイ、ビヤトスキイ県で民俗学に従事した。1854年、「読書のための図書館」が彼の6つのルポルターージュを公刊した。その後、ルポルターージュの連作が出され、後になって本「夏の梨」にまとめられた。1855年、マクシモフは「文学探検隊」の隊員となった、海軍省が組織した、ロシアの海岸と主要水路の調査と記述のために。これらの資料は差し迫っている海軍の再編のために必要とされていた。セルゲイ・ワシリエビッチ・マクシモフのルポルターージュは、探検隊の他の隊員と同様に、「海軍選集」が公刊した、1859年に。それらは個々の2巻本「北での1年」として世に出た。日本に、マクシモフは蒸気船アメリカ号でやって来た。アムールでの探検後に。

函館には、作家は4昼夜しかいなかったが、函館について興味ある記録を残した。停留地で、そこからはロシア領事館の建物が、そこに翻っている国旗と共によく見えていた。旅行者は両眼を見開いて岸を観察した、新しい印象を吸収しながら、日本人の生活の全てに注意を払いながら。ジャンク船の傍を通った者は「全ての異常なほどの快適さと綺麗さに驚いた、どのようにして仕上げたのか、船の主人とその家族の生活用船室を。」

地方にある函館は、独特のものではないことをマクシモフに示した、極めて活気のある町である、外国人によって急速に成長した。彼は気がついた、ここでは英語が広まっていることに、アメリカ人より先にロシア人が函館を訪れていたにもかかわらず。多分、作家は結論を出している；これはアメリカの捕鯨船の多さであると、漁業において最も近い港として函館を選んだ。又、彼は気がついた、住民の貧困は幕府の注目を失わなかった：住民に水の供給していた小川だけが、町の建物の脇に残されていた。町の方向に沿って新しい河床を掘り開いた、しかし、生活の不便さは見落とされてはいなかった。

マクシモフが書いていた、「我々は十分に影響を受け、完全に馴染みのある印象に従った、彼方此方の通りを歩き回った時に：通りはゴミだらけで狭く、歩くのにはふさわしくない。2、3人が寸分違わず並んで歩くのがやっとなのである。いくらか昔のモスクワのベロカメンニイ通りのよう。我々は大変長く狭い通りを見る、この道は歩行者にのみ役に立つ、乗馬での運送の形態を全く持っていない（乗馬さえしなければ、良く知られている譲り合いで）。

我々はこの通りを見る、不思議なことに、家が見当たらない、何か構造らしい暗い独特な塊を家と見なすことは出来ない、この狭い通りを両側から取り囲んでいる、上方を天空で隠されている、異常なほどの青色で、トルコ石色で。長い努力の後で、我々は屋根らしい物を区別する、構造の黒い部分の上に厳しく覆い被さっている、その端を引き出すのはほど遠い、それに触れて、額をぶつけるのは容易である。それらに目を釘付けするのは簡単だ。これらの庇は低く垂れている、意味も無くそれらは通りをダメにしている、それなくしてはゴミで見にくい、相変わらずの曲がり道で。これらの曲がり角でだけ、構造が鮮やかに目立つ、それらの中に、穴を（屋根と地面との高さで）見分けられる、ドアを描写しなければならない、それらの右脇から、同じような高さに2、3個の穴がある、が、幅

が2倍ほど大きい。薄い油紙の貼られた枠。これらの枠は窓枠である；紙がガラスの代わりをしている：壁の不存在で、日本の家は、普通に馴染んでいる様相や形状の家を思わせることは全くない。違いの成就のために、大通りの全ての家で、壁は押しやられ、家は気がつくとそのような姿となった、前面の壁の無い、我々の前に裸で立っている、全く全ての内部の家の秘密の核心と真相を持って」。

目に飛び込んできた、函館の住民の主たる仕事は商業であることが。我々は熱心に1軒、2軒とのぞき込む。3軒目、4軒目の内部をジッとのぞき込む。5軒目、6軒目を見る。紙の枠の後ろに、売り台が隠されている。函館の大通りの全ての家で商いをしている。いろいろな物を商っている；商人の僅かは何もしないで座っている；殆どは仕事をしている。一つの店でも我々は店子のいない商人を見ることは無かった。彼らはせかせかしながら忙しく働いている」。

ロシア人は函館に沢山の金を残した。多くの者が語っていた、函館はロシアの金で回復したと。船乗り達は安い米のワインである酒を好んだ。ロシア人の多くは絹物を買った、それからズボンを縫った。家への土産として、水兵達は極めて安い絹物を手に入れた、同じく漆物を、人形や小箱、その他を。ロシア人が馴染んだ日本人の商人はリゾ・リュゴニ（？ ＊）であった、彼はロシア人に大いなる奉仕をしてくれた。

今までヨーロッパ人を見たことが無い日本人は、彼らの生活に注目した、それをまねようと努力した、彼らを十分に引きつけた。ゴシケビッチは冗談を言った、「日本人の所に1基の噴水を作った、少し前のことである、数ヶ月して奉行所の中庭と奉行の屋敷に同じような噴水を見かけた」。

特に日本の風習が旅行者達を驚かせた：「軽くて短い、幅広い袖のあるマントを肩から羽織っていた；太股の所に、2本の刀。1本は長く、もう1本は少し短い。頭には何も無い、自分の髪で作った変わらぬ冠毛（ちょんまげ ＊）以外には。ふんだんに油を付け暖かい日本で一人残らず頭のかぶり物を*****」。

我々は見た、役人が我々に向かってくるのを、非常に控えめに、そして突然！ これという理由無しに彼はしゃがみ、頭を下げた。この突然の出来事に、我々に対応することが出来なかった。よく見ると、彼の前に他の人が座っている、同じように頭を下げている、大刀を脇に大事に確りと手に持って。

これは何だ？ 闘鶏に似た試合、これらの役人には額をぶつけることを始めることだけが残されている、その時まで、何かの割れる；あるいは、適当な瞬間を見つけ始める、お互いに背後を掴むために、みぞおちを、首を、なんとかして日本式に；その後、力強く機敏に対戦者に勝つ？ 多分、彼らはカードかサイコロの何らかの試合を考えていた、儀式無く、通りに配置された。しゃがん（日本独特の）で1、2、3で放る。そして、散開する？

しかし、我々は5分程見ている、全く同じことを見る：一人、もう一人はちょっと腰掛けしている、お互いに真剣に空気を胸に吸い込み、鼻息をたてている；彼らの顔は十分に充血していた、頬は見事に膨らんでいた。彼らの内の一人の外套は干し草のように立った。この滑稽な場面の最大の類似、七面鳥の面白い戦いのよう。どうなるのか、これらの男達は何にあくせくしているのか？

我々は更に5分間留まる；が、状況は全く同じ：役人達はいらだっていない。彼らの内

の一人が少し腰を上げようと試みた、脇へ動こうとして、彼が進まなければならない方向へ。しかし、再び腰を下ろした、再び自分の膝を両手で掴んだ、再び鼻息を立て始めた、笑い始めた。他の役人も同じ動きをした、が、再び腰を下ろし、今度は自分から冗談をした。カルタ（？ ＊）のところで動かず座っている相手を見ながら。

我々は全く理解出来ない。これは何だ：通りがかりの人々のための遊び、何か変人の、お馬鹿さんの安くてありふれた上演？ 我々は脇を見る：通行人はこの場面には無関心、注意も払わない、*****。彼らにとって場面はありふれた物；我々にはとにかく謎の物。が、結局何なのか？ 我々に説明をする：

－これは2人の役人の出会いである。彼らは長い間足踏み状態である、うんざりする手順の素早い終了により、お互いに無礼、最大の非礼をしないための願いが原因で。位と特典が同じほど、このしゃがむことはより長くなる。しゃがむのは時には半時間にも及ぶ、日本では全体的に特に役人の間では安っぽい。片方がどのようにけんか腰になるか見てみよう、ご心配なく、これは最もしゃがんでいる。他方は片方に遅れをとらない、明白な理由で屢々膝をかかめる、彼は同等だが、遅い実行。私は時折特別の愛着を持ってこの役人のいたずらの行為を見る、彼らに関して、私は間違いなく理解まで行き着く、彼らの内の誰が位が高いのか、職においてより影響があるのかさえ、年の老若も。もちろん、2人の役人の出会いにおいて、二人ともしゃがんだならば、前に、より早く他より一人がさっと立ったならば、疑いはない、彼は礼儀からしゃがんだことは、早く立ち上がったのは疑いはない、彼は年配の役人であることは。同等の人にとって、この口げんかの点はわかりぬくい、どれだけの境界線（小さくは無い）で立ち上がらなければならないのか、相手が立ち上がる限りにおいて。そして前に動かなければならない、その時に、別れて開放されるために、これを両方が同時にするために、同じ瞬間に！

日本のお風呂のような異国情緒あるものを、ロシアの客は見逃すことは出来なかった。多分、彼らは温泉に浸かった。「我々は気がつくまで風呂に入っていた。風呂は、我々ロシア民族が馴染んでいるのとは違っていた、それほど暑く湧かしてはいなかった、温度を保持していた、通りと等しい、7月の太陽で暖められた、その上日本で。男も女も一緒に入浴した、かってルーシ（昔のロシア ＊）の村々でしていたように、今日まで行っている商業風呂では、非常に沢山の遠方の県都の。昔のルーシでは修道士も修道女も、一つの共同風呂に入り、蒸し風呂に入った。我々の出現、珍しい人種の、入浴する日本人に迎えられた、同じ平静さを持って、日本人は我々をそのように見ている、他の気楽さが少なく、より安全な見学旅行において」。

セルゲイ・ワシリエビッチ（・マクシモフ）は仏教の説教を訪れた。僧侶が話した、「今日、我々は厳しい神（？ ＊）の日を祝っている、この神は大地の静寂と平和が好きである。しかし、私は貴方を知っている、祈り無しで貴方は神を褒め称え始める、酒を飲み始め酔酩するまで飲む」。

この言葉と共に、剃った僧侶は非常に綺麗な扇子を右手で上手く広げ、色っぽく悪戯っぽくほほえんだ、顔の所で扇子を振り、更に話し続けた：

－酔酩するとは、貴方は悪い人間だ。貴方に言うておく、多くの欠点を持った、欠点の主たる物はこの放蕩である」。

その時、マクシモフは寺の建物を見た：「本堂の左右に2つの別棟。我々は右側に入っ

て、左に移った。我々は見つけた、同じ棒のついた後ろの壁付近に、多数の銘の入った小さい板（位牌 *）を。銘は死者の名前を記載していた、日本の知り合いの説明によれば。位牌の前には、米と砂糖の塊が茶碗に入っていて置いてあった。お菓子とパンも置いてあった。これは死者に対する追善、日本の知り合いと彼の風変わりな団体が我々に説明したことでは。本堂では、板（? *）と仏像の前で、細くて明るい色で塗りたくられた蠟燭が燃えていた。そのような蠟燭はありふれた家では出会うことは無い。

更に寺を見ることは、我々には無かった。我々は中庭に出た、右隅に、特別な台の上に、大きな鐘を見た。その脇に木製の大きな鐘突棒があった。我々の通訳が我々に説明した、
—鳴らしてみたい、禁止は当てにならない。日本人達は喜び、受け入れる君の親切を、本物の硬貨に対する。彼ら人々は単純である。全ての徳において揺るぎない（? *）。

我々が鳴らした；音は気持ちよく、遠くへ拡散していく、おそらく町全体に。中庭を満たしている日本人達は我々に飛びかからなかった、我々を引き裂かなかった；近くの者達は好意的で優しく、歯をむき出して笑った。一人は我々の肩をなでた、彼の傍を歩いている時に、この寺院の僧侶に属している庵室に向かっている時に。

そこで、我々は比較的みすぼらしく貧弱な部屋を見た。が、杓子定期的な清潔さを、日本人の住居で至るところで見られるような：床には綺麗な模様で艶のある編み垣のあるゴザ；最も明るい日本風の色で塗り上げられ、漆塗りされた小さい戸棚、角には本棚；一つの部屋は他の高くて広い扉に面している、その扉は透明な紙を持った枠によって動き始める、我々が函館の大通りの商店で見かけたような。

日本を訪れた皆と同じように、マクシモフは芸者について聴いた。彼は次のように描写した：

「我々は町の中をぶらついた、夕方まで散歩した、日本の通りを闇が覆い隠すまで。誘いに従って、ある通りに入って行った、2つ目の通りへ、そして3つ目の通りへと。ある通りで見かけた：群衆が木製の自分のオーバーシューズで時折ノックしていた。この通りをせかせか動き回っている、全て男性：ある者はマスクをし、他の者はマスク無しで。何の目的を持って？

「右を見て、左を見て、家の窓の中を！」 案内人が我々に耳打ちする。

窓の中を見る：大きな部屋を見る；中央にテーブルを引き出し、そのテーブルの向こうに、日本風に正座をし、花で着飾り、手に扇子を持った、白い歯の日本の美人が。

「彼女らを数えて！」 我々を招く。

1つの家では8人を数える；他の家では10人、3番目の家では3人。

「真ん中を選びなさい。」 女性が6人；各通りにはそのような家が平均で20軒；そのような通りが5つ（最小で）。私の結論では、毎日、600人の女性が愛好者の前に展示されている；これには何の悪意もない、これについてあえて発表する、これらの女性達は朝から始まった読書、書道、踊り、音楽、裁縫を無料で。夕方、彼女たちは展示場に。展示は彼女らに、主人への教練のための支払いを助けてくれる。4年を経て、女性は宿舎から出る；日本人の一人も恥と判定しない、この女性と結婚することを；日本人は彼女と申し合わせている、これについて、女性の修練中に。しかし結婚すると、彼女は毅然とし清楚となる（私の体験を信用せよ）；彼女は終生歯を黒く染める、棺まで一何という罪か！一火葬まで一洗い落とせない。その後、妻となり、日本における女性は女奴隷とはならな

い：彼女は店の手伝いとして店舗に招請される、彼女は自立して商売をする。

確りした外見、自由な行動、明るい顔、太った体格、健康的で血色の良い顔、一全てが女性の社会的立場を評価することを邪魔をする、アジア全般の例に従って。日本においては、女性は自由である、他の何処よりも。

一元へ戻ろう。若い女性の愛好者達への見世物と養育におけるそのような家屋における彼女らの部屋が、古来の民族としての信念に入らないとしても（？ ＊）：なぜそれなら多数の女性が毎日？ そう、彼女らはひっきりなしに入れ代わる。古い女性の場所には、新しい女性が出てくる；私はこれを見守っている、個人的に既に1年に渡って。

更に追加しよう：ここでは、恥ずべき絵が売られている、店で公然と；そのような根付け（ブローチ）は袋に入れて持ち運ぶ；ピログ屋の生地や形をおぼえていなさい、それから作り出す、寺の境内で？（？ ＊）。

友人が我々に説明をした、

「日本人として生まれなければならない、理解するためには、例えば、彼らの民族舞踏を、耐えがたく長く歪んだ、異なった流儀、しゃがみ、飛び跳ねる、特に、彼らの独特な、ただ3つの音調を持つ音楽をつま弾く時。

我々はこの音楽を聴いた、お齒黒の女性達によって行われた、バンドーラに似た楽器での、3本の金属弦を持った；完全に一致した、我々の案内者の言葉と。

「彼らの歌は調子は乏しい、喉に詰まっている、変化は無く、活気は無く、タタール人、カルミック人、モンゴル人、他の草原のアジア人の歌のように。鼻で歌い、我々の古式分派の宗教歌の方式で。」

これは驚くほど正当であった。

日本人は珍妙な幻灯を持っている、それに自分の姿にポーズを与え、それでもって変身する。そこまではヨーロッパ人は思いついていなかった。惜しむ必要は無い、誰でも何処でも提示することが出来ないことを。この幻灯、女性の民族舞踏はどうやら首尾良く始まるらしい、が結局、我々流での下品さに落ちる、日本はそれほど貪欲であり、日本は全くそれを下品と見なしていない。嗜好は人それぞれである、アメリカ号に戻って、マクシモフは見た。甲板でこの幻灯を見た船員達が感嘆の声を上げたのを。

マクシモフの旅行の結果は本「東方にて」、「シベリアと流刑」、「放浪のロシア、お恵みを」となった。

初のロシア人実業家

アレクセイ・A・コルニコフは自分の従卒と一緒に函館に着いた。が、彼は彼（従卒 ＊）無しで日本を去って行った：一等水兵ピョートル・アレクセーフは13年間勤務し、予備役への権利を持っていた。他の階級への所属にもかかわらず、長年の勤務は将校を彼に密接させた。従卒はイワノフスコエ・トベルスコエ県の知行地の生まれであった。彼らと一緒に、黒海艦隊への勤務に派遣された、二人ともシノプスク海戦に参加し、軍の勲章を得た。彼らと一緒にジギット号に乗って、函館にやって来た。自分の旦那様との長い塾

考の末に、30歳の水兵は退役し、日本で商売を始めることを決断した。ここでは非常に大きな可能性があった、早く独り立ちできる。アレクセーフは既に会話の日本語を良く知っていた。

1863年末に、退役した水兵は函館に初めてのロシアホテル「ニコラエフスク」を開いた。アレクセーフはヨーロッパ式の家具のある部屋を訪問者に提供した。そこには素晴らしい洗濯室があった。食事はロシアの処方箋で準備した。そこには素晴らしいブドウ酒、リキュール、フルーツジュースがあった。客はビリヤードやケグリ（九柱戯 *）をすることが出来た。乗馬の愛好者達に、アレクセーフは、適当な費用で馬を提供した。彼は適当な価格でロシア船に全ての装備を手に入れ供給した。彼はまた、郊外のピクニックや公的な会食を仕切った。「ロシア船のために、函館にホテルと仲買事務所を開設し、私は船の要求に応えるだけではなく、函館での我が儘な物、手頃な物も。外国の極めて大きな競争にもかかわらずに。ロシア人は私を訪問、注文、依頼、仲介のままにしておかない、私に考える権利を与える、私が自分に課された課題を満足がいくように遂行したことを、というのは、私は期待している、毎年良い評判が与えられることを。これにより、自分の要求を持ってロシア船が必ず私の所に戻ってくることを、外国の仲介無しに、ロシア船が外国の港で供給することが出来るということを証明する」。

1864年10月、函館で初めてのロシア人の婚礼が行われた：ゴシケビッチの秘書であるソフィア・アブラモブナがアレクセーフを夫にした。結婚式をニコライ神父が執り行った。

苦労があったが、商売は少しずつ拡大していった。アレクセーフはニコラエフスク、ウラジオストクへ旅行をした、全ての港に立ち寄った、ロシア船が停泊していた。時間と共に分かってきた、函館の将来性は小さくなってきていることを。アレクセーフは全ての仕事をたたみ、日本の首都に移ることを決めた、領事館と教区と共に。彼は東京において、ロシア風建物の最初の建設請負人となった。が、残念ながら、日本における最初のロシア実業家は長生きしなかった：酷い風邪がロシア人の天才の寿命を急速に奪ってしまった。ピョートル・アレクセーフは1872年10月26日、江戸（東京）で亡くなった。

夫の死後、ソフィア・アブラモブナが領事館の教会でハウスキーパーに落ち着いた。遺産のお金を得て、寡婦は教会へ寄付をした。最後の年には、ソフィアはスツルベ公使の子供達の世話をした。彼女についてクレトフスキーが書いていた：「・・・楽しい幼稚園で、立派なロシア人の保母の監視下にある、およそ20年日本に住み、この国の言葉を上手に話し、」。その後、彼女はアメリカに去った、スツルベ公使の家族と一緒に。その前にアレクセーフの墓に記念碑を建てるが出来ていた。1882年2月20日（3月4日）ニコライ主教が日記に書いていた：「スツルベの家族と出発するソフィア・アブラモブナが別れを告げにやって来た；1858年から彼女は日本にいた；私は彼女に本当の若さを見つけた、去って行く一白髪で」。

そして、初めての日本人写真家

写真術を日本人に教えたのはロシア人であると言えよう。ある時、ゴシケビッチは仕立て職人である木須光吉の所に立ち寄った。この主人は越後出身で、1855年末に函館にやって来た、日本の靴下（足袋 *）の仕立てに従事するために。ゴシケビッチは幾つかの服などを持参して、それらに似せて新しい服を仕立てるように彼に要望した。仕立工は、そのような服を一度も見たことは無かった。当分、工房にそれらを置いていくようお願いした。彼は、明らかに達人であった。注文に従って上手く処理することが出来た。実際において、これがロシア人のために日本人の職人によって仕上げられた初めての服であるということでは無い。当時、松前で、捕虜であったゴローブニンに同じように服を仕立てていた。実際においては、愚痴をこぼしていた、日本人によって仕立てられた服はみすばらしかったと言うことで。

仕立て職人木須はゴシケビッチの注文の後、ヨーロッパの服の仕立てに専念し、これを完全に会得した。一人前となり、お金を少し貯め、彼は故郷を訪れに出発した。彼が乗った船で、彼は写真機を見た。それに興味を引かれた。持ち主に熊の毛皮と交換して欲しいと申し出た。しかし、日本人の大変な努力にもかかわらず、彼は写真を得ることは出来なかった。語るのは難しい、技術的に初心者である仕立屋がどのように処理したかを。函館に木須光吉が戻った後直ぐに、新しい注文を持ってゴシケビッチが工房に立ち寄らなかつたならば。ロシアの領事は彼に説明をした、新しい機械をどのように使用するかについて。推定することが出来る、彼の先生にアリブレフト医師がなつたと、彼は写真技術に熱中していたので。

この時期、仕立ての仕事が不安定になり、殆ど閉業となつたので、木須光吉は他の仕事に移ることにした。1864年頃、函館の新知新町（後の舟見町）地区で、木須光吉の新しい写真館が出現した。大分後になり、彼は東京に去つた、そこでカラー写真を撮ることを習得した。

木須光吉と同時期に、ロシア領事館で田本賢三が学んでいた。彼について次のような証拠が残っていた。ニコライ・マトベーフが思い出していた、「私の父は当時、領事館で準医師として勤めていた。一人の日本人が足を病んでいた。当時領事館には大きな病院が作られていた、殆ど唯一の、後になって燃えてしまったが。そこに病人が入っていた。そこで少くない日本人が治療を受けていた。治療している日本人の足の病はますます酷くなっていった。治療の施しが無くなり、足を切断することとなった。私は知らない、どのような原因で彼の足の病が悪くなっていたのかは。直に、足を切断する方が良いということになった。不慮者となり、日本人は以前のように働くことは出来なくなった。不幸者をどのように助けるか、長く思案された。そして、彼に写真術を教えることを思いついた。間違っていなければ、最初のカメラを領事館の司祭であるニコライ神父（現在の日本の主教）が彼に提供した。不慮者は直ぐにカメラに慣れ、撮ることができるようになった。神父が彼の足の切断をさせてくれたので、彼は神父に恩返しをすることにした。神父の肖像画が初めての物であった。

年を追う毎に、日本に滞在するロシア人は次第に増加していった。記念に写真を撮ることを切望した。ついでながら、昔のウラジオストクでは、日本の写真屋は優秀であると見なされていた。

レストランに関しては、日本におけるロシアレストランの最初のもの、函館のホテル

「ロシアホテル」に出現した。日本人による最初のロシアレストランは函館の「ゴトーケン」(五島軒、現存 ※)であった。このレストランのコックは、長崎の五島出身の栄吉であった。伝説がある、1868年の日本での国内戦争の後直ぐに、彼はロシア領事館の食堂で働いた。そこで彼はロシア料理を習得した。

ロシア人墓地

函館がロシアとの交易のために開かれた後、既に1年が経過し、ここに、初めてのロシア人墓地が出現した。このロシアの病院に、船乗り達がやって来た。いつも通りに、かなり病んで、が、治療はいつも成功するわけでは無かった。1865年、病院では、約50人の病人が治療中であった。基本的に、船員は慢性病と梅毒を患っていた。性病は誰も容赦しなかった、水兵であろうと将校であろうと。砲艦モルシ号に、海軍士官候補生ドバソフー未来の将軍-が勤務した。長崎か函館で、梅毒に罹った。治療のために函館の病院に残らざるを得なかった。

今では語るの難しい、ロシア人の誰が日本の地に初めて葬られたのかは。今日まで、1859年6月26日に亡くなった、アスコリド号の35歳の補給係ゲオルギイ・ポウリケビッチの墓標が保存されていた。数ヶ月後、墓地には墓標板が出現した。1859年11月1日、コルベット艦ジギット号に勤務していた、第28艦隊乗組員の26歳の水兵ピョートル・エブセーフが亡くなった。

1860年の最初の墓は30歳のステファン・ギリシェフのものである。彼は1860年1月25日に亡くなった。彼は第25艦隊乗組員の水兵であり、輸送船ヤポーネツ号で勤務していた。

1861年に、新しい墓が出現した。その中に、27歳のアンドレイ・ワシリエフのが。彼はクリッパー艦ガイダマック号に勤務していた、帆係として。1861年9月28日に亡くなった。

1862年、ロシア海軍は日本の沿岸で沢山の損失を被った。スクーター艦ペルバヤ号の水兵ダビット・ユボニン(6月28日)、コルベット艦アブリョク号の準医師プロコピイ・シネパイ(6月30日)、コルベット艦カレバラ号の火夫アフトム・シャムネフ(8月16日)、コルベット艦リンダ号の水兵グリゴリイ・マホフ(10月8日)、輸送船満州号の舵手プロコピイ・フィリノフ(11月19日)。

誰よりも、コルベット艦パサードニク号は身内をロシア人墓地に残した。函館に最後の安住地を見つけたのは、ニキータ・クズニン(1861年10月15日)、ワシリイ・ミヤスニコフ(1861年10月16日)、フェドル・ステパノフ(1862年2月17日)、エフトロピイ・グボズデフ(1862年3月9日)、イワン・クズネツォフ(1862年8月27日)。1862年3月18日、海軍士官候補生アンドレイ・ポポフと水兵ステパン・ゴムジコフが水死した。ちょうどその時期に、函館のロシア人墓地を「パサードスキイ」と命名した。長崎でなされたことと似せて。そこではロシア人墓地の最初の名称をアスコリド墓地と名付けていた、コルベット艦アスコリド号に因んで。

1863年、7月20日、リュードビック・シャチコフスキイが水死した。8月6日、コルベット艦リンダ号のコーキング屋が亡くなった。8月16日、ノビック号の水兵カジミール・ネパゴダ、8月27日、スクナー艦ペルバヤ号の水兵フィリップ・パグジン。1864年11月8日、アムール艦隊の砲艦モルシ号で勤務していた海軍少尉ピョートル・ストロゴフが銃で自殺した。

1866年頃、日本の東海岸で、山田町（北三陸 ＊）付近で、海軍大尉エンゲリムが指揮していた小型のロシアの帆船が海難事故に遭った。小さい島にロシアの水兵を葬った。長年にわたり、日本人達が世話をし、お経も読んでくれた。

最終的には、19世紀の60年代半ばには、函館は海軍艦船の停泊地としての魅力を失った。アスコリド号の船医サドコフの知識に従うと、1866年に函館の病院は閉鎖された。ロシア人の全患者は長崎に移送された。これに対応するように、函館における死亡者は減少した。

1869年の元旦は、悲劇で特徴づけられた、ロシア帝国領事館の医師であるウラジミール・ベストリが不慮の死を遂げた。彼は29歳であった。ニコライ神父が説明書に書いていた、「1869年の新年を前にして、午後2時に、私はベストリ医師から彼の所での新年会へ招待を受けた；夕方10時に、医師の委託を受けて、読経者のサルトフが私の所にやって来た。医師の招待を思い出させるために；今回聞いていた、新年会で、拳銃からの発射が提案されていたことを。私はこれに反対の意見を述べた。そのように遅い時間ではふさわしくないと、日本人に不安を醸し出すので；私は同じことを繰り返し、その後ベストリの所へ行った。11時に、彼の所に向かい、彼の所で見つけた：読経者サルトフ、領事館の通訳マレンダ、準医師シャルペーフを。

夕食後、新年を迎えた、歌「紙がシオン山で聖歌を歌えば・・・」とお互いの健康を祝して。その際、拳銃からの発射も伴って；この後に、「神よ皇帝を守り給え」を歌い、その後と同じく銃撃した。ほぼ深夜であった、私は帰宅したかった、しかし、医師は私を未だ留めておきたかった。その後、私が通訳のマレンダと話をしていた時、隣の部屋から、そこにいた；ベストリと妻、サルトフ、シャルペーフ。銃撃を聞いた、直ぐにベストリ夫人の耳をつんざく悲鳴が鳴り響いた：「おー、神様！」

私は部屋に駆け込んだ、私は見た、床に動かないでベストリ医師が横たわっているのを。ベストリ夫人が床に座り、夫の頭を抱きかかえ、号泣していた。シャルペーフは絶望して叫んだ：「神よ、私はなんてことをしたんだ！」 私にした最初のことは傷を見たことであつた：傷は右側の首のほぼ真ん中であつた；私は呼吸を聞いてみた、呼吸は殆ど止まっていた：疑いはなかった、ベストリは死んだことが。しかし、直ちに医療手段が行われた。全てが無駄であることが分かり、私は読経者に指示した、ベストリ婦人の所にいるようにと。私は領事呼びに行った。私が領事を訪れた時、大急ぎでシャルペーフがやって来て話した：「領事に話してくれ、医者殺した。殺すつもりは無かった；私が嘘をついても仕方が無い；*****多分、4時間生きる（？ ＊）」彼の声の調子に緊張し、私は手で彼を掴んだ、彼に言葉をかけることに努力した、余計なことをさせないようにするために；私には直ぐに思いついた、彼が海に駆けだしていき溺れようと考えていると。幾つかの彼の返事で冷静になり、私は彼の手を離し、私は再び領事の所に向かった。この不幸な出来事を説明するために。私は領事館に立ち寄った；ここで、直ぐに私の後に続く

てシャルペーフが現れた；彼はベストリ婦人の泣き声を聞いて、玄関から元へ戻ってきた。私の召使いを見て、私は彼の後を追っていくように彼を使わした。私は彼を確りと見守るように命令した、彼が何もしないように。30分後、不幸が起こった現場に、イギリスの軍艦から医者がやって来た。一瞥して、彼は説明した、全て終わっていると、彼はただ緊急の傷の観察だけの準備をした。シャルペーフが死ぬことを話にかけ寄ってきた。後になって分かった、ベストリは命を吹き返すことが無いと分かって、その後直ぐに彼は服毒した。彼を嘔吐させ、彼の命は救われた」。

後になって、ニコライ神父は医者と同業者で第28艦隊乗組員の水兵イワン・タパノフを吊った、彼はコルベット艦バガチリ号に勤めていた。

ゴシケビッチと日本人学生の別れ

ヨシフ・アントノビッチ・ゴシケビッチは7年の長きにわたって函館で生活をした。彼は1865年4月21日に、日本に「別れ」を告げた。1864年9月5日、彼の妻エリザベータ・ステファノブナが43歳で亡くなった。それから7ヶ月後のことであった。領事が函館を去ることを急いだのは、これが理由では無かったのか？ 興味を引く、彼がどう考えたのか。この沿岸を捨てて、戻ってくる希望があったのか。

ゴシケビッチが日本で過ごした時は簡単では無かったと評されよう。印象の新しいことは初めだけ熱中させた。その後、新しいことは単調で緊張した仕事に変化した。その期間の状況は平穏な特徴で際立つことは無かった。しばしば、新旧のグループの間に争いが起こった。屢々ヨーロッパ人への襲撃も起こった。特に、外交官への。地方の函館も例外では無かった。領事ゴシケビッチの活動は特別なねたみを引き起こした、日本への新しい潮流に反抗する者達の。そして、彼の命が危険にさらされることは希では無かった。侍の刀の一撃が何時でもあり得た。

多くのことを成し遂げることが出来た：領事館の建物が建設された。海軍病院、正教会、ロシア語学校が開かれた。カミダ村（？ *）に副業の事業が組織された。ゴシケビッチは日本人に写真術を教えた、ヨーロッパ式の裁ち方と服の縫い方を、ヨーロッパ式建物の作り方を、パンの焼き方を、乳製品の作り方を。正教の価値について話した。それ以上に領事の仕事をしなければならないのに。

日本での滞在時、ゴシケビッチは系統的に自然の観察を行った、気象概況を作成した、植物相と動物相の収集をした。彼の研究結果は公刊された、ペテルブルグの主物理天文台と帝国科学アカデミー博物館の出版物として。彼によって記述された無名の昆虫の種の名前としてゴシケビッチの名前が付けられた。マクシモフが書いていた：「我々の領事は、昆虫学の熱心な愛好者であった、自分の昆虫のために、棚を作ることを考えた。日本人の職人は漆塗りに同意した、閉じた室内での、その上全くの立会人無しで。彼は外国人に秘密を明かさないうことにした、幾ら金を積まれても。仕事が終了して、何日間は部屋の窓を開け放つように助言した；しかし、領事は当惑して、漆塗りが終了後数日間窓を少し空けた、半時間ほど蝶の仕事にかかりきりとなった、終了した、床に倒れた。生の漆の蒸気に

中毒したのであった」。

領事の祖国への出立の日に、事件が起きた、ゴシケビッチの権威がどれだけ大きかったかを示すような。ニコライ神父が書いていた：「日本の商店をぶらついていた捕鯨船の船員達が主人の面前で、金箱を持ち去った；主人は彼らに対して大声を上げた。多数の日本人と30人ほどの捕鯨船員が集まった、大げんかとなった、射撃音さえも；両方に何人かのけが人が出た、一人の捕鯨員が一発で殺された；火事用鳶口で彼の頭を7回も打った、その内の最初の一撃で、彼は多分死んだ。イギリス領事ハンスはいきり立った、かつてないほどに；これは政治的な事となった（恐らく、彼は予見した、彼は金をせしめなければならない、これは日本の幕府から賠償金を獲得する機会だ）；初日に決まった、遺体を番所から動かさない事、殺害者を見つけ出すまでは；この際、ハンスは要求した、殺人者を船員の死んだ場所で即刻処刑する事を；日本人を殺人者の探索により駆り立てるために、ハンスはバガチリ号からの上陸部隊を要請した、町全体一番所から要塞まで一を差し押さえるために。この部分での商売を停止させる、出入りを禁止する・・・何と言う事だ？！

貴君が函館を去る時、ここの外国人達は当惑してお互いに質問し合った：「ゴシケビッチ氏がいなくて、ハンスは何をするつもりか？」明らかに、ハンスは遅れる事無く彼らに返答した、「彼は間違いをするであろう」と。しかし、多くの者達、特に平山と番所の役人達は貴君の不在を残念がっている」。

新しいロシア領事ブツォフとバガチリ号の指揮官ベルゴリッツは疑わしい衝突にくちばしを挟む事を拒否した。ニコライ神父は犠牲者を弔う事を願い出た。直に、殺人者を捕縛し、監獄に入れた。これは、ロシアと日本の間の友好隣人関係をなす事においてのゴシケビッチの権威が大いなる役割を果たした事を、皆に明瞭に示した出来事であった。ヨーロッパ人社会、同じく日本の幕府も、直ぐに気がついた、ゴシケビッチの退去により社会生活は極めて貧困になったと。以前は函館の冬には、ダンスやパーティーが催されていたが、ゴシケビッチがいた時より希になった。

新しいロシア領事のエブゲニイ・カルロビッチ・ブツォフは、1856年から東シベリア総督の所で外交に関しての秘書の仕事をしていた。彼は交渉に参加した、中国との愛理条約の締結を前提とした。1858年から外務省の役人となり、その後、中国で外交と領事関係機関で働いた。ゴシケビッチが始めたサハリンの国境線の交渉を継続する役目が彼に任された。

ブツォフはプロテスタントであった。ニコライ神父は彼に正教のイロハを説明する事を試みた。が、返答は：「私は正教徒では無い、無視している、どう表現したものか？ 軽蔑している」。正教の信仰に関してのそのような関係は助けとなるのであろうか、司祭と新しい領事の間には友好関係確立において。かつてニコライ神父はブツォフと言い争った。結果として、結婚の取り決めも無く、日本女性と領事館の敷地内で生活する事になった。ついでながら、大分後になって、ペルシアでの勤務時、ブツォフは正教に転宗した。

ゴシケビッチは理解していた：ロシアが日本と良い関係に在るということを、彼がどうにかして日本人に信じさせることが必要である、日本人がこれに納得するためには。このために、ゴシケビッチは若い日本人に大いなる期待をかけた、彼らはロシアで教育を受ける事が出来る。領事になって、ゴシケビッチは幕府に提案した、ペテルブルグでの教育に若干の若い日本人を派遣するようにと。江戸ではこれに同意した、領事に函館奉行と一緒に

に、函館の町から若者を選抜する権利を委ねた。

奉行小出ヒダミ（？ ＊）はゴシケビッチの提案を非常に気に入った。彼は期待した、領事が日本人学生達を精神的に支えてくれ、科学の勉強を助けてくれる事を、他の国へ行く以上に。しかし、候補者の選抜は、奉行には難しかった。彼はただ一人だけ志賀浦太郎ーロシア語通訳ーを提案した。北海道全土に渡って候補者の選抜をすることを提案した。当時、日本に於ける政治状況は目まぐるしく変わっていた、官庁は留学生団の組織化をゆっくり進めた。それで、ゴシケビッチは彼らを伴わないで帰国した。ゴシケビッチ無しで、志賀浦太郎以外に、何人かが選抜された：ドイツ語教師の助手である17歳の大槻彦五郎、将校の弟、藤間***宝蔵庫（？ ＊）の警備隊を管理していた；フランス語の教師の助手で19歳の市川文吉；15歳の田中二郎、田中シンクチ（？ 真吉＊）の弟、將軍の軍隊の前衛の指揮官の所で組同心の一員として勤めていた；英語の教師の助手で22歳の緒方城次郎、緒方甲斎の弟、宮廷医師で医学教育施設の教授の；オランダ語教師の助手の14歳の小沢清治郎、小沢タラノゼ（？ ＊）の長男、江戸の砲兵隊の指揮官の補佐の。最後に、函館奉行の役人（調べ役）の山之内作左衛門。最後の候補者はロシア語の勉強においては他の者達より年がいていた。彼は33歳であった。彼以外は、全員は江戸の開成所学校で勉強をしていた。

1865年9月5日、日本人学生達はバガチリ号に乗って、函館からクロンシュタットへ向けて出発した。志賀浦太郎の浪費に関して、この時捕縛されるものは彼らの中になかった、彼は江戸に滞在していた時、吉原の遊郭で官費を使い果たした。ニコライ神父がゴシケビッチに書いていた、「*****多分、彼の役職を剥奪した」。ヨシフ・アントノビッチ・ゴシケビッチはこの状況に非常にガッカリした：彼（ニコライ神父 ＊）はとにかく日本の若者達を支え続けた、相愛でもって答えた、ゴシケビッチに本を送って。幕府は前の領事の希望を促進することが出来た。が、幕府は心配した、日本で女性と無節操な関係が顕著であった若者が、ロシアでも同じような問題を引き起こすのでは無いのかと。実際において、志賀は少し遅れてロシアに派遣された、日本の使節団の通訳として、元函館奉行の小出大和之守が率いていた。

ニコライ神父は、出立前に未来の生徒達の門出を祝った。彼はゴシケビッチに書いた：「ロシアにおいて彼らはとにかく貴君の影響下にある；私は彼らに与えた、幾つかの教会関係機関への推薦状を；彼らがこれら関係者達を軽蔑しないようお願いする；彼らをキリスト教に引きつけるにもかかわらず、もし改宗しないならば、これは日本における我々の大事な仕事である」。

日本人達は1866年2月16日、ロシア帝国の首都に到着した。その時は、教育機関は休暇中であった。学生達はロシア語の勉強にこの時間を費やした。ゴシケビッチはロシア外務省で彼らに接見を設定した。そこで、彼らは橘耕齋と出会った。彼は同郷人の世話をし、彼らにロシア語を教えた。直に、大学の教師達が日本人達を出迎えた。専門について打ち合わせをするために。

ロシアと日本の文化の違いが、日本人の最初のグループの学習に否定的な影響を及ぼした。学生の異なった年齢がロシアにおける彼らの学習の効率を上げなかった。その上に、学生の圧倒的多数は、自分が希望すること無く、ロシアに派遣されていた。初期段階で、ロシア語の勉強に最大の興味を示したのは、山之内であった、一番の年配者の。若干の情

報源からであるが、彼はロシアに派遣された、日本の秘密エージェントの役割を持って。実際において、山之内はロシアが嫌いであった。気候、ペテルブルグ生活の物価高、ロシア語勉強の困難さがそれなりの役割を演じた。その後になって、日本人の勉学の不成功の原因となったのは、この時期に日本で起こった出来事であった。特に、幕府の崩壊。そして、ゴシケビッチへの援助の不十分さ。後者は正当であったのか、もし考慮するならば、特にゴシケビッチは人生においてアイデアの体現に根気強かったことを。ゴシケビッチは日本人学生を援助した、1867年7月に退職するまで。

日本の山之内使節団から祖国へ帰還した最初の者は病気のためであった。1868年の幕府の崩壊により、更に4名がペテルブルグを後にした。ロシアには、市川文吉だけが残った。彼は新暦の1847年8月3日に江戸で生まれた、市川兼恭（かねとも *）家の長男として、プチャーチンを良く知っていた。プチャーチンが長崎を訪れた時、市川兼恭は江戸の天文台で通訳であった。1858年、神奈川での露日通商条約の締結時、彼は日本代表団を伴い、フリゲート艦アスコリド号を訪れた。その後、彼は江戸の開成所学校のドイツ語教授となった、1857年に徳川幕府によって設立されたヨーロッパ式の教育機関の。当時、開成所には、ロシア語学部があった、が、教師はいなかった。多分、兼恭はこの仕事に自分の息子を付けたがった、ロシアから帰還した後に。市川文吉はロシアを気に入った。彼の父がロシア語に通じていた御陰で、彼は日本にやって来た者達の自宅を自由に出入りすることが出来ていた。ペテルブルグで、ロシア人の女性シュビロバと彼は許可の無い結婚をした。1870年に、彼らの所に息子アレクサンドル・ワシリエビッチ・シュビロフが生まれた。ということは、ロシア人だけが日本女性をものにしただけでは無く、日本人もロシアで同じように振る舞ったということである。後になって、シュビロフは外交官となり、アフガニスタンとペルシアで総領事として勤めた。1869年、日本の明治政府は市川文吉を学生として承認し、ロシアの外務省に派遣した。

1873年11月、日本に帰還し、その年に設立された東京外国語学校のロシア語学部で教授を開始した。その時、彼は日本人の女性と結婚した。翌年、彼を日本の外務省の二等書記官に任命した。ペテルブルグにおける特別全権の日本大使榎本武揚に彼は随行した。きっと、ペテルブルグに滞在中に市川はロシアの家族に会ったであろう。千島列島とサハリンの交換についての露日条約に関しての交渉に、彼は通訳として参加した。条約は1875年に締結された。

1879年、市川は東京外国語学校に教授として戻り、東京における正教会の熱心な信徒となった。そこでクレトフスキイと出会った：「・・・ペテルブルグの日本大使館の元書記であった市川は、ペテルブルグで正教を受け入れた。この人物は30歳で、大きくは無いが、日本人としては背が高い、非常に感じが良い、頭の良さそうな顔をしていた；黒い燕尾服と白いネクタイを申し分なく着こなしていた、首には聖スタニスラフ勲章を」。

市川文吉教授は著名な作家である二葉亭四迷にロシア語を教えた。彼は日本の読者にロシア古典の作品を紹介した。1885年、東京外国語学校は閉鎖された。最後の40年間を市川は伊豆半島で人里を離れて暮らした。彼は自分のロシアの息子に金銭を送った。この息子は2回ほど日本の父の所を訪れた。全人生を通じて、市川は橋耕斎と友好関係を続けた。市川文吉は1927年7月30日に亡くなった。

若者のロシアの勉強の試みの不成功は日本の首脳部を落胆させなかった。北海道開拓庁

の長官黒田清隆の指示により、1871年に、ロシアへ山川健次郎と服部清孝を派遣した。彼らは旅行の最終目的地までたどり着けなかった：アメリカで、彼らはロシアへの出張を拒否した、ロシア語の勉強の難しさと他の問題などを動機として。彼らの代わりに、13歳のニチキ・シコシチ（？ ＊）を派遣した。若い年齢がロシア語を習得することの助けとなった。その後、彼はサンクトペテルブルグ大学で農業と林業の勉強をした。大学を修了した後、一時期、この若者はサンクトペテルブルグの日本使節団の一員となった。1878年に日本に帰還し、彼は函館の開拓局の一員となり、直ぐに長を勤めた。退職し、ニチキは北海道石炭蒸気船会社の社長の座についた。多分、彼の商売における成功は、ロシア語の知識に依ったものであろう。

しばらくして、北海道開発庁はロシアへ更に3人の若者を勉強に派遣した、江村次郎、桐原仁平、宮地賢一郎。しかし、これらの日本人達は露日関係においてそれほどの功績を残さなかった。非常に顕著な個性を示したのは、金沢出身の嵯峨 寿安（さが じゅあん）であった。この13歳の人物はロシアの研究への大いなる興味で秀でていた。特に彼をシベリアと極東が惹きつけた。彼は北海道にやって来た、というのはここからだ簡単に北の隣国に行き着くことが出来るものとして。函館で彼はニコライ神父と出会った。ニコライは彼にロシア語を教えることに同意した、日本語を教えてくれる代わりに。嵯峨は司祭を手伝った、聖書を日本語に翻訳することで。そのような共同作業は3年続いた。

1870年夏、嵯峨の夢は実現した。自分の一族から許可を得て、彼はロシア船でウラジオストクへ出発した。そこからシベリアを経てペテルブルグへ。駅馬車に乗って、ボートに乗って、徒歩で。それは長い旅行であった。その過程でこの日本人は沢山の町を見た、イルクーツク、ニジニイ・ノブゴロド、モスクワ、その他。1871年1月に、ようやく嵯峨はロシアの首都にたどり着いた。2年後の1873年に、ペテルブルグに日本使節団がやって来た、嵯峨は知識を分かち合い、使節団に自分のメモを渡した、自分の旅行の経路と詳細な地図を。

1874年に日本に帰還し、嵯峨は開発庁で働いた、地域の学校でロシア語を教えた。彼は多才な人物であった。人生で成功をなした。嵯峨は翻訳（カムサットカ・チボシ）、シベリアにおける生活と風習の研究（シベレイ・シムボ）、ロシアコサックの生活の研究（ダッタン事情）で知られた。嵯峨は完成させることは出来なかった、露和辞典の編纂という大仕事を。それは日本の文部省のために準備した。彼は不明の病気で1898年に亡くなった。

嵯峨と一緒に、日本の文部省は鹿児島出身の28歳の西徳二郎をロシアに派遣した。1875年、彼はサンクトペテルブルグ大学法学部を修了した。翌年、日本の外務省の職員となった。1887年、彼をロシアにおける公使として派遣した。後になり、日本の外務大臣となった。

ニコライ神父の苦勞

ゴシケビッチが出発した後直ぐに、函館にコルベット艦バリャク号がやって来た。その

船には艦隊を指揮する海軍少将イワン・アンドレービッチ・エンドグロフが乗っていた。ニコライ神父はいつも通りに船乗り達を迎えた、教会の基金を充足するように寄付の要請を持って。司祭が書いていた、「私は遅れること無く將軍の所を仕事で伺った、最高の敬意で彼に寄付ノートを持参した；が、残念！私の期待は実現しなかった：660人以上の船員と多数の将校達の2隻の船から、全額で329ルーブル集まった、大騒ぎも伴って。寄付ノートを見た將軍は、そこにマホフによる40分（日本の貨幣単位 *）の出費の記述を見つけた、彼は従者に話した” どういうことか？ 船から金銭を集めた、が総計40分；多分、司祭が盗んだ、教会の寄付のために委員会を指名しなければならない”。両方の船で委員会について話し合った；同情者達が私に警告した、書類を良好な状態にするよう助言をしながら；その後、將軍自らチビリコフの所にやって来て、強い疑念を表現した、私が教会から盗んだことに関して。私は耐えられなかった、將軍に手紙を書いた、それで寄付に対して感謝を示し、彼に気づかせた、彼には監査を指名する権利が無いことを、自分に関係ないことについて、そして説明した、1075ルーブル66カペイカ（前述の船の乗組員が寄付した）で教会を建てると、そこで1個の鐘が250ルーブルである、この総額から盗むことは物理的に不可能である；終わりに、無礼にも彼に助言をした、前もって人を知ることを、その後、人を判断することを。その際、私は請け合うことが出来る、後者のものは、控えめに、70歳の老人の名誉となる・・・ 將軍は私に手紙を与えた。その無学に対して、もし彼が学校の3学年にいたならば、彼を跪かせた。その不道徳に関して。もし彼が学校にいたならば、きっとむち打った；彼は全てを拒否した、ゴシップに全てを転嫁して、そのもとで、おそらく、チビリフを理解したに違いない、委員会についての噂のように、存在しなかった；手紙の最後で、私の助言に対比して、彼は私に助言をしている”注意するように”と；すなわち、懐からの石で脅かした、将官の階級で、滑稽だ！ おおむね將軍は函館に良い印象を持たなかった」。

ニコライ神父は函館の住民とゴシケビッチの間の連結環となった。日本の幕府の要請により、ゴシケビッチに辞書、航海、林業、軍事、地図、歴史の教本を送り届けることを頼んだ。それら教本を函館だけではなく利用した。仙台にも送り届けた。今度は替わって、ニコライ神父がゴシケビッチに日本の本や地図を送り届けた。司祭にとって大きな心配はロシア学校であった。そのための教科書を彼の要請に従ってゴシケビッチが送り届けた。ニコライ神父は見なした、ロシア語とロシア文化を通じて、日本人をロシアに馴染ませ、日本人の信者を教会に招くことが出来ること。

ニコライ神父は新聞「東沿海地方」に記事を書くようになった、ニコラエフスク・ナ・アムールで出版されている。その新聞の頁で、彼は函館の大火について書いた。その火災で、ゴシケビッチが長年にわたって日本で収集した貴重な標本を失ったことも。火事はアメリカ領事館から始まった。その後、すぐにロシア領事館に移った。司祭が書いていた、

「日本の建物に通じている者は我々の領事館を見た。すなわち、全ての建物を火から守り抜くことは難しいと。若干の建物だけが生き残った：通訳の家、司祭の、病院と協会、それらを日本人達は特に熱意を持って擁護に努めた。派手な火事場装束を着込んだ函館奉行は、火事の中で命令を出し続けた。日本人の全ての努力にもかかわらず、綺麗な我々の領事館は灰燼に帰した。我々の領事は自分の財産のごく僅かだけを助けた。貴重な収集品全ては焼けてしまった：動物の、植物の、鉱物の。それらは大変な苦勞をして集めた物で

あった、日本で彼の滞在時に寄贈された物も。それらは博物館一つに匹敵する物であった。大使館の一員であった海軍大尉コステロフはこの時長崎にいた。全ての財産を失った。現在、領事館の職員達は借家に住んでいる、が、多分、個人的な自分の利益の擁護の中で、日本の幕府は我々の建築のためにより広い場所を割り当てている。もちろん復活させる。燃えた家：2階建ての領事館、1階建て：秘書の、海軍将校の、領事館の職員の、医師の」。

1867年に、ロシア公使館に隣り合って建築されていた病院が焼失した。領事館の新しい建物をようやく1902年に建てた。

1865年8月30日、函館を台風が襲った。それについては我々は司祭のメモから同じように知る。

「我々の領事館では、被害を受けなかった建物は一つも無かった：教会の鐘楼から、小さい尖塔と一緒に十字架が失われた。幾つかの箇所では屋根が損傷した；病院の屋根の瓦が損傷した；家屋の壁から漆喰が剥がれ落ちた。教会の庭では、大木が根元で折れた。町では殆どの家が被害無しでは残っていなかった；屋根を失い、塀を壊し、半壊の家や全壊の家が残っていた」。台風時、10隻の船が海に沈んだ。

時折、幕府との行き違いが生じた。1866年7月、何人かの外国人、ロシア人医師も含めて、アイヌ人墓地へ出かけた。そこで幾つかの墓を掘り返した。このスキャンダルは大騒ぎとなった、それを静めるのに大変な苦勞をした。

1866年6月2日、長崎から函館へ、コルベット艦アスコリド号がやって来た。船乗り達は食料を補充することを期待していた。が、問題が起こった。肉は大変な苦勞を伴って獲得することになった、奉行の助けの元で。パンは非常に高かった、一人のパン屋が独占していたので。全般的に、ここでの産物は長崎より極めて高価であった。函館の物価高は日本を訪れた船乗り達の話で持ちきりだ。それについて、コルベット艦バリャク号の船長海軍大尉ルンドが報告していた。

アスコリド号の艦長が自分の報告書に記していた、「自分の船員達は極めて健康である」と。それにもかかわらず、1866年7月5日に、水兵のマチス・ベクマンが亡くなった、ニコライ神父が葬儀を行った。

函館のロシア領事館の教会は、カムチャッカ、クリル、アレウートの司祭、太平洋艦隊指揮艦とロシア帝国領事の管理下にあった。領事館の司祭の俸給さえ2つの官庁から得ていた。しかし、これら全ての金銭をニコライ神父は教区に出していた：「職務が私を絞め殺し始めている！ 砂糖無しでお茶を飲む、日本のタバコを吸う。今では全部で1400分（日本の貨幣単位 *）が必要。」ニコライ神父の住居は羨むに足りない物であった、家屋の一部屋を、教室として用いた、2つ目の部屋は仕事部屋として用いていた。が、同時に勤務者の部屋としても。犬小屋に似た3番目の部屋が寝室。幅広い板がドア代わり、障子がそれを隠している。それでは寒さを防げない。ペチカの火がついていなければ、室内は寒く、外と同じ。冬中、ニコライ神父はリューマチに悩まされた。着膨れで寝ざるを得なかった、毛の服を2枚重ねで。司祭が書いていた、

「とにかくあと2年は生活しなければならない、もしそれ以上でなければ。ペテルブルグでは、生活の不便さを全く感じなかった。もちろん、我々神父にはそれについて知るのはよりよい、我々に立派な風采が必要なのか、我々に光を閉じ込める恥辱をかかせる必要があるのか、樽の中のニシンのように、他人の樽の中で、風邪で衰弱する」。

翌年に函館のロシア教会は、プチャーチンが贈呈した十字架を得た。屋根の修理が当面の課題となった。ニコライ神父にライバルが現れた：2つのカトリック使節団である、噂では、彼らは大きな教会を建てるつもりであった。函館住民を全員収容できるような。正教会の司祭が書いていた、「熱心に活動している、生徒を集めることに：フランス語は彼らの学校に、ロシア語より少し多くの人々を惹きつけた。見てみよう、彼らはこの生徒達にどれだけ気を遣っているかを！ 見てみよう、函館の住民のうちどれだけを惹きつけることが出来るのかを。ほら、私の***も日本人も、どんな努力をしても、函館において人々を見つけることは出来ない。もしパートナーが我々に勝つならば、我々は赤面するか無い」。

函館における生活について、ニコライ神父がゴシケビッチに1867年2月に書いていた：「我々の社会は崩壊した。酒場は無く、何のざわめきも無い、情事は全く耳にしない。本当の廃墟が我々の目の前にある、決して名誉なことでは無い、領事館！ 神よ助けたまえ、教会は素晴らしい、貴方の時と同じように。・・・教会の庭もすばらしい、・・・その他全てはゴミとレンガで覆われた・・・。病院のことは誰も口にしない！ 火事後、日本家屋に5個のベットを置いた。その後、始末した、準医師もいなくなった！ ・・・準医師を残して欲しい！ その費用500ルーブルはロシアの国庫を消耗させはしない。見てください：ロシアの輝いている時期（貴君の時、その後、ザレンスキイが居座った）には、この病院には一日に50人以上が訪れていた。生徒に授業をしている！ 何とばかりか、とにかく、日本人が準医師になるなんて、5年は必要である、薬を処方するのに；習得すると、彼は去って行く。即ち：系統的に、ここではロシアの医学の衰退をもたらしている、以前はその開花をもたらしたように。頭が良い、これを考え出した者は一愛国的！ 感謝しよう！ ここでは、ロシアの医学はロシア政府の人間性と友情の表れである！ 医学は主に我々に対する国民的好感の喚起を促進した。我々の新しい医者、その仕事のマスター；アリブレフトとザレスキイを凌駕する；ただ余りにも生気が無い」。

領事館の勤務に、素晴らしい妻帯者の準医師がやって来たことに、ニコライ神父は満足した。多分、この人物は28歳の熟練準医師であった、第28艦隊の乗組員ピョートル・マトベービッチ・マトベーフ。彼は函館にやって来た、妻であるフェブロニア・ニコラエブナ（娘時代はクリボゴルニチナ）を連れて、出身はカムチャダルカ人の。直に彼らの所に息子のニコライが函館で生まれた。

1868年4月、重要な出来事が起こった。ニコライ神父はそれに努力した：元仏教の僧侶で優れた剣士である沢辺琢己の洗礼が行われた。正教に転宗した彼と他の日本人達について、ロシアの司祭は書いていた：「彼は武家出身で、剣術の腕前で名を知られていた。その後、我々の領事は時折彼を自宅に招いた。この術のロシア人への教習のために。ここで、私は初めてパブロ（？沢辺 *）を見た、その後結構彼と出会うことが多かった。しかし、出会う毎に、顔に怒りの殆ど悪意のある表情を浮かべて、私を突くようになった。私の部屋に立ち寄る度に、怒りに満ちた表情をして、キリストの信仰を中傷し始めた。私はその時彼に問いかけた、罵るほど彼は宗教を知っているのかと。答えは否定的であった。その時、私は指摘した、この宗教の学習に優先的に取り組むことが、より公正であろうと。それからあれやこれやの判断をするように。この学習の要約を聞くように提案した。私の提案は喜んで受け入れられた。それで？ 私は嬉しかった、私が気がついた時、十分な注

意を持って私の聞き手が耳を傾けたことに、彼に未知の新しい要約に。それまで高慢な考えはへりくだり、傾いた、驚くべき原因の前に。明らかに、神が彼の考えを本質の道へ向けた。これは最初で最も大事な一歩であった、パブロのキリスト教への復帰の道に関する；他の者達は自然と上手く行った。正教会への最初の改宗の状況はそのようなものであった。

我々の所での2番目の正教徒は酒井イオアンであった。この人物は地域の医者で、沢辺の友人であった。キリスト教に転宗した沢辺は、自分の友人を説き伏せることに努力した。が、酒井は弁論術に長けており、彼に勝つことは難しかった；沢辺は彼を屢々私の所に招待し、我々二人で彼を説得した。ようやく、酒井は改宗し、司祭の位にも叙せられた。病気で、早くも亡くなった。

3番目の正教徒になったのはウラン・ヤコフであった。同じく元医者。彼の後に、函館で洗礼が行われた、現在のヨアン・オノ神父によって。その後、何人かの友人達が洗礼を受けた」。

1868年、明治の復古は日本を改革の道へと戻らせた、ヨーロッパの国々と接近の。函館における国内戦の開始の過程で、榎本の指揮下で蜂起した桑名藩主、板倉藩主、小笠原藩主、竹中藩主がやって来た。指揮官達はパベル・沢辺神父の元で小宴会を催した。彼は当時まだ神道の神主であった。ニコライ神父を呼び出した、彼が思い出していた：「桑名藩主がその時、悲しそうな音色で横笛を吹いた。竹中は私と一緒にロシアへ危険を避けるつもりであった、彼にのしかかっている、手段の無いことだけが彼を留まらせていた」。

ニコライ神父には、正教の活動の拡大の淡い期待が持ち上がってきた。しかし、キリスト教の伝道の禁止は未だ数年間効力を残していた、新たに入信した日本人のキリシタンは迫害を受けていた。自分の信仰の変節でパベル・沢辺はしばらく苦しんだ：地区の奉行は彼を投獄し、彼の家を燃やした。ヨアン・酒井（川俣）神父は1868年に、函館から生まれ故郷の金成へ逃げていった、そこで、キリスト教の布教を始めた。最後まで正教に忠誠を保ち、彼は1881年3月14日盛岡で亡くなった。彼の死後には沢山のメモが残された。ニコライ司祭がそれらを集めた。ニコライはそれらを選集として出版する計画をたてた。スピリドン・大島神父は函館から三戸に1872年頃に出て行くことを強いられた。この時期、函館でパベル・津田が捕縛された。マトフェイ・カンゲタ神父は1872年に函館から追放され、直に山ノ目で布教を始めた。

ニコライ司祭の所へある日本人が立ち寄った。彼は荒井と自己紹介した。ちょうどアメリカから戻ってきたところであると。「1868年に、彼を見かけた、彼が榎本武揚の武装蜂起の一員で函館にいた時に；彼はそのように熱しやすい若者であった、キリスト教を受け入れる準備が出来ていた。1869年初めの、ロシアへの私の出発に会わせて、彼はアメリカへ去って行った、そこに30年間住んでいた。ある神秘主義者ガリスに、いい人に傾倒した、立派な心を持っていた（せめてガリスに報いたかった、彼の農場の小作人による話から明らかなように）神の長所を身につけたキリストの教えを知らないし、知ろうとも欲しない」。

正教の公認の流れは段々と力がついて行った。住民が幕府にガッカリしたことが、これを助けた。ニコライ神父が書いていた：「函館を訪れた時、彼（日本人* *）が私の所

に現れた、軍服の服装で。彼の最初の言葉が：「我々将校のうちの25人が信仰を勉強したがっている；私は彼らに伝えた、出来ると。」 戦争生活の不安の中で、青年は新しい信仰に関して彼が得た教義を少し記憶に持っていた。目の前にある闘いの困難さと危険を忘れ、焚き火の所で、彼らに未知の神について、償いと助けの秘密について友人達に話している！ 彼のこれらの言葉は無駄ではなかった；私の所にはこれらの将校のうち12人がいた、即ち、函館に住んでいる機会を持っていた：彼らの各々は入門の講義を続けて欲しい希望に燃えている、何人かは信仰の普及の仕事に自分を献げる準備があることを表明していた。

日本人の正教への改宗が、ニコライ神父の最終目標では無かった。彼は勝利とさえ見なした、日本人達に正教の価値と親しませることを。総合的に、これが彼を助けた。宣教師の活動において。1871年、函館で、彼は著名な日本人活動家と知り合いになった、副島伯爵と。彼は天皇に心身を献げることを声明していた。ニコライ神父は日本人を惹きつけている、この主張を厳しく論駁した。話し合いへのお礼として、伯爵は司祭に絹の反物を贈呈した。返答にニコライ神父が語った、貴人が正教を受け入れた時、自分の服を縫うと。副島は正教の教義に興味を持ち、魂の不死を信用したにもかかわらず、彼は正教徒にはならなかった。それにもかかわらず、彼の影響の御陰で、牢獄から清教徒が解放された、函館から、仙台から、水沢（？ ＊）から。伯爵は秘密の命令を出した、キリスト教徒を迫害することを禁止するとの。後になり、彼は駿河台に司祭が土地を獲得することを助けた、そこに日本の主教会を築いた。

カムチャッカ、クリール、アレウートの主教インノケンチイがニコライ神父に助言した、ペテルブルグに行き、日本にロシア宗教使節団の開設を得ることを。この仕事は経済と政府に関係なく、正教の教区とニコライ神父の宣教師活動として。領事館の司祭はこれに同意した、が、日常的な心配と責務が教区に長く滞在する可能性を彼から奪った。使節団開設というこの大きな価値についての考えは、直に、彼に更なる道を選ばせることを強いた。

ロシアでニコライは使節団設立のために大いなる努力をした。彼の意向は勝利で飾られた：最高宗務院の許可が得られた。1870年、皇帝アレクサンドル二世は最高宗務院の決定を裁可した、日本の宗教使節団の設立に関する、カムチャッカ主教団の指導下で、ニコライの監督下で、大修道院長の階級に登った。1871年、ロシア宗教使節団の長として彼は日本に戻った。函館に印刷機を持参してきた。宗教学校の学生の助けを借りて、印刷機で自分の講義、祈り書、その他を印刷した。これは日本においての初めてのキリスト教の文献であった。イコン画も印刷技術で作成された。それらを、現在でも釧路、高崎、ヤナイバラ（？ ＊）の教会の天門で見ることができる。これらの資料を宗教研究のために、ニコライは必要とした。彼の生徒達－沢辺琢磨、酒井トクレイ、浦野大藏－は自主的に教会のスラブ語を勉強した。函館から正教は北東の仙台まで広がった、そこは正教の中心となった。

ロシア領事館は1872年まで函館にあった、その後、東京に移った。外交官の退去後、全ての建物はロシア正教使節団に渡された。これに関して、領事館の土地は何の書類によっても確定されていなかった。ニコライ神父は地区の役所の要求に従って、年に270円の土地代を払うことを強いられた。消失した病院はロシア人は再建しなかった、その跡地を日本側はイギリス宗教使節団に渡した。1885年、教会を除いて、司祭と通訳の家屋

全ては消失した。

教会の教区の活動

函館における正教の普及に関するニコライ神父の努力は成功で飾られた。1872年冬、町に約50人の日本人信者を数えた時、そこへ手伝いに34歳のアナトリー司祭（アレクサンドル・ドミトリエビッチ・チハイ）がやって来た。キエフ神学アカデミーの卒業生。1年で、函館の教会を約200人の教区信徒達が訪れた。聖職者達の意見に依れば、日本人を惹きつけるためには壮麗な教会が非常に重要である。教会を再び修理をし、塗装を施した。特に白い壁が効果的に見えた、最初の領事によって発明された方法—塗って綿で磨いて又塗って白を重ね塗りする—でペンキを塗った。金色のモールで飾られた教会の壁に、イコン画を吊した、イコン画家カルザニンの筆による、ゴシケビッチが送ってきた。ニコライ神父は上海からガラスを取り寄せた、イコン画を覆い、ゴミ、湿気、人による接触からイコン画を守るために、

ニコライ神父がゴシケビッチに書いていた、「教会の掃除の後で、勤行が開かれた時、民衆への鐘の毎に—教会を見る—教会は人で一杯—即ち、全てのキリスト教徒について十分に明らかな理解を与えること：この説明を聞いた聴衆のうちどれだけが今キリスト教徒か！—そして、今後にどれだけ前に進むか—貴方のイコン画と貴方の教会の御陰で。貴方のために、函館の教会で祈ります、永遠に祈ります、教会の長老のためのように」。

ニコライ神父と彼の助手の熱意を、大主教インノケンチイ（ベニアミノフ）は高く評価した。1873年に函館を訪れ、彼は声明した。この地区の教会は、彼の主教座教会より素晴らしいと。この時には大修道院長ニコライは自分の信徒衆をアナトリー神父とパベル・沢辺に預けていた。1872年に東京へ移動していた、ロシア正教使節団の設立のために。同時に、首都に、ロシア帝国総領事館が開設された。東京で大修道院長ニコライは築地のホテルに滞在した、増上寺の僧侶と彼は懇意となった。彼の2軒目の家となった。新たに全てを始めることとなった、が、直ぐにここの僧侶達は彼の友人となった。

函館で、ニコライ神父の仕事をアナトリー司祭が継続した。彼は素晴らしい合唱団を創設した。それには彼の兄弟であるヤコフ・チハイ、ロシア領事館職員が参加した。日本の信者達の歌は、最初はロシアの船員達に笑われていた。この時代の専門家の意見に依れば、日本人の正教徒の宗教歌は、70%が日本の能の、20%が義太夫のメロデーで出来ていると、残りの10%が日本の民謡から。それにもかかわらず、正教会における最初の賛美歌は2つの国の音楽文化の相互浸透の興味ある例を示した。当時、日本人はヨーロッパの音楽を全く知っていなかった、全く当然であった。明治時代の中期に、設置された文部省によって認定された学校唱歌を見本として親しむようになった。意見が存在している、ヨーロッパの歌の普及における日本の正教会の役割は非常に大きかったという。

新しい司祭は多くの時間をロシア語の教育に献げた。これに対して、函館の長の感謝を受けた。返信の手紙で、アナトリー神父が書いていた：「私は本当に嬉しい、日本の恵まれた空の下で無駄に過ごしていないことが、些細なことで役に立っていることが、そこに

私が今いる幸せを感じている。」アナトリー神父は日本語をオイセイ・長谷川（トイシマ）から学んだ。時間が空いている時には、司祭はアメリカからのカトリック宣教師ハリスと過ごした、日本における宗教活動の問題を審議しながら。

函館に滞在するロシア人は、年々多くなっていった、殆どの正教徒達はこの地に自分の安息の場所を見つけていた。直に、ロシア人墓地が余りにも狭いことが分かった。1874年、司祭は政府に117番地区をロシア人に渡してくれるように願い出た。当時そこにはロシア人病院があった。このとき、ドイツ領事ガベルー公式には地区は彼に属していた。一が亡くなり、地区はロシア人に戻る機会が訪れた。ロシア人墓地の拡大について領事オラホフスキが陳情した。彼は既に長崎に居たが、函館の領事館の管理を継続していた。土地の引き渡しの仕事は非常にゆっくりと進んだ、境界設定が必要とされたので。事業の成功に自信を持ったアナトリー神父は、1875年1月に新しい地区に正教徒の日本人ユマナカ・キトジの埋葬を許可した。それはとんでもないスキャンダルを招いた。その地区は未だロシア教会のものとなっていなかった。領事の処置の御陰で、それをもみ消すことが出来た。若干の斡旋の後、日本政府は地区をロシア人墓地に付け加えた。

アナトリー神父は1878年から大阪の教会で仕事をした。日本の宗教に関する幾つかの論文は彼の手になるものである。

初の函館生まれのロシア人

1865年11月10日、領事館の医者マトベーフの家族に息子が生まれた。北海道で生まれた最初のヨーロッパ人であろう。この子と共に、悲喜劇の出来事が起こった：日本人の乳母が小さいコーリヤを掠った。子供と一緒に村に行き、皆にロシア人の赤ん坊を見せた。乳母の父と同じように、子供は日出ずる国に対する愛着を自覚し、それを全人生で保った。自分の出生の状況について、ニコライ・ペトロビッチ・マトベーフは37歳の時に知った。北海道で1902年11月29日（旧暦12月12日）に彼とで会った時に。彼の洗礼をした、ニコライ司教から。

司祭が書いていた、彼に話した「母は生まれに苦しんだ、危うく死ぬところであった、彼女は人事不省に陥った。彼の父は亡くなった、彼が小さい時に、私の話は彼には新規のことであった」。次の日に、マトベーフは再びニコライ司祭を訪問した、ニコライは「写真を贈呈した、父と膝の上にいる赤ん坊と母の写っている、37年前に函館で撮影した；彼に食事後に図書館と学校を紹介した」。

ロシアの極東史において、ニコライ・マトベーフ・ニコライ・ペトロビッチ・マトベーフ（ニコライ・ペトロビッチ・マトベーフの息子？ *）の名は特別な位置を占めている。ジャーナリスト、作家、出版者として、図書館学とロシアの日本学において彼は多くのことをなした。残念ながら、現在まで、マトベーフの仕事の文献目録は出来ていない、ロシアには彼の創作物は何も存在していない。

1868年、3歳のニコライ・マトベーフは両親と一緒にウラジオストクに移った。彼はウラジオストク港湾学校で教育を受けた。その後、港湾修理所で職人として働いた。自

分の生活の原則として彼は常に確りした仕事と普段における自己形成を見なした。若い時ニコライ・マトベーフは新聞「東方通報」に勤めた、その後、レメゾフの「ウラジオストク」に。直に、彼の記事と博学な論文は様々な極東とシベリアの出版物に現れた。マトベーフはそれらをいろいろな匿名で書いた：ニコライ・アムールスキイ、H・A、クラブ、H・エースキイ、ストラニク、グルホフのハイネ、その他。

新世紀の到来はマトベーフの生活において、顕著な出来事と合致した。彼の最初の詩集が世に出た。現代の評価に従うと、彼を成功者と見なせるのであろうか？ が、それにもかかわらず、本は読者を獲得し、急速に広まった。1904年、著名なロシアの出版者シチンがマトベーフの新しい選集を世に出した、散文の本「ウスリースクの話」を。ロシアの多くの読者は遠くの沿海州の生活と風習に親しめることとなった。話の名称は、「放浪者。貧しい子供達の生活から」、「通りの光景」、「配達人。シベリアの生活から」、「妊婦の歌の響きのもとで」、「船乗り生活の1頁」－著者の広範な観察力を語っている、その意向は自分の話の登場人物によって考え出されていない、が生活から直接にそれらを捕らえている。

ニコライ・ペトロビッチ・マトベーフは旅行案内書を準備し、それを1902年に印刷した。その年に、マトベーフは函館から長崎まで日本を縦断して通った。感じた印象を、彼は「ウラジオストク」の読者と分かち合った、日本人の礼儀正しさと配慮を正当に評価しながら。マトベーフが書いていた、「私が一人で昼も夜も良くぶらついた。人の多い町の通りでは無く、劇場では無く、いろいろな名勝地の観光で無く、時折非常に暗い場所にある、船では無く、鉄道では無く、何処でも一度も何の暴言を聞くことも無く、至る所いつも私はロシア人であると話したにもかかわらず。逆に、至る所いつも日本人は礼儀正しきでビックリするような手並みを示すよう努めていた。私は寺、病院、工場、印刷所、その他を見学したくなると、彼らは私を何処でも何時でも案内し、全てを見せてくれた。時々あった、ちょっと知り合いになると、彼らは旅館ではない自宅へ熱心に招待してくれたことが。希では無かった、人の多い駅で、日本語を知らないで、私は偶々迷ってしまった時、駅員が、外国人がうろたえるのを見て、私を助けてくれた」。

全く他の関係が、ロシアにいる日本人に観察された。歴史学教授ケル・山岡－ロシア語、フランス語、ドイツ語、中国語を知っている－はハルピンを訪問中に酷い目に遭ったのは希では無かった。希では無かった、ロシアの巡査がウラジオストクで日本人を追い払ったのは、何かの処置で短い皮鞭で或いは裸のかかとをむち打って。

どのようなジャーナリストが編集長の椅子を夢見ないのか？ マトベーフにはそのような夢があった。そして、夢は実現した。彼が個人の雑誌を出版しようと考えた時に、名称が「極東の自然と人々」の。ニコライ・ペトロビッチ（・マトベーフ *）が書いていた：「私は沿海州を良く知っていた。これは大きなプラスであった。我々のこの辺地で何らかの出版を初めて、最初のうちは多くの協力者を期待してはならない。私は既に新聞を編集しており、知っている、極東の編集者は印刷のための資料を集めるだけでは無く、自分自身で記事を書き、それを校正し、時には製版に立ち会い、新聞販売も管理しなければならないことが。これら全てに最も大事なことを付け加えなければならない：ズッと考えていなければならない、植字工は散歩に出かける、彼らを誰かに変更する、印刷物はタイミング良くは出来上がらない！ これら全てを知った上で、私は雑誌の出版に全力で取りか

かっている。私は既にペテルブルグとモスクワから幾つもの鉛版を得た、私の写真や、この地方の生活を図案化する。私の雑誌の外見は「ニバ」(? *)に似たものとなろう、内容では雑誌「自然と人々」に。沢山の仕事が私の前に立ちはだかっている」。

極東における最初の雑誌の計画について、マトベーフはウラジオストクの幾つかの新聞で広告を出した：「全面的な紹介、ロシア社会の、自然と人々と彼らの生活の、極東における。指導的な理念はここで生きている全てに接近すること、お互いに平等な民衆として、相互の不信、敵意を引き起こすような全てのことを除去して、将来において流血で脅かすことを。ロシア人の生活の問題において、この雑誌は加わるであろう、最も活発な社会の要素に」。

マトベーフはアイデアを成熟させた。ジャーナリスト活動の助けを持って、民衆に接近するという、沿海州に近接している国—中国、日本、韓国—に住んでいる。彼は本物の博識家であった、これらの国との関係において。そして理解していた、極東を住み家としている民衆は本当に沢山居ることを。マトベーフは屢々第2の故郷で有る日本を訪れた。そのたび毎に函館を覗いてみることに努めた。彼の親友で同僚であるオオバ・カサク (? *)が彼の一度の滞在について書いていた：「ある秋に、彼が私を朝日新聞の編集部へ案内した、そして話した、この日の朝にやって来た。私は菊の展覧会の切符を何枚か持っていた。私は彼を招待した。道すがら、マトベーフは話した、講義をする予定である、若干の研究について話す、日本の仕事の課題分野についての。が、彼には日本の女性の仕事についての資料が無いと。道すがら、彼は私に本屋の丸善に立ち寄ることを願い出た。私は答えた、明らかにそのような本は無い、そのような問題には日本は触れていないと。これに対して彼は笑い出した、私の肩をポンポンと叩き、話した：「冗談を言うてはいけない！ 長崎では、石炭を船に女性が運んでいない？ 建設現場では子供を背負って女性がレンガを運んでいない？ ヨーロッパでは、そのような仕事を女性は行えない。」本屋に私達は立ち寄った。しかし、店員は探せども探せども、そのようなテーマの本を見つけることが出来なかった。マトベーフは非常に不満であった、日本においては女性の仕事の問題は誰にも感心を引き起こしていないことに。私にそう語った。展示会では各花の名称が彼を惹きつけた。私が翻訳できない時、彼自らが翻訳することを試みた、各文字の意味から。象形文字に良く通じており、菊の複雑な名称に、彼は深い意味を見つけ出した」。

マトベーフの雑誌に、我々は次のような人々の概説を見いだせる。彼らと一緒に、運命は編集者で出版者の彼の人生の様々な年へ密接に引き連れていった：元政治懲役囚シテルンベルグについて、後になり民俗学者として著名となった。ピルスドスキー、レメゾフ、ユバチェフ (ミロリュボフ) —流刑された海軍将校—センセーションを起こした本「サハリンでの8年間」の著者について、その他多数。1905年に、マトベーフはピルスドスキーと一緒に函館にやって来た。日本で、年長の娘ゾーヤに手術をした。いつも通り、何回か日本での旅行をした、雑誌のために資料を集めながら。

雑誌が採算がとれるようにするために、マトベーフは全てで節約せざるを得なかった。執筆者に謝礼金を支払う可能性が無いので、雑誌のための大半の原稿を、彼自身が書いた。この理由のために、彼の年長の子供達が印刷所で働いた。彼らは町を歩き回り、雑誌を顧客に配った。出版の仕事は悪くはなかった、雑誌は直ぐに売り切れた。が、第一号出版の7ヶ月後、読者達は待っていた第27号の代わりに、次のような内容の知らせを得た：「雑

誌「極東の自然と人々」の編集部より。編集部に関係の無い事情により、雑誌の出版において若干の停滞が起こっている。購読終了の期限はそれ相応に延期される」。

定期号の遅延の原因がマトベーフの逮捕にあったことを知っていたウラジオストク人は僅かであった。彼を逮捕した、彼がオオバ・カサカ（大場佳作？ ＊）を經由して、自分の雑誌のために日本から運んできた鉛版を手にした時。それらは違法な内容のある紙で包まれた紙束であった。大場佳作はこれについて書いていた：「戦時、ラッセリ博士が日本にやって来た、社会民主党代表、年配の人物。が、非常に活動的。彼は私に懇請した、軍からの復員者達のためにウラジオストクに送ってくれることを、この党の何らかの宣伝資料を。資料の配付に援助を示す。和平の到来後、私は最初の船「宝山丸」で、荷物の形でこれらの資料を運んだ、到着して直ぐに手にした。古い帝国ロシアは政治捜査のすばらしく整備されたシステムの政府であった。ウラジオストク港に到着後、1、2時間も経たないうちに、何人かの憲兵と警官が私を税関まで同行するように要求してきた。その入り口には武装した番兵達が立っていた。敷居をまたいでいくと、私は散乱した宣伝資料を見た。箱は壊され投げ捨てられていた」。

マトベーフの寄与を軽減する目的で、ラッセリは次のような声明を印刷した：「意思」の編集局はマトベーフとの何の非合法活動的な関係にない、彼の逮捕を決して利用しなかった、これに決定的な何の必要性も有していない、すなわち、関係のような。マトベーフが決して属することのない組織の助けによってウラジオストクとの関係が完全に整備される」。これは助けにならなかった。日本人は直ぐに釈放されたが、マトベーフは1年ほど投獄された。

マトベーフの逮捕について、彼の親友であるピルドスキイはやむなく罪を認めた。かつては、彼はマトベーフに駕籠一杯の本を送っていた、が、これについての手紙は一遅れて書かれ、何らかの間違いで配送にも遅れた一はウラジオストクに届いた。ニコライ・ペトロビッチ・マトベーフが既に逮捕されていた時に、彼の代わりに裁判所の手に入った。営倉でマトベーフの裁判が行われた、そして問いたです：

—君はピルドスキイから何を得ることを待っていたのか？

少し考えて、マトベーフが答えた：

—多分、手原稿の包みか鉛版。

—更に何かを待っていなかったのか？

—何も・・・

彼は本の入った駕籠を忘れたのか？ ピルドスキイから得た。これを重視していなかったのか？

ゴストケビッチが、1907年5月に、ピルドスキイに書いていた：「その手紙にはニコライ・ペトロビッチが話しているように、私のための用紙があった。それを尋問した、私についても。彼は非常に警戒した、私を逮捕しないで、彼の仕事に呼び出すのではないかと。初めは、彼は話したがらなかった、私が誰かを、しかし、考えた上で話をした。彼に起訴状を手渡した時、彼は裁判でそのものを見た、君の手紙は彼をほったらかしにしなかった。彼は少し考えた、権力はこれに価値を与えていないと、他の方法で彼は証明することに努めた、君の先の手紙で。彼らは長崎から送られてきた駕籠とは何の関係もないことを。その中には不法な文献があった、そのために彼が逮捕された。

裁判で審議中に、検事が貴君の手紙を持ち出して話す：「ほら証拠だ：この手紙で本入りの駕籠について話している！」可笑しかった、いつも悲しかった（？＊）。マトベーフはその時示すことが出来なかった、これは不思議なことであることを。既に遅かった。彼を既に1年半の間「押し込めた」。状況の一致が、時折あるということ。君が本の入った駕籠について手紙に書いた。そしてここに本の入った駕籠がある、不法な文献の入った。分かるであろう、これは真実らしいことが。もし注意を振り向ければ、君が政治的で何度も外国に住んでいたことに。更には君には不味いところがあった、手紙に君は決して日付を書かないことが。権力は信じた、これは君である」と。

1907年12月に自由の身になり、マトベーフは雑誌にはもう戻らなかった。新聞「遠い僻地」の特派員となった。1906年4月6日の逮捕まで、彼は総督に宣言していた、ウラジオストクに週刊新聞「遠方の地方」の発行に関して、以下の内容の：電報、地方の諸問題に関する最新の記事、最新の報道、田舎と町の年代記、出版概要、隣国に関する論文、重大な題名の記事、特派員報告、世相戯評、雑報、挿絵、広告」。この宣言は回答なく残った。

ジャーナリスト活動から離れて、マトベーフは町のゴーゴリ図書館で時間を費やした、以前はゴリキー沿海州科学図書館であった。そこで社会奉仕で長となった。マトベーフは図書館の部屋の拡大、基金の増額に心を砕いた。1909年の新聞「遠い僻地」に2回にわたり、図書館の歴史について概説を書いた。その25周年を記念して。彼は本の著者となった、ウラジオストクの50周年を記念する。今日に至るまで、ウラジオストクの歴史に関する著作は、この本を引用すること無しにはありえない。この本では、ウラジオストクにおける日本人の生活に献げられた頁は少なくは無かった。

ウラジオストクの秘密警察は、1917年の2月革命まで、マトベーフを監視していた。警察のスパイ情報には、マトベーフは社会民主主義者の地域の組織化の指導者の内の一人であったと登記されていた。1909年夏に、マトベーフは旅行団の一員として、再び日本を訪れた、この旅行の目的は、露日戦争終了後の両国関係の調整であった。新聞「極東の星」に、「日本への初めての旅行」の題名で彼の記事が出た。次の年に、同じ新聞に、題名「日本におけるロシア人女中」の記事が載った。それでは、函館における最初のロシア人について話をしていた。

1912年、自分の印刷機で、マトベーフは日本の旅行案内書を印刷した、アルカヂイ・ポポフによって編集された、ウラジオストクの新聞「東方」の同僚である。本には既に日本を訪れた人たちの旅行メモが入っていた。

ロシア語学校

領事のゴシケビッチは少なくない時間を費やした、日本人にロシア語を親しませるために。彼の夢は函館にロシア語学校を設立することであった。同じ意向は他の領事館職員達にもあった。訳あってマホフは初等教本を印刷した。ニコライ神父はロシア語の授業を続けた。彼の助手は函館の人にロシア語を教え続けた、うまく。その証拠となったのは、

彼らは授業を交替して行うことが出来た。通訳の田中喜一と4人の日本人は1872年から官立函館学校で教授するようになった、役人の子供達のためにロシア語を。直に、この学校は大きな評判を受け、影響された日本人達は自分の子供をここへ送り出すようになった。

1873年夏、読経者のサルトフがこの学校の先生になった。ロシア語以外に、彼は数学、地理、歴史の講義をした。この活動は成功裏に進み、直ぐに授業は「ローガッコウ」と呼ばれた。残念ながら、授業は長くは続かなかった。1874年1月17日、アナトリー神父は36歳の読経者を弔うことになった。

ロシア語は同じく伝道学校でも教えた、1873年に教会と共同して。3年後、1876年に、私立の日本学校の函館ローガッコウが開設された。そこでロシア語の授業を行った。

更にもう一つの学校として巴学校を日本人の笠原義弘が開設した。彼はロシア領事館と関係があった。元漁業者が彼の共同出資者となった。この学校では、ロシア語と同時に他の教科も教授した。

ロシア語の教育は特殊な学校だけではなく、普通の学校でも行われた。この例として、正教学校がある。この学校では普通の教科と並んで、ロシア語の授業が行われた。正教の教区がこれを援助した。授業には300人の日本人の少年少女が出席した。1879年の大火がこのプログラムをぶち壊した。

さらにロシア語を教えたのは北海道町立函館商業学校、北海道町立小樽商業学校、同じく札幌の学校で。ある時期、ウレボフが函館の使節団で働いていた。彼はロシア語文法の教科書を準備した、この教本は重版を重ねた。

函館とウラジオストクを「結びつけた」

スタリツキイは才能のあるロシア人の水路学者であった。彼の友人の水路学者が書いていた、「コンスタンチン・セメノビッチ・スタリツキイはどんなに働いたところでも、全力を尽くし、確りとした見方をした、買収できない正義さで全ての人を惹きつけた。そのようにして彼は仕事に成功した。いつも、ありふれた、尋常ならぬ謙遜さで際だった、心の綺麗さで。スタリツキイは自分と対立する人にうっとりする印象をもたらした。特に彼は若者が好きであった、喜んで若者を手伝った、出来るだけ。自分の人生の最後まで、科学に対する興味は止まることはなかった、特に全般的な地理学的研究に、特に水路学に。真面目な研究者は彼の親友であった。いつも大事な彼の、そして彼の人当たりの良い家族の客であった。

皇帝の許可を得て、スタリツキイはフリゲート艦アスコリド号での天文、磁気、水路図の仕事のために割り振られた。彼には、それらを太平洋と極東で船の航行に従ってすることとなった。この航海の準備のために、1863年2月から1864年5月まで、スタリツキイはプルコフスク天文台で仕事に就いた。科学的目的を持ってオストゼイスク地方(バルト海沿岸)での事前の実践旅行を行った。自分の上司、水路局長セメン・イリッチ・ゼ

リヨンヌイのはなむけの言葉を受けて、若い将校はクロンシュタットから極東へ出発した。バルチック海から日本海への航海は、結構平穏でつまらないものであった。スタリツキイの頭の中を占めていた唯一のことは観測機器の保安のための心配であった。機器は彼の船室全部を占めていた。クロノメーターが規則正しくかちかち音を立てていた。計測のために船体から投げ出された新しい測程器は1マイル毎にかちかち音を立てる。船倉には新しいブルック式測鉛が1ダースあった。

1866年春に、アスコリド号は長崎に到着した、驚くような満開の桜が船乗り達を出迎えてくれた。ピンクの満開の花が全ての公園、通り、オモチャのような日本人の家屋の極小さな庭を満たしていた。若い水路学者は日本に初めて来た。民族の特徴、些細な生活風習が彼の興味を引いた。が、民俗学的見学の時間は残りがなかった。スタリツキイは直ぐにアスコリド号からバリャク号へ乗り移った、この船は露米電話会社の注文の仕事に従事していた。

バリャク号での各航海はぎりぎりまで一杯であった。信じられないような仕事の条件の下で、スタリツキイは12台から14台の卓上クロノメーターを使い、時間の移動で結びつけることができた、日本海、オホーツク海、ベーリング海の9つの基本港を：ウラジオストク、デ・カストリ、ニコラエフスク、ドエ、函館、長崎、その他。基本的な仕事以外に、水路学者には沢山の中間の点を満たす必要があった。大量の数値と不断の緊張が頭を悩ませた、間違いを恐れることはスタリツキイに計算のやり直しを何度も何度もさせることとなった。この事は、1866年10月半ばでの航海の最後まで続いた。スクリュエ船アレウト号で水路学者が長崎からウラジオストクへ出港した時まで。

行程はほぼ一月かかった。ウラジオストクで、スタリツキイは小さい家に住んだ、凍ったザラトイ・ローク（金角湾 *）の岸傍に立っている。冬期間は彼は全てのデータ、観察の整理をしなければならなかった。深夜に及ぶことは希では無かった。全ての家々を闇が包み、強風は当時唯一のウラジオストクの通りに地吹雪を巻き上げていた。水路学者の家では窓の明かりが光っていた：二人の中尉—スタリツキイと助手として彼に付き従っていたバリャク号の若い将校—は机にもたれかかり、算出し、記述し、再び計算に没入した。

1867年の春の到来と共に、スタリツキイにはアレウト号での仕事が待っていた。アレウト号には東海（主に日本海 *）の哨所と港への補給の仕事があった。アレウト号は往復航路に従事していた、ポシュエツ、ナホトカ、オリガ、プレオブラジェンニエ、他の大事な住居地の。が、調査が進んでおらず未だ開発の進んでいない沿海州地区の。各航海毎に、スタリツキイは哨所と港の地理位置の新しい確定を行った。持っている以前のデータを正確にし、地図と水路図を補完した。

月を繰り返し、年を繰り返して続けられた。アレウト号をアメリカ号が引き継いだ。今度はアメリカ号をボストーク号が引き継いだ。その後、スタリツキイはゴルノスタイ号に乗り移った。1868年にこの船が彼をナホトカへ上陸させた。ナホトカとウラジオストクの更に正確な確定をすることが迫っていた。道すがら、その地方の最も大きな村であるアレクサンドロフスキの地理位置の定めながら。独立の船の不在が水路学者の計画を乱した、彼の仕事を極めて遅らせた。スタリツキイが書いていた、「港から港への直接の素早い移動の代わりに、前もって選んだ地点から他の地点への、最初の出発地点への出戻りを持って、調査の計画が要求していた。が、私は偶然により港から港へ移動せざるを得なか

った。良く屢々仕事に必要であるその方向とは全くの逆方向へ；移乗の素早い遂行と出発点への帰還は規則の代わりに例外となった。観測の港での停泊時刻は、観測自身の不足によって制限されなかった。時折、これらの停泊はごく短かった。時折、異常なほど短かった、移乗自体は屢々非常に長かった。

スタリツキイが書いていた、「個々に得られる私の測定は、少人数故に多くはない、が、この種の他の仕事との関係のために、それらは保存を要求する資料である。コペイカからルーブルが得られるように。その後、大きな総体、個々の測定から、一緒に合体して、時折何か価値のあるものを得ることができる。海底の形状の信頼できる知識を我々に与えることができる」。

再び勤務メモに戻ろう：「1867年4月7日から11月19日まで、アレウト号に乗って、日本海の港に沿って航行する。水路測定の仕事で。1868年4月4日から7月20日まで、アメリカ号に乗って、南の湾に沿って航行。ウスリー地方の整備委員会の委員として。その後、7月の20日から25日まで水路測定の目的を持って、日本海の港に沿って航行。同じ年の7月31日から10月12日まで、ボストーク号に乗って、日本海を航行。サハリン島とモネロン島の目録作成と天文地点の確定のために」。

1868年から1869年の冬は、スタリツキイはニコラエフスク・ナ・アムール（アムール川の河口から約80km上流 *）で過ごした。そこでは同じように、仕事無しではすまなかった。太平洋における彼の水路に関する出張は日本海とサハリンの沿岸の地形測量の時と一致していた。それはシベリアの軍地形測量局の委託によって行われた、ザバイカル・コサック軍の中尉ザハル・マカロビッチ・ベリキと地形学者で海軍准士官であるパブロビッチによる。1868年冬には、彼らによって1500ベルスト以上（1ベルスト=約1km）の海岸の様子が測量された、スタリツキイはニコラエフスクでの越冬を、測量した50枚の測量図のコピーの撮影に利用した。これは後になってメルカトル図に変換された、スタリツキイによって確定された天文点に従って決められた。

1869年春、来たるべき日食の観察のために、オホーツクに派遣する水路局の命令を彼は受け取った。それは7月27日に予定されていた。水路学者はニコラエフスクからそこへ甲板付きのボート「クエグダ号」で向かった。このドラマチックな航行については一冊の本を書き上げることが出来たであろう。オホーツク海では、ボートは厚い氷にはまり込んだ。それからボートは抜け出すことが出来なかった。氷の中での漂流、飢餓、船長コルニロフの横死。このような中で、スタリツキイと乗組員達は生き延びた。奇跡的に彼らはサハリン北部のマリア岬とエリザベータ岬の間に上陸することが出来た。その時、この湾はボートの名称に因んでクエグダ湾と命名された。この海岸で、スタリツキイはオホーツクまでたどり着く全ての期待を失い、天幕の中で計算を行い、日食の観察の準備をした。しかし、彼の非常な落胆となった、計算した時間には濃い霧が観察を遮っただけではなく、直ぐ傍の岸に乗り上げているボートさえ見ることができなくなったので。

勤務日誌に、スタリツキイが記入していた：「1869年7月19日から9月5日まで、1869年10月1日から1871年8月17日まで、日本海と太平洋で、水路測定を行った。函館、横浜、サハリン島の哨所で、天文確定点の目的を持って。香港とウラジオストクの間でロシア・オランダ会社の電話回線敷設の援助を行った」。

サハリンの後、病み、疲れきったスタリツキイはデ・カストリ（ハバロフスク地方ウリ

チ地区沿岸の集落、サハリン中部の対岸 *) にたどり着いた。そこで、コルベット艦フサドニック号に乗り移った。バルチック海から来たばかりの、海軍大尉ミハイロフの指揮下の。この船で、味わった経験後の精神と体を休め、乗組員と親しいスタリツキイは22歳の士官候補生であるミハイル・オナチェビッツと出会った。彼は海軍学校を修了してコルベット艦での勤務を始めていた。彼は極東の探検に非常に興味を持っていた。2人の水路学者—熟練者と新米—のこの出会いは、士官候補生の将来の運命を多くの点で決めた。それについての詳しい話は後で。

デ・カストリからフサドニック号は函館に向けて出校した。日本では国内戦争が続いていた。が、函館は静かであった。それにもかかわらず、ロシア領事はフサドニック号の船長に若干の時を函館で待機するように要請した。

ロシア人船員達は日本の皇帝の誕生日を騒々しく祝った。10月16日、函館奉行はロシア船を訪れた。最初、船に、牛の胴体と酒樽を運んできた。船乗り達はグズグズし、直ぐには贈呈品を船に持ち上げることが出来なかった。役人は、去らなかった、贈呈品を受けてもらえるかどうかを確認したかったので。

30分して、フサドニック号に奉行トクノ、ロシア領事、通訳が乗船した。直ちに、名誉礼が行われた。礼砲の後に、奉行は船長と将校達に向かって感謝の言葉を語った、日本の天皇誕生日への注意を忘れてくれなかったことに。その後乗客達は船長室に降りていった。そこで友好の会食が2時間にわたって行われた。歓待は日本人にはエキゾチックであった：砂糖漬けのフルーツ、中国の果実酒：船長が書いていた、「我々の会談では、サハリンと蝦夷（北海道 著者）の北部への移住についての話は避けられた。全体的に、話し合いは日本政府の最近の行動には言及しなかった。話はだいたい昔の日本での騒乱について触れた。その際、奉行が話した、現在では、全てに秩序をもたらすように全力を傾けている」と。

もちろん、移住に関する日本政府の政治に、ロシア人は注意を向けないわけにはいかなかった。一見して、全ては平穏であった。日本人は、ロシア人同様に、如才無く、冷静に振る舞った。が、全ては人口の少ない土地を熟視していた。イギリス人はロシアと日本の間に不信の楔を打ち込もうとした。イギリス人は北海道の北部へ何度かの航海に着手した、ロシアの軍事哨所を見つけるために。それらは宗谷岬辺りに設置されたいとして。同じく、日本はサハリンの植民化を熱心に進めた。この目的を持って、1869年秋に、そこに数百人の移住者を送った。スタリツキイが書いていた、「函館奉行の我らの領事への通知では、この植民地化の理由は、私の分かっているところでは、移住者の希望を満足させようとする日本政府の意向であるとして説明された；しかしこの説明は批判に耐えない：10月は余りにも寒い、荒地に移住するのが、目的ではない。というのは、漁業のために日本は今までサハリンにやって来ていた。漁労は春に始める。全く不適當である、漁師達は六ヶ月間は寒さと飢えが勝るために」。

サハリンには、約2000人の日本人が長崎の近くの浦上村から移ってきていた。その浦上村の住民達は基本的にキリスト教徒であった。サハリンへの移住と同時に、日本人は積極的に北海道へ移住した。移住者達は石狩湾岸に、稚内の北へ、同じく根室へ上陸した。石狩に、北海道監督局を移すことが決められた。そのようにして、札幌の町が生まれた。

日本人は決して機会を見逃さなかった、軍事技術部門での新しい達成をものにするこ

の。ロシア人は日本人にこれを拒否することはなかった、自分の船の新しい武装を見せることを。「退去するに当たって、奉行は何度もお辞儀をし、贅沢な接待に対して絶えず感謝していた。多くの新しい物を見せてくれたことに、彼が今まで見たことの無いものを。同時に、大砲を彼の役人に見せてくれるように私に要請をした」。

新しい船の武装は日本人に大いなる印象をもたらした。1869年11月21日、クリッパー艦は北海道知事ヒンガセクセ（？ ＊）と函館奉行徳野（？ ＊）を招いた。彼らは鶏18羽を土産に持ってきた。が、目的は新しい武器を見ることであった。客達は注意深くそれらを調べた。ロシア人は借りを残さないで、日本人に彼らの土産に対してヨーロッパの生産品を贈呈した。その際、地方のしきたりに従い、日本人が提供したものより、大分大量に彼らに分け与えた。船長は長い間愚痴をこぼした、日本の鶏は極めて高価に付いていると。

フサドニック号は一人の水兵の計算違い（行方不明 ＊）の原因を突き止められなかった。1869年11月23日、点検時、水兵ニキフォル・ボロノフが戻っていなかった。勝手に岸へ降りて行って。町に直ぐに、将校達を派遣した。彼らは役人達と一緒に、行儀の悪いボロノフが立ち寄りそうないかがわしい場所を調べた。領事の許可を得て、港に設置されている裁判所を見た。一度ならずあった、ロシアの船乗りを酔わせ、アメリカの捕鯨船に連れて行ったことが。脱走も排除されなかった。探索は成功しなかった。船長は断じた、酒を飲み過ぎ酩酊した船乗りが、よく知られているように、酒に馴れていないものに酷く作用する、酔っ払いが溝に落ちた、或いは、多分、郊外に迷い込み、倒れ、眠り、凍えた。とにかく夜は酷い雪であった。雪で覆われた。今では見つけることは出来ない」。

函館の停泊地を利用して、中尉スタリツキイ、士官候補生オナチェビッチ、海軍航海士学校の准士官ユルゲンスとシロコフは注意深く函館湾をスケッチした。この作業の実行について、日本の長に報告した。

冬の期間に、スタリツキイ中尉は陸軍中尉チトフの助けを得て、2枚のメルカトル図を作成した。タタール海峡（日本名は間宮海峡 ＊）の北部と宗谷海峡を伴ったサハリンの南部の。1870年の航海の初めから、フサドニック号では仕事を継続した、自分の以前の確定値を再検討しながら、サハリン、沿海州、日本でなされた。スタリツキイは確定を終了した、日本海の基本的な24カ所の港をクロノメーターで連結した。さて、オナチェビッチの助けがなくて、期間内にスタリツキイはこの膨大な仕事を終わることが出来たであろうか。彼は旧友の仕事を明らかに気に入っていた。

ある時、ロシア人水路学者と一緒に外国人が日本海で仕事をした。羨望を持って、スタリツキイはフランスの素晴らしい装置を見た、水路測定船アスピク号の、300トンで鉄鋼船、北極海の氷に恐れることのない。イギリスのスリベイ号も水路測定という特別な役目を持っていた。これらのスクナー艦はこの時期、北海道沿岸の水路図の作成に従事していた。

日本からの手紙の一つでスタリツキイが書いていた、「この島の海岸、特に北部、は全く描かれていない、ただ遠方から、部分的に、前世紀末と今世紀初めにラペルズとクルゼンシュテルンによって。それで今日まで地図に不正確に記載されていた。南サハリンの海図の測量のために、我々の方から船が派遣されるのを期待している（雑誌「ヤフタ」で文章が強調されている）、そうで無いと、北海道からこの最後の島にイギリス人がやって来

る、そこに存在している我らの哨所故に、我々の民族的自尊心にとって気分が良いものであろうか・・・」しかし、海洋庁は極東の船乗り達の要望を深く考えなかった。探検のための資金を自分で探す出し、困難な状況を脱する権利を彼らに提案しながら、基本として彼らの責任感と義務感情を当てにして。

6年以上、スタリツキイは極東出張を行った。この期間の1年半は岸に滞在し、残りの4年半は海上に。この間、彼は太平洋を全体として約2万マイル航行し、膨大な量の水路測定と天文観測の仕事をこなした。スタリツキイが書いていた、「場違いな謙虚さを捨てて、私は言わなければならない、状況に応じて多くのことをした；しかしこれら多くのことはとにかく僅かなことであった、更にしなければならないことと比較すると」。幾つもの例を証明し、出張旅行では時折不可能である、そのような巨大な領域の研究を抱えることは、水路学者は太平洋に特別の水路測定部隊の組織化に固執した、それは陸地での系統的な研究をさせてくれる。

当時のロシアの優れた地図作製者の一人であるコベルスキイがロシア地理学協会への手紙で指摘していた：題名「日本海の自然地理学の概観」の名誉アカデミー会員シレンクの素晴らしい著作は、岸の性質に関して系統的な教示を与えた。同じく我々に教えてくれた、日本海の満潮と干潮を、流れを、他の特徴を。が、それにもかかわらず、この素晴らしい組み合わせはこの無愛想な地域での放浪を少しは軽減した；まず第一に、地理学的時期的座標の正確な確定点の不足、安全な航行のための良好な地図での。この余白を部分的に満たすことがスタリツキイ氏のノルマとなった<・・・>。正当性の義務（？ *）を話さざるを得ない、彼の仕事はシベリア探検協会の数学局の研究者である天文学者リュドビク・シバルツの同じような仕事とだけ比較できよう。注目しよう、アカデミーは後者の仕事をデミドフ勲章で叙勲した。数学と自然の地理学部局の委員会はスタリツキイを叙勲する妥当な立場にいた、同じ高位の勲章で、協会が思い通りに扱える。すなわち：かつて東方の海で仕事をした人物の名のメダルを。地理科学への貢献に対して、ロシア地理学会はリトケ冠称金メダルをスタリツキイに授与した。

勤務の最終年に、スタリツキイは水雷艦カンバラ号とアクラ号を指揮した。主水路局で働き、商船に乗り、軍務で航行した。1890年5月5日、海軍少将の地位でスタリツキイは退役した。1909年11月11日、彼は亡くなり、オルタフスク県の一族の名前ステパノフカとして葬られた。オホーツク海の浅瀬、モネロン島の山、サハリンの岬、ピョートル大帝湾、クリール諸島の海山、タウイスカヤ入り江の半島に、スタリツキイの名が冠されている。

函館訪問

1871年4月初め、函館に砲艦ソボリ号が、中尉レオニド・コンスタノビッチ・コロガラスの指揮下でやって来た。船には水路学者である中尉レフ・ペトロビッチ・エラギンが乗っていた。シベリア艦隊の船に乗りながら、彼は水路、天文、測地、磁気研究に従事していた、極東での、北海道を含んで（1869年から1875年）。ソボリ号の訪問は

日本では殆ど気が向けられなかった。その代わり、横浜から函館へのフリゲート艦スベトラーナ号の航行は大きな反響を得た、ロマノフ皇帝一家の代表アレクセイ・アレクサンドロビッチ大公の乗った。

大公は子供の時から海軍に勤務し、彼の教育者は著名な船乗りであるコンスタンチン・ニコラエビッチ・ポシェットであった。誕生日に赤ん坊は親衛艦隊の一員となり、7歳の時すでに海軍少尉となった。大公の最初の航海はペテルゴフからヨットのシタンダルト号で1860年に出港したことであった。17歳の時、7番目の遠洋航海を既になし、当直指揮官の職務を遂行した。他の水兵と一緒に、大公は軍務の全ての仕事をこなした、我慢さ、決断力、大きな勇気を発揮しながら。1868年、大公の乗ったフリゲート艦アレクサンドル・ネフスキ号は北極海の航行時、遭難した。大公は非常に立派に振る舞った。沈没する船をまず放棄するというポシェットの提案を、彼は断固と拒否した。全ての乗組員の安全が確認された後に、岸に渡った。

1871年、スベトラーナ号は艦隊の一員として太平洋に派遣された。大公は海軍中尉としてその船に乗っていた。航海中、彼はアメリカに立ち寄り、グラント大統領に迎えられた。シンガポール、日本、中国を訪れた。函館にスベトラーナ号は1872年11月12日に到着した。「日本の他の全ての町と同じように、大公は敬意を持って迎えられた。即ち船と要塞からの祝砲をもって、船への奉行の訪問を持って、荣誉礼を持って。大公の部屋のために、旗で盛大に飾られた家が準備された、ヨーロッパ式の家具、その他も。日本人のキリスト教徒と一緒に礼拝式を行い、教会には50人。我々は午後の1時間函館に留まった、1隻の科尔ベット艦ビチャジ号を同伴して。」

函館にいた時、ポシェットはヘダ号と会った。この船はロシア人と日本人の造船者達が建造した。1856年に、この船は日本に贈呈された。その後、この船は函館で戦闘に参加した。1868年から1869年の新政府と幕府軍の間の戦争過程で。船体に何か所かの損傷を受け、その後、この船は埠頭に係留されていた。

1872年11月26日、スベトラーナ号はウラジオストクへの航路をとった。航海の途中で、アレクセイ・アレクサンドロビッチは海軍中佐に任官された。首都への帰還時、海軍大佐の軍位を持って親衛艦隊の指揮官に任命された。1877年から1878年のロシア・トルコ戦争には積極的に参加した。彼の情熱の御陰で、多くの点でロシア人水兵達は、有名なドナウ川渡河において成功裏に行動した。その後、死活に関わるほど重要な動脈にいる軍団に安定した状況を保証した。「敵軍の傍に置ける、ミコポリャカラシストボへの舟橋の設置における勇気と管理能力に対して」、皇帝は息子を金のサーベルでもって叙勲した、「勇気に対して」と記銘した。その後で、ゲオルギー4等勲章で「水兵に対する疲れを知らない、成功裏の管理能力に対して、我々の渡河に敵による損害を許さない全ての手段の採用に対して」。

もちろん、アレクセイ・アレクサンドロビッチの活動を理想化してはならない、遠い過去のものとして。親類達の証言に依れば、大公は皇帝家族の最も素晴らしい一員の評判を利用した。それについて、他の大公アレクサンドル・ミハイロビッチが書いていた、「頭から足まで上流階級の人、ベアウ・ブルムメル（？ ＊）で美食家。女性達は彼を喜ばせる。アレクセイ・アレクサンドロビッチは沢山旅行をした。パリから離れて年を過ごせる可能性についての考えが、彼に退役を強いた。しかし、彼は国の仕事に就いており、とて

も奇妙なことだが、ロシア帝国艦隊の元帥の職務に就いていた。強国のこの元帥より、海軍事務に関する非常に控えめな認識を思い浮かべるのは難しい。海軍における近代化の開花についての言及だけが、彼の綺麗な顔に病的なしかめ面を引き起こした。何にも決定的な興味を持たないで、女性に関係することなく、食べたり飲んだり、彼は非常に好都合の手段を発明した、海軍省—ソビエトの会議の設置のための。彼は自分の部下を宮殿での会食に招いた。その後、客にコニャックを飲ませ、浮き浮きした主人は伝統的な話で会議を開いた。ある出来事について、ロシアの帆船艦隊の歴史における。私がこの会食に出席する度に、大公の口から聞いた、フリゲート艦アレクサンドル・ネフスキ号の惨事についての話を繰り返す。だいぶ昔に起こった、スカゲン付近のオランダの海岸の岸壁で。この混み入った語りの全ての詳細を、私は詰んじめるようになった、いつも警戒から椅子から机へと少しよけた、シーツが盛り上がった時、アレクセイは机をこぶしでどんと打ち、雷のような声で叫んだ：

—その時、諸君、厳しい指揮官はスカゲンの岸壁を知っていた。

彼のコックは本物の芸術家であった。将軍は何も反対しなかった、アレクサンドル・ネフスキ号の惨事が会議の討論を制限するために。こののんきな存在は陰気で、しかし、悲劇であった：日本との戦争が近づいてきているという全ての兆候にもかかわらず、将軍は休日を過ごした。あるさわやかな朝に目を覚まし、知ることになった、自国の艦隊が恥ずべき敗戦を味わったという、帝の最新の大型戦艦との戦闘において。その後、大公は退役し、直に亡くなった」。

大公のウラジオストク訪問について、郷土史家マトベーフが書いていた：「ここへ、スベトラナ号が到着した。それにより、それまでアメリカ通りの名称であった町の通りが、スベトラナ通りとなった。大公はシベリア経由で陸路を進んでいった。スベトラナ号とともに、コルベット艦ビチャジ号とバガチリ号は将軍ポシェットの指揮下に入った。ここへの訪問のさい、大公が近郊で狩猟をした事が知られている。自分の所に商人を招いて、自立することを呼びかけた。ついでながら、彼はここで、若干の収集を行った、彼は地域の住民に、ここに博物館の設置を提案した」。

数年して、ウラジオストクに博物館建設するという大公のアイデアは実現した。これにより、1887年11月12日、大公をアムール地方研究協会の名誉会員に選出した。

最初の領事館に関係した者達は怎么样了のか

函館のロシア領事館の最初の職員は珍しく成功した。この職員達の運命は様々であった。日本から退去後、ゴシケビッチはペテルブルグでの仕事に重荷を感じ、日出ずる国で始めた仕事の完遂に全力を注ぎたかった。1867年11月に、彼は退職した。首都を去った。ニコライ神父がこれについて書いていた：「貴方の功績に対して貴方に感謝する、数え切れない努力と欠乏に対して！・・・ 真にロシア人の心の愛国心、誠実と良心、一新鮮さが無い、ただ学校のノートから引き出された、精神のための空気と食物を形成する、遂には、指示の遂行能力—大きくなく、小さくなく、皇帝の指示の精神と思いに合わせて行動

するロシア人。全ての特性、一緒に結びついた、長年の実践で確りした、は木っ端みじんに砕けた。お役所の人物の胸のところで、お世辞の所でさえ！ いや、そうではない！ 私は直に自分を細かく引きちぎる事を許す。そのエネルギーは私を仕事で励ましている。が、君が成したことの千分の一さえ成し遂げてはいない。あそこでは貴方を評価していない、その代わりここでは評価している：外国人達は考えを捨てない、貴方が「公使」として日本へやって来ていることという；日本人達は話している：「そんなことは無い、ここには領事は居なかった、ロシア領事のような。」 文字通り、日本全体で貴方を知って、貴方を敬っている。事実に基づいて話す；私はここで人々を見た、遠方から個々にやって来た、貴方を見るために、有名人として・・・許してください、私が貴方に明けっ広げにこの全てを書くことを。しかし、私は貴方に言うておきたい、役人の難癖に悩まないようにと、政府、ロシアの構成要素では無い。政府とロシアの使命を遂行する貴方は完全な権利を持っている、意識を慰める、見事に貴方の使命を遂行した」。

ゴシケビッチはビレンイク県の領地マリに移住した。日本の特集の雑誌の出版の計画を育んだ。彼はヤマトフ（？ ＊）の本を出版したかった。家族の生活は上手く行った：ゴシケビッチは2回結婚した。元外交官は働き続けた、自分の日露辞典の新版の準備の仕事で。多くの時間が過ぎ去った、「日本語の起源について」の原稿に。残念ながら、彼はこの仕事を印刷した形で見ると運命には無かった：1875年10月5日、ヨシフ・アントノビッチ・ゴシケビッチは亡くなった。彼の作品は1899年に公刊された、ビリノで。この仕事で、他の全ての研究と同じように、ゴシケビッチは日本人について熱心に批評をしていた：「日本民族は、ごく最近に文明のあるヨーロッパ世界に一員として押し込まれた、長い間、権利を持っていた、親戚関係において、この場所の、それ故ではないのか、日本民族は素晴らしい全エネルギーを発揮しているのは、文明化への・・・」。

ナジモフは更に皆より長生きした。彼は古参将校としてアレクサンドル・ネフスキイ号に乗って航海した。その後、造船省に勤めた。クリッパー艦アブレク号を指揮した。1870年1月1日、彼は海軍中佐に任官した。コルベット艦ビトヤジ号の船長に任命された。それに乗って1870年から1874年に、世界一周航海をした。ロシア地理学協会の手配により、新ギニア島の北西海岸に、民俗学者であるニコライ・ニコラエビッチ・ミクルホームクライを上陸させた。新ギニアから長崎に航路をとり、ビトヤジ号は横浜、大阪、函館、中国の港、ロシアの沿海州の港を訪れた。航行時、船の船員は不断に水路と海洋の調査を行った。その御陰で、地図上に、ナジモフの名前の湾、岬が現れた。1873年12月ビトヤジ号は長崎を出港し、クロンシュタットに帰還した。

7年を経て、海軍大佐ナジモフは再び日本に立ち寄った、が、巡洋艦ミニン号で。この船はレソフスキイ海軍中将一駿河湾で海難に遭ったデアナ号の元艦長一の太平洋艦隊に所属していた。横浜で、艦隊の船を、歓迎する日本皇帝の息子達が訪問した。艦隊演習とロシアの新方法－水雷攻撃－を視察した。その後、ロシア艦隊の船長達と参謀将校達を皇帝自身が謁見した。ナジモフは天皇の手から日本の4等勲章をもらった（1881年）。

しかし、帝との彼の出会いは最後では無かった1889年から1891年、太平洋艦隊司令官として、海軍中将ナジモフは海上で巡洋艦ピャーマチ・アゾバ号を迎えた、その船でニコライ皇太子が航海をしていた。1890年9月30日、彼はウラジオストクでのアムール地方研究協会の博物館開設に出席した。

1892年、ナジモフ海軍中將はサンクトペテルブルグの主水路局長の職務に移動した。6年後、彼は病気により退職した、大将の肩書きで。4年後、1902年12月11日、ナジモフは亡くなった。ペテルブルグのボルコフスク正教墓地に埋葬した。この航海者の名前は浅瀬（1972年まで－チュハルド）、岬（1891年）、ピョートル大帝湾の半島に冠されている。

医者で有能な探検者であったミハイル・ペトロビッチ・アリブレフトは1867年頃サンクトペテルブルグで亡くなった。彼は約46歳であった。マホフのその後の運命については殆ど知られていない。ニコライの日記に若干の書き込みがある。ニコライはペテルブルグで元書記官と会っていた：「・・・マホフ・イワン・ワシリエビッチの所に行った。彼はおかしなタイプであった、日本の勢いを失った愛好家で通人として。彼の名前の利用は少なくはない（地図、貨幣）。」

司祭フィラレットは短期間函館に滞在した。彼は函館での勤務を好きでは無かった。彼はゴシケビッチに願い出た、開放してくれることを。直に、コルベツト艦グリデニ号に割り当てられた。1861年10月31日、フィラレット神父はウラジオストクにやって来て、最初の教会の建築に従事した。彼は更に幾つかの教会を作った。特に、聖オリガ湾に、慈善事業に自分の全財産を寄付しながら。知られている、1861年に、司祭はウスペンスキー教会に牛二頭、30ルーブルと10ドルを寄付したことが。1862年には、自分の財布から屋根板に10ルーブル、同じ額を教会の丸太のために支払った。それ以外に、教区にイコン画、祭服、教会の必需品と本をプレゼントした。

ニコライ神父は日本の正教会の建設者であり、日本における最初の正教の聖人である。

かけがいのない損失

オナテェビッチがスタリツキイの指導下で調査に従事していたクリッパー艦フサドニク号で過ごした2年間は、若い将校には跡形もなく過ぎることはなかった。極東の海の研究に関する深く注意を振り向けた仕事に対して、聖スタニスラフ3等勲章の授与で迎えられた。スタリツキイの推挙によって、ペテルブルグに戻った後に、初心者の水路学者に授与された。スタリツキイによって水路局長に送られた報告書はオナテェビッチについて少なくない褒め言葉があった：「海軍少尉オナテェビッチは太平洋における天文観測及び水路観測の仕事で、私を大いに助けてくれた。最近には収集した資料の計算と整理で私と共同している。海軍アカデミーに入学する準備もしている。これ故、オナテェビッチを水路局へ派遣したい希望が非常に強い。海岸の勤務から彼を解放することは彼に前述した仕事に関して大いなる便利さをもたらすであろうことから」。

1874年末に、全世界の天文学者達は非常に興味ある現象の観測の準備をした：金星の太陽面通過である。特別探検隊の隊員の中に、金星の観測のために極東に派遣された、若い将校で水路学者のミハイル・オナテェビッチがいた。

1875年の新年の初めまでに、ミハイル・リュチアノビッチは計算を済ませた、希な天体現象に関する。その後、海軍中尉エラギンから全ての水路観測機器を受け取り、沿海

州に留まり、水路観測の仕事に従事する。海軍中佐アフォナシエフーその時、東海の港の主指揮官の参謀長の職務に就いていたーは彼をボストーク号に派遣した。この船はオホーツク海で、彼らの漁業に対する我々の要求を外国船に示す目的を持ってすることを委せられていた。オナテェビッチが書いていた、「・・・この要求は我々の捕鯨船の漁労を補償しなければならなかった、一般の湾やオホーツク海での衝突から。我々の海岸から3マイル以内での鯨の捕獲に従事しないという約束を持って」。北への航路途中で、オナテェビッチは再び函館に立ち寄った。

海上警戒任務から、1875年10月に戻り、オナテェビッチはクリッパー艦ガイダマック号に乗り移った。この時、この船はオホーツク海での海上勤務を終了していた。彼はそれに乗って日本での越冬に派遣された。ガイダマック号は10月末に函館に到着した。少し経ってから、この港に、嵐を避けて、入ってきた、帆をびったりと畳んで、海軍中尉ノボシリスク指揮下のクリッパー艦フサドニック号が。これより前に、クリッパー艦の乗組員はサハリン島の一部ーこれまでに日本とロシアの共同管理下にあったーのロシアへの引き渡しに参加した。1875年8月末に、コルサコフ哨所で式典が行われた。ロシア艦以外に、日本のコルベット艦アサマカン号がここに停留していた。陸軍大佐バラバシがここの軍を整列させた。音楽の元、岸と船からの一斉祝砲を伴い、日本側の旗の降下とロシア側の旗の掲揚が行われた。その後、式典参加者全員が島での最初の学校の開校に向かった。

日本で越冬してから、オナテェビッチはフサドニック号で水路測定の仕事が続けた。食料の在庫の補充のために、ウラジオストクに短時間立ちより、1876年5月4日、船は北への進路をとった、困難な極航海を暖かい季節に行うために。フサドニック号は1876年10月6日によろやく帰還した。その後、ほぼ2年間、オナテェビッチは資料の整理に従事した、全ての船乗りに必要な、極東の海を航海する。1878年、海洋学者委員会はまとめた報告を、「1874年から1877年に、東海における水路観測派遣においてなされた観測選集」の名称で出版した。この本は専門家の高い評価を得た、海洋アカデミーの会議はそれを学位論文として採用した。会議の決定にしたがって、オナテェビッチの名前は大理石の基台に、刻まれた、最も優れた海洋研究者の名称を持って。彼に海外出張の資金を割り当てた。

水路学者は極東の海洋で複合探検を行う計画を建てた。出発は1879年12月18日を指定した、しかし、「・・・12月25日、彼は実際に出発した、しかし、東シベリアだけではなく、あの国へ。そこは病気がなく、悲しみもなく、不平もない。が、生は永遠ではない。脳の合併症を伴った酷いチフスが3日で重症化し、人を死に至らしめていた。我々は21日までは、未だ軽い風邪とそれを見なしていた。22日にはびっくり仰天した。我々の忘れられぬ友や同志が体温40.9度で人事不省の状態に伏している事を知って。親友、家族の父、模範的な将校、水兵、労働者を助けるために、全ての可能な手段がとられた；家族、親族、親友に呼ばれた医者以外に、海軍省の長が著名な専門家を派遣した。しかし、これらの人々の努力は無駄であった・・・」、

オナテェビッチの葬式の日、手紙が書かれた。それは1880年1月1日付けの「クロンシュタット通報」の第一号で公刊された。「サンクトペテルブルグ、1879年12月28日、今日、我々は才能ある若い水路学者、我々の海軍中尉ミハイル・リュチアノビ

ッチ・オナテェビッチを葬った。その多才で素晴らしい活動を我々は自慢することに長い間慣れ親しんできた。その更なる広い発展を我々は予見することが出来た。海軍省の長、水路局の長、海軍学校の長、海軍アカデミーの会議の会員と教授の多数が教会葬に在席した、少し若い人、友人と親類がスモレンスク墓地へ亡骸を運び、墓に埋葬した。が、どんな敬意も、取り返しのつかない損失を慰めることは出来ない。

この追悼文に、一つの文字「C.」が控え目に書かれていた、コンスタンチン・セメノビッチ・スタリツキイの手になると推量することは難しくはない、オナテェビッチの好きな先生で旧友である。最後の年を歓喜を伴って優秀な生徒の成功を見守った。オナテェビッチの名前は、オホーツク海のタウイスク入り江の岬と半島に冠称されている。

アレウト号とセタナ

(瀬棚 北海道の西海岸 *)

スクーター艦アレウト号について、シベリア艦隊内で伝説が語られた：百戦錬磨の船乗りさえ、希にかような役立たずのスクーター艦に出会ってしまう。この船が正にそれだ。語られている、アレウト号の帆の性能はあまり良くはなかった。何も話さないことを意味していた、ざっくばらんに言えば、それらは役立たずであった。一度ならずこの船は遭難の危機に遭った、風が船を岩礁に運んでいくという。40馬力のエンジンでは力不足であった、極東の嵐に逆らうためには。

完全な風の時さえ、蒸気の働きの元で、アレウト号は約5ノットを出せた。が、向かい風ではエンジンの全力でも全く役に立たなかった。かつてあった、金角湾に接近時、エンジンは前方へ向かって調子よく働いている、が、微風が船を立ち止せる。自製の聞かなくなった船長は、伝声管に罵声で叫ぶ。機関室では圧力計の針が振り切れる。船は動かず、止まったまま。乗組員にじっくりと見ることができるようになっている、並んでいる港の汽船が舳を伴ってゆっくりと港に近づくのを。

あるとき、ウラジオストクの港の工場で、アレウト号の航行性能の改善を試みた、縦帆を追加することで。しかしそれは何の得にもならなかった。縦帆を取り払った、船を放棄した。工場では笑っていた、「何でもない、古い仲間だ、片付けよう！」

とにかく、様々な仕事で、アレウト号は沿海州沿岸を岬から岬へと航行した、時折危険にもあい、風で大海へ出られなくなるような。もしかしたら、ウラジオストクの代わりに日本にいるような。そのようなことは時々あった。

1877年8月末、アレウト号はクラシェニンニクの指揮下でウラジオストクからニコラエフスク・ナ・アムールへ船出した。そこで、手早くブイを取り外し、逆航路に向かった。指揮官以外に乗組員として、当直長が入っていた：海軍大尉ハルツラリ、海軍少尉キタエフ、二等大尉アスタシェフ、一等航海士少尉補パポフ、一等機関士少尉補クリニチン、水路学者陸軍中尉クドリン、と53名の水兵、と2人の一般乗客を乗せていた。

10月は嵐の月。ウラジオストクへの経路で、アレウト号は帝国湾（現在のソビエト・ガバニ 樺太南部の対岸辺り *)に立ち寄った、悪天候を避けるために。シナプカ（？

＊)、地域の商人で、非公式の知事、が船乗り達を熱いサウナでもてなしていた。それは当時日本海沿岸で知れ渡っていた。

2日後、1877年10月18日、風が止み、去った嵐の残りである強いさざ波だけ、アレウト号は任務に向けて出港した。ニズネンニ岬の所で、岸から若干離れることにした、それはカーブしており、それなしでは非常にうんざりする航路を若干短縮してくれていた。夜に、強まった風と大きくはない波が船に一カ所に浮遊することを強いた。朝になって、船は岸から16マイルも離れていた。船乗り達は出来なかった、十分に正気に戻ることが、船を更に海の先に流していった。

嵐の日本海で、船は3日の間漂流した。遠方に見えたデ・ラングリの山頂は、明らかに船乗り達に語っていた、日本の松前島（北海道）の西岸に船を流したことを。しかし、天候は元の海岸への航路をとることをさせてはくれなかった。木っ端のように、アレウト号を荒れ狂う海の中に放り出した。吊り柱に吊されているボートは水で溢れていた。ボートは片側に傾斜していたので、それを船体から下ろすことになった。更なる航海は考えられない災難に加えて、アレウト号の石炭が底をついてきた。指揮官は函館に寄ることを決めた。

11月4日、船乗り達は苦勞してオコエイリ島（？奥尻 ＊）までたどり着いた、函館から60マイル離れている。海峡に入る時、船の速度は1ノットまで落ちた。とにかく待避して待つ必要があった。セタナ村の辺りに適当な場所を選び、風が北から吹くのを利用して、船長は碇を下ろすことを決めた。

11月7日、嵐の風は台風並みになった。風は方向を変え、強い力で岸の方へ吹いた。碇のロープは損なわれ、鳴り始めた。朝11時半、1本のロープが風の高まりに耐えきれなかった、はげた。30分して、アレウト号の下の深度は7サージェン（1サージェン＝約2.1km ＊）まで浅くなった：残している碇は船を支えきれなくなった、岸から安全な距離に。

直に、船の回りに多数の砕け波が現れた。難破まで時間がないことが、乗組員皆に明らかとなった。指揮官は全将校に命令した、会議のための将校集会室を放棄するようにと。甲板上で音を立てている水の中に立ち、騒動の中で、嵐で造られた、アレウト号の将校達は唯一の確実な判断と見なした、砂の浅瀬に飛び降りることを。沈黙し、馴れた冗談もなく、指揮官は棚からシャンパン瓶を取り出した。カップの袖で、ずぶ濡れの顔をぬぐい、ワイングラスに注ぎ別けた。

その内に、水深が5サージェンまで浅くなった、碇のロープがリベットを抜き始めた、帆が張った。船の舳先を陸に向けるように努力した。巨大な波が乗組員を持ち上げ去り、彼を陸地に一気に引きずっていった。寒さに震えて、乗組員達は右の中部甲板に、ブリッジの下に群れ集まった。何人かは声を出して神に救いを祈った。指揮官はタラップから現状を見ていた、ブリッジにかかっている。

船は岸から15サージェンの所に止まった。船は殆ど水平に止まった。キールが砂に潜り込むようになって、岸に角度をつけて。時折、船が身震いをした、波の打撃でもがくかのように。船の船首は高く盛り上がり、右側の防波板は無くなっていた。多くの丸窓とハッチは壊れていた。船全体を水が流れていた。水の無い唯一の場所は指揮所であった。そこに乗組員全員殆どが集まっていた。暖かくて、海から守ってくれている部屋は乗組員に

楽観さと救助の希望をもたらした。しかし、船に残ることは不可能であった、素早く、乗組員達を岸に移送する方法を見つける必要があった。

准尉が岸まで泳いでいくことを申し出た、通訳をそこへ移動させるために。勇者はロープを結びつけて、船を下りた。が、大きな寄せ波が彼に足で立つことをさせなかった。へとへととなった准尉を逆に船に引き上げた。

岸には住民達が集まってきていた。日本人とアイヌ人。彼らは焚き火をたき、船の遭難者達を助ける準備をしていた。船乗りの内の一人が准尉の試みを繰り返すことに決めた、通訳を送ることの。水に入ったが、失敗した。船乗り達の全ての試みは上手く行かなかった：測鉛水夫の一人が測鉛を投げて、岸の近くの浅瀬に命中させることが出来た。水に飛び込んだ日本人がそれを掴み、引っ張ることが出来た。この御陰で、岸に2つの確りしたロープが渡された。胴にロープを巻き、船乗りは水に飛び込んだ。住民達は彼を岸に引っ張った。

准尉クリニチン、皮の外套を着て船から飛び降り、直ぐに底に立ちより、しこたま海水を飲む羽目になった、彼を引き上げる間に。他の者達全員は岸に移った、ハプニング無しで。船長が最後にアレウト号を去った、予め旗を降ろして。

この時には、岸では焚き火が既に燃え上がっていた。船乗り達は着物を乾かし、暖をとっていた。日本人達は船乗り達に乾いた服を提供した。簡単で、上手そうな温かい食事を食べさせた。既に暗くなったので、日本人達はロシアの船乗り達をセナタ村へ連れて行った、船の遭難現場から6ベルスト（1ベルスト＝500サージェン＝約1km *）離れている。ここで、船乗り達に大きな家を割り当てた。その内部は、日本式の土間であり、火が焚いていた。船乗り達を熱い緑茶と温かい酒が待ち受けていた、やはり、一般的な意見では、極めてふさわしい。囲炉裏には、米の入った大きな銅製の釜が掛けてあった。それを手で食べた、しかし忘れないで、他のご馳走を：棒にさして軽く焼いた塩漬けの魚、発酵したキャベツ。誰も睡眠のことを考えなかった、朝まで体験したことについての話を続けた。

朝に、船乗り達は海岸のアレウト号の所に戻った。船は前の場所に止まっていた。波は少し凩いでいた、何人かの船乗り達が船に移ることが出来た、着物や食料を岸に運びに。その日、海軍少尉キタエフは函館に向かった、アレウト号の遭難をウラジオストクの司令部に知らせるために。彼はそこへ6日間かかった。

救援を待ちながら、船乗り達は遭難場所から余り離れていない場所に、木製のバラック小屋を打って造り、船の帆を張った。内部に板寝床を設けた。調理場を備えた。並んで、風呂のための半地下小屋を掘った。昼には、船乗り達は船からの荷下ろしに従事した。氷のように冷たいにもかかわらず、彼らは泳いだ、そのようなことは船乗り達には屡々あることであった。隙間風の吹き抜けるバラックの生活で、乗組員は軽い風邪をひく者は一人もいなかった。明らかに、緊急事態において、人体は対応し、どんな酷い条件下にも立ち向かうことが出来る。

アレウト号の乗組員が運命の意志によって到達した小村は、海岸沿いにある他の多数の村と同じであった。日本当局においては、この場所は外国人の訪問を禁止していた所であった。ここでは人々は貧しく生活していた。基本的に、魚の捕獲と昆布の採集に従事していた。山が多く砂地のために、菜園に植えることが出来なく、家畜は飼えず、鶏さえ各家

にはいなかった。セタナ村の住民達はロシア人の船乗りと仲良くつきあった。これはまず第一に食料の援助に現れた。一匹の鶏では少なすぎるとロシア人が話すと、2羽を提供してくれた。村に鶏肉の在庫が無くなると、そのために隣村まで行ってくれた。もちろん、セタナ村の村民には、60人余りの「口」の出現は極めて大変であった。それ以上ではなおさら！ しかし、誰も不満を言わなかった。逆に、船乗り達の出会で、日本人達は額の所で組み合わせた手のひらを上げ、丁寧なお辞儀をした。顔一杯の黒い髭と肩に掛かった髪で、彼らはロシアの村の男性に似ていた。

毎日、船乗り達は岸に出かけた。海を眺めた、救出を期待して。しかし、水平線はなだらか。不安な感情が彼らを支配始めていた。11月27日朝、岸から遠くないところにクリッパー艦アブレク号が碇を下ろした、少し遅れて、同型艦のフサドニック号も。天候はまれに見る穏やかさであった。船から、一度に4隻のランチが離れた、アレウト号の船員達のために、アブレク号とフサドニック号の指揮官の乗った2隻の救命ボート。彼らは勇気を持って岸に向かった、危険について思うこと無く。実は、厳しい底波が殆ど一体になっていた、岸への寄せ波と。ランチの1隻と救命ボートが海岸に打ち上げられた。アレウト号の乗組員達がついていない救助者達を海から引き上げるようになった。幸運にも、犠牲者がいなかった。ただ指揮官一人が水を飲み過ぎて、気分が良くなかった。

間に合って、1隻の船が危険に気がつき、岸の安全な場所に近づいてきた。その援助を元に、2隻の大きな日本漁船が乗組員をクリッパー艦に移送し始めた。夕方には、岸から離れることが出来た、他のランチと救命ボートは1隻を除いて、アブレク号からの、それを強風が岸の所に引き留めていた。アレウト号の乗組員を船に取り込んだフサドニック号は客あしらいの悪い岸を離れ、安全な場所に止まった。12月3日、船に旗を揚げた：ランチへ至急に戻れとの信号。簡単に言えば、戻れ、しかしどのようにするべきか、寄せ波が岸から離れさせてくれなければ。普通の経験では、ランチを岸への波によって大きな力で投げ捨てた。それでキールだけが残った。

寄せ波で誰も犠牲にならなかったことを確信して、アブレク号から、船の指揮官から搭載ボートを指揮している将校へのメモの入った小さい樽を投げ下ろした：「もし、明日の朝、クリッパー艦がいなければ、私はウラジオストクへ去った、君は船員達と函館に；あそこに、食料、金、品物が置いてある、ポルテル氏の所に・・・アレウト号の乗組員のための食料は岸から送り届けられる；詳細は命令書から知ってくれ。土曜日、1877年12月3日」。乗組員を救出する可能性は全くないことを理解し、クリッパー艦は信号「幸運な道中を」を出した、狼煙を上げて。そして出港していった。

今や船乗り達には一つの道が残された、海岸に沿って函館へ。彼らは地区の役場に援助を求めた。が、通訳を与えることを拒否された、函館奉行の許可が無いということで。何も出来ないで、待機するしか無かった。吹雪と冷たい風は止むことがなかった。道路には大きな雪だまりがあった。冬の日は退屈に過ぎていった。話の種は尽きてしまった、退屈の余り、初めての口論が起きた。自分の存在を仕事で引き立てた唯一の人間となったのは、船の準医師であった：彼にセタナ村の住民を訪れ、彼らの治療をすることを許可した。ウンザリするほど待って、2週間後に函館奉行からの返事が届いた。12月16日にそれを手にした。1週間かかって、12人の水兵と3人の将校達が函館に達した。アレウト号の船長で海軍大尉クラシェンニコフが奉行トキコ・タメモトに手紙を出した。彼が書いてい

た、「我々に起こった不幸事で、この地区の住民が示してくれたことは、我々に大きな慰めとなった、できること全てを我々のためにしてくれた。大いなる感謝と尊敬を言い表す言葉も無い、住民と閣下に対してどのような感じを、私から初めて、末端の水兵まで・・・」。

船乗り達はロシア人病院に入り、適当な船を待機することになった、セタナ村から残っているアレウト号の船員達を連れ出すために。1878年4月になって、スクーター艦エルマク号が34歳の海軍大尉デリブロン指揮下でやって来た。更なる出来事についてはアレウト号の将校の内の一人の日記の頁が語っている。

「我々は完全な風の元、朝にセタナ村に着いた。白波は全く見えなかった。救援用物資のために遣わしたランチは岸に全くの不安無しで到着した。夕方に、しかし、さざ波が立っていた、白波が再び立ち始めた。資材の一部を積んでエルマク号に戻るランチに、指令を出した、仕事を止め、人々を集めるようにと、岸に物資の積み込みで残っている。この目的を持って派遣された将校は岸の下に極めて大きなうねりを見つけた、これによって、委託の実行は極めて困難となった。とにかく心配となったので、ランチを破壊させないで、ボートへの彼らの乗り込みの時彼らを溺れさせないために。それには水をかき分けていかなければならないので・・・。現地の状況を知らないで、予想しながら、将校はもたもたしていることを、自分の委託に関してぞんざいに関係していることから、艦の船長は信号で戦隊にランチを要求した、それに下士官を乗せた。そして最後に命令した、岸から人を収容することを。日没の時間がやって来た、ランチが岸を離れた時には。直ぐに黄昏となった、その後、全くの闇となった。が、ランチは未だ戻ってきていなかった。艦はさざ波で揺れていることが目立ってきた、船長と将校達は暗闇をジッと見入った、水を叩くオール音を聞き取ろうと努力した。既に9時になっていた。突然、岸から弱い悲鳴が届いた。全員が固まり、耳を傾けた。再び微かな悲鳴が聞こえ、聞き間違いでは無かった。それどころか、岸に灯火が揺らめいた、少しして焚き火が燃え上がった。疑いがなかった、ランチに何か事故が起こったことが。指揮官は朝まで待機することに決めた、何が起こったのかを知るために。砕け波の中で他の搭載ボートを派遣するのは明らかに無鉄砲なので。

しかし、深夜過ぎ風が吹き始め、段々強くなっていった。スクーター艦を沖に押し流した。そこで、スクーター艦は2日間待機した、天候が治まらない間。大きな危険を感じながら我々は再び惨事の場所に接近した。岸に派遣したベリボート（快速ボート）はセタナ村辺りに停船していた。そこは先にクリッパー艦アブレク号の船長が上陸したところであった、他の場所は砕け波が洗っていたので。直にそれは悲しい知らせをもたらした：ランチが帰路で砕け波の中で水浸しになり、乗っていた28人のうち13人が亡くなったと；7人の遺体は既に見つけられ、廃屋に置いてある、そこはアレウト号の船員達が越冬した家屋であった」。

スクーター艦エルマク号の船長デリブロンは自分の慌てた行動に対して大金を支払うこととなった。日本の沿岸に永久に眠ることとなった、補給係イワン・カイゴロドフ、信号係ヤコフ・シェプツノフ、一等水兵ドミトリイ・グリエフ、イグナチイ・ポドバルコフ、ワシリイ・シニチン、クジマ・フェフェロフ、アレウト号の。そしてエルマク号の水兵：操舵手セメン・ボゴモロフ、一等水兵ニコン・ウソフとフロル・アフエクセーフ。8遺体だけを見つけることが出来た、それらを岸辺に埋葬した。

アレウト号の乗組員全員がセナタ村から移送されなかった、彼らの船は既に海軍の名簿から除外された。これに関する命令は1878年3月4日付けの新聞「ヤフタ」（日本語でヨット *）に掲載された。その後、アレウト号は1050ドルでアメリカ人に売却された。彼は船を浅瀬から引き出し、函館に運んだ。その後、スクナー艦は他の名前で航行した。函館から余り離れていない松前の東海岸で遭難することがないまで。生き残った乗組員達を函館からウラジオストクへ移送した。

ロシア人存在の最初の結果、国境

ロシアと日本の間の外交関係の初年には、函館は主要な役割を果たした。得に国境の画定において。元函館奉行竹内保徳と小出秀美が外交使節団を率いた、1862年と1867年に。即ち、彼らはクリル（千島 *）列島とサハリンの交換に対する基礎を作り上げた。

オランダで教育を受けた日本海軍の設立者、政治家、ロシアにおける日本の最初の大使であった榎本武揚は伝説の人物であった。1868年、彼は国内戦争に参加した、北海道南部で展開した。その後彼は逮捕された。が、黒田清隆（環遊日記の著者）の努力の御陰で彼は恩赦を得た。1874年、榎本はロシアへ特別全権大使の資格で出張した。1年後、クリルとサハリンに関する露日協定に調印することが出来た。シベリアを経由して日本に帰還し、彼はロシアの天然資源、天候、風習を研究し、旅行日記「シベリアニッキ」を書いた、ペテルブルグでの1878年7月26日から始めて、同じ年の10月28日、ハンカ湖で終了した。これらの資料は、ロシアについて近代化した日本の住民の最初の印象についての知識を与えている。（榎本武揚。シベリア旅行日記。1878年）

榎本大使は、ウラジオストクを訪れた最初の日本人の内の一人であった。

1866年9月30日、函館のロシア領事は江戸から通知を受け取った、本田大和之守がロシアへ大使として向かったことを、サハリンの国境についての問題に関して。ニコライ神父がゴシケビッチに書き送った：「サハリンの分界の設定はどうなっているのか？日本人達は何か心配をしている。函館奉行は近々、クスナイへ行く、そこから、いうならば、ニコラエフスクへ忍びで行きたがっている。君無しでは彼らは仕事をダメにする！彼らをどのように指導しなければならないか？」。サハリンでの状況は緊張していた。クスナイでは日本人とロシア人の間で喧嘩が起こった。日本人の情報源からすると、その時、6人のロシア人と同じ数の日本人がけがをしたらしい。そのような状況は日本の政府にとっても、ロシアの政府にとっても不安であった。

1875年8月半ば、函館にクリッパー艦フサドニク号がやって来た。それに乗ってサハリン委員会が着た。ここで委員会は2つに別れた：1つはフサドニク号でサハリンに向かった、もう一つは日本の船に乗って、クリル諸島へ。日本とロシアの合意の元で、両方とも逃亡した犯人を引き渡す責任を引き受けた。サハリンの流刑囚、殆ど毎年逃亡を図っている、を確りと北海道で捕縛し、ロシアに送り出した。この例として、1885年7月18日、クリッパー艦ジギト号が受け入れた、宗谷岬で日本人に捕まった9人の流刑囚を。

サハリンからの18人の逃亡流刑囚を、日本の警察が北海道の紋別の村で捕まえた。彼らは搭載ボートで日本に逃げ出した、日本人の漁師の所から奪った。彼らを函館のロシア領事館に引き渡した。1894年10月7日サハリンへ彼らを逆送した、日本船舞子丸で。

1917年まで、日本への逃亡者の中には基本的に刑事犯達がいた。ソビエト権力の確立と共に、日本列島に安住の地を見つける企業家の試みが、ソビエトの元では生きたくないという平民が。一人は皆のためという法律があった：日本はソ連邦へ逃亡者を追放した。彼らは例外なく一つの刑罰が待っていた、銃殺。

一見して、東京でのロシア外交公使館の開館以来、函館の役割は小さくなっていった。同時に、この町はロシアの極東と日本の間の関係に大きな役割を持ち続けた。カムチャッカへ行く船、ロシアへ帰還する船が函館に停泊し続けた。従来通り、ロシアの軍船が越冬でしばしばここへやって来た。町では、正教の教区が活動していた、大きな役割を果たしながら、ロシアの文化とロシア語の普及において。

北海道のクレイセロック号（1889年末に遭難 ＊）

1888年の夏中、秋遅くまでスクナー艦クレイセロック号は、海軍大尉ソボレフの指揮下で、監視の仕事に就いた、希な好天時には水路観測の仕事に従事しながら。その過程で、チュレニイ島とサハリンの東海岸の幾つかの岬の位置を正確に確定した。秋が近づくと、チュレニイ島（サハリンの東南端付近の島 ＊）やサハリンの東海岸の付近に、外国の漁船が出没するようになった。これらの船は基地として函館を好んだ。これらの船は仕事の間この地域を遊弋した、しかし、明かであった、密漁であることが。冬にロシア人がチュレニイから少し離れることを待っていた。

10月初めに、クレイセロック号がチュレニイ島の小さい湾の一つに立ち寄った、テルペニイ岬の向こうの。暗くなった、乗組員は停止の合図を待っていた。その時、スクナー艦に並んで、航行の灯火無しで見知らぬ船が静かに碇を下ろした。その船に、海軍大尉ドルジニンを経として拿捕の命令を持って小型ボートで向かった。その夜に、航海日誌に次のような書き込みがあった：「海軍大尉ドルジニンは戻ってきた、イギリスのローザ号と分かった船の検査から。書類は上首尾、オホーツク海での漁業の許可を得ている、日本政府から今年の期間における。確りした当直日誌がなかった。緯度に沿って記入された下書きの航路からすると、この夏一杯クリル諸島にいた。目録に寄れば船員は25人、18名が実在。船には朝に退去するように勧めた。船長に警告した、この沿岸で会合した際には没収されることを」。

数日後、クレイセロック号は、旗のない2本マストの船と競争した、編んだ帆を装備した、トップセリ（帆の一種 ＊）、と追加の三角帆も装備した。その船を遠方より見つけ、警備船は連続して3回砲撃をした、信号の国際手順に従って、旗を掲げることを要求することを意味していた。返答として、船は逃走し始めた。しかし、クレイセロック号の方が早かった。クレイセロック号は不明船に追いついた。外国船の鼻先に砲撃をした時、船は全く止まらなかった、一カ所に浮遊する以外は。この警告の後、船長はアメリカの旗を掲

揚した、そして説明した、水を汲みにチュレニイ島に接近したと。指揮官の命令に従って、船倉の検査を行った、しかし、そこには何も見つけられなかった。アメリカ人達は開放された。

次の春の、5月末に、クレイセロック号は再び警備業務でウラジオストクを出航した。31歳の海軍大尉アレクサンドル・パブロビッチ・ドルジニンが船を指揮していた。1877年、彼はペテルブルグで海軍学校を修了し、シベリア艦隊での勤務に派遣された。1888年5月24日、ウラジオストクに到着し、砲艦モルシ号の当直指揮官の任務の指命を得た。その後、ドルジニンはツングース号、アレウト号に乗って航海した。航海の合間には、ウラジオストクの海洋学校で授業をした、熟練した将校として。海岸に走り下る火山の所の特異な町を若い将校は気に入った、町の人々も。ドルジニンは海軍大尉アンドレイ・パブロビッチ・ナリモフと近づきになった、自分の同年者と。彼は当時警備艦で航行していた。彼の話が、ドルジニンが警備艦での勤務を頼むようになったのは、明かである。

7月半ばに、クレイセロック号は、チュレニイ島に接近した。島は遠方から船乗り達の前に現れた、去年に船乗り達が島を後にしたと同じように。岸近くまで進むと、密漁の酷い様子が明らかとなった。岸辺の岩に、約300頭の鯨の体が転がっていた。その大部分は子孫をもたらしことが出来ない雌であった。小屋と風呂は腐った死骸でてっぺんまで埋められていた。かろうじて脇に鯨の骨が見つかった、去年に殺された、400頭以上。チュレニイ島に外国人を招いたのは清水（飲料水として *）だけではないという船乗り達の疑念は無駄ではなかった。

艦の指揮官は直ちに島に海岸警備隊を配置した：上級補給係ワシリイ・コルシンチェフ、水兵チホン・ゼレニン、イワン・クリジェフ、ドミトリイ・スタコフ。彼らは夏中チュレニイ島に居ることになった。彼らの内で上級者は年齢と肩書きでワシリイ・ニコラエビッチ・コルシンチェフであった。読み書きの出来る28歳の船乗りは家族がいた、家族はシムビルスク県で生活していた。この人物は力が強く、頑健であった、優しい性格でもあった。コルシンチェフは当直を割り振った：昼間に、岬で2人の歩哨は海を監視し、その間、他の二人は休息した。

クレイセロック号は夏中、島の辺りを監視した。が、密猟者は危険を感じて、現れなかった。船乗り達はその間に水路観測に従事した、被らせた損害に対して、外国人に支払わせるという期待を失わずに。10月の初めに、クレイセロック号は始めて外国船を発見した。が、その船は慌てて逃げていった。直に、もう一隻が現れた、島の反対側から。その船はコルシンチェフによって発見された。彼は既にクレイセロック号に信号を送っていた。2昼夜にわたって、追跡が行われた。が、霧が外国船を隠してしまった。クレイセロック号は手ぶらで戻った。

そのうちに、呼んでいない客は段々多くなっていった。島の傍に、2隻の船が碇を下ろした。予想した通り、これらの船は旗を掲げていなかった。補給係が急いで命令を出した、ボートや他の物を片付けるようにと、島にロシア人の存在を示している。小さな百姓家の小窓から、コルシンチェフは見た、姿を現した船では岸を観察していることを。結論を出した、夕方にそこに上陸する準備をしているものと。ロシアの船乗り達は招かざる客と出会う準備に取りかかった。

あっという間に夕暮れとなった。寄せ波の大きくはない音の響きだけが静寂を破ってい

た。少し待機することとなった。ドアの向こうに、足音と声が聞こえた、百姓小屋へ入った最初の者がマッチを擦った、確認を試みた。コルシンチェフがカービン銃を持って炉から出た。「手を上げろ！」彼は茫然としている密猟者に命令した。彼らはロシア語が分からないようであった。彼らにこうするようにと、手振りで示した。彼らの手を堅い結びで縛った。直ぐに、呼んでもいない客は土間に並んで座った、悪罵をムニャムニャ言いながら。

しかしロシアの船乗り達はそれらを耳にしなかった：彼らは岸の観察を急いでいた。人目につかない砂場で彼らは痕跡を見つけた、3隻のボートの。そこには20本の棒が転がっていた。それでアメリカ人はオットセイを殴り殺していた。明かだ、不味いことに感づき、密猟者達が船に戻ったのは、彼らを見つけ出すために、ワシリイ・コルシンチェフは赤色の狼煙を点火した、船を照らした。その後、船は急いで碇を揚げた、同僚達に困難な状況から自ら逃れることを委せて。

1889年の警備業務の終わりが近づいてきた。ボートに乗組員、逮捕した密猟者、没収した財産を撤収している間に、島の反対側に、もう一隻の船が近づいてきた。クレイセロック号がちょうど良い時にそこへやって来た：密漁船は既にボートを下ろし、オットセイの屠殺の準備をしていた。彼らの船は停泊地で揺れていた。が、クレイセロック号を見ると、船は全帆を張って逃げていった。警告射撃が船に停船を強いた。接近して、クレイセロック号の船長ドルジニンは驚いて見た、既に知っていたスクナー船ローザ号（アメリカの船 *）を。去年その船長の宣誓の約束を聞いていた、チュレニイ島へは全く偶然にやって来たとの。今回は、アメリカ人の罪の証拠は手元にあった。ローザ号の船長と5人のアメリカ人は護送され、クレイセロック号へ送られた。拿捕したローザ号に海軍大尉ナリモフ、海軍少尉フィリッポフ、4人のロシア水兵、8人のアメリカ人が残った。

20時頃、2隻のスクナー船は海に出帆した。先頭をロシア船、その航路にアメリカ船。深夜まで、ローザ号では警備船の船尾の明かりが見えていた。それから遅れないように努力していた。しかし、急速に強くなった南西風が船に縮帆することを強いた。航路を変更することが屢々あった。時間を失った。クレイセロック号は闇に紛れた。夜の間、ローザ号が屢々漂った。その時、ナリモフは気がついた、コンパスがなんかおかしいことに。後になり、コルシンチェフが自分の供述で指摘していた：「船長はズッとコンパスの所に立っていた、コンパスは動作が不良であった。多分アメリカ人がそれを壊した！」。

風は静まらなかった。急な間切りを行った。パベル・サビノフが舵を取っていた。しかし、舵の効用、もし闇の中で一寸先も見えないならば、海図に従って方向を決めることは船乗りには壊れたコンパスのために決めることが出来ない。朝3時、船は全速で岩礁に乗り上げた。全帆を使っての一度ならずの離脱の試みは無駄であった。巨大な波が船に襲いかかった、風がその破壊力で後押しをした。船体から最初に降ろしたボートを海水があつという間に飲み込んだ。2隻目を注意深く下ろした、それで結果は上手く行った。ナリモフの命令で、そのボートに最初に水兵クリャジェフが降りた。次の水兵は舷側にさえ近づけなかった、ボートに飛び込んだアメリカ人が彼を押しつけたので。彼らの後に続いて、恐怖で生気を失った他の外国人達が飛び降りた。トラペズニコフは整理することを試みた、が突然に彼はぐらつき、追い詰められた：一人のアメリカ人が彼にナイフで攻撃してきた。後になって、ワシリイ・コルシンチェフが報告書に書いていた：「ナリモフ大尉はボート

に最初に乗り移ることが出来た、それで助かることが。しかし、ロシアの水兵と船に残ることを選んだ」。

夜明けには、ローザ号の船尾は完全に壊れ、唯一残ったボートを巨大な波が洗っていた。ナリモフは2つのブームを結びつけるよう命令した。が、船乗り達が自家製の台に降り始めた時、巨大な波が彼らを持ち上げ、甲板に戻した。アンドレイ・パプロビッチは踏みとどまらなかった：波が彼を船まで運ぶより早く、彼の手は伸びきっていた。彼は船から落ちた。コルシンチェフが思い出していた：「その後、波の上に一度だけ指揮官の頭が見えた、そして、彼は沈んだ。我々は彼を助けることは出来なかった。とも綱を投げることも出来なかった、ボートには救助用ブイはなかった。全ては波で洗われた。

10月16日の正午頃、ローザ号は完全に壊れた。トランペズニコフの死、彼を台にくくりつけた、遺体が波に掠られないようにするために。ローザ号には何も残っていなかった、船乗り達は甲板の残り部分に逃れようとしていた。外板の板やブロックに確り捕まっていた者達をゆっくりと岸へ運び去った。最初は彼らはお互いに確認できていた、直ぐに波は彼らをばらばらにした。大波の中で、彼らは遠方にクレイセロック号を見つけた、突然に出現した、正に亡霊のように。明かであった、スクーター艦が気がついた、ローザ号が遅れたので。そして探しに戻ってきた。しかし、手遅れであった。氷のように冷たい水が成し遂げた、波がすることができないことを。水兵達は凍えた手を伸ばした、彼らはスクーター艦の救助用残物を出した。

10月17日の朝、コルシンチェフは岸辺で目覚めた。彼は破れた板の間の岸の岩に横たわっていた、海藻に包まれて。霧が濃かった。嵐は既に収まり、小さい波が岸に押し寄せていた。寒さで震え、コルシンチェフはどうにか起き上がり、岸に沿って歩み、テルペニア岬に出た。そこには誰もいなかった。が、岬を迂回し、コルシンチェフは仮小屋を見つけた。その中で休息し、その後、再び歩き続けた。時間と現実の感覚を全く失いながら。2日目に、二人の漁師が彼とひょっこり出会った。目の前に人がいるということを、直ぐには理解出来なかった：全身負傷だらけの船乗りの様子、ぼろ服で包まれた、赤く腫れた目の熱病にかかったような輝きを持って。

住居までは遠かった。突然吹雪が始まった、5日間続いた。漁師達は苦勞してロシアの船乗りを背負って運んだ、彼は全く力を失っていた。彼の足は真っ黒となっていた。彼を見てオロチ人達（ハバロフスク南部に住む現地人 *）はただ頭を振るだけであった。コルシンチェフは殆ど意識がなかった。少しだけ意識が戻った時、命運尽きて考えた、死期が近いと。10月26日、放浪者達は小さい小屋にたどり着いた。そこから、監視人のボロノフが直ぐにコルシンチェフをコルサコフ（樺太の港湾、旧大泊 *）に運んだ、医者に診せるために。そこで、コルシンチェフは足の指を切断した後、治療で残留した。

同じ頃、ウラジオストクではクレイセロック号が遅れていることに心配となった。海軍少将エルモラエフは海軍省に電報を打った：「スクーター艦クレイセロック号が帰還していない、心配になってきた。許可を請願する、有志艦隊の蒸気船ウラジボストク号を派遣することを。この船はチュレニイ島まで沿岸を航行している。ウラジボストク号は輸送に従事していない、代理人は同意している」。省の長が書いていた、「蒸気船の派遣は理解出来ない。両岸は多くの人住んでいる、連絡のためのその土地のボートを持っている、海岸でクレイセロック号に何かが起こったならば、乗組員の救助は完全である。エルモラ

エフに質問する、ウラジボストク号の派遣はどんな目的があるのか？「チハチェフ」。

エルモラエフは拒否を諦めきれなかった。スクナー艦の探査に蒸気船の派遣の要請をし続けた、有志艦隊の代理人がこれを無償ですると説明しながら、消費する石炭代だけを保証することとして。海軍少将の圧力で、海軍省の役人は譲歩した。1889年11月10日、許可が得られた。が、官僚主義が原因で、5日後に、ウラジボストク号は碇を揚げた、沿海州の海岸に沿って、それから1.5～2マイルの所に達した。時折、それは赤色の狼煙で明るくなっていた。が、スクナー艦は自分の存在を示せなかった。難破の何の痕跡も見られなかった。

11月18日17時頃、クリリオン岬（サハリンの最南端 *）を通過し、ウラジボストク号はアニバ湾に立ち寄った。船が碇を下ろした時、船に地域の流刑所の指揮官シェリキング少佐が登ってきた。彼はクレイセロック号の失踪について真相を明らかにすることが出来た。彼は知らせた、スクナー艦は最後にクリリオン岬にやって来た、10月25日に。そこに1日留まっていた。海軍中尉ドルジニンがサハリンの人に伝えた、ローズ号の難破について、クリジェフ海岸から、ボートに乗せてアメリカ人達を撤収したと。その日の夕方、シェリキングの言葉に寄れば、再び出港し、ウラジボストクへの航路をとった。その時には、船には2人の将校、15人のロシア人の船乗りと同じ数の逮捕したアメリカ人達がいた。

ウラジボストク号の指揮官オストロポフ海軍中尉は、時間を失わないで、再びスクナー艦の探索のために出港することを決定した。何処でどのように探索を展開するか、案を練っている間に、日本にいるロシア使節団を経由して噂が届いた、北海道の北西海岸にあるワシヤクナイ村（?稚内 *）の所で、ロシア船らしい船が難破したと。

太平洋を航行している、ロシア艦隊の指揮官、海軍少将シミットはこれらの情報を確かめるために特別な探検隊を選抜した。海軍中尉ブハーリン、医師ブンゲ、水兵オシェプコフを隊員として。しかし、ウラジボストク号は必要な場所までたどり着けなかった。日本海で、偶然にもウラジボストク号は日本の蒸気船ミザミ丸と衝突した。若干損傷し、長崎へ修理に向かわざるを得なかった。探検隊員にはどうしようもなかった、函館へ同じ方向に行く船に乗って出港するような。が、そこから小樽へ。驚きである、難破したスクナー艦と日本におけるその艦の探索についてのニュースが中央のロシア新聞まで直ぐに到達したことは、その新聞らは非常に矛盾する資料を公刊した。緊張は拡大し、乗組員の7名と同僚達は新しい通報を待った。海軍省の長は、特別電報で表明するしかなかった、「この事に遺憾の意を示す」と。新聞より大分遅れてこのニュースが届いたので。

この年の冬は良い天候で北海道の住民達を喜ばせなかった。暴風を伴った大雪は日本の北部の多くの住居地を寸断した。大変な苦勞をして、搜索者達はスクナー艦の難破の場所にたどり着いた。岸に積み上がった残骸の中に、ブハーリンはクレイセロック号の銘板を見つけた。船首と船尾は完全であった、が、舵はなかった。2本のマストは根元（専門語 ショウ座 *）から引き抜かれていた、船尾だけが支え綱で留まっていた、第一斜シヨウと船首甲板が無事に残っていた、舵輪は青空を背景にして、くっきりと現れていた。船の難破の目撃者の探索において、船乗り達は小さな日本人村まで達した。そこで彼らは正真正銘のクレイセロック号を最後に見た見張り人のウノタケと知り合った。彼が話した、11月15日の朝、水平線上に見た、船体のひっくり返った船を。最初それを泳いでいる

鯨と勘違いした。次の日には、それは岸に近づいていた。壊れた左舷以外は、船は殆ど完全であった。ウノタケは船からアンドレーフ旗と幾つかの船の装備を取り外した。

同じ場所、宗谷灯台から少し離れた、オネトマリ川の河口で一人の船乗りの遺体が見つかった。腕の入れ墨で、これは水兵のイワノフであった。彼を灯台の付近に埋葬した。灯台に並んで、壊れた二隻のボートが転がっていた。

後になり、他の目撃者達を見つけた。地域の住民達が話した、10月26日、27日に船を見かけた。この2日間は希にも無い暴風雪であった、老人さえ記憶にないほどの。クレイセロック号は着氷で遭難した公算が大であった。日本人の話から、ロシア人達はそのような結論に傾いた。実際には、船の前歴を知っている彼らは、当時船にいた密猟者達の陰謀の可能性を除外しなかった。

1890年2月12日、ブンゲとブハーリンは札幌に到着し、奉行に謝意を示した、クレイセロック号の捜索における援助に対して。ブハーリンが書いていた：「函館の副奉行は我々に通訳を与えた、小柄で非常に良く動く、長い間サハリンに住んでいた、ロシア語を中々よく話す。小島倉太郎氏は更なる行程において我々に価値のつけられない奉仕をしてくれた。我慢強く大変な通訳の仕事をやってくれた。彼はいつも私を酷く驚かせた、人生に対する哲学的な自分の関係とその不運において：決して彼は自分を見失うことはなかった、怒ることも、嘆くことも。全ての困難な状況を彼は心からの笑いでもって解決していた」。探検隊員の取りなしにおいて、日本人の通訳はロシアの勲章を得た。

ちょうど1年後、ウラジオストク港の指揮官は、海軍集会所の庭に、ロシア人水兵の記念碑の建設に関する命令を出した。1897年10月28日に、記念碑は荘厳に幕が下ろされた。外見では、それはクロンシュタットにあるクリッパー艦オプリチニク号の記念碑の正確なコピーであった：海軍省の礎、足で巨岩を抱えている、青銅製のアンドレイフスク半旗、4台の大砲、鎖で結ばれた。

なぜ今では我々は水兵クラブで全く違う記念碑を目にするのか、と君は問うであろう。答えは簡単である。忘れっぽい時代に、礎、旗、大砲は溶鉱炉に送られた、大丸石の上には、レーニンの小さい胸像が置かれた。ペレストロイカの時代にレーニンはホールの礎（？*）に代えられた、それには明らかに「質の兆候」（？*）が見えている。水兵イワノフは宗谷灯台の所に葬られた、北海道とウラジオストクを永遠に結びつけている。

函館で助言を求めて

沿海州地方の島の営林署長であるニコライ・アレクサンドロビッチ・パリチェフスキイは海洋地域の保存だけではなく、科学的仕事をする義務を負っていた。彼は初めて、注目した、隣人である日本人の経験に。パリチェフスキイが書いていた「島の営林署の職務は、1893年に制定された農業省のスクナー艦で国の財産であるストロン号における漁業の例外的な管理のために。私を個人的にそれに就かせたにもかかわらず、漁業期にだけ仕事をしている、個々の漁業団の途切れ途切りの監視は、漁業経営者の理にかなった方法のために全ての資料を与えていない。なぜならば、私にはアイデアがあった、我々の島の隣

人の漁業文献からそれを借用するという、昔からの漁民、日本。私の知り合いの日本人であるサブバ・克美の親切の御陰で、これを私はすることが出来た。彼は16年に渡り我々の所に住み、ロシア語の会話を身につけた、翻訳された考えを述べるために、それを、私は既に文章の形で表現した」。

パリチェフスキイが続けた、「最初は、私は日本人の著作の翻訳のために、”北海道における漁業の個人的観察”（北海水産辞典）と題する、日本人タカオ（メチノリ）ホッケン（？ ＊）の本を選んだ。というのは、たった今印刷されたこの著作は価値のある狩猟の動物と生物についての生物学資料、狩猟の詳細な記述、その組織化と市場価格、その他沢山、を含んでいる。一面では財務省を知るには必須である、狩猟産業の理性ある設定のためには。我々の海で、部分において、日本人の漁労と企業主の稼ぎについて、他では、日本人の漁民の体験をしれる、我々の海でこの狩猟に従事したがつている。それと共に、この著作は、北海道全体の狩猟の状況説明があり、この国の狩猟全体に我々は十分に馴染むことが出来る。北海道は日本全体の4分の1で狩猟は3分の1」。

2人の魚学者と一緒に、農業と国有財産の省によってそれに登録された、パリチェフスキイは蒸気船シトロシ号に乗って研究を行った。チュメニ・ウラ（ツマンナヤ）川からデ・カストリまで航行した、サハリン南部にいた蒸気船プルガ号で。しかし、パリチェフスキイの主目的は、アムール地方研究協会のもとで、海洋生物基地を設置することであった。東京大学が持っていたような。そのような基地の設置の大いなる熱狂者となったのは、アムール地方研究協会会長（ОИАК）の医者エポフであった。退職し、サンクトペテルブルグへ去っていた。彼は同僚達に金集めの援助を約束した。運営委員会は彼に次のような手紙を出した：「アムール地方研究協会のもとで、動物学基地の設立について貴君の貴重な提案に全く同意するものである。協会の委員会は会議で1897年7月2日に決議した：名を挙げた基地のための寄付の予約の受け付けを開始する。その後、全体集会へ提案する、資金の名称についての、アムール地方研究協会のもとで動物学基地の活動の維持のための—アムール地方の研究における長年の活動を記念してエポフ資金と。」

1900年4月、パリチェフスキイはアムール地方研究協会の全体集会で報告をした、海洋生物基地の予算計画について。残念ながら、権力者から早い支持を得ることは困難であった。サンクトペテルブルグから自分の手紙でエポフが書いていた：「皆が理論的な同情を述べる。が、それは何の価値もない。学者達はその礼儀作法を要求する。遂行に関して言えば、誰に、どのような仕事を、遠くの僻地に関する、住民が食うや食わずの所の。この基地からは個人的な得はこの地の誰にもないであろう。従って、これを気に掛ける人には興味があろう。それで、全くの別問題である、ペテルブルグでは何の希望もない、全てを一人で成し遂げる必要がある」。

アムール地方研究協会からのパリチェフスキイの退会は海洋生物基地の設立を極めて困難とした。1902年1月に、彼を沿海州の国有財産管理局下の予備の営林署長に任命した。自分の人生におけるこの期間に、パリチェフスキイはアルセニエフと出会った、ウラジオストクにやって来た。アルセニエフは誇りを持って、パリチェフスキイを師と呼んだ。そして語った、パリチェフスキイの御陰で、極東探検に従事できたと。

1907年5月30日、パリチェフスキイは病気で退職した、営林署長団の制服着用の権利を持って。しかし、仕事を放置しなかった。ペレセレンチェスク管理局で作業監督に

自主的に従事した。その後、探検隊の隊長に任命された、サハリンに毎年派遣された。研究者にとって、島の興味ある自然に出会え、自分の標本を充足する素晴らしい機会となった。パリチェフスキイの仕事は当時広く知れ渡った。1905年10月12日、科学アカデミーの動物博物館館長の推挙により、パリチェフスキイは博物館の準会員に認定された。研究者は多くの科学協会の会員となった。彼は特別な称号を授与された、南ウスリースクのコサックのコミサロフスク村の名誉老人の。

1909年7月、サハリンにいて、パリチェフスキイは自宅から悲しい報せを受け取った、年長で愛する娘オリガの死について。彼が指導していたペレセレンチェスク探検隊の仕事を急いで終了し、パリチェフスキイはウラジオストクへ向かった。しかし、彼は家族と会うことは出来なかった。7月29日、港への入り口まで遠くないところ、ウラジオストクまで60マイル、彼は自室で亡くなった。弔辞で述べられていた：「ニコライ・アレクサンドロビッチの人生で、彼の名前に関して、一度ならず論争が燃えさかった。彼に深刻な非難が浴びせられたのは希では無かった。これらの非難は彼自身によるものであったのは希ではなかったようである。が、いつも、全ての事情によりニコライ・アレクサンドロビッチの最も敵しい敵さえ彼に対して認めた。一つの異常に価値のある性質を、彼の熱心な勤勉さを。勤勉さ意外に、彼に反論することは出来なかった、他の性質を：例えば、彼の地方と地方に関する文献の知識。彼は貪欲に科学的文献に献身した、いろいろな面倒を持って」。

アイヌを研究して：ブロニスラフ・ピルストスキイ

革命家—憎むべきツァーリ体制の破壊者、地方民俗学者、アイヌの通人、ブロニスラフ・オシポビッチ・ピルストスキイはこの全てであった。彼はサンクトペテルブルグ大学の法学部で勉強し、司法活動の準備をした。が、組織「人民の意思」のテロリストとなった。1887年3月の逮捕後、ピルストスキイは死刑判決を受けた。それはその後、サハリンへの15年流刑に変更された。その地で、シテルンベルグと一緒に、ピルストスキイは民俗学に取り組み、標本を収集し、アレクサンドロフスクで博物館の共同創設者となった、1896年12月6日。特に、ピルストスキイはアイヌの生活に興味があった。

当時、サハリンは重要な対象の一つであった、ロシアの極東研究における。これ故、ピルストスキイの研究活動は見落とされることがなかった。知られている、1893年から1898年に、アムール地方研究協会（ОИАК）の会員であるキリロフ、マトベーフ、オルジフ、レメゾフと文通していたことが、新聞ウラジオストクでサハリンにおける生活について記事を公表したことが。流刑囚は島内の自由な移動をすることが出来ていたが、これは原則的に禁止されていた、これ故、ピルストスキイの記事は匿名で公表された。

1898年4月16日、ОИАКの運営委員会は総領事に願い出た、ピルストスキイにウラジオストクに来る許可を、そして司書の仕事に就くことを。協会には影響力のある人物は少なくなかった、移動は実現された。その間、ピルストスキイはサハリンの滞在を利用した、ОИАКの博物館のために有利になるよう、民俗学的収集品としての展示物を集め

ながら。1898年11月5日、運営委員会は、収集の目的のために、流刑囚のピルスドスキイに140ルーブルを割り当てることを決めた。地域の異民族との交際のためとして。これは不十分であった。12月22日、ピルスドスキイは電報で収集品を購入するために、40ルーブルの追加をお願いした。

そうこうしているうちに、12月初めには、ピルスドスキイにサハリンへ出かける許可が知らされた。ОИАКでの彼の賃金は年に600ルーブルであった。1899年2月に、ウラジオストクに住める権利の年間証明書第28を彼は得た。3月9日に、そこへ若いギリヤーク人のエンディンと一緒に到着した。コレイスキイ（朝鮮 *）通りのチンメルマン・アパートに住みついた。その日、ピルスドスキイはОИАКの正会員となった。1899年の協会の報告に記入した：「サハリンからの報告年の始めに、博物館の保守要員の資格で招かれたピルスドスキイがやって来た。後で、彼は大部分を書き直すことになった。収集品の状態の改良と図書館で仕事をした」。

3月18日、ピルスドスキイは初めて管理委員会の会議に出席した。彼は直ぐに博物館内の部屋と保守要員の職務を拒否した、生き死にに触れられないことと神経衰弱の原則故に。全てを判断し、彼は積極的にОИАКの荒廃した財政を回復することに努めた。4月1日、彼は管理委員会に博物館の検査結果について報告をした。欠点を指摘し、元流刑囚は具体的な手段を提案した、整理整頓とカタログの作成を。ミヌシンスク博物館のシステムを基本に取り入れて。ピルスドスキイは直ぐに研究者に沢山の手紙を書いた、展示品の提供を要請する。1899年8月6日、管理委員会は彼を出張させた、写真撮影によってコレクションを補足するために、ウスリースク鉄道の駅の。1899年から1900年に渡る短い旅行を、ピルスドスキイはパリチェフスキイと一緒にいった。

ピルスドスキイは、1900年のパリ万博のためのОИАКのコレクションの準備に最も積極的な参加をした。全てはロシア地理学協会紀要（ИРГО）の副会長セメノフ元老院議員の手紙から始まった：「・・・私は協会に話しかけます、全く確信している、協会は会員の仕事と自分の素晴らしい自然と民族のコレクションで、パリ万博で遠方のアムール地方を紹介するという素晴らしい課題の助けとなることを、その自然と民族の多様性において。協会の以前と現在の仕事、地方の古いもの、は私に確信を語らせてくれる、展示品の適切な選択において、協会は提案された課題を遂行し、視覚に訴える正確な地方の生活の様相を与える」。

1899年10月28日、展覧会に以下のような展示物が送られた：南ウスリースクの植物相の植物標本、現地民族の写真（オロチ、チュクチ、ギリヤク、アイヌ）、これらの民族の研究に関するОИАКと他の組織の出版物、黒い雉の剥製、スチャン産石炭の見本、ピルスドスキイが収集したギリヤクの民族的コレクション158点、同じくオロチのコレクション（126点）、チュクチのコレクション（102点）、アイヌのコレクション（63点）。博覧会の結果は期待以上であった。コレクションは事前の約束通り1500ルーブルで売却された、協会は2つのメダルを受賞した。サハリンの植物標本はパリの自然史博物館に贈呈された、出版物はパリ地理学協会に。ウラジオストクには雉の剥製だけが戻ってきた。

ОИАКの他の活動家と一緒に、ピルスドスキイは沿海州において気象調査の大プログラムを展開した。当時の重要な課題の内の一つは天気予報システムの構築であった。海軍

の小さな気象観測所があったにもかかわらず、住民達は気象情報の不在により被害を受け続けていた。特に、気象情報は沿海州の農業には重要であった。1899年11月11日、OIAKはピルスドスキイを派遣した、気象観測所の設置のためにカメニ・リボロフへ。1900年から、管理委員会は農業に関して、気象学者、植物学者にアンケートを行った、他の問題についても。「地方全体に関する完全で正確な情報を集めることに努力し、その研究に協会は献げた」。1901年、ピルスドスキイ、ミハイロフ、パリチェフスキイ、マトベーフは農業気象学と植物学に関する情報を集めるプログラムを準備した。彼らは64人の通信員を募集した。それ以外に、鉄道の気象観測所の長、サハリン博物館長、水路管理局長と太平洋の灯台長に、このプログラムに参加してくるよう要請した。これ以外に、ピルスドスキイが書いていた：「1901年に、協会は仲介者となった、イルクーツク磁気測候所と地方にいる自分の通信員の間。後者に、川と湖の解氷と凍結について測候所から得られた質問書を配布しながら」。全部で40枚の用紙が送られた。回答は少なかつたにもかかわらず、このアンケートは大事な仕事の始まりとなった。ピルスドスキイは忘れなかつた、サハリンにおける自分の研究を継続することを。

北海道が民俗学者であるピルスドスキイの大きな興味を引いた。始めて、旅行で彼は函館を訪れた、1902年のことである。翌年、アイヌ方言に知見があると言うことで、彼を東方探検隊に派遣した、ロシア地理学協会の、著名な文学者で民俗学者でもあるセロシェフスキイの指導下の。この探検隊はアイヌの研究のために北海道に向かった。1903年3月23日、セロシェフスキイは極東から日本に到着した。この時、ピルスドスキイはコルサコフにいた、日本への出発の許可を待っていた。「セロシェフスキイは私を待っている、手紙と電報を送っている。彼はセメノフに4ヶ月だけ私を借り受ける請願の電報を送った。私は夏の半分を北海道に出かけるために、同意した。さもないと、彼は見なしている自分の旅行は失敗すると。即ち、彼はアイヌ語も日本語も知らない。私は大いに疑っている、セメノフの尽力が役に立ったのか。今は総領事は新人、地方の役所は自分に責任が及ぶことを心配している、問い合わせるならば。セロシェフスキイは金銭の補償さえ提案している」。

トップを争っている新聞ウラジボストクがこの探検隊について情報を与えた：「我々の作家セロシェフスキイが現在日本の北部にいる。そこへ科学アカデミーと地理学協会が彼を派遣したのである、日本の原住民であるアイヌの研究のために。セロシェフスキイと一緒に、彼の助っ人として派遣されたピルスドスキイが働いている、彼は長年にわたってサハリンの異民族について研究をしている。探検隊は興味ある結果をもたらすことが約束されている」。セロシェフスキイがこの時に指摘していた：「私と一緒にピルスドスキイ、彼は私には本当に役に立った。以前に、私はバチェロルと一緒に旅行した。彼は極めて好人物であった、アイヌの生活についての疑いのない通人であった。それにもかかわらず、私は難しかった、彼の助けで質問をすることが、私が必要と見なしていることの。もっと良い自分の通訳は、詳しく知識のある、ピルスドスキイのような。全ては上手く進んだ；嫌なことが一つ、日本人は我々を軍事スパイと疑い、写真撮影を少し邪魔をした、禁止した、これから秘密で禁止されている仕事をするとするよりは；周りの人々を驚かす」。

基本的には、探検隊員は大きな村シロイに住んだ。そこには、約60軒の家があった、海岸沿いに。研究者達は書いていた、アイヌ人は信仰深い、日本人と違ってキリスト教に

は大いなる敬意を払ったと。アイヌ人の仏教や神道への改宗は極めて希であった。これは多分、彼らは日本人よりロシア人との接触が大きかったことによる。彼らは余り日本人を好きではなかった。新聞ウラジオストクが書いていた：「作家ナツラフ・セロシェフスキイは現在の自分の同行者で仕事の援助者ピルスドスキイと一緒に北海道のシロイ村のアイヌ人の農家で生活した。アイヌの研究において分かった、方言において彼らとサハリンのアイヌの間の差は極めて顕著であると。それにもかかわらず、旅行者達は、明らかに、自分らの課題をやりこなし、宗教と民族の問題の研究を続けている。それらを解明し、主として、セロシェフスキイのために課題を設定した。物質的な文化と旅行者達は親しみ、科学アカデミーのために、それと平行して物を手に入れ、サハリンではピルスドスキイによって手に入れられた。秋に、後者はサハリンに行く、アイヌの口伝ための資料を集めるために、彼らの全体的な民族的な資料も。これ以外に、彼はオロッコ人の所に同じ目的を持って訪れなければならなかった」。

ピルスドスキイは日本が好きであった。彼は書いていた：「ここ函館は、静かで、感じよく、安全である。毎年数ヶ月間はここで休息することを、私は夢見ている。」

学者達は北海道の奥地を探検する計画を立てた。が、日本は同意しなかった。バツラフ・セロシェフスキイはこの結論について書いていた：「我々は沢山の興味を引く物を観察し、書き留めた。アイヌの真に科学的研究の初めをなした。この非常に興味のある民族については今日まで何も知られていなかった。しかし、我々の探検はホンの短期間だけ行われた。最初、私は大分ピルスドスキイを待った、ロシア語の他の通訳、英語の通訳を見つけてくるが出来なかった、そのような人物はいなかった。彼の到着以来、仕事は良くはかどった。私は多くのことを請け合った……。他のことが起こった：北海道総領事への日本の公使の手紙を私が持っていたにもかかわらず、日本政府は私の旅行の例外的な科学的特徴を信じなかった。そして私を厳しい警察の管理下に置いた。これはたいしたことではない！ 外国人全員が今日まで日本では秘密の監視下にいる。しかし、日本とロシアの関係は、この年には特に緊張するようになった；日本の新聞は大騒ぎをした、住民は興奮した、しょっちゅう本当にばかげた噂が出回った、変装したロシア人スパイについて、朝鮮と満州にいる日本人への暴行と殺人について。ロシアの軍艦マンチュール号による11隻の日本の漁船の拿捕後、憤りは最高潮に達した。特に北海道で、大半の漁師がそこから出港している。激情と無知の環境のもとで、我々につけられていた下級役人の好意は思いがけない結果を与えた。不信と敵意の雰囲気はいつも我々を取り囲んだ、それは少しづつ明らかかな憎しみになって行った。アイヌは我々との話し合いや交際を犯罪と見なすようになった。隣村へ出かけて不在となることは日本の略奪への欲望とほとんど同じものと見なされるようになった……。我々はいつも敵対行動に出会うこととなった、きちがいじみた熱狂者の。私の仲間達は本当に驚いた、辺鄙な村での滞在、そこは陰気で怒れる人たちが支配するようになり危険となった……。住民との接近は困難となった、調査は殆ど不可能となった。私に任せられた人たちと既に収集した資料を守るために、私は函館の大使の助言に従うことに決めた、10月半ばに私が手にした。そして探検を中止した。」

1903年11月初め、アイヌとギリヤクの民族風習の展示物の入った箱がピルスドスキイからОИАК（アムール地方研究協会 *）に届いた。添え書きで彼は自分の本、手紙、報告書を送ってくれるように要請した、1902年－1903年の。博物館長デルベ

クはピルスドスキイに更に50ルーブルを分け与えることを頼んだ、「異民族の民俗学及び他の分野に関する物品の獲得のために、博物館の収集品を充実させてくれる」。しかし、戦争（1904年2月～1905年9月）が始まった、サハリンの無人の海岸に沿っての移動の危険、不断における不安、敵の出現の毎日に渡る予想、全ての物品の値段の急騰はピルスドスキイにサハリンからの出立を駆り立てた、予定の期限より早くに。

ウラジオストクへ、研究者は1905年夏に戻ってきた。この間に、ピルスドスキイはアイヌの言語、口伝、民族的及び経済的風習を研究した。彼は幾らかオロチ人と知り合いとなった、同じく自分の観察を補充した、サハリンで以前の生活をしていて彼と懇意となったギリヤク人に関する。これ以外に、サハリンの責任者はピルスドスキイにアイヌの人口調査をすることを委ねた、アイヌの経済的生活を記録すること、同じく異民族に関する新しい状態の計画を、彼ら生活習慣の条件の古い状態の出版物は時々刻々と変化している故に。

1905年8月5日、協会の全体会議で、ピルスドスキイはサハリンと北海道における異民族の生活に関する観察を伝えた。彼は聴衆にサハリンの歴史以前のことを知らせた、石器時代の住民について、アイヌ、ギリヤク、オロクの徐文（？＊）の出現について。最後には、少数のツングースとヤクーツクについて。この問題に関して、ピルスドスキイは前代における異民族との相互関係に言及した。彼はロシア人の異民族との緊張した関係の問題に触れた、彼らとの現代における関係と比較した、地方の仕事に参加した最初の活動家達が書いていた。「講師は解決することを提案した。異民族と我々の関係が悪化したのは誰に罪があるのかと。が、彼の講義全てから、罪はロシア人にあることは明かである。」

1905年8月12日、ピルスドスキイはサハリンの原住民についての報告を続けた。彼は彼らの言語について短い全般的な概念を与えた。例として詩を読んで、口承伝承の内容に触れながら。その後、より詳細に言及した、各々の民族性の宗教的性質に。ざっと、彼は民族の生活、宗教の見方、若い世代の養育の特徴を描写した。

セラシェフスキイとピルスドスキイは北海道におけるアイヌの生活の興味を引く観察をすることが出来た。サハリンに住んでいる同族との比較において、ピルスドスキイは発見した。日本のアイヌは、サハリンのアイヌより多くの良い点を持っていることを：ここでは全ての異民族は全ての権利と義務を日本人と同一視されている。全てを日本人に依存してなしている、自分の水準までアイヌを高めるために：沢山の学校を設置した、全てのアイヌは土地を分与され、専門家によって農業を教えられた、貸付金を得た、衛生の要求の遵守に慣らされた。サハリンのアイヌの良い点は比較的自由であり、漁獲に富んでいた（ニンシン以外に、北海道で得られる、サハリンでは、比較できないほどの大量のサケと海洋動物）。

1905年8月26日、ピルスドスキイは管理委員会の会議で最後の発言をした：彼は断固として極東を離れ、ヨーロッパに去ることに決めたと。未完で残っている仕事の話をして、彼は自分の本をOIAKの図書館に渡した。協会に自分の本を渡すことを、彼はその後も続けた。

ピルスドスキイの退去の重大な理由の一つは元流刑囚の焼き印で、何時でも逮捕されるという危険であった。ピルスドスキイは当時のOIAK代表ボルケンシュテインに書き送っていた：「可能性を持ち、西に、故郷へ出発しなければならない、その生活が私を驚

かしているにもかかわらず、私は満足を見つけられないという予想。非常に非常に貴君に会いたかった、結局、個人的にはリュウドミラ・アレクサンドロブナ・ボルケンシュタインと知り合いになること。協会の委員会の委員と話し合いたかった、が、知っての通り、この時期、ウラジオストクへ出向きたくはない。だけではない、多分、そこへ達する、抜け出すことが出来ない、もし突然に囲まれたならば、が、許可を得る方法は極めて不快である、私は彼に頼りたくない。私は若干の機関と縁遠くなっている、ある通知で私に不快感をもたらした。私は思っている、ニコラエフスクで出会えることが我々に都合が良いであろう。そこへ私は近いうちに向かう。自前の僅かな財産でなんとかやっていくために：本、ネガ、書き物で。そして友人と出会う。

ОИАКに借りを返さなければならない；一つの提案がある、が、これについては後で。私は耳にしているが、貴君は協会に沢山の報告がある、私はとにかく協会に説き聞かせるべきであった、私とその会員である。そこで最初の何年か働いていた。しかし、1) 私は準備する時間がない、2) 私は約束に縛られている、中東と東アジアの研究のためのロシア委員会との、私にこの2年間資金を与えるという、委員会広報に私の短い報告の掲載まで私は報告を読む権利を持っていない、他の機関に私の研究結果について論文を掲載することも。」

ピルスドスキーは出発の後、協会との関係を失わなかった。彼は定期的に協会に書いた。「ОИАК紀要」での公開のために論文を送った。図書館のコレクションの充足について心がけた。このように、1907年3月2日、管理委員会の会議で、手紙を読み上げた、その中でピルスドスキーは図書館のために幾つかの興味がある本を獲得すること、クラブ科学アカデミーに関係を持つこと、コレクションのカード目録を充足すること、名誉会員として特別活動会員を選抜すること、その他を提案した。ОИАКは原稿に対して謝礼金を支払っていなかった。しかし、ピルスドスキーだけを例外とすることを決めた。予算ではそのような支出は見込まれていなかった故に、彼のために75ルーブルを予約で集めることを決めた。

1907年12月、ОИАКへの手紙で、ピルスドスキーはアイヌの経済制度の自分の計画の運命について問い合わせた、また、異民族の医学的解剖の記録を彼に送ってくれるように頼んだ、特にアイヌの。管理委員会の定例会議で、ピルスドスキーの計画を次の「紀要」で発表することを議決した。解剖記録のコピーをピルスドスキーに渡すようお願いのある手紙は県知事に出された。1908年4月、管理委員会はある程度の報奨金に同意した、晴れがましい論文「ギリヤクとアイヌの民族に関して」を公刊するための。

人生の最後まで、ピルスドスキーは極東に戻りたがっていた、彼が熟知している。日本人の間で働きたがっていた。

函館からウラジオストクへ

1876年、ウラジオストクに、日本の商社の代理店が開設された、それをセワキが指導した。そこへ函館から直ぐに企業家達がやって来た。彼らはロシアと交易をすることを

期待した。彼らの内の何人かが、この時期についてメモを残していた。

1870年代末に、北海道に産業発展を加速する政策が導入された。島で、様々な農業生産物と工業生産物を生産することとなった。北海道は新しい市場を必要とした。北海道開拓長官黒田は、沿海州との商業取引を確立することを切望し、自分の秘書鈴木をウラジオストクに派遣した。村尾元長と一緒に函館丸に乗り出発した。船には北海道で生産された産物を積み込んでいた。ウラジオストクに到着して、この産物の店を開いた。北海道開発庁のために、鈴木大亮と黒田清隆は調査報告書を書いた。「ウラジオストク紀行」は3部からなっている：第一部はウラジオストクからニコリスクまでの旅行が書かれている、第二部は当時のウラジオストクの概観が含まれている、第三部には沿海州における日本産物への需要の展望の分析がなされている。

報告書「環遊日記」で、黒田清隆は303日間の旅行における自分の印象を記述している。1886年6月23日から1887年4月21日まで、彼は長崎、釜山、ボンサン、ウラジオストクを訪れ、シベリアを通り、ペテルブルグ、ベルリン、パリ、ロンドン、その他を訪れた。その後、海路で日本に戻った。第一巻がウラジオストクの記述に献げられた。

「浦塩案内」は内容では前の物と似ている。本はウラジオストクの歴史から始まり、天候の問題まで言及している。町には日本人、中国人、朝鮮人の住民の存在、商店、産物の価格、いろいろな職業の人の賃金、銀行の仕事、輸送、日本人団体「居留民会」その他。序文に書かれていた：「アジアとヨーロッパを結ぶ鉄道線が敷設されている。日本海に沿って蒸気船が運航している、政府の直接の管理下で。今日、敦賀と七尾から40時間弱でウラジオストクまで行くことが出来る。ウラジオストクはこの大鉄道の終点になっている。しかし、今日まで、日本語でウラジオストクに関する完全な旅行案内書は存在していない。読書の便を図って、案内書中には外部との取引に関しては統計的な資料と税関の規則は書かれていない。編集者には大きな名誉となろう、案内書が個人の役に立つならば。初めてウラジオストクやシベリヤに派遣される人、そこを經由してヨーロッパに行く人の」。編集者は知っている、案内書は日本の商業代理店の同僚の援助で作れることを。特に、川上利常と日本人会の居留民会の会長の。案内書の作者である角田は加賀（現在の石川県）で生まれた。札幌で彼は新聞「北門新報」を主催し、ロシア語と中国語の学校設立に参加した。

1902年夏、菊池幽芳が日本海の海岸にある町を訪れ、旅行記「日本海周遊記」を書いた。それは1903年に出版された。1902年4月、明治と大正期の作家である菊池は「大阪毎日」新聞で働いていた。定期海洋船「コツ丸」に乗って、敦賀の港を出航し、彼は日本の港七尾、伏木、新潟、函館、室蘭、札幌、小樽を訪れた。小樽から菊池はウラジオストクへ到着した、そこで数日間停留した。その後、彼はボンサン、釜山、門司、浜田、堺、宮津を旅して、出発から1月後に敦賀に戻ってきた。本は2部仕立てであった。第一部は北日本と北海道の沿岸の記述に献げられ、第二部はシベリアに。作者自身が認めている、第二部の方がより興味を引いたと。菊池の旅行記は大阪毎日新聞に、小出しで公刊された。4ヶ月にわたり、1902年9月から12月に。菊池はコツ丸について書いている：「総トン数16000トン。海洋蒸気船としてはコツ丸はそれほど大きくはない。が、その代わり、乗客には乗り心地が良い。一等と二等の船室のホールは非常に綺麗で、

飾り付けが良い。スチュワードはきちんとしている。一等と二等の船室にはバスが設置され、何時でも熱湯をバスに入れることが出来る。それは海水を蒸発させて得ている。甲板は運動したり娯楽をしたりする場所ともなっている。甲板では、乗客はお茶、コーヒー、ビール、レモナードを飲む。日本海は夏は完全な凧である、これ故、女性や子供さえ海水浴を勧められる。船は頻繁に港へ立ち寄る。最も長い航路は日本の最後の港から2日間でウラジオストクへ。ここで、菊池はシベリアにいる日本人売春婦について詳細に書いている。

日露戦争における日本の勝利は、日本海沿岸の日本の町の興味をより大きくした、外国との交易に関して。使節団が屢々国外に派遣される。各々の団は企画の完了に伴い報告書を作成する。確実に推定することが出来る、ウラジオストクに出向く日本人の数は増大した、海路と陸路の周遊の日程表のあるパンフレットの出版数から判断して。

この時期、以下のような冊子が出版された：「浦塩航路案内」、1908年。「石川県七尾港要覧」。「浦塩商工業調査報告」、1908年。最後の冊子は研修旅行時に作成された、函館の商業学校の生徒40人以上がウラジオストクへ研修旅行に来た時に、コツ丸で1908年8月に。この学校では、1898年に、第2外国語としてロシア語の教授が始まっていた、第2次世界戦争の開始まで続いた。商業学校であるが故に、報告書では主に商業状況に注目が向けられた、ウラジオストクにいる日本人の貿易商と外国人の貿易商との比較にも、特にドイツ人の。報告書の最後に、生徒の受けた印象について彼らの感想文が載せられている。この旅行は生徒の親の資金援助でなされた、また、この計画に興味を持った個人の寄付によって。切符を手に入れる祭、グループで30名以上が、50%の生徒割引を利用した、船会社大阪商船によって提供された。

「浦塩航路案内」と「石川県七尾港要覧」は日本の運輸局の職員によって作られた。最初の旅行案内書は蒸気船会社大阪商船によって出版された、1884年に創立された。敦賀ーウラジオストク線と小樽ーウラジオストク航路は政府の管理下にあった。それらを蒸気船会社大阪商船が運航していた。小樽からウラジオストクへの蒸気船は航路として、小樽ー函館ー七尾ー新潟ー伏木ー青森ーウラジオストクに立ち寄った、年に12回。ウラジオストクでの大阪商船の蒸気船の代理店として、交易商店である杉浦商店が従事した。この旅行案内書には、様々なホテルの個室の値段、銀行の開業時間、その他も示されていた。

古いガイドブックのページから

「優しく静かに町は自分の歴史を語っている。散歩では時間を忘れる。橋の上の陰（？ ＊）は正に歴史と文化を示している。」 これは函館に関する最新のガイドブック中の文章である。ここへやって来たロシア人は、古い函館をどのように見たのであろうか？ 何よりもまず、これについては古い旅行案内書が語っている、1912年にロシア語で出版された。歴史に献げられた最初のページで、時に語っている：「以前は手に刀を持った勇敢な侍が立派な戦士としての名誉を守っていた。が、今は、ああ！ 五稜郭の周りの水堀に増強された氷の切断が！（？ ＊） 正に評価しなければならない、五稜郭の氷は

全日本に知っていることを・・・ 1896年に、函館と小樽の間に鉄道が施設された。町には鉄道馬車、ドック、水道が現れた。市民はこれらに誇りを持って、日本で最初と言っている。地域の情報源が語っているように、昔から函館は指摘しなければならない、40年前に、ロシアのフリゲート艦フサドニック号が立ち寄り、湾の写真を撮ったことを。記念碑が地域の墓地に残っていた、これらは遠方で忘れられ捨てられた墓である。更に見えるのは、フサドニック号は幾つかの古いクリミアの大砲を残した、これらは地域の公園で見るとができる。最も歴史的記念物として、ガイドブックは丘の頂上にある建物を挙げている、それはモトイ(？ ＊)河野政通(室町時代から戦国時代にかけての武将 ＊)が1454年に作った。

函館に住んだ、或いはこの町を訪れた、最初のロシア人は短期間日本の寺に住んだ。ガイドブックは薦めていた、たまのつかの間の旅行者に、神社八幡宮を見ることを、谷地頭通りにある。「長い階段、4カ所の踊り場のある、が神社の入り口へ導く；両脇には灯籠、石造りの；やって来た参拝者のために小さな池。構造と装飾からして、これは神道の地方の寺院。祈りの者のための幅広くて四角形の部屋；床は綺麗なゴザで覆われている；保管所の奥には「神」、凡人の視線から隠され；入り口のすぐ前に、善男善女のための仕切りのある大きな箱；右側に、大太鼓が置かれている。それを打つことで信者達に祈りの時間を知らせる。入り口に対向した壁には、大きな金縁中に日本について、帝の話が置かれている；それらの一つでは、国民は呼びかけられている、質素で何が起こっても大丈夫なようにと、祖国の名誉にかけて。主堂に並んで、幾つかの神に敬意を表して別棟が陣取っている。8月15日から17日の毎年の祝日は極めて興味を引く。その時には、町全体を荘厳な行列が練り歩く。」

高龍寺は世紀の初めに、最も豪華な寺の一つと見なされた。ガイドブックは函館の客に「芸術的彫刻の門に注意を向けさせた、価格が数千円の」、同じく墓地に、寺院の周りがある。それは「文字通り草木に埋もれていた。」

仏教の高龍寺は1633年に建立された、函館では最も古い。1900年、その主ホールは修繕された。旅行者の最も興味を引くのは、この寺の門にある綺麗な浮き彫りである。他の仏教の称名寺は、その墓地には高田屋嘉平が葬られていることで知られている。彼の墓に設置された記念石「顕彰の碑」は北海道で最も古い記念碑と見なされている。

函館には正教団以外に、他のキリスト教会があった。昭和時代に作られたプロテスタント教会は、2番目に古い教区と見なされた。町には、同じように英国プロテスタント教会と元町にカトリック教会があった。それはヨーロッパ式ゴシックスタイルを強調していた、赤い屋根と風見鶏。日本にある幾つかの建物の内の一つに、中国式で作られた、中国式礼拝所があった。ガイドブックの著者の意見に寄れば、清朝時代末期の建物は良好な環境下で作られた。

領事公館はヨーロッパ式の建物にあった。ガイドブックが強調していた、1910年に建築されたロシア領事館はロシアの画家によって模様が描かれたと。古い集会所の建物は1901年にヨーロッパ式で建築された。ヨーロッパ式は部分的に立川家のレンガの建物に存在していた。1901年に建築された建物は、幾つかのアーチの御陰で典型的な交易の建物のように見える。金森の古い雑貨店は洋式と日本式が混在している、それなりの美を表現している。この建物には展示ホールがある。県庁の建物は日本式である。そこには

元町の情報ビューローが配置されている。一般の商業ゾーンは古い郵便局の建物の周りがある、赤煉瓦で作られた。

町の公園についての記述がある：丘や小山、池と家々が散在している、綺麗で生き生きと！ 小川にオモチャのような橋が架かっている。目にしていない至る所、絵のような木々、広く枝を張って、刈り取られ。明かだ、ほんの小さい木まで、各木々は上手な日本人の庭師の保護を脱していないことは。滝付きのプールと小さい湖は公園を生き生きとさせている。低い小山であるすり鉢山は展望台と呼ばれている。実際において、小山からは町と海の素晴らしい景色を見ることができる。記念碑「碧血碑（へきけつひ）」は、内乱の箱館戦争で倒れた戦士に敬意を表して設置された。ここに市立博物館がある。その最初の展示物は魚類学と漁業であった。

ロシアで当時日本のガイドブックも出版された。その中に、函館についての情報があつた。

正教会

函館は東京から遠いところにあるにもかかわらず、ニコライ司祭は日本における最初の正教会の生活に大分気を遣っていた。1881年8月8日（20日）、ニコライは教区の視察に函館を訪れた。当時、教区をドミトリー（スミルノフ）司祭が指導していた。彼は非常な不満を持っていた。彼（ニコライ *）は失望を持って日記に書いていた：「状況と全ての行動－精神異常者につきもの。家に2階を作る、板張りの家は古くなり今にも倒れそう。教会の屋根は鉄板で覆われ、ペンキ無しで放置されている。そのため鉄は錆びてしまっている。中庭は酷いまま放置されている；教会の祭台、供物壇には、至る所－ステアリン（蠟燭の一種 *）；愚かで勝手な勤行をしている。特徴から、彼を異端者と判定することが出来る・・・ 日本語を知らず、表現できない：言語無しで出来るということだ。私は知らない、函館の教会を神がどのように守ってくれるのかを。彼をそこから連れ出す、誰にも代えない、ならぬ・・・ ドミトリー神父と2日間にわたり話し合っただけ、それ以上耐えられない。克服する力はないというような嫌気が支配している。彼を鼓舞することが出来ない、何も納得させることが出来ない、理性的に話し合うことが出来ない。－可能性がない；彼より石の壁に向かっての方がましである」。これ故、日記には次のような文章が現れていた：「教会は物質的で、非物質的、風に向かっていくことが出来る。しかし、よりましである、高尚で、高潔で、見たところ、宣教師の勤めより！ それは伸び、緩み、短縮する。20年、誰を獲得した？ 風見鶏か、策士か、半凶人か、完全なキチガイか。恐らく日本の宣教師団から何も出てこない！」。当時のニコライ神父の悲観的な雰囲気は日誌に良く書かれていた。宣教師が思ったように順調には進まなかった。

1886年に、ニコライ神父は函館にチタ・コマツ司祭を任命した。1891年、アルセニイ神父はここに勤めた。「非常に好感の持てる人物で宣教の仕事に極めて優れていた：愛情が豊かで、心から全ての人を包んであげる、説教に熱意のある。彼は日本人と他の

話をしなかった、キリストの教義のような。出会った全ての人を、自分の所に招いた、或いは****で教義を聴きに；仕事は心配ない：ただ教会を訪れた、再び私と一緒に、*****、不満と疲労の陰が；語学の勉強には素晴らしい才能：去年の10月にやって来て、彼は既に苦勞なく話せる、何についても日本語でかまわない；彼の特別の特性—子供達に対する異常な愛情—誰でもあやし愛撫する」。アルセニイ（チモフェーフ）司祭は函館での勤めは短かった。1893年にロシアへ戻った。

教区の財政的援助のために、ニコライ神父は収入を利用した、函館にあった土地の賃貸しで得られる、時折建物の、函館にあった。通常、函館では教区の全体集会は1年に1回あった。集会では献金があった、全ての教区信徒から100円以上が。ニコライ神父、彼の禁欲主義は皆に知られていた。が、思っていた、全ての努力と物質的手段は教区の福祉に当てられなければならないと。函館の教会が屋根と塀の修理が必要となった時、僅かな緊急の仕事に、彼は金を使うことを不必要と見なした。函館への定期の訪問時、1891年7月23日（8月4日）、彼は見つけた、目的もなく多額の収入が費やされていることに。彼が書いていた、「使節団の宿泊場の全部を訪れた。その際、次のことに目を向けた：若い宣教師（最初はセルゲイ・グレボフ、その後、現在アルセニイ神父）は職員と女中の便利さについて余りにも気を遣っている：ここでの全員のための部屋（学校長マトベイ・カトを除外して）、言うことが出来る、豪華；東京にはそのような職員はいない；ここでは下僕のパーベルのために—”これは彼の家族用、この大きな部屋は応接室”」。

日本人が正教との関係を利用したのは希では無い。ロシアの領域での漁労の許可を得るために、そのようにして利益を得る。これには函館の牧師達が彼らを助けた。彼らは屢々布教のために南サハリンに行っていた。富の目的に宗教を利用することの熱烈な反対者である大主教ニコライは、そのような紛争の検討を行うことになった。とりわけ、彼に、ピョートル・ヤマガケとの大きなスキャンダルが起こった。

1895年末に、函館の正教学校（小学校）の閉鎖の問題が起こった。幾つかの原因があった。明らかとなった、学校の最後の校長マトヘイ・カトが長期間にわたって金をくすねていたことが。これ以外に、ニコライが書いているように、「函館における公立学校と私立学校の発展と共に、我々の宗教学校は段々と生徒を失ってきている」。1895年に、学校では約70名の生徒を数えていた、更に30名の少女と女性が裁縫を習っていた。ここではキリスト教の教義も教えていた。翌年には、生徒数が半減した。大主教が気がついた：「現在、終わっていない、というのは、そこの2人の教師—当時、カチヒザトル（？

＊）と歌の教師—生徒も、教会として必要な、学校なし。これら3人への俸給以外に、学校への大きな支出はないであろう、修理以外には。裁縫学校、そこでアンナ・タナベが裁縫を教えている、ペトル・ザコン・ボジイ神父は落胆しないで頑張っている、そこから女性のキリスト教徒になっている、生徒、年配の女性或いは若い女性が；我々の学校は大事である。というのは、ここでは道徳が遵守されている；最近なくなっている、再び戻る、期待できる避難所へのように、良い道徳の。町の学校については何も話す必要はない」。

1898年末に、函館の教会で、徹底的な修理を行った。この年に訪れたセルゲイ大修道院長が書いていた：「最近、函館には約300人のキリスト教徒がいる。日本の教会のもとで洗礼したのは1122人、その内の200人以上が亡くなり、800人は北海道や古い日本に散らばった。去った場所には他の教会からの信徒達に移り住んだ。が、もちろん

ん、極めて数は少ない。そのような流動性は全ての教会で認められる。それを困難なく説明できる：洗礼することを急ぐこと、もちろん、これにおける障害が少ない人を、周りの状況に束縛されていない。そのような状況に、回りから有名な町にやって来た人々がいる。ほら、それで彼らはいつも沢山、洗礼を受けた者の中で。しかし、よそ者達は簡単に一時的な場所に残る。もちろん、そのような流動性はキリスト教の普及の形では有効である。その代わり、地域の教会にとってこれでの損失は小さくはない。一つの関係において、一時的な住民は協会の世話が出来ないという、それにもかかわらず、協会が必要とする物を喜んで出し惜しみなく寄進するというようなことはない。函館の教会は、その際、年配のキリスト教徒の十分に顕著な不断の核である。彼らの内の何人かはニコライ神父から洗礼を受けていた（それは本当である、既に希となつてはいるが）、とアナトリア大修道院長から。彼らは教会を自分なりに維持し、教会の習慣を守った。ほとんど不断に教会に住んで。特に、女性について語っておく必要がある、彼女らはどこでも男達より教会に熱心で信心深かった。女性はここでは団を作り、月に3回集まっている、相互の訓戒のために。一緒に教会へ寄付をする。貧民達を助けている。祈祷式は教会で行われている、非常に順調に、教会規則と様々な正教の習慣の大きな遵守を持って、日本にはなかった。」

露日戦争の開始は、函館の日本人正教徒の規則的な生活を壊した。アンドレイ・メトキ司祭と彼の同志達を、24時間で函館から有川村へ追い立てた。「これは何の理由なのかという質問に、答えた：「知らない、命令だ、それだけ」、捜査を行わなかった。即ち、彼に罪はなく、ただ危険である、函館にロシア人が襲撃してきた場合に、何か不適当なことをしないようにするために。」ニコライ大主教は日本の内務省に説明を求めた。しかし東京の官僚は彼に強制退去の理由を説明することが出来なかった。あり得る、正教の建物が高台にあり、そこから軍事施設が見えていたことが。直に、司祭達に通告があった、軍事作戦の間、北海道を去るようにと。

函館は敵の襲撃の待機で動かなくなった。若干の住民は町を捨てることを選んだ。日本人の正教徒達は政府によって脅された、礼拝を禁止すると。これにもかかわらず、信者達の一部は正教の習慣を遵守することを続けた。戦争は決めた、函館で誰が本当に正教を信じているかを。1904年のパスハ祭に、司祭ロマン福井は根室から勤めをするために呼ばれた。教会は教区の信徒で一杯となった。が、83の家族のうち19家族はロマン神父を受け入れることを拒否した。

函館権力の告発の一つが説明された一地区の司祭が東京にある日本正教会から金銭を得たと、同じく、ロシアから金銭も。彼らの見解に寄れば、函館の司祭はロシアの仕事に関わっているということであった。このため、ニコライ神父は函館教区の信徒に司祭の扶養を引き受けることを提案した。函館の当局は彼に説明した、礼拝を邪魔をすることはなく、深刻な事態については報告するようにと。そのような出来事が北海道で起こっているにもかかわらず。例えば、小樽では3軒の家が燃えた、そこには日本人の信者達が住んでいた。釧路では、逆に、この時、10人が洗礼された、礼拝が荘厳に行われた。

1904年7月、大火が函館の全ての木造家屋を焼き尽くした。特に、町の古い家屋を、正教会も含んで。数年後のガイドブックでは指摘されていた：「火事後、函館に、焼失したものの代わりに、新しい寺院が建てられた。価値のある古い記念物はない、寺は驚かさせることはない、その豪華さで」。しかし、この時には、正教会は未だ復興されていな

かった。火事の直ぐ後に、教区の信徒達は新しい教会の建築について考えていたにもかかわらず。彼らは計画を立てた、ニコライ大主教は彼らにアトラス（？ ＊）を渡した、彼らが建物の計画に参考できるように。当時、函館で、医師ヤコフ後藤が亡くなった、彼は教会の建設に1000円を遺贈した。不足分を、函館の信徒達は寄付や他の方法で集めることを期待した。特に、彼らはウラジオストクで慈善バザールをすることを考えた。

1908年夏、司祭アンドレイ・メトキ、イワン・アキモビッチ・セヌマとイサイ・木村がウラジオストク、ハルピン、ハバロフスクとブラガベシェンスクに派遣された、寄附金募集のために。日本人達はこの旅行の準備に滞りなかった、紹介状と沢山の土産を持参した。特に、日本の正教布教団の出版物を。ニコライ大主教が失望したのは、彼らは伝えなかった、函館の土地が質に入ったことを：「経験の積んだ日本人！ まず公使バフメテフから我々当局への推薦状を得た、そして今大使マレフスクから、私からの何の助言を持たず、私に話すこともなく。もちろん、私はこれにクレームはない；教会の仕事—神よ、成功させてくれたまえ。ただ少し不安である、全てが泡と消えてしまうかもと。」

ニコライ大主教の予感の間違っていなかった：旅行は予想の結果を得なかった。この結果について、彼が日記に書いていた：「教会の建設に、1595ルーブル30カペイカが集まった、ひどい！ この総額の殆どを旅行で使い果たした！ 殆どを函館に支払う必要がある、教会家屋の書類を受け出すために、その担保に、850ルーブルは下らない。先に函館から書いていたように、その郡では、1000ルーブル以上、それに付加しなければならぬ、更に割り増しして。醜聞！ 私は感謝することは出来ない、熱心な献金者の内の誰にも。というのは、寄付金を得ないで、何に感謝するのか？ この仕事で、セヌマ、ネトキ神父と木村は少なくとも評判を落とした。全ては、私の情報無しで、私への問い合わせ無しで、考えられ実行された」。

建設費の用立ての他の方法として、函館の教区の信者達は、魚の捕獲と販売の利益を得ることに期待を掛けた。許可を得るために、彼らはプリアムール地方の総領事ウンテルベルゲルに伺いを立てた。が、彼は拒否した。次のことを引用しながら、そのような書類の交付は彼の権限内にはないとして。

教会の再建のための金銭を集めようとした函館の信徒達の失敗した試みの後、大主教ニコライは全てを自分の手で行うことに決めた。1909年秋、彼は手紙を書いた、著名な慈善家であるアナスタシア・ペトロブナ・シネリニコバに。彼女がこの教会の建設について考えてくれるようにするために。それには2万2千ルーブルが必要とされた。彼女から返事があった、全額は無理であるとの。が、一部分を寄付できるであろうと。1年後、彼女は最初の千ルーブルを送った。ニコライ大主教は1910年に、セルゲイ主教に、ロシアを旅行して、慈善家を探すように依頼した。セルゲイはモスクワで公演をし、300ルーブルを集めた。自分で、1500円以上を持ってきた。新聞「モスクワ公報」から金銭が届き始めた、この新聞は教会のための集金に援助を示していた。エブドキア・ガルツングー千ルーブル、公爵夫人アンナ・セルゲエブナ・サルチコバの斡旋によりズビャテイシイ・シノダー2千ルーブル、伯爵夫人エリザベータ・ウラジミロブナ・シュバロバー3千円。

自分の人生の最後の日まで、日本の大主教ニコライは、函館の正教会の建設への助力の依頼を持った手紙を送った。我々の時代まで保存されている石造りの建物は1916年に

復興された。

函館の最初の教会についての思い出を、マトベーフは書き残していた：「病院は早くに焼失し、函館の教会は日本における正教の揺り籠となった、東京に教会の建設まで唯一の。その建設のまえの少しの期間、その主たる設立者、もと司祭ニコライ（1836年－1912年）は函館を去った、彼の最初の勤め先である、東京で、その際、自分の道の大部分を徒歩でなした。1902年に、この教会を訪れ、私はその鐘楼に上がった、そこで整理された倉庫の中に本の山を見つけた、主に宗教に関する。私は知らない、火事までに、そこから片付けられたのか、それともそれらと一緒にダメになっただけなのか。その後、教会は復興されたある慈善家の資金で、今では新しい姿で存在している。（関東大震災は1923年9月1日発生 ＊）

ゲオルギイ・デンビーー兄

ロシアの極東の商人達は日本に確りとした足場を持っていた。この仕事において、パイオニアとなったのは、ウラジオストクの企業家であるゲオルギイ・デンビーであった。彼はチーフとサハリンでの知り合いの一人であった。作家は指摘していた：「……スコットランド人のデンビーは仕事を指揮していた。もう若くはない、明らかに、熟練した人物。彼は日本の長崎に自分の家を持っている。私が彼と知り合いになった時、私は彼に言った、多分、日本は秋だろうと。彼は喜んで私に提案した、彼の家に滞在することを。」

ゲオルグ・デンビー（デンビー、ジョージ・フィリップス）は1841年2月16日に生まれた。彼の親類であるアンナ・デンビーが書いていた、「彼が生まれた家は、今まで、ロンドン郊外のレгент運河の傍に完全に残っている。私は思わない、彼らが貧困であったとは、とにかく、私の家にはデンビーの父の油絵の肖像画が掛かっている。」デンビーは生まれたイギリスで素晴らしい教育を受けた。が、性格は冒険主義的であった。南東アジアへ出て行った。一時は、彼はバンコックやサイゴンに住んだ。時折、若いデンビーはトランプのポーカーで生活費を稼いだ。言うならば、彼は運のあるゲーマーであった。が、移り気な運命の女神に大きな期待を掛けなかった。中国に向かい、そこで独自のビジネスに従事した：自分を川の税関使と呼び、航行する船から税を徴収した。

ある時、小さいスクーター船をチャーターして、幸福の探求者はロシアの海での漁業にその船を派遣した。後になって、デンビーが回想していた：「船員は非常に少なかった。一人のロシア人、一人のイギリス人、二人の中国人、これが全てであった。彼らは5月末にウラジオストクに集まり、6月にオホーツク海へそこから出発した。指示を受けて。もし、戻れる状況になれば、シャンタルスク島（アムール川河口付近 ＊）までたどり着き、そこで越冬するようにとの。クロテン等を捕獲し、次の春にウラジオストクに戻る。3年が過ぎ、この探検隊について何の情報も得ることがなかった……。ようやく、偶然にシャンタルスク海峡に入った船の一隻が、そこで私の船を見つけた。船員全員が壊血病で亡くなっていた。最後に亡くなったのは船長。当直日誌の記載のために彼らが作ったあばら屋で、死んでいる彼を見つけた。」

この失敗の後、デンビーは自らウラジオストクへ向かった。若い町に住むことを決めて、当時数百人の住民を数えていた。水産物の収穫に従事していた。彼は土地を買い、2軒の家を建てた。スベトランスキイ通りとキタイスキイ通りに面した正面を持った。小型帆船アレウト号を手に入れて、デンビーはそれに乗ってサハリンに向かった。そこの海岸には大量の昆布があった。直に、デンビーは商人のセメノフと親密となった。彼は沿海州における昆布類採集の定評のある通人と見なされていた。ヤコフ・ラザレビッチ（・セメノフ）は進取の気性のあるイギリス人（ゲオルグ？ ＊）に仕事を拡大することを提案した。このようにして、1877年に、有名となる会社「セメノフとK」が生まれた。

デンビーが証言している、「私は約8年間サハリンに滞在した。仕事を大規模とする前に、まず始めに、多くの障害を克服しなければならなかった・・・最初は、漁業をし、脂身を準備することを試みた。が、セメノフはこの分野の企業に参加することを欲しなかった。それにどんな資金も支出することを拒否した。その時まで、確りした努力の方法で、私が彼に仕事で証明できない間。この漁業は大いに儲けることができるということ。最初、私は鱈漁に従事した。出漁した、どんな天候でも、小舟で、アイヌの子供達と一緒に。1日に大魚を500匹から600匹捕獲に成功することは希では無かった。直に、私はアイヌをこの漁業に従事することに駆り立てることに成功した。その後、彼らは鱈をタバコ、生地、米に変えた。そのようにして、私は十分な量の鱈を漁獲し、乾すことに成功した。日本に4000円（当時では巨額－著者）で売った。当時、昆布の収穫は上手く行っていた、年に約10万プード（1プード＝16.4kg ＊）が我々によって送り出された。」

デンビーはプロテスタントであった、非常に綺麗な日本人の正教徒であるメリ森高・テシ（アンナ・ルドリフォブナ・モネテッサ）と結婚した。彼女は1853年に生まれた（デンビーは1841年生まれ ＊）長崎から遠くはない小さい町キケツ（？ ＊）で。裕福な水産業者の全ての家事が彼女の肩に掛かっていた。サハリンの真岡地区で、彼らの全ての子供が生まれた：1880年にアルフレッド、1881年にアレクサンドルーテド、1882年（？）にリザ、1884年にジョージーワシ、1885年にジョン（ワーニア）。子供達はアニフスク正教会で洗礼された。

ロシア国籍を持っているデンビーの仕事の機転とイニシアチブはロシアの果てに大きな利益をもたらした。同時代人が指摘していた、「デンビーの名誉のために語らなければならない、彼は搾取者ではなかったと、彼に依存しているロシアの業者から樹液を絞るとるような：約束を取り付け、十分に大きな、しかし、極めて大きなリスクでもって全く正当化される利息（忘れてはならない、全ての業者、流刑囚の農民の大部分は何の資本もなく事業を始め、何の保証も与えることが出来なかった。）彼は自分のクライアント達を縛り付けたり、従属させなかった。ロシアの富農や資本家達がやっていたような。彼らに十分な可能性を与えた、自分の足で立ち上げられるための十分なエネルギーのもとで、依存性から完全に解放される。」

ウラジオストクで、ゲオルギイ・フィリポビッチ・デンビーは大いなる尊敬を受けた。町の古老と見なされた。この肩書きを誇りにした。彼はアムール地方研究会の会員であった。そこへ博物館のために、いくらかの資金を与えた。同じく展示物も、極東の植物相の豊富さを物語っている。

年齢で仕事から遠ざかり、デンビーは沢山旅行をした。ウラジオストク以外に、彼は函

館、長崎、ホノルルに家を持っていた。1909年12月27日、アンナ・ルドリフォブナ（デンビーの妻 *）が突然に亡くなった。これは長崎でのことであった、彼女が幼い娘と一緒にオーストラリアへ向かう時に。そこで冬を過ごすつもりであった。7年後に、デンビーが亡くなった。1916年初めに、ゲオルギイ・デンビーは喘息が悪化した。彼はホノルルの病院に入院した。ホノルルには通常は休暇でやって来ていた。そこで彼はその年の11月15日に亡くなった。彼の息子達が遺体を火葬にし、長崎に運んだ。そこにはデンビー家の納骨所があった。

父の後、極東での魚と海産物の交易の家族の仕事は、長男のアルフレッド・デンビーが成功裏に導いた。彼は長崎でフランスのイエズス会の学校を修了した。その年に、父の会社の代表となった。1904年10月、南サハリンにおける魚と海産物の収穫に関する組合の設立について、クラマレンコと契約を結んだ。

露日戦争は平穏無事な家族を財政的に崩壊させた：全ての金銭を企業に出資した、日本、ポルトーアルツール、ダリニイにあった。支社は閉鎖され、アルフレッドは上海に移った、そこでウラジオストクの供給に従事した。日本の包囲下にあった。戦後、函館に戻り、アルフレッドは家族の会社の活動をデンビー&Cの名称で再開した。彼の弟のジョージがアメリカから来た時、会社は大いに稼働し、ウラジオストクに更に一つ代理店の開いた。しかし、仕事の条件は変わっていた：アムールの富は地域の会社によって開発し尽くされていた。南サハリン、デンビー家の領地の、は日本に移っていた。カムチャッカが残った、兄弟達はここに目をつけた。

1908年、ゲオルギイ・フィリップピッチ・デンビーの成人になった子供達は父から1万ドルをもらった。当時では巨額であった、起業のために。これらの金銭は家族の企業の拡張に役に立った。ウスチーカムチャッカに、魚加工工場と缶詰工場を建設した、最新の技術を装備した。尾ひれをつけなくて語れる、会社デンビー&Kは1908年-1923年の間に、全世界に鮭を供給した。ついでながら、アルフレッド・デンビーは父と同じように、ウラジオストクのアムール地方研究協会の正会員となった。

漁業家フリサンフ・ビリチ

フリサンフ・プラトノピッチ・ビリチは非凡な人物であった。彼の経歴は冒険小説の題材になるものであった。残念ながら、悲しい結末を持って・・・

将来の流刑囚で大漁業家は1857年に生まれた、ボルムスク県のザスラフスク郡のシェペトフスク村で。キエフ准尉学校を修了した。その後、シムフェロポルに住んでいて、ビリチは人民主義の思想に熱中した。独立独歩の性格が際立っていて、彼はある将校を侮辱した。1884年、彼をサハリンに流刑とした。他の説に寄れば、彼が誰かを毒殺したことで、彼は罰せられたのだと。懲役に服し、ビリチは真岡に住んだ、そこで、ウラジオストクの商人ヤコフ・セメノフの番頭となった。その時、流刑を受けた住民（ビリチのこと *）はデンビーと懇意となった、セメノフの仲間であった。直に、ビリチはクスナイ（久春内 *）近傍で昆布採集業に従事した。知られている、サハリン島で、ビリチがチ

ェーホフと出会ったことが。

1875年のサハリン島とクリル諸島の交換後、ロシア人達は段々と漁業に従事するようになった。この漁業は以前は日本人達がやっていたものである。1893年アニバ湾に既にロシア人は6, 7カ所の漁業区を持っていた。未だ漁業に必要な技量を持っていなかったため、漁業者達を日本人の仕事に参加させていた。ビリチは特に活動的であった。クズナイからエストルまでの海岸が彼に所属していた。1904年には、ビリチの13の漁業区で、約800人が働いた。彼の本拠地は釧路にあった。

露日戦争時、ビリチは自警団ウスロを組織した、サハリンで30人から40人の流刑囚と農民からなる。日本人との戦いに成功した。彼は何隻かの日本船を拿捕した。後退するに当たって、ビリチは漁業施設に火をつけた。彼を捕虜として捕縛し、弘前に抑留した。1905年11月、ビリチは東京に到着し、ニコライ大主教にサハリンでの戦いについて話をした：「当時、外国の特派員はいなかった。人道的に振る舞うことはなかった。それ故、人間の本性が露わとなった：おとなしい住民の大半は理由なく殴られ、女性は強姦された。他の女性や子供達は切られ銃殺された、男と同じように、「この者達は何の役にも立たない」ということで；精神病者さえ病院から引きずり出され銃殺された；流刑囚の大半は、家畜のように、デ・カストリに移し、食糧無しで放置された・・・」。

広く興味を持った人物で、好奇心溢れているビリチは1908年に、アムール地方研究協会の正会員に選出された。当時、セメノフが協会で昆布に関する冊子を出版した。ビリチは一度ならず仕事で函館を訪れていた、そこで産物を売り、漁業のための配給品を購入した。

南サハリンでの事業の可能性を失い、ビリチは他のロシアの漁業家と一緒に、カムチャッカに向かった。1908年から19016年まで、彼はカムチャッカ河口で働いた、そこに始めて魚缶詰工場を設立した。1916年、ビリチはペテログラードに去った、そこにズッと住みつくことを希望した。が、1917年の事件がこれを妨げた。彼はウラジオストクに戻り、オークションでセダンカに土地と住宅を手に入れ、そこに1921年まで住んだ。彼の住宅は今日まで保存されていた。

年齢を無視して、彼は国内戦争に積極的に参加した。ソビエト権力に対する戦いを指導することを計画した、オホーツクーカムチャッカ地方で。1921年から1922年、オホーツクーカムチャッカ地方の民政を指導した、ペテロパブロフスクで、臨時沿海州政府の特別代表の責務を持って。日本の港函館から送られた、1921年9月20日付けの手紙で、デンビーはビリチに成功を期待していた、着手した探検における：「神のご加護を、貴君の健康に数年間は、君が建てたプログラムを人生内で遂行できるために。君は極めて大変で苦労のある課題に取りかかった・・・」 残念、元流刑囚で自由の闘士は失敗に終わった。

1923年2月3日、国家政治保安部（Г П У）の沿海州県局の創設と共に、県革命裁判所は聞き込みを始めた、「カムチャッカ探検隊」について、「カムチャッカの少数民族への残忍行為で名声を上げたこと」について、同じく、「人民の財産の厚かましい大売り出しと強奪」について。ビリチと一緒に、この仕事をしたのは、ニヤハンスク軍守備隊指揮官のアレクサンドル・レオンチェビッチ・ポリシユク中佐、伝令船ズビリの指揮官、遠洋航海船長ロマン・ヤコブレビッチ・サラトコーペトリッシェ、その船の乗組員の一人で

海軍省関係の陸軍准尉ワシリイ・アレクサンドロビッチ・クリイと商人ゲオルギイ・ゲオルギエビッチ・ベク。彼ら全員は銃殺された、革命裁判所の判決に基づいて、第一ザバイカル狙撃師団の、第五赤旗軍団の。艦隊の海軍大尉グリゴリイ・アモソビッチ・イブレフを自由剥奪10年の刑に処した。

ビリチの家族には、2人の娘と、3人の息子がいた。パベルはシアトルに住んでいた。そこで、森林利権企業で働いていた。セルゲイは大連輸送会社で仕事をしていて、アルセニイはアラスカにおり、ズベンソンのウエレンスク会社で働いていた。彼の妻に何があったか知ることにはなかった。元流刑囚についての記憶は日本で今日も生きている。

クラマレンコ：函館からカムチャッカへ

函館には屢々ロシアの他の企業家がやって来た。その一人がガブリエル・アモソビッチ・クラマレンコ。彼は1867年3月31日生まれ、アストラハンで。13歳から既に自立して生活した。1892年、彼は珍しく当たりを得た、飢餓者のために行われた、宝くじで1000ルーブルを勝ち取った。この金を、クラマレンコは自分の仕事の開始のために利用することにした。当時ロシアの漁業の中心地であったアストラハンで生活しながら、彼は魚の加工の基本を身につけた。1893年、クラマレンコはプリアムール地方に到着した。そこで、漁業の組織化と販売の市場の研究を始めた。南ウスリースク地方における移民局の長ブッセの助言したが、彼と若いクラマレンコは極東で知り合いとなった。彼は1894年に、アムール川とサハリン島における漁業を訪れた。この長距離に渡る旅行の結果はかさばった論文「アムール川とサハリン島における漁業」として現れた。アストラハン新聞で公開された。直に、クラマレンコのこの論文はサハリンカレンダーに出た。クラマレンコが書いていた、「遠方で、当時未知の地方への旅行、サハリンにおける流刑植民者との接触、地域での仕事をしている、漁業をしている日本人との；地方の異民族との交流：アイヌ人との、ツングース人との、ギリヤーク人との、オロチ人との；彼らの希で最高に興味を引く荘厳な祝日への参加—これは全般的に私に完全に違う視野を開いた。流刑囚の間で、私の生活の条件は、私に用心深さと勇敢さを育んだ；大変で危険な犬と鹿でサハリンの冬の移動、-40度下で強いられる1週間に及ぶ雪の中での野営；或いは、サハリンの崖の海岸に沿って壊れそうな異民族の船での夏の移動、うさい波の時に、岩礁と暗礁の間にある小舟から岸に飛び移るのが普通である、無意識のうちに、私に特別な勇気とコツを教えてくれた。」

1894年、クラマレンコは地区の行政機関の提案を受け入れ、サハリン島の上級監視者の職務に就いた。そこに1896年に、自分のニシン漁区で仕事を組織した。その時期に、彼は初めて函館にやって来た。

1897年10月22日（11月3日）、クラマレンコは東京でニコライ大主教と会った。ニコライは自分の日記に次のような文章を残した：「クラマレンコはアストラハン出身、最近そこへ出かけている、会社を設立するために、資金を獲得しそれを仕事に回すために、彼が取りかかっている事業の拡大のために。彼は何の資金も無くそれを始めた、サ

ハリンにやって来て、4年前に、漁業に簡単な経験と進取の気性を持って。最近、彼の仕事は順調に進んだ。サハリンを最近訪れた県知事ドホブスコイが彼に大賛成を表明し、国庫の補助金を努力して得ることを約束した。彼と二人で立って写真を撮った。1つの峡谷に彼の名前をつけた、その他。」

ガブリエル・アモソビッチ・クラマレンコは極めて幅広い商業の興味を持った非凡な人物であった。彼は森の買い付けを行い、建設を展開し、商売の成功として商業顧問という名誉称号を得た。同時に、彼は地方活動と民俗学に従事した、発掘も行った。新しい知識を彼は喜んで皆と分かち合った。特に、ロシアの遠方地方の漁業についての報告をした、ロシア地理学会の会議で。露日戦争の後、南サハリンでの漁場を失い、クラマレンコはカムチャッカに移った。そこで彼は郷土研究に従事し続けた。直に彼はこの地方の通人となった。

クラマレンコは農業局の漁業委員会の委員となった、屢々ペテルブルグにやって来た。1910年、彼は長男のガブリエルを首都に連れてきた。子供は2月で11歳となった。カムチャッカでの漁業に戻るために、彼らは5月22日にペテルブルグから鉄道で出発した。6月初めに東支鉄道(КВЖД)経由でウラジオストクに到着した。旅行者達は数日間デンビーの家に滞在した。1910年6月10日、軍艦コリマ号に乗って息子と父はカムチャッカに向かった。ペトロパブロフスクに若干滞留し、6月25日、同じ船でウスチーカムチャッカに移動した。そこで旧友のビリチを訪れた。

国内戦争時、クラマレンコは家族と一緒に、再びカムチャッカへ旅行した。途中彼らは函館に立ち寄り、デンビーの会社の事務所の管理人であるダニチ氏の家に留まった。漁業家の息子ジョルシ(ゲオルギイのフランス語読み、クラマレンコの次男*)が自分の日記に書いていた、「することは何もない、大雨がやって来た、泥道を、事業所まで2ベルスト進む。ダニチの住所を見つけるために。事業所までたどり着き、人力車夫に彼の家を示し、我々はそのへ向かった。呼び鈴を押すと、背が高く少し太めで肩幅の広い人がドアを開けた。彼は我々の訪問に非常に驚いた、横浜からの我々の出立について情報を得ていなかった。我々を待ってはいなかった。ダニチは我々をロシア語で迎えた。心優しく、手厚く。我々に自分の妻である日本人を紹介した。分かった、控えめで、気立ての良い伴侶であることが。我々を食堂に案内し、夕食で席に着かせた。最初に、ロシアの前菜が出てきた。私は長い年それを食べていなかった。例えば、イクラ、ボローニャ・ソーセージ、干し物、更にその他。我々は美味しく食べた。前菜の後に、我々にスープが出された。同じくロシア風の。その後、若いジャガイモ付きのカツレツ、デザートにツルコケモモのキセーリ(ゼリー*)。」

亡命で、クラマレンコ夫妻はイギリスとフランスに住んだ。パリで、ガブリエル・アモソビッチ・クラマレンコは1928年10月10日に亡くなった。

クラマレンコとシェホスク出身のポーランド人女性である彼の妻は、5人の子供を育てた。ガブリエル、ゲオルギイ、ニコライ、アレクサンドルとマリヤを。家族の主人は子供達の教育に大きな注意を振り向けた。彼は旅行時に日記を付けるように彼らに教え込んだ。その日記は後になって公刊された。長男のガブリエル・ガブリロビッチ・クラマレンコ(ガガ) - 1910年に父と一緒にカムチャッカを訪れた - は本「カムチャッカで」を出した。その本で、半島、そこの人々、出来事の子供時代の印象を読者とともにした。ガガは最初、

ツアルスコエ・セロで勉強をし、その後、イギリスの学校で。小さい漁業船団の技術の免状を得た。その後、通学生として第4ペテルブルグ商業学校を修了した。1920年代末に、ガガはウラジオストクに住んだ。ここで彼は通学生として国立極東大学の工学部を修了した。極東国立漁業トラストの造船所の主任技術者として働いた。そこでは、鱒漁のために、セーナー漁船を造っていた。1938年2月18日、ガガは突然に内務人民委員部の組織によって逮捕された。1940年10月26日、自由剥奪8年に処された。1946年8月13日からの解放後、1981年まで、トボリスク造船所で働いた。ガブリル・ガブリロビッチ・クラマレンコは1991年1月20日に亡くなった。

次男のクラマレンコ・ゲオルギイ（ジョルシ）—本「カムチャッカ。1918年における私の旅行と熊と山羊の狩猟」の著者—は若い弟アレクサンドルと一緒にロシアから亡命した。彼らのその後は知られていない。

函館でのウラジミール・アルセニエフ

著名な極東の旅行者であるウラジミール・クラブデイビッチ・アルセニエフは何度か函館を訪れていた。彼はカムチャッカへの旅行時にそこへ立ち寄った、ウラジオストクに戻る時にも。

1917年のオルゴン—ゴリンスク探検隊から戻り、異民族の仕事に関する委員会の職務から解放され、アルセニエフは再びハバロフスク博物館を運営することになった。嫌なことからの息抜きとして、彼はハバロフスク民族大学で講義をした。国には、国内戦の炎が燃え上がっていた。全てのロシアの知識層には酷い時であった。未知に対する一つの救いは旅。旅行の渴望、多分、強制される動員を避ける試みはアルセニエフに新しい旅行をしようとさせた。1918年3月17日、沿海州移住区の指導者クレピニンが極東人民委員会に手紙を書いた：「カムチャッカ探検隊の隊長に、極東の研究者であるアルセニエフを私が招聘した、6000ルーブルの俸給で。1918年2月23日（10日）に裁可された、ソビエト人民コミッサールによって。専門家のために、仕事を自立して遂行する。アルセニエフの招聘を許可するようお願いする」。極東ソビエト人民委員会の移住コミッサールは依頼に決議を出した：「研究者としてのアルセニエフの候補者はふさわしい、許可する」。

カムチャッカ探検隊は移住生活条件の研究のために向かわせられた。半島奥地への将来の移住計画の作成のために。これ故、1918年6月26日、沿海州移住地区管理の臨時局の命令によって、アルセニエフをカムチャッカにおける移住者整備の長に任命した。この探検隊における彼の補佐として、元コサックの將軍サビツキイとシレイベルになった。直に、1万ルーブルの探検隊予算が認可された、期間は2ヶ月。

1918年7月7日、蒸気船シサン号に乗って、アルセニエフと彼の同行者達はカムチャッカに向かった。旅行者は航行時にはどんな気分であったのであろうか？ 彼の日記が全てを語っている。ウラジミール・クラブデイビッチ（・アルセニエフ）が書いていた、「このシサン号より居心地が悪くて、汚い船は私は見たことが無い。革命のよしみで一等クラ

スは船の船長用、二等クラスが乗客用。切符は実際より高く売られている。それで、乗客の一部は食堂に入っている。乗客は様々である。船には、アナディリの投機師－カフカス人やチュコト半島から多くのものがやって来ていた。彼らは異国人達を搾取し、同時に、彼らに必要な物全てを供給している。政府がしなければならないことを、富農や搾取者がなしている。連中は多様である：商人、技術者、漁業家、金採掘師、労働者、宝の探索者、様々な浮浪者や通りがかりの者、チュクチ人、コリャク人、カムチャッカ原住民の運命にかこつけたぼろもうけの愛好者。

7月9日、昼の2時、蒸気船シサン号が函館に到着した。乗客の大半は上陸した。が、私は船に残った。秩序、清潔、静寂、思いやり、良いものと優美なものへの志向－これらは我々ロシアの汚れ、荒廃、無秩序と際だったコントラストをなしている。私は日本人の嘲笑、皮肉、悪意、刺すような皮肉、当てこすりを見ることができなかった、プライドから。ロシア人は国民として、自尊心を持っていない。そのような打ち勝ったような様子を持った函館を歩き回ると、彼らは地球上で一番幸福な人々であるかのよう。彼らにとって日本人の嘲笑は何なのか！（？ ＊）ある手慣れ者が日本人に尋ねる、女郎屋があるかと。日本人の女性が意地悪く答える：「女郎屋の上にはロシアの旗が翻っている。」 「へえー」、一ロシア人の返事、楽しそう、鼻歌を歌いながら、彼はロシアの旗を探して歩き回った、女郎屋の上の。そこでは酔った船乗り達が、生きた激情を満たしている、下品な雑言を出しながら。

1918年7月10日－12日、一日仕事がなかった。雨続きであった。翌日は一日中蒸気船に荷を積み込んだ。何かあり得ないことが起こった。得体の知れない人物達が、異民族の投機と搾取のために、大量の物資をアナディリ（マガダン州チュコト地区の中心地 ＊）に運んできた。船を船長が管理するのではなく、船舶委員会が監視している。この委員会はこの投機に参加する、いわゆる賄賂のために、シサン号に積み込みを許した。船は喫水線を2フィート以上越えてまで荷を積み込んだ。タラップは海に浸かった。我々は皆不安となった、しかし、何かをするにも全く無力であった。船長は自分の名の日を祝った、船員が船を管理した。彼らは積荷書類無しで過積載することが出来たらしい、喫水線は既に隠されているにもかかわらず。船室には救命帯はなかった；船は不注意の結果、傾きながら荷を一杯積んだ。安全な航海への出港には、危険と恐れを引き起こす状態となった。」

幸運にも、航海は何事も起こらず終了した。1918年7月19日、蒸気船シサン号はアバチンスク湾（カムチャッカ半島の南東岸、現ペテロパブロフスク・カムチャツスキイがあるところ）に投錨した。

・・・4年が経過した。極東大学での講義を、アルセニエフは兼務した。漁業と海獣業監督局の上級査察官の職務と。更に、1921年11月には、彼自身の要請により、ギジニンスク地方の査察官の職務に彼を任命した。この地域は、ペンジンスク湾の西岸のイレト川とカムチャッカ半島のレスノフスク川の間にあり、これには特別の興味があつた、民俗学的と統計経済学的関係において。1922年の夏の探検の時に、アルセニエフはこの問題に取り組むつもりであった。

1922年6月23日、アルセニエフはウラジオストクを眼で見送った、今回は蒸気船キシネフ号の甲板から。この日はおもぐるしい感情が彼をとらえていた。彼はそれを解明

することを試みた。この時まで、機会はなかった、探検の開始前に、そのようなことを味わうような。逆に、新しい道と出来事に向かって、心は闘志満々であった。損失の重苦しい感じが、気持ちの良い胸を膨らませることに加わった。初めて気が重かった、アルセニエフには家族を放置することが。家族については彼はいつも考えていた。マルガリタは彼がいなくても全ての困難を乗り越えることが出来るのであろうか、心配しながら。航行の最初の日に、アルセニエフは家に電報を出した、旅行の開始について。彼の不在の間さな生活希望している旨のある。予感アルセニエフを欺しはしなかった。実際に、それは家族のことでなく彼ら自身のことであった。

1922年6月26日、蒸気船は函館に碇を下ろした。ここでアルセニエフに明らかとなった、キシネフ号はタウイスク湾とヤムスク湾にだけ立ち寄ることが。既にカムチャッカから中国のチンタオへ出航していると。アルセニエフには問題が起こった、秋にカムチャッカからどのように脱出するかの。幸運にも、全ては上手く行った。函館にあるロシアの漁業会社の支社で保証してもらった：アルセニエフはソロビエフと自分の旧友であるデンビと契約を結んだ、彼らのエンジン付きヨットペンジナ号が彼をヤムスクに運び、ギジギンスク湾の西岸全部に立ち寄ることで。そこから家に戻る。

3日後、夕方遅くに、アルセニエフはキシネフ号に乗って出港した。函館に戻り、1922年9月22日にはペンジナ号に。この停泊場で、キシネフ号はウラジオストクへの出港準備をした。船長グロスベルグは喜んで、アルセニエフを乗せることに同意した。アルセニエフは同じ連隊の同僚であるバラノフと同じ船室に入った。彼とは1907年にハバロフスクで出会っていた。後になって、バラノフは停泊場でのことを思い出していた：「函館で、我々は課題を議論した、何処へ行くか、それを様々に決めた。アルセニエフは、研究者として、何の政治活動家ではなく、ウラジオストクの家族の元へ戻った。自分の好きな研究の仕事に。そして、健康な年月が彼をこれにかき立てた、私は自分の家族と一緒に避難の放浪を選んだ、世界中を。それは私を1936年にアラスカへ導いた。私はアルセニエフと兄弟のように別れた、将校として—教育では、ロシアに愛を持って、ロシアへの献身、古い同僚で友人として。お互いに十字を切り、長い間何度もキスを交わし合った涙を流しながら・・・」

1922年10月初め、アルセニエフはウラジオストクに到着した。最近の印象は10月の出来事を背景にして、色あせてきた。白軍の残兵は沿海州を放棄した。ウラジオストクでの知人との出会いは問題をはらみ始めた：「残るかそれとも去るか？」 アルセニエフ一家は残った。実際において、マルガリタは全てを捨てて外国へ去るように夫を説得した。彼は出国のパスポートの公布について自分の上司に申請した。が、この計画は拒否された。過去の生活をどのように抹消することが出来るのか？ アルセニエフの多くの友人達は、大変な時にロシアを捨てた。彼の所から誰もいなくなった。

アムールから函館へ

国内戦争、これは常に双方の血を伴う、悲劇である。これは長年にわたって世代の記憶

に残る。ロシアにおける兄弟間の殺しの歴史において、少なくない空白がある。それらは今日において激しい論争を引き起こしている。それらの空白の内の一つは、1919年末から1920年初めのニジネ・アムールでの事件である。様々な評価は、極めて矛盾している。当時そこで、約3000人のロシア人と約600人の日本人が犠牲となった。それらの中に、函館の住民は少なくなかった。もちろん、片方に罪をなすりつけることは簡単である、特に、日本軍に。何人かの研究者達がなしているように。が、歴史においては、一方的な評価をしてはならない。

もし、あの血なまぐさい事件を注意深く見直すならば、注意しなければならない、ニコラエフスク・ナ・アムールに於ける状況は、23歳のヤコフ・イワノビッチ・トリャピチンの指揮下にあったパルチザン部隊のそこへの到着まで、破裂寸前であった。ここには少なくない元刑事犯達、サハリンの徒刑地からの脱走者達、タイガで強盗を生業としている者達がいた。いわゆるルンペンプロレアートの活動が無視してはならない。彼らはいつも威勢良く富裕な住民の強奪に参加していた。同時代人が指摘していた、「「寄生虫」(富んだ事業家—著者)がいたのであろう、きつい仕事だけが生活を保障していたニコラエフスクのような町に。」これ以外に、ニコラエフスク・ナ・アムールにはロシア人と一緒に少なくない日本人、中国人、朝鮮人が生活していた。ロシア人の一部分と国際的団体との対立は不可避であった。外国の干渉はそれなりの役割を果たした。露日戦争での敗北を覚えているロシア人住民は、ロシアの極東の領域に日本軍が存在していることに、極めて否定的であった。

ニジニアムールにいる日本の司令部の活動の浅薄な分析が証明している。ニコラエフスク・ナ・アムールの日本の守備隊指揮官石川少佐が酷い用兵上の間違い、と誤算を幾つかした。特に、彼はパルチザンと殆ど戦うことなくチニラフ要塞を明け渡した。赤軍の国会議員オルロフを白軍に引き渡した。その場で彼らによって殺された。結局の所、日本の将校の優柔不断は赤軍との和平条約の締結となった、それは降伏に殆ど似たようなものであった。トリャピチンの指令での白軍残兵の引き渡しは殆ど裏切り行為と見なせる。赤軍のパルチザンとのふざけあいはパルチザン部隊の町への侵入後も続いた。同時代人が書いていた、「正に我々は日本の友好と探究心と親切な行為に驚かされた、赤軍のパルチザンに対する彼らの素晴らしい指令を段々と納得していった。日本の将校と兵の制服と外套に赤いリボンが我々のアジテーションの成功を物語っていた。」日本人の最後の行動は極めて不成功であった、それは悲劇をより増大させた。

国内戦には規則、義務がなかった。双方の憎しみがその期間におけるありふれたことであった。元赤色パルチザンが書いていた、「蜂起者達の戦いと勝利に対する意気込みは非常に大きかった、この高揚を維持し、ある範囲(？*)を作り出す可能性は殆ど無かった。この時、各蜂起者の雰囲気はノウモフ同志によって特徴づけられた、「私は解放したい、私には何の障害もない。平穏を訴えるような裏切り者には、我々の中に居場所はない。」若干の証拠に寄れば、赤色パルチザンの指導者自身にも状況を制御できる状態になかった。1920年3月12日から14日のニコラエフスクにおける最大の悲劇において、略奪や犯罪行為がありふれることとなった。事件の参加者達が思い出しているように、「匪賊や刑事犯が現れ、時を見計らって、捨てられた家で強奪し始めた。日本人の家屋で、パルチザンの姿をして、家族さえ斬り殺した。その際、日本人だけではなくロシア人も殺した。

私は昼間に2件の略奪を見る羽目になった、その際、2組の一味が捕まった（1組は朝鮮人、もう一組は中国人）。この時、トリャピチンと彼の取り巻き達は完全に自分の部隊の統制を失っていただけではなく、町の情勢に対しても。

ニコラエフスク・ナ・アムールでの流血事件についての最初の証言は矛盾するものであった、犠牲者数が様々に述べられた。日本側が受けた損失に屢々力点が置かれた、「公式報道は疑いを挟まない、赤色徒党はニコラエフスク・ナ・アムールの日本の主要家屋と日本領事館に野蛮な襲撃を行った。一時的な混乱に乗じて、数百人の日本兵と平民を殺した。領事館の建物、地域の日本企業を燃やし、日本領事を殺した。」

ニコラエフスク・ナ・アムールでの事件に、日本の政府筋は次のような方法で対応した、「3月12日から今年の終わり頃、ニコラエフスク港で、現地のポリシェビキによって残忍な殺害が行われた。日本の警備隊の兵、領事館員、そこに住んでいた日本人、老若男女の、例外なく、全員で約700人。彼らの運命はまことに悲惨であった。帝国政府は国家の権威の回復の目的で、必要な手段を実行しなければならなかった。」

少し後になって、破壊と犠牲についてのより客観的で具体的な情報を公表した：「戦慄と荒廃について印象を与えるのは難しい、同志達の別れの際に生じた。ニコラエフスクはそれ自体として存在していない。」大火事で残ったもの：職業学校、森機械工場、ノベリ波止場、市場広場回りの店；他の残りの建物や家屋は全て兵火にさらされた。漁業に関しては、今のところ正確な情報はない。ただ知られている、バセとオゼルパフは同じように火事で消滅した。2つの水路は地雷が施設され、沈められた19隻の荷船と岩で遮断された。南の通路を、日本人達が片付けている。思わなければならない、1週間後には、航行が安全になると。町の全住民の内、約2000人が残った、老人、女性と子供の大部分が。

1920年6月27日、ニコラエフスクから日本の港小樽へ軍の輸送船多聞丸が到着した。その船には116人の避難者が乗っていた。その中でオレリスク鉱山からの外国人が17人いた。ニコラエフスク・ナ・アムールで実際に恐ろしい犯行があったのかという出向者達の質問に、出てきた「話せば、他より恐ろしいこと。涙をこらえられるのはわずか。しかし、女性はいつもこれができない。

—ここに在る我々全員は、助けられた。というのは、隠れ、避難したので。我々一人一人には、ごく希な場合を除いて、死が脅かしていた、もし我々を見つけ出したならば。免れた、どこにいたかで：森の中に、山の中に、ボートの中に、ボートの下に、屋根裏に。要するに、藁をも掴んで。」最近の悲劇の若干の詳細が信用できないように思われた、信ずることは難しい、もし彼らについて目撃者が話さなければ。

著名な極東のジャーナリストであるニコライ・ペトロビッチ・マトベーフ—当時日本にいた—は直後にニコラエフスク・ナ・アムールを訪れた。地区の新聞にシリーズで記事を書いた。特に彼が書いていた、「サハリン地方にもたらされた悲劇的な出来事の一つ、特にニコラエフスク地区に、はこの地区の殆ど完全な水産業の破壊である、長年大きな努力で発展してきた、確りとなり始めていた。(・・・) この産業は多くの関係で損害を受けた、大小様々で。犠牲になったのは漁業の所有者だけではなく、経験ある漁民や労働者も、仕事に10年携わっていた。これは少ない。多くの資本主義の漁業会社の社員が犠牲になっただけではなく、少なくない農民で漁民も犠牲となった。」 当時、出来事につい

ての概説記事が出るようになった。

後になって、極東におけるパルチザン活動の指導者達は極力ヤコフ・トリャピチンを避けた。彼の側近の同志達さえ過ちを日本人になすり続けた。赤色パルチザンの流血の役割について口をつぐんだ。知られている、日本守備隊の書類の一部を手に入れ、ロシア語に翻訳し、後になってニコラエフスク・ナ・アムールから持ち出したことが。しかし、それは今どこに保管されているか、未知のままである。同じように、電報の書き写しが見つかっていない、日本守備隊の指揮官石川少佐が自分の命令を出した。書類も見つかっていない、いわゆる国際委員会によって収集された、日本人の行動の調査に関する、赤色パルチザンによって組織された。それに、中国人と朝鮮人の参加があった、特に、中国領事。推定がある、これらの書類は中国にあるとの。今日まで、明確ではない、日本の書類も。知られている、日本の天皇は自分の副官の西義一をニコラエフスク・ナ・アムールに派遣したことが、彼に事件の詳細報告を用意させ犠牲者名簿を作成させるために。しかし、日本の歴史家達は、このテーマに関係し著作を書いている、基本的にソビエトの文献を利用した、殆ど日本の書類を引用することなく。

ニコラエフスク事件に献げられた2番目の本を、アナトリー・ヤコビレビッチ・グトマン(匿名 アナトリー・ガン)が出版した。経済学者でジャーナリストで新聞「商業電報」と「相場の急使」の編集長、新聞「今日」と「ルーシ」と「一般問題」の執筆者。彼は1873年に生まれた。1918年7月、グトマンはモスクワを出て、カザンスク前線を経て、サラプリスク郡に忍び込んだ。彼は労働者の蜂起に積極的に参加した、イジェフスク工場とボチクンスク工場。新聞「ボチクンスクの生活」と「イジェフスクの守護者」に原稿を書き、労働者とカペリ将軍の人民軍の兵士のために講義をした。1918年10月、グトマンはウファに到着し、そこで「祖国公報」で発表した。疎開の後、彼はエカテリンブルグに移動し、そこで「ウラルの生活」に原稿を書いた。1919年1月、オムスクで生活していて、彼は地域の新聞「夜明け」と「ロシア軍」に記事を書いた。1919年3月末、グトマンはウラジオストクにやって来た。そこで、新聞「ロシアの経済学者」を創設し、1920年1月31日までその編集者を務めた。コルチャック政権の崩壊後、彼はその年の1月に、日本に去り、東京で新聞「ロシアの問題」を創立した、週に2回ロシア語と日本語で出した。そのページに、ニコラエフスク・ナ・アムールにおける事件についての最初の反響を印刷した。グトマンは証拠を集めるよう努力した、それを基礎に彼は本を書いた。1920年7月、グトマンは中国に移り、大著「ロシアとボリシェビズム(戦争の最後の段階とドイツとソビエト政府のブレスト和平と相互関係の歴史的資料)」の出版に取りかかった。同時に、彼は本「ボリシェビズムにおけるユダヤ人の役割について」を書いた。最後の年をグトマンはドイツに住んだ。1933年まで彼はベルリン特派員であった、パリの「ルネッサンス」の。

グトマンの本を注意深く読むと、注意を向けることが出来る。法律家であるコンスタンチン・アレクサンドロビッチ・エメリヤノフの完全な手書き原稿を彼が持っていたことに。それはだいたい後になって出た。この本は読者に大きな感銘を与えた。評論家の一人が注目した、「エメリヤノフの文書は手早く更に素っ気なく手短に書かれた、予審判事がそれを書いたと感じながら。ロシアでエメリヤノフがその職に就いていた。が、記述の公正さと良心さは読者に共感を持たせ、強い印象をもたらしている。」

出版の先導者となり、本の序文の筆者となったのは、著名な極東のジャーナリストで作家であるロビチ（デイチ）であった。彼は1896年12月28日に生まれた、ポリノで、著名な革命家の家族として。1915年、ブラガベシェンスク男子学校を修了し、デイチはモスクワ大学で勉強を続けた。1916年春、彼を野戦軍に徴兵した。ツアリチンスク学生教育大隊での訓練を経て、元学生は第3モスクワ准尉学校を修了した。前線では、将校は並外れた大胆さを発揮した。1917年夏、リガでの戦闘で、彼は負傷した。その後、コルチャック軍に参加し、彼は赤軍との戦闘で、軽い銃傷を負った。1920年には回復し、彼は軍野戦裁判所で判事として勤めた、政治と刑事の件で検事の職務を務めた。

1922年11月9日、デイチは横浜からハルピンに行った。1937年から上海に住んだ。彼はジャーナリストとして働いた、新聞「上海の夜明け」で。ハルピンの雑誌「国境」に、その創刊時から勤めた。雑誌「国境」（上海）に自分の物語を書いた。それは連合で出版された、ロシア移民委員会の「通報」と雑誌「ついでに」の。ヤコフ・ロビチの特別なテーマはニコラエフスク・ナ・アムールでの血なまぐさい事件であった。彼はこの悲劇に小説「敵」を献げた、国内戦争時ジャーナリストとして行動した調査を元にして書かれた。

本の出版の資金をロビチに与えた、彼の同郷人のネトプスキイが。ニコラエフスク・ナ・アムールの元企業家である。卓越し表現力に富む言葉で書かれた本は、直ぐにアジアにいるロシア人の外国人の間で人気となった。その出版の後、ロビチは国内戦のテーマを取り上げ続け、コンスタンチン・エメリヤノフの本「地獄の人々」の編集者となった。それに序文を書いていた。この時期には、エメリヤノフは既になかった。彼を北サハリンで銃殺した。後になって、ヤコフ・ロビチは何冊かの本を書いた。それらは中国にいるロシア人に好評を博した。1951年、彼は中国からツババオ島を經由してアメリカに移民した。そこで、1956年8月27日、肺癌で亡くなった、スタンフォード大学病院で。

リューリ兄弟商会

長年、函館に住んでいた漁業家マイエル・モイセービッチ・リューリは、ニコラエフスク事件（1920年3月～5月 ＊）で多くの親類達を失った。彼は1881年5月20日に生まれた、ニコラエフスク・ナ・アムールで、元流刑囚の家族として、ポーランド蜂起への参加でサハリンに送られた。彼は早い内に仕事を始めた。父の死後、家族を助けるために在学中にアルバイトをした。国民学校と会計学校を修了後直ぐに、会社で働いた。この会社は漁業と交易に従事していた。その後、ナデツクの金鉾山で会計の仕事に就いた。そこから、製材所を持っていた企業家ルベンシュテインのパートナーとして移った、アムールでの漁業に興味を持って。彼は兄弟のアブラムと一緒に、1902年に、漁業会社「ルーリー兄弟」を設立した。

兄弟の基本的な商売は鮭漁であった。その後、それに毛皮の収獲が加わった。彼らは競争に勝つことが出来た。一連の大企業家、ナデツキイ、ガリチャニン、アブシャリモフ、グリゴレンコ、ルベンシュテイン、ミレル、ルマルチュク兄弟、ベイネルマン、ズバレフ、

シチフマンとの。しかし、リューリ兄弟の相互関係が、チームとして働くことの能力が大きな成功の基であった。実際において、露日戦争の開始時から、仕事は止まった。日本人はニコラエフスクを封鎖した、外国船の入港を遮断した。狐のための全ての必需品と魚の加工品をリューリ達は外国から運んでいた。当時、アメリカと仕事において良好な関係を持っていたメイエルは自分自身がヨーロッパに行くことにした。そして、必要な装備を買うとして。チャーターした船で封鎖を破ろうと目論んでいた。

ロシア・アジア銀行で無制限のクレジットを取り付け、彼は旅に出た。企業家は孤立していると思えなかった。アメリカは以前は喜んで必要な物を供給していた、外国の市場へ魚を輸送するための。今では日本を支持し、リューリに耳を貸す者はいなかった。ドイツの企業家は彼のアイデアに賛同した。しかし、彼らを危険が尻込みさせた、この遠征が味わうかも知れない。当時、メイエル・リューリは大西洋を経てニューヨークへ向かった。その後、サンフランシスコへ。そこでならば、彼の計画を容易に実現できると説明していた。交渉の幾つかの不成功の試みの後、彼は退役海軍将校のノルウエー人と出会った。彼は自分の船を所有し、チャーター輸送業に従事していた。漁業家の意向の真剣さを疑いなく信用してくれたのは驚きであった。彼らは船室の床に大きな地図を開き、詳細に計画を立てた、経路と封鎖の突破に。船長はリューリに自分自身も船の一隻に乗って向かうことを提案した。ためらうことなく同意した。霧が船を隠してくれ、海岸に沿って進むことを提案し、平底の船に乗って進むことを提案した。その船ならばエンジンを掛けることなく浅瀬を進むことが出来る。彼は2隻のスクナー船以外に一隻の蒸気船を手に入れることを要求した。

航程は恙ないものであった。危険地帯に到着し、リューリは先頭の船に移り、水先案内人として、蒸気船は後ろを進んだ。その船は捕縛され、日本に連れて行かれた。そこで、戦利品として売却された。スクナー船は大量の商品を運んでいた、この投機的な事業を正当化するために。メイエル・リューリは英雄となった、会社リューリ兄弟に財政的成功をもたらした。直に会社は産業の皇帝となった。会社は魚の狐と塩漬け、イクラの処理も行った。会社の基本的な漁労はアムールの下流域と北サハリンを占めるようになった。後になり、会社はカムチャッカで鮭、蟹の缶詰作業に従事した。会社「リューリ兄弟」は太平洋艦隊の配下にあった。同時に、彼らは石炭の採掘と米の収穫にも従事した。後になり、オホーツクとシベリアでの金の利権を獲得した。同じく、ウラジオストク付近で魚を捕まえた。オハで石油産地の探査も行った。満州から日本へ大豆の輸出も実現した。後になり、リューリの会社はウラジオストクに本部を持ち、極東の多くの町に支所を開いた。ニコラエフスク・ナ・アムール、函館、東京、横浜、ハルピン、ムクデン、大連、上海。同じく、モスクワとロンドンに代表部を。

会社「リューリ兄弟」の歴史を、著名な会社「イワン・スタフェーフとコ」とのパートナー関係の言及で補足してはならない。この会社はモスクワとサンクトペテルブルグに本部を持った大会社であった、露米銀行に大きな影響を持っていた。最初は、スタフェーフの会社は最も有名なリューリの漁業会社を手に入れることを試みていた。これが失敗に終わった時、彼らは共同することを提案し、そのような部門の拡張に参加した、金と石炭の採掘、カムチャッカとオホーツクその他での漁業の拡大。スタフェーフとリューリの共同活動は1915年頃に始まった、1920年代まで続いた。

当時、1917年の事件が何を引き起こすか誰も予想できなかった。リューリは家族全員を連れて、ペテログラードに向かった。国内戦争は家族をチタに留め、リューリはウラジオストクに向かった。そこで家族の主人はカンガウス村を買った、不安な時を生き延びるために。ニジネアムールでの惨劇の知らせを彼らは日本で、横浜で知った。リューリは直ぐにニコラエフスクに出発した、親類の運命を知るために。冬の日々、ニコラエフスクでは彼らの大家族の内の6人が亡くなった、特に、大好きだった弟アブラム、同じく多数の知人や友人達。

赤色パルチザンによる犠牲者の中に、大漁業家であるパベル・アブシャルモフとベニアミン・ヤコブレビッチ・ミレルがいた。

悲劇にもかかわらず、リューリはロシアでの仕事をやってのけた。1922年8月23日、ニコラエフスク・ナ・アムールの全権会議マイエル・モイセービッチ・リューリを自分たちの代表に選出した。彼は市民の生活の維持に関する全ての手段を講じた、日本の占領軍との交渉もした、同胞人の生活の軽減のために。自分の経歴のこのページを、彼は非常に注目するものと見なした。長くはないが指導した町、そこで彼は生まれ、成長し、働いた。1922年10月3日、リューリはニジネアムールの執行権力の全てを、極東共和国代表のデビヤトコフに渡した。そして、再び家族のいる日本に戻った。家族は函館に住んでいた。

ユダ・ロマノビッチ・ルベンシテインが日本に定住した。旧友でリューリの妻側の親類。ニジネアムールの他の大企業家達も日本や中国に避難所を見つけていた。金鉱山の所有者であるアブラム・モイセービッチ・ナデツキイは、ニコラエフスク・ナ・アムールでの惨事の後、全ての財産を失い、函館に住んだ。ルマルチュク兄弟、パベル・ヤコブレビッチとエブセイ・ヤコブレビッチ（1875年5月1日、沿海州ー1945年後）は上海に移住した。ボリス・サモイロビッチ・ベイネルマン（1876年5月2日、ニコラエフスク・ナ・アムールー1943年後）は上海と日本に住んだ。

ネップ（ソビエトの新経済政策 *）時、リューリは会社「ダリモレ・プロダクト」を創設し、その最初の社長になった。1925年以降、ソビエト権力はカムチャッカ、サハリンとアムールでのリューリの漁業を禁止した。1930年代初めに、彼に知らせがあった、ウラジオストクで、彼の会社の主管理人ミハイル・アエクシンと会社の代表ヨシフ・ファインベルグが逮捕されたとの。彼らをスパイとして断罪した。日本との関係の証拠として、リューリのメモが提示された。企業家の何度にもわたる抗議、日本にいるソビエト大使への彼の訴えは目的を達成しなかった。ファインベルグと若干の指導的同僚達を銃殺した。アレクシンにも厳しい判決をした。が、その後、判決を懲役10年に変更した。ついでながら、ミハイル・セルゲービッチ・アレクシンー日本語に堪能であったーは函館に屢々やって来た。そこで、漁業に関する物資などを集めた。

相変わらずの失敗はリューリを打ち負かすことはなかった。彼は日本で企業活動を続けた。函館にある彼の家はたまり場の一つであった、その周りにロシアからの脱出者達が集まった。マイエル・モイセービッチ・リューリはロシア語の素晴らしい図書館を持っていた。

1937年6月、リューリは妻を葬った。彼女は50歳で亡くなった、アメリカに移住して直ぐに。彼はアメリカ市民となった、自分の子供達からだいぶ遅く来て：アレクサン

ドラはニコラエフスク・ナ・アムールで1903年に生まれた、ロベルトは日本で1906年に生まれた、エリはニコラエフスク・ナ・アムールで1909年1月20日に生まれた。戦後、リューリは日本に戻ってきた、妻の墓から離れていたくなかった。彼は自分のビジネスを立ち上げた。1954年7月5日に亡くなった。彼を横浜の外人墓地に、妻の脇に埋葬した。

残念ながら、リューリは何の追想記も残していなかった、漁業に関する記録帳以外は。

息子のロベルトが思い出していた、「彼と出会った全ての人が魅力を感じない男であった。私の父は若くて同時に年配者であった。沢山の人たちが彼の助言や意見を求めた。自分の人生において、父は数え切れないほどの友人を持っていた、外国人や日本人も入れて。何時だったか、私はある大使館のレセプションで、父の友人の一人と出会った、日本の大使を退職した。彼は私に話した、彼は今でも父を恋しがっていると、本当に忘れられない人である。」

漁業家の娘であるエリ・メイエロブナ・リューリ・ビズベルは幼児期を函館で過ごした。彼女が11歳の時、初めて家族の悲劇を聞いた。永久に記憶に留めた、彼女の両親がどのような不幸を味わったかを。彼女は1926年に日本でカナダアカデミーを修了し、その後、1927年から1929年、パークレーのカルフォルニア大学で勉強した。その後、1931年、ソルボンヌでフランス語の教員の免許を得た。この時に、彼女は結婚した、アメリカ人の教授であるジョン・エンブリと。興味が湧く、日本語での会話が出来ていた彼女は日本における人類学の研究で夫の助けることが出来たことは。特に価値のあるものは彼女の観察であった、日本女性に関する。日本女性達は彼女の夫より喜んで彼女と話をした。だいたい後年になって、人類学の学者達はエラの観察を高く評価した。彼らは個別に本を出版した。エラは大変な悲劇を耐え抜いた、夫のエンブリと一人娘が自動車事故で亡くなった時に。1954年彼女はフレデリック・ビズベルと結婚した。ハワイ大学で、エラはフランス語の講義をした、その後、ロシア語と文学を。1954年、この大学でのロシアプログラムの創設者となった。年金者になっても、エラはロシア語から英語への幾つかの翻訳をした、ハワイを訪問したロシア人旅行家の作品を。その後、翻訳活動は彼女の仕事を助けた、故郷であるニコラエフスク・ナ・アムールについての資料に関しての。

ニコラエフスク・ナ・アムールに献げる翻訳の仕事を行い、エラは彼の同僚、ジョン・ステファンの相談に乗っていた。彼は当時、ロシアの極東の歴史に関する本を書いていた。地方の歴史に熟知し、ロシアのファシスト或いはサハリンとクリール諸島の歴史のような、困難なテーマの研究の創立者である、ステファンは、ニコラエフスクの歴史には少なくない空白があることを理解していた。彼と一緒に、エラは1979年のハバロフスクにおける第14回国際会議に参加した。その時、彼女には古里のニコラエフスクに立ち寄る機会があった。しかし、彼女は権力による禁止を犯すことを恐れた。直に、エラはグトマンの本を翻訳し出版した、多数の序文とコメント、挿絵を持った。

カムチャッカからの途中で

・・・白軍の沿海州は最後の日を迎えてつあつた。白軍の撤退の海軍部隊を、シベリア艦隊指揮官である海軍少将スタルクが指揮していた。2つの計画があつた。最初の計画に賛同し、スタルクの艦隊はポシェットに立ち寄ることが控えていた、部隊を乗せ、ペテロパブロフスク・カムチャッカに送ることが。著名なカムチャッカの社会活動家プリンが後になって思い出していた、「スタルク將軍は一度ならず私と、北部、その可能性について話し合つた。明らかにした、後方基地の設立のためには仕事を変える必要があると、それは解放運動に供給することが出来る。手中にある数値を基に、私は北部の大きな可能性を証明した、もしその経済を必要な水準にするならば。その時、將軍閣下は予想を話した、そこへ技術者達を移送する必要があると、ドック、砕氷船の建造のための機械類を、食糧倉庫その他を建築する。が、別れ際に言った：

－考慮に入れておくこと、直に君に3万人が割り当てられるようになることを。

私には明かであつた、ウラジオストクからの陸軍と海軍が北部に行かなければならないことが。」

メルクローフスタルクが日本に特別に派遣した一が報告した、影響ある日本人のグループとの自分の関係を利用することが期待できると、カムチャッカへの後退とカムチャッカ政府の創設への日本の更なる援助を保証するために。

この計画の欠点は、食糧と金銭の制限であつた、同じく航海の困難。スタルクが書いた「この計画は、海における我々の一時的な優勢のもとであるにもかかわらず、さらには、ペトロパブロフスクーナーカムチャッカに、未だ我々の守備隊がいるし、船がある、一度ならずの日本の政治の証明された変わりやすいことは全くばかげたこととは思われない。が、信頼度は低かつた。この計画は、政治的援助以外に、大金の支出を要求した。分かつてはいない、明確な保証なしに、短期間に大金を我々に貸し付ける人々をどこから見つけることが出来るかが。」

日本にいる海軍の代理人ボリス・ペトロビッチ・ドゥダロフ海軍少将に特別な期待を掛けた。ボリス・ペトロビッチが保証した、アメリカで艦隊は「期待できる避難場を見つけることが出来る、援助さえ。が、どんな場合においても政治性のない、純粹に慈善的な。」しかし、弱い武装の艦船ではアメリカまでは到達できなかった。

別の計画は、南方へ向かい、中国の好意に身を委ねることであつた。海軍を退役し陸に上がつていたディトリフス將軍が提案した、何よりもまず、ゲンゼン(＝ボンサン 元山？

＊) 港に海から人を送ることを、更なる経路は海軍の希望に従つて決める。この計画を最優先した。

C. B. (? ＊) が思い出していた、「我々は不平を言うことが出来ない、我々を案内しなかつたことに。湾の岸は見送り人で一杯であつた。彼らの内の一人が我々に良い航海を願つてくれた、長くて辛いための後で残留した、残ることを決めた、その後で、デトリクスが説明したように、避難することを決めたものを彼は何も励まさない、彼らに何も約束しない。岸には多数の人々がいた、我々をようやく振り払つて喜んでる者、赤色の大なる豊かな恵みを待ち望んでいる者。蒸気船は別れの汽笛を出しながら、去つて行つた。文字通り、我々に別れの挨拶を送つた海軍参謀部で翻つているロシア国旗が、全ウラジオストクで唯一の旗。それを忘れた。多分、それを赤軍が引きずり下ろす・・・」

カムチャッカへの撤退は敵側から何の圧力もなく行われた、スタルクの何の指示もなく。

そこで、赤軍によるウラジオストク占領の情報を得るやいなや、ロシア北東での白軍の残存部隊の指導者－アヤン（オホーツク海沿岸、ハバロフスクの北東 ＊）にいるペペリャエフ将軍、オホーツクにいるソコロフ、ナヤハン（カムチャッカ半島の西側付け根の海岸付近 ＊）にいるボチカレフ－とのペテロパブロフスク無線局の助けによって最後の連絡を取る試みに、将軍イワノフームムジエフの事務部長プリンが着手した、彼らの意向と計画を説明するために。全ての試みは失敗に終わった：無線局の一つも呼び出しに応じなかった。カムチャッカに居る者達は自主に委された、殆ど船も通信もないままに残された。

カムチャッカを維持せよとの命令の不在は十分な基礎となった、全ての陸軍と海軍の指揮官、カムチャッカ地区の海で作戦行動している、海軍大佐ボリス・パブロビッチ・イリンと将軍ピョートル・ミハイロビッチ・イワノフームムジエフは半島から撤退し始めた、彼らの指示下にある彼らの支持者達の船に乗って。

1922年11月2日、7時45分、明るい朝に、港外投錨地に停泊していたマグニト号のラッパ手が「大集合」のラッパを鳴らした。「静かに響き渡った、が当直長の声ははっきりとした声：「8時5分前、大尉殿」 ラッパ手が唇にマウスピースを付け、ラッパを暖める、ミスをしないうちに。「国旗と船首旗へ！」 ミーシャ（当直将校ミハイル・ニキフォロフ）の威勢の良い命令が響き渡る。全ての視線が船尾に向けられた。「祖国旗の最後の掲揚、カムチャッカの海で、ロシアの海で・・・最後の、－全員の頭に不本意な思い、－我々は名誉あるアンドレーフ旗のもとの最後の船、ロシアの海での、祖国で・・・」。

岸から戻り、甲板に最後のボートを引き上げた、個々の海軍上陸中隊を砲艦に送り届けた。同じく、ペテロパブロフスク守備隊の戦闘部隊を。今や、祖国の地との彼らの関係は永久に破断された。昼の4時、マグニト号から砲声が鳴り響いた。撤退の信号、アバチンスク湾全体に別れの礼砲が鳴り響いた。湾を取り巻いている山々からコダマが帰ってきた。蒸気船シサン号一船に1100人が乗っていた－は約140人の乗客が乗っているシサン号に加わり、その警護下で太平洋に出港した。全員が甲板に集合した、遠ざかっていく町が夕方の靄の中に段々と沈んでいくのを見るために。

退却する部隊の使い古した武器の一部は船から捨てられた：後になり、コブシの岸壁で、引き金のないベルダン式ライフル銃が10丁引き上げられた。地方紙の報道に寄れば、11月2日の昼の4時頃、「確かに全政府役人、その部隊、いくらかの市民が蒸気船シサン号とマグニト号に乗った。碇を揚げ湾を出て、ペテロパブロフスクから南に向けて出て行った。」

これらの船は1922年11月8日に、函館に到着した。目撃者の内の一人が思い出していた、「・・・我々は函館に留まった、我々の将来の運命の決定を待ちながら。マグニト号は元山に向かって出航して行った。海軍大佐イリーンと一緒に、シタルク将軍の艦隊に加わるために。プリンは東京に向かった、我々の運命を説明するために、上海への我々の将来の移動の手段の調達のために。もし、日本に我々を住まわせないならば。岸からの情報はなかった、300人以上が鉄の箱の中で生活した、シサン号で船倉と呼んでいた、貧弱な共同炊事をしながら。定期的に、日本人が我々に美味しいご馳走を運んできた、子供達には牛乳を、希に自分の責任で岸に連れて行った、レストランで歓待した、湯女川温泉に連れて行った。そして再び蒸気船に戻してくれた。我々に対する日本人の対応は心の

こもるものであった。が、分かっていた、誰も法を破り、我々を岸への外出を許すことが出来ないことを。オホーツクから追い出された新しい60人から70人の移民がモロロンからやって来た。我々に合流した。ウラジオストクに行きたいものには、その邪魔をしなかった。彼らには書類と一人当たり50円から60円の金銭を供給した。平和裏にソビエトの天国へ行かせた。船倉では、やりきれない退屈さが支配していた。

蒸気船シサン号の乗組員はボリシェビキとその支持者達であった、日本の警察によって陸から船に戻された。次の日、自発艦隊の代理人ダニチとレベデフ領事は日本政府に伝えた、シサン号は35年も経ており、根本的修理無しでは海洋に出航することは出来ない。プリンによる奔走とロシア帝国大使館の助けによる東京から送られた金銭で、避難民達は日本の蒸気船第2近畿丸を借りることが出来た。船に200人の乗客を乗せ、この船は直ぐに上海へ向かった。20日間の航海の後、1922年12月22日にそこへ到着した。長い苦難と4日間にもわたる手続きの後、北からの脱出者達は、中国の港に上陸した。ロシアからの移民として苦勞を味わうことが始まった。

1922年11月26日、小樽に蒸気船トムスク丸が到着した、ソヴリンスク船長の指揮下で、10月18日にオホーツクを出港して。船には62人の乗客が乗っていた。トムスク号は1月以上港に停泊した。日本において船員と乗客は事件に関して意見を異にしていた。船員達がストライキをしたとき、乗客は船を捨てるしかなかった。乗組員はこれを利用して、ウラジオストクへ出港した。そこには1922年11月21日に到着した。遅れて、同じことをシサン号がした(カシキン船長)。日本人はロシア人の揉め事に介入しなかった。蒸気船に退去することを許した。

ウラジオストクを放棄したシベリア艦隊の全ての船はセイシン(清津*)に集結した。ここで彼らに、1922年11月14日付けの、フンチュン(?)で書かれたデイトリフスの回状が渡された; 事実がやって来た、1918年から1922年の戦闘の場で我々は敗北した、戦いの以前の特徴の局面で。他国の地に抑留された。ありふれた避難民の状況に陥った。これが現実である、実際において、我々の現代の初めの状況は、我々の将来の欲求のための、大国ロシアを解放し育成すること。組織の中の各自は、この現実を受け入れなければならないし、その時のためにより誠実に認めなければならない。この現実を組織中の各自は受け入れ、知らなければならない、心から、この時点のために、ここから将来に出る。」

1923年5月23日はシベリア艦隊にとって歴史的な日となった。オロンガポ(フィリピンのルソン島の町*)に、アメリカの軍用輸送船メリト号が到着した。この船はロシアの水兵達をアメリカへ連れて行かなければならなかった。夕方、船乗り達は元気に検討した、目前となった旅行を、そこかしこで冗談が聞こえた、誰かが服の修理を目論んでいた。次の日、スタルクが行進用制服を着るよう命令を出し、自身も儀式用制服を着た。アメリカ船へ乗り移る前に、彼は乗組員を整列させた。家族を入れて536人いた。スタルクが話した、「1万人の移民達、特にロシア人、アメリカへの蒸気船の切符を得るために必要な金銭がある、君から金は取らない。君達は常にこの事を覚えておかなければならない、アメリカ人に感謝をしなければならない。唯一の我々の支払いとなる、船において非の打ち所がなく熱心な仕事の遂行が、船の船長が指示する。この際、君達は知らなければならない、船における君達の振るまいによって君達は推薦を得ると言うことを、それに

よってアメリカへ到達する。」厳しい航路中、飲酒が禁止され、個人の武器は指揮官に引き渡された。

シベリア艦隊の活動を締めくくる最後の書類となったのは、1923年3月23日付けの命令第352号である。それで、スタルクは航海の最後の月を総括した：「悔しい民族的自尊心の辛い感情を持って、個人の結束とエネルギーに援助を呼びかけて、我々は気が変になった・・・ 未来を決して忘れないように私は呼びかけ、君達はロシア人であることを、君達の援助は君達がいなくなったロシアにはズッと必要であることを。」 運命は船乗り達を様々な国や港へばらまいた。

日本への永住：移民

日本へのロシア人の移民はそれほど多くはなかった。初期には、数百人を超えることはなかった。この国において、移民達は国と深刻な問題を起こすことはなかった。他の国では問題が起こることが希では無かったのだが。ロシアの沿岸に近接していることが、気候の類似性が、避難民の一部がここに住むことを良しとさせた。

1920年、コルチャック反革命軍は日本へ大量の難民として移動した。函館には沿海州からのロシア人が住み込んだ。彼らは漁業に従事することに成功した。ここに、会社「ニチロ」のロシア人の元従業員達が残り、ロシアの所で賃貸された日本の漁区で働いた。仕事無しの者達は困窮した。

1924年、函館には約50人のロシア人達が暮らしていた。ここでのロシア人移民の中で有名な活動者はアレクサンドル・アレクセービッチ・バノフスキーであった。彼は哲学、宗教、日本の古代文学作品に興味があった。町の郊外には、ロシアの古式派が住んだ。

ロシアからの脱出者の一人に、元流刑囚のドミトリイ・ニコラエビッチ・シベツがいた。1920年に南サハリンから函館に移り、サハリンでは毛皮商をし、アレクサンドロフスクに店を持っていた。日本では彼は毛皮の商いとその製品の商売を続けた。シベツは屢々東京に出かけた。そこで函館の製品を商った。手に入れた金銭で首都で商品を買入れ、函館に戻ってきた。あるとき、彼は汽車に乗ったが、家に戻らなかった。彼の親類達はそれ以上彼に会うことは無かった。シベツは東京近郊の鉄道線路上で見つかった。警察は説明した、彼は鉄道から落下したものであると。これについては親類達は疑いを持った、ドミトリイ・ニコラエビッチはタバコを吸わなかった、彼はデッキに出る理由がなかった。彼はアルコールに興味が無かった。私物だけが家族の元に戻った、事故の時の持っていたであろう金銭は見つからなかった。親類達は予想している、シベツは道中に強盗に襲われ、遺体が投げ捨てられたと。時は戦時前であった。誰も外国人の惨事を究明しようとはしなかった。

1925年、旭川にスタルヒン一家がやって来た、10歳の息子ビクトルも一緒に。後になり、この息子は日本の有名な野球選手となった。旭川に住んでいるロシア人移民の家族と日本人女性に、1921年、未来の女優である古賀梅子が生まれた。彼女は芸名筑紫美主子（つくしみすこ）で活躍した。後になり、劇団一座を組織し、幾つかの有名となっ

た演劇を演出した。

1920年代初め、東京では元ロシア帝国の大使館が仕事を続けた、アブリコゾフが主導した。国内戦時、日本にけるロシア外交団は基本的に日出づる国とコルチャック將軍政府との相互関係に従事した、コルチャック政府のために武器や設備を購入した。戦争終了時からは彼らの主課題はロシア人移民の整備となった。彼らは中国やアメリカへ去ることを助けたり、日本に住居を見つけた。少しして、外交団自身が日本を脱出するようになった。

1918年、東京に初めての移民団の組織が作られた、日本におけるロシア協会。協会の会長として、軍事エージェント陸軍大佐オシポフを選出した、書記にセラピニンがなった。基本的にロシア協会は慈善運動に従事した、必要とする人々を助けた。このようにして、1920年夏までには、協会の会員には2万円を分配した。

日本の北部の北海道に移民協会があった。そこで特別な活動をホルバト（？ ＊）の代表が發揮した。彼らの内の一人が、函館の住人でコジマの元将校ロデオノビッチ・スベレフであった、彼は喫茶店「ボルガ」を持っていた。

1928年、ロシアからの脱出者達は白軍移民のロシア国民協会のもとで団結した。次の年に、1929年2月15日、北海道に、ロシア移民相互援助協会が創られた。本部の代表としてパタポフを、書記としてコレジャトコフを選出した、監査委員会にドゥダエフ、レオンチエフ、スタルヒンが入った。全会員数は20名であった。協会の常任書記にドミトリイ・フェドロビッチ・コレジャトコフがなった。1926年に、ハルピンから北海道にやって来て、旭川町に住んだ。彼は多くのロシア人と同じように行商に従事した。彼の友人が書いていた、「彼は日本の権力に反共主義者として良く知られていた。ロシア問題の権威者であった。注目しなければならない、ロシア国民協会（PHO）の代表として、コレジャトコフはいつも正教会の様々な管轄権の合同を志向した、長へのメモやメッセージで、指導的なロシア人組織の密接な関係を志向した、我々の間での不一致と争いを許しがたいものと見なして。

ドミトリイ・フェドロビッチは南サハリンや日本に逃げてきたロシア人の運命に積極的な活動をした。彼は彼らを上海へ移送する手段を見つけていた、追放から救出する、当時ソ連邦が強いていた。「シアの生活」が書いていた、「これら逃亡者（四人さえ含めて）は長い間日本政府の保護下にあった。しかし、ハッサン湖とハルビンゴールでの軍事衝突（ノモンハン事件と張鼓峰事件 ＊）後、日本人の捕虜との交換のために、彼らをソ連邦に帰すようになった。この後直に、逃亡者の流れは止まった。

若干のロシア人家族は釧路の町を好んだ、北海道の西部（間違い東部 ＊）にある。そこには日本人の漁師達が住んでおり、太平洋沿岸で漁業を営んでいた。これ故、ロシア人の商売はここで基本的に調達をした。パンチュフィン一家はここに店「ハルピン」を持っていた。ウシュコフ一家はドゥドレフ一家と同じように雑貨を商っていた。特に成功した商人はオリガ・アレクセーブナ・ベロノゴバであった（旧姓はシェシュコバ）。

目撃者の内の一人が書いていた、「往年は、行商は極めて儲かるものであった。近年は、その収入は極めて少なくなった。近いうちには、この商売はロシア人にはあがったりにしろ。次のように説明される、商売人が極めて増大した、ロシア人や中国人以外に日本人達も行商に従事するようになって来ている。喧しくない日本人や中国人との競争はロシア

人は出来ない。これ以外に、最近では、辺鄙な場所にさえ、洋服や和服を取り扱う店が出現した。購入者にとって、行商人の所でそれを買う必要性を避けられない。行商人が少なくなった結果、ロシア人商人の材料の質は次第に悪くなっていった。商売以外の他の生活手段を見つけることは、日本では極めて難しい。国や公共機関への勤めはない。学校で、若干の移民達がロシア語の先生として勤めている。

地元の企業について語ると、それらに勤務するためには、英語と日本語を良く知っていることが要求される、最低それらの内の片方を。速記や、タイプライターを、会計さえ。技術教育があることさえ。しかし、これは希である。影響ある知人や後援を獲得する必要がある。これ故、少数の者達が個人的な勤め口就いている、主として、女性は速記やタイプスト・・・」

1945年から1950年まで、コレジャトフは釧路で、ベロノゴフの商社の代理人であった。その後、横浜に移った、会社の財産の管理のために。ここで、彼は同じく社会活動に取り組んだ、ロシア国民協会の発起人委員及び代表（1953年から）として。

1920年代末には、日本におけるロシア移民協会の合同委員会を基礎として、日本におけるロシア人の団結に関する新しい試みが採択された。ミロノフが主管したこの組織は、当時日本にあった全ての移民の編成を取り入れた。日本の北部の移民協会、関西の移民協会、将軍ディトリフス、ホルバトとセメノフの代表のソビエト。ホルバトのスポークスマンが積極的な活動を行った。北海道で、函館のズベレフがそれになった、町毎に神戸、大阪、京都－ウラジオストクの有志艦隊の元事務所管理人レオニド・フェドロビッチ・デ・コンパニオン、彼は神戸に住んでいた。ロシア元軍人同盟の代表が委員会に入った。

君主主義者同盟とキリロフ・グループは自主的に仕事を続けた。1931年、日本にロシア国民協会が設立された。その年に、東京のロシア国民クラブが組織的な役割を発揮し、大きな3階建ての別荘を借用した。クラブの開設に当たって、大事な客、日本人の内一人はロシア人に祖国への早急な帰還を希望した。基本的に、日本における全ての移民の組織は慈善運動に従事していた。

立法の関係において、ロシア人は他の外国人と対等であった。相違は実際にはあった、自分の外交官と話し合うことが出来たが、1925年以降はそのような可能性は奪われたということで。問題となった、日本人の通訳がロシア語を十分に会得していないことが。これが原因の一つとなった、なぜロシア人が援助を求めて当局への働きかけを急がなかったかの。移民の大半は国際連盟のパスポートを持っていた、それはその年に公布された。が、当局は期限の終了日を見て見ぬふりをした。

日本の東京はロシア移民を助けなかった。が、彼らの活動の邪魔をしなかった。日本へのロシア人の存在は当局に邪魔ではなかった。移民達は日本人には大変なときにだけ向き合った。基本的に、許可を得ること、問い合わせ、その他の場合に。時折、例外的な状況下で衝突することがあった、ロシア人が裁判に証人や返答者として参加するときに。日本の住民は大多数は移民に対して平静を維持した、ロシア人に対して敵意を示す人と出会うことがあったにもかかわらず。他の外国人に対しては彼らは大きな好感のもとにあった、彼らは一緒にいることに努力をしていた。

殆どのロシア人－90%以上の－は日本で行商に従事した。基本的にラシヤや衣服や金具製品を商った。この時期、日本人は洋服に興味を持っていた、民族服より最良をしてい

た。これ故、服や半製品の商売は悪くない収入をもたらした。切り売りの特別な用語も出現した、即ち、生地を切り売りする行商人が。それらは洋服や和服の縫製に利用された。

タタール人が行商の初めであった。その後、シベリア人が従事した。後に引き続いたのは満州からのロシア人達であった。クレジットで購入した物品を包みや鞆に入れて、数量に応じて、毎日町や村を乗り回した、自分の商品を提示しながら。基本的に、彼らは施設、会社、工場を訪問した。何人かの商人達は時と共に一定の顧客を獲得した。長い間、自転車に乗って営業所や銀行を訪れた、彼らを良く知っている。時折、彼らは東京や大阪へ商品のために出かけた。そこにはちょっとした商売関係があった。行商人には休日はなかった、商売を停止するのは悪天候か祝日の時であった、日本人と同じくロシア人の。特にクリスマスとパスハ。その時には、ロシア人は東京か神戸に基本的に行った。そこには大きな団体があった。目撃者が書いていた、切り売り行商人は良く知っていた、何処の誰の所を訪れば良いのかを。村ではどんな出来事が予定されているか、朝鮮人に、鉄道建設で土木作業に従事している、仕事着が要求されていた。行商人の仕事は極めて大変であった、特に夏の極暑には、極暑と高い湿気のもとで自転車で何キロも乗らなければならなかった。切り売り商人達の中で、次のような歌がはやった：

「日本の国、島々
北海道から対馬まで・・・
百マイルも歩いた、
埃を吸い込みながら、我々は歩いた。」

内容は単語が分からなくともはっきりしている：埃を吸いながら、行商人は日本を何マイルも歩き続けなければならない・・・ 購入者の疑いを克服するために、購入者を納得させるために、それなりの責任が要求された。言語の知識の不十分さから、これを行うことはそう簡単では無かった。実際において、いくらかは洋式の外見が助けてくれた、日本人の興味を引き立て、信頼を引き起こした。

日本人の商人は、敬意を持って接してくれた、ロシア人の切り売り行商人の大変な仕事に。彼らに敬意を払った、成功と機知に対して。ロシア人が日本の平民と仲良くなることが出来たのには、驚きである。「新しい朝焼け」が書いていた、「見るのは面白い、最新の日本の喜劇を演出している日本の小劇場で、ロシア人の切り売り行商人が場面に出演しているのを、「地域の色調」(? *)の付加のために。脚本の主題は鉄道の駅における不幸である、ある昔気質の老人の。この老人は現代生活に全く馴染むことが出来ない、即ち、簡単に言えば、鉄道に。場面に真実性を付加するために、日本の僻地の小さな鉄道駅に特徴的な人々の中に、オーバーと長靴を履いた髭ずらの人物がいる、商品の包みと鉄製の物差しを持って。

最初は仕事は非常に儲かっていた。多くのものは使用人を抱えることが出来ていた。特に成功したものは、自前の店を持つようになった。その店の売り子には妻や母になった。時と共に、中国人や日本人がロシア人を押しのけるようになって行った。彼らは余り厳しくなく、極めて安くにもした。他の面では、町に、その後、僻地に店を出すようになった、行商人と同じような品目を取りそろえた。

ロシア人の移民達は公共外食制度の下で働いた、パン類の準備と販売に従事して。当時

は、日本にはパン類の食料品店は非常に少なかった：全国で10軒から15軒、当時日本ではパンの需要は殆ど無かった。パンに関する興味は、第2次世界戦争終了後によりやく持ち上がった。しかし、日本の幾つかのレストランで、第2次世界戦争前に既にピロシキが知られていた。これは疑いなく、ロシア料理の影響の現れであった。実際において、日本式のピロシキは、移民達が祖国で食していたものとは大分異なっていた。ピロシキを焼いたり炒めて調理していたロシアと違って、日本では、いつもピロシキを焼いていた。日本の伝統と好みに影響して、ピロシキの詰め物が変わった。最も違ったロシアの変種として、挽肉、野菜、果物。ロシアレストランは優先的に日本式へ移った、タマネギ入りの挽肉、春雨（大豆の粉から作ったバーミセリ（うどんの一種 *））。現代の研究者達は結論を出している、日本にあるロシアレストランは持ちこたえることは出来なかった、もしレストランが日本人の好みに同流することが出来なければ、調味料も、ピロシキも、他の料理も。

日本の国家施設で仕事に就けることは、ロシア人には実質的に不可能であった。そこでは同国人を雇うことが優先された。移民の圧倒的多数の日本語はというと、まだまだ不十分のところが多かった。民間企業に落ち着くためには、同じく、英語や日本語の知識を要求された、同じく確りした推薦も。その際には、技術上の専門性を持っていることが好まれた。この際での、大きな成功はロシア人女性がなした、彼女らは速記や秘書として活動の場を得た。彼女らは給仕、売り子、製帽工、その他として働いた。裕福な日本人家庭にロシア人家庭教師は喜んで迎えられた。この分野ではヨーロッパ人女性は権威があった。そのような職種に就いているロシア人は日本人より極めて安い賃金を得ていた。

若干の者は学校でロシア語の教師としての仕事に就いた。が、それほど多くはなかった。ロシアに対する大きな興味は日本人にはなかった、もしそうだったとしても、実入りはなかった、ロシア語の勉強の難しさに比較して。ロシア語は、基本的に軍学校で教授した。子供の教育にロシア人移民達は大きな問題を抱えていた。大人達は額に汗して働かざるを得ないので、子供の多くは自由にされた。幾つかの家族では知り合いに子供達の面倒を見てもらった。しかし、屢々ほったらかしにされた。ロシア人学校は殆ど無かった。外国人学校に子供を預けることを選んだ。そこでは外国語を教育していた。特にこれは少女に関係していた。ロシア人は考えていた、それ相応の教育を受けて、自分たちの娘が外国人と結婚することを。

日本列島に、ロシア人が増えて行くにつれて、正教は新しい力を獲得した。日本での確りとした認知を得て。長崎、函館、大阪、神戸、その他に正教会があった。そこでの礼拝は基本的に日本語で行われた。合唱は日本人達が行った。礼拝を教会のスラブ語で行いたいという熱狂者も時折現れた。しかし、これは極めて希なことであった。ロシア人社会に大きな損失をもたらしたのは、1923年の地震（関東大震災 *）であった。地震は移民者に多くの犠牲者をもたらしただけでなく、祖国と人との連絡も閉ざした。他面では、自然災害は多くのロシア人に祖国への帰還を促した、それを日本政府は後押しした。

多くの問題にも関わらず、ロシア人の一部分は日本に安住していった。彼らの生活習慣は多くの場合において、日本式となっていた。移民の圧倒的多数は日本の家屋に住んだ。が、ロシア式に家具をそろえることを好んだ。ベット、椅子付きの机、角にイコン画。彼らは米を食した、魚付きの、生やマリネード漬の野菜付きの。時折、旅行をする必要が

あった。夜を過ごすのに、彼らは日本のホテルである旅館や温泉に泊まった。

ロシア人は日本と台湾を回った。彼らは日本の地理と文化の本当の理解者となった、細かいことまで知って、日本人自身が気づかないようなことまでを。残念ながら、移民者の中に、熱狂者はいなかった、見聞したことを書き留めておこうとする。

日本での6月から7月は、暑さで休みとなった。その時には、ロシア人は、「海に近い別荘に行ってわいわいすることを好んだ。ここで、比較的安い部屋を見つけることができた、町中よりもっと安い。

ロシア人の唯一の気晴らしはアメリカとヨーロッパからの映画であった。そのおかげで、彼らは英語を勉強することができた。海外のロシア人たちが最も親しんだ雑誌は、ハルピンの「ルベジ (=国境)」であった。そのページには、定期的に沢山の挿絵付きで、日本におけるロシア人団体の生活についての記事が紹介されていた。雑誌には、日本の新規のことについて一般的傾向を語っている沢山の広告が含まれていた。全てのロシア人の気運は待機状態であった。多くのロシア人たちは祖国への早期の帰還を夢見ていた。が、年を追うごとに、その期待は消えていった。

太平洋戦争の開始は、移民たちの状況に大変化をもたらした。日本の警察は外国人に目を向けた、特にロシアからの脱出者たちに。彼らにスパイの嫌疑をかけて。1939年1月に、南サハリンで日本人たちは検挙を続けざまに行った。2年後に、新しい検挙の波が起こった。1941年12月には、スパイの疑いで、126人の外国人が検挙された、その中にはロシア人移民も含まれていた。スパイの嫌疑での逮捕の事例は後になって、1943年4月と6月、1944年5月に繰り返された。このように、7人の移民が北海道と南サハリンで逮捕された。1942年、南サハリンで、商人プロスツェビッチを逮捕した。その後、東京に護送された。この時期に逮捕され、監獄で犠牲となった者の中に、ズベレフがいた。

ロシア人に対する他の弾圧手段の中に、日本国内の移動の制限と、軍事作戦や軍事産業のある特定のいくつかの町に住むことの禁止があった。貧乏な移民の困難な状況を利用して、日本の警察はロシア人を密告者として募った。この政治はロシア人移民の気持ちに影響を与えないわけはなかった。多くの者たちはソビエトのパスポートを得ることを請願するようになった。それは彼らを横暴からどうにか守ってくれることができた。大祖国戦争の状況の急変後とソビエト軍の西への移動につれて、ソビエト支持の雰囲気が増大していった。

ゲオルギイ・アレクサンドロビッチ・レンセンが1953年に函館に到着したとき、4人のロシア人移民に会った。日本人の家族持ちの2人の男性と2人の女性。彼らのうちの3人は日本の市民権を持っていた。特に、アナトリー・ニコラエビッチ・コロリョフは、第一次世界戦争の参加者であり、1917年6月に海軍の代理人の指揮下でアメリカへ派遣され、際立っていた。1919年夏、コルチャック将軍がポリシェビキに勝利するという期待が見え始め、アナトリー・ニコラエビッチはウラジオストクに戻った。ここで、彼を練習船「マンチューリ号」の船長に任命した。コルチャック政府の崩壊後、33才の水兵は日本へ去り、函館に住んだ。漁業捕鯨会社「日露」で簿記係として働いた。直に彼は日本人女性を妻とした。日本人の中で、彼は橋本さんとしてよく知られることとなった。レンセンの証言によると、コロリョフ・橋本は日本人に大いに尊敬された。北海道に何故

とどまっているか、というレンセンの質問に、彼は答えた：「何故かというと、ここはロシアと同じであるから・・・」

アルフレッド・デンバイ(弟 *)、彼の兄と妹

312頁

有名な旅行家アルセニエフ・カムチャッカの探検を行った一はデンバイ兄弟と親交があった。すなわち、兄弟は無料でカムチャッカに向かうアルセニエフに自分の船を割り当てた、彼が同行者と一緒にカムチャッカ川を遡上して行けるようにと。ソビエト政府を前にして、外国の会社とのカムチャッカにおける利権の問題が生じ、外国人との契約の締結を警告し、デンバイ兄弟と協力することを勧めた、彼らを大変良好に評価して。

デンバイの家族は少しショックを受けた、アリフレッドが遠縁との婚約を破棄して、マリア（マルシア）・クルプスカヤなる女性（1879年12月4日－1952年6月25日）と結婚すると決めたときに。この女性は自分の夫一船長一を捨てたばかりであった。口さがない人たちはささやきあった、予想外の恐怖が原因の一つであると、この女性の外見はアメリカの銀貨ドルに髪型が似ているとも。家族全員、特に長男が、この不釣り合いの結婚に反対したにもかかわらず、アリフレッドは自立し、うまくいった。それからの年に引き続いた不運を克服することで、マルシアはアリフレッドを助けた。デンバイ家の長男の肩にそれが降りかかることは少なくなかった。

デンバイ兄弟の活動の最後の証拠となったのは、クラマレンコの息子であるジョルシの回想記である。彼はデンバイの魚工場を訪れていた。カムチャッカの漁業は止まっていた、東シベリアにポリシェビキの権力が立ち上がったとき以降。1923年の日本の地震後に生じた巨大な津波によって取り返しの付かない損失を被った。実際、ちょうどよい時期にデンバイ兄弟はネップの終わりを感ぜ、日本の会社「三菱」に缶詰工場を売却することに成功した。それは直に国有化された。この企業で働いていた元将校であったウラジミール・ジガノフは新時代について、後になって回想していた：「当時極東の権力の座に座っていた、良心のかけらもなく、でたらめなことを行う分からず屋、状況を調べもしないで、漁師がどのようにダメになったかの。漁の終了に関して国家商業機関に指示を出した。漁民に支払うべき金額から、再び国によって導入された「*****税」を確保すること。全く考慮されることなく、税は年に一度であることを。総収入から税金をとった。半年過ぎていない、県革命委員会から税務職員がやってきた、不運な働き者に新税について伝える、その時漁師の誰かが、デンバイの元での気ままな暮らしを思い出した、そして答えていた：「忘れるな、同士！ この馬鹿な生活は決して君らに戻っては来ない！」

挙げ句の果てには、フランスの銀行が破産した。デンバイはそこに全資本を持っていた。アルフレッドは無一文となった、ましてや、マルシアは大変な浪費家であった、家計に振り向ける金銭は彼女の手から、水のように流れていった。しかし、函館の谷地村に、未だ家族の地主屋敷が残っていた。1920年代末に焼けたこの家は、価値の付けられない芸術作品であった、綺麗な庭園で囲まれていた。ここから、アリフレッド・ゲオルギエビッチはデンバイの全ての会社の輸入の仕事を管理した。この時、ジョージは仕事を止めることと

し、家族と一緒に英国に去った。

国内戦の終了後、アリフレッド・ゲオルギエビッチ・デンビは日本に残った。彼はイギリスの名誉領事となった、きわめて人気のある人物であった。親切で同情心の強い人物であり、彼はいつでも助け船を出した。1920年代末に、函館近傍を航行中のソビエトの船から、若者が逃げ出してきた、ソビエトロシアで辛酸な目に合っていた。特に、ブルジョアの出身のために、大学から彼を排除した。日本の漁師が逃亡者を収容し、警察に引き渡した。ソビエトの領事は日本側から若者を受け取り、彼を祖国に引き渡すために、都合の良い蒸気船を待った。彼を自由にせよというどんな説得も役に立たなかった。その時、デンビイが日本人の助けを得て、脱走させた。探索が止められるまで、彼は脱走者を家にかくまった、その後、書類と金銭を与えて、上海へ送り出した。

しかし、援助を示すことは決していつも成功するわけではない。ぼろぼろの小舟に乗って、ソビエトロシアから、21人が逃げてきた。日本のロシア民族協会は、バクレフスキイに委ねた「どうか、日本政府の決定の廃止を得て、逃亡者たちを必然的な死から助けることができるようになった。不可能な限界で、この委託は遂行された。日本の全ての活発な反共社会団体が独り立ちした。そのような団体のうちの3人の代表者が北海道の函館市で没頭した、力でもって警察から逃亡者たちを奪い取るために。大物の政府の活動家たちを支持に引き込んだ、が、政府の決定を廃止させることには成功しなかった・・・武装警官の元で、逃亡者たちはソビエトの船に乗せられた。ソビエトに送られ、裁判にかけられ、銃殺された。」

アルフレッド・デンビイの甥であるヤン・デンビイは1933年に家業に就いた。が、日本人による上海の占領後に、商売は禁止された。デンビイ家は祖国がなく市民権のない人となった：ロシア人である彼らは革命後に失った、市民権を得ることはそんなに簡単ではなかった。1930年、アルフレッドはイギリスの国民になることを試みた、が、イギリスは戦争直前にあり、他の心配があった、誰もそのような仕事を検討していなかった。デンビイの家族は上海の地方自治体警察でロシア人移民として登録した。上海には当時、ロシア人移民が3万人以上生活していた。ついでながら、ヤンはカナダ市民として日本によって抑留された。この時期、日本には軍国主義が成長していた。全ての外国人に嫌疑をかけていた。アルフレッドと甥は1939年に上海に移った、そこで、彼らに弟ワーニャが合流した。

第二次世界戦争の終了後、アルフレッドはソビエトの市民権を得た。全ての元ロシア人の移民と同じように、自分の元の国民に戻ることを希望した。

1948年に、中国の共産主義者たちはアルフレッド・デンビイを上海から追い出した。彼ははじめ香港に去った。その後、台湾へ。そこで、アメリカの占領軍に協力した。が、1950年に、マルシアと彼女の娘ニーナと一緒に日本へ戻った。彼らは軽井沢の小さな家に住んだ。そこは外国人に好まれた、東京からあまり遠くない保養地であった。アルフレッドとマルシアには子供はいなかった。アルフレッドは3度の心臓病を患い、1953年1月1日、76才で亡くなった。間に合って、領事と大使との長い交渉の後、大英帝国の市民となった。

アルフレッド・ゲオルギエビッチ・デンビイの死亡に関して次のように公表された：「ロシア人の移民、彼はイギリスの国籍を得るまで、その一員であった。彼の突然の終焉まで

の数ヶ月の間だけ。多くのものたちが彼に恩義を感じた。上海や極東の他の町で、少なくとも避難者たちに、彼は居場所を提供した。そこで彼らは適した仕事を見つけることができた。日本の管理機関は、ロシア人に対する彼の斡旋と彼の保護に、ある程度まで慣れたことになった、全てのロシア人の仕事について彼に相談もした。彼を呼び出し、実質的にロシアの領事のように。函館に来たロシア人たちは最初に、アルフレトを訪れた。彼は決して相談を断らなかつた、金銭的援助も、必要ならば。」

デンビイ兄弟のアレクサンドルに触れてみると、テドの名で知られており、ほとんどの人生を外国で過ごした。ロシア語は全く話せなかつた、英語を母国語として見なしていた。1909年から1910年において、父親の1万ドルで、彼はカナダに農場を購入した、ウエールズ皇太子—後のエドワード8世—の所有地の隣に、皇太子と彼は親友であった。そこへ、アレクサンドルは直ぐに自分の妻ファニャ・カナコバーキャフタ知事の娘—を移した。彼は1910年に彼女と知り合った、日本で。家族については全てが謎となった、彼らがどのようにして共通の理解に達することができたかは。ファニャは英語を話せない、アレクサンドルはロシア語を全く知らない、フランス語が助けてくれた。家族の幸せは長くは続かなかつた。アレクサンドルは農場にじっと留まっていることはできなかつた。彼はカナダ太平洋線に個人の鉄道客車を持っていた。彼は頻繁にアリベルトからバンクーバーへ旅行をした。ファニャはこの時には農場で寂しくしていた。子供3人—エレオノル(1911年)、ガリン(1913年—1915年)、ドミトリイ(1915年)—を産んだ、彼女は1916年に夫と離婚し、子供2人と一緒にカナダを後にした。

離婚後、テドは農場を売り、行き当たりばったりで仕事をした：金を採した、木こりの仕事をした、魚やカニを捕った。第二次世界戦争時には、彼は造船所で働いた。その後、クロフトンでビュッフェの従業員となった。1949年、息子のドミトリイは彼の所にやって来た。テドは最後に3年ぶりに彼を見た。多分、彼らは喜び合ったであろう。が、直にドミトリイはバンクーバーへ去って行った。ある時、クロフトンの彼のコテージでテド(アレクサンドルの愛称*)を見つけた、意識なしで床にいた、一抱えの薪と並んで：栄養失調で彼は気絶した。病気の時、テドは甥のヤンと彼の妻アンナの家族の所に住んだ、ビクトリアの。その後、1957年に亡くなるまで、彼は末の息子ドミトリイと彼の妻の所に住んだ、バンクーバーの。

デンビイ家の3番目の息子がジョージであった。彼をウオシと呼んだ。彼は兄たちと同じくサハリンで生まれ、長崎で学校に入った。両親の家のあるウラジオストクには、彼は夏休みに訪れた。そこで、彼はロシア語を身につけた。18才になった時、彼は通訳となった、東京でドイツの武官のところで。仕事の関係で、南サハリンを良く訪れた。1903年、ジョージはウラジオストクにあるロシア・アジア銀行に勤めた。そこで、日露戦争の開始まで働いた。その時に、軍通訳となった。この時、彼は専門の諜報員となった。後になり、彼をサンクトペテルブルグへ派遣した。そこから、紅海へ諜報の課題を持って。ウオシは祖国の大艦隊に合流しなければならなかつた、が、その代わりに、彼は突然退役し、イギリスに去った。

1907年、彼は函館に戻り、家族の会社で働いた、兄弟と一緒に。兄弟たちはカムチャッカでの鮭の加工において缶詰工場の立ち上げを助けた。同じ時期、ウオシはアムールでの金採集に従事した、デンビイ家の長男が基礎を作った。デンビイ兄弟は知っていた、

彼らの母の婚約指輪が純金から鑄造されていたことを、それをデンビイがアムールで採取したことを。ウオシは自分の妻をオーストラリアで見つけた、そこへかって父と一緒にいった。この人がユニス・マルゲリト・マンであった、シドニーで有名な家族の。新婚夫婦は函館の、谷地の家族の領地に住んだ。当時、ウオシは日本におけるノルウエーの名誉領事であった。家族に6人の子供が育った：デビット、ヤン、メリ（モリイ）、ホウブ、アラステルとピテル。風邪の伝染時の1919年に、メリは亡くなった。1922年、ウオシの家族はイギリスに移った。多分、幼いアラステルに脊柱の結核症が見つかったために。ウオシはイギリスでの仕事に興味を持った。それ以上に、極東での家族のビジネスはダメになり始めていた。

家族は1926年までイギリスに住んだ、その後、ウオシはカナダの西海岸で漁業を立ち上げた。家族をブリタンスク・コロンビアへ移した。全員がカナダの国籍を得た。ウオシは鱒養魚場を立ち上げた、が、2年経って、鱒は西海岸から去りそれ以上戻っては来なかった。この失敗と1930年代の不景気は、残っていた父からの相続財産全てを飲み込んだ。第二次世界戦争時、ウオシはビクトリアの造船所の一つで電気工として働いた。彼は熱狂的な釣り好きであった、それを最も幸せな時間と考えていた。バンクーバー島付近で自分の小舟に乗り、鮭を釣ることを。或いは湖畔で釣り竿を持って、或いは家の周りの川で、淡水魚を釣り上げることが。彼は手先が器用であった、左手には中指がなかったにもかかわらず、大工などの仕事を巧みにこなした：ウオシは若い時に、狩猟で誤ってこの指を打ち落としてしまった。夏には、ウオシは屢々魚釣りのガイドをした。言語の知識は素晴らしかった—ロシア語、英語、日本語、フランス語—、全ての旅行者たちと友好関係を作り上げることができた。他の長所以外に、彼は話好きで、良い家庭人であった、妻と子供に献身的であった。1954年8月4日、彼は心臓麻痺で亡くなった、ビクトリアで。後家のユニスは4年ほど長生きした。

アルフレッド・デンビイ家族の4番目の子供であるリザは、1914年、スコットランド人のエドワード・ゴルドン—函館のイギリス領事—と結婚した。直に、彼をホノルルの領事に任命した。そこで、1916年に、新婚夫婦に息子のジョージが生まれた。多分仕事を祝して命名した。子供が生まれてから6週間後に、腹膜炎でリザが亡くなったのは家族にとっては大なる悲劇となった。彼女の遺体は火葬され、遺骨は長崎の両親の元に運ばれた。今、ジョージ・ゴルドンはスコットランドに住んでいる。

デンビイ家の末弟のジョン（ワーニャ）は、1912年か1913年に結婚した、ロシアの妹であるナタリアと。彼らに娘のイリナが生まれた。が、その時期には家族は大変であった。ナタリアは夫と離別し、娘と一緒にフランスへ去った。ワーニャは再婚しなかった。彼は日本に残り、アルフレッドと一緒に家族会社で働いた、彼と一緒に上海へ去って行った。彼は1952年に東京で亡くなった。そこで、アメリカ軍の占領部で働いていた。

デンビイ家の全ての兄弟とリザについて、本当の紳士と淑女であったと皆が語っていた。仕事にまじめで、付き合いに感じが良く、ロシア人風に優しいと。全ての近親者や周りの者達は彼らが好きであった。特に、子供達は彼らに夢中になった。デンビイ家の若者達の誰もソ連邦へ行かなかった。が、ウラジオストクに残した所有物について覚えていた。アルフレッド・デンビイが書いていた、「ロシアにおけるデンビイ家の財産の権利を要求する全権を私はニーナに与えた、もし共産主義体制が倒れたならば。もちろん、私が生きてい

る時にそうなるとは夢想してはいないが。ウラジオストクにある所有物についての私の権利を証明する全ての書類は、ここにある、日本に。我々の子孫のうちの誰が、将来いつかそれを利用してどこが悪いか。誰も知らない、どのような変革がロシアに起こるかを。そこは、今は、非常に不安定である。」

祖国への帰還：ニコライ・マトベーフ

ロシアで国内戦の動乱時に、ニコライ・ペトロビッチ・マトベーフは直ぐに日本に移動せざるを得なかった：彼の政治的共感を知ると、右派も左派も彼を脅かした。日本にいて、彼は祖国を非常に恋しがった。訳があって、1919年に、「異国で」という詩が出現した：

私は一人、皆にとっては他人、
曲がりくねっている並木道を私はさまよう、
そして、鉄の板、
疲れを知らぬ憂鬱は、
胸を波立たせ、知性を苦しめる
陰気な物思いの突き上げで
私は僻地に住む、繰り返し、繰り返し
うめき声が広がり血が流れる・・・
慰みの心を帯びていない
それは詩であり、それは笑いである。

トリアピツィン一味の蛮行（尼港事件、1920年3月～5月 *）の直後に、マトベーフはニコラエフスク・ナ・アムールを訪れた。そこで見て聞いたこと全てを書き留めることに努力した。家に戻り、再び彼は函館に立ち寄った。函館とは血縁を結んだ。

日本で、ニコライ・ペトロビッチ（・マトベーフ *）はジャーナリストとして活発に活動した。大阪で雑誌「ロシアの極東」の代表ともなった。アメリカ版のために記事も書いた、児童本を出版した。1935年、ロシアの移民達の文学サークルに参加した。グリゴリエフの編集の元で選集「東方で」を出版した。マトベーフの作品「日本の古い詩」がそれに出た。

ジャーナリストとしても、文学作品もそれほどの収入は得られなかった、他の手段で稼ぐしかなかった。どのような？ この問いに対する答えは、神戸からのベラ・マリニナの手紙にある：「私はニコライ・ペトロビッチ・マトベーフを良く覚えている。彼はここ神戸で、本の仕事をしていた。彼はロシア語の本を手に入れることができた。私が覚えている限りでは、彼は時折東京へ出かけた。そこには沢山の古本屋があった。彼はそれを購入し販売するために持ち帰った。私は覚えてはいない、彼が他の本をどのようにして手に入れたのかを、多分、ハルピンから。とにかく、あなたが知っているとおりに、彼は雑誌「外国」に記事を送った。彼は屢々我々の本家を訪れた。この所で、ロシア人作家の沢山の全

集を購入した。」

マトベーフの旧友に小西増太郎がいた。マトベーフは彼をダニイル・パヴロビッチと呼んだ。この日本人はロシアの神学アカデミーを修了した。そこで、彼はレフ・ニコラエビッチ・トルストイと知り合った。彼と一緒に共作を書き上げた。マトベーフが書いていた、「最近、東京に行き、私は小西を訪ねた、彼は重要な仕事をしていて、レフ・トルストイの本に関する。困難が増大していくことに不平を漏らしている：既に200頁を書き上げた、が、終わりは未だ見えない。小西さんはトルストイの作品以外に、偉大なる作家アレクサンドラ・リボブナの娘の本を日本語に翻訳していた。彼女の日本訪問時には彼女の同伴者であり通訳でもあった。小西さんは何度もロシアを訪れていた。最近、有名な日本の企業家クハラ氏・・・とスターリンとの会談で通訳を務めた。」

マトベーフは自分の子供達の運命に不安を持っていた。子供は12人おり、多くはウラジオストックに残っていた。ニコライ・ペトロビッチがゾチックー自分の第一子ーに書いていた、「私は君の状況を知らない、それ故、良い助言をすることができない。ジョルジカとペーチャに助言を与えたい、空に鶴を探さないようにと。些細なこと、どんな仕事にも注意を集中しなさい。需要のある、世の中で忘れられた、詳細にその仕事を研究することに努めなさい・・・。靴屋になろうと、製本工になろうとーただ仕事を持つために。よくわからない夢を捨てなければならない。哲学に従事することができる、製本のために、もちろん、注意して、仕事や手腕をダメにしないために・・・」

容易にわかる、ニコライ・ペトロビッチ・マトベーフは哲学で政治活動を暗示していたことが、赤色ロシアへ手紙を送るに当たって、寓意に頼らざるを得なかった。これについて手紙の最後の文章が語っている：「申し訳ない、かつては君の名の日を祝えなかったことに。今はそのような時ではない、些細なことと見なすような。」

日本に去ったニコライ・ペトロビッチ・マトベーフは、ソビエト権力の迫害を避けた、が、息子に報復をしなければならなかった。東洋学者で書誌学者であるゾチック・ニコラエビッチ・マトベーフを非難した、日本における彼の父の滞在を、マトベーフ家のオオバ・カコとの交際を。結論は単純明快であった：日本のためのスパイ行為。判決を疑わなければならないのか？ 半世紀を経て、ニコライ・ペトロビッチ・マトベーフの孫は父の亡くなった年月を正確に知ることとなった。

ニコライ・ペトロビッチ・マトベーフは1941年2月8日になくなった。亡くなる前に、彼は長い間患っていた、生活費を稼ぐことはできなかった。日本人の友人達が援助した。治療用の金銭を集めただけでなく、マトベーフの家族の養育費もまかされた。雑誌「外国」が書いていた、「故人は希な心の持ち主であった、他の人の手本となった。半世紀以上にわたって、彼は社会的文学的仕事を成し遂げた、極東の外国の多くの新聞や雑誌で協働した。人々に援助と奉仕を示す彼の謙虚さ、仕事好き、几帳面さ、心構えでもって、彼を知っている人の心を引きつけた。彼の多数の日本の友人によって評価され、彼のためになされた、我々ロシア人ができなかった、正当な評価をしないわけにはいかない、深い感謝を、そのような友人に。」

日本人達がマトベーフの墓に大理石を設置した。銘文「君の安らかな眠りに平安を、親友よ！」を持った正教の十字架の、彼の死後半年を経て、1941年8月10日にお祓いをした。彼らは故人の妻の名義で大金を振り込んだ。

ウラジオストクの元総領事渡辺リオの尽力で、マトベーフの墓は建立された。祖国に戻り、彼は、外国に住んでいるウラジオストク市民に多大なる援助を示した。渡辺はウラジオストクに1896年に実習で初めてやって来た、学生の時に。直に、アムール地方研究協会の代表であるソロビエフの家族と懇意となった。ソロビエフは真のインテリであった、地方の秀でた通人であった。彼との会合で、日本人の学生はパーティーで自由に振る舞い、家族の所に居座らなかった。すなわち、この状況が彼に、ロシア語の勉強に役に立っただけでなく、現地のインテリ層と知り合うことになった。

ロシアにおける国内戦時、渡辺リオはモスクワの日本大使館で次席領事として勤めていた、そこから、領事の職務でウラジオストクへ再び移った。彼は大変な努力をした、1922年10月後に、ロシア国民が平和裏に分離するようにと。ロシア語と文学に造詣が深く、ロシアの歴史にも詳しくあった。領事の渡辺さんは町での交流の要となった。ウラジオストクの住民は、領事館の彼を訪れることができた。助言を得るために、何らかの問題の相談に、或いは単に話したい時にでも。

ウラジオストクでは、ソロビエフ家と領事との友好関係が続いた。そこで彼はアルセニエフと出会い、友情を深めた。当時ソロビエフの妻の父であった。セダンカにあった彼の別荘さえアルセニエフの別荘に近接していた。アルセニエフの姪であるオリガ・オクリストーソロビエバの意見によれば、渡辺リオは日本へ持ち帰ることができた、アルセニエフの素晴らしい本「ウデゲの国」を、未完の。多くの証言によれば、その国において、その探索は失敗に終わっていた。しかし、それを日本で探すことはロシアより困難であった。

1929年10月、渡辺リオはウラジオストクを去った。元総領事の祖国への旅立ちの日、蒸気船の所にウラジオストクのインテリ層が花のごとく集まった。極東大学学長パシケビッチ、アグロノモフ教授、サビッチ教授、その他が渡辺を見送った。彼らの中に、ウラジミール・クラブヂエビッチ・アルセニエフがいた。別れに際して、全員で写真を撮った。写真の中で微笑み、穏やかな16人は知らなかった、直に、この友情あふれる写真が彼らを日本のためのスパイ活動の罪の証拠になり、多くの人の非業の死の原因となることに。

領事渡辺リオは秋にウラジオストクを去った。すでに翌年の春には、国家政治保安部の予審判事たちが証拠を集めていた、沿海州への彼の訪問時に日本人と関係を持った人たちの。1930年4月25日付の嫌疑者の一人の尋問の調書に書かれていた、「公式のパーティー以外に、私とクプレソフはパーティーに招待された、渡辺リオの送別会と新領事の歓迎会に関係した。パーティーには、70人が参加していた。客として：ナシロフー海軍監察官、アルセニエフー極東の旅行家、ドセフー領事の秘書、オウロタソバ、彼の妻、国立極東大学から教授ーアンドレーフが彼の名字を知っている、ブロンシテインー私の知人、デンマーク人グルムセンー「バサルド」協会代表、私は他の出席者を知らない。このように、ワイングラスを飲み干したー私にはきつかった、私は大いに踊った。ダンスまで談笑が行われた、特にアルセニエフと彼の妻が素晴らしい話し相手となった、自分の旅行について話してくれた。アルセニエフの妻は私の知り合いであった、学校を通じての。渡辺領事はそのパーティーでは酒は飲まず、出席者たちに動機について説明をした。このパーティーは3つからできている、すなわち、第一は政府の代表の名誉として、第二として外国人のために、第三に、我々が居合わせていた、彼のごく親しいロシアの人々。」

この調書を読み直し、国家政治保安部の職員は、アルセニエフの名前に鉛筆で太い線を

引いた。数年して、沿海州の国家政治保安部の職員が渡辺リオの名前と500人の「日本のスパイ」を関係づけた、全体主義の罪のない生け贄、彼らをあの世に送った。彼らの中には、アルセニエフの妻マルガリータ・ニコラエブナ・ソロビアバーアルセニエバがいた。渡辺は1932年にウラジオストクに戻ってきた、元の職務である総領事として。1936年までその職務に留まった。彼の友人たちすべてが次々と跡形もなく消えていった、国家政治保安部は彼への興味を隠そうとはしなかった。老齢の領事は日本に戻る方がよいと判断した。

古くて新しい領事

函館で、少なくない立派な外交官たちが仕事をしていた。彼らはゴシケビッチの遺訓を守った。隣国である日本と良好な関係のために可能なすべてのことをした。1896年まで、ここに、領事としてミハイル・ミハイロビッチ・ウスチノフが勤めていた。彼はその後、長崎に移動した。ついでながら、世界的に有名なイギリスの映画俳優で、監督で作家であるピョートル・ウスチノフはミハイル・ミハイロビッチ・ウスチノフの曾孫である。1895年末に、領事ウスチノフは君主ニコライに誓願した、領事館の事務局のために部屋を割り当ててくれるようにと。教会の建物の2階をもらい受けた。

1900年、マトベイ・マトベービッチ・ゲデンシュトロムが領事となった。新しい領事館の建物を建設するための場所を選び出すことが彼に委ねられた。函館の教会の敷地内にあった、古い領事館の基礎に建物を復興することが最初の案であった。が、しかし、その場所は狭かった。ニコライ神父はそれが心配であった。この近接が将来の領事館と教会の関係を複雑にするのではないかと。特に、これは精神的な問題に触れていた。ロシアの公使アレクサンドル・ペトロビッチ・イズボリスキイはニコライ（神父 *）への手紙で指摘していた：「私は場所を君に渡さなかった、が、とにかく、場所は渡されていた、取り上げてはいけない；領事館の建設のための場所を買う必要があると、私はペテルブルグに書き送った；たぶん、1015ルーブル、支払うべきである；その後で、古い場所を渡す。」

ワシリイ・ワシリエビッチ・トラウトスホリトは、1899年に、サンクトペテルブルグ大学の東洋学部の中国・満州・モンゴル学科を修了した。3年後、東京での3年間の研修に彼は派遣された、その終了後に、函館のロシア領事館の次席領事に任命された。彼はそこに1912年まで勤めた。その後、ハルピンで総領事として勤めた。第一次世界戦争の時、彼を親独主義者として告発した。それは当時通常の行為であった、ドイツ出身のロシア市民に対して。トラウトスホリトをペテルブルグに召喚した、そこで、彼の罪をすべて取り消した。外務省において決定した、トラウトスホリトはハワイでの仕事に最適な候補者であると。この時期、ハワイ島での砂糖農場での仕事に出かけたロシア人の、祖国への帰還に関して大きなキャンペーンが予定されていた。そこでは、ロシア政府は必要とされた、「ハワイ島からのロシア人移民の通行で生じていた障害のゆえに、ホノルルでのその問題の解決のために< . . . >」 ペテルブルグではわかっていた、ハワイ島に移り

住んだロシア人移民たちの大半は、中国—東方鉄道線からの移住者であったことが。トラウトスホリトはこの地区を熟知していた。1917年9月、彼を本国帰還の書類作成に関する総領事の資格で派遣した。」

トロイツキイは優れた外交官であっただけではなく、研究者で東洋学者でもあった。1906年に、サンクトペテルブルグ大学の東洋学部を修了した。1906年から1911年、彼は東京で実習を受けた。その後、セイシン（？ ＊）でロシアの副領事として勤めた。ここに彼は革命まで滞在した、その後、函館に去った。日本を去り、アレクサンドル・セルゲービッチ・トロイツキイは日本語の教師となり、日本語の教科書、参考書、辞典の準備に携わった。トロイツキイはハルピンで1940年5月14日に亡くなった。

日本における最後のロシアの外交官となったのは、レベデフであった。教師の息子で、ウラジオストクの東洋大学の卒業生である彼は、秀でた能力のおかげで素晴らしい栄達をなした。東洋大学の中国・日本学科で教えているときに、日露戦争に遭遇した。当時、学生で日本人学者は兵士の中で大いなる尊敬を得ていた。中国語と日本語の通訳の必要性は非常に大きかった。東洋大学の学生を大事な仕事に任命した。彼らはまだ教育を終了していなかったにもかかわらず。1905年、エブゲニイ・レベデフは日本語の通訳として勤めていた、ポルトーアルツル（？ ＊）でステッセル將軍の参謀部で。戦艦「ポロトバ号」に乗って戦に参加した。戦艦ペトロパブロフスク号の大惨事後、マカロフ提督と一緒に、エブゲニイ・レベデフの仲間達は彼から手紙をもらった、彼は偶然の幸運のお陰で沈んだ戦艦に乗っていなかったという。当直の終了に当たって、外の錨地に停泊していた旗艦に渡るために、エブゲニイが要塞の内湾の棧橋に近づいたとき、時刻が遅くなり全ての小舟やボートが時間遅れのために航行をやめていた。レベデフは岸で夜明かしをせざるを得なかった。他日、日本の機雷で戦艦が爆破された。

エブゲニイ・レベデフに—東洋大学の何人かの他の上級生と同じように、戦後、卒業試験なしで、戦争に参加した—東洋大学の修了証書が渡された。「多大な功績に対して」。その後、レベデフを、軍事関係省庁の推薦により、外務省で採用した。そして、彼は東京での研修に派遣された。1907年に、28歳のレベデフをムクデン（？ ＊）のロシアの総領事館の通訳に任命した。少し遅れて、エブゲニイ・フェドロビッチは大連のロシアの総領事館の秘書となった。1913年、函館の領事代理に彼を転勤させた。そこで彼は12年間過ごした。

エブゲニイ・フェドロビッチ・レベデフは露日の漁業関係に従事した。この課題でいくつかの論文を公表もした。革命後、東京で出版された雑誌「ロシアの極東」に協力をした。残念ながら、この外交官がどこで人生を終えたかの確かな証拠はまだ見つかっていない。ある情報源からすると、エブゲニイ・フェドロビッチ・レベデフは日本で亡くなった。他の情報源からは彼は南アメリカに移民したとか。このロシア人外交官の図書の一部はハワイ大学にある。

1925年、函館に、初めてのソビエトの外交官ロギノフがやって来た。彼は1928年まで勤めた。アレクサンドル・ニコラエビッチ・ロギノフは結婚していたが、エラヤ・ルーリャに完全に魅せられた。結果、両親は彼女をバークレーにあるカリフォルニア大学ですぐに勉強するようにと強制的に送り出した。

当時、日本はロシアにとって、重要な影響を示していた。驚くに値しない、最初のソビ

エトの外交官がスパイと直接に関係を持っていたことは、1928年7月12日に函館にやって来たドミトリイ・キセレフはそうであった、ロギノフに替わって。その時、ソビエト連邦の日本における全権代表は、アレクサンドル・アントノビッチ・トロヤノフスキイであった、以前に「ゴストルグ」ーソビエトの最大の対外商業機関ー代表として働いていた。彼はキセレフに指示した、ソビエト連邦と日本の貿易の発展の可能性について研究するようにと。ソビエトと日本の経済協力のさらなる拡大についても。日本の漁業の中心の一つである函館に滞在し、キセレフは日本の漁業に注目した、特にオホーツク海における。そこでは日本の漁業家達が多く漁業区を持っていた、ソビエト連邦から借りし。

キセレフは地方の漁業団体と悪くはない関係を結んでいた。漁業経営者団体の北海道支部の代表スエタロウ・ニカセを含んで。同じく、大漁業経営者ヘイジロウ・佐々木も、北サハリンとカムチャッカで漁業借用権を有している。特に、密接な接触をキセレフは漁業家トシキチ・タカイと持っていた。彼は冗談で自分をアフアナシエ・ペトロビッチ・タカエと呼んでいた。正教を受け入れた日本人として、彼はウラジオストクではよく知られていた。

1929年、キセレフは函館から最初の報告を送った。1929年7月10日に、それはモスクワで承認された。外務人民委員会からの暗号電報で伝えてきた：「函館のソ連邦領事キセレフ同志へ。写し：東京のソ連邦の全権代表へ。貴方が送ってくれた資料は興味を引く、特に日本の会社（大洋漁業会社）の仕事と展望に触れた部分。見守ることは有益であった、政治と様々な漁業経営者のグループ（日ロ、佐々木、シントロウ、シド、ヒラダ、その他）の仕事にどのように答えるかを。日本の内閣の交代が行われたこの時期に。事務取扱。極東局（ポリソフ）。」

トロヤノフスク大使の依頼に応じて、キセレフは報告を準備した、極東海域におけるシロイルカ猟についての。キセレフはこの猟を将来性があるものと見なしていた。自分の正しさの証明として、彼は報告書にソビエトの漁業家ルビンシュテインの例を持ち出した。1920年代末に、ネップの時代が終了したとき、この企業家は極東銀行の支持の元で海獣捕獲の仕事始めた。ダリリボホトからオホーツク沿岸に狩猟区画を賃貸してきた。初年度、ルビンシュテインの海獣狩猟者達は380匹のシロイルカを蓄えた、それらから油4500プード（1プード=16.4kg）溶かし出した。全ての産物を樽に入れてウラジオストクに運んだ。これで良い利益を得て、ルビンシュテインはウラジオストクに工場を建設することを決めた、油を生産する。極東銀行と極東漁業への負債全てをこの企業家は完済した。キセレフは報告書で次のような結論を出した：「シロイルカから得られた産物は、我々の輸出のための素晴らしい製品となる、その価値と重要性において。」

キセレフ領事は、全く具体的な国民経済の仕事に従事した。ソ連通商代表部の委託を受けて、彼は日本で船を買うことに援助を示した、蟹工場に適した。函館で取引を結ぶために、ウラジオストクから、国立極東漁業トラストの代表である遠洋航路の船長ドドニクがやって来た。キセレフと一緒に彼は「大洋丸」という名の船を選び出した、35万ルーブルで、この船はそれほどの出費なしで、蟹の加工のための浮かぶ工場として改装することができた。船は「ペルビイ・クラボロフ（=第一蟹工船）」と改名された。ドドニクは修理のためにこの船を大阪に回送した。直に、ウラジオストクから乗組員が到着した、船には、釜とハンマーの入った赤旗が掲げられた。

当時、ウラジオストクには蟹の加工と保存の専門家がいなかったために、蟹工船に日本人の専門家と労働者を雇うことになった。通常、請負人である船頭が労働者を選び出した。キセレフ領事は彼らにビザを交付した、蟹工船の甲板に足で立つ。日本人達は目に見えない国境線を渡り、他の国へ入ることとなった。船頭は300人の労働者を選んだ、そのうちの3分の1は14歳をわずかすぎた未成年者であった、子供の手は巧みで素早くやりこなす、蟹の肉の缶詰への充填を。「第一蟹工船」は修理後、大阪から函館に立ち寄った、労働者達を引き取るために。

直に、2隻目の蟹工船カムチャッカ号が出現した。この船はアメリカで手に入れた、しかし、修理は大阪で行われた。労働者は函館でキセレフ領事の管轄下で選ばれた。1928年10月、ソビエトの蟹工船に乗っている労働者は函館に戻ってきた。彼らは賃金に満足した。

興味を引く事実があった。「第一蟹工船」は21400個の缶詰の箱を準備した。各箱は政府には700ルーブル安くかかった、祖国の沿岸の工場のものより。1929年末に、キセレフ領事を祖国に召還した。出立の少し前に、彼は詩「函館」を書いていた、別れの訪問時に副町長にそれをプレゼントした。1929年10月8日のことであった。

灯火が明るく輝いている
夜に港のシルエット
函館遠くへ灯火で！
海に挨拶を全てに送る
停泊場には船が群がっている
(詩 残りの部分の翻訳を当面飛ばす)

キセレフ領事のところに、ロシア移民のイワン・ペトロビッチ・コズロフがしばしばやって来た。彼は帝政時代にロシアの沿海州の海岸に猟区を持っていた。ソビエト権力の確立に伴って、それは破棄された。コズロフはその回復を夢見なかった。他の理由で彼は領事を訪問した：ソビエトの市民権を得ること。キセレフは、外務人民委員会に対して、そのために一肌脱ぐことを約束した。

1930年に、日本への出張から戻り、キセレフはモスクワに住み、総諜報機関に勤めた。彼は弾圧の犠牲者とはならなかった。60歳で、外交官を退き、1939年には同盟的役割の個人年金者となった。大祖国戦争の開始時から、ドミトリイ・キセレフはノボシビリスクへ退去し、町の社会生活に積極的に参加した。1959年、元外交官で諜報員は80歳を盛大に祝った、「ノボシビリスク名誉市民」の称号を彼は得た。

キセレフの娘エカテリーナは1925年に日本で生まれたことから、妻のエレーナ・パブロブナは外交官と一緒に敦賀に移った。1927年の写真が家族に保存されていた、それにはキセレフ、エレーナ・パブロブナ、子供のカーチャ（エカテリーナの愛称 *）が写っていた。1928年2月、敦賀にキセレフの息子ピョートルがやって来た。その時に

はウラジオストクの国立極東大学の東洋学部の学生であった。函館の領事館で、キセレフの年上の娘アレクサンドラが働いていた。

キセレフの後、函館における外交職務に就いたのは、チホノフ（1930年から1932年）、カラス（1932年から1936年）、イトキン（1936年から1938年）、パブリチェフ（1938年から1940年）、ザベリン（1940年から1943年）、ズベレフ（1943年から1944年）。

函館への逃亡

上海における有名なロシア人移民のうちの一人がウラジミル・ダニコビッチ・ジガノフであった。彼は自分の名作「上海のロシア人」で、この町を不滅なものとした。ジガノフの名前は現在の伝記便覧や百科事典で見つけられない、沢山の著作があったにもかかわらず。それらは移民先の上海で出版されたということで説明される。彼の次の言葉がこの人物の人生に対する碑銘となろう：「歴史が私を裁くとしよう、異境の地に逃げてきた私に似たようなロシア人を。多分、歴史は我々を良い言葉で覚えている。しかし、現在、祖国のロシア民族の新しい世代は我々の悲劇を決してわからないし、評価しない。なんとすれば、彼らは知らない、ありうる、彼らは全く知らない、我々についての真実を。」

ウラジミル・ジガノフは1896年2月1日に生まれた、狩猟部隊の元前任下士官でウスリースク鉄道職員であった家族に。1914年に、彼は志願兵として前線に去った、歩兵学校修了後、戦闘に参加した。彼の最終身分と職務は、二等大尉、「死の大隊」の中隊指揮官。ジガノフは10月革命を受け入れなかった。彼は追想していた、「1917年に、ロシアの町々の通りに、プラカードが現れた、「略奪されたものを略奪せよ」と書かれた。所有者を手当たり次第に”ブルジョアジー”と呼んでいた。私がこれを歓迎できようか？

私が強奪することに同意できようか、私の父のような者を、もし私が彼を都合の良い例と見なしたならばー生き、働き、社会に貢献しなければならない、人々と関係を持ち。」

ウラジオストクに住み、ジガノフは自分を将校と見なし、誇りを持って肩章を付けていた。彼は書いていた、「町を歩いていると、通りで兵士と水兵のグループに出会う。彼らは私に後ろから脅しをかけた。私はわかった、肩称を付けているのは私が最後であることを。私に問題が生じた、生きて家に戻れるのか？ このようなことで、ウラジオストクの守備隊はすでに肩章を取り外していた。私の振る舞いは皆に対する明確なデモであった。スベトランスキー通りで、私を水兵の集団が取り囲んだ、肩章をとりはずことへの私の拒否に対して、肩章を肩から切り取った。」 国内戦争時、ジガノフは白軍側で戦った。彼の部隊はコルチャックの元首都オムスクを放棄した。1920年春、ジガノフは最後の戦いに参加した、カペレフスク部隊の一員として。チフスに罹り、彼はハルピンの病院に送られた。健康を回復して、将校はウラジオストクの両親のところに戻った。

1922年春に、ジガノフはカムチャッカでの仕事に出かけた。そこで極東で初めてのストライキを行った。後になって、彼はその年のことについて追想していた：「国家商業省との長い交渉は成功とはならなかった。全体集会はストライキを開始することを決めた。

漁師同盟は保護を求めた、ライレフコムとグブレフコムでの。しかし、何の保護も得られなかった。オホーツク・カムチャッカ地方の軍事コミサール（マルコフ）－理想的なコミュニストで非常に好感の持てる人物、ストライキの始めにはウスチーカムチャッカに居た－は去って行った。国立商業機関の動きに彼は恥じた。多分、彼は共産主義の創立者カール・マルクスを思い出した。彼は語っていた；「まず第一に、労働者にパンを与えなければならない。その後、彼を政治で育てなければならない。」 ストライキは21日続いたが、何も得られなかった、我々は仕事を始めた。もちろん、多くは出費を償わなかった。漁業シーズン末に、一人の漁師にも頭に思い浮かばなかった、各魚から22コペイカを漁師から取り上げていた、権力はさらに税金を要求している。わかった、そうであることが。良心的でないどうしようもない奴、当時極東の権力の舵のところに座っていた、状況を調べもしないで、漁師がどのような状況に陥っているかを。漁期の終了についてゴストルグに指示を出した、漁師に支払うべき総額を維持するよう、国に再び導入された*****。税を総収入から取る、完全に見なさないで、漁師にパンが残るのかどうかを。この税金を課し、彼らは領民を信じさせる、税は年に1回であると。しかし、1年経たなかった。県革命委員会、査察官がやって来た。新税について不幸な労働者達に伝えた。その時、権力の存在の元で、漁民の誰かがデンビーの気ままな生活を思い出し、返事として得た：「忘れろ、同志！ この生活、お馬鹿さん、君の所には決して戻らない！」。

1922年8月、ジガノフは定期選挙に立候補した。赤衛軍部隊を指揮するように彼に提案した。その時、彼の返事は次のようなものであった：「国内戦にこれ以上参加しないことを私は決めた。もし動員されたならば、軍務につこう！」 次の年に、ジガノフをカムチャッカの地方部隊の主任指導員となるように説得した。実際、相対的に平穏無事なジガノフの人生は国家政治保安部における例の尋問で直に終了した。黒板に彼らによって書かれた文句が原因であった：「ロシア－我らが祖国」。「もし私がこの世で生きたいならば、「祖国」の言葉を永遠に忘れなければならない。」この出来事でジガノフが追想していた。その年に、国際主義が民族の象徴と見なされた。

1925年、ジガノフはまたもや逮捕された、彼をウラジオストクに護送することが決められた。彼はわかった、自由には戻れないと。ジガノフは、函館に停泊している蒸気船から逃亡することに成功した。1925年12月末、彼は上海に現れた。旅行記「上海のロシア人」の出版の彼の計画は商売のように見えた。が、直に、計画はなかなかの広がりを見せた。ウラジミル・ダニロビッチ・ジガノフは追想していた、「ロシア人を不滅とする思想が、私を征服した思想となった、国際的権力から国外へ去った彼らはしっかりと生活し、働き、ロシア人の名を高めた。そのように決めた、というのは、当時、ロシアには人々が居た、彼らは確信していた、ロシア人の移民はロシアの廃棄物であると、彼らはゴミである、ソビエト権力によって我々の国からはき出された。黙り込み、真実を話さないでは、私は居られない。アルバム「上海のロシア人」を作り始めて、私は黙っていられようか、「ロシアのゴミ」と呼ばれるこれらの人々が、ここでは中国民族の音楽大学の創設者となり、中国におけるヨーロッパ音楽のパイオニアとなったことを。私は黙っていられようか。自慢の上海の公立交響楽団の力となったのはロシア人であったことを、町での素晴らしいもの：オペラ、オペレッタ、バレエは同じくロシア人によって。私は黙っていられようか、ロシアからの白軍の移民者達が町で素晴らしい芸術家になったことを。私は黙

っていられようか、国際義勇軍でロシア人の連隊が誇りを持っていたことを。この連隊に、素晴らしい貢献に対して、町は三色国際旗を与えた、国際都市の上海の紋章で飾られた。民族としての自尊心は私に書くことを強いた、白軍の移民は国際的500万人の町で、取り替えることのできないチェスやそのほかのスポーツのチャンピオンとなった。私は全く沈黙することを欲していなかった。英語の知識がなく、権利もなく、資本もなくて上海へ来たロシア人達—ソビエト権力は彼らから全てを取り上げた—はここで数千以上の商店を立ち上げた、彼らの何人かの資本はすでに百万ドルまで達していることを。」

すでに遅かった、アルバムが世に出たとき、ジガノフは計算した、資料を集めながら、彼は1万6千回もの訪問を行ったことを。330ページのアルバムの発行部数は1000冊であった。残念ながら、綺麗な紙と大きな写真故に、その原価は高価であった。24ドルの販売価格は、出版における全ての出費をまかなえなかった。1936年から、ジガノフはチェコスロバキアにおけるロシア国外アルバムの代表となった。戦争が開始するまで、この仕事を彼は無償で行った。1939年夏、ジガノフは日本で休息した、そこから、上海の新聞「言葉」に記事を書いた。1940年1月、彼はそれを発行した、出版社「ルーシ」で、別の冊子として。

1941年はロシア人移民には大変な年であった。ロシア人は3つの陣営に分裂したのである：1つの陣営はロシアが戦争で敗北することを期待した、2つめの陣営は起こった出来事に対して自分の関係を決めかねていた、3つめは自分たちの元祖国の勝利を期待した。最後の陣営にジガノフがいた、彼は第一次世界戦争時の自分の理想を忘れていなかった。その年に、彼は小冊子「祖国の防衛について」を公刊した。それに題辞を付けた：「今回、手には鋭い剣の代わりにペンを持つ。敵意と侮辱がなく、見解を異とする兄弟に対する兄弟のように、ベットには重病の母が。」この小冊子の最後の言葉に、愛国者ジガノフの心の叫びがある：「今、ロシア民族に対してこの悲惨な時に、ロシアの西の国境線2000ベルストに沿って、村、森、町が赤く燃えている。その時我々の兄弟の血が大量に流れている。私は上海でロシア人に話しかける、最後のロシア皇帝キリル・ウラジミロビッチ（ニコライ二世の処刑後に、名目上のロシア皇帝を称した *）の言葉を持って：「民族的意識がロシアで強まっている、近づく解放の兆候となっている。陸軍と海軍はそれがしみ通っている、赤の名前を帯びている間は。彼らはロシアの力となっている、それはロシアを外部の襲来、内部の崩壊と共産主義の抑圧から救うことができる。」

ジガノフは少なくない危機を聞いた、自分の住所で、ロシアにとって困難な年に。ロシア軍の勝利は論争を止めた、移民達全員は突然に愛国者となった。ジガノフ自身—彼の父は16年間ソビエトの収容所や刑務所に収容されていた—はこの突然の熱狂を支持できなかった。50歳の時、彼は回想記を出版した、「白軍の移民の懺悔」という題名の。その本で、彼は語っていた、「新しいロシア」への帰還を拒否した理由を。中国からオーストラリアへジガノフは移民した。そこで、1970年代初めに、祖国の自由のために戦い続けていた彼は、雑誌「過去の様子」を出版した。彼は自分の冊子「上海のロシア人達」の第2版を出版したかった。が、生きてこの考えを実現することを、死が遮った。ウラジミル・ダニロビッチ・ジガノフは1978年10月16日亡くなった、シドニーに葬られた。

インデギルカ号の惨事

ソビエトの極東領域—沿海州の南からチュコトまで—で、1940年代初めには、10万人の囚人達が働いていた。全ては戦時の課題に従属されていた。戦争はいつでも人的惨事である。ナホトカでは、起重機のバケットで船倉にアンモナイト（爆薬の1種 *）の爆発物を詰め込んだ、石炭のように。同じ船の幹部士官の船室には、雷管を詰め込んだ。内務人民委員部の関係者の無責任さの結果、時折、露骨な黙認で多くの船で爆発が起こった。そして、多数の人々が犠牲になった。

これを阻止することは、もちろん、誰もできなかった。海洋地方の太平洋監督局の局長アゲーフは、航海の安全の権利の目に余る違反に関して、極東汽船会社の船の一隻の出港を阻止した。その船には、1万人の囚人が乗っていた。アゲーフの磨かれた剣の元（？ *）で、内務人民委員部のダリストロイ号の沿海州局長シリバノビッチ大佐へ送り出した。彼はすぐに決定を取り消し、船を出港させるよう命令を出した。彼は付け加えた、「さもないと、監獄に一人の囚人も居なくなる・・・」 内務人民委員部の指導者の良心が咎めたのはインデギルカ号だけではない、ダリストロイ号、ビボルグ号、将軍バツーチン号でも。

乗客12名以下の、大きくはない3千トンのインデギルカ号は、荷を積んでウラジオストクを出航した、1939年11月23日に。12月1日夕方、ナガエボ港に到着した。蒸気船の船長は58歳のニコライ・ラブレレンチエビッチ・ラブシン。彼はこの航海までバルチック海にいた。

その前に、インデギルカ号はアルマン河口に立ち寄った。そこで、家族を伴った労働者達を乗せた。ナガエボで、乗客数は数百人となった。特別護送隊が囚人達を運んでいた。仕事の見直しとモスクワ郊外のシャラシカで使役するために。ウラジオストクでさらに50人を乗せた。835人は刑期を終え、故郷へ帰還するところであった。が、彼らを護送隊が同じく同行した。ラブシン船長、船長の主任補佐クリシェンコ、次席補佐ペスコフスキイは努力しなかった。インデギルカ号は人を沢山収容できる状態にないと示すことができなかった。海洋輸送ダリストロイの長であるコルサコフが遅延なく船を出すように命令をした。ナガエボ港長スミルノフは命令に従った、船の船長は挙手の敬礼をするだけであった。後になって、コルサコフとスミルノフは、あの悲劇の航行で犠牲となった人たち、*****。

インデギルカ号の船体には全部で、1000人以上乗っていた。彼らの安全については誰も気にしなかった。船の救難用具の数は、各40人乗りの2隻のボート、乗組員の数だけの救難バンドと12個の浮き輪であった。それでも、見積もりは当てずっぽうであった。当時は通常と思われていた。説明書は検査官のためにだけ書かれていた。状況を悪化させたのは、第3、第4の補佐役は空席であったことである。

乗客は船倉に入れられた。漁夫達は船尾の船倉にいた。囚人達は船底の船倉、船首の船倉を占めた、護送兵達はその上に入った。35歳の護衛隊指揮官コピンスキイは革製ジャンパーに拳銃を持ち、乗組員にさえ禁止した、船の船首部分に行くことを。1つの牢屋に*****はいなかった事を付け加えておく必要があるか？ 人々は裸の床に雑魚寝

し、ゴミと湿気の中で。医者も薬もない状況下で。

1939年12月8日、10時に、蒸気船インデギルカ号はナガエボ（マガダン州、オホーツク海 ＊）を出港した。公的には、船には39人の乗組員と1134名の乗客が乗っていた。後になってわかった、誰も正確には知っていないことが、どれだけの人が船に乗っていたのかを。例えば、日本人は1125人と数えた。

12月11日の昼、突然北西の風が吹き始めた。時間追おう毎に風は強まっていった、波は高まっていった。インデギルカ号がラペルズ海峡（宗谷海峡 ＊）にさしかかった時、天候はさらに悪化した。嵐となり、雨はひどい雪と変わった。突風で追い立てられ、厚い壁のような雪が周りを覆い隠した。雪に覆われた甲板は完全に氷で覆われた。厳しい寒さとなった、船員達は機関室に隣り合っている石炭貯蔵庫を開放した、そこへ女性と子供達を移動させた。

12月11日夕方、19時15分、船長の主任補佐であるクリシェンコが当直に立った時、約4マイル北にある灯台「アニバ」を真横に見て通り過ぎた。船長の命令に従って、新しい航路をとった。後になってラプシン（インデギルカ号の船長 ＊）は証言した、「アニバ灯台のところで航路を変えた時、2人の補佐に警告をした。もし灯台が見えなかったり、はっきり確認できないならば、航路を変え、朝までにアニバ湾へ行こう。しかし、私はドリフトを採らなかった。というのは、インデギルカ号はバラストと大きなトリムで、風には強いと以前に確信していたので。私は測鉛を投下する必要はないと見なした、この位置は安全であると考えたので。それ以外に、この水深は全く十分であり、灯台「暗礁」の明かりをとらえ、それ以上に確信した、それを迂回できると。」航海士の補充がないことで、船長は20時から24時まで当直を務めた。

12月12日深夜、船長の次席補佐であるペシコフスキイが当直となった。船長ラプシンは彼と一緒にブリッジに立った。天候はだんだんと悪化していった、船は完全に吹雪で覆われた。船に乗客が存在していることは、操船において特別な注意と警戒心を要求した。ところが、船長は当てずっぽうに進んだ、ラペルズ海峡を通り過ぎることを期待して。嵐を無視して。荷物がなくて、大きな風圧の面積を有している、インデギルカ号は左に大きく流された。それ以上に、1時20分に、船首の右側に灯台の火を確認し、船長と当直補佐はこれを間違っ「暗礁」灯台だとし、航路より右側にいると判断した。後になって、航海士を告発している、航行に不適切な気象条件下で、位置の推算の間違いの可能性の元で、船の位置の確定に一度も手段を講じなかった、測深の手段をもつての。簡単にいえる・・・ 荒れ狂っている海で確かな測深を試していたならば！

時間がたつに従って蒸気船は軟氷の中を進むようになった。激流の中で速度は8.2マイルから8.3マイルに達した。2時15分、補佐は右方向に明るい火を見た、向かってくる蒸気船のハッチの明かりとそれをとらえた、そのように並んでいた。その時、前方に白い砕け波の跡を見つけた、船長は「右舵！」の指示を与えた。風で旋回ができなかったので、船長は「左舵」の命令を出した。風で押し流されている船は急速に左に動き出した。「後進をすることは、私はまずいと見なした、とにかく、白波の跡に接近しているので、エンジンは後進の機能はできなかった。これ以外に、船は全く空であり、船尾に大きなトリムを持っていた、風は右から、後進すると、大きなドリフトを受けよう。」それから約5分後、岸の気配が現れたかのように、船は左舷の水中部分に衝撃を受けた、2番船倉の

ところに、暗礁から。その後、機関に「停止」の命令を出した。スクリュウは岩礁との衝突で動かなくなった、機関は故障した。船の底で恐ろしい轟音がとどろいた、爆雷の爆発に似た。船の明かりが消えた、完全な暗闇の中で、乗客の中にパニックが出た。インデギルカ号が傾いた、流れによって、船が動き、岸から800mの浅瀬に、浜尾西別地区の。船は急速に右に傾き始めた、が沈まなかった。船長は遅れることなく水を測深し、全てのポンプを駆動するように伝えた。

蒸気船は衝突した、岩礁「アシカ」に。猿払村の海岸から1500mところに位置していた、北海道の宗谷地方の。2時20分に、穴が開いた。2時40分まで船は浮かんでいた。その後、約1マイルほど南西に流された。暗礁で右舷に大きな打撃を受けた。船は大きく傾いた。操舵室、航海室、無線室が壊れ、水中に没した。海水が船尾の船倉から板と防水カバーを剥ぎ取った。それらで船倉は覆われていた。傾斜が70度になり、海水の強い寄せ波により、上甲板にいた乗客のグループが洗われた。波が来る毎に、恐怖で泣き叫ぶ数十人の乗客を船から流し去っていった。恐怖で多くの人々は理性を失った、お互いに掴み合っていた、そして奈落で死んでいった。船首部分に巨大な穴ができた、そこには囚人達の入っていた1番船倉があった。ラブシンは、船倉から全員を連れ出すように乗組員に命令を出した。が、船倉のところの狙撃兵が出て行く者達に向かって射撃をした。後になって話した、彼は射撃を始めた。4番船倉で、元囚人達が入り口をバリケードで遮り、乗客の略奪を始めたので。

2時50分、インデギルカ号は海底に完全に右舷側で横倒しとなった、水深は9m。水面から4mほど突き出している。暗礁での最初の衝突の時、無線でSOS信号を送信していた、しかし、一隻も近くには来なかった、緊急救助は誰もしてくれなかった。船と乗員の救助を期待して、船長は岸近くに乗り上げようとした。が、エンジンは動かなかった：後になってわかった、スクリュウは舵の枠に挟まってしまったことが。無線士にSOS信号に関する命令を与えた。それに蒸気船マニチ号が答えた、日本の通信所と日本の蒸気船も。パニックで、船長は図面と冊子を持てなかった、大きな傾斜で船長室に入り込むことができなかった。

濃い雪のために、周りが全く見渡せなかった。船員達はボートを解き放ち、水面に下ろすことができた。それに最初に移ったのは警備隊の隊長であった。端を解き放った、ボートは見えなくなった・・・

この後、船は完全に横倒しとなった、水は船倉の波よけ用縁材—1フィートから1.5フィート—まで達していなかった。が、そこに残っていた人たちは外に出ることができなかった：船体に押し寄せる波で彼らをばらばらとした。後になって、何人かは捕まえ、船体に引き出すことができた。何の救出手段も持たないパニックに陥っていた乗客達は、船倉から甲板に飛び出した。そこで、右往左往し、大きな傾斜で船から落ちた。

水面に下ろされた右舷のボートに、8人の乗員が乗った、そのうち4人は勝手に、2人は乗客。彼らは舳い綱を解き、ボートは船から離れた。彼らのうち5人が生き残った：船員の4人と一人の乗客。苦勞して陸地にたどり着いた、彼らは小屋の火に気がついた。岸際に建っている、そこへ行きドアをとんとんした。このようにして、ジイン源一郎がこの惨事に気がついた最初の人となった。寒さに震えている外国人を見て、源一郎は海で何か惨事が起こったと認識した。彼はすぐに弟のジイン源三を叩き起こした。彼は隣に住んで

いた。実際において、異国人の出現を全く違って解釈した、これらソビエトの兵隊達は島に上陸し、急いで救命隊の制服に着替えた者であると。日本人の反応は理解できた：ハルビンゴール（ノモンハン）での衝突後、ロシアと日本の関係は非常に悪化していた。

稚内市の警察署の署長、政治監察官の武市勇は、ジン源三から惨事の通報を受け、救助作業に取りかかるように「北日本」の救助隊の船「ソスイ丸」（25トン）と「三洋丸」（2100トン）に命令を出した。軍にチャーターされていた船「ソスイ丸」に、工兵隊の少佐田辺利一が乗った、宗谷管区の防衛設備の建設部隊の司令官。彼は電話で知った、宗谷の地方支所から、ソビエトの船が浜尾西別地方の猿払村の海で遭難し、救助を求めている。「ソスイ丸」は稚内港を現場に向かって出港した。しかし、酷い嵐のために、宗谷岬を迂回することができなかった。稚内に戻らざるを得なかった。天候の回復を待った。

インデギルカ号の救出に関する仕事が展開されている間に、5人の外国人達は寒さで震えて、日本人の漁師の家の囲炉裏の周りに座っていた、が、彼らを暖めてはくれなかった。内部から暖める必要があった。ジン源一郎は彼らに焼酎を与えた。その後、彼らは少しずつ生氣を取り戻した。

夜12時に、風が止んだ、少し天候がよくなった、インデギルカ号から岸で手を振る人々を見つけた。水兵の一人が小旗で信号を送った。岸から返信があった。人々は聞き耳を立てた、知らないまま、何が待っているのか。船乗りは彼らを落ち着かせた、救助が来ると語って。皆が陽気になった、酷く凍えていたにもかかわらず。

次の日、12月13日、波浪は少し治まった、田辺利一は「ソスイ丸」の船長土門光男に命令した、船を出航させるようにと、夜明けを待たないで。船の安全の全責任を彼は負っていた、事故が起こった時には、切腹を覚悟していた。

朝6時、沈没した船に明かりが見えた、それは1分ごとに、明かりは強弱を繰り返した。皆が口をそろえて騒ぎ始めた：「救助が来る！」夜が明けた時、2隻のボートを見た、それらはインデギルカ号から20mのところを碇を下ろした、蒸気船に向かって後進で接近し始めた。大きい波が甲板より高く持ち上げた。縄を投げた、縄は届いた。最初に女性と子供を下ろすことが説明された、が、後でこれは取り消された、波と他のボートの接近を引き合いに出して。これは辛い船積みであった！ロープを巻き付けた人を何度も往復させた、うまい時を選んで、被災者が船体で押しつぶされないようにするために。

少し遅れて、日本の蒸気船「樺太丸」が接近してきた、インデギルカ号から1マイルの所に碇を落とした。ラブシンが書いていた、「すぐに、エンジン付き救助ボートが近づいてきた、他のボートと一緒に人々を救助することを伝えてきた。その後、日本の蒸気船に戻っていった。約1時間後に戻ってきた、後ろから小型の2隻のボートが、1つは救助用、もう1つは普通の。その後、乗客の受け入れを始めた、小型のボートは一往復しただけであった。実際において、直に、2番目のボートがやって来た、それらは一緒になって何回か往復した、乗客全員を乗り移した。船長は最後であった、無線士と次席補佐を除いては、彼らを私は早めに送り出した、ウラジオストク或いはナガエボへ無線をすることを委託して、彼らには許されなかった。最後に私は船を後にした。船倉中の人々は残留した、が、彼らを救助することができた、ガス切断で船体を切り開くことで。」彼は自分の船を離れ、蒸気船「樺太丸」に移った。彼が指揮をしていた難破した船の船倉に、まだ200人ほどの生き残っている人々を残したまま。彼らは上に抜け出すことができなかった、

船が横倒しとなっていたので、ハッチは水で洗われていた。難破した船を捨て、船長は船倉に残っている人に予告が必要とみなさなかった、彼らの存在については上層部は知っており、彼らの救助が行われるであろうことを。結果として、4日間に渡って救助のない状態にいた人々は、彼らについて上層部は何も知らないと自ら結論を出し、自殺をもって人生を終えた：身投げしたり、或いは静脈を自ら切断した。

6時間にわたって日本人が行った必死の努力の結果、インデギルカ号から311人が救い出された。日本の船に全ての人乗り移った後、船は稚内港に向かった。12月13日にそこへ到着し、船長はすぐに蒸気船「樺太丸」の代理人と港湾警察の長に説明した、「インデギルカ号」の船体にはまだ人が残っており、ガス切断装備を持ってボートをすぐに派遣する必要があると。彼に、12月14日に派遣することを約束したが、嵐は続いていた、後になって彼は領事から知ることとなった、救助は12月16日になったと。この日に、インデギルカ号に3回目として、「ソスイ丸」と「三洋丸」が向かった。船の船体に穴を開けた、そこから28人の乗客を引き出した、彼らには日本人のロープの端に捕まる力が残っていた。非力な人や病んだ人は捕まることができなくて、破滅の運命となった。しかし、救助された28人のうち、一人が亡くなった。

4番船倉ではこれは行われなかった。

ジン源三、佐藤浩一郎、彼らの仲間の行為は、日本人の剛胆さの例とすることができる。タオルでできた細い巻物を頭に縛り（はちまき）、1枚の大腿部の包帯（褌）で、彼らは凍って荒れている海を、小舟に乗って、インデギルカ号までたどり着いた。丸窓を壊し、それを通して船倉に入った、彼らは3人を助けた。彼らが全快するまで、漁業会社の代表である細井仁史郎のところで介護した。その後、チライベツ港から救出された者達を、船「龍宝丸」で江差湾まで搬送した。当日、「ソウシ丸」と「三洋丸」で救出された残りの25人は江差湾に「三洋丸」で運んだ。そこで彼らに医療が施され、その後、陸路で小樽に運んだ。初日に救助された402人は15日に小樽に到着した、「樺太丸」に乗って。

岸壁に皆が立つやいなや、船でソビエトの領事チホノフが現れた。船頭を彼は買収したという噂が立った、船頭は彼を夜に運び、隠れて上陸させたと。チホノフはロシア人に近寄り、全ての書類、党员証、コムソモール証を破棄するように船長に伝えた。探索において、それらが日本人の手に渡らないようにするために。囚人達には、「極東漁業生産」の労働者であるというように命令した、裁判の再審の時、算入されると。上陸に当たって、日本人は救助された者達を調べた。が、目撃者は思い出し語っている、これはそれほどしつこくはなかったことを。

立派な建物に全員を移した。船の難破の犠牲者に哀悼を示しながら、日本人達は医者、赤十字の代表者を派遣した。多くの使節団がやって来た。救助された中に子供がいると、住民達は彼らに衣服、履き物、オモチャを持ってきた。目撃者が追想していた、「日本人女性は子供達に気を引かれた、あたかも自分の子供かのように。一昼夜、子供を抱きかかえていた。沢山の子供達の写真が撮られた。」日本人は全ての避難者の目録を作ることを要求した。書き取りが終了した時、広間には312人いることがわかった。

日本人はロシア人に町へ行くように勧めた。が、ソビエトの領事チホノフは思いとどまらせた：いろんなことが起こりえるということ。「かつて、彼は私たちに凶で、警察と賭場を示した、そして警告した：君らは余計なことをべらべらとしゃべるのを少なくせよ、

彼らは全てがわかる。君ら以上にロシア語を話す」。この後、我々を麻痺させた。通りに面しているドアに近づくことを止めた。かつて、チホノフが我々に話した：「すぐに、君らを尋問に呼び出すであろう、何も知らないと話せ。タバコを勧められても、取るな。指紋が残り、後々よくないこととなる。」さらに彼は話した、我々は無事に済んだと。1月前に、ハッサン事件（日本名で張鼓峰事変 *）で日本人は我々の蒸気船を拿捕した、同じく工場から労働者達も。1月にわたって彼らを監獄に入れた。食事の後に、私を尋問に呼び出した。私は部屋に入った。そこに2人がいた。机の向こうに座っている日本人が、愛想よく少し腰を浮かした、会釈をし、座った。しっかりしたロシア語を話した、アクセントなしで。私にタバコの箱を差し出した。私は我々の領事を思いだし、語った：「タバコは吸わない。」実際において、私は普段においてもタバコを吸っていなかった。日本人は私に問いかけた、ハッサンでの事件について日本の新聞は何を書いているのかと。私は答えた、このときには漁業工場にいた、漁師まで新聞は届いていなかったと。私に聞いた、私が読み書きができるのか、軍務についたことがあるのかと。彼らは興味を持った、タウイ川の深さはいかほどか、埠頭があるのかについて。全てに答えた：読み書きはできない、軍務にはついたことはない、川に行ったことはないと。」

ようやく、蒸気船イリッチ号がやって来て、小樽に投錨した。日本人が説明をした、まだ全員を火葬仕切れていないと、遺骨の入った壺を親類に引き渡すことができていないと。何台かのバスに分乗し、縦隊で町の通りをゆっくりと進んだ。バスは商店のそばを通過した、それらのショーウィンドウには、動物の胴体の肉、モモ肉、ソーセージ、バナナ、梨があった。イリッチ号で、ソ連通商代表部の一人の労働者が説明していた、日本人が特別に展示会を設定してくれたと。彼ら自身は食うや食わずの生活をし、米を大ききで分け、東京から食料を運んできている、ロシア人を誤解させるために、国における仕事の本当の状況に関して。実際においてそうなのかどうかは、言うことは難しい。が、インデギルカ号の乗客と乗員の救出において、日本人は素晴らしいことを示した：同情、寛大さ、援助の準備。「体験したことを思い出し、我々の救助に対して日本民族に感謝を、私は言葉にしたい。平身低頭してお辞儀をする。何度も何度も繰り返す「ありがとう」を。」

当時の日本の新聞の記事や他の資料によれば、インデギルカ号（遭難は1939年12月12日、宗谷岬の東南岸の浜鬼志別付近 *）には乗員39名と乗客1125名（そのうち105人が女性と子供）が乗っていた。全員で1164名。最初、12月13日に、395人が救助された：乗組員の27名、漁師の311名、女性35名と子供22名。インデギルカ号にいた人のうち428名が救助できた。特に35名の兵士、745名が犠牲となった、乗組員4名を含んで。

イリッチ号で、救助者を祖国へ運んだ。1939年12月26日、蒸気船はアスコリド島に着いた。そこで、小型の砕氷船カザク・ポリャコフ号が出迎えた。その船からイリッチ号に、国家保管局の何名かの責任者と約50名の兵が乗り込んだ。インデギルカ号の乗客達を船倉に入れ、番兵をおいた。ウラジオストクの埠頭に、船は深夜に止まった。

岸に降り立った者達には書類も金もなかった。目撃者達は思い出していた、被災者に損害は補償されなかった。国家保安局側から彼らに信用はなかった：疑っていた、日本人が遭難者達をスパイとして徴募したのではないかと。噂が広まった、救助された子供全員がすぐに亡くなったと：冷えすぎと精神的緊張。

1940年1月15日、ラブシンとペスコフスキイを逮捕した。2月13日には、クリシェンコとコピチンスキイを。ラブシンとコピチンスキイは自分の責任を全面的に認めた、ペスコフスキイとクリシェンコは部分的に。軍事検察官が仕事を審査した。惨事の原因を、船長ラブシンの未熟さによると判じた。以前彼は全く違う航海地区で働いていた。報告書に納得する、船長ラブシンの航海地区の無知が裏付けられた、航行したことの無い時期に、彼は2人の航海士と航海に出た、その際、上級航海士が航海に出発するまでに去っており、ラブシンは彼の職務を次席補佐ペスコフスキイではなく、その下のクリシェンコ、昨日の船乗り－短期間だけ短い航海をした航海士－に委ねた。それ以外に、回転用灯台「アニバ」を発見しないで、回転点を知らないまま、等深線を確定しないで、船長は海峡の航路をとり続けた。ついには、雪嵐による視界の悪い中、彼は許可した、暗闇の中に浮き出した明かりを岩礁灯台と間違えた。結果として、ラブシンを重刑に処した、コピチンスキイとペスコフスキイは10年の強制労働刑に、クリシェンコは5年の。

もちろん、極東における最大級の事故の原因に、スターリン体制があった。が、乗客の大人数の犠牲の原因に対しては、インデギルカ号の乗員に責任がある：彼らはすぐに船から逃げ出した、船に乗客を残したままにして。乗組員の犠牲者は4名である。最初にパニックとなって船を捨てた。インデギルカ号の惨事について公的な報道はソ連でも日本でもなされなかった：船はソ連邦に属していた、この船は日本では敵国のものと見なされていた。日本は犠牲者の遺骨を全てソビエトに渡した。それ以降どうなるのか推測するだけであった。多分、遺骨はウラジオストクの海洋墓地の共同墓地に埋葬された。が、これについての何の証拠は未だ見つかっていない。

南サハリン(南樺太)

サハリンにおけるロシアと日本の関係は単純ではなかった。トリャピチンによる北サハリンの占領は1925年5月まで続いた。ヤクート民族であるドミトリイ・プロコフィエビッチ・ビノクロフは日本人に活動の援助を与えた。彼は自立性に秀でていた、それが原因でサハリンに来ていた。自分の上司との厳しい喧嘩の後、24歳のドミトリイは逃げ出した。1910年頃、彼はオハに住んだ。最初彼は石油採掘に夢を託した。その後、幼年時代になじんでいた鹿の養育に戻った。天賦の閃きと行動力は彼をあっという間に成功へと導いた。ドミトリイはチム川の右岸に移住地パルカタを建設した、原住民は彼を「鹿の王様」とも呼称した。

国内戦時、日本によって占領されたサハリンで、ドミトリイは重要な役割を演じた。彼はパルケトで盛大なもてなしを行った。一度ならず日本の占領軍を出迎えた、ヤクート民族の独立の確立への援助を呼びかけながら。北サハリンからの日本人退去後、ドミトリイはそこに残った。ソビエト権力が彼の日本人との関係を知らないと言うことを期待して。利権政治(？*)が何度も宣言された、地方ではネップはまだ感じられなかった。が、彼の希望は正当化されなかった、1926年春に彼を逮捕した。勘と成功は進取の気性のあるヤクート人にそっぽを向かなかった。彼はすぐに国家保安局の秘密の職員になること

に同意した、それにより命拾いをした。これについてはあまりはっきりはしていない。若干の証言からすると、ドミトリーは南サハリンに逃げた。他の面からは、推定することができる、日ロ国境付近での彼の活動についてのスパイの証拠を得るために、彼を日本側に送り出したと。

日本の権力は、おきまり通り、ヤクート人の経営者を受け入れた。北サハリンの彼の知り合いの生活について彼から証拠を得ることを期待して。彼らはドミトリーに新しい移住地オタスを建設することを許可した。直にそこへ、客として、日本の重要な役人が足げく通うようになった。3度、ヤクート人は東京を訪れた。日本に促す目的を持って、ロシアの極東を襲撃し、ヤクートの独立を宣言するという。彼は忘れていなかった、ソビエトの組織に暗号を書くことを。ドミトリー・ビノクロフは積極的に移民グループと交流を深めた。1934年、彼は極東のロシア移民団の特別全権代表となった、ヤクーツク地方に関する国家保安局とドミトリーとの関係は、日本人に気がつかないではいられなかった。1938年、彼を逮捕した。多分、その時彼は寝返った。58歳のドミトリーは1942年に、オタスで、病で亡くなった。彼を毒殺したという説は存在している。

若干の学習書中の語彙が予想させてくれる。日本の占領軍のために、会話集が印刷された、ロシア人の住民との会話が必要とされた。例えば、豊原（南サハリンスク）では、教科書が出版された。それには、次のような内容の会話があった：「君はここで何をしているのか？－私は何もしていない。－ではなぜ君はここに？ 橋を壊した？－私は何も知らない。」その他。

1920年頃、アレクサンドロフスク町で、季節労働者として働いていた一人の日本人が思い出していた、地域の子供達（多分、ロシア人）の侮辱的な口遊。

1. 日本助はマリンキ、ロシ助はポリセイ。

日本人は小さい、ロシア人は大きい。

2. 日本助が歩く、一本助が歩く。日本人（2本の杖を持った男）は悪い、日本人（1本の杖を持った男）は悪い。

これら悪口の「韻を踏んだ言葉」中のロシア語は、日本化を受けた：子供はロシア語で歌った。が、それを聞いた人は、混種語として文章を覚えた。

1945年秋には、南サハリンに約100人のロシア人が住んでいた。日本との戦争の後、状況は完全に変わった。オハに、第22番収容所が出現した、そこに、約2000人の軍事捕虜が収容された。その後、サハリン各所にいくつかの収容所が造られた。それらにはオトハラ（最近のコルサコフ）に分宿していた第306部隊の職員が入った。同じく南サハリンから国境警備隊の隊員と警察が。

ソビエト権力は、日本人に「ソ連邦に友情と愛着を持つ」という教育に努力を傾けた。クズミナが特記していた、「日本人は十分に理解していた、「民主主義に鍛えられた者」が最初に祖国へ帰還することを。それ故、休息时间や療養中にマルクス・レーニン主義の原典と絶縁しなかった。元軍事捕虜は日本の共産党を補充しなけりなかつた。しかし、後になって明らかになったように、日本人のほとんどは社会主義思想に同調しなかつた。偽善の授業（？ *）で、彼らを教育した、彼らは素晴らしい生徒であった。その後、帰還者の一人が語った、「しかし、この雰囲気は段々と消え失せていった、お互いに密告するように捕虜達に教えたので。」 更にはもう一つの興味を引く書類がある－第22番

収容所の機動－チェキスト局の仕事について。局は始めた、スパイ情報ネットの構築に関する仕事を1946年3月から。」

ソビエト政府は50人の日本人を徴募した。彼らは報告をしなければならなかった、日本人捕虜の中の雰囲気について、彼らの逃亡の試みにについて。露日の関係の歴史において、似たようなことがあった：その時に、日本権力は、ロシア人移民の中にスパイを徴募した。ソビエトの捕虜の身分にいたにもかかわらず、多くの日本人達は普通のロシア人やロシア文化に良い関係を保った。彼らのおかげで、日本においてロシアに関する大きな興味が起こった、ロシアレストランやロシア商店が現れた。

日本におけるアメリカ占領軍は、北の隣人に大きな関心を示すようになった。1952年、そこへ、ゴルベフが送り届けられた、サハリンにおける具体的な状況を説明することを課題として持たせて。作戦は失敗した。すぐに国境警備隊が彼を捕まえたので。

「生まれ故郷で彼が捨てたものは・・・」：ロシアからの逃亡者

1854年10月、函館から他の国を知りたがって、初めての日本人が出て行った。当時、日本は鎖国をしていた。そこから抜け出すことはきわめて困難であった。鉄のカーテンで他の国から仕切られたソ連邦は、封建制度の日本に若干似ていた。自由世界を見聞するために、1975年9月に、空軍飛行士ビクトル・ベレンコ中尉は、ソコロフカから函館へミグー25戦闘機を乗り逃げした。

ビクトル・イワノビッチ・ベレンコは1947年2月15日生まれた、北カフカスの村で、父が戦争から復員した後の1年後に。父は1941年に前線に招集され、破壊工作を教育され、パルチザンに追いやられた。父から、将来の逃亡者に冒険的性格が伝えられなかったのか？

父は意志が強く厳しい人物であった。妻との離婚後、彼は2歳の子供を連れて、故郷のドンバスへ移った。母親に子供との面会を禁じた。直に、彼はシベリアでの仕事に雇用された。ビクトルは祖父母と小さい炭鉱村で生活することとなった。彼は勉強に夢中となった、大好きな作家はレールモントフであった。ビクトルは彼の詩だけではなく彼の個性にもあこがれた。認識することは悔しかった、詩人の素晴らしい人生が26歳で悲劇的に中断したことを。詩を読みながら、ビクトルは気がついた。詩に、詩人の心は束縛からの自由を枯渇していること、自由になることを・・・

オリガ医療学校の、ビクトルの同級生の回想に従えば、「彼は危険なことにあこがれていた、蜜に向かう蜜蜂のように、恐怖に打ち勝つ他の方法を学んだ。」勉強以外に、ベレンコは死体安置室で働いた。オリガのそこへ行った、遺体に冷静に対応することになれるために。ビクトルは医者－宇宙飛行士になることを夢見ていた。オムスクの航空クラブに登録した。そこで、練習用飛行機で飛行すること、パラシュート降下をすることを始めた。「ビクトルの飛行を見た誰もが、彼には才能があると見なした。空では、彼はまさに水を得た魚のようであった。自分はまさに飛行のために生まれたものと感じていた。秋に、最終試験の時がやって来た。最終飛行の後、中佐－キャビンの後ろに座っている－が

彼の手を握り、素晴らしく成された課題を祝った：「素晴らしい、若者よ。空軍で君を見かけることを期待する。」

1年後、ベレンコは医療学校を中退し、アルマビルスク飛行学校へ入学した。すでに逃亡の、だいぶ後になり、機関は証拠を見つけようとこことみた、青年の背信的な意向についての。残念ながら、何も見つからなかった：彼はヨーロッパでの生活には全く興味がなかった、特に、アメリカでの。ビクトルは1973年にイランへ飛び去った。元飛行士でアルマビルスク飛行学校の教官サフロノフを非難していた。が、このことが後になって、彼を行動にけしかけたのかもしれない。

学業を素晴らしい成績で終了し、ビクトル・ベレンコはサリスクのスタブロボリスク飛行学校の教員となった。この任命は彼を満足させなかった、上級中尉は復命書を何度も書いた、他の飛行部隊へ彼を移送させることの要望を持った。何回かのスキャンダルの後、彼は極東に派遣された。そこへは若い家族を伴った。妻のリュウドミラと息子のディムカを。

防空の第513戦闘機航空隊、ここでの勤務がビクトル・ベレンコを待っていた、小さな沿海州の村ソコロフカの外れに位置していた。地区中心地チュグエフカからあまり離れていない。部隊は1951年にダリャン（大連 *）で組織された、朝鮮半島での戦争の初期に。中隊の指揮官代理、ベレンコ上級中尉（それで、彼に指揮官の肩章を手渡すこととなった）に新しい戦闘機ミグ25での飛行を委ねた。

新地での勤務で、半年後、ベレンコは自分の立派なところを見せた。彼にとって新型の飛行機で再訓練講習会を上手にやりこなした。中隊参謀長の職務を代理することを命じられた。党事務局の書記長次席に選出された。自分の状況に対する不満や不便さを語ることはなかった。初めのうちは、彼の行動には何の否定的な兆候も見られなかった。彼の行動の奇妙さは、1976年7月頃に顕著となった。彼は神経質になり、酷く興奮するようになった。大尉の称号の授与と中隊参謀長の約束された職務への任命の遅れを病的に苦しめていた。不断において隊員ともめ事を起こした。このように、1976年9月3日、司令部の廊下で、部隊の司令官シェフツォフに出会ったベレンコは、挑発的な様相で彼に苦情を語った。司令官は廊下で自分に対する態度に憤慨した、将校に警告を発した。質問に返答しようと努めた。しかし、返答はベレンコを満足させなかった。

他の日に、教習中に、将校達の在席の元で、部隊の司令官が前日に彼にベレンコが出した質問に戻り、詳細な説明をした。在席していた将校達はわかった、司令官はベレンコの行動を出世主義の表れと評価していると。すると、シェフツォフに腹を立て、急にカットなり、見せつけるように教習から帰宅した。その日、彼は中隊の司令官の命令を遂行し、担当の当直に着くことを拒否した。そのような義務は飛行大隊の参謀長だけが遂行することができる理由を挙げて。彼はそれではなかった。多分、北海道までの飛行を行った9月4日に、ベレンコは祖国を捨てることを最終的に決めた。この構想は彼の部屋の搜索時、台所で見つかった。

この時には、ベレンコと妻との関係は決定的に破産していた、彼らは離婚をすることに決めていた。「一昼夜に12時間働き、まれにビクトルは子供の面倒を見ていた。彼らの関係は次第に、無口の反目が変わっていった・・・」すでに、飛行士を祖国に止めておくことは何もなかった。

内紛の状況にもかかわらず、9月6日、ベレンコは計画飛行に組み込まれ、飛行場にやってきました。その日は、ミグ班は、高度な飛行術の旋回運動と空中の目標の迎撃に習熟することであった。最初の訓練飛行の後、ベレンコは再び飛行大隊の司令官に、彼への勲章の授与を遅らせていることに対する不満を語った。

彼が定期飛行のために、戦闘機に向かった時、パイロットの一人が気がついた。ベレンコが青ざめて、顔と首に赤い斑点があることに。操縦席に座った後、手が震えるので、長い間、送受信機の数値あわせができなかった。これを同僚達は結論づけている、「ベレンコに特徴的な突発的神経性の興奮が、日本への飛行を遂行するという決断に影響を与えた。明らかに、司令部との最も緊張した関係の時に、これが起こった。1976年9月4日から6日。」

—離陸してよろしいか？—ベレンコは無線で伝えた。

—0-6-8、離陸を許可する。

—了解した。離陸する。—ベレンコは滑走路へと飛行機を滑走させ、離陸帯に導いた。離陸帯での旋回の前に、彼は停止した：そこには4機のミグが止まって、離陸待ちをしていた。自分の番を待たなければならなかった。交通信号機の緑と同じように、緑信号が離陸開始の権利を与えない間は。

ミグは次々と地面を離れ、鼻を高くし、上昇して行った。ベレンコの番になった時、彼は少し見合わせた：彼は祖国の地を最後としてみておきたかった。彼は祖国の空間、森、祖国の素晴らしい寂しげな自然を本当に好きであった！小さい時から、彼は森や原っぱを散策することが好きであった、雲の戯れに見とれる、香りの良い匂いをかぐこと、鳥の歌声を聞くこと。自然と一人ぼっちで、飛行機の操縦席で、彼は自由を感じた。」人生で見たこともないようなパノラマを期待して。パイロットは高度計をちらっと見た：600m・・・、500m・・・、300m・・・ 高度250mで、密で低い雲がぱっと広がった。すぐに、真下に滑走路を見つけた。これは、彼が行こうとした千歳にある軍用基地でないことを確認した、民間空港であると、函館の。パイロットはとにかく着陸しようと決断した、タンクの燃料の残りはごくわずかであった。視認で確認した、この滑走路はなれていた空港より約3分の1の長さであることを。しかし選択は残されていなかった。大事なことは、飛行機を壊さないこと。

機体を右へ急速に向け、260度回転し、着陸帯に近づいた。が、その時彼は見た、彼に向かって、旅客機ボーイング727が離陸してくるのを。ミグのパイロットには自信がなかった、進入のやり直しに要する燃料があるのかの。燃料系の指針はゼロ付近で震えていた。彼は、戦闘機に急カーブを取ることで避けることに成功した。エンジンにその能力があったのである。ボーイングの航路を解放し、彼は急角度で急降下し、時速360kmで滑走路に接地した。減速用パラシュートを撃ち出し、必死になってブレーキがかかるのを待った、ミグが震え始めた、粉々に分解するかのように。脚部のカバーが燻り始めた、機体は中々止まらなかった。飛行機は空港の北限の外に飛び出した、照明灯を壊した、地床に溝を掘った。辛くも大きなアンテナを壊すことなく、滑走路帯の端から300mの所で停止した。前輪の前のカバーが壊れた、他には破損部は見つからなかった。タンク内の燃料の残りは20秒であった。時間は、東京時間で13時40分。日付は1976年9月6日。

自動システムは記録していた、ベレンコは演習帯から海に外れた、250mまで高度を下げて。この高度で、彼は海面上を飛行した、ソ連邦の海岸線から約130km。そのような飛行動作は、専門家の意見によれば、レーダーの追求を逃れたいという彼の意向を証明していると。レーダーで飛行機が捕捉できなくなった時、ベレンコは海上50mの高度を飛行していた。北海道に到達した時、彼はレーダーを避けることを止めた、その時、日本のレーダー基地が飛行機を発見した。日本の航空自衛隊の戦闘機が未知標的を捕捉しに離陸した。「長年にわたり、「ファントム」と出会うことを避ける、或いはそれと戦闘となることを彼に教育していた。今や、彼はそれを救いの天使のように待っていた。彼の計画は念頭に入れていた、日本の防空境界を犯すと、日本人はそれに向かってアメリカ製の戦闘機を送り出す、そして着陸を強いる。」 ソビエト軍のパイロットは予想していた、北海道の千歳にある近傍の軍事基地に着陸するであろうと。しかし、「ファントム」はミグを見つけられなかった。

センセーションが繰り返され、日本のジャーナリスト達はまず自衛隊に押しかけた：防空はどうなっているのか、簡単に勝つことができたのか？ 9月6日の夕方、日本の自衛隊の長である坂田と次席の伊藤が記者会見をした。そこで日本の防空力の低い効率性を指摘し、終わり頃に伝えた。北海道の航空基地のファントムは哨戒状態にあった、地対空「ホーク」と「ナイキ」のロケット支隊は高度準備状態にあった。それにもかかわらず、日本のプレスにおいては、数日間にわたって、厳しい批判が止むことはなかった。

太平洋領域のアメリカ軍の司令部は、日本の情報源から、ソ連の飛行機についての第一報を、飛行機の着陸から3時間半後に得た。日本でのアメリカの代表とベレンコの会合は1976年9月8日に行われた、東京近傍の富津で。

同じ頃、ソコロフカにベレンコの母と親類達が呼び出された。越境者の個性の全般的な調査のために、親類や同僚の中から160人が尋問された。当時、軍の病院で働いていた妻のリュードミラは夫の意図について何の疑いも持たなかった。彼は外国の放送局を聞くことはなかった、それを聞くことも許さなかった。小学校時代の女友達と手紙のやりとりさえ許さなかった、外国人と結婚をし、イタリアに住んでいる。

越境者のパイロットの個人的持ち物を調べると、ベレンコは自分の書類全てを持って行った：出生証明書、身分証明書、運転免許証、卒業証明書、1級飛行士指導者証明書、群学校修了証書。台所の戸棚には数冊の本以外に、下書きが見つかった、ソコロフスク空港から千歳空港と室蘭空港までのミグ25の飛行のための。80%の燃料の給油のもとで、その量は、普通の気候状況でミグ25の飛行のために通常計画されていた。

逃亡の打算的な動機の証拠は、ソビエト側からは得られなかった。パイロットとしての私欲は見つからなかった。蓄財へのあこがれを彼は発揮していなかった。家族の物質面での状況に満足していた。調査によって得られた資料は全体的に、ベレンコが打算的な動機で越境したと見なす基礎を与えなかった。最初は予想された、パイロットはコースを外れ函館に着陸せざるを得なかったと。函館空港でのベレンコの異常な振る舞いがこれを示していた：拳銃を撃ち、写真撮影を許さなかった、飛行機にカバーを掛けることを要求した。日本の警察は緊張した、空港からの連行の時に、彼の頭に網をかぶせ、車の奥に押し込んだ。ソビエト連邦は正道を踏み外した人を元へ戻すように要求した。専門家達のさらなる結論で、装置の客観的なデータ、システムの技術的状态、飛行機の装置についての結論は

示した。強制着陸はあり得ないと。飛行は安全な気象条件下で行われた、全ての高度で海岸線はよく視認できていた。パイロットは太陽を視認し、方向を定めることができた。

この事件の直接の関係者で、熟練したパイロットで退役大佐でキエフ人のアナトリー・マズルが後になって語っていた。ベレンコの妻は3ヶ月間子供と一緒に軍都に平静に暮らした。それ以上に、リュウドミラは夫の給料と配給品を受けていた、あたかも彼が英雄的行為を成したかのように。誰も将校に触れなかった：処罰はなく、ともわなかった。11月になってようやく、防空軍の指揮官総会議で、ベレンコを祖国の裏切り者と認定した。

マズルは、事件の公的な説明とは大分異なった説を持っていた。第一に、ベレンコは簡単に到着できたであろう大きな空軍基地である千歳ではなく、小さい民間空港函館に着陸した。第二に、その滑走路長はたかだか1200m、当時のミグの必要な長さ2500mより短かった。飛行機がうまく着陸することは、ほぼ不可能であった、高々6、7時間の単独操縦を有する。最も大事なこと、ベレンコはそこで期待していた。彼の行動が結論を暗示してくれた：30分の間、彼は飛行機に誰も近づけなかった、空中に拳銃を撃ちながら。彼は期待していた、誰かが彼を向かいに来て、必要な合い言葉を交わし、飛行機を連れて行くことを。

ベレンコの日本訪問についての手続きは拘置所の事務部で行われた。そこで判事が公的な罪状を読み上げた、年配の通訳によってロシア語に翻訳された。ベレンコは、4つの項目で日本の法律を犯した罪に問われた：領空を不法に侵した、ビザ無しにやって来た、拳銃を所持していた、それを撃った。ベレンコは言うまでもなく自分の罪を理解していた。なぜ彼は日本の領空を侵したのかという質問に対して、彼は答えた。この国に来る他の可能性がなかった。飛行機が彼に手頃な唯一の手段であった。拳銃は飛行装備の一つであった、それなくしては飛行許可が得られなかった。射撃の事実を、彼は説明した、飛行機に勝手に人を接近させないためであったと、彼に害を及ぼしかねないため。彼は知っていた、飛行機は西側世界では非常に価値を持っていることを。それを完全な姿で保持したかった。裁判所の判決で示された、特例の事件であることが、無罪放免とすることが。日本の裁判所は逃亡者の計画を乱すつもりはなかった。

ソ連側の要求に従って、逃亡者とソ連側代表の面会が組織された。面会は逃亡後3日して行われた。我々の日本の大使館の職員サドブニコフが部屋に入り、話した：「ソ連邦政府は知っている：君がコースから外れ、着陸を強制され、君に麻酔を打った。私は君が帰国できるように努力をする、愛する妻の所へ、子供の所へ！」ベレンコは彼を遮った：「私を説得する必要はない。私は自分の意思で日本にやって来た。」その時「外交官」（実際には、大使館の安全職務の将校）が目撃者達を前にして、ハイジャッカーを脅した「裏切り者！遅かれ早かれお前を見つけ出す。お前がどこにいようとも！」

代表者の意見によれば、ベレンコは麻薬を打たれていたか、アル中状態にあったと。ソ連邦では、噂が広がった、ベレンコは自動車事故で死んだとの。あり得る、潜在的な飛行機での逃亡者を繰り返させないために、そのような「偉業」の再発を。後になって、ソ連邦最高裁判所の軍事参事会は、当事者不在で、1947年生まれの市民ベレンコ・ビクトル・イワノビッチを、ソ連邦刑法典第64項目「祖国への裏切り」で、最高刑の判決を下した（銃殺）。

本「東-ゲリケートな課題」の著者である、バジム・ソプリャコフは、個人的な感想を

元に、ベレンコ事件について詳細に書いていた。この本の「日本での3年」の章に7ページを割いていた。退役の海軍大佐であったソプリャコフは当時東京における国家保安省の本国代表の次席で、諜報活動に従事していた。彼が書いているように、「日本における諜報機関とソビエト市民の安全の保証」が彼の職務であった。逃亡後にベレンコに面会した、ソ連邦大使館の保安将校サドフニコフ、は彼に従属していた。

外交官や政治家にとっては冗談どころではなかった。すでに、9月7日には、ホワイトハウスが公式に報道した、大統領はベレンコを政治亡命者とする決定したと。同じ時期、ソ連邦が日本に、飛行機とパイロットの遅延のない返還要求の圧力をかけていた時、ペンタゴンでは考えていた、戦闘機を合衆国に運び、地上および空中でその試験をし、保存することを。しかし、国会は見なした、これら全ては緊張緩和の政治に悪く影響し、ソ連邦との関係を複雑にすると。アメリカの政治家達は同じように理解した、ソ連邦側からの圧力下で、日本は同意するであろうと、なるべく早く飛行機を返還し、ロシア人にメンツを持たせるために。

飛行機は日本人には青天の霹靂であった、日本人は「お土産」を持っているとは、すぐには理解しなかった。日本人は余計なことをしたくなかった。が、アメリカ人が介入した：易々と飛行機を戻すために、飛行機がここへ飛び込んできたのではない。事件の調査に、彼らは外務省に援助を提案した。日本人は最初は拒否した、が、「外国の専門家の参加の可能性」を除外しなかった。直ぐに、相互防衛条約に関する同盟国は都合の良い彼らの妥協を見つけた。日本に1月間飛行機を止めておくことが決まった。その期間で十分であった、専門家達が完全に十分達の好奇心を満足させるのには。

同時に、日本人は外交面での抵抗を強化した。外務大臣宮沢喜一は声明した：「我々は考えている、ソ連邦は自分の所の軍人の行動の管理の責任を取らずに、止めどもなく他人を批判し続ける国であると。」その日、日本政府は驚きを顔に出した、ソ連邦は今まで日本の領空を侵害して謝罪したことがないと。そのような急転回に対して、ソビエトの外務省は準備ができなかった。

9月19日、64人の日本人と11人のアメリカ人の専門家達が、アメリカ軍基地に、当時最優秀であった戦闘機を輸送する準備に取りかかった。飛行機は分解され、巨大輸送機「ギャラクシー」に載せ、日本の自衛隊の戦闘機14機を伴い、百里基地へ運んだ。タンクに残っていた200リットルの燃料はエンジンの静的試験を行うのに使用された。推力は11トンであり、スパイによるものと対応していた。その後、2機のファントムがミグに併走飛行をし、高度におけるその放熱スペクトルを撮影した。機体のレーダー装置も加わった。そしてわかったのは、装置の一部はスイッチを入れると故障したことが。金属とガラスの標本も採取された。

アメリカと日本の専門家達が全てを解明した後の10月12日の夜、様々に分解されたハイジャックされた飛行機を13個のコンテナに入れて日立港に移送した。そこでは極東海洋汽船会社の1隻の船が待機していた。ソビエト側は損害賠償の支払いを要求した、「調査」によって生じた。日本側は同意した、日照時間内でソビエトの船内で行為が行われるという条件下で、1日で13個のコンテナ全てを開けることはできないと見なし。包装材の準備に、日本側は板も釘も惜しまなかった。が、彼らは乗組員のやり方を教えなかった：筋骨たくましい若者達が急いで全てのコンテナを掃いてかたづけた。結局の所、日本側

に770万ルーブルの請求を提示した、110万ドルに相当する。日本側は返答の請求書を提出した、ベレンコが函館空港に着陸する時に破壊した、2機のアンテナの損害を補償することを要求する。10月15日、全ての金銭問題は解決され、分解されたミグを載せた船は日本の港を後にした。ナホトカでの荷下ろしは極秘の元で行われた。

飛行機はゴリコフスク飛行機工場に運ばれた。そこで注意深く飛行機が調べられた。その後、ミグはラトビアのダウタピルスに送られた。教材用として、ソビエトの飛行学校の一つに。1980年代末に、老朽化した飛行機を抹消した。

専門家達は見なしている、道徳的-政治的損失と大きな物質的損害以外に、ソ連邦は防御能力において巨大な損失を被ったと。識別の無線技術装置「身内-他人」「シリコン2」を変更する必要が生じたために、ソビエトの無線局により味方の飛行機を認識知ることをさせてくれる。全損失額は、約20億ルーブルと見積もられた。が、当時には、このシステムは結構古くなっていて。早急の変更が要求されていた。日本は、初期の段階で、自分のレーダーシステムがミグを見失ったことを理解して、遠方での発見能力のあるレーダーシステムを持つ飛行機を直ぐに買い付けた。

どうも、一連の件では、アメリカだけが勝ったようである。しかし、以下のようにも言えよう、アメリカはゆっくり作用する罫を仕掛けたと。意に反してミグ25は秘密が暴かれた後、その輸出制限が解除された。イラクはこれを利用して20機を買い占めた。シリアは30機を手に入れた、アルジェリアは取り残されていなかった。直に、ミグはアメリカの戦闘機との武力衝突で優秀さを示した。ベレンコはその飛行でもって、無意識に「刺激した」、より近代的なミグ25改良型の製造の。1978年に、ゴリキーの飛行機工場はこの飛行機の生産を開発した。これらには新しいレーダーを取り付け、武装はロケットで補充され、熱感知装置を装備した、それは地上に隠れた目標を発見できるものであった。

神のみぞ知る、ベレンコの妻リュードミラがこの間どのように暮らしたかは。彼女のために特別に軍輸送機が調達され、彼女をアルマビルへ送った。そこは彼女が生まれ育ち、医学校を卒業し結婚した所であった。彼女は周囲との接触を避け、誰にも目を合わせないようにした。夫の噂は彼女まで届いた：自由を夢見て、彼は国境の外に逃げ出した。彼は大分前からアメリカ人に募集されていた、飛行機の調達代として10万ドルを約束されて。マスコミが書き立てた後、彼女はジャーナリストと会うことを拒否した。一度、新聞「コムソモールスカヤ・ブラウダ」だけを例外としたのは事実である。

クバンスク町である幼稚園の園長であった時、リュウドミラ・ペトロブナが語っていた、「誰も真実を知ってはいない、ただビクトルだけ。」 彼女は白状していた、毎年外務省に問い合わせをしているが、変わらぬ返事を与えているだけ：ベレンコについては何の情報もない。彼は、サンフランシスコの領事館に、彼をソ連邦に戻る援助を求めて、出向いた。しかし、彼を送り返すことはできなかった。彼女自身感じなかった、何の迫害も、誰からも、この年月の間、軍と権力は女と良い、恭しい関係にあった。逃亡の日から30年が過ぎた。夫は何の連絡も送ってくれていない。彼が活着しているのかどうかさえ、リュウドミラさえ知らない。

彼女が特派員に話した、-今までの間、教会に通い、考えている：夫の健康のために蠟燭をあげる、或いは彼の安息のために？-

彼女の言葉によれば、ベレンコには国外へ逃亡する理由はなかった。家族は仲良く暮らしていた、貧乏ながら。子供を育てた。ビクトルには仕事で展望があった。当時、彼にはスポーツ飛行以外に外国では何も任せなかった。北部からリュードミラの両親、これ故、彼らは彼らに近いところで勤務するため移った。ベレンコは国境に近い場所を特に探した、そこには最新のミグがあった。

リュードミラは付け足した、「息子が父について問いただした時、私は彼について何も隠さなかった。いつも言っていた、パパは元気に生きていると。」

アメリカでの最初の20年間、ベレンコはCIAの勧めに従って頻繁に名前と住居を変えた。アメリカは彼を航空母艦の一つに乗せた。甲板上の飛行機で飛行する可能性も与えた。常勤のパイロット達と親しくなった、ソビエトのパイロットにはないような。彼はトム・クレンシに助言を与えた、当時、有名なベストセラー「赤い十月」の追跡を書いていた。1980年、ベレンコはアメリカ市民権を得た、「アメリカの国際的安全の確立における多大な寄与」に対して。彼は活動を始めた、ソビエトの戦闘機が南サハリンで南朝鮮の「ボーイング」を撃墜した時に。その時には、ベレンコは海外にいた。しかし、1983年9月1日に、彼を直ぐにアメリカに呼び出し、中央情報局（CIA）のグループの一人として組み入れた、「ボーイング」事件発生時に、ソビエトのパイロットと地上との会話の無線通信記録の調査のために。すなわち彼は無線傍受内容から、「ボーイング」を撃墜した「スホーイ」のパイロットの声を同定し、解読した：

「・・・了解した。ロケット発射準備。目標に接近中。目標まで8 km。発射。目標は破壊された。帰還する・・・」

函館からの初めての逃亡者には、ロシアから日本へ戻る可能性はあった。ベレンコにはそれはなかった。哀愁は彼を大いに苦しめた。一度彼にばかげた妄想が生まれた。彼はアメリカの特殊機関の一人の将校に提案した。彼をスパイのようにソビエト連邦へ派遣するように。「私を極東に降下させてくれ、私が君に示した場所に。君は思うであろう、この国でスパイであることはきわめて困難であるか？ しかし、私は土地に慣れている、任意の課題を遂行することは私には簡単だ。君らアメリカ人は決してわかっていない、この国では何でも金で買えることを。裁判官？ 200ルーブル。会社の社長は500ルーブル。将校は50ルーブル。我々に必要なものは、買ってはいけない物さえ。私は君にミグ23と「バックファイア」（新型のソビエトの爆撃機）を、お土産として提供することができる。私が言ったところへ、それらを私の友人が持ってくる。やろう！ 私を送り込んでくれ！ 見せつけよう！」 1982年、ロシアへの帰還の問題に関して、アメリカにあるソビエト大使館の武官の一人と接触を持ったらしい。しかし、不明な理由で、彼のもくろみは最後まで実現することはなかった。1980年に、彼は作家ジョン・バロンと協力して本「ミグのパイロット」を出版した。それに、逃亡までとその後の彼の人生が詳細に記述されていた。

ビクトル・ベレンコは本望を遂げた：世界を見た、68カ国を訪れた。彼は北ダコダの音楽の教師と結婚した。3人の子供に恵まれた。しかし、その後離婚した。結婚の契約に従って、家を彼女に残した。その数年前に、東京のテレビ会社ネクスの監督アキラ・ミツモトが元ソビエトのパイロットの撮影を試みた。題辞として、ベレンコの好きな詩の文章を用いた：「霧の中に一本の白い帆が見える、海は青い！・・・ 彼は遠い国に何を見つ

けるのか？ 彼は祖国に何を捨てたのか？・・・」 アメリカで働いている映画グループがベレンコに会うことができた。彼にインタビューをした。彼は自分の行為を正確に説明した、1976年のことを。ベレンコはあまりしっかりした生活をしていないことが、監督にはわかった。最初、彼は軍学校の一つで空中戦の技術などを講義していた。時とともに彼の知識は時代遅れとなった。ソ連邦の出来事、生活、伝統の講義に切り替えた。ソ連邦の崩壊後、この講義は緊急性を失った。現在、カリフォルニアに住んで、貿易業に従事している。特に、ロシアとの。しかし、彼の告白によれば、元祖国の人との交流においては、彼はいつも偽名を利用している。監督の言葉によれば、彼はしょげているようには見えなく、典型的な陽気なアメリカ人である。ロシアでは日本の映画グループには失敗が待ち受けていた。彼らはリペツカに住んでいるベレンコの妻に会えなかった。最も大事なことに、日本人達はチュグエフカの空港に行けなかった。

2つの逃亡が122年を分けている（1851年と1976年？ *）：ロシアへの日本人と、日本へのベレンコ。日出ずる国ではベレンコについては、一面では英雄、他面では裏切り者。ロシアではただ否定的。今では決めることは不可能である、最初の日本人がロシアへ逃亡したことについて考えることは、もし彼がスパイとして送られていなければ。語るのは難しい、何がベレンコの心を動かしたのかを。自信の飛行技能に見切りを付けた、パイロットのエースは、自由世界を見て・・・

ロシア人の過去を探查して：北海道での日記（362頁）

北海道を豪雨で迎えた。悪天候、この年にはラジオストクでも似たような天候。函館は陰気に迎えた、聞くところによると、雨は成功の証、良い旅行の証らしい。信じたいのだが・・・ 町に接近するにつれて、段々と神経質となった。そこへ着いて、まず第一に何をするのか？ 旅をする歴史家の裁量下にはわずかの時間しかなかったー1日ー日本の北の島の各町に、誰にも（？ *）相談しない。私は予想した、ゲオルギイ・アレクサンドロビッチ・レンセンには少し簡単と。最初の訪問者達には全く容易ではなかったにもかかわらず。段々とステレオタイプが彼らに重くのしかかる。誘惑に負けないでいるのは難しい。が、レンセンは別であった。ハワイ大学出身のロシア人の書誌学者パトリチア・ポランスキは、ジョージ・レンセンを記述して、彼を「ウォルト・デズニーのアニメ映画中のタスマニアの悪魔」と比較している。彼は完全に荒れ狂うエネルギーで満たされていた、が、正確に知っていた、彼は何をしたいのかを、大量の本にもかかわらず、それらを彼は目を通せざるを得ない。

客車から出ると、直ぐに気がついた、ブチャーチンとゴシケビッチの像がある大きな浮き彫り壁画に、同じくロシア船の浅浮き彫りに。私はわかった、私の英雄が私に会釈をしたことに：「嘆くことはない、全てはうまくいこう、我々は君を助ける！」

言うところによれば、函館の名称は1454年以来である。名門の河野正道がここに館を建てた、函に似たような：函ーハコ、館ーダテ。函館市旅行情報センターで、日本の駅どこにでもある、近郊図を見つけた。良く説明が成されている、どのようにして行けるか

が。本と紙で詰まっている私の大きなスーツケースは、大きな碇となっている。自由に動けるのを妨げている。旅館へ運ぶ必要があった。が、時間を浪費してしまう。駅で、自動手荷物箱を探し、スーツケースを最も大きな箱に苦労して押し入れた。扉を閉めた、膝でしっかりと扉を押して。顔から汗を払い落とした：一仕事をやりこなした。

東京から函館に向かって、考えてもいなかった、天候が全く違っていることを。風よけ着は風も雨も防いでくれなかった。雨はバケツからのように流れた。しかし、気まぐれな天気のお情けを待つ時間はなかった。暖房で乗客達がまどろんでいる、居心地の良い駅に別れの視線を投げかけて、広場に飛び出した。タクシー乗り場に直行した。私に気がついて、タクシーの運転手は前もってドアを開いた、私が指示したかのように。我が耳を疑った、この悪天候の中を外人墓地へ行かなければならないのを知った時。彼の目には、疑念がありありと見えた、私が正常なのかと？ 住所を繰り返すことになった、口うるさいほどに。

外人墓地はごく近くにあった。到着すると運転手が聞いてきた、待っている必要があるかと。が、私はドアを勢いよく開け放つと、豪雨の中にいた。雨は止むことはなかった。墓地の潜り戸は閉じていなかった。それを通り抜けて、私は十分に大きな区画にたどり着いた、石が散りばめられた、正教の十字架を刻んだ。石の上の記銘は日本語であった。つまり、これは日本人の正教徒の墓であった。彼らを同国人達は外国人のように受け入れていた。幾つかの碑文を撮影し、ロシア人の墓を探しにさらに進んだ。時折ちょっと立ち寄った、豪雨が過ぎるのを待つために、軒の下で、聖ニコライのイコンがある野外時計で。

墓地の小道の両側には、いろいろな宗派の埋葬の区画が見えている。まもなく、豪雨に耐えてきた私に報いがあった。日本語とロシア語の看板が見えてきた：「ロシア人墓地は公式には1870年に開設された。現在、墓地には、43の墓がある、ロシアの軍艦の乗組員25名と、ロシアからの移民7名の墓が含まれている。」今回は、高い金属性の潜り戸は南京錠で閉じられていた。子供時代を思い出すことになった、それを通り抜けた、念のために周りを見渡した。周りをはがらんとしていた。ついでながら、1891年に長崎を訪問した時、ニコライ皇太子は、稲瀬のロシア人墓地の閉じた潜り戸を見て、それを飛び越えた。

石碑上の所々すり減った文字、刈り込まれた草、きちんと並んだ墓・・・100年前は、別物であった。日本における最初の正教司祭の一人であったニコライ神父―将来の最初の聖人―は函館にやって来る度に、ロシア人墓地を訪れた。1898年に、墓地は「特別に綺麗ではなかった」と記していた。

日本人を正當に評価しなければならない：墓標の記銘の解読に努めた彼らは、各墓毎に金属板を造った。ロシア人墓地の中央の並木道は墓地を2つに分けている。大きな一カ所にある墓は、函館を最初に訪れたロシア人水兵のものである。コルベット艦ポサドニック号の水兵、輸送船ヤポーネツ丸の乗員・・・なじんでいる名前である。少なくはない極東の地理的施設がそれらを受け継いだ。コルベット艦「Морьяк(モリャク号)」？

多分、これは「Морж(セイウチ)」、日本人はこの見慣れない文字を簡単に識別できなかった。

共同墓地には、綺麗な記念碑が建っている：大きくて、少し家のような大丸石。その台座には壊れて半分になった碇が。少し驚いた、ロシア語の墓碑の中に、サンドビチェビイ

島出身者－ハワイ人－の墓を見つけた時には、確かである、ここに葬られている人は、目で見てより極めて多いことは。石製の祈念碑が置かれるのは常ではない、しばしば木製のものが使われた。それらは時とともに朽ちてしまった・・・ 墓をあちこちと巡りながら、私は写真を撮った、誰がいつ海を渡ったのかを思い出しながら。が、今はこの墓地に眠っている。雨は少しおさまった、が、カメラはずっと覆いっぱなしであった、湿気からカメラを守るために。

墓地の2番目の区画で、函館に住んだ初めてのロシア人の墓を見つけた。ここで自分の最後の安息地を見つけた、最初のロシアの領事ゴシケビッチの妻は。妻の死はゴシケビッチを祖国への帰還に突き動かさなかったのか？

「娼屋」－ウム・リョウエント（？ ＊）－の女性に捧げられた祈念碑を見つけた。転落した女性の祈念碑として、それは1864年に建立された。彼女らは「娼屋」で働いていた。函館港が公式に外国からの訪問客に開放された時、幕府は「自由恋愛」のために、特別の地区を割り当てた。売春を管理し、性病の蔓延を防ぐために。そこは山ノ内町と呼ばれ、現在ロシア人墓地の場所から近くにあった、舟見町の。この地区の住民の仕事や来訪者について、作家のマクシモフが書いていた。祈念碑は日本の開国の逆の面を示している：外国人の船乗り達の函館への来訪にともない、女性の仕事を保証した、彼女らには選択の余地はなかった。祈念碑の費用は女郎屋の亭主達が集めた。彼らの名前は台座に刻まれている。

ヨーロッパ人の外人墓地へ立ち寄ることは止めた、とにかく雨なので、気がつく、新しい力が私に飛びかかってきた。タクシーを捕まえると、運転手が驚きの表情を示した：ずぶ濡れのこの外国人はここで何をしているのか？ 私は想像した、客席から水をかき出しながら、運転手が罵る様子を。最初のロシア人の旅行者が書き残した記述を思い出しながら、ガラス越しに、私は函館を見続けた。もちろん、すでに昔の町を思い出させるようなものはなかった。似たような広い通り、同じような看板とセブンイレブンの店舗、日本のどこでも見かける。

雨が止んだので、函館をぶらつくことにした、正教会（ハリストス）の方向に向かって。悪天候さえ、魅惑を小さくはしなかった、この建物から漂っている。偶然ではなかった、キリスト復活教会が町では最も綺麗な建物であり、建築の記念物として、特別に優れた文化的価値のある目録に記入されたのは。寺院は大きな石の基台の上に立っている、この地方の地震から守るために。レンガ製の壁は漆喰が塗られ、白色をしている。1988年の秋、教会の抜本的な修理が行われた、それは3年間続いた。私は予想する、この場所に最初のロシア領事館が建っていたと。記述によれば、テラスが非常によく似ている。綺麗な花に囲まれ、全てに手入れが行き届いている、が、教会は閉じていた。同時に、私と一緒に、傘を掲げた日本人の二人組が教会をじっくり見ている。骨の壊れた傘が捨てられていた。雨から守ってくれるのに、大事なのは、日本人の中で目立たないこと。

函館の中央通りを沿岸に向かって降りていくと、気がついた、店や食堂がそれほど多くはないことに：明かである、町の歴史的部分を商業施設で一杯にしないように町が決めたのは。途中で祈念碑を見つけた、日本人初の写真家を称える、彼はロシア人からこの技術を習得した。祈念碑は呼ばれている：函館は写真発生の地としての祈念碑。1964年に、日本写真協会北海道支部の努力により、この祈念碑が建立されたキズ・コウキチ（木津幸

吉？ ＊）が函館に写真屋を開いた時から100年を記念して。少し遅れて、長崎に写真館「彦馬」、横浜には「下岡蓮杖」が開かれた。祈念碑には記されていた、「函館における写真に大きな役割をしたのは、木津幸吉だけではなく、同じように、友子賢三と横山松三郎も。」

さらに散歩を続け、函館の空気を吸い、昔のロシア人に関係した思い出に浸りたかったが、日が暮れてしまった。駅でスーツケースを取り出し、タクシーに再び乗った。女性の運転手は話し好きであった。

「どこから？ ロシアから？！！ 本当、私はサハリンに行ったことがある、非常に気に入った！ あなたは日本を気に入ると確信している。住めば都と言いますよ！」

明るく光る看板のある小さい現代風の家の中に、車は止まった。日本の典型的なホテルである旅館であった、素晴らしく高価な木の内装を持って、いこごちが良く手入れの行き届いているように見えた。旅館はそのようであり、非常に好意的に迎えてくれた。

「ようこそいらっしゃいました、貴方を待っていました！」

日本の旅館で良く耳にする言葉であるが、それにもかかわらず、旅館の暖かみが漂ってきた。私に部屋を割り当てた、トランクを運ぶぼうとする私の行為を止めた。

「お構いなく、我々が貴方のトランクを部屋まで運びます。」

彼らはその重さを知っていた！

少し遅れて、着物を着た優雅な女性の様子、部屋にトランクを苦勞して引いてきた、が私を赤面させた。運び人が女性であるとは言われていなかった、有名な歌麿の絵から飛び出してきたような。畳の上にはすでに布団が敷かれていた、テーブルの上には熱い緑茶が、この上なく好都合に。旅館の客毎に準備されている乾燥した浴衣を着て、墓地で撮影した写真を見た。雨にもかかわらず、皆良く撮れていた、墓の記銘を解読することができる、が、始めに暖まることは罪ではない、お風呂に入る、熱い鉱物泉源のこの地の温泉の。

北海道は、日本の他の地より沢山の泉源がある山の多い地域である。通常は、温泉には2つの区画がある、女性用と男性用の。屋根付きのお風呂以外に、開放された露天風呂がある。花崗岩が敷き詰められ、時には木々に囲まれている。嫌らしい視線を遮るために、手の込んだ生け垣で囲まれている。温泉はいろいろの泉質を持っている、色や匂いや水の味で。

私以外の客はいなかった。最初、蛇口の前の腰掛けに座り、道中の埃を洗い流した。これで温泉に入れる。私は露天風呂を選んだ。温泉に浸かり何も言われぬ気分となった。その時、雷光が回りを照らした、雷鳴が轟き雨が降ってきた。錨地には、船の明かりが見えた。かつてはここにロシア船が停泊していた。とはいえ、十分にあり得る、今ではロシア人の漁師の誰かが函館にやって来たり、或いは、錨地から双眼鏡で岸を観察したり。言うまでもない、歴史は変わり続けると。もちろん、ペテルゴフに何の痕跡も残さなかった、若い男爵ムラビエフ・アムールスキー男爵が訪れていた。温泉、函館の最初のロシア人によって好まれた、が、他の場所が出現した、そこへ最近是我的同郷人が良く立ち寄っている。

2007年6月7日、函館ーセタナ。日記を書くことー無駄な仕事：電子翻訳しても正しくはならない。歴史家の良心は最初の印象に修正をすることを許さない。豊富な素晴らしいことを前にして眠れなかった。早い時間には、そこには誰もいなかった、私は喜んで

暑い温泉に髭まで浸かった。通りは、再び雨が再び降っていた。極端な条件下で、「地域探検」を再び行う必要があるか？

典型的な日本の朝食：いろいろな大きさの浅皿の上の海産物、パンの代わりにご飯の入った大きな茶碗。一見すると、大量の料理は疑いを持たせる、これを全部食べることができるのかとの、しかし・・・茶碗の中身はあっという間に食べた、私の前のテーブルの上には大量の空の綺麗な皿だけが残った。

再び重いトランクを保管場所に預けて、函館の町の散策に出かけた。ここでかつてロシア人達がどのように散策したのかを再現しながら。もちろん、現代の通りや建物は何の連想ももたらさない、過去と関係した。が、函館市は旅行者を大事にしていると言うことが魅了している：日本語の銘は英語も併記され、通りは綺麗で歩きやすい、色鮮やかなこの地の案内書が出されている。最新の案内書が特記している：「夕空の幕が少し上がる、星が瞬き始めながら、その光線は我々に夢をもたらす。」

古いにもかかわらず、町の名所は全く少ないように思われる。偶然ではない、日本人自身が町の散策が好きであることは。そこで、昔の国の香り、歴史の匂いを感じず。夜には、少くない有名な建物は照明されている。

奇妙な建築様式のレンガ製建物、そこに、19世紀に、イギリスの領事館が入っていた。函館の名所となっている。そこは今は博物館である。典型的な古い家具の収集品がそこに展示されていた、私には興味がなかった。時間がなかった、感じの良い喫茶店へ。イギリス領事館を見てから、古いロシアの代表機関を探しに向かった、そこまでは徒歩で10分から15分。遠くから、看板が目飛び込んでくる：建築物が祈念碑として保存されている。潜り戸が開けっ放しとなっている：建物が放置されているのが。明かだ。所有者達がどこかへ行ってしまい、戻ってくるつもりがないようである。側には並んで、神社が、もちろん、ゴシケービッチの時代にここにあったものではない、そのような隣接は極めて快い。

函館駅のある地区は大門と呼ばれている。大門は朝から賑わっている、側に魚市場があるので。ここも名所の一つである。ここでは、あらゆる魚、蟹、イクラ・・・を見ることができる。市場は早朝に開場している、沢山の来訪者を引き寄せている。

古い様式をまねたレンガ製建物の正面には、大きな文字で記銘が：函館ビール。門は大きく開けはなられている、が、これも様式：ありふれたレストランの入り口には、小さいドアがある。名前が自分を表している：ここでは幾種類かの地域産ビールを提供している、それ以外に、もちろん、海産物の食事も。

最近、函館に、サッポロにあるロシア総領事館の支所が開設された。それは、国立極東大学の分校の建物からあまり離れてはいない。1964年、覚え書き書の交換を行った、その中で、ロシアと日本は第二次世界戦争時に存在した相互の請求を放棄した。現在、領事館の建物は函館市役所の管轄下にある。

私は非常に残念に思った、私の師であったビクトル・ネザムトデノフと会えなかったのは。彼は一時期、函館の極東大学分校を管理していた。彼は間接的に私をこの町に紹介してくれた。ビクトル・ニコラエビッチは素晴らしい教師であり、非常に多くのことを成した、日本の古い言語－古文－に私が親しむために。それ無しには古文を読むことはできなかった。秋田で彼に会うことになっている。彼はそこの地方大学で教鞭を執っている、商

工会議所で働いている。自分の教師無しで、我々は何の意味があろうか！

更なる旅行をホノルルからの崎原教授の仲間と一緒に継続した。我々はホノルルで知り合いとなったのである。日本での旅行前に、私は地方大学で「アジアにおけるロシア」の講義をしていた、会話の日本語を実地練習する可能性を探していた。このことを知って、私の親愛なるおばさん恵美子・レビナ、退職した言語学教授、現在地方の正教会の司祭の妻が話した：

—私の昔からの女友達が貴方を助けよう、私たちの大学の有名な教授の妻が。彼女も教授で、教育学部で着物の講義をしています。

崎原先生は背は高くない、やせて、真剣なまなざしをした夫人。初対面時は、私には冷淡な人のように思われた。しかし直ぐに、この笑顔のない日本女性に高い専門性を見つけた、自分の科目について細部にわたって知識がある。通常では、私たちは週に一度会っていた、私の教師の重大さが彼女の邪魔をしないようにと。崎原先生が私を着物の公開講座に紹介したことがあった、素晴らしいものであった。時折、彼女は私をモデル台に引き出した。男性用着物の詳細を紹介するために。私が北海道旅行を計画していることを知り、崎原先生が語った：

—何という一致でしょう！ 私と日本の友人達も夏に訪れるつもりです、この島の温泉を。私たちはそこで再会できるでしょう、どこかをご一緒しましょう。

このようにして、私は日本のデルス・ウザーラを獲得した。

不安であった、しっかりと白状する、私はセタナ町に向かった。80年代半ばに、自分の最初の本「テラ インコグニタ 或いは沿海州と極東の旅行記」の資料を集めた。新聞「ウラジオストク」の古いページで、ロシアのスクーター艦アレウト号の日本での惨事に関する記事に出会った。この事実に興味を持ち、昔の惨事の詳細を探した、直ぐにそれらを、海軍の国立ロシア文書館で見つけた。分厚い資料中には、ロシアのスクーター艦が日本海で被った出来事が、詳細に記述されていた。

決まった課題で働いて、全ては本の出版に有効であると見なした、準備した資料を仕事仲間を示すことが。或いは、新聞で本の一部を発表することが。私が書いたものを補足し、訂正するの人が、突然に反応する。私はしばしば運が良かった。すなわち、例えば、私はパリツエフの娘と知り合いであった、自分の父の古文書の残りを私に与えた。スクーター艦アレウト号の歴史についてのメモは読者の注意なく残っていなかった。日本で、ロシア人船乗り達について慎重に追悼した、ということであった。彼らの名誉としてセタナに立てた祈念碑についてのパンフレットを、ハバロフスクから通訳が送り届けた。知って興味深くなった、日本人は東京のソビエト大使館を通じて、スクーター艦アレウト号の惨事、犠牲者の氏名について証拠を問い合わせていた。彼らを記憶に留めるために。参謀本部の役人がこの問い合わせに公式に応じた、何の証拠も残されていないと書いた。軍事秘密を保存しなかったのか？ 或いは、単にかかわりたくなかったのか？

私は返事をした、親切なハバロフスク市民の手紙に。日本の地に残っている人の名前を知らせた。今度は、通訳が瀬棚にこの情報を伝えた。直に、祈念碑の所に、遭難した船乗り達の名の記された板が出現した。町長からの感謝の手紙を私は貰った。当時、考えはなかった、瀬棚の我々の同郷人の墓を訪れる幸運に恵まれることの。全く人生は予見できぬものである！

・・・、ほら、函館駅、汽車。崎原先生は敬老の年齢であったにもかかわらず、私に彼女のザックを持たせてくれなかった。

ーロシアでは、貴方は女性の荷物を持つことになる、が、ここは日本！

急行列車に座り、車窓を眺め、瀬棚の祈念碑の記憶におもいをめぐらせた。長命寺、その傍にロシアの船乗り達が葬られていた。時とともに本当に老朽化してしまった。伸びた草木の小さい丘は地面と同じようになっている。寺の住職の松崎キエミツは墓地の維持に心を砕いていた。函館の日ソ協会の専務は外人墓地の船乗り達の遺骨を母国へ送還することを提案した。が、地域の住民達は反対した、自分たちの町の歴史からあの悲惨なページをもぎ取りたくはないとして。彼らは瀬棚町近くの三本杉岩地区に、アレウト号の船乗り達の墓碑を建てることを決めた。後になって、一人の市民が書いていた、「犠牲者達は気がついていて、関係者が彼らを追悼していると。しかし、難しいことではない、彼らの心が同郷者との関係を失い、彼らは忘れ去られ、闇の中に去って行くことは。」 資金を北海道全体で集めた、1971年、共同墓地へロシア人の遺骨を移した。さらに1年後、9月、そこに、綺麗な記念碑が建てられた。

この出来事を記念して印刷されたパンフレットの序文に、瀬棚町長の佐々木良治が書いた：「この祈念碑は、アレウト号の乗組員の12名の犠牲者を記念するために建てられた、地域の住民達が集めた資金で造られた、善隣の名の下で海難に遭った者達の救助を行った。」

ホラ、停留所だ。それまでは、ロシアの辺地に似ている！ 乗客は全くいない、壊れているアスファルト、静かなバス停。路線バスがやって来るまで1時間待った。食事ですっかりと閉めていた、売店の女性の売り子が自分の店を開ける時間を確かめたいくらいだ。バスはもちろん時間通り動いていた。瀬棚まで行くのに殆ど2時間。少し遠い。

苦勞して、トランクをホテルまで引きずっていった、ホテルは豪華であった、が、部屋はあまり高くない。旅行の経路から遠くにあるから。広いホールには皇帝と妻の写真。彼はここに泊まったのであろうか？

ジャンパーを脱ぎ捨てるやいなや、タクシーを捕まえて飛び出した。運転手は記念碑について何も知らなかった。道を知るために、表示器を確認していた。20分後、我々は三本杉岩の所に行き着いた。そこにはトンネルがあった。その所の、高台の所に、しっかりした綺麗な石製のオベリスクが建っていた。日本語とロシア語で書かれていた：「ロシアの軍艦アレウト号の遭難で亡くなった船乗り達の記念碑」 広場からは日本海を一望できるパノラマが開けていた。その向こうにはここに葬られている人々の祖国がある。上品な、しかし、しっかりしたフェンダーが石の偶然の落下から記念碑を保護している。さらに、より大きなフェンダーがあり、海からの津波から守っている。刈り込まれた草の香ばしい香りは、直ぐ近くにある海の匂いを消している。広大な空間の青色、断崖の鳥の鳴き声、カモメの鳴き声ーこれら全ては遠い昔と同じ、ロシア人が初めて日本のこの辺地にたどり着いた時と。

地域の住民は約束を実行した、アレウト号の乗組員の犠牲者の名前の入った石を記念碑の周りに置いた。残念ががら、季節労働者であった3人の中国人の名前を明らかにすることができなかった、彼らは乗客としてロシアの船に乗り合わせていた。

私は記念碑の歴史について崎原先生に説明をした。そして、ペットボトルからウオッカ

を少しずつかけ流した。同郷人よ、安らかに眠れ！

私の先生は全くの下戸である。が、このような場合には全くロシア人のように、一口だけ「ストリッチナヤ」（ロシア産のウオッカの銘酒 *）を飲んだ。

彼女が語った—私は思う、彼らの魂が君をここへ連れて来たと！

太陽は夕焼けに向かってゆっくりと移動していった。空に浮かんでいる雲は、絵のような場所に若干のわびしさを付け加えた、無人がそれを強調した。記念碑からあまり離れていないところに小屋がある。130年前にここで起こったことについて、わかっているのだろうか？ 私はわからない、なぜロシア政府が日本人の要請に応答しないで、アレウト号の遭難と乗組員の救助についての情報を探そうとしないのかが。まさにそのような出来事が国民達を接近させた。文化と政治の相違が、多分、全く無関心の役人達の。

5分ほど歩くと、小さい店があった、我々の村の店のような。主人は愛想良く説明してくれた、自分らの所に時折ロシア人が立ち寄ると、彼らは隣にある温泉に休息にやっていると。我々が簡単な土産—我々の所の僻地では、そのような物は全く売っていないと思うが—を買っている間に、電話で予約したタクシーが近づいてきた。

旅館の贅沢な外装にふさわしい、内部状況は。サービスの多さにめまいがした、ここで提供されている。沢山の別室、大風呂、小風呂。小さい岩山から水が音を立てて流れ落ちていた。不定形のお風呂があった、外で。温度のコントラストは特別に気持ちが良い、おまけに、サウナにテレビが！ が、私の頭からはあの昔の惨事についての思いが去ることはなかった・・・。

2007年6月8日、夜、眠れなかった。一つは、やっている旅行に疲れを感じたこと。もう一つは、心配を感じたこと、共同墓地で我々の英雄を回想することにうまくいったのかとの。彼らと別れる時が来た。朝は暖かく晴れとなった。私は徒歩で墓地へ向かった、ついでに周りをしっかり見るために、何年も前にアレウト号の乗組員を送り届けた場所を。通りには殆ど人気になかった。ただ、自転車に乗った若者が軽く挨拶してくれた。私はずっと注意を向けていた、日本の僻地では、ロシアと同じように、住民は付き合いは深い、町よりは。明かである、田舎生活のユッタリとしたテンポは独特なしきたりを形成している。

風景は過去のことを何も思い出させなかった、待つのは大変であったにもかかわらず、何らかの歴史的遺物が今日まで生き延びているためには。広い庭は語っていた、ここは町ではない、ここは貴重な土地である。近代の建築、非常に綺麗で広い通り、几帳面に刈り込まれた芝生。校庭から子供達の叫び声が聞こえてきた、カッコウの鳴き声、カッコウはかつてはロシアの船乗り達に長い人生を予言しなかった、・・・そして海。

瀬棚は小さい町であった、沢山の寺院を持った、日本の他と同じように。地域の博物館に立ち寄りたかったが、閉館していた、休日であった。残念、郷土史家とおしゃべりできたら。再び、記念碑の所にちょっと腰掛け、周りを見回した。何段にもなっている巨大な防波堤が津波から記念碑を守っている。多分、波の殺人者がしばしばこの地にやってくる。日本海の現在の航路図に示されている：「瀬棚湾に接近する時において、多くの危険がある。強い南西風と西風時に、湾に入港する、出港は危険である；この時には外湾にはうねりがあり、その結果、係留することができない。」 防波堤と並んで、幾つかの巨大なコンクリートの建築物がある。一つはカモメの形をしている。

運命の皮肉であろう、時が違ってアレウト号に勤務した乗組員のうち、日本の地に眠っている者だけが記憶に残されていると言うことは。他の者達は子孫の記憶としての価値がなかったのであるか？ 説が存在している、ウラジオストクの最近のアレウトスキー通りを、アレウト号の乗組員達が施設した、それによって通りの名前がアレウトスキーとなったとの。なぜか、我々は自分の記憶の保存をすることができていない、古い墓地のように・・・

悲しくなった。時間は厳然として前に進む。が、我々の同郷人が横たわっている他の場所に行く必要がある。再び村の店に立ち寄った。私を見て、主人の細い目が見開いた：如何したのかということ。が、私は直ぐに彼女をなだめて、タクシーを呼ぶようお願いをした。彼女はやってくれた。記念碑の傍を通りかかった時、私は手を振った：またここへ来ることがあるのだろうか？

手荷物のために立ち寄ったホテルで、女性が私のトランクに飛びついた、が、私は直ぐに助けた。今回は、彼女はトランクを動かすことができたのであろうか？ 私が自分の荷物を平らな歩道を引きずっている時、ホテルからバスの停留所へ、トランクは重さでへたり、小車輪がバキバキ音を出した。

バスターミナルに早めに着いた、が、いらいらし始めた、汽車の出発まで3分間後にバスは私を駅に運んでくれることに気がついて。ひょっとしたら遅刻？ 最初、配車にうんざりし、その後、乗車中に、道だけではなく時計も注視した。運転手は急いでいないと、私は思った、さらに、わざと、全ての信号機は我々に会う度に赤に点灯した。焦ることもなく、運転手は時刻表に興味を持っていた。彼は私をジェスチャーでなだめた：順調に進んでいる。実際において、我々は30秒だけ遅れて到着した。

遠方から崎原先生に気がついた：彼女は焦らずに停留所の所でうろついていた。

汽車はオモチャのようであった、ただ1台で、乗客は殆どいなかった、少人数の小学生達を除くと。窓の向こうに森がちらちらしていた、我々の沿海州を思わせるような、木々は非常に健康的に見えていた。日本の旅行は素晴らしい：国は小さい、国を急いで動き回ることができる。それ以上に、ここでは鉄道の交通手段は非常に効率的である。駅の出札係のところへ行き、行きたい駅の名前と日にちを切符に書く。日本を旅行しながら、私は時々出札係に10枚のそのような切符を出札係に差し出した。彼は（彼女は）落ち着き払ってそれを受け取る。次の瞬間には、手はパソコン画面をなぞり始める、必要な経路と接続を選び出す。時折、日本の出札係は私には熟練したピアニストのようにも思われた：ものすごく素早く、目に止まらないように彼らの手は動いた。鉄道の切符売場の日本人は我が国の人より10倍も速く働く、という言葉を確認した。実際において、快適な設備と時刻表の正確さに対して、十分なお金を支払う必要がある。輸送機関全てにおいて切符の価格は結構高い！

駅のホームに出てみると、着物姿の女性に気がついた。彼女は優しくお辞儀をした。我々のためにやって来ていた。幾つかのホテルでは、かような好意的なサービスを見越せる。10km以上を進む必要があった。道は曲がりくねっていた、山に入りながら。山の斜面はしっかりと防御されていた、日本の他の所と同じように。日本人はこれを余りにも心配しているようである、何の選択もしないで自然をそのままにはしないことに。まさに、それらと一体となって生きることを思考している！

ホテルである旅館は、外見はそれほど美しくはない：単純な建物で、何の建築的な過度さはない。内部はというと、家庭的な状況を思わせた：上着用のハンガー、スリッパ、・・・ 姉妹が仕事をしていた、これ故、ここでは全て家族的であった。何の登録もなく、私たちが部屋に案内した。私が気に入ったのは、部屋は日本式であったことであった。床には畳。床の間には優雅な巻物。夕食を何時にするかと聞いてきた、しかし、まず始めに温泉に行くことに私は決めた。ここには、男性と女性のための共同浴場があった、夜10時から11時まで女性達は別々に入浴することを好む。エキゾチック！ その他の点では、他の温泉と何の違いもない：服を納める更衣室、予備洗浄のための洗面所、大きな風呂。通りには貯水池、石で囲まれた。

風呂を絶えることなく満たし続けている泉源と並んで、小さなコップ。水は殆ど塩気のない味。しばしば水は回復させてくれる、利用の後に掃除される、特に大きなホテルでは。全くロシア式では、カエルがケロケロと鳴いているよう。

個室に用意された夕食は、私の予想を超えた。私の同伴者をよく知っていた主人は、彼女のために、タケノコを準備した、素晴らしい辛口のワインを食事に提供した。食事は素晴らしかった！ どこにもない家族的な扱いは熱意に秀でていた。偶然ではない、崎原先生が強調したのが、もう一度ここへ来たいことを。

崎原先生との話し合いは、日本における最近の生活についてのことに戻った、彼女は惜しみなく自分の体験を語った。日本で生まれ、東京の大学を修了し、その後、ハワイに移住した。彼女は日本とアメリカの生活を比較することができた。時折、矛盾するような結論を出しながら・・・ 私の話し相手は断言した、第一印象で国を判断してはならないと、良く旅行者達が起こしている。日本の生活の明らかな正面は多くの問題を隠している。崎原先生は愚痴をこぼした、日本の若者達の行動に・・・ 彼女は困難を思い出した、第二次世界戦争時における日本人達が体験した。多くの人は家族の財産を手放さざるを得なかった、よそ行きの着物さえ、世代を通じて引き継いできた、食料代を得るために。もちろん、食事は、今、日本人が食べているものと異なっていた。例えば、子供は寿司や生魚を食べなかった。これは酒のつまみである。

2007年6月9日、鳥の鳴き声で目が覚めた：窓は森に面していた。朝少し早く温泉へ急いだ。露天風呂の熱い湯の中で、日本人の老人が夢見ごごちになっていた。軽く挨拶を交わし、彼の脇に入った。湯の表面からは、沢山の湯気が立っていた。遠方に山の頂上が見えていた、雪で覆われた。隣の風呂に、おばあさんが現れ、直ぐにドボンと湯に入った。彼らは湯加減や天気についてユツタリと話し合い始めた。その後女性は源泉に近づき、湯を存分に飲んだ、そして、男性に勧めた。男性と女性の共同風呂に出会うとは、私は考えてもいなかった。全てが全く上品に見えた。

再び、ここで生活したロシア人の移民について思いが出てきた。彼らにとって北海道は待望の場所であった。ロシアからは遠くはない、その通り、自然は母国を思わせる。直接販売で生活費を稼ぎながら、我々の同郷人達はしばしば夜にはそのような簡単な旅館に泊まり、時折、村の共同浴場に。サービス代金はわずか、宿泊以外に、蒸し風呂に入り、埃だらけの道中の後に汗を洗い落とすのが理想。

瞬きするまもなく、これらのいこごちの良い場所に別れをつける時がやって来た。再び、トランクを引きずった、高架橋を、汽車を。歴史家の運命はそのようなもの、野外研究を

する：本、メモ帳、コピーを持参しなければならない、全ての場所を照合し、補足するために。道中、これらの荷物にさらに追加となる、学生との実習のため役に立つ全ての大量の旅行パンフレットが。

食事の後、札幌の近くの場所に我々は止まった。ホテルは駅の近くにあった、それにもかかわらず、我々のためにマイクロバスをよこした。部屋はまたもや畳であった。もちろん、全てが簡素であり、やり過ぎはない。が、値段はそれ相応。有料チャンネルのテレビの表書きに私は興味を持った。

崎原先生が説明した。

ーポルノ、このホテルには、ドライバーや船乗り達が泊まっている。彼らは自由な時間に何をする？

私はパソコンを開き、夕方まで、函館におけるロシア人についての原稿を書いた。夕食は一式：蟹、魚、海産物。海が近くにあることを感じさせる。夕方、温泉で、ドライバーを私は見つけた、彼らは明日の道中を気にかけていなかった：どこで速度を上げられるか、どこで注意しなければならないか。

2007年6月10日、今日は稚内の計画・・・ 1時間で我々は札幌に到着した、そこで少し車を待った、そこで乗り換えが必要であった。この時間に、道中必要な食料を買うことができた、弁当を。日本では、プラスチックケースに旅食を詰めて売っているのは長年の習慣となっている、この弁当は最近のせわしない生活に良く溶け込んでいる。弁当は伝統的な一式である。ご飯、魚、香辛料をかけた漬け野菜。日本人は多くの場合において弁当を持参する：旅行で、仕事で、見学で。それ故、至る所で弁当を買うことができる。店で、駅の売店で、列車で、会場においてさえ。

札幌から北海道の北まで殆ど5時間を要する。道は緑の原野を通っていた。平らな通り、手入れの行き届いた木々、農民の現代的な家、全てが手入れが行き届いて綺麗である、ツギの当たっている屋根、傾いた塀、古びた建物はどこにも見えない。ロシアの村を通り抜ける時、我々が良く目にする風景には。ロシア人の盲目的な愛国心を持って、このテーマを審議してみよう。

稚内である。案内所に立ち寄った、地図と簡単な旅パンフレットのために、明日の計画を立てるために：直ぐに終わった。受け入れ可能な代案が見つかった、それは全てを早く見させてくれる。我々にロシア語の旅行案内書を提供してくれたのは、好都合であった。町は昔からロシア人の船乗り達と関係がある、そのおかげで町は発展した。

早めに部屋を予約したホテルはマイクロバスを出してくれた。運転手は私のトランクを手荒に積み込み、15分ほどで、現代的な建物のところで、トランクを下ろした。一連の手続き：上履き、鍵、浴衣とあれやこれやの手続き。夕食に、ズワイガニ、海産物、日本を巡る遊好についてののんびりとした会話、これらに関したその他。崎原先生が話した、グループで行くのは好きではないと、旅行者は自由な選択を失ってしまうので。これ故、彼女らは独自の行程を作り出した、年に2度出会い。が、その後、女友達は亡くなった、他の知人達は、お金のことで、ハワイから中々出られない。隣のテーブルに、日本人のグループが座った、彼らは酒を飲み、生活について話し合った。そのような光景を見るのは面白かった、話の断片を盗み聞くのも。それは我々の宴会を思い出させる・・・。

現代風の部屋、大きなベット、バスルームさえある。普通ホテルには、部屋には温泉は

出ない。温泉に入るためには、3階へ上がることとなる。そこには人はいなかった、私は喜んで温泉に浸かった、少ししょっぱい。直に、私の一人ぼっちは、小さくてがっちりした日本人によって破られた。

通常の挨拶が後に続いた：いかがですか？ 良い湯加減ですか？ 共同風呂ではそのようである、ユツタリとした話し合いをした。私がウラジオストクから来たことを知って、隣の人が元気づいた：

—おー、私は君の若者達を知っている！ 私は生蟹の輸送に就いている、私はしばしば彼らと会っている。

そして、ロシア語で付け加えた：ウオッカは素晴らしい！

私の新しい知人である出光さんはしばしば稚内に出てくる、そしてこのホテルに宿泊する。

—その通り、ロシア人がいなければ、この地方は完全に死滅した—「渡りに船！」 私はこの地方へ20年弱やって来て、みている、若者達は北海道の北部を段々と捨てていることを。ここの自然は厳しく、生活費がかかる、他の場所と比較して可能性は少ない。言える、ここの人は東京や神戸のように流行に着飾っていない？ そして、返事・・・この地方は君らの蟹と魚で生きている。猟区で我々は昔から全てを取り尽くした。時折、我々の漁師達はあらゆる手を尽くした：錨地から離れてロシア人と会い、漁獲物を移し、合法の名の下で密漁した物を引き渡した。

私の話し好きな相手は、私の目を開かせてくれた、この地方のロシア人のビジネスは日本人と緊密関係にあったことに。

2007年6月11日、稚内。野外研究に向かう時間だ。天候は良好：太陽と微風は好日の前兆である。私はもう一度お風呂に浸かった、その後、朝食をとった。鮭は少し塩気があった。日本人は健康食の信奉者と見なせるにもかかわらず、日本人は塩気のあるものを沢山食べる。崎原先生はいつものリックサックを肩に背負って、すでにホテルの玄関で待っていた。

バスには、全員で4人の乗客。北北海道では、住居地区はお互いに遠く離ればなれとなっており、住民の多くは自動車を所有している。それにもかかわらず、市は市営輸送を保持している。車の流れが少ない稚内の広い通りは、日本の典型的な地方都市の印象をもたらしている。しかし、英語も伴った日本語の案内板のある他の地方と異なって、ここではロシア語も用いられている。これは一つの証拠である、この町の経済の大事な部分がロシアと関係していることの。ロシア語の名前を持った幾つかの店に気がついた。

町からの道路は最初は海岸に沿って伸びていた。小舟、****、乾燥のために張られた網、漁師生活の他の特徴・・・ 残念ながら、比較では再び我が方が負ける。この文章の作者は、漁師町に長年住まわなければならない。時には、全く異なる：捨てられた沈みかけた小舟、無造作に投げ捨てられた漁網、もぎ取られた****、腐った魚の匂いと鳴り止まないカモメの鳴き声、日がな一日、僅かな餌の上空を回り飛んでいる。

我々はある場所に行った、そこで、1939年12月12日、蒸気船インデギルカ号が遭難した。ナガエボからウラジオストクへの航路を進んでいる時、船は暗礁「トッド」に衝突した、ラペルザ海峡（宗谷海峡）の（北緯45度21分；統計42度11分）。結果、741名の乗客と4名の乗組員が犠牲となった。この悲惨な海難事故には、スターリン主

義の犯行が絡み合っていた、ロシア流の「当てずっぽう」が乗算された。当時、ソ連邦は日本を敵国と見なしていた、これ故、惨事についての何の公式の報道は成されなかった。

稚内から車で30分の所の猿払村に、野村浅右衛門（1954年没）の呼びかけで、定期的に遭難者のためのパニヒダを行っていた。1971年12月12日、村に記念碑が建てられた、インデギルカ号惨事の32回忌に。日本人は長年にわたり、その日にロシア船の救助に誰が当たったのかを調べていた。が、記念碑の除幕式には、ソビエト連邦からはバラキン一人が参加した。彼は犠牲者のパニヒダに参加し、日本人と一緒に、海での惨事の予防と両国間の友情の強化のために努力することを宣誓した。

毎年8月に、故人の追悼の手続きが行われている。この日には、猿払湾から、海に船が出て、岸から見えている船の残骸を取り囲み、人々は海に花を投げ放つ、高台に記念碑を建てた人を思い出しながら。

海難の犠牲者のこの記念碑は、色鮮やかな日本の大通りに沿って沢山の印のある。：小樽出身の彫刻家健二は5mの彫像群を造った、人命を守ることを象徴として：手を繋いだ3体の彫刻が球を囲んでいる。芸術家の思想が気に入るかとは言うことはできない、が、他人の不幸に対する注目の事実は同情を呼ばないではいられない。彫刻の回りにはさらに、幾つかの記念の印が配置されている、旅行者達のために建てられた。

岸壁。強風。白波の立つ海。どこかから、カモメの大群が現れた、群れは水面の上をまっすぐに飛んでいる。我々をじっと見ているかも。

我々は記念碑の所の小さい砂利の上に座った、風は弱い、長い沈黙、遠くを見た、何年も前に惨事のあった方向を。日本人の歴史家が断言した、犠牲者全ての遺骨をソビエト政府の代表者に引き渡したと。しかし、崎原先生が話した、ここには幾つかはまだ残っていると感じていると。私はプラスチックのコップに水を注いだ、そこへ石を入れた、風で吹き飛ばされないようにと、一切れのパンをかぶせた、記念碑の所においた、日本の沿岸で安らかに眠れ、同胞よ！

記念碑のごく近くに、温泉付き、公園付き、アトラクション付きの豪華なホテルがある。私たちはバーに立ち寄った、ケーキを注文した、ここから余り遠くないところで命を失った人々に思いをはせて・・・。

帰りには、いつの間にか物思いに沈んでいた。日本の海岸で、ロシア船は多くの難破を被った。我々の旅行の次の場所はこれらの悲しい事件に関係していた。約120年前に、スクーター艦クレイセロック号が、宗谷海峡の宗谷村の有名な灯台の所で難破した。ここは北海道の最北端である、そこからは、好天時には、サハリンが見える。現在では、そこは旅行の最人気の場所である。

稚内行きのバスに乗り、再び海岸に沿って進んだ、それなりの風景を見ながら：小舟の長い列、エンジン付きの物、網・・・ありふれた漁師の生活。

2007年初め、ここへ、ボートで南サハリンから漁師がたどり着いた。彼は直ぐに、近くの店に向かった。出口で、日本の警官が彼を捕まえた。ここで何をしているのかとの尋問に、漁師が素直に答えた：

ー日本製のビールのために、やって来た！・・・

遠方に大きな灯台が見えた、私はそこへ行きたかった、そこが私の目的の場所であると思って。違っていた。小さい塔と並んで、小さい建物が建っていた、旅行者達がそれに登

り上がって写真を撮っていた。それは古い灯台のようであった。このどこかに、スクーター船クレイセロック号の水兵イワノフが漂着した。灯台の付け根に、第二次世界戦争の遺物である永久トーチカが造られていた。当時、ここへしばしばサハリンの懲役囚達が逃げてきた、が、彼らをいつもロシアに引き渡した。例えば、1885年7月18日、クリッパー艦ジギト号は9人の懲役囚を乗せていて、宗谷岬で日本人に捕まった。しかし、日本人の旅行者の多くをここへ引きつけているのは、もちろん、この灯台の歴史におけるロシア人のページではない、海の異国風である：絵画のような垂直に切り立った岸壁、海面から突き出た岩……。海に感嘆し、写真を撮り、土産物を買う……。ここはなんと綺麗で、何とロマンチックな所であろうか。残念ながら、ここに長く留まっているには、私にはもう時間がない：稚内への最後のバスは、あと20分で出発してしまう。

遅い夕食の後に、インデギルカ号の若干の資料を整理し、私の印象を書き留めることができた。夕方に、稚内を散歩することにした。通りの照明はそれほど明るくはない、大きな町のように。しかし、良く整備された歩道、入念に造られた家屋、あちらこちらに点在して、快適さの感覚を造ってくれた。小さいレストランの開いた扉から、ロシア語の大声が聞こえた：

—どうした、一杯やるか、さあ行こう！

こんな辺地で、同郷人と出会えるとは！ 部屋は光と音のファンタジーの反射光で照らされていた。大音響から不協和音が広がっていた。半裸の女性が、中央の棒の回りで、疲れたように、体をくねらせていた、フィリッピン人のように見える。

バーのカウンターの向こうでは、小柄の日本人がワイングラスをゆっくりと洗っていた。—コーヒーを、アメリカ風で砂糖無しで。

バーテンダーは落ち着いて、お茶を注いだ。ここが普通の喫茶店であるかのように。私は室内を見回した、少人数の若者のグループに気がついた、大声で酔っ払いながらロシア語でしゃべっている。全くウラジオストクの酒場のようであった。連中から離れた所に座り、熱くて味のないコーヒーを飲み始めた。私はあのような振る舞いは気に入らない。

—私が彼に話す：「聞いてくれ、我々は稚内にやって来た。君は本物の日本の物を売り給え、中国製ではないものを。似たような中古品を、私は自分のウスリースクで10分の1の安さで買う。」 が、彼は私に何かぶつぶつ言っている……。ほら、ブリン……。その後、何か雑言を聞いた。

—私は彼に……。ほら、今、君の横面をぶん殴る、かつて君をステッキで殴ったように、****、我々は北海道全てを奪い取る！

船乗りが自分のビールのコップで机を打った、ガラスは耐えられなかった、破片が床に音を立てて落ちた。

それを見て、私はいすから立ち上がると、バーテンダーは冷静に私に手を振った：

—心配しないで、彼らは何時もこのように騒ぎ立てる。が、その後、全額弁償をし、静かになって去って行く。

—我々が日本の水で喜ぶかって？ おい、君は目が細い、ビスカリの瓶をくれ！

バーテンダーは、どうやら、彼らをわかっていた。というのは、直ぐに持ってきた半リットルの瓶「サントリーウイスキー」を。

—ほら、これが我々流だ！……

再び、元気な若者達の高笑い・・・

ビールのコップに、燃える液体が急いで注がれた：

ー我々のために、漁師のために乾杯、・・・

少しして、船乗り達の一人がストリッパーとダンスを踊り始めた。その後、1万円札を彼女のパンツの中に押し入れた。

ーロシア人はこんなもんだ！

酔っ払いの同郷人達と近づきたくはなかった。私は急いで夜の稚内に出た。後になって「イズベスチャ」で資料を読んだ、特派員によって準備された、一人の船乗りとの会話を元にした、稚内に立ち寄った：「ロシアの法律に従えば、私は祖国に荷を下ろさなければならぬ、しかし、そこでは良い時で1kgあたり1ドルを稼ぐ、が、ここでは5ドル。このため、当然ながら、ここへやって来る。酔っ払いの船乗りは胸の内をさらけ出した。算術は単純。20トンの蟹ー平均の漁獲ーに対して、日本人はサーシャに10万ドルを支払う。半分を彼は船の持ち主に渡す、残りを乗組員で分割する。それ以外に、約5万ドルをサーシャの金庫に入れ置く。国境警備兵と出会った時のために。これは舟と漁が無事であるための保険である。とはいえ、サーシャの船は惨めではない、彼は40の坂を越した、直ぐに、とにかく、彼は書くことになる。豊漁。

巧みに罪を免れる他の方法もある、一船長が続けるー生きた蟹を急速冷凍物に変えることができる。船倉から急いで水を抜き出し、蟹を氷詰めにする（生きた蟹と違って、凍った蟹は輸出が許可されるー「イズベスチャ」）。なかなかのニュアンス。多くの密漁船のように、サシノ船はカンボジア国旗を掲げている、乗組員はサハリンの住民であるにもかかわらず。これ故、”冷凍蟹”を国境警備隊は我々の所で押収することができない。我々、カンボジアの法律に従えば、我々はロシアの書類を持っている必要がない、一船長は声を出して笑う。」

2007年6月12日、稚内ー網走。

お風呂に入るために、朝5時に起きた。そこにはすでに2人の日本人が音を立てていた。私はすでに前から気がついていて、日本の住民は一日を早く始めていることに。朝6時には、通りはすでに活気づいている：出店、店舗、コーヒー店、レストランの所有者や従業員は場所を掃除している、陳列ケースを磨いている、商品を受け取っている。偶にはない、町の交通機関の大半は朝5時には動き出すのは。

ホテルでの朝食の後、バスが駅まで送り届けてくれた、そして汽車に。汽車は私を乗せて南へ疾走した。3時間半、日本語のテキストを聞き、読んだ：*****、旅ではないように。その後、乗り換え、再び北へ。少しだけずれて。汽車が逆方向に向かった時、乗客の全員が仲良く自分の座席を180度回転させた。汽車の進行方向に自分の顔を向けるために。愛らしい女性ガイド、磨かれた通路のある格式のある航空会社のあでやかなスチュワーデスに似た、が食事、飲み物、アイスを勧める。客車への出入り口で、この女性が丁寧にお辞儀をするのに気がついた。

汽車が網走到に着いた時はすでに夕方であった。恵美子さんー小柄で愛らしく丈夫そうな女性とはホノルルで知り合ったーがホームの出口で迎えてくれていた。大きな古い車で、彼女の夫が待っていた、愛想のある顔をした50歳の男性、小柄、他の日本人と同じように、が、非常にエネルギッシュ。お辞儀の儀礼を交わした後、我々は彼の自宅へと向かっ

た。

窓の向こうには、見慣れた日本の風景が：手入れの行き届いた森、きちんとした山の斜面。全てが理想的な秩序にある、が、誰の努力で成されたのか、わからない。実際において、ある地区において、同じ作業服の男性グループが働いていた。これは囚人達であり、彼らは極めて満足している、生の空気を吸えることで。

家屋の周りで、1匹の犬と10匹の鶏が我々を出迎えた。恵美子さんの母が出てきて、深々とお辞儀をした。文字通り、床に横たわるほどに。日本ではお辞儀をする習慣は昔から広まっている。が、老人達以外には少なくなっている、受け入れの歓迎を表現する者は、それにもかかわらず、日本でのお辞儀は握手より多い。

私がウラジオストクからの者であることを知って、主人は笑みを浮かべて話した。仕事でウラジオストクを訪れたことがあると。日本の代表団と一緒に、サハリンを訪問し、そこから小型飛行機一本当に揺れた一に乗って、沿海州に到着したと。

家長が自分の家業を説明した。幾つかの大きな建物に隣接して大きな野原がある。以前にはここに大きな農場があったのは明かだ。今では、普通の庭園。日本の農村の風景は、我々が覚えていたのとは、全く違っていた。きっと、違いは、その完全な非農村的な手入れと荒廃の何らかの兆候の不在の中に隠れた。主人は直ぐに自分の家畜に餌をやった。最初に彼の所に片目の猫が駆け寄ってきた。多分、彼は不慮になった生き物を引き取っている。突然、彼の肩に大きなカラスが急降下し、カラスは直接手から食料を捕った。この長閑な暮らしに見とれ、我々は並木道を進んだ、夕食用の草をついばみながら。夕食は待たせることはなかった。

テーブルの上に、蟹が山盛りとなっていた。それは私の試算では結構な値段だ。遠方からの客人を、いつも通りに、客席に座らせる。これが習慣。食事をとりながら、話はいろいろな国の旅行と生活について進む。皆が非常に驚いた、私が同じような家に住んで、家畜の一組を持っていることに。話は直ぐに仕事のことに移った：冬には鶏をどのように育てているのか。特別な建物についての賑やかな議論の中で、鶏小屋を冬には暖房しているという、私は参加しなかった：このためには、日本の専門用語の知識が不十分であった、沿海州の鶏は日本の鶏と違って非常に寒さに強い。ちょっとして、崎原先生が不平を言った、マナーが悪いと：不作法だ、テーブルから立ち上がり、手振りをするのは。つまり、これは私のために特別に語ったことであった：全ての日本人がそのような無教養であると思っはいけないということ。逆に私は気に入った、私の主人の活気に、時折得意満面に近い。

ついでながら、日本人のエチケットについて。崎原先生は彼女の女友達に感謝の手紙を書くことを求めた。彼女は北海道出身であり、瀬棚と猿払へどのようにして行ったら良いかを助言していた。私が日本語で書くことを提案した時、私の先生は直ぐにこの考えに反対した。

一彼女は考えよう、私が彼女の英語の知識を疑っていると。

部屋の中を行ったり来たりする時がやって来た。大きな風呂を満たした、それには、家族が寝る前に入っていたに違いない。もし正しければ、お風呂は洗うためではなく、暖まるために考えられている。今度は自分が入る、心が洗われる。ねぐらのために、私を畳のある日本式部屋に連れて行った。素晴らしい絵のある床の間、布団一整体的に、通常の

日本流の一式。

2007年6月13日、網走。日本の生活に興味を持っている人は誰でも、日本家屋で数日間過ごすのを喜びとした。私はこの幸運に恵まれた。が、私はふと気がついた、全部ではないが、何か大事な日本の生活のニュアンスが私から逃げていることに気がつく。自分を慰める、客には全てに気がつくのは難しいことであると、典型的な日本家族において行われていることに、私が来ている。朝食。テーブルに、海産物、生のイクラ入りの小瓶、豆、もちろんご飯。ご飯の入った茶碗を面前に直接に置く、右側には決まって味噌汁、様々な具が入っている。今回はそれに小さい貝が浮いている。ゆったりとした会話、あれやこれやについての。9時前に主人は仕事に出かける、そこまで乗り物で5分。昼食を妻が準備した、彼に弁当を運び届けた。

昼食後に、私をインターネットカフェに連れて行くようお願いをした。自宅と連絡を取り、メールを調べなければならない。この楽しみは結構高くついた。会員となるために200円を支払う必要があった。その際、私だけではなく私の付添人も。彼らもこのクラブの会員になることを強いられた。パソコンは30分当たりさらに300円を徴収した。何故か、私のパスポートのコピーを取ることも要求した。さらに、ロシアと日本の関係のあけぼの時に、ロシア人は日本人の異常な猜疑心に気がついた。明かだ、猜疑心は未だに生きている！ 全てで約2千円を支払い、少し考えた。世界と連結することは、私にとって、決してそんなに高いものにつかなかったと。

夕方、主人は隣の温泉に行くことを提案してきた、車で20分離れた所にある。サウナもある、サービス一式がついている典型的な温泉、30分の楽しみのために350円。

2007年6月14日、網走。

朝は少し寒かった。私が見た所、余りにも量が多い、いつも通りの内容の朝食後、日本式ゴルフをしに出かけた。そこは家から4kmの所にあった。210円を支払い、さらに自前を持っていない初心者用クラブに800円。極めて大きなボールを穴から穴へと転がした。楽しい暇つぶしであった。何の心配事もない者にとっては……。ついでながら、我々のゴルフのトレーナー、若くて愛らしい女性を、当日主人達が夕食に招待した。我々の楽しみに対してそのような方法（お金を除いて）で彼女に返礼するために。

日本人の関係はお金ではかるのはまればではない。サービスには支払いが必要である。条件がある、それは時代と根元で繋がっている。それにもかかわらず、多くは我々にロシアの関係を思い出させる。我々の所と同じように、家での客は大事であると見なされる、主人はできるだけ客をもてなすように努力をする。善隣関係、日本人と血縁関係のあるものを助ける準備。この性質はその時から特質として備わった、日本人が共同体として生活した時に、幸福は依存した、働き、一緒に生活する能力に、お互いに仲良く暮らす、角をなめらかにする。

夕方、主人の切手収集品を見た。日本で毎年発行されるシリーズの切手が基本であった。馬の肖像がある切手が、自慢の品であった。彼はこの生き物に無関心ではいられない。馬の肖像画は、私の部屋の床の間にあった。馬の愛好家は蹄鉄でへまをやった：目立つ場所に吊していたが、間違っていた。説明をした、蹄鉄のラップロを上に戻す必要があると。そうすれば、家は裕福となる。

2007年6月15日、網走。夜は雨。朝食は雨の音の元で。いつも通り、ご飯として日

本のパンがついている。朝に、おばあさんが仏壇一家内のお寺に2杯のご飯を捧げた。退屈な日、パソコンでの仕事だけ。食卓での四方山話。

夕方には、付近の散歩に出かけた。空腹を感じて「花より団子」、近くにあった食料品店を覗くと、看板から判断して、有名な地域蕎麦を売っていた。日本人がカウンターの向こうで大きなどんぶりに勢いよく麺を入れていた、香辛料を加え、強い匂いのする辛いスープで満たした。入り口で必要な料理を選び、販売機の投入口にお金を入れ、切符を手にした。それに応じて、私のどんぶりを満たした。

角に、狭い場所を見つけ、そこへ入り込み、見回した。多分、軽食堂は大いに繁盛していた。狭い空間はぎりぎりまで詰まっていた。私の後ろから、脇を年配の日本人が通り抜けた、外見は単純労働者。偶然私に肘が当たり、彼は謝った。

「何でもありません。うまい蕎麦が食べられることを期待しています、一私は返事をした。」

「君はここは初めてか？ どこ出身？ おー、ロシアから！ 私をロシア人と見なすこともできる。」

私が驚くのを、相手は笑顔を見せながら説明した：

「私は国後で生まれた、45年にロシアが盗った。私は幸運にも2回そこを訪れた、自分の祖先の遺骨を訪れに、残した家を見に。何もない・・・」

我々の会話の課題が極めて曖昧であり、暴言に出くわすかもしれないことを考え、この突然の隣り合わせを惜しんだ。が、どうにもならない、全ての席が詰まっていた。

隣人は薄笑いをして語った、私の不安を察知して。心配することはない、私は今は島の返還を要求はしない。多分、少し後になって、食後に。我々は隣人である、君らの神と我々の神がそう配置した。私は沢山の歴史書を読んでいる。残念ながら、私はロシア人を知らない。君らの歴史家の話を本当に聞いたかった。彼らには他の視点が多分あるであろう。露日戦争で君らと関係するのは価値がなかった。しかし、「猿も木から落ちる」。サハリンの南半分は「トロイの木馬」であった、それに入って、君らは我が南千島に入ってきた。もちろん、私は知っている、我々の祖先達が君らの内戦時に君らの所に入ったことを。これをする価値はなかった。私は大事な原因と見なしている、我々が真珠湾を襲撃したことを。その結果、アメリカ人は広島と長崎に完全に報復した。が、ロシアはどういうわけで？

私の隣人は長い間、極めて詳細に、自国の政治と悲哀を良くわかるように説明した。悲哀は心の中に残っている、北の領土に関係を有している人々には。

2007年6月16日、網走。少し残念に思った、主人の言いなりになったことを、成り行き任せであったことを、主人の計画に従いながら。家にばかり閉じこもってはいならない、提案を期待しながら、自分でどこかへ出かける、根室へ、そこで夜を過ごす。ここは良い所であった、簡単に働けた。京都での講義の構想を書き上げた。立命館大学は私に自分の計画を話してくれるよう要請した。が、学生はロシアについて何も知らないと警告して。私は自分の講義の題名を「選択できない親類のような隣人」とすることに決めた、いろいろな時代について話すことを、ロシアと日本が関係した、同じように問題についても、友好関係を阻害している。

唯一の気晴らしは温室での仕事であった、主人と一緒にそこへ行けるようしつこく頼んだ。喜んで畝の回りを動いた。言われるまでもなく、我々は生粋のロシア人である：土着

し、そこでの仕事は簡単ではなかった、特に休憩や集中的な知的な仕事の後には。パソコンでの単調な仕事の後、私は足をもみほぐし、頭をすっきりさせる。聞くのは楽しかった、草取りをしながら、日本人と一緒に歌うのを。

2007年6月17日、日曜日。網走。客として行くのは良い。が、家にいる方がより良い：道に集まる時間だ。それにもかかわらず、真剣に、客であったと見なしてはならない。余り快適には私は感じなかった、主人を喜ばせながら。偶然に彼らを何かがっかりさせることを心配して。

朝10時に、主人は我々を駅に送ってくれた。それを前に、私は接客に対して支払いをした。1両だけの汽車に乗って、私は崎原先生を質問で苦しめた、日本では主人に支払いをする客はどのように受け止められているのかとの。そこで、私は陥った、羽をむしられる鶏のような状態に。先生は酷く興奮し、繰り返した、これはそれほどしばしばあることではない、私が思うにはと。普通では、人々はお互いに助け合っている、私は特別な場合—外国人—である。彼女は主人に、訪問の1日当たり2000円を提示した、それで合意した。もちろんこれは日本のお金で、特に、私が得た日本の家への価値の付けられない訪問体験を算定するならば、それにもかかわらず、私の先生は冗談に興奮することはなく、しばしばこのテーマに戻った。

汽車は太平洋沿岸に沿って南に進んだ。再び、漁師村の家並み、全てが本当に綺麗。もちろん、もし停止し、それらをじっと見たならば、何か欠点を見つけられよう。が、とにかく、それは何の意味もない、普通に、既に我々がやらかしていた、何かでたとえること。

ある町で、他の汽車に乗り換え、札幌方向に向かった。窓の向こうには素晴らしい自然、全く絵画のような。至る所、自然の中で何か死んでいる。が、全く気づかれない、自然への人間の干渉に：伐採、林道線、その他。同時に、2カ所の製材所に気がついた。

マネージャーがマイクロバスで我々を出迎えてくれた：崎原先生が良い温泉と見なしている、北海道の温泉は約3時間の道のり。道路は理想的であり、バスは疾走する。10kmを経て、アスファルトは未舗装道となった。が、再び極めてなだらかで、ひとつの凹みもない。道路を維持するために、どのようなうまいことをしているのか？ 以前に、ロシア人は日本人に道路建設を教えた、今我々は彼らの方法を学ばなければならない。

大きな山の麓に、巨大で最新の建築である温泉の建物が建っている。そこでは、百人では切れない訪問者を受け入れることができる、が、人は回りには殆ど見えない。登録に10分はかからなかった、名前と電話番号を聞かされただけであった、地震時に、親類と連絡を取るために。部屋は畳のある日本様式、が、少し洋式化もされている。大きなテーブルの真ん中に、テレビと小さい冷蔵庫。入り口に上履き、熱湯の入った魔法瓶、お茶の袋、通常の一式。今まで理解していなかった、何故日本人はトイレに特別のスリッパを用意しているのかを。部屋全部を綺麗に保つためであった。私は推定した、この習慣は昔からのものであり、トイレが生活の部屋から少し離れていた時、そこへは庭を通らなければならなかったと。

私は埃を洗い流す温泉が直ぐに気に入った：とにかく5時間かけてやって来た。事情は普通：洗面台、蛇口、椅子が並んだ大きなホール。それに続いて、熱湯の流れている幾つかのプール。サウナ。通りには、更に2つのプール、それらは音のうるさい谷川の上に殆ど突き出ている。いつも通りに、それらは大きな石でわざと大雑把に仕切られている。体

を洗い、私は熱い湯にザブンと浸かった、「ウッ」、無意識に叫んだ。お湯は通常より極めて熱かったのである。

－熱いか？－日本人が問いかけた、湯面から頭だけが突き出していた。

－どこから来たのか？ おー、ウラジオストク？

私をよく見るために、彼はお湯から腰を浮かした。

－ここでロシア人を見るのは初めてだ。戦争時、私の父は満州で勤務していた、その後捕虜となった。ロシアに5年いて、ウラジオストクで家も造った。父はこれらについて沢山話をしてくれた！

日本人は早口で話したてた。彼の話の半分はわからなかった。

－捕虜は彼（？ ＊）に他の世界を見せてくれた：「雨降って地固まる」！ もちろん、あらゆるプロパガンダを彼に詰め込んだ。時折飢餓があった。が、父は見た、普通のロシア人も酷い生活をしていた。祝日には人々は彼らにパンを振る舞った。祖国に戻ると、彼らの仲間のある者達はロシア料理店を開いた。私の父は私を同じ連隊の仲間との会合にそこへ連れて行き、君の所のピロシキをごちそうしてくれた。そして、君らの歌を！ 「カチューシャ」。私は子供時代から覚えている、私の父がそれを歌っていたのを。彼には憎しみはなかった。負けた、すなわち、負けてこれに我慢するしかなかった。もちろん、理想は崩壊した。戦争後、我々の所には少し酷いことがあった。私はロシア人マフィアについて沢山聞いた、が、我々の所では甘かった。投機。地方の悪党、すっかり巻き上げる。ヤクザについて聞いたことがあるか？！

別れに当たって、話し好きな隣人が付け加えた：

－特に、私の父はロシア式風呂が気に入っていた。後になって自分の家にそのような風呂を自作した。もちろん、君の所の物と同じではない。が、多分似ている。ついでながら、ケーキの代わりに、我々の所ではウオッカを飲む。更に、気がついてほしい、私の父はロシアの娘を気に入り、ウラジオストクに危うく永住する所だった・・・

夕食はいつも通り豪華であった、沢山の料理で。一見して、原料の一式は以前通り、が、私はすでに気がついた、食事の味はそのたびに違っていた。添え物の違い、或いは料理人の技術？

阿部夫妻が崎原先生の側に座った、彼女はすでに彼らに会っていた。彼らは直ぐに温泉の魅力を体験し、大いに驚いていた、そのようなのがウラジオストクには無いことを知って。彼らの目に、同情が読み取れた：温泉を楽しむ可能性無しで、ロシア人は生活しているという。

綺麗な夕焼けにもかかわらず、私は部屋に急いだ。見たことをさっさと書き上げ、北海道におけるロシア人の過去の生活についての次の章を追加しなければならなかった。寝る前にもう一度温泉に行った。谷川が大きな音を立てている、木々の向こうに月が輝いている、枝は水面近くまで垂れ下がっている。冷えている空気の中で、温泉から湯気が立ち上っている。輝いている星が叙情的な気分を起こさせる。

2007年6月18日、月曜日。2日目は温泉に残った。崎原先生が言う、ここは非常に良い温泉であり、亡くなった女友達と一緒にここで湯治したと、3日間も。朝食はいつも通り、宿泊費に入っている。今回は、朝食はブッフェ式であった：提供されているものを好きなだけ食べる、飽きるまで。料理は気に入った：美味しい、適度に塩辛い。蓄えとし

て十分に食べた、昼食が予定されていなかったの。

朝食後、崎原先生と、日本の習慣と伝統についての私の将来の教科書を調べた。彼女は主張した、習慣の記述がしっかりと、日本人の今日の生活に対応していると。

女性が助言をした：

－細かいことに深入りしないでください。今では、多くの事が変わっています、以前の様な価値を持っていません。幾つかの風習は全く絶えてしまいました、それらについては通人でも覚えていません。着物を取り上げましょう。今日では全ての日本人が知っているわけでは無い、本物の着物を着て、帯を締めることを。伝統的な着物一式は現在では極めて高価です。合成繊維製の簡単な着物は約600ドルする。もしコレクション物ならば！

軽く見ても、日本の車1台の値段に相当します！

私は少し興味を持った、京都では着物を着た女性が極めてまれにしか見かけないことに、他の町より。崎原先生の意見によれば、この町には沢山の古い物と旅行者に関係している。

崎原先生が助言した：

－焦って結論を出さないで、周りを見て、少し注意して日本人を見て。これが大事であることを信じて。清潔さを見てみよう。戦争前には、日本において女性は基本的に専業主婦であった。彼女らは、毎日毎日ぞうきんを持って働き詰めであった：掃いて、綺麗にして、全てが輝くばかりに。これを娘達に教えた：お茶の接待、食事の準備、生け花、裁縫・・・ それらを結婚生活のために準備した。女性の10%だけが大学に進学した。今は全く状況が違っている・・・

助言と注釈は、もちろん価値がある。簡単に語れる、が、これはどのように実践できるのか？ 当面、最初の計画をすることにした。正確に説明する、最初のロシア人達は日本をどのように見たのか、さらに、この自分の個人的な観察を補足する。

ホテルの真向かいで、小さい泉が囲われていた、そこから濃い蒸気が上がっていた。水に触った、どうにかやけどしなかった：殆ど熱湯。触ってみて、その酸性度は風呂より高かった。狭い並木道が、山の上の方へと続いていた。最初思った、散歩は狭い領域に限られていると、が、道は曲がりくねって、処女林の中を段々上っている。場所はもちろん素晴らしい。動物には気がつかなかった、鹿や熊の足跡を見かけるが。自然や、アメリカの自然公園や保護地区に存在している旅行者に対するわざとらしい配慮が無いことに注意が向いた。自然を大事にする必要性についての警告、禁止のあれやこれやの掲示板、休息や観察の場所のための特別に設置された場所がない。明らかに、日本人は無駄な世話を必要としていない。ただ1カ所で、ブリキ缶が地面にあるのに気がついた。きっとそれは投げ捨てられた物ではなく、ポケットから落ちた物であろう。

約7km進んだ、が、頂上までたどり着かなかった：夕食の時間が近づいていた。崎原先生はビールを注文し、私にはケーキ、私たちの北海道共同旅行の総括をした。私は非常に満足した、自分の先生と一緒に旅行をしたことに。研究のためには非常に有益であった、日本の実情を見る事ができたことは、日本人の目で：わかってください、何かを思いつかなかったのか。

2007年6月19日、北海道。部屋に充満した、燦々とした太陽光が目覚めさせる。太陽は木のとっぺんを金色に染めていた、うなり声を上げる谷川の流れは昨日のように恐ろしい物にはならなかった。窓の向こうで、訴えるように山は綺麗であった、その頂上まで

私は昨日はたどり着けなかった、今はこれを惜しんでいた、逃した可能性を残念がるように。が、先には、神戸、長崎と他の町が待っていた、ロシアと関係のあった。温泉には誰もいなかった、私は心ゆくまで風呂に浸かった、北海道に別れを告げながら。

・・・日本を動き回って3ヶ月たった。東京、京都、神戸、長崎さらに沢山の場所。何方所には1ヶ月かそれ以上滞在した。多くの地方、特にロシア人の村の墓地、を歩き回ることができた。

9月17日、神戸から夜行列車でやって来て、私は再び函館駅に立った。再び私を大雨が出迎えた。遅かったが、旅行案内所は開いていた。必要なホテルへの道を尋ね、そこへ私が歩いて行きたいことを知って、手を振って示してくれた。

－どうするの！ 見てみなさい、大雨だよ！ 電車に乗りなさい！

私は汽車に座りっぱなしであった、体をほぐしたかった。

・・・雨は、本当に、冗談では無いほど降っていた。まだ夕方6時であったが、通りは暗かった。数少ない通行人がどこかへと急いでいた。私は本の詰まった重いトランクを持ってよろよろと歩いている、さらに、肩には重いパソコンが。一見してわかる、歴史家の生活は単純で、暖かい家の状況下にあることが、「****」*****。

駅の直ぐ後ろに、魚通りが延びていた。海産物の商売のために、朝早くから開かれている。が、今は夕方、魚や海産物の匂いが満ちている。

私が長く函館に住み、この全てを知っているかのような、何か第6勘で、玄関にペンション夢空館の看板のあるホテルを見つけた。高く曲がった階段の所で、愛想の良い主人東力丸さんが待っていた。

－ようこそ、ホテルカードを書いてください！

私は名前とウラジオストクの住所を書いた。

－そう、これで十分です。何の書類も必要がありません。ほら、鍵を。夕食に何を出しますか、コーヒーそれともお茶？

部屋に、大きな2台のベッドと洗面台を見つけた。一つに紙を投げ出し、筆記台とした。ドアにピン留めされた指導書が伝えていた。個別の支払いで、タオル、浴衣、その他を入手することができる。通路には電子メール用の一般のパソコンとお風呂があった。全ての支払いは1日当たり4500円。ずぶ濡れになった身には、熱い風呂は都合が良い。

9月18日。朝食は期待を越えていた。明らかに、*****を、素晴らしい朝食で保証している。ここにはふっくらとした美味しいパン、ヨーロッパ風の味噌汁、上品に見える基本的な料理、そして、甘口の！

昨日の台風は夜には去って行き、雨は止んだ。が、やや陰気だ。最初にどこへ出かけるかという問題は、私には無い。私はすでに外人墓地への道を知っていた。それは町の中心から少し離れた所にある。外国人のための墓地は1854年に設置された。アメリカのペリー将軍の北海道訪問時、2人の水夫が亡くなった。彼らの埋葬のために幕府は土地を分け与えた。知っていた閉じられた潜り戸、それを、再び、飛び越えることとなった。夏の訪問後、ここは少し変わっていた：「ロシアの子供に、ウラジオストクの水兵集会とヨット”オトラダ”から」と記載のあるリボンのついた2束の花があった。何故「子供に」、

この墓地に女性が葬られたのか？ あー、聞かないでくれ・・・

今回は、私には少し時間があつた、夏よりは。私は注意深く一帯を観察することにした。通りに近い角に、地面にめり込んでいる灰色の墓石を見つけた。もちろん、記銘は無い。スコップを手にし、調べる、*****。ああー、私の道具は粘土製の欠片と酒用のブリキ缶であつた、通りに投げ捨てられた、拾い集められた。これではあまり掘れない。

他の石盤は苔がむしており、文字を読み出すことができなかつた。シャベルで除草をすると、記銘が見えてきた：「父、息子、聖霊の名の下で。ここに神の下僕の遺体が葬られた。第27艦隊水兵、スクーナー艦ペルバヤ号の乗組員フィリップ・パクデン。生まれて33歳。1863年10月27日没」。これは有名な船であつた、沿海州の海を縦横に航行していた。この船は函館に寄港した、そこで、乗組員の一人を永遠に残した・・・ シャベルの助けで、どうにかこうにか、隣の墓の文字を読み取つた：「・・・コルベット艦アブレク号ダビト・・・」。名前を読み切れなかつた、ユゴポフか（日本の板書によれば、ユボビン）。水兵は1862年6月28日に亡くなつていた、生まれて26歳。

第28艦隊乗組員の30歳の水兵ワシリイ・メスニコフは、コルベット艦パサドニク号に勤務し、1861年10月16日に亡くなつた。パサドニク号は余りついていなかった。ロシアの全艦船の中で、この船は多くの乗組員を、この墓地に残した。特に、甲板長ニキータ・クズミンを、1861年10月15日に亡くなつた。

第28艦隊乗組員の準医師ープロコピヤという名前の、コルベット艦アブレク号に勤めていたーは1862年6月30日に亡くなつた。日本人はその墓碑に「シネパエフ」の名前を記した。が、より注意深く論評すると、わかる、これはそうでは無いことが：シュネイデロフに何か似たことが察しられる、これに私は疑いを持っているが。

巨大な石ー日本の家の高さほどの、正教の十字架で飾られたーは19世紀における函館におけるロシアの教会の中心と見なされた。驚きだけが残っている、どこからここへどのようにして引きずつてきたのか。石碑の下には、コルベット艦パサドニク号の2人のロシア水兵、1862年3月18日に沈没した。ガルデマリン・アンドレイ・ポポフは22歳、ステパン・ゴムジコフは28歳。日本語の墓碑には死因が記されていなかった。日本人は名前で間違いをしていた：「ゴムジコフ」の代わりに「ゴリコフ」を書いた、石碑での銘は非常にわかりやすかつたが。共同墓地の石碑の裏側には記銘があつた、「記念碑は亡くなつたポポフの母と彼の同僚の努力で建てられた」。

正教の十字架を持っている小さい石碑に並んで、読むのが難しい記銘が：「ガルデマリン」、或いは「タンタリンか」。そこに何か日本語が書かれていた。

1861年9月28日、27歳のアンドレイ・ワシリエフが溺れた、クリッパー艦ガイダマック号の乗組員。次の墓で、私は名前を正確に読めなかつた。多分、シャムネフ、多分、そうではない。名前アフタノフを識別することはできた。彼は第28艦隊の釜焚きとしての乗組員であつた。コルベット艦カレバラ号に勤務し、1862年8月16日に亡くなつた。リュドビグ・シャチコフスクの墓の記銘は良く読めた。1863年7月20日に亡くなつた。が、6日後の7月26日に葬られた。

第一列には全部で、11の記念碑が保存されていた。その中で墓は明らかに大きい。第二列に沿って丘の下に戻る。第26艦隊の乗組員、26歳の水兵カジミル・ネポゴダはコルベット艦ノビク号に勤務していた。並んで、コーキング士の墓、エブドキム・スミルノ

フの、彼はコルベット艦リンダ号に勤務していた。

「父と息子の名において、アーメン。1861年、ここに捕鯨船の元乗組員の遺体を葬った、サンドイッチ諸島生まれの、カトリック教徒」 一見しては、わからない、何故ここにハワイ人が眠っているのかが。当時、ハワイ諸島、或いは彼らを当時呼称していたように、サンドイッチ島（ハワイ諸島の旧名）、は捕鯨船団の中心基地であった。そこへ、ロシアの捕鯨船も立ち寄った。1861年、ツグルスク湾とシャンタルスク諸島で大捕鯨業をなすことが決まった、そこには沢山の鯨が泳いでいた。新しい企業の創設の発起人として、ツグルスク遠征隊と名付けられた、アレクサンドル・フォミチ・エリフスベルグ海軍大尉が登場した、アヤンスク湾の指揮官としての職務を遂行した。多分、ロシア人の中に葬られた無名のハワイ人はロシアの捕鯨船員の一人として働いていた。司祭が彼を教会葬で弔ったのか、謎が残っている。当時、函館にニコライ神父がやって来ていた。しかし、ハワイ人とロシア人の付き合いは確実にあった、他の方法で、彼を弔った、外人墓地の他の区画に。

ほら、ズベレフの墓が。7年後に、この墓はハワイ人の埋葬地と並んで現れた。記銘は伝えている：「ここに遺骨が葬られている、コシマ・ロデオノビッチ・ズベレフの、将校一移民、ペルミ地方クングツ町出身の」。ズベレフは興味深い人物であった、少ない内の一人、社会生活に活発に参加した、極東、北海道へのロシア人移民の町であるホルバトの代理人として。スパイの疑いで、日本人は移民達を逮捕し、牢獄で苦しめた。ズベレフは1944年1月7日に亡くなった、彼の遺骨は親類に渡された。後になって、私は東京で娘のズベレフ・オリガと会った。彼女から知った、殆どの家族はソ連邦に帰還することを望んだと。スパイ嫌疑、日本の権力との厳しい関係、国から外国人の追い出しの政治、全てを行った。移民の一部は日本を捨てることを選んだ。オリガ・ズベレバはレニングラード大学の日本地域学科を素晴らしい成績で修了した。日本語を彼女は訛り無く話した。が、自身のロシア語に不平を言った。漢字を好んで読んだが、ロシア語の手紙は苦手であった。大学を修了した後、彼女はキューバ人と結婚した。今は、ハバナで日本語を講義している。

2つの同じ綺麗な墓標。多分、これらは昨日建てられた。両方の記銘は英語で。一つには記されていた：「ミセス・リュウドミラ・チェリイの思い出」。多分、20年を生きたリュウドミラ・チェリイ、プチロフスク工場の社長でロシア・アジア銀行の幹部である、バトリンの娘、並んで葬られている。よく知られている、プロコピイ・ペトロビッチ・バトリンは上海で亡くなり、彼の遺骨は函館に送られた、そこに未亡人が住んでいた。

第28艦隊乗組員の水兵フェドル・ステパノフは、その遭難で知られているコルベット艦パサドニク号に勤務していた。日本語の銘板に記されていた、ステパノフは1862年2月17日亡くなった、28歳で。が、よく見ると、この数値が怪しいことに気がつく、多分、彼は24歳であった？ ステパノフの同僚、水兵エブトロピイ・グボズデフの墓標に、壊れた十字架の位置が見える。ついでながら、函館の墓地には殆ど十字架は立てられていない。これ以外に、それはポポフとゴムジコフの共同墓地にだけある。7年を経て、1869年8月27日、グボズデフと並んで、コルベット艦ボガチリ号の水兵イワン・トパノフが眠りについていた。

再び、パサドニク号の乗組員、32歳の水兵イワン・クズネツォフ、1862年8月27日に亡くなった。次の墓標の記銘を読み出すのは大変であった：時は石をそのままにし

ておかない。銘板に記銘をした日本人は、名前と名字無しで済まし、書き記した：「ここに、第28艦隊のコルベット艦アブレク号のボイラーマンの乗組員の正教徒が葬られた、1862年没。」

ロシア人の函館の歴史に、ロシア領事館員の名前イワン・マホフが残されている、この地方の子供達にロシア語の初等教本を編集した。実際において、彼を同名でしばしばこんがらがった、フリゲート艦デアナ号の前任司祭と。ロシア人墓地には、もう一人のマホフ・グリゴリイ、コルベット艦リンダ号の水兵が眠っている、1862年10月8日没。

他の墓の所の日本の銘板には、記載されている、輸送船マンチューリ号の操舵手プロコピイ・フィリップフが眠っていると。日本人は名前を正確に示さなかったらしい。銘板の記載を擦ってみると、「フィリノフ」と明らかに読める。結果として、この列に私は13個の墓標を数えた。

墓の第3列は広い歩道に並んであった。第19艦隊で、クリッパー艦ガイダマック号で勤めていた44歳の下士官アレクセーフが、入り口の最初に眠っていた。日本語の掲示板の情報の妥当性に関しては信じなかった。名前「ステパン」が記載されていた。しかし、墓ではそれは不明瞭であった。命日について疑いを持っている：1864年1月の24日なのか25日なのか。

アレクセーフと並んで、アルハンゲリスク家の家族が葬られていた。これは大分後での埋葬である。家族の長ワシリイ・ワシリエビッチ、1939年3月25日没。彼の妻クセニア・ニコラエブナは約4年間ほど長生きし、1943年1月8日に亡くなった。彼らの22歳の娘クセニアは1943年1月12日に亡くなった、母の死後4日後に。

ロシア人の区画の中央に、ドミトリイ・ニコラエビッチ・シベツの巨大な墳墓が高くそびえていた、「貴方に安らかな眠りを」の記銘と肖像を持って。彼の孫の嫁であるシベツ・ヤシコバが語った、親類達が推定した、彼が東京から函館に戻る時、汽車で彼を殺したと。リュボフ・セメノブナは説明した、ニコラエビッチ・シベツの死後大分経ってから、彼の後家であるエフロシニア・ゲオルギエブナ・シベツ（1885年2月28日－1975年12月20日）は神戸から函館にやって来た。夫の遺骨を引き取り、それを神戸の外人墓地に埋葬するために。彼女はしたかった、彼女の墓が亡くなった夫の遺骨の一部と並んでいることを。このように、日本には一人の人間の2つの墓が現れた。

デ・ゲ・シベツ（？ ＊）の後ろに、アムール艦隊乗組員の兵曹長ピョートル・ストゴフが眠っている、砲艦モルシ号に勤務していた。彼は1864年11月8日に自殺した、24歳で。これはロシアでの出来事であった、彼を墓地の端に葬った、か、その当たりの境界に。ここに特別な出来事。何ヶ月にもわたる航海は若い人の精神上の健康のためには跡形も亡く過ぎるのは何時でもではない

保存されている墓標の内の最も古いものは、フリゲート艦アスコリド号の補給係ゲオルギイ・ポウリケビッチの墓である、1859年6月26日に亡くなった。ついであるが、このフリゲート艦は日本に他の艦船より多数の墓を残した。訳があつて、長崎のロシア人墓地は初期には「アスコリド号の墓」と呼ばれていた、この船に関する墓の多さから。

第28艦隊乗組員の水兵ステファン・ギリシェフは輸送船ヤポニア号に勤務し、1860年1月25日に亡くなった。彼と並んで、コルベット艦アスコリド号の水兵マクス・ベクマン（1866年6月）。フリゲート艦アスコリド号を登録抹消した、その代わりに同

名のコルベット艦が就役した。その艦においても祖国から遠い所で水兵達が亡くなり続けた。

最後の、この列の9番目に、第28艦隊の乗組員ボイラーマンであったピョートル・エブセーフの墓標、コルベット艦ジギト号に勤務していた。

左側は市民の墓に割り当てられていた。そこに最初に、ロシア帝国領事館の教会の聖職者ビッサリオン・リボビッチ・サルトフが眠った、1874年1月17日に、36歳で没。「アーメン、安らかに眠れ」。

大きなコンクリート製の墓標に、刻まれていた：「この石の下に、日本におけるロシア帝国領事館の医師ウラジミル・ベストリの遺体が葬られている、1869年1月1日、生まれて29年」。裏面に書かれていた：「記念碑は死者の伴侶と彼の同僚達の努力の御陰で建てられた。」その後ろには、石からなる墓標の丘が見える、が記念碑は無い。ここには、どれだけの無名の墓があるのか？！

この墓地の大事な名所の一つが、最初のロシア領事の妻エリザベータ・ステファノブナ・ゴシケビッチの墓である。1864年9月5日に亡くなった、43歳で。1993年5月20日、日本人は古い記念碑の所に新しい墓標を建てた。エリザベータは非常に才能あふれた女性であった。彼女は日本研究に大いに従事した、が、自分の短評をフランス語で公開した。知られている、彼女は本を出したがったことが。残念ながら、かなえられ無かった・・・

さらにもう一つの移民の墳墓がある、シャルフェーブ家の。記銘は全て英語。シャルフェーブ・アンドレイ・ニコラエビッチー「親愛なる息子で兄弟」、ニコライ・ブセボロドビッチー「永遠の記憶、永遠の眠り、親愛なる夫、父で祖父」。1919年10月28日生まれのアリアドナ・パブロブナ・シャルフェーバの記念碑には、亡くなった期日が無い。多分、アリアドナ・パブロブナは札幌に住んだ。そこで、シャルフェーブ家は仕事をする。この年の秋に、イリナ・ドルゴバが私に電話をくれた、シャルフェーバに電話を強いた。まずい時に、ごく最近彼女の息子が亡くなった・・・。

全部で、39個の墓を見つけた、その中に無名のも。ロシア人の墓に続いて、日本人の墓が。日本政府に助言をする必要があった、若干の記念碑の記銘内容を訂正するようにと。が、残念、地方行政の活動家の誰とも会うことは無かった。

戻り、再び柵を潜り抜けた、優先的に辺りを見回しながら。日本式服従に慣れて、時折感じたロシア人の墓に余り感じが良くないことに。というのは、ここへ公的な許可無しで入り込んだので。もちろん、野外調査を準備するにあたって、函館市役所の国際課に電子メールを書いた。が、返事は得られなかった。多分、私の知らせはインターネットの中で失われたのであろう。墓地に行っている間、誰も見かけなかった。記銘を解読している時、一度だけ、道の方から、日本語の「お早う」を聞いた。傍を通りかかった2人の娘達が私に注意を振り向けた、多分、羨んだ、私は彼らにとって異国的な墓の当たりを簡単にぶらついていることを。

墓地から正教会の方へと向かった：函館に永久に残った人を記憶していない。ポスクレセンスカヤ教会は開いていた。2人の愛らしい女性、私がロシアから来たことを知って、ロシア語のパンフレットを出してきた：「信者にとって、この地は聖なるものです、多くの市民と函館の客にとって—ここは彼らの心を愛する町の一角です。」 蠟燭を購入し、

この地の墓地に眠っている死者の霊のために立てた。

正教会は函館における旅行の名所の内の一つ。その回りには人々が群れをなした。教会の肖像画はシンボルとなった、町の旅行案内所の。そこへ入るのにはお金はかからない。が、任意の寸志を提供してくれるようお願いをしている。入り口には、画家がいて、自分の絵の写真を1000円で販売していた、木製の枠に入れて、裏側にサインを書き入れて。私も一つの写真に魅惑された：画家を非常に気に入った。

教会の周りを少しぶらぶら歩き、その後、ホテルで軽く食事をした。函館中央図書館へ向かった。その当時、私の親友であるレンセンがそこで多くの時間を過ごし、良い仕事をしていた。水漏れがしていた、図書館の蔵書を新しい建物に移した。入り口には図書館創設者、その初代館長、岡路賢三の小さな胸像が置かれた。優れた郷土研究家、北海道史の幾つかの研究書の著者。彼は図書館に本だけでは無く、古文書資料を集めることを実現した：記録、手紙、図と写真を。

高田屋嘉平についての最初の本の内の1冊を依頼した、1884年に山下佐一郎が書いた、独特な版画のある：アイヌと一緒にイツルップ島の嘉平、髭面で赤ら顔の；「デアナ号」の武装した水兵が嘉平の船を襲撃する；リコルドと嘉平がテーブルを挟んで会談をする、明らかに、カムチャッカでの出来事、部屋の調度品は日本調に似ているが；衝突の解決時のグローブニンと通訳と日本人。図書館には、嘉平の彫像が保管されている、私の目には素晴らしい：松から切り出した彼の胸像、松を彼が好きであった。彫刻家佐野加州が年配の時に彫った。

図書館には高田屋嘉平の人生についての幾つかの原稿がある、彼の4世代後裔の高田徳太郎が書いた、特に彼のロシア旅行についての。この原稿の歴史は次のようなものである。高田屋がカムチャッカから戻った後、一国外へ航行した時、外国人との交流は禁じられていた、一彼に詳細に述べることを命令した、彼はデアナ号で何を見たのか、ロシア人とどのような交渉をしたのかを。幕府のために予定していた書簡も、彼自身のメモも、残念ながら保存されていなかった。高田屋の破産後、函館と淡路の家屋がほぼ同時期に火災に遭った、それで完全に全焼した。何者かの悪意ある手が嘉平の人生についての証拠を抹殺しようとした。1884年、明治維新後、政府は徳太郎に対して要求した、家族に保存されている書類などを政府に渡すようにと。それに関しては、今日まではっきりとしていない。が、家族に伝わっている話を徳太郎が書いていた。多分、これらのメモを作り上げた：それには「編」が書かれている、すなわち、分冊であることが。ついには、それらは函館の市立図書館に行き着いた、原キカツはそこで働いていた。彼は高田屋義満の隣人であった、高田屋の6世代の子孫。彼から、彼は初めて嘉平について知った。彼の運命に興味を持った。収集した書類に親しんだ後、彼は、彼の言葉によれば、「高田屋嘉平の正直で勇気ある性格と彼の貢献に感動した。」

親切そうな女性の図書館員が、直ぐに私のメモに目を通し、重要性でそれを選び分け、本を取りに行った。しかし、この日は、私には実りが少なかった：突然気分が悪くなった、頭が重くなった、体に弱さが広がった、今にも倒れそうな感覚。頼りになる方法で治療を受けることにした：風呂に、すなわち温泉へ。以前に旅行案内書で気にとめていた、この地区に温泉源があるということ。

もう夕方になって来た。見知らぬ場所で電車を降り、私は周りを見回した。私の直ぐ後

ろから出てきた青年が、私の当惑に気がつき、助けを申し出てきた。直ぐに私をきらびやかなホテルの建物へと連れて行ってくれた。いや、直ぐに頭に浮かんだ、私はその客では無い！ まさにその通り。支配人は投げやりに私の方を見て、頭を振った。

ーたいしたことでは無い、ここから近くにもう1軒の温泉がある、ごめんー 志願してくれた同伴者が言った。

実際において、100m先で、私は知っている漢字に気がついた。付添人と熱い別れを交わして、私は地味なドアに姿を消した。

表書きに従うと、3種の風呂。最初の風呂は5秒とも我慢できなかった：温度は約60度。2人の日本人が、何事も無かったように、この熱湯に入り、平静に話しをしあっていた。風呂の端に座ると、少し汗ばみ始めた。何か私に助言をした、ここで完全に成功することはできないと。

暗闇の中に出て、バス停に向かってのろのろと歩き出した。僅かな通行人が私に追いつき、追い越していった。ホテルまで苦労してたどり着いた。一晚寝れば良い知恵も浮かぶ、ということが私を慰めた。

9月19日。目が覚めた、ぐったりしている。しかし、「野外調査」を延期したくはなかった。函館公園へ徒歩で出かけることにした、そこには、地図によれば、博物館と図書館がある。胸の中で不平をこぼした、ここには知り合いの郷土史家はいないことに。彼がいれば、詳細を知ることができるのだが。

道途中で、綺麗なレストランを見つけた、そこには看板「五島軒」が目立っていた。ここは日本人によって建てられた初めてのロシア料理店！ 中村義一の保証の元で、長崎の五島列島からの栄吉がこのレストランの料理人となった。説が存在している、1868年の国内戦争「戊辰戦争」の後、直ぐに、彼はロシア領事館の食堂で働くことになった。そこでロシア料理法を学んだ。豪華な正面を見て感じた、それ相応の値段であろうと。このしゃれた店のロシア料理の質を試すことを決めなかった。函館で最も高いものの一つ。旅行案内書に書かれていた、1879年からここで外国料理を提供していたと、それは安くは無いことをほのめかしていた。それにもかかわらず、味わうことを提供している、あれやこれやの料理を。わかる通り、ロシア語のメニューが無い、が、異国風にはこれは必要だ。

高田屋嘉平の大きな記念碑の脇を通り抜けることはできない。彼は日本の礼服である袴を着ていた、手に刀と巻物を持って、顔を海に向けて。市民の寄付でモニュメントを鋳造した、7mの石の台座の上に立てられていた。毎年7月末に、記念碑の回りで素晴らしい式典「高田屋嘉平の日」が行われる。この式には、町の住民だけではなく、客として全北海道から、嘉平の生まれ故郷である淡路島からも参加している。彼は、1769年にこの島で生まれた、28歳の時、函館にやって来た。江戸末期には、彼は裕福な船の代理人となった、函館の発展に大いなる力を出した：造船所を建設した、海運業に従事した、国後と択捉での漁業を整備した。函館港の開港100年を祝った1958年に銅像を鋳造した。函館出身の柳川剛一がそれを準備した。1813年にゴローブニンが「デアナ号」にもどったとき、その時の嘉平を銅像は表現している。右手には、この事件についての松前藩の証書の入った巻物、左手には着物、彼がそれに着替えた、「デアナ号」から戻った時に。

残念ながら、この素晴らしい行進を見ることはできなかった：仏教の僧侶と神道の司祭、

古い横笛を吹く楽団、民族舞踏の踊り子、大太鼓と小太鼓を打ち鳴らす子供達。出演者には北方領土の元住民達も参加している、嘉平がしばしば訪れた択捉島、島々の間を航行していた。それらは今論争中である。

並木道を少し進んでいくと、「露日の友好の石碑」に突き当たる。旅行案内書で語っている：「1999年、グローブニンとリコルドの子孫―日本を訪れた―は高田屋嘉平の子孫と会合した、186年を経て、再び家族が会った、歴史的な事件が彼らを永久に結びつけた。この石碑は捧げられる、ロシアと日本の友情の源に立っている人に、殆ど2世紀を経過しての彼らの子孫の記念となる出会いに。この石碑が、21世紀における我々の国の友情の強化の象徴としてあれ。」

記念碑から道は市立公園に続いていた。どの日本の公園と同じように、その公園は非常に綺麗であった：手入れの行き届いた植物、綺麗なベンチ、素晴らしい小道、敷き詰められた石・・・公園の美しさを満喫することを、足の痛みと体力のなさが大いに邪魔をした。立派に、ホテルに戻り、休息しなければならなかった、が、時間がせき立てた。函館で、沢山のことをしなければならない、誰も当てにしないで。とにかく、公園を観察することに決めた。ここにロシアの名所があったので。かつてこの地に、フリゲート艦「デアナ号」のロシア製の大砲の砲台が配置されていた。この船は1855年10月にここへ立ち寄った、その後、日本の沿岸に沿って航行した。そして戸田（へだ *）で海難事故（1854年11月、津波による *）に遭った。そこでは住民達がロシアの水兵を岸に引き上げた。善隣友好の印として、ロシア人は日本人に「デアナ号」の持っている大きな武器を贈呈した。それらを北海道に移送し、函館に特別に建設した堡壘に設置した。日本での国内戦時に、この砲台は特別な役割を果たした。その後、「名誉の退役」、そして公園の名所の役割。太平洋戦争時の1945年、ロシア製の大砲は溶解に回された、それらを日本式の武器にするために。もちろん、それらがかつてあった場所は見つかっていない。

濃い木々の中に、元函館市立図書館の建物を見つけた、その建物の写真はレンセンの本中にある、そこで彼は多くの日々を送った、多くの発見をしながら。水のように多くの時が流れた、こんもり茂った木々がそれを強調している、建物を殆ど覆い隠している。建物の周りを歩き、高い所の窓を見ると、箱だけが見えた。

公園の閑静な一角に、リュードビック・ハーバーの記念碑を見つけた。彼は1874年2月に、函館にやって来た、ドイツ領事館の全権代表として。その年の8月11日、秋田藩の侍である田崎英親が彼を殺した、函館に特別にやって来ていた。犯行者を直ぐに地方警察が逮捕した、9月に彼は処刑された。このように、犯行は一人で行われた。ドイツ政府は沈黙化することを欲し、何の外交的行動も行わなかった。ハーバーを外人墓地に葬った。彼の非業の死の50年忌で、遺骨は惨事の場所に戻され、この場所は記念地となった。式典には、故人の子孫であるフリップ・ハーバー、ノーベル賞受賞者の参加があった。墓地には、以前の記念碑が残された。1944年、日本軍が墓地から記念碑を撤去した。が、1949年、それを見つけ出し、元の場所に戻した。

ドイツの外交官の記念碑から余り離れていない所に、函館市立博物館（函館山の東斜面 *）がある。この博物館は公的に1879年に開館した。最初は、この博物館は、北海道開発庁の函館支部の展示館であった。博物館の建物は、日本で最も古い内の一つであった。1963年に、函館の民族文化財産として認められた。3年後、市立博物館は新しい

建物に移った、多くの以前の展示物をそのままに。古い建物には、さらにもう一つの展示物を設置した、非常に良く整えられた、自然の若干の景観とアイヌに捧げられた。地質コレクションのショーウィンドー、あるフランスの研究者によって北海道で集められた、で、カタログに気がついた、19世紀末にペテルブルグで印刷された。表書きが伝えていた、そこへ学者は自分のコレクションの写しを提供したと。

ロシアのものはどこ？ 私は博物館の切符を売っている人に尋ねた。

ーロシアのもの・・・ー彼は頭を振った、一少し待ってください・・・

直ぐに私の所に中年の人がやって来て、歩きながら自己紹介をした。

ー長谷部和宏です、この博物館の館長で管理者です。

私がウラジオストクから来たことを知って、彼は手を軽く打った。

ー私は去年貴方のウラジオストクへ行き、アルセーニエフ博物館を訪れました。

彼は何人かの知っている名前を挙げた。私が必要としていることに気がついて、幾つかの小さい博物館が散在している町を巡るよう助言をしてくれた。

気持ちよく別れて、私は再び調査に戻った。時間とともに膝が痛み出した。私はとにかく毒をもって毒を制することにした。少し遠方に、もう一つの共同風呂があった、その方向にのろのろ歩き出した。

建物の大きさが物語っていた、大規模な施設としてここに建てられたことが。入り口で350円を支払い、2階に上がった。幾つかの風呂のある大きなホールには、15人がいた。お湯の入った3つの風呂、1つは沸き立っていた。しかし、温度は全く受け入れられるものであった。鉄成分の高い濃度故に赤さびている湯に浸り、病気退散と、祈り始めた。30分ほどで、私は風呂を変えた、ひりひりさせる熱い湯から冷たい湯へと、そして逆に。時間とともに、外風呂に長居した、太陽で日焼けするために。何が助けとなったのかわからない：お湯での治療？ それとも太陽光線？ とにかく、温泉の後、私は非常に気持ちが良くなった。

市立博物館は行列であった。高田屋嘉平の展示ホールが最初であり、湾の直ぐ近くの古い石造りの倉庫内にあった（赤煉瓦倉庫群の南端付近 *）。ここに全てのものが配置されていた：嘉平の個人的な物、彼の肖像画と彫像、船の模型、船の装備と多くの簡単な物、その時代を語っている・・・ 函館を基地として利用して、嘉平は北洋漁業を発展させ、小さな捨てられていた漁村を力強く発展する港へと変えた。企業家の大いなる成功を評価して、徳川将軍は1800年に、彼に高い称号を与えた。高田屋の名称を利用し、帯刀することを許可した。高田屋一族の最盛期は1801年にやって来た、嘉平の末っ子の喜平が家族の仕事を継承していた時である。彼は徳川将軍から5万坪の土地を手に入れた。彼は面積220平方メートル以上の事務所を建設した、広大な庭、人口の小山、池、飾り石を有する。それは余り遠くない所にあった、現在公園となっている場所から。舟見町の称名寺に、高田屋家の墓地がある。

英語で印刷された日本のパンフレットのある一行が少し楽しませてくれる：「この出来事は1812年に起こった。日本の守備隊が、ソビエト（? *）による日本の北方の島々の進入に怒り、ゴローブニン将軍を捕まえ虜囚とした時に。」 北方領土返還の志向において、日本はゴローブニンの時からソビエト政府に宣言していた。展示物の一つに、ロシア文字を持ったタイプライタ「ロイヤル」を見つけた。デンビ或いはルーリが残したの

か？ 光栄ある場所に、展示品としてマホフの「文字」が置かれていた。

切符を売っていた女性が、さらに500円でもう一つを押しつけようとした、が、私は手を振って断った。後で明らかになったが、無駄であった。私には思われた、北方民族博物館を訪れるように提案していると。そこへは私はすでに立ち寄っていた。極めて豊富で種類に富んだアイヌの収集品の中に、ロシアらしい物を何も見つけられなかった。多分、別の博物館であった：北方民族ではなく、北方の歴史、展示品全ては嘉平に献げられたものであった。興味が湧く、一つの博物館で彼についての全ての資料を一体化していないのかと。ホール中央部に嘉平の石膏胸像がある、そのモデルとして彼の子孫である高田嘉七が勤めた。博物館の大部分はゴローブニンの捕虜から解放までの歴史で占められていた。帆を上げた「デアナ号」の図の下に、ロシア人の航海者の銅の胸像があった、彼の子孫ピョートル・ゴローブニンの贈呈物、博物館の開館で招待された。胸像に並んでリコルド船長の肖像画、ロシアから派遣された。隣のショーウィンドウには、ゴローブニン船長の艦隊メモが置かれていた、日本で虜囚時に起きたことに関する、いろいろな言語で、異なった年に出版された、最も最初の出版から初めて、同じように、この時代に関する日本の走り書きされた資料。嘉平とゴローブニンに無関係に、ホールには最初のロシア領事ゴシケビッチの大きな彫像がある。私は推定した、ロシア人はそれをプレゼントした、当局は町に建てると見なして。が、彫像の場所は博物館の中だけであった。

日本を訪問後、ゴローブニンはもう一度世界一周旅行を行った。彼はアブドチア・ステパノブナ・ルトコフスカヤを妻とした、彼女は長い間献身的に彼を待ち続けた。彼は沢山の著作を出版した。将軍の官位とロシア科学アカデミー準会員の名誉を得た。ロシア海軍の強化に能力を発揮した。自身の功績で有名になった。が、コレラで亡くなった。

リコルドは有名な将軍となった。5年間、彼はペトロパブロフスクで、カムチャッカ指揮官の建物で過ごした。自分の妻、コロスタベツ出身のリュードミラ・イワノブナ（彼女は作家であった）と一緒に、カムチャッカでの生活改善に努めた。彼が書いていた、「驚かされる、これらの受難者達の不幸な運命に。」彼は病院や学校を建設した。この過酷な辺地に農業と畜産を導入することを試みた、「カムチャッカ半島の住民への人類愛的世話に対して」リコルドは聖アンナ勲章を授与された。その後、彼は大艦隊を指揮し、ダルダネス海峡封鎖で賞賛された。トルコの支配からギリシアの解放に協力した。クリミア戦争時、クロンシュタット防衛指揮官に任命された。人生の最後まで、「我が国にとって、日本と関係を結ぶ可能性とその有益性についての考え」が彼を離さなかった。すでに高齢になっていたが、1850年に、彼は海軍省に手紙を送った。日本への探検隊派遣について、交易関係を打ち立てる目的で。偽りの謙遜無しで、リコルドはそれに書いた、「ロシアだけではなく、全ヨーロッパでさえ、日本についての情報において、私と競争できる人がいようか。」そして、自分の準備を提案した、そのような探検隊を指導する。しかし、当時、すでに特別使節団を日本に派遣する準備が行われていた。その首班にプチャーチン将軍が指名された、1853年に、彼はフリゲート艦パラダ号で出発した。この旅行はゴンチャロフの本で広く知られることとなった。1855年、プチャーチンの使節団は下田で、ロシアと日本の歴史において初めての条約を締結することに成功した。その第一章は宣言していた、「今後、ロシアと日本の間では、恆久な平和と誠実な友好となろう。」

リコルドはこの件を知って喜んだであろうか？ 彼はその1855年に亡くなった。

高田屋嘉平の人生はどのように複雑であったのか？ ゴローブニンの虜囚事件の幸運な解決後、彼はその貢献に対して将軍から報償を得た、オホーツク湾司令官ミニツキイ大尉からは感謝の手紙を。彼の商売は繁盛した。彼は函館に本屋を開店した、兵庫、大阪、江戸への支社とともに。しかし、1818年に、49歳となった嘉平は、全ての仕事を弟の金キンペイに譲った。彼を跡継ぎとした。そして、故郷の淡路島に戻った。司馬遼太郎が書いていた、彼は自分の客をサモワールでもてなした、別れの時リコルドから貰った。彼の言葉によれば、「私を満足させるために、私の客好きの生活の思い出に、私の親友を時折ロシアの風習でもてなす」 高田屋嘉平は1827年に亡くなった。1833年には、彼の商店は破産した、高田屋は密貿易で罪に問われた。商品や財産は没収され、店は閉店された。家は焼失した。何人かの日本人の研究者の意見に従うと、その支配が終わりに近づいていた幕府は、影響の増大を危惧した、この一族や家族の。江戸における高田屋の富と権威を幕府は気に入らなかった。長い間、高田屋嘉平と彼の仕事について函館では何も思い出させなかった。

9月20日。図書館での最初の仕事となったのは、本検索の利用法を読むことであった。その後、私に書名検索目録を渡した、それには資料についての情報が収録されていた、露日関係に触れた。圧倒的な大半は、私にはすでに、レンセンの本で馴染みのものであった。文字通り数分後には、私のテーブルには最初の「水揚げ」があった、ゴローブニンが作成したロシア語の文法のメモ！ 後になって、著名な航海者が自分の体験について書いた：「本を持っておらず、誰かの助けで私は文法書を書いた、十分に完全な、私は満足することを強いられた、記憶から思い出すことで、それを4ヶ月以上かけて書いた。ついであるが、序文で私は言及していた、ロシア人或いはロシア語を知っている人の誰かの手にそれが渡ったならば、私が空で書いたということ、彼は思い出さなければならない。その中に、我々の事情にふさわしい例文を入れた、両帝国の接近と友好に近づくような、日本人が気に入ってくれるような。」 それらの内の一つが：「戦争は商売を大いに妨げる。」

本当のところ、イワン・マホフ（？ *）のロシア語教本を震えながら開いた。150年も前にこの本を著者自身が手に取っていた、今では価値の付けられない珍品を私が触れている。本物の図、ゴローブニンの虜囚について彼らが物語っている！ おやおや、これは、函館へのラックスマンの入港についての版画！

図書館での仕事の後、発見物から平静を取り戻すために、この地方の名所を見た。五稜郭堡壘、西洋式の初めての日本の城塞。五角形の星形に造られている。函館のブローカーがそれを建築した、江戸幕府の新しい行政の支部のために。五稜郭は、デンマークで教育を受けた日本人の学者である武田綾三郎によって造られた。建設は1857年に始まった、1864年に終了した。城塞の建物中に、博物館別館がある。そこには北海道戦争時の3500点の展示物が収集されている。公園の回りには4000本の桜が広がっている、桜は4月下旬に咲き誇る。アザレアや他の植物も。

要塞の指揮官は榎本武揚（1836年－1908年）であった、将軍の艦隊の副司令官。彼は江戸で生まれ、オランダで教育を受けた。徳川幕府崩壊後、彼は軍を指揮した。東京湾の品川から、1868年に出帆し、五稜郭を占拠した。大分後になって、榎本武揚はロシア帝国での日本大使となった。国内戦争の有名な活動家が土方歳三（1835年－1869年）である。彼の記念碑は同じく要塞にある。彼は江戸の一地区である武蔵に生まれ

た。仙台で榎本軍と合流後に、彼は陸上部隊の副指揮官となった。彼は1869年5月11日に殺された、函館の一本木関門（現在の若松町）で。

1962年3月、要塞は歴史的名所としての地位を得た。要塞としての構造は何も残されていなかったが、高さ60mの五稜郭展望塔からは、函館全体を見ることができる。ついでながら、函館の回りには、遺物や他の古い砦がある。四稜郭は、1869年に建造された、明治新政府軍からの防御のために。

9月21日。朝から図書館で仕事をした。函館の古い計画を紐解いた、最初のロシア人がこの港を訪れた当時の。これは、ここに最初のロシア領事館が出現するより早い時のことであった。ゴシケビッチの時代をよりよく理解するために、ロシア人から写真術を教わった日本人による写真を見ることとなった。

その後、再び函館外人墓地を見に出かけた。それはロシア人墓地（函館山の北斜面 *）に直面してある。この地区は以前は山瀬泊まりと呼ばれていた。ここに殆どの外国人が葬られた、函館に住んでいた、日本人のキリスト教徒、いろいろな国の船乗り達も。ペリー提督の船団の2人の水兵の死亡から全てが始まった、彼はここへ1854年4月にやって来た。50歳のオルフと19歳のレミスクの埋葬のために、日本の沿岸に永久に残した。箱館奉行は捨てられていた墓地の一部を直ぐに囲った、港から東にあった。場所はまるで絵画のようである。そこからは湾と津軽海峡（サンガルスク海峡）が一望に見渡せる。

埋葬は船乗りと宗教の伝統に則って行われた。船での短い祈りの後、半旗を掲げたボートに乗った船乗り達は自分らの同僚の遺体を岸に伴った。低く抑えた太鼓の音のもと、葬列はゆっくりと墓地へと進んだ。多くの日本人が見守っている中を。彼らは墓地へ進む船乗り達の後に続く。そこでカトリック牧師のジョーンズ神父がパニヒダ（追悼祈祷）を行った。これは日本で3番目の埋葬であった（以前に、横浜と下田で）。キリスト教に対する日本人の強い偏見、それへの狂信的な反抗のことを知っており、牧師は疑っていた、彼らがどれだけキリスト教の規範を守るのかを。彼はこれについて指導者に尋ねた、そして返答は：

— 自前通りにしたまえ：大げさでもなく、こじんまりでもなく。

— もし突然に中断するならば？

— 続けなさい、何も聞かなかったように。

牧師が驚いたことには、パニヒダは静粛に進んだ事であった、日本人の誰も抗議をしなかった。司祭は理解した、この日を終生覚えている：初めて、キリストの使者が公然と、日本の地でキリスト教の儀式を遂行した。彼は知った、200年前、日本で、宣言された：「太陽が大地を暖めている間、一人のキリスト教徒も日本へ敢えて出向かない。たとえ全てが知っていても：スペインの国王、或いは、キリスト教の神としたとしても、彼は非業の死を遂げる、もしこの規則を犯すならば。」 最近、牧師は気がついた、パニヒダに参加した日本人全員例外なく、儀式に興味と畏敬を示した。

次の年に、この墓地に、イギリス人の墓が追加された。ここに、また、フランス人の船乗りが葬られた、函館に外交目的での訪問中に病気で亡くなった。40個の墓の中に、オランダ領事ドース、ドイツの次席領事ハーバー、その他の墳墓を見つけた。1870年には、イギリスとロシアは墓のための個別の区画を得た。規則に則って、その年直ぐに、フランス人にカトリック教の墓地の中に区画を割り当てた。直ぐ後に続いて、聖ポール修道

院のシスターのための区画が出現した。1876年には、中国人のための埋葬地が。最近、これは中国人墓地となり、大きな外人墓地の一部となっている。

墓地は鍵が閉められていた。回りを巡り、場所を見つけた、それを抜けて潜り込めそう。私は見つける必要があった、場所を、ジョン・デンビの娘の埋葬地を。リュードミラ・デンビは1914年8月にウラジオストクで生まれた。1939年6月に亡くなった。上海に日本人が侵攻した時に。私は指摘を見つけていた、彼女の遺骨が函館に送られ、この墓地に葬られたとの。1903年、会社「セメノフ、デンビとK」は、函館のロシア人墓地の周りの囲いを修理するための資金を出した。企業家達は教会に毎年120円を献金すると約束した。デンビ自身はプロテスタントであったが、反論しなかった、子供達を正教徒として洗礼することに。残念ながら、デンビの墓を見つめることができなかった。その代わり、2つの古い記念碑を見つけた、アメリカのペリー提督の船乗り達の墓の所に。

外人墓地から遠くない所に、東本願寺の函館末寺である舟見寺があった。これは日本で初めての石造りの寺であった、1904年に造られた、それに隣接する埋葬地を整備するために。1926年に、末寺は修理された。ここに埋葬された多くの人々の中に、武田美奈子、武田綾三郎の妻、1856年に北海道で組織された西洋研究所教授。彼は五稜郭要塞と弁天埠頭を建設した。彼の妻である美奈子は、鹿島又次郎市長の妹であった、商店の店主でペリー提督の日本訪問についての記録の著者であった。美奈子は27歳で亡くなった、8年間だけの結婚生活であった。同じように若くて、27歳で亡くなった、都築豊治は建設計画の立案者で大工であった、函館丸を建造した、洋式の初めての日本の船。彼は1880年に亡くなった。

1855年、フランス海軍が函館を訪れた時、船乗り達は仏教寺院の実業寺に立ち寄った。フランス人と日本人は素晴らしい記憶を造った、しっかりとした握手をした。残念ながら、そのような時は、最初のロシア人住民と外交官の函館での存在は永遠ではなかった、彼らは函館に極めて大きな痕跡を残した。時はそれらの痕跡をぬぐい去った！・・・

函館市民は自分の過去の究明に努力した。この証拠、アメリカの兵士に献げられた、第二次世界戦争時の終末の1945年7月14日、15日に北海道爆撃の犠牲となった、記念石。当時、函館とその周辺は500機以上の爆撃機の爆撃にさらされた。陸地と海で1030人以上が犠牲となった。函館の、松坂町、若松町、海岸町、大森町、駒溜町、天神町、旅籠町、舟見町では169棟が損なわれ、384棟が全焼した。石碑には20以上の名前が。それらの中にステパン・コマル。ステパン・コマルはロシア人でなかったのか、アメリカ軍に勤務していた？！

この日に犠牲となった函館市民を記念する同様の石碑が並んでいた。設置者の考えによれば、この記念碑は建てられた、「戦争の悪魔はこの地に戻ってきてはならない。」のために。この地の住民達は広島と長崎より極めて損害は少なかった、アジアを操縦しようとする思想のために（？*）。

9月22日。気分は余り良くない。が、図書館に行かなければならない：そこで、図書館員と会う約束をしていた、レンセンを助けたことのある。これは力を振り絞ることを強いた。図書館まで、中心をぶらついた。埠頭当たりで、警官を見つけた、湾で何かを引き上げている、その周りを囲んで。日本での犯罪は、世界で最小であると知られている、がここでは秩序が犯されていた。有名なヤクザを思い出すのには十分。実際において、この

組織犯罪は極めて興味を引いた、通りで全てが静かであるために（？ ＊）、利益は強請や売春で得る。多分、誰かが決めた、命との勘定を清算することを。日本では自殺が多い。原因は非常に多岐にわたっている：ストレス、成功を追い求めることで生ずる、或いは単に家庭問題。

残念ながら、図書館ではがっかりした：必要な人を呼び出すことができなかった。その代わり、大量の貴重な珍品を準備してくれた。図書館員に補足のメモを渡すと、返事があった：

－今は何の問題もありません。直ぐに仕事ができるでしょう。

－支払いはいくらですか？

－ちっとも。目録に印を書いてください。

．．．

心の中で、私は日本の神を賞賛した。ロシアの古文書館、博物館、図書館で仕事をしている時、私はどれだけ苦勞させられたことか。モスクワの古文書館では、資料を4昼夜かかって提出してきた、書類の一定の量を研究者に限定して。博物館では、しばしば、資料への閲覧を拒否された、彼らの同僚がそのテーマに従事しているという理由で。これらの機関では、複製においては、こっぴどくむち打った、その希少性を引き合いに出して。歴史的眞実を得ながら、歯ぎしりをする羽目となった。民族的達成は文化から官使の世襲領地と化して久しかった。時折、モノグラフに印を付けたくなった：「この文書を保管している人の希望にもかかわらず、この本は世に出る。」もちろん、我々の所にも清廉な人はいる。が、むしろこれは例外だ．．．

函館図書館の職員の心配は、研究者の仕事のため快適さを造ろうとする、他の所にもあった。私が自分のカメラに中々慣れていないのに気がついて、同様の撮影を前もって決めておくのではなく、私に提案した、三脚と照明装置のある図書館の撮影室の利用を。仕事ははかどり始めた。カメラを持たなくなったのは初めてであった：エネルギーがなくなった。忌ま忌ましきでちえっといった。へまをやった、ホテルでの充電を忘れていた。夕べの祈りで正教会へ行きたかった、が、そこは空で暗かった、ただ綺麗な外灯が建物を夜の空を背景から別けていた。町をぶらつきに向かった、エブゲニイ・ワシリエビッチ・プチャーチンはその時にどのように振る舞ったのか再現しながら。

1859年に、長崎と横浜と一緒に、函館は開港された、外国貿易のために。この時以来、函館は北海道の玄関となり、漁業の基地となった。この期間について、町の発展のために重要な価値を持っている元町と末広町の歴史的な地区を我々は言及する。ここには、今日まで、古い外国の外交代表機関の遺物が残されている。沢山の宗教的、社交的建物、レンガ組、他の商業施設。それらは我々に過去の雰囲気をもたらしている。独特な色調を地区に与えている、様式建築と日本式建築の独特な組み合わせを持った個人の家は。この場所は北海道の「歴史的建物の重要保存地区」という地位を得た。この地区は約14.5ヘクタールを占め、弥生町、大町、末広町、元町、豊川町の地区も含んでいる。

1907年8月、函館での大火災は約1万棟、殆ど町の半分を焼き尽くした。函館市民が参集する所の、公会堂は焼失した。富裕な企業家、相馬哲平は、火災で自分の商店を失っていたにもかかわらず、建物の復興のために当時でも巨額な総額5万円を寄付した。建築は1910年に完工した。新しい建物は、明治時代の様式建築のアイデアであふれてい

た：綺麗なベランダ、入り口の門柱、ポーチは派手。1974年3月、函館公会堂は重要文化財としての地位を得た。1982年、3年間に及ぶ修復を終了した、ホールは訪問者に開放された。

1859年、フランス人宣教師マーネット・デ・キャッソンーパリ外国宣教師教会の司祭が函館に最初の臨時の小礼拝堂を建てた。明らかに、それは焼けてしまった。というのは、1868年、カトリック司祭モウニコウとアムブリユスターが函館の中心に臨時の教会を建てた。1877年、司祭マリンの御陰で、最初の木造の教会が出現した。この教会は3度火災に見舞われ、その都度復興された。現在、町を飾っているゴシック様式のカトリック教会の建物は、1924年に建てられた。祭壇と14の彫刻群は函館のカトリック教徒へ、法王ベネデクト15世からプレゼントされた。この教会の支所は横浜（山田教会）と長崎（大浦教会）にある。

函館のギリシア正教会は、日本ギリシア正教会に属している。1874年に函館にやって来た後に設置された、宣教師教会のイギリス教会からの宣教師デニングが、1878年、末広町に、この教会の最初の建物が建築された。この建物は他の町の建物と同じように、何度も火災に遭った。1921年に建物が復元されたことが、よく知られている。今日まで、教会は重要な役割を演じてきた、教育において、特に、そこではアイヌや処女のために授業が行われた（清和女子学校）。てっぺんに十字架を持った最新の建物の建築は1979年に完工した。この計画は、中世のヨーロッパの教会建築様式の前で練られた。

キリスト教会（キリストの統一教会）は、アメリカから日本への到来を始としている、1873年12月に、メソジスト宣教師ハリスの。彼は次の年の1月には函館で宣教を始めた。キリスト教宣伝の困難さにもかかわらず（その年には、ドイツの臨時領事殺害が起こった）、ハリスは宣教を続けた。彼は札幌に去った。そこで、札幌農業学校（現在の北海道大学）の学生の信者達が彼を出迎えた、内村鑑三、新渡戸稲造、その他が。教会を1877年に建築した。が、それは消失した。2回の火災と復興の後、1931年に最近のキリスト教会を開いた。司祭の妻は函館における女子教育に大いに努力した。彼女の努力により、女子学校が設置された、キャロライン・ライト・ガールズ・スクール（現在の学園）。

2007年9月23日。日曜の朝は新鮮で快晴、函館を訪問して初めてのこと。正教会で礼拝が行われているに違いない。私はそれに参加することにした。開始まで30分あったが、すでに信徒達が集まっていた。教会で私の前に年配の日本人が入ってきた。入り口で彼は靴を脱ぎ、棚にきっちりとそれを入れた、全く日本の寺院におけるように。東京の主たる正教会ではこの習慣はない。ここ、僻地では、日本の伝統が外国のそれの上にある。内部では、礼拝の準備が着々と進んでいた。

—私はロシアからの者です、教区の歴史について誰かと話ができますか？ —小さな売店の女性の売り子に私は尋ねた、入り口で教会の小間物を売っていた。

彼女は聖職者、眼鏡をかけたやせ気味の男性に頷いた、彼に私は名刺を渡した。

—おー、これは非常に珍しい。が、直ぐに礼拝が始まります、ここで少し待っていてください。

日本人の信者達は、教会にやって来た、礼拝のために列を作った。明らかに、彼らは真に信仰している、床まで届く深いお辞儀。多くは司祭のために食物を置いた。年配のおじ

さん一皆に知られているババ神父一が感動的に子供達の頭をなでていた。

小さくて快適なホールには、背もたれに十字架のある24台のベンチが数えられた。椅子には日本の座布団が、これは外国の教会では普通になっている。多くの信者がいる、年配の人々が主である、彼らは座って聞くのを好んでいる、が、立っているのも多くいる。一人の日本人の老人は驚くほどアルフレッド・デンビに似ていた：威圧的な頭の付き方、眼鏡、灰色の髭。信者の年齢は様々、若者、子供。全員身なりはきちんとしている、が、女性はロシアの教会でありふれているスカーフがない。ヨーロッパ人には気がつかなかった、例外として、ギリシアの一家族、彼らは少しいて、去って行った。

壁に二重窓、上が丸い、十字架で飾られている、多くの明かりを通過させていなかった、薄暗い。床には綺麗な畳、花柄の装飾を施した、それに同じ色合いの絨毯を敷いている。イコンの壁と王門は部屋に美しく荘厳な様相を与えていた。函館のイコンについてニコライ主教が1891年に書いていた：伝統に忠実な仕事の20の祝日のイコン画、ゴシケビッチが寄贈した、殆ど全てが少し損傷している。ひびが入っていた、多くの箇所では塗料の層が鉛版から剥がれていた。そのため、鉛版は背面で漆喰の壁にひっついていて、日曜日のイコンだけが、経机に置いてある、完全であった。私は最も酷くなっている5つのイコンを東京に持ち帰った、急いで複製するために；このために他の者を差し向ける。残念ながら、これらのイコン画は永遠に消えてしまった：本物は函館の火災で失われた、複製は1923年の東京の地震で。

10時、良く響く鐘の音が函館に流れ出した、祈祷が始まった。教会には、約40人が集まっていた。全員が手に2本の蠟燭を持っていた、健康と安息のために灯している。聖なる者の顔に反射を残す灯火によって、イコン画が直ぐに変貌した。女性の朗読者は素晴らしい声で、早口で祈りの言葉を読んだ。教会の音響は素晴らしい。馴染みのメロディ、が、日本語。素晴らしい、しかし、「ハレルヤ」、日本人にとって発音がそのように難しい言葉、は少し変に聞こえた。10人からなるコーラスの歌声は、調和がとれ綺麗であった、教会の内装のように。全てが信者達の心に永遠の救出を抱かせたに違いない。聖大主教ニコライ・ヤポンスキー（カサトキン）は注意深く信徒衆を見ていた、大きなイコンを持って。多分、函館市民の信心に満足した。

ロシア移民のどれだけの世代がここで祈りを捧げてのであろうか、祖国への早い帰還を期待しながら・・・ 総主教ネストル（アニシモフ）とセルゲイ（チホミロフ）の大きな写真が思い出された、この教会の周りの写真フィルムに捕らえられていた。前者はカムチャッカからハルピンへの航路中にここに立ち寄った。日本で彼は自分の本を出版した。大主教ネストルは多くのことを体験した。中国で長年に渡り宗教に従事した。ソビエト権力とモスクワ総主教管区の承認は助けとならなかった。1948年6月14日、彼を逮捕した、その後8年にわたり彼は収容所にいた。運命は悲劇的であった、府主教セルゲイの。1940年9月5日、日本の正教会の指示に従って全ての仕事と財産を渡すことを彼に強いた。その後、彼は東京近郊に移り住んだ。そこに祈りの家を造った。この少し前に、彼は日本権力による逮捕を受ける羽目になった、という話があった。函館におけるロシア人の運命についてのそのような歴史についてはいろいろな話がある・・・ 彼らの神は聞いてくれた、その後、彼らはそれぞれの墓地にどのように埋葬されたのか。国家が崩壊した、それ故に、彼らは祖国を捨てざるを得なかった。ロシア移民の幾つかの墓には十字架がな

い。

蠟燭は、教会の軽い空気の動きの風で揺れていた、正教のロシア人や日本人の心のように、大地に眠っている。日本人のコーラスの大声の賛美歌が聞こえた。日本人の声に、彼らの心の安らぎへの祈りが響いていた。若干の日本人の顔には、ロシア人の特徴が見えていた、多分、彼らにはロシア人の血が幾らか流れている。

説教が良く響き渡っていた。それでは、ニコライ・ヤポンスキーの名が何度か挙げられた。祈りの後、信者達が解散し始めた時、私の所に司祭の中井が再び近づいて来た。私は鐘楼を見せてくれるようお願いした。彼はドアを開けた、私たちは狭い階段をゆっくりと上っていった。彼は鐘の歴史を話した、特に、その復元について。戦時、鐘を再鑄造に提出した、ごく最近6つの新しい物を鑄造した。1996年、環境庁によって、その音は、「日本の音の環境を形成している、100の優秀な協和音のコレクション」に入れられた。私の同伴者が鐘を鳴らした。彼は本当のプロであることが直ぐにわかった。ニコライ大主教の言葉を思い出した、函館の鐘付き人について何時だったか話してくれた：「鳴らす、一斉に鳴らす、ここで、きちんと、全くわからない。」

函館の教会の鐘—正教会の全歴史において4度変わっている—は土曜日と日曜日に鳴り響く、朝と夕方の祈りの時に、同じく3分から5分間、教会の12度の祝日に、パスハ祭も入れて。これはヨーロッパの文化を函館市民が知る象徴となっている、江戸時代の終わり、明治の復古の始めに。鐘の響きになじんでいない函館市民は教会の鐘の音を、ガンガン寺と呼んだ、タンタンチャーチと呼んだことに似ている。私は鐘楼から付近を見回した、函館出身の最初のロシア人ニコライ・ペトロビッチ・マトベーフが当時為したように。

降りて、一般食堂に立ち寄った。そこでは信者達が食事をしていて。私にごちそうしてくれた。ボルシチと同時に日本の野菜スープに似たポトフのような物。多分、函館におけるそのような食事について、ニコライ神父が書いていた：「12時に、公園で食事接待のために用いられる家で食事；12人のキリスト教徒が金を出し合っていた、一人当たり2.5円ほどか、そして食事を作っていた。断らなかった、というのは不平を言う：”救世主は、ごちそうを受け取ったというではないか”」と。食事後、私に大きな本を示してくれた。それには詳細に記述されていた、復興仕事が、この教会で行われた。

祈りと寺院巡りの後、町の散歩に出かけた。正教会と並んで、遺愛幼稚園と遺愛女子高等学校が位置していた。記念掲示板に書かれていたことからわかった、メソジスト宣教師ハリスがこれら2つの学校の基礎を築いたことが。残念ながら、何の掲示板も見かけなかった、ロシア女子学校が位置していた場所には。正教の心で日本人の子供達の教育に少なくない貢献をしたはずの。

私の道は海岸通りにあった、そこにはペリー提督の大きな彫刻が見えた。マシュー・カルブレイス・ペリー (Matthew Calbraith Perry) は1854年3月17日、5隻の船で函館に来港した。主目的はアメリカの捕鯨船に助力を頼むこと、函館を自分の基地ともすることであった。訪問150年を記念して、提督の彫像が建てられた。旅行の観光名所となっている。アメリカと日本のひととき良好な関係にもかかわらず、日本人は自分の弱さを忘れていなかった、開国時の。日本の流行作家司馬遼太郎が書いていた：「ペリーは見なした、東方の人々には、恫喝と脅迫だけが効果があると。そして、この立場にしっかりと立った。彼は成功を得たが、人類の歴史に悪い名誉を残した、許されない手段に訴えたとし

て。ペリーは部下を酷く嫌っていた。彼らはペリーに憎しみと軽蔑を持っていた。後になって、ペリーの娘が富豪の家族の男と結婚した、ペリー自身はそこに居候を決め込んだ。主人の家に客があると、ペリーは贅を尽くして客をもてなした：一つの例がある。高慢と盲従がしばしば隣り合っている、文字通り、葉の両側。」 同じ作家が書いていた、プチャーチンは「日本側との関係に極めて気を遣った。」 北海道のペリーの記念碑は運命の皮肉である、プチャーチンの名前は全く残っていない。比較のために必要である、実際においてわかる、藤町に「友好記念碑」がある、1855年の1月の事故を記念して建てられた、その時、日本の漁師達がフリゲート艦デアナ号の海難時、ロシアの船乗り達を助けた。

ペリー提督が上陸した所がこの場所である。1854年5月に、セグナト（？ ＊）と条約を結んだ。その後、北海道にやって来た。商人山田屋重平の家で、彼は出会った、影響力のある人物達や役人達と。岸から遠くない所に建てられた石碑には、ペリーの本からの絵が彫られている、然るべき場面の描写のある。

埠頭で、記念となっている船「摩周丸」を見つけた、北海道と本州を間で就航していた、1988年まで。現在は、この船は海に浮かんだ博物館となっている。明治維新後、函館は北海道における日本の玄関となった。この島にやって来た者は全て、最初に東浜埠頭にやって来る、1871年に造られた。1868年9月に、ここに、北海道に初めてやって来た者の記念碑を造った。1873年、船「公明丸」が青森と函館の間に定期航路を始めた。その年に、渡し船が錨地に碇を下ろし、乗客を岸に送り届けた、或いは、スループ船で逆に。後になり、この埠頭は重要な役割を果たすようになった、水産業の発展において。ここに、デンビ、アルセニエフ、クラマレンコ、その他が上陸した。

2007年9月24日。 好日、日本の祝日であった。残念ながら、カレンダーを見ていなかった。函館には、日本的ではない地域的な祝日が少なくはない。8月1日から8日間の祭りにおいて、約1万人の人々が参加した、踊りの行列や綺麗な花火。8月末には「泉源湯ノ川地区で漁師の花火大会」。五稜郭要塞には、自身の祝日がある。その時には全ての参加者達は伝統的な着物で着飾る。祝日の行列は開門が伴っている。7月末には高田屋嘉平の祝日がある。2月初めには、函館の元町公園で冬の祭典がある。函館市民はいろいろな理由を付けて祝日を楽しんでいるのは明かだ、特に歴史的なことで。偶然ではない、旅行案内書の最初の章が呼びかけていることは：「この太陽の祝日（？ ＊）には言葉を忘れるーここに町の歴史のページが」

丘に向かって歩いた。沢山の墓を見つけた。それらの中に日本人のキリスト教徒の大きな墓地を見つけた。戻っていると、静かな歌声を聞いた。年配の女性が記念碑に顔を向け、何か抑揚を付けて小さな声で歌っていた。時折手を打ち合わせていた。立ち止まり、耳を傾けた：これは叙唱（？ ＊）らしい。私はわかった、彼女は愛しい人を思い出していることが・・・

墓地の区画から野次馬の旅行者達が去る間、私は少し待機することになった。潜り戸をさっと飛び越え、私は同国人達の墓の中に、しまいには彼らを思い出したかった。

私は直ぐに納骨所に向かった、そこから偶然の通行人は道路から私を見ることができなかった。瓶から直接飲んだ「スマイルノフ」は喉を焼いた：ホテルからコップを持ってくることまで頭が回らなかった。

空はあくまでも青く、静寂。涼しい、秋の気配を感じず。葉がゆっくりと舞い落ちている。回りの墓をさっと見回し、私の同郷人を思い出す。銘板に目がとまった、水兵ピョートル・ストゴフの遺骨が眠っている、140年前のこのような秋の日に銃殺された。誰が今彼について思いをはせるか？ このため、最初の一飲みは彼のため。

・・・愛しいペーチャー（ピョートルの愛称 *）、私は何度も君にお願いした、大怪我をしないように。ロシアへ戻れ、友子を忘れて・・・酔った中尉が水兵を安らげた。

水兵ストゴフが日本女性の名に震えたように見え、将校が死者に付け加えた：

－もちろん、彼女には沢山の魅力・・・

水兵ピョートル・ストゴフは、砲艦モルシ号が函館の錨地に碇を下ろした、その後直ぐに友子と衝突した。

－将校殿、水兵達と候補生達、－モルシ号の船長の声が少し嘲笑的に響いた、私は全くわかる、君らが岸に飢えていることを、が、ここでは君らを多くのエキゾチックなことが待っている、が、わからなければならない、習慣は自由、梅毒の土産を君らに贈ることを・・・

港の女郎屋、長崎と似たような、函館で提供された。砲艦から将校付きの小型ボートはまだ離れていなかった。日本の小舟が2隻に向かって急行した。それらからは日本女性達がハンカチを振っていた。ピョートル・ストゴフは長崎と横浜で彼女らを見た。恥じなかった、愛の問題に熟知している年配の同僚達が昨夜のエピソードに聞き耳を立て****。

－諸君、艦長が言ったことを覚えておくこと。何のやり過ぎはない！・・・夕方、我々は函館総督のレセプションに行かなければならない、それには松前藩主の家族が出席するであろう。一年配の将校が付け加えた。

本当のところ、ストゴフは近くの女牢屋へ全く行きたくはなかった。そこは噂では踊りが秀でていた。彼は長く夢見ていた、根付けを土産として購入することを、彼の同僚達がそれを褒めちぎっていた。ピョートルは脇道にそれた、駕籠に出会うために、駕籠は殆ど裸の2人の日本人が運んでいた。駕籠かき達は驚いて早足で逃げ出し、彩色した駕籠を放り出した。遅れないで、直ぐに、あっという間に、二人の侍が刀を抜いた。水兵は恐れを知らなかった。もちろん、彼の短剣は日本刀とは比較にならなかった。が、ロシア人船乗りとしての名誉を守り抜く準備はあった。

これらは瞬時の出来事であった。駕籠から、着物を着た優雅な人が出てこなかったならば、どんな国際問題となったか、誰でも知っている。女性は侍に優しい声で何かを語った、彼らは直ちに片膝をついて、お辞儀をした。女性は笑みを浮かべて、英語で水兵に語りかけた。

「どうも、ごめんなさい！」 我に返ったストゴフは日本語で返事した。無駄ではなかった。彼が稲瀬のロシア人村で3ヶ月ほど住んでいたことは。

「えー、貴方は長崎から？ なんと興味ある発音！ 私は友子といいます。」 彼女は少しうつむいて話した。この時には、駕籠かき達は戻ってきていた。怖い巡査が駕籠の端に立っていた。

「すみませんが、私は急いでいます。」 女性のおしろいを塗った首を通して少し赤らの顔が出てきた。そして、彼女は再び自分の「穴」に身を隠した。

水兵ストゴフは直ぐにわかった、偶然の出来事が彼を並ではない女性と出会わせたこと

が。彼は今までそのような綺麗な着物を見たことはなかった。長崎の女性の着物は比較すると、単純な農民の服装であった。この女性は宮廷の女性を思わせた。一度、水兵は宮殿でのレセプションに参加したことがあった、警備の職務で。そこで彼は宮殿の美女達に見入った。

ストゴフは刹那の恋愛について結構耳にしていた、それらしいことも。直ぐに彼の頭はボーとなった、彼は柱にもたれかかった、最近の出会いに思いをはせて。そこような経験を彼はしたことはなかった。我に返る度、彼は函館の通りをうろつき回っていた、あの女性を見つけ出そうとして、が、あのような偶然の知り合いに会うことは無かった。

直に、接見の時がやって来た。総督の中庭は馬車であふれていた、武士や兵士があふれていた。多くの様々な色の制服で目がちらちらした。砲艦モルシ号の艦長は同じく礼装であった。少し離れて、イギリス人女性とアメリカ人女性達が美しさを誇っていた。脇の部屋から函館の奉行と副奉行が現れた時、大きなホールの壁に沿って全員が列をなした。彼らが座布団に座ると、祝典用のドアが再び開き、部屋に松前藩主ー大きな島の支配者ーが入ってきた。彼の後ろに、彼の家族が小刻みに歩いていた。そこで、水兵は友子を見かけた。

年配の将校が彼の脇腹をつついた：

「私に言った、藩主の娘は美人であると、しかし、私は思わなかった、それほどとは！」

友子は直ぐに探し出した、一目で水兵を、まつげを動かしたように、彼には思われた。

謁見の後、水兵は少しぐずぐずして遅れた、年配の同僚を出口に案内した。彼の所に礼式の着物を着た日本人が近寄り、手真似で他の部屋に行くように指示した。そこで、ストゴフは友子を見た、彼の姿を見て彼女は少し腰掛けた、低くお辞儀をしながら。水兵は一瞬の間茫然となった、どう行動したら良いかわからないまま。彼の狼狽ぶりを見て、女性は微笑み、仕草で示した、腰を下ろして良いかと。

「私を許してください、もう一度、私は全く貴方に嫌なことをしたくはありません。」

女性は言った。

・・・次の日、水兵ストゴフは海岸に急いだ。様々な理由を付けて、彼は同僚に当直を替わってくれるように頼んだ、海で全てを替わってあげることを約束して。将校達は、本当に深い感情がロシアの水兵を虜にしたのか、わかっていた。彼を拒否しなかった。しかし・・・、船の出航日がやって来た。乗組員は陰口をたたいた、ストゴフの熱意がどう終わるのかと。

友子が悲しみながら語った、一大好きなペーチャーさん、私の父は、私たちが結婚し、私がロシアへ去ることを聞き入れてくれません。私は父の意思に背くことはできません！

モルシ号の出港準備は全て整った。水兵ピョートル・ストゴフだけが捕まらなかった、艦長は既に悪口雑言を吐き始めていた、ボートが船に接近した時には。船には情報が届いた、水兵ストゴフが自殺したとの。このように、ロシアの若者は遠い国に、愛する人と残ることを選んだ・・・」

・・・墓地の傍を走りすぎる車の音は現実離れして遠方から。100歳の樹齢の木々の葉のさらさら音によって破られた静寂。それらは多くのことを思い出させ、語ってくれる・・・が、それらは永遠ではない。ニコライ神父が自分の日記に書いていた：「夕方前に、墓地に行ってきた：我らのロシア人はこんもり茂った木々の陰に、私がかって小枝を植え

付けた。ここでは葉がメロデーを奏でているように音を立てている、何か気持ちの良い憂鬱を運んでくれる、自分の心の声を聞いた、安静を求める—全ての運命・・・日本の—我々ロシアのキリスト教徒の—墓地は陰気、全く陰がないことで：多々墓だけ、殆ど全ての哀れな墓と草木」

腐った葉の匂い・・・倒木に座った、ポポフの墓と並んで、ゴムジコフと。記録を少し引っかけ回さなければならない、あの昔の悲劇の究明するために。各々の石碑の下には人の運命が隠されている、それは小説の題材となる。墓地の歴史。どのように究明するのか？例えば、バトリンの墓標は後になって置かれたのは明かだ。ほら非常によく見えている。ニーナ・イワノブナについて探り出した、大実業家の後家、上海で亡くなった。幾つかの情報によれば、彼女はアリフレット・ジョンの妻の姉妹であった、夫の死後に、アリフレット・ジョンの兄弟と結婚した。彼が亡くなった時、彼女はコンスタンチン・ブレゾとの関係を登記した、横浜の外人墓地に彼と並んで眠っている。

バトリンとステパノフの間に、もう一つの基台が見える。私は予想している、幾つかの墓が他の上の一つとしてあると。注目した、シャルフェーフの所には、一つの埋葬のために場所が残されたと。この遠方の墓地に眠っているのは誰か、考えに考えた。究明することができるのか？我々の英雄を日本に連れてきたのは何か、何が彼らにそうさせたのか。

墓地を出て、再び、柵を跳び越えた。運命は何時私をここへ送り届けるのか？

感傷に浸りながら、岸をゆっくりとぶらついた。近傍と名所を見ながら。ロシア人の歴史に関係のあるもう一つの記念碑を見つけた。地味なオベリスクに気がついた、それは最初の日本人に献げられたものであった、外国へこっそりと去った。この人物は新島襄（1843年から1890年）。1864年、彼は江戸から函館に来た。ここからなら、彼の思いを実現できる都合が良いと考えて。ここで、彼はニコライ神父と知り合いとなった、彼に日本語を教えた。多分、領事館の司祭は新島に世界を見ることを祝福した。当時、日本人は祖国を捨てることを禁じられていたにもかかわらず。若い日本人は捕鯨船に乗ってアメリカへ去って行った。航海中、船長が彼にジョセフという名を与えた。後になって彼をジョーと呼ぶようになった。上海を経由して、彼はアメリカ合衆国へ到着した。そこで10年間勉強した。プロテスタントとなった。彼は1874年に日本に戻った。次の年に、京都同志社英語学校を開いた。この学校は後になって有名となり、現在は同志社大学となっている。彼はニコライ主教について批評していた、新聞「函館クロニクル」で、「思慮深くて本当に役に立つ」人物であると。記念碑には詩の一節が彫られている、1865年にジョーが香港で書いた：「(人間は一つの決意を持って、何千マイルも走らなければならない。) 男児、志を決して千里を馳せる 自ら辛苦を嘗める あに家を思わんや 却って笑う春風雨の吹く夜 枕頭尚夢む 故国の花」(原文はロシア語ではなく変んな英語*) 旅人は1890年になくなった、48歳で。

新島のずっと前に、一人の日本人が函館から逃げ出した。この逃亡については多くのことは知られていない、逃亡者自体が謎の人物として残ったままである。プチャーチンの報告書の一部に、注意書きが見られる、19世紀に書かれた：「巧みに放置されたスパイ」

これがそうか如何なのかは、究明が必要である。デアナ号の乗組員としてロシアへ去った、一人の日本人が知られている、橘康哉である、遠江地方の掛川藩（現在では、静岡県西部に位置している）の武士。

明治天皇に献げられた記念碑は中国の不死鳥の形をしている、綺麗な花崗岩の地球儀の上に羽を大きく広げた。これは1876年の函館への天皇の来訪を記念にしている。その時、彼はこの地の税関の埠頭に上陸した。この時彼は東北と北海道を訪れた。1881年、天皇は再び北海道を訪れた。今回は、彼は小樽に上陸した、島を通り抜けて再び函館に現れた、そこから青森へ向かった。この記念碑は同じように、3ショウヒ（？ ＊）と呼ばれている、「3回の幸福な訪問」を意味している。記念碑は函館出身者の柳川剛一によって造られ、1935年9月7日に除幕された。1941年7月20日から、海の記念日と見なされた、明治天皇の旅行を祝して。7月18日に函館を出航し、7月20日に横須賀に到着した。1996年からこの日は国民の祝日、海の日となった。

9月25日。函館の最後の日がやって来た。私はリックにパソコンを慎重に詰めた。大量のコピー紙を注意して詰め込んだ。東京に集合する時となった。海のあるこの特異な町と別れるのは少し悲しい。この町はロシアと日本の関係に大きな役割を果たした。私はベットの端の敷物に座った。日本をぶらぶらするのは別に珍しくもない、日本の納税者のお陰で。私は旅行を完遂し、最近の出来事を究明しようと試みた。

追伸：今後、ロシア的な長崎、ロシア的な神戸、ロシア的な東京、その他へ旅行するであろう、隣人であるロシアと日本の間の関係が良好であろうと不仲であろうと。それらが残っている所へ。私はしばしば、遠くの北海道や函館を思い出すであろう。セメノブナ・イベツ（旧姓はヤシコバ）は愛について語っている、南サハリンのシベツ家について、自分の青春時代について、長崎と神戸で過ごした。イリーナ・ドルゴバは北海道で有効な番地を提供しただけではなく、彼女の居心地の良い家で、ゲオルギイ・ベロチャプロフと知り合いとなることできている。彼は釧路を良く覚えている、ムシカガワの快適な家で、オリガ・ズベレバヤと出会う。東京のニコライ聖堂で、私の英雄達の魂への祈りを献げ、心から遠い昔の事を理解し、それらについて私はこの本で話すことを試みた。もし成功しなかったならば、私は「下駄を預ける」、他の人に可能性を残して。大昔のことについてよりよく話しをする。

（2022年5月28日 1回目訳完 ＊）

（2024年2月 9日 1回目校正 ＊）

（2024年10月5日 2回目校正 ＊）

函館外人墓地中のロシア人地区の墓

（2007年作成）

アレクセーフ、（ステパン？）（？－1864年1月25日（4日？））。第19艦隊乗組員の下士官、クリッパー艦「ガイダマック号」。44歳。

アルハンゲルスカヤ、クセニア（1921年－1943年1月12日）。

アルハンゲルスカヤ、クセニア・ニコラエブナ（1881年－1943年1月8日）。

アルハンゲルスキイ、ワシリイ・ワシリエビッチ（1886年－1939年3月25日）。

バトリン、プロコピイ・ペトロビッチ（1878年7月21日／8月8日、ブヤトスク県

エラブシスク郡ー1939年8月2日、上海)。プリロフスク工場長。露米銀行相談員。
遺骨は函館に移送された、そこに未亡人が住んだ。

ワシリエフ、アンドレイ (?ー1861年9月28日)。帆船乗組員、クリッパー艦「ガイ
イダマック号」。水死。27歳。

ベクマン、マチス (?ー1866年6月5日)。コルベット艦「アスコリド号」の水兵。
31歳。

ベストリ、ウラジミル (?ー1869年1月1日)。ロシア領事館の医師。29歳。

グボズデフ、エフトロピイ (?ー1860年3月9日(4日?))。第28艦隊の水兵、
コルベット艦「パサドニク号」。26歳。

ギレシエフ、ステファン (?ー1860年1月25日)。第28艦隊水兵、輸送船「ヤ
ポネッツ丸」。30歳。

ゴムジコフ、ステパン (?ー1862年3月18日)。コルベット艦「パサドニク号」の
水兵。28歳。

ゴシケビッチ、エリザベータ・ステファノブナ (?ー1864年9月5日)。ロシア領事
ゴシケビッチの妻。43歳。

エブセーフ、ピョートル (?ー1859年11月1日)。第28艦隊の火夫、コルベット
艦「ジギト号」。26歳。

ズベレフ、コジマ(コシマ)・ロデオノビッチ(1886年10月18日、ペリミ州クン
グルー1944年1月7日、函館)。

クズネツォフ、イワン (?ー1862年8月27日)。第28艦隊水兵。コルベット艦「パ
サドニク号」。32歳。

クズミン、ニキタ (?ー1861年10月15日)。第28艦隊の兵曹長、コルベット艦
「パサドニク号」。32歳。

マホフ、グリゴリイ (?ー1862年10月8日)。第28艦隊の水兵、コルベット艦「リ
ンダ号」。26歳。

メスニコフ、ワシリイ (?ー1861年10月16日)。第28艦隊の水兵、コルベット
艦「パサドニク号」。30歳。

ネポゴダ、カジミル (?ー1863(5?)年8月16日)。第26艦隊の水兵、コルベ
ット艦「ノビク号」。26歳。

パグジン、フィリップ (?ー1863年10月27日)。第27艦隊の水兵、スクーター
艦「ペルバヤ号」。33歳。

ポポフ、アンドレイ (?ー1862年3月18日)、コルベット艦「パサドニク号」の士
官候補生。22歳。

ポウリケビッチ、ゲオルギイ (?ー1859年6月26日)、フリゲート艦「アルコリド
号」の補給係。35歳。

サルトフ、ビスアリオン・リボビッチ(1844年ー1874年1月17日)。カザン宗教
学校修了した。ロシア領事館の読経者。36歳。

スミルノフ、エブドキム (?ー1863年8月6日)。第4労働隊のコーキング工、コル
ベット艦「リンダ号」。29歳。

ステパノフ、フェドル (?ー1862年2月17日)。第28艦隊水兵、コルベット艦「パ

サドニク号」。2（4？）8歳。

ストゴフ、ピョートル（？-1864年11月8日）。アムール艦隊の少尉、砲艦「モルシ号」。自殺。24歳。

トパノフ、イワン（？-1869年8月27日）。第28艦隊水兵、コルベット艦「バガチリ号」。29歳。

フィリノフ、プロコピイ（？-1862年11月19日）。第27艦隊操舵手、輸送船「マンチュウル号」。26歳。

シャリフェーフ、アンドレイ・ニコラエビッチ（1952年3月31日-1980年2月5日）。

シャリフェーフ、ニコライ・フセボロドビチ（？10月28日-1989年4月13日）。

????シャリフェーフ、アリアドナ・パブロブナ（1919年10月28日）。札幌で生存。

シャムネフ（？）、アフタノム（？-1862年8月16日）。第28艦隊火夫、コルベット艦「カレバラ号」。28歳。

シャトフ（？）（？-1862年）。第28艦隊火夫、コルベット艦「アブレク号」。

シャチコフスキイ、リュドビク（？-1863年7月20日）。水死。1863年7月26日埋葬。

シベツ、ディミトリイ・ニコラエビッチ（1884年11月8日-1934年11月18日）

シネイデル（？）、プロコピイ（？-1862年6月30日）。第28艦隊準医師、コルベット艦「アブレク号」。30歳。

チェリイ、シュドミラ（1914年8月28日-1939年6月18日）。バロチンの娘。

ユゴポフ（？）、ダビド（？-1862年6月28日）。第28艦隊水兵、コルベット艦「アブレク号」。26歳

？（？、ハワイ諸島-1861年）。カトリック教徒。捕鯨船船乗り。

伝記辞典

アレクセーフ、ピョートル・アレクセービッチ（1832年6月、トベルスク県-1872年10月26日、東京）。第一級商人。ニコラエフスク・ナ・アムーレから函館に来た。一時期ウラジオストクに滞在。妻はソフィア・アブラモブナ。横浜の外人墓地に埋葬された。

アレクセイ・アレクサンドロビッチ（ロマノフ）（1850年1月2日-1908年11月1日、パリ）。アレクサンドル二世の4番目の息子。3歳で、親衛隊員となる、さらに3年間、第27艦隊の司令官に任命される。海軍大尉（1866年）。フリゲート艦「スベトラナ号」の上級将校、世界一周航行（1871年-1873年）に参加した。北アメリカ、東南アジア、中国、日本に立ち寄り、その後、1872年12月5日、ウラジオストク港の港外投錨地に到着。ボスフォル・ポストチニイ海峡の氷のため、船は金閣湾に入港することができなかった。「スベトラナ号」は長崎に回航した。氷が消えるのを待って、大公は数ヶ月間、中国、フィリピン、日本に立ち寄った。1873年4月27日、フリゲート艦「スベトラナ号」は再びウラジオストクに寄港した、太平洋艦隊の一艦として。

アレクシン、ミハイル・セルゲービッチ（1883年10月15日、クルスク県スタリイ・オスコルー1932年12月17日）。オルロフ・アレクサンドロフスク実家学校を修了した（1902年）。ウラジオストクで極東大学日本語科を修了、優秀で金メダル獲得（1909年）。カムチャッカ知事時特別委任役人。ロシア東方学者協会とOIAK会員。新聞「ロシアの沿海州」に記事を発表（1922年）。日本の漁業に従事。管理会社主任、商店「ルーリ兄弟」の共同出資者。逮捕される（1930年10月1日）。最高刑罰を変更して、矯正労働収容所へ10年の刑を宣告される。極東の収容所で服役した、そこで死亡。名誉回復（1989年1月16日）。

アリブレヒト、ミハイル・ペトロビッチ（1821年、エストニアー1867年頃、サンクトペテルブルグ）。デルプトスク大学医学部修了（1848年）。海軍軍艦の医師（1849年から）、函館のロシア領事館での医師（1858年ー1863年）。聖オリガ湾とニジネ・アムールで科学的資料を採集。K・И・マクシモビッチはアリブレヒトに敬意を表して*****呼称した。

アリブレヒト、ミハイル・ペトロビッチ・アリブレヒトの妻。東京から函館までの陸路での旅行のルポルタージュの著者。

アナトリイ（世界ではアレクサンドル・ドミトリエビッチ・デハイ）（1838年ー1893年）。キエフ宗教アカデミー修了。1872年の冬に函館に到着。オサクスカヤ教会主任司祭。

アンチピン、イワン・ミハイロビッチ。シベリアの貴族。日本語通訳。1773年、クリル諸島南部と北海道の探検隊を主導。そこでペテルブルグ科学アカデミーのために標本を採集する。1780年にカムチャッカに帰還。

アンチフェロフ、ダニール・ヤコブレビッチ（？、トムスクー1712年3月）。コサックで探検家。18世紀初めにカムチャッカに到達。コジレフスクと一緒にクリル諸島を訪れた。これについて最初の報告を為した。イテリメン人（カムチャッカの原住民）との戦いで死亡。

アルセニエフ、ウラジミル・クラブデビッチ（1872年9月10日、サンクトペテルブルグー1930年9月4日、ウラジオストク）。サンクトペテルブルグ歩兵士官学校を修了（1896年）し、ポーランドで勤務。ウラジオストクに移動後（1900年）、極東の探検を行う、沢山の標本を採集（1906年ー1927年）。OIAK（1903年ー1930年）、ИРГОプリアムール支所の仕事に積極的に参加、ハバロフスクのグロデフスク博物館を主催。教師として活動。敬意を表して、沿海州の町に彼の名が冠された。著作多数。

アトラソフ、ウラジミル・ワシリエビッチ（1661年～1664年ー1711年）。農民出身。1670年代から、シベリア在住。コサックの50人隊長、アナデル集落の管理人。1696年に、カムチャッカの探検へ、コサック人ルク・モロスコを派遣した。1697年ー1699年、120人からなる「獵師団」の長としてカムチャッカ半島に向かい、詳細に調べた。この領域をロシアに帰属させ、原住民に貢ぎ物を課した。*****を準備、それに詳細に書いた、カムチャッカの地理と気候、その住民達の生活と習慣、チュコト、アラスカについての資料、クリル諸島についての最初の情報。1701年に、モスクワに出た、そこで、カムチャッカをロシアに帰属させた功績により、コサックの長としての官

位を得た。原住民の暴動時に、カムチャッカで亡くなった。この人物の名前は、クリル諸島の島の一つに冠されている、同じくカムチャッカの住民地に。

ブクレフスキイ-コダマ、アレクサンドル・ニコラエビッチ（1886年3月12日-1979年6月5日、横浜、日本）。カザン県の世襲名誉市民の息子。チェボクサルスク宗教学校修了、カザンスク歩兵学校を第一級で、参謀本部アカデミーへ。第一次世界戦争と国内戦の参加者。陸軍大佐、日本へのロシア軍事使節団の一員。日本におけるロシア民族協会の役員（1932年-1945年）。

ベレンコ、ビクトル・イワノビッチ（1947年2月15日、北カフカス）。医学学校で勉強した。オムスク航空クラブとアルマビルスク飛行学校を修了。サリスクのスタプロポリスク飛行学校の指導教官。沿海州のソコロフ村の空軍の第513戦闘機部隊の飛行士。ミグ25に乗って、函館に飛び去った（1976年）。

ベロノゴフ、イグナチイ・アントノビッチ（1897年1月20日、ビヤトスカヤ県-1946年4月28日~29日、釧路）。国内戦参加者。ハルピンに住み、その後、北海道に移住した、シェシュコバ・オリガ・アレクセーブナと結婚（1932年-1933年）。

ベロノゴバ(シェシュコバ)、オリガ・アレクセーブナ（1901年7月14日、ヘルメス-1987年8月27日、サンフランシスコ）。北海道釧路での企業家。横浜に不動産を所有。

ビリレフ、ニコライ・アレクセービッチ（1829年-1882年5月24日（6月5日）、サンクトペテルブルグ）。海軍幼年学校修了（1847年）。1854年9月から1855年の負傷まで、セバストポリ要塞要員。第3砦の前哨前線を指揮し、敵軍への夜の攻撃の成功で賞賛を受ける。勇気に対して叙勲される、聖ゲオルギイ4等軍事勲章で、聖ウラジミール4等勲章で、金剣で。3月11日（23日）夜、ビリレフ指揮下の部隊は敵の工兵隊の指揮官を捕縛し、8台の武器を破壊した。それにより、侍従武官の任命を持った海軍大尉に任官される（1855年）。聖アンナ2等勲章を授与される。戦後、バルチック艦隊に勤務。1859年-1863年、コルベット艦「パサドニク号」を指揮し、日本、中国沿岸の遠洋航海を遂行。1863年-1872年、フリゲート艦「オレグ号」の船長。海軍少将。1872年に退役。

ビルチ、フリサンフ・プラトノビッチ（1859年-1923年、ウラジオストク）。ボルンスク県出身のカトリック教徒。将校。流刑囚（1884年から）。サハリン島マウクへ移住。商人セメノフの番頭。クスナイ近傍の昆布の採集権利所持者。ウラジオストクのセダンカに住み、そこに家を構えた。露日戦争時、サハリンの自警団の長。捕虜となり、弘前に抑留される。OIAKの正会員。国内戦争時、沿海州の白軍の積極的活動家（1921年-1922年）。ウラジオストクで逮捕される。第五赤軍の第一ザバイカル狙撃師団の革命裁判所の判決で銃殺される。

ブーツォフ、エブゲニイ・カルロビッチ（1837年-1904年）。東シベリア総督の所で外交部門の秘書（1856年から）；中国との愛琿条約の締結において、交渉に参加（1858年）。ロシア外務省の官員（1858年から）。中国と日本における外交的と領事的代表者の一人（1862年-1873年）。中国への使者（1873年-1883年）、ギルスと一緒に、ロシア-中国ペテルブルグ条約を署名した（1881年）。退職中（1883年-1884年）。トルコへのロシア使節（1884年-1889年）、イラン（1

889年－1897年)。スエーデンとノルウェーの宮中に(1884年－1889年)。妻はエレナ・ワシリエブナ(クレイメノフ出身)。

バノフスキイ(バンノフスキイ)、アレクサンドル・アレクセービッチ(1874年9月11日、モスコフスク県チェルニー1967年12月16日、東京)。第3モスクワ幼年学校修了(1893年)、モスクワ工科大学修学。政治活動で逮捕される(1898年、1903年)。第一次世界戦争に参加、少尉。ハバロフスクに勤務(1916年)。病気で日本に送られた(1918年)。哲学、宗教、日本文学、記念物に興味を持つ。早稲田大学でロシア語、ロシア文学を教授。東京の高尾霊庵に葬られる。

ビノクロフ、ドミトリイ・プロコフィエビッチ(1884年、ヤクーチア－1942年、小樽)。ヤクート人、企業家、国内戦に参加。北サハリンで逮捕される(1926年)。その後解放され、日本へ逃げた。極東におけるロシア人移民の長ホルバタのヤクーツク地方の特別代表。南サハリンと日本で生活した。

ガブリロフ、アレクサンドル・ミハイロビッチ(1816年8月10日、クロンシュタット－1848年3月25日、ノボアリハンゲリスク)。クロンシュタット航海学校修了(1835年)。1839年からアラスカに。海軍航海士****(1840年)。1844年、新たにクリル列島の地図を仕上げる。アヤン湾とオホーツク湾で水路図作成に従事。ブリグ艦「コンスタンチン大公号」を指揮し、アムール川河口とサハリン東部を調査する。冊子と地図を作成した。アムール川の瀉の水路は彼の名を冠されている。

グレボフ、函館使節団の一員。ロシア語教本の著者。

ゴロブニン、ワシリイ・ミハイロビッチ(1776年4月8日、リャザン県グリーンキー1831年6月30日、サンクトペテルブルグ)。海軍幼年学校修了(1792年)。イギリス海軍に勤務(1801年－1805年)。2度の世界一周を遂行：スループ艦「デアナ号」で(1807年－1809年)、スループ艦「カムチャトカ号」で(1817年－1819年)。クリル諸島南部の目録作成、日本に捕虜としている間に(1911年7月11日－1913年10月7日)。捕虜中における勇気と振る舞いに対して、海軍中佐に昇任(1813年)。1818年、ИАН準会員に選出される。1864年、5巻の本を出版、彼の名が冠されているアラスカ半島の村落、湾、ラグーン；国後島の湾、火山、川、村落；太平洋の暗礁；マツヤとライコケ島間の海峡；ノーバヤ・ゼムリヤ島の山。

ゴシケビッチ、ヨシフ・アントノビッチ(1814年、ミンスク県－1872年10月5日、リトバ)。サンクトペテルブルグ宗教アカデミー修了(1839年)。1839年8月9日、北京へのロシア宗教使節団の一員となる。そこで、天文の、気象の観測に従事する、植物と動物の標本を採集、それらをサンクトペテルブルグ動物博物館に送付。ロシアへ帰還後、プチャーチンの大使館で中国語の通訳となる(1853年－1855年)。シモドスク条約締結に参加。日本人橋康哉の助力を得て、最初の露和辞典を作成。デミドフスク賞を授与される。外務省アジア局の局員(1856年－1858年)。その後、日本における最初の領事(函館)。

ゴシケビッチ、エリザベータ・ステパノブナ(1821年?－1864年9月5日、函館)。И・А・ゴシケビッチの妻。フランス語での記事の著者。

ダビドフ、ガブリエル・イワノビッチ(1784年、タンボフスク県ルキノ－1809年10月4日、サンクトペテルブルグ)。海軍貴族幼年学校入学(1795年)。海軍士官候

補生（1796年3月1日）。1796年－1800年に、バルチック海と北海を航行。1802年、PAKで勤務。サンクトペテルブルグを出て、オムスクへ、そこからスクーナー艦「聖エリザベータ号」でカデヤク島のパブロフスク湾へ到着。2年間、ロシア領アメリカとカムチャッカの間を航行し、自然、島々の原住民の生活の観察を行った。1804年、シベリア経由でサンクトペテルブルグに帰還。1805年、レザノフと一緒に、船「聖マリア・マグダリナ号」で、ペテロパブロフスクからノボアリハンゲリスクへ移動。オホーツク海でテンデル艦「アボス号」を指揮した。1807年、その船で、クリル諸島、南サハリン沿岸、北海道へ航海。船「ユノナ号」の船長フボストフ海軍大尉と一緒に、リヤザノフの命令に従い、クリル（千島 *）諸島の2カ所の日本人季節居住地を襲撃、イトルupp（択捉 *）島と国後島について調査し、記録を残した。オホーツクへ帰還して、逮捕される。見張り下でヤクーツクへ行き、サンクトペテルブルグへ、そこで解放される。ネバ川でフボストフと一緒に溺死。サハリン島、アレウト諸島の湾や岬に彼の名が、アレクサンドル群島の連山、湖にも。

デイチーロビチ、ヤコフ・リポビッチ（1896年12月28日、ザバイカルのウストーカラー1956年8月27日、サンフランシスコ）。ブラガベシエンスク男子学校修了（1915年）、モスクワ大学で修学。1916年に軍に招集される。ツアリチンスク学生教育大隊で教練を受け、第3モスクワ陸軍准尉学校を修了。前線のリガでの戦闘で頭に挫傷を受ける（1917年8月19日）。1918年始めに軍を抜け出し、コルチャック軍に参加。赤軍との戦闘で、弾丸で軽傷を負う（1919年2月17日）。野戦軍事裁判で予審判事（1920年まで）、政治および刑事事件での検事。横浜から満州に移動（1922年11月9日）。ビリスコ図書館に勤務（1926年まで）、その後、新聞「ルポル」のジャーナリスト。1937年から上海に住む。雑誌「ルベジ（外国 *）」で、その創刊時から勤務。上海の殆どの出版物に記事を書いた。雑誌「グラニ（外国 *）」、「ロシア移民委員会広報」、「クスタチ」に記事を書く。ツババオを経由してアメリカへ移民（1951年）。肺がんで、スタンフォード大学病院で亡くなる。カリフォルニアのコリマのセルビア人墓地に埋葬。

デンビ、アフレッド・ゲオルギエビッチ（1880年1月25日、サハリンのマウカー1953年11月1日、日本の軽井沢）。長崎のフランス・エイズス会学校を修了し、この町の父の会社の長となる。国内戦後、日本に住み、函館でイギリスの名誉領事。妻はマリア・イワノブナ（？－1967年2月18日、軽井沢、日本）。遺骨は横浜の外人墓地に移送される。

デンビ、ゲオルギイ・フィリッポビッチ（1841年2月16日、ロンドンのイスリングストン－1916年11月15日、ホノルル）。中国で起業。商船の船長。ウラジオストクに持ち家。船「アレウト号」で海産物の採集に従事。セメノフと一緒に会社「セメノフ&K」を創業。妻－正教徒の日本人であるメリ・森高（アンナ・ルドリフォブナ・モネテッサ）。子供達はサハリン島のマウカ村で生まれる：アフレッド（1880年）、アレクサンドル・テド（1881年）、リザ（1882年？）、ジョージーベシ（1884年3月24日（6月5日））とジョン・ワーニャ（1885年）。魚油販売の代表機関開設（1908年）。ウラジオストクで大いなる尊敬を得、町の古老と見なされる、OIAK会員、そこへ博物館と展示品のために少くない資金を提供。休息に行っていた香港で亡くなる、

喘息の悪化により。子供達が遺体を火葬にし、長崎に移送。そこにデンビ家の納骨所がある。

エラギン、レフ・ペトロビッチ（1841年7月1日、カルスク県リフビンスク郡キベリー1878年12月16日、サンクトペテルブルグ）。海軍幼年学校（1860年）とニコラエフスク海軍アカデミー（1866年）を終了。中尉（1865年4月4日）。海外に1年間の科学的出張（1868年2月20日から）、その後、プルコフ天文台で天文学と測地学に従事。船に乗り、極東で水路学、天文学、測地学、磁気学の研究に取り組む（1869年－1875年）。海軍大尉（1874年1月1日）。サンクトペテルブルグのノボデビッチ墓地に葬られる。彼の名前は、日本海の北西海岸の岬などに残っている。

エンドグロフ、イワン・アンドレービッチ（1812年10月23日、トベルスク県－1871年6月19日、サンクトペテルブルグ）。バルチック艦隊と地中海艦隊に勤務（1830年－1837年）。クリミア戦争に参加（1854年－1855年）。1863年1月1日、海軍少将に任官。艦隊の指揮官（1864年－1865年）。彼の指揮下でコルベット艦「ボガチリ号」がホノルルに寄港（1864年）。

ザレフスキイ。医師。函館と長崎でロシア人病院を経営。

ズベレフ、コジマ・ロデオノビッチ（1886年10月18日、ペルミ県クングルー1944年1月7日、函館）。将校。極東のロシア人移民の長ホルバトの北海道代表。函館に住む。日本人により監獄で殺された。函館のロシア人墓地に埋葬。

カズナコフ、ニコライ・イワノビッチ（1834年－？）。ニコラエフスク海軍アカデミー修了。ロシアトルコ戦争時、ニジネドナウ川艦隊を指揮。クロンシュタット湾の最高指揮官、クロンシュタット戦時総督。提督、海軍大将。海軍省の相談員。

インノケンチイ(ベニアミノフ(ポポフ、イワン・エブセービッチ)（1797年8月26日、イルクーツク県－1879年3月31日、モスクワ）。イルクーツク師範学校修了（1818年）。PAKで司祭（1823年から）、アラスカで研究に従事。府主教****。神学と民族研究の著者。

キセレフ、ドミトリイ・ドミトリエビッチ（1881年－1962年）。ソビエトの外交官で諜報員。革命と国内戦の参加者。敦賀でのソビエト領事（1925年－1928年）、その後、函館で（1928年7月12日－1930年）。モスクワで主諜報機関の職員。特別年金者（1939年から）。大祖国戦争開始から、ノボシビルスクへ移る。町の活性化に参加。1959年に、80歳を祝う。ノボシビルスクの名誉市民。

コジレフスキイ、イワン・ペトロビッチ（1670年或いは1680年、ヤクーツク－1734年12月2日、サンクトペテルブルグ）。カムチャッカとクリル諸島を探検。その地図を作成した。この図を基礎にして、レザノフが初めて1713年にクリル諸島の地図を作成した。コジレフスキイの名はカムチャッカ、シムシムなどに残っている。

コピチンスキイ、イワン・ペトロビッチ（1914年、カメネツ・ポオリスク県ノボウシツキイ地方スタブチャン村－？）。ウクライナ人。コムソモール会員、ソ連邦市民、貧農出身、武装警備隊支部指揮官、マガダン市の砲兵部隊の、ウラジオストクに住む、一時的に、内務人民委員部の武装警備隊で働く。

コレジャトコフ、ドミトリイ・フェドロビッチ（1890年11月7日、ペルミ県タギルー1959年11月27日、横浜）。軍学校を修了し、第311クレメネツク部隊に****。

第一次世界戦争、国内戦に参加（第2シベリア軍団のオムスク隊）。氷海航行後、ニコリスクーウスリスクへ到着（1920年）。陸軍中尉。ハルピンと日本に住む（1926年から）。織物の行商に従事。日本におけるロシア民族協会書記、その後代表（旭川で設立）。ロシア民族連合の指導グループ会員と代表（1953年から）。

コルニロフ、アレクセイ・アレクサンドロビッチ（1830年5月26日、トベルスク県—1893年5月14日、サンクトペテルブルグ）。海軍中将コルニロフの従兄弟の甥。海軍幼年学校修了（1851年）して、黒海で勤務。1853年、シノプスク海戦にフリゲート艦「オデッサ号」で参加。中尉。1854年—1855年、セバストポリ防衛で殊勲。4カ所負傷するが、病院に行かず。1857年8月12日、クリッパー艦「ジギト号」に移動、第一アムール艦隊所属として極東に向かう。函館でロシア領事（1858年—1860年）。1860年4月3日から、太平洋艦隊の一員に。海軍大尉（1860年10月17日）。1861年1月15日、上海からクロンシュタットへ移動。スクナー艦「サハリン号」の船長（1862年3月12日から）、それに乗って長崎へ出港、その後、コルベット艦「バガチリ号」に勤務し、日本と中国の港を航行する。海軍少将（1882年8月30日）。1885年10月22日から、太平洋艦隊の司令官。海軍大将（1888年）。彼の名は日本海の湾に冠されている。

コロヨフ(ホシモト)、アナトリー・ニコラエビッチ（1887年11月4日—1970年）。海軍幼年学校修了（1908年）。第一次世界戦争に参加。アメリカでの海軍諜報機関の指揮下に派遣される（1917年6月）。ウラジオストクに住み（1919年夏から）、練習船「マンチューリ号」の指揮官。日本に移民し、函館に住む、日本女性と結婚。漁業捕鯨会社「日露」で会計係（1920年夏から）。

コスチレフ、ワシリイ・ヤコブレビッチ（1848年—1918年）。サンクトペテルブルグ大学東方学部修了（1874年）。函館でロシア総領事。サンクトペテルブルグ大学で非常勤講師。

コステレフ、パベル・ミハイロビッチ（1833年—1867年）。大尉。函館で海軍諜報員（1862年—1865年）。

クラマレンコ、ガブリエル・アモソビッチ（1867年3月31日—1928年10月10日、パリ）。商業顧問。農業局の漁業委員会の委員。沿海州、アムール、カムチャッカで漁業に従事。ИРГО委員、極東の漁業についての報告。国内戦時、カムチャッカへの旅行を敢行。自分の子供達の日記を公刊。移民となり、アメリカとフランスに住む。

クリシェンコ、チモフェイ・メフォチエビッチ（1913年、クラスノダール地方エイスクー？）。農民出身。中等技術教育。決定の不履行によりВЛКСМから除名。蒸気船「インデギルカ号」の船長主任補佐。

クルゼンシテルン、イワン・フェドロビッチ（1770年12月8日、レベル近く、—1846年8月12日、レベリ）。海軍貴族幼年学校修了。イギリス海軍で実習（1793年—1799年）。大尉（1798年3月27日から）。スループ艦「ナデジダ号」で初めての世界一周探検を指揮、海洋について極めて詳しい調査、資料の収集を行う（1803年—1806年）。ペテルブルグ科学アカデミー準会員（1803年）、正会員（1806年）。地理学的調査に対して、デミドフスク賞を受賞（1837年）。彼の名前は15カ所の地理地点に冠されている。

ラクスマン、アダム・エリコビッチ(キリロービッチ) (1766年、バルハウルー1796年以降)。Э・Г (エリック・グスタノビッチ)・ラクスマンの息子。陸軍幼年学校修了。ギジュグで群警察署長(1786年-1795年)、気象観測に従事、原住民と地域の情報を収集。日本への第1回使節団の長(1792年-1793年)。

ラクスマン、エリク(キリル)・グスタノビッチ (1737年7月27日、ネイシュロット、スエーデン-1796年1月5日、トボリスク)。自然科学者、収集家。サンクトペテルブルグに住む(1762年から)。ИАН会員。シベリアを何回も周遊、そこで多くの標本を採集。日本への最初の使節団派遣の提唱者。

ラブシン、ニコラエム・ラブレンチェンビッチ 蒸気船「インデギルカ号」の船長(58歳)。1940年1月15日逮捕。銃殺。

レベデフ、エブゲニイ・フェドロビッチ (1879年1月14日、イシミスクー1925年以降)。教師の息子。イシミスク神学校修了(1893年)、トボリスク神学セミナーと東方大学の日本中国学部へ(1906年)。戦艦「ポルタワ号」に乗り戦いに参加(1905年)。東京で学生(1906年)。ムクデン(?*)のロシア総領事館で通訳(1907年)。大連の総領事館で書記(1907年)、函館で准領事(1913年-1925年)。露日間の漁業関係に従事。雑誌「ロシアの極東」の共同者(東京、1920年)。日本で死亡、他の情報によれば、南アメリカ。

レンセン、ゲオルギイ・アレクサンドロビッチ (1923年11月5日、ベルリン-1980年1月5日)。1939年アメリカへ移民。アメリカ市民(1943年から)。第2次世界戦争に参加(1943年から1946年)、中尉。コロンビア大学修了：学士号(1947年)、修士号(1948年)、哲学博士号(1951年)。フロリダ州立大学：講師(1949年-1951年)、教授の助手(1951年-1955年)、助教授(1955年-1959年)、歴史学教授(1950年-1980年)。学術協会会員：アジア研究協会、スラブ研究促進のためのアメリカ協会、ロシア海軍史の研究協会、アジア社会、大学教授のアメリカ協会。研究補助金を得る：社会科学調査委員会(1957年-1958年)、アメリカ哲学協会(1958年、1961年)；その他、フォード基金。コロンビア大学招聘教授(1962年夏-1963年夏)。フルブライト補助金で北海道大学で研究(日本、1953年-1954年)、レニングラード大学(1961年)。

レソフスキイ、ステパン・ステパノビッチ (1817年8月23日、フランス-1884年2月26日、サンクトペテルブルグ)。大尉、フリゲート艦「デアナ号」の船長(1853年-1855年)、この船で香港訪問(1854年)。アメリカに派遣された艦隊を指揮(1876年-1880年)。提督(1881年)。

レマン 函館における最初のロシア人画家。

リトケ、コンスタンチン・フェドロビッチ (1837年8月25日、サンクトペテルブルグ-1892年9月17日)。伯爵Ф・П・リトケの息子。フリゲート艦「オーロラ号」に勤務(1853年-1855年)。功績により海軍少尉(1854年12月1日)。ペトロパブルフスクーカムチャッカで戦闘に参加(1854年)。フリゲート艦「アスコリド号」に勤務(1857年-1860年)。功績により海軍大尉(1860年8月16日)。砲艦「ゴルノスタイ号」の船長(1866年-1867年)。彼の名は日本海のアムール湾の岬に冠されている。

リハチェフ、イワン・フェドロビッチ（1826年11月31日、カザン県－1907年1月15日、パリ）。海軍幼年学校修了（1842年）。海軍大佐。休暇の後、太平洋で様々な船に勤務（1850年－1861年）。太平洋艦隊司令官（1860年から）。海軍中将（1874年）。彼の名は、アナデルスク湾とピョートル大帝湾の岬に冠された（1862年）。

ロフツォフ、ワシリイ・ミハイロビッチ（1737年頃－1797年後）。イルクーツク海洋学校修了。オホーツク湾で航海士見習いとして勤務（1760年から）。オホーツクにおける海軍省部隊の長。准尉級航海士（1784年）。帆船「聖エカテリーナ号」の船長として、北海道へ航行。中尉級航海士（1795年）。

ルンド、ロベルト・アレクサンドロビッチ（1828年3月1日、フィンランド－1875年11月、サンクトペテルブルグ）。海軍幼年学校修了。世界一周航海を完遂、ホノルルに立ち寄りながら。海軍大尉、コルベツ艦「バリヤク号」の船長、それに乗って函館に立ち寄る（1866年）。

ルリービズベル、エラ・メイェロブナ（1909年2月20日、ニコラエフスク・ナ・アムール－2005年8月16日、ホノルル）。M・M（メイエル・モイセービッチ）・ルリーの娘。日本でカナダアカデミー、アメリカでベルリン大学、フランスでソルボンヌ大学修了。日本で人類学に従事。ハワイ大学で、フランス語とロシア語、文学を講義。名誉教授。幾つかの翻訳がある。ホノルルで生活。

ルリ、メイエル・モイセービッチ（1881年5月20日、ニコラエフスク・ナ・アムール－1954年、東京）。ポーランド蜂起参加者の息子で、サハリンに流刑される。アムールで漁業に従事、兄弟と一緒に会社「ルリ兄弟」を設立（1902年）、極東に沢山の支社を有している（ウラジオストク、東京、横浜、函館、上海、ハルピン、ムクデン、大連）、同じく、モスクワとロンドンに代表機関を。日本に、会社「ルリ株式会社」を登録。魚以外に、カムチャッカで蟹、海藻の採集、サハリンで材木と石油に、満州で豆の栽培を。日本では、ルリの家族は東京、横浜、函館、神戸に住んだ。ネップ時代に、会社「極東産物」を設立、社長。その後、ソビエト権力がカムチャッカ、サハリン、アムールでの産業を閉鎖したので、日本で企業活動を継続。

マイデリ、グリゴリイ・グスタボビッチ（1821年1月28日、エストリヤンドヅカヤ県－1876年2月25日、ニコラエフ）。海軍幼年学校修了（1838年）。大尉（1855年3月27日）。クリッパー艦「ジギト号」（1857年－1860年、函館でロシア領事館として）とコルベツ艦「ボヤリン号」（1860年－1861年）の船長。海軍中佐、（1862年）。海軍大佐（1864年）。海軍少将（1872年）。彼の名はピョートル大帝湾のストレロック海峡の岬に冠された（1859年）。

マクシモフ、セルゲイ・ワシリエビッチ（1831年10月7日－1901年7月3日、ワルシャワ）。小学校、中学校修了。1854年、「読書のための図書館」はマクシモフの6件のルポルタージュを公刊。ИРГО探検隊に参加、各地の民俗学に従事し、「読書のための図書館」でルポルタージュを公開、後に、これらを本「森の僻地」となる。1855年、調査のための海軍省の「作家の探検隊」の参加者、ロシアの海岸と主水路の記述。マクシモフのルポルタージュを、他の参加者と同じく、「海洋選集」が公刊、1859年、それらは「北での年」の2巻本として出版。探検隊の参加：1859年－1860年はア

ムール、1862年-1863年はウラル、カスピ海、カフカス、1879年-1868年はスモレンシナとベロルシア。それらの結果は本にまとめた：「東へ」、「シベリアと懲役」、「流浪のロシア なにとぞお恵みを」。

マクシモビッチ、カール・イワノビッチ（1827年11月11日、ツアー-1891年2月4日、モスクワ）。ユリエフスク（デルプトスク）大学修了。サンクトペテルブルグの植物園の植物学者。極東の探検を遂行し、日本で働く（1860年-1865年）。デミドフスク賞受賞者（1859年）。ИАНアカデミー会員（1868年）。極東の学者や研究者を助言指導した。彼の名は沢山の植物に冠されている。

マトベーフ(匿名 H・アムールスキイ)、ニコライ・ペトロビッチ（1865年11月10日、函館-1941年2月8日、神戸）。領事館の医師家族に生まれた。函館で生まれた最初のロシア人。ウラジオストクで学校を修了。ウラジオストクで働いた。ОИАКの仕事に積極的に参加。その他。雑誌「極東の自然と人々」を編集（詳細省略*）。その他。長崎でのロシア人移民に関連して逮捕される（1906年）。日本に移民（1921年）。

マツケビッチ、ウラジミール・イワノビッチ（1821年2月25日、トベリスク県-1885年12月25日、モスクワ）。海軍幼年学校修了。中尉（1845年）。РАКに勤務（1849年-1857年）。大尉（1853年）。「プラスツン号」の船長（1857年6月28日から）。

マホフ、イワン・ワシリエビッチ（1820年-1895年）。函館のロシア領事館書記。五等文官。

ミーレル、カール・ペトロビッチ（1840年6月30日-?）。海軍幼年学校修了。海軍少尉（1862年10月10日）。海軍中佐（1885年2月26日）、クリッパー艦「ジギト号」の船長（1882年5月10日から）、それに乗り世界一周航海で極東へ。

ムラビエフ・アムールスキイ、ニコライ・ニコラエビッチ（1809年8月11日、サンクトペテルブルグ-1881年11月18日、パリ）。1827年7月25日、親衛隊フィンランド連隊で少尉補として勤務。トルコ戦争に参加し、中尉の称号を受け取り、聖アンナ3等勲章受章。1831年のポーランド蜂起の鎮圧に対して、勲章を授与される。1841年6月4日、カフカスで、軍功により少将に任官。1844年、聖スタニスラフ1等勲章受章。1864年6月16日、ツール軍知事の職務に任命される。1847年9月5日、東シベリア総督に任命される。伯爵（1858年8月26日）。退職（1861年2月19日）。ハバロフスクに記念碑（1891年5月30日）。1992年5月30日復興。ウラジオストクに再埋葬（1891年9月22日）。ピョートル大帝湾の半島に彼の名が冠された（1859年6月19日）。

ナデツキイ、アブラム・モイセービッチ（1870年9月2日、ニコラエフスク・ナ・アムレー-1958年1月19日、東京）。漁業企業家、アムールに金鉱山所有者、ニコラエフスク・ナ・アムレーでの惨事後（1920年）、財産を失う。日本の函館、その後東京に住む。横浜の外人墓地に埋葬。

ナジモフ、パベル・ニコラエビッチ（1829年6月27日-1902年12月11日、サンクトペテルブルグ）。海軍幼年学校修了（1845年）。ポシエツ湾に哨所を設置（1860年4月12日）、最初の調査を実行。中將（1889年8月30日）。太平洋艦隊司令官、ОИАКの博物館開設に参加（1890年9月30日）。サンクトペテルブ

ルグに埋葬。ピョートル大帝湾の岬と半島に彼の名が冠された（1891年）。

ネツプスキイ、アブラム・モイセービッチ（1893年12月24日－1989年7月7日、サンフランシスコ）。極東のロシアの企業家。移民して、函館、上海に住む、その後、アメリカに移住。1971年、追想記「サハリン島からサンフランシスコまで」を書く。

ニコライ（世界では、**カサトキン、イワン・ドミトリエビッチ**）（1836年8月1日、スモレンスク県－1912年2月、東京）。サンクトペテルブルグ神学校修了（1860年）。函館で領事館司祭（1861年7月2日から）。日本へのロシア宗教使節団の長（1870年4月6日創設）。主教（1880年）。総主教（1906年）。聖人に列せられる。著作多数、特に翻訳で。

ノボシリスキイ、アンドレイ・パブロビッチ（1837年10月28日、サンクトペテルブルグ－1881年9月11日、サンフランシスコ）。海軍幼年学校修了。大尉（1870年1月1日）。クリッパー艦「フサドニク号」の船長として極東の海に航行。海軍大佐（1879年）。太平洋艦隊参謀長（1880年－1881年）。日本から戻り、サンフランシスコで逝去、そこに葬られる。

オナチェビッチ、ミハイル・ルチアノビッチ（1847年12月14日、プスコフ県－1879年12月25日、サンクトペテルブルグ）。海軍学校を優秀な成績で修了、ナヒモフ勲章を受章（1868年）、学業優秀で大理石板に記名を持ってアカデミー****。1874年5月11日、太陽面の金星通過観測の委託を受けて東海での写真撮影隊隊長に任命される。ピョートル大帝湾の測量に従事。日本海、オホーツク海（1875年）、ベーリング海（1876年）の調査を行う。アメリカ、イギリス、フランスに出張（1877年－1878年）。彼の名はオホーツク海の岬や半島に冠されている。

オルロフ、ドミトリイ・イワノビッチ（1805年10月19日、レベリー1859年6月、ニコラエフスク）。第1航海士の半分修了（1827年）。****准尉（1829年9月22日）。帆船「シニャビン号」で世界一周（1826年－1829年）。PAKの船の船長（1831年）。自分の愛人の夫の殺害に関与したとして、貴族と官位を剥奪され、流刑囚となる（1838年）。オホーツク商館の従業員（1843年から）。ネベリスクの探検隊に参加（1849年から）、プリアムールの調査に従事（1850年－1854年）。海軍航海士学校の二等大尉（1857年11月25日）。蒸気船「アルゲン号」の船長（1857年－1858年）。彼の名は、サハリンのあちこちに冠されている。

パリチェフスキイ、ニコライ・アレクサンドロビッチ（1862年10月1日、オレンブルグ－1909年7月、ウラジオストク近海で）。オレンブルグスク・ネプルエフスク軍学校、アレクサンドロフスク軍学校修了（1884年）。ポルタワ地区のコサック村長（1886年～）。沿海州における赤カビ病の調査のために出張（グリゴエフカ、1888年4月－12月）。地方の栽培植物の病気について報告（1888年11月28日－29日）、それは新聞「ウラジオストク」で発表（1888年の50号、51号）。博物館用標本の収集、原住民の民族・文化の研究に従事。アルセニエフの最初の相談者の内の一人。OIAKの仕事に積極的に参加：準会員（1893年3月4日）；「植物分野の協会のための設備の必要性について」の発表（1896年11月6日）と「アムール地方の研究協会の15年間の歴史的特徴」。島の営林署員。最終年には、サハリン島の研究に従事。彼の名前はウラジオストクの通りに冠されている。その通りにはロシア科学アカデミー極東支部

の海洋生物研究所がある（1987年12月4日から）。

ピルスドスキー、プロニスラフ・オシポビッチ（1866年10月21日－1918年5月17日、パリ）。サンクトペテルブルグ大学法学部で勉強。テロル宗派「人民の意思」に参加。逮捕される（1887年3月）。死刑判決はサハリンへの15年の流刑に変更される、そこに1887年8月から住む。シテルンベルグと一緒に、民俗学に取り組み、標本を収集する。アレクサンドロフスクに共同で博物館を設立（1896年12月6日）。OIAKの誓願によりウラジオストクに移動（1898年4月16日）。OIAKの図書館員、書記、出納係（1899年3月18日から）。アムール下流とサハリンの探査に参加し、標本を採集。OIAKの準会員（1901年3月15日）。アイヌを含んだ極東の原住民の民俗学に関する著書多数。彼の名はサハリンの山に冠されている。

プロステビッチ、ビクトル・アントノビッチ（1902年2月24日、バルナウルー1977年2月21日、東京）。国内戦参加者。北海道とサハリンで貿易商。最後の年は札幌に在住、その後東京に。横浜外人墓地に埋葬。

プチャーチン、エフィム（エブリイミイ）・ワシリエビッチ（1803年11月8日－1883年10月16日、パリ）。海軍幼年学校修了。中尉（1828年2月22日）。戦争に何度も参加。軍功により中將（1851年4月）。1853年、フリゲート艦「パラダ号」で、貿易条約締結を目指して中国と日本に出発。韓国と南沿海州の海岸の調査に従事（1854年4月－5月）。1855年1月26日、貿易と国境に関して日本と下田条約を締結。1857年、特別全権代表として中国に出張、1857年12月24日、東方艦隊司令官としての任命、*****に改称される。蒸気船「アメリカ号」に乗って、中国への航行中、聖ウラジミル港と聖オリガ港を開設。1858年6月1日、中国と天津条約を締結。1858年8月7日、日本の江戸で条約に署名。遺骨はキエフに回送され埋葬される。彼の名は極東の多くの場所に冠されている。

リコルド、ピョートル・イワノビッチ（1776年1月29日、プスコフ県－1855年2月16日、サンクトペテルブルグ）。海軍貴族幼年学校修了。海軍士官候補生（1792年）。海軍少尉（1794年）。海軍中尉（1800年）。イギリス海軍で実習（1803年－1805年）。帆船「デアナ号」の上級将校（1807年8月25日から）、クロンシュタットから極東へ航行（1807年－1809年）。海軍大尉（1810年2月26日）。カムチャッカとクリル諸島の探検に従事（1810年－1813年）。科学アカデミー準会員（1819年3月）。将軍（1843年）。彼の名は極東の多くの場所に冠されている。

セルゲイ（世界ではチホミロフ、セルゲイ・アレクセービッチ）（1871年6月3日－1945年8月10日、東京）。ノブゴロドスク初等神学校修了（1888年）、ノブゴロドスク中等神学校修了（1892年）、サンクトペテルブルグ神アカデミーを成績優秀で修了（1896年）。剃髪して修道士に（1895年8月25日）。サンクトペテルブルグ中等神学校の監査官（1896年から）、その学長（1899年10月から）。神学士（1905年9月28日）。サンクトペテルブルグ神アカデミー学長（1905年10月－1908年3月）。サンクトペテルブルグ大主教の司教代理（1905年）11月6日）。京都の司祭の称号を持って日本へのロシア宗教使節団長補佐（1908年3月21日）。ロシアの日本使節団の長（1912年2月3日から）。日本語を自由に駆使、正教使節団

の第一回再編成を行う。日本人の聖職者と信者から協議会を設ける、その長は長司祭セメン・ミイ（1912年）。選ばれた”宗務局”を通じて管理される”憲法”を教会に与えた。学校に大いに気を向けた、沢山の通訳や東方学者がそれを修了した。1925年春、日本外務省が公使館の復興に1万5千円を割り当てた、それで図書館を修復した、3千冊の本がある。日本語の雑誌「あけぼの」を創刊した（1925年11月から）。1928年5月、ハルピンを訪れた、そこで沢山の非難を耳にした、モスクワと交流し続けている事についての、ソビエトロシアでは正教会の迫害が既に知れ渡っているにもかかわらず。モスクワ総主教管区の指示で、頭巾着用のためのダイヤモンド十字架が贈られた（1928年）。府主教（1931年）。主教座教会の復興に20万円以上を集めた。1929年12月15日、東京で教会を盛大に祝った。1940年9月5日、全ての仕事と権限を神父岩沢に渡した。東京の外れに住み、そこに祈りの家を建築した。若干の情報によれば、日本の警察に逮捕された。

セロシェフスキイ、バツラフ（匿名：ポツラフ・シルコ、K・バグリノフスキイ）（1858年8月21日－1945年4月20日、ワルシャワ）。文学者で民俗学者。ポーランド運動参加でヤクーツクに流刑（1880年から）。極東でИРГО探検隊に参加（1902年－1903年）。ヤクーツク人の研究に従事。ИАНの依頼により中国へ行き、北海道の探検を遂行（1902年）。科学的、文学的著作多数。

シマダ、ピョートル・ニコラエビッチ（1870年8月5日、長崎－1945年8月17日、朝鮮）。日本人の企業家。若年でニコラエフスクにやって来て、直ぐに成功を勝ち取る。ウラジオストクに（1885年から）、ニコラエフスク・ナ・アムーレに（1886年7月21日から）、会社「シマダ&会社」をロシア人、ユダヤ人と一緒に創設。正教を受け入れた。大きな商店を有し、ロシア人企業家と日本人企業家の間の仲介をした、漁業に従事している。長年リュリと共同した、長崎で亡くなる直前まで。日本の満州占領時には特に助力した。当時、会社は「リュリーシマダ」と称した。日本に大きな影響を与えた。

スタリツキイ、コンスタンチン・ステパノビッチ（1839年9月14日、ポルタバ－1909年11月11日）。海軍幼年学校を修了し、少尉に昇進（1857年9月13日）。日本海、オホーツク海、ベーリング海の調査に従事（1866年5月14日－1871年8月17日）。マンゾフスク戦争に参加し（1868年）、勲章を授与される。極東での水路調査により金メダルを授与される。中将で退役（1890年）。ИРГО正会員（1891年6月4日から）。

チホイ、ヤコフ。神父アナトリーの兄弟。函館のロシア領事館の官員。

トラウトショリド、ワシリイ・ワシリエビッチ（1877年11月11日－1937年7月7日、フランス）。商人の息子。中学校、聖ピョートルドイツ人学校修了、サンクトペテルブルグ大学中国満州モンゴル東洋学部（1899年）。東京で学生（1902年－1905年）。函館のロシア領事館で領事代理（1906年－1912年）、大連で領事、ハルピンで総領事（1914年－1917年）。ОРО会員。親独主義で罰せられ、スパイの嫌疑をかけられる（1915年11月13日付の外務省の手紙）。名誉回復の目的を持ってペテログラードへ（1917年3月17日）。学校の相談員、4等聖ウラジーミル勲章を受ける。総領事としてハワイへ出向く（1917年9月－1918年3月）。500人以上の本国帰還を準備。上海のロシア総領事の補佐（1918年）。フランスに移民。

トロイツキイ、アレクサンドル・セルゲービッチ（1879年？－1940年5月14日、ハルピン）。サンクトペテルブルグ大学東洋学部修了（1906年）。東京で学生（1906年－1911年）。セイシン（1912年－1917年）と日本（函館）でロシア領事補佐。幾つかの日本語の教科書、参考書、辞書の著者（1933年－1941年）。

ウニコフスキイ、イワン・セメノビッチ（1828年3月29日－1886年8月18日）。1835年12月12日、海軍貴族学校入学。海軍士官候補生、海軍少尉として第8艦隊乗組員（1839年12月21日）。中尉（1845年4月15日）。海軍中佐（1854年2月10日）。1860年3月16日、世界一周におけるフリゲート艦「アスコリド号」での指揮における素晴らしい勤務に対して叙勲と海軍少将に任官（1861年6月28日）。海軍省への皇帝の命令によりヤロスラブリ軍知事に任命される。1866年中将に任官。各地の名誉市民。彼の名はアスコリド海峡の岩礁に冠されている。

ウスチノフ、ミハイル・ミハイロビッチ。函館のロシア領事（1896年まで）。

フェドロフスキイ、ミハイル・ヤコブレビッチ（1825年11月7日－1881年1月25日、パリ）。海軍幼年学校修了（1840年）。大尉、コルベット艦「ノビク号」の船長、それに乗り、ホノルルへ寄港（1860年）。海軍中将（1881年）。サンクトペテルブルグのスモレンスク墓地に埋葬。

フィラレット。函館の最初の司祭。コルベット艦「グルデニ号」の修道司祭。ウラジオストクにやって来て（1861年10月31日）、最初の教会の建築に従事。

フボストフ、ニコライ・アレクサンドロビッチ（1776年7月28日－1809年10月4日）。海軍貴族幼年学校に入学（？年12月6日）。海軍士官候補生（1790年5月1日）。海軍少尉（1792年5月10日）。中尉（1797年1月10日）。PAKに勤務（1802年から）。船「ユノナ号」を指揮し、南サハリン（1806年）と南クリル（1807年）で日本人村落を襲撃。勝手な行動により逮捕される、その後、解放された。ネバ川を渡河中に水死。彼の名はアレクサンドル諸島の湖とアリューション列島の海峡に冠されている。

チビリコフ、ミハイル・フェドロビッチ。函館の領事館秘書（1860年から）。サンクトペテルブルグ大学中国学部修了。

シベツ、ドミトリイ・ニコラエビッチ（1884年11月8日－1934年11月18日）。南サハリンのアレクサンドロフスクに住んだ。そこに商店を持ち、毛皮を商った。1920年に、函館に移住し、そこで毛皮商を継続した。函館のロシア人墓地に埋葬、遺骨の一部は神戸の外人墓地に分骨。

チェルトコフ(匿名 オルギンスキイ)、ゲオルギイ・イワノビッチ（1895年6月2日、サマラー1983年7月6日、ニューヨーク）。サマラ中学校修了し（1912年）、商業学校（1913年）、タシケント軍学校修了（1915年）。第一次世界戦争参加者。シベリア艦隊で狙撃中隊指揮官（1917年－1922年）。サゾノフのシベリア政府の委員。日本に移住。1923年2月、東京に「情報局」を組織、そこで週刊誌「情報通信」を発行。東京と横浜での極東からのロシア人移民の全権代表。シベリア分離主義者組織の委員。ハルピンの新聞「ザリヤ」に記事を書いた。日本において月刊雑誌「アジア広報」出版の試みに着手した。出版に失敗を被り、商売に戻った。ベルギーのコンチェルン「メタルユニオン」（日本への鉄金属の輸入、1937年）とイギリスの会社「コチンプロダ

クス株式会社」(1937年から)の代表。中国に住み(1940年-1949年)、上海市の財務省の検査官として働いた。ブラジルに住み(1950年-1955年)、その後アメリカに。新聞「ロシア人の生活」、その他に記事を発表。

シパンベルグ、マルチン・ペトロビッチ(1698年?オランダ-1761年9月15日、クロンシュタット)。1721年、ロシア軍に勤務。ベーリングの第1回カムチャッカ探検に参加(1725年-1730年)。1728年、小舟「聖ガブリエル号」でチュコト半島沿岸の調査を敢行。第2回カムチャッカ探検に参加(1732年-1745年)。1738年、日本への航行を完遂、途中、クリル諸島、北海道北東部の地図を作成。各地に彼の名前が冠されている。

エンクビスト、アドルフ・イワノビッチ(1824年、フィンランド-1871年12月1日)。フィンランド海軍少尉(1844年)。中尉(1859年)、輸送船「ギリャク号」船長(1861年-1869年)、それに乗り函館に立ち寄る(1865年)。

目次

- ・序文
- ・隣人を訪問する
- ・ラクスマン探検隊
- ・北海道周辺
- ・最初の非公式戦争
- ・捕虜ゴローブニン、或いは不本意の北海道の知見
- ・ロシア領アメリカから日本へ、或いはどのようにしてロシア人は日本人を救助し、
祖国へ送り届けたか
- ・デアナ号－函館での5日間
- ・日本からの逃亡者
- ・ムラビエフ・アムールスキー公爵
- ・ロシア領事館の開設
- ・最初の出会い
- ・・・・そして住居
- ・プラストン号の越冬、1858年－1859年
- ・1859年の新年の出会い
- ・領事館の場所
- ・日本人の治療
- ・ロシア人の見た函館
- ・函館の可能性
- ・ロシア人のおしゃべりと気晴らし
- ・民族の描写
- ・ナジモフの航海
- ・サハリンについての交渉
- ・最初の犠牲者
- ・函館から沿海州へ
- ・日本の植物学の父
- ・領事館の新居
- ・日本の裁判制度
- ・1860年の夏
- ・冬の準備
- ・対馬事件
- ・日本の将来の洗礼を行う人
- ・「ロシア語教本」
- ・イワン・マホフ流の日本人の生活
- ・東京から函館への旅行
- ・アリブレフト医師のメモ

- ・新しい海軍エージェントと「デアナ号」の大砲
- ・1863年：函館でのマクシモフ
- ・最初のロシア人企業家
- ・最初の日本人写真家
- ・ロシア人墓地
- ・ゴシケビッチの別れと日本人の学生
- ・ニコライ神父の心配
- ・教区の仕事
- ・函館生まれの最初のロシア人
- ・ロシア語学校
- ・函館とウラジオストクを「結んだ」
- ・函館訪問
- ・領事館の最初の成員に何が起きたのか
- ・取り返しのつかない損失
- ・アレウト号とセタナ
- ・ロシア人存在の最初の総括、国境線
- ・北海道でのクレイセロック号
- ・函館で助言を
- ・アイヌの研究：プロニスラフ・ピルスドスキイ
- ・函館からウラジオストクへ
- ・古い旅行パンフレットの頁から
- ・正教会
- ・ゲオルギイ・デンビー長男
- ・漁業家フリサンフ・ビリチ
- ・クラマレンコ：函館を經由してカムチャッカへ
- ・函館におけるウラジミル・アルセニエフ
- ・アムールから函館まで
- ・ルリ兄弟の商館
- ・カムチャッカからの経路
- ・日本に永久に：移民
- ・アリフレド・デンビー弟、彼の兄弟姉妹
- ・祖国への帰還：ニコライ・マトベーフ
- ・新旧の領事
- ・函館への逃亡。
- ・インデギルカ号の惨事
- ・南サハリン
- ・「彼は祖国の端で何を捨てたのか・・・」：ロシアからの逃亡者
- ・ロシア人の過去の探索において：北海道での日記
- ・函館の外人墓地中のロシア人ブロックの墓
- ・伝記辞典

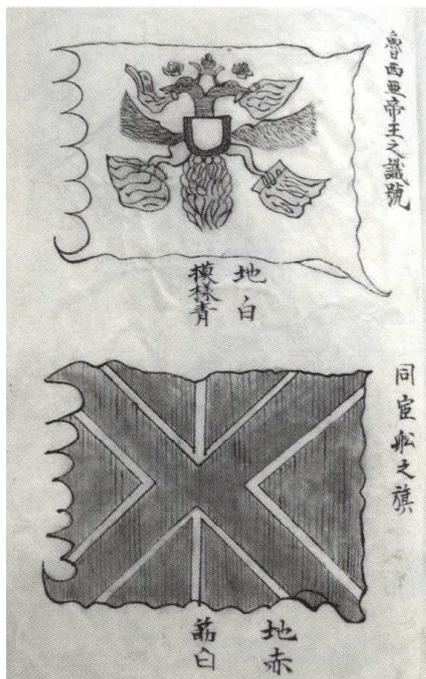
・文献目録

2022年6月11日

2024年6月20日

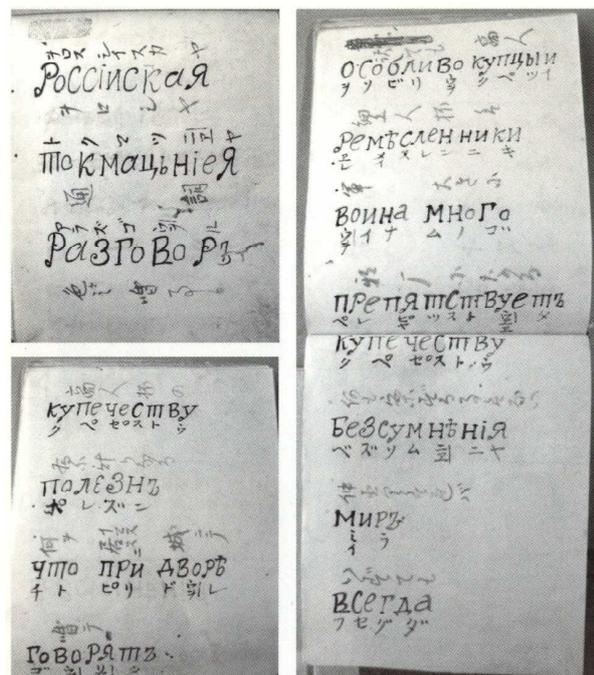
2024年9月27日

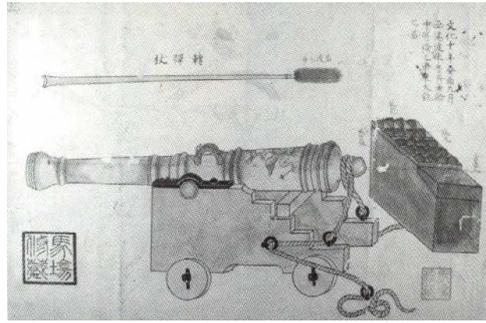
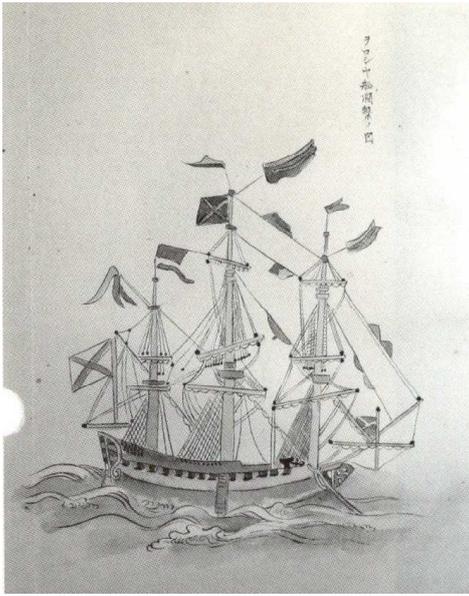
函館への最初のロシア人
写真1



日本人の描いたロシアの旗
写真2-2

ゴローブニンのメモ帳より
写真2-1



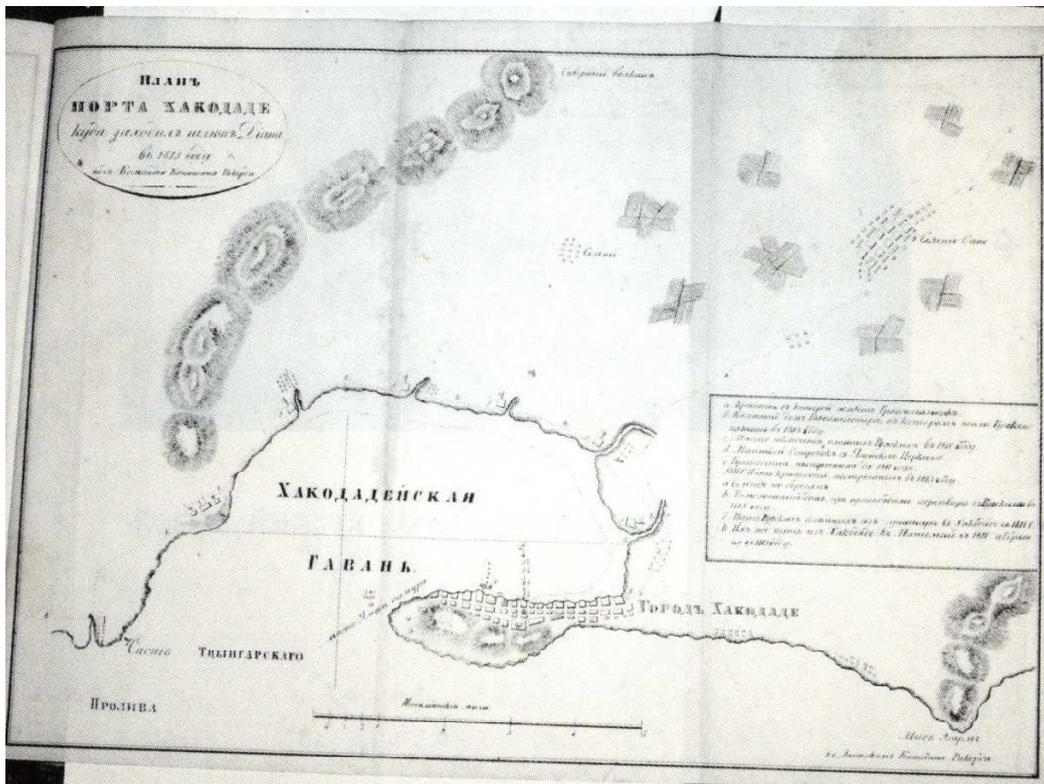
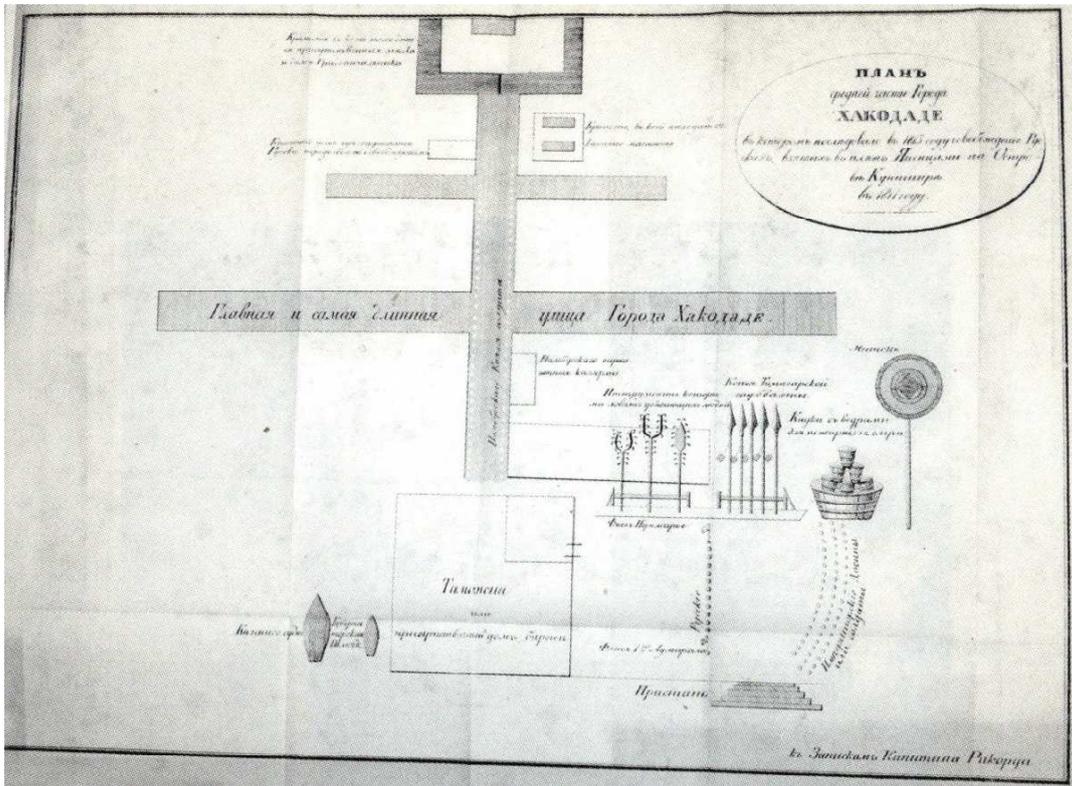


日本の最初のロシア人探検隊についての日本人が描いたの絵 写真3



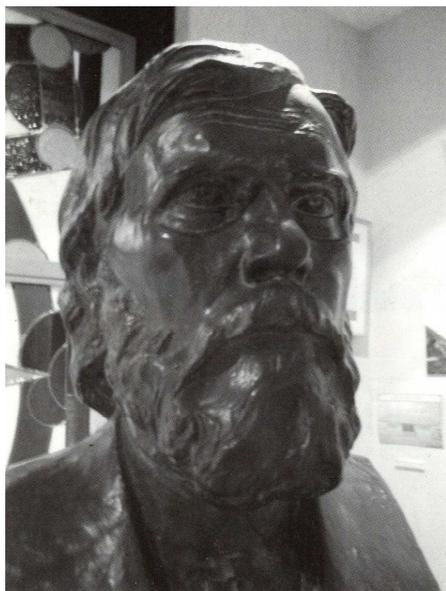
B・M・ゴローブニン 写真4-1

П・И・リコルド 写真4-2



最初のロシア人による函館の図面

写真5



函館博物館のИ・А・ゴシケビッチの胸像
写真6



日本人の家に客として、右に着席しているのが桜井先生
写真7-1



北海道のロシア人関係名所探索中における間食。駅ホームでの立ち食い蕎麦
写真7-2



函館での最初のロシア人団体
写真8



Γ・Φ・デンビ、孫のダビットと
ヤン。1915年 写真10-2

立っているのがエラ・ユーリ。1919年夏。
函館 写真9



デンビ兄弟。右から左に：アリフレッド、アレクサンドル、ゲオルギイ、イワン
写真10-1



北海道の猿弘駅 写真11-1
(宗谷岬から東南50km*)



蒸気船インデギルク号難破の記念碑。猿弘
写真11-2



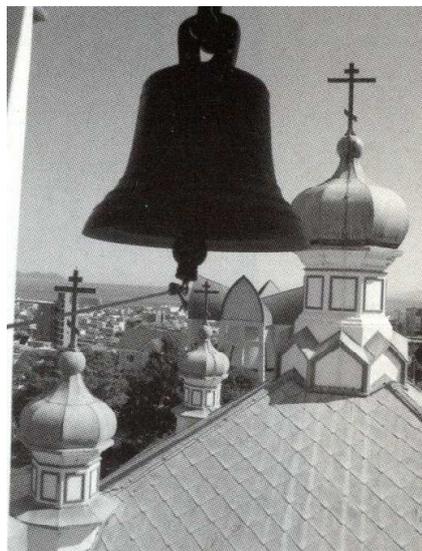
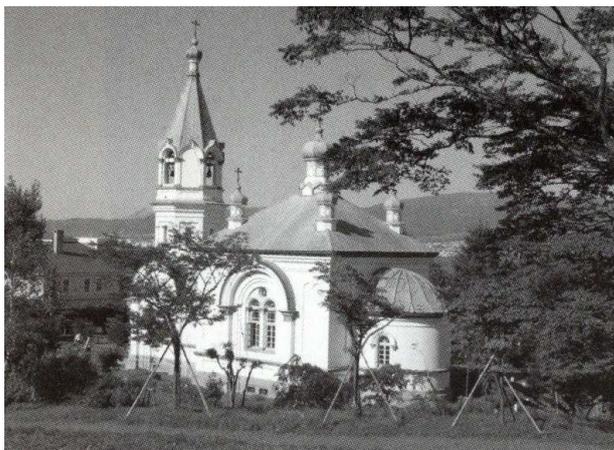
函館の高田屋嘉平の記念碑
写真13-1



高田屋嘉平博物館で。函館 写真13-2



北方領土についての言及 写真13-3

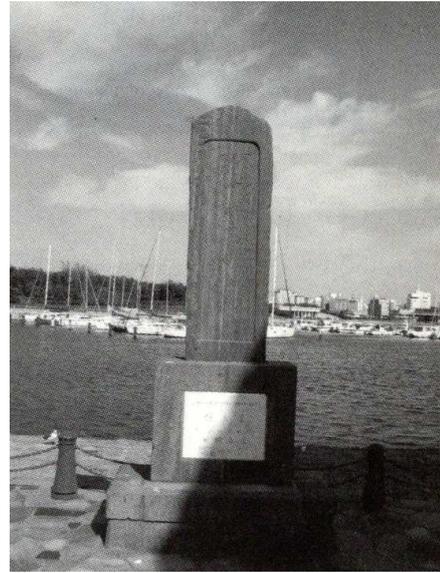


函館の正教会にて

写真 1 2



レストラン五島軒。函館 写真14-1



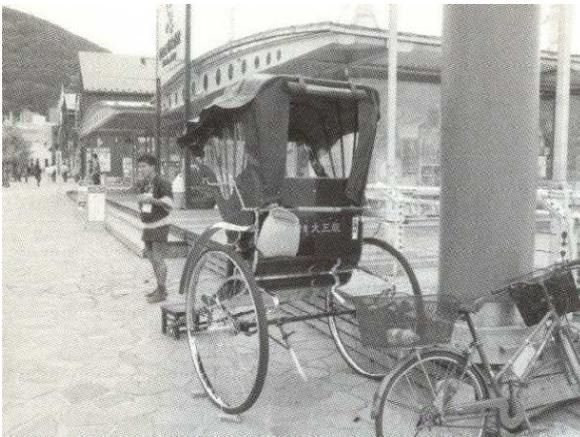
函館港の新島襄記念

写真14-2

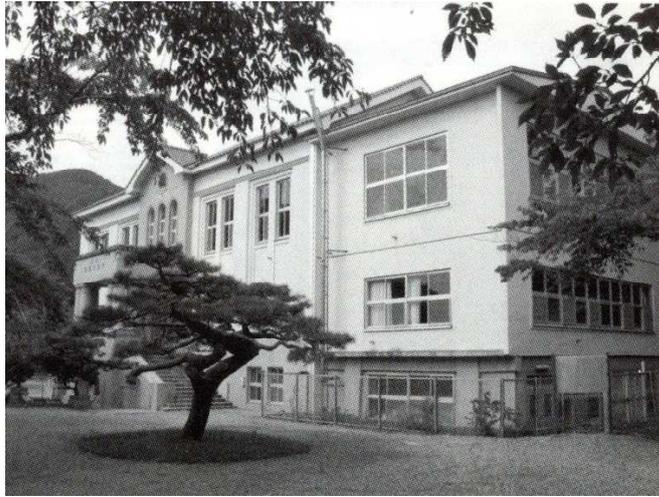


国立極東大学の函館分校の建物

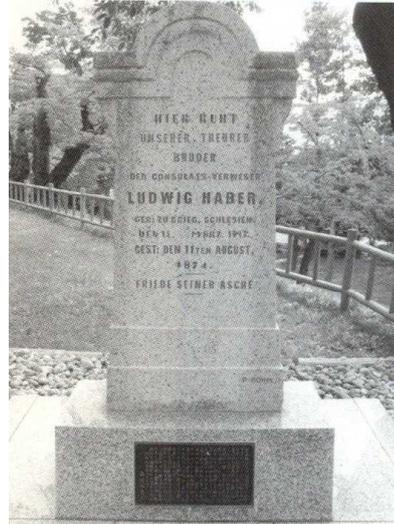
写真14-3



函館の通りにて 写真15-1, 2



函館市立図書館の元の建物
写真15-4



函館の公園におけるハベルの記念碑
写真15-3



函館の日本人女性達。トモコ・ケンゾウの写真
写真17-1



ウム・リョウエントの記念
写真17-2

函館の日本人の正教徒墓地
写真16-1



函館のロシア人墓地にて
写真16-2, 3, 4





最初の日本人写真家の記念碑 写真18-1



キズコキチ 写真18-2



トモト ケンゾ 写真18-3



瀬棚の防波堤

写真19-1



瀬棚におけるロシア人船乗り達の記念碑

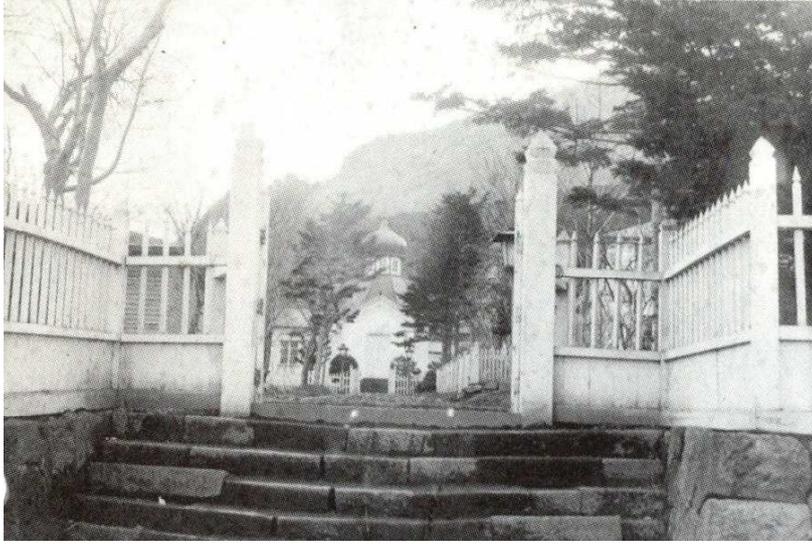
写真19-2, 3



宗谷岬の古い灯台の建物。北海道 写真20-1

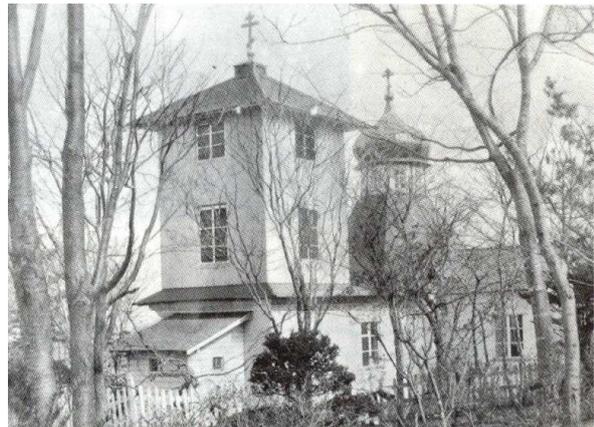


宗谷岬の間宮林蔵の記念碑 写真20-2

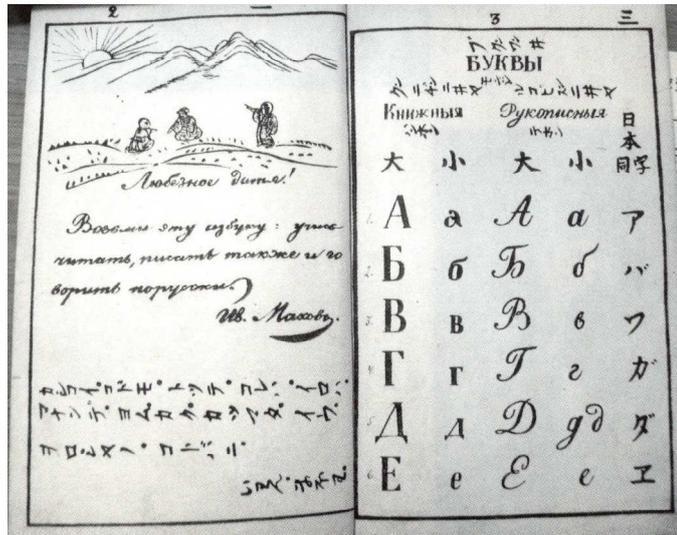
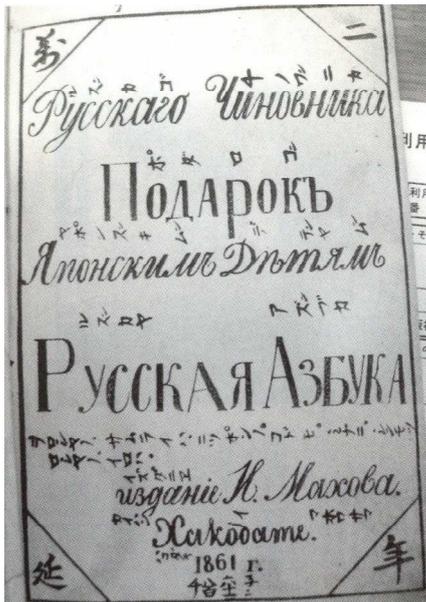


函館の最初の正教会

写真21-1、2



大主教ニコライ・カサトキン 写真21-3



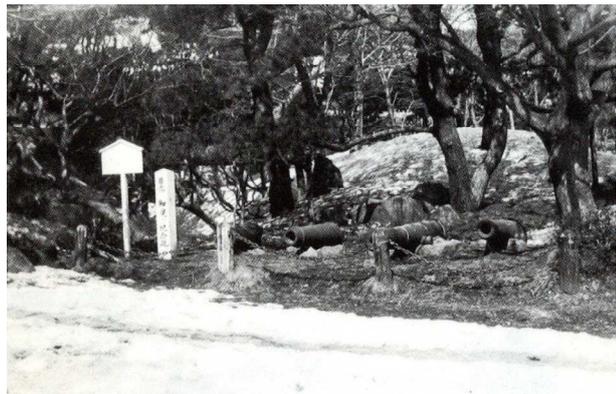
マホフのロシア語入門本

写真 2 2 - 1, 2



函館における外国人の初めての葬式

写真 2 3 - 1



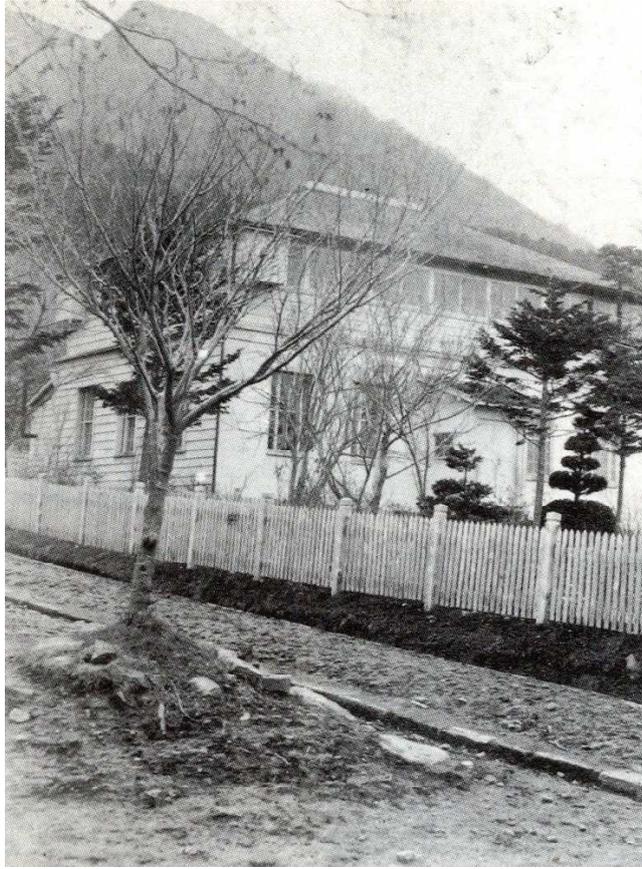
函館市立公園内の巡洋艦デアナ号の大砲

写真 2 3 - 2



ペリーとプチャーチンが函館に来港してきた当時の日本の寺院

写真 2 3 - 3



函館におけるロシア帝国の最初で最後の領事館。 写真24-1, 2

